太宰府市の文化財　第48集

大宰府条坊跡　XIV

-「市ノ上」周辺の調査-



120SD030出土　木製人形

2000

太宰府市教育委員会

太宰府市の文化財　第48集

大宰府条坊跡　XIV

-「市ノ上」周辺の調査-

2000

太宰府市教育委員会





120SK005黒色土
緑釉陶器
【上：内面、下：外面】





194SD001上面
イスラム陶器
【上：内面、下：外面】



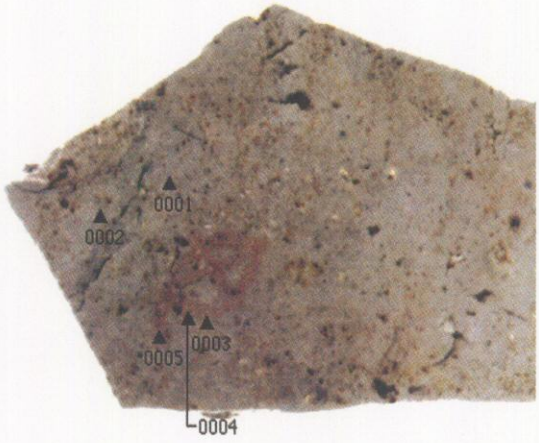
154SX031漆付着土師器



154SE065漆付着須恵器



120SD030木製人形



77SB100出土須恵器
赤色顔料分析点

序

本書は、昭和63年度から平成11年度までに発掘調査を行いました大宰府条坊跡の埋蔵文化財発掘調査報告書です。大宰府条坊跡は古代における都市遺跡として全国的にも知られ、市街地のほぼ全体を覆う広大な遺跡です。今回報告する地域は、大宰府条坊跡の中でも南西に位置し、地名である字「市ノ上」が物語るように大宰府の「市」が推定されている地にあたります。

今回報告いたしております調査地からは、奈良・平安時代における道路の跡をはじめとする、当時の生活を彷彿させる遺構・遺物が多く出土しております。

本書が学術研究はもとより文化財への理解と認識を深める一助となり、広く活用されることを心より願います。

最後になりましたが、文化財に対して御理解いただきました皆様をはじめ、関係された諸機関の皆様方に心からお礼申しあげます。

太宰府市教育委員会
教育長　長野治己

例言

1.本書は、太宰府市教育委員会が行った昭和63年度から平成11年度までに実施した大宰府条坊跡第77・120・154・177・194・206次調査の発掘調査報告書である。

2.本書に掲載した発掘調査の原因、調査期間等の調査に関わる経緯については、各調査の報告部分に記載している。

3.本書に掲載した調査年度は、昭和63年度から平成11年度にかけて実施してきたものであるため、調査組織ならびに調査参加者は第II章にまとめた。なお整理作業は各調査終了後随時行ってきたが、主として平成11年度に実施した。

4.遺構の実測は主として各調査担当者が行った。また実測作業に関して、永見秀徳（現 筑後市教育委員会）・松隈里恵子・井上由紀子・上村英士（現 筑後市教育委員会）・坂本雄介の援助を得、図の浄書は調査担当者ならびに山本麻里子・福井円・坂本雄介・深江暁子が行った。

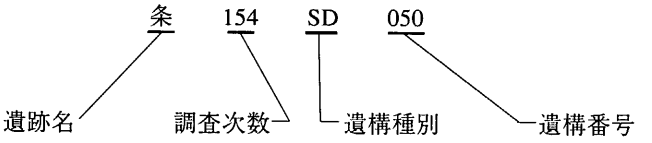
5.遺物の実測は、調査担当者ならびに森田レイ子・山本麻里子・松隈里恵子・酒井三保子・福井円・生田和宏が行った。図の浄書は調査担当者ならびに山本麻里子・酒井三保子・福井円・坂本雄介・深江暁子が行った。

6.遺構の写真撮影は調査担当者が行い、空中写真は(有)空中写真企画が行った。なお条坊跡120次調査地全景の写真合成は、（株）写測エンジニアリングが行った。遺物の写真撮影は、調査担当者ならびにフォトハウスおか（代表岡　紀久夫）が行った。

7.遺構実測図および遺構配置図は全て国土調査法第II座標系を基準としている。したがって図中に記載される方位は特に注記のないかぎり座標北（G.N）を指している。磁北と座標北との偏差は西偏6°30′（1992年）である。

8.出土した金属製品の応急処置は、下川可容子が担当した。

9.本書に掲載される遺構番号は、以下の要領で理解される。



10.本書の執筆は、目次及び項目末尾に記し、編集は中島恒次郎が行った。

11.出土遺物および図面、写真等の記録は太宰府市教育委員会が保管している。

12.本書に掲載した遺物の分類は、『大宰府条坊跡　XII』にて記載した各種遺物の分類によっている。

目次

I. はじめに

1.調査地の環境……（中島恒次郎）……1

2.報告にあたって ……2

II. 調査組織 ……4

III. 調査報告

1. 条坊跡 77次調査……（山村信榮）……8

a.調査に至る経過　b.基本土層　c.遺構　d.遺物　e.小結

2. 条坊跡　120次調査……（中島恒次郎）…44

a.調査に至る経過　b.基本土層　c.遺構　d.遺物　e.小結

3. 条坊跡　154次調査……100

a.調査に至る経過　b.基本土層　c.遺構　d.遺物　e.小結

4. 条坊跡　177次調査……（城戸康利）…199

a.調査に至る経過　b.基本土層　c.遺構　d.遺物　e.小結

5. 条坊跡　194次調査……（宮崎亮一）…204

a.調査に至る経過　b.基本土層　c.遺構　d.遺物　e.小結

6. 条坊跡　206次調査……（山村信榮・城戸康利）…220

a.調査に至る経過　b.基本土層　c.遺構　d.遺物　e.小結

IV. 自然科学分析

1. 大宰府条坊跡第120次調査の自然科学分析……（パリノサーヴェイ）…227

2.条坊跡77次調査出土須恵器蓋に用いられた朱の成分分析……（中島恒次郎）…230

V. 調査成果……（中島恒次郎）…232

1.「市推定地」の調査

a.「市推定地」に関わる課題

b.物資集散を物語る物証

c.物資運搬のための交通路

d.市管理のための施設

e.付帯事項としての工房

2.まとめ

付表・写真図版

I.はじめに

1.調査地の環境

今回報告する地域は、大宰府条坊跡の南西部に位置しており、字市ノ上に所在することから大宰府における「西市」が推定されてきた所である。これまで政庁跡周辺ないしは朱雀大路周辺など、どちらかといえば十二条以北の調査報告が行われてきたこともあり、大宰府条坊跡南域における状況の整理は筑紫野市教育委員会による調査報告がわずかになされてきた程度であった（筑紫野市教育委員会、1991）。ただし調査開始時期は、早くからなされており、昭和41年度に実施された福岡県史跡調査会による「市ノ上遺跡」の調査があり、現在調査を実施している大宰府条坊跡第207次調査を含めると11地点に及ぶ発掘調査が行われていることになる（表１）。

大宰府条坊跡は、四王寺山を北詰めとし、西を背振山系、東を宮地岳に囲まれた南東方向に開放した盆地内に位置している。条坊域には博多湾へ注ぐ鷺田川ならびに御笠川がながれ、今回報告する大宰府条坊跡南西域には、鷺田川が接している。「市ノ上遺跡」として調査された地域は、既に宅地として開発され、旧地割りの面影すら消失してしまっているが、これら宅地の縁辺域に残る田圃畦畔には、ほぼ東西南北に区割りされたものが多く残っており、今後の調査によってこれら地割りの性格について解明されてゆくものと考えられる。今回報告する条坊跡第120次および194次調査にて検出した南北溝および南北道路は、坊路の痕跡と考えられ、この坊路痕跡に沿って現在の道路が隣接して残存しているなど、現在の地割りと条坊痕跡の関連性がうかがえる。報告する各調査地は、地形の状態から大きく二つに分けられる。この二地域を画

表１.報告調査地周辺の調査箇所一覧

番号	調査次数	調査主体	掲載文献・調査年度
1	16	太宰府市教育委員会	太宰府市教育委員会（1983）『大宰府条坊跡　II』
2	16-2	太宰府市教育委員会	平成9年度補足調査
3	44	太宰府市教育委員会	太宰府市教育委員会（1995）『大宰府条坊跡　VII』
4	49	太宰府市教育委員会	昭和58年度調査
5	53	太宰府市教育委員会	昭和60年度調査
6	54	太宰府市教育委員会	昭和60年度調査
7	56	太宰府市教育委員会	昭和61年度調査
8	74	太宰府市教育委員会	昭和63年度調査
9	77	太宰府市教育委員会	本書掲載
10	86	筑紫野市教育委員会	筑紫野市教育委員会（1991）『大宰府条坊跡　第86次発掘調査』
11	95	太宰府市教育委員会	平成２年度調査
12	107	筑紫野市教育委員会	平成２年度調査
13	112	筑紫野市教育委員会	筑紫野市教育委員会（1992）『大宰府条坊跡　第112次発掘調査』
14	115	太宰府市教育委員会	平成３年度調査
15	117	太宰府市教育委員会	太宰府市教育委員会（1998）『大宰府条坊跡　X』
16	120	太宰府市教育委員会	本書掲載
17	133	太宰府市教育委員会	太宰府市教育委員会（1995）『大宰府条坊跡　VIII』
18	144	筑紫野市教育委員会	平成５年度調査
19	150	筑紫野市教育委員会	平成６年度調査
20	151	太宰府市教育委員会	平成６年度調査
21	154	太宰府市教育委員会	本書掲載
22	155	筑紫野市教育委員会	平成６年度調査
23	162	太宰府市教育委員会	平成６年度調査
24	168	太宰府市教育委員会	平成７年度調査
25	173	太宰府市教育委員会	平成７年度調査
26	177	太宰府市教育委員会	本書掲載
27	178	太宰府市教育委員会	平成８年度調査
28	183	筑紫野市教育委員会	平成８年度調査
29	184	太宰府市教育委員会	平成８年度調査
30	192	筑紫野市教育委員会	平成９年度調査
31	194	太宰府市教育委員会	本書掲載
32	196	筑紫野市教育委員会	平成９年度調査
33	200	筑紫野市教育委員会	平成10年度調査
34	206	太宰府市教育委員会	本書掲載
35	207	太宰府市教育委員会	平成11年度調査

する箇所には自然地形上、河川ないしは谷と思しき低地が南西←→北東方向に存在しており、この谷地形がどのように条坊域内において処理されていたのかは不明である。いずれにしても地形上地域を異にするというだけで、歴史上どのような位置付けにあるのかは今後谷地形の処理方法の解決を含めて考えてゆく必要はある（図２）。

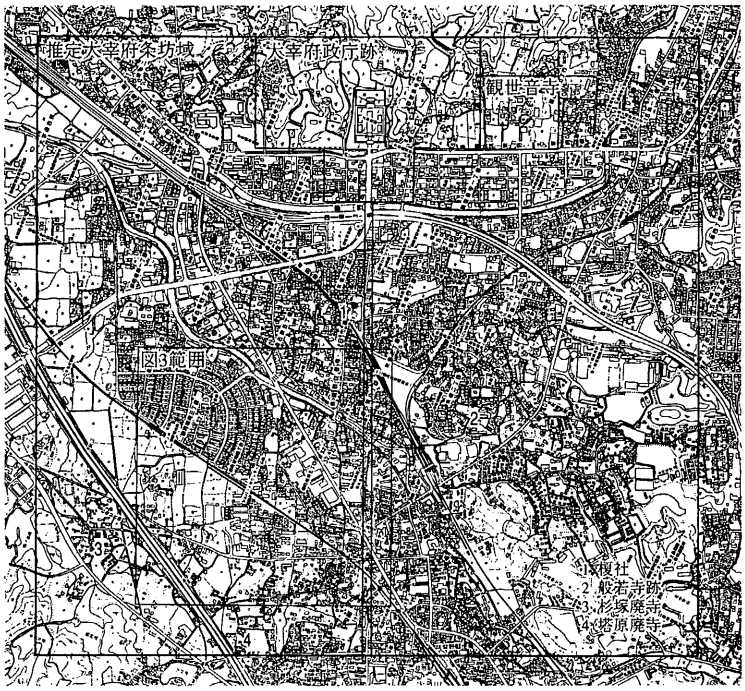


図１.報告地域の位置と環境

「市ノ上」地域においては、これまでの調査によって弥生時代前期から生活痕跡はわずかながら確認でき、奈良期を最盛期として掘立柱建物、井戸などの生活痕跡が多く確認でき、ついで平安期の生活痕跡が確認できるようになる。最も新規の生活痕跡は、表層部分にわずかながら各調査地において鎌倉期の遺物が確認できていることから、古代のみならず中世に至る時期まで人々の営みがあったものと考えられる。

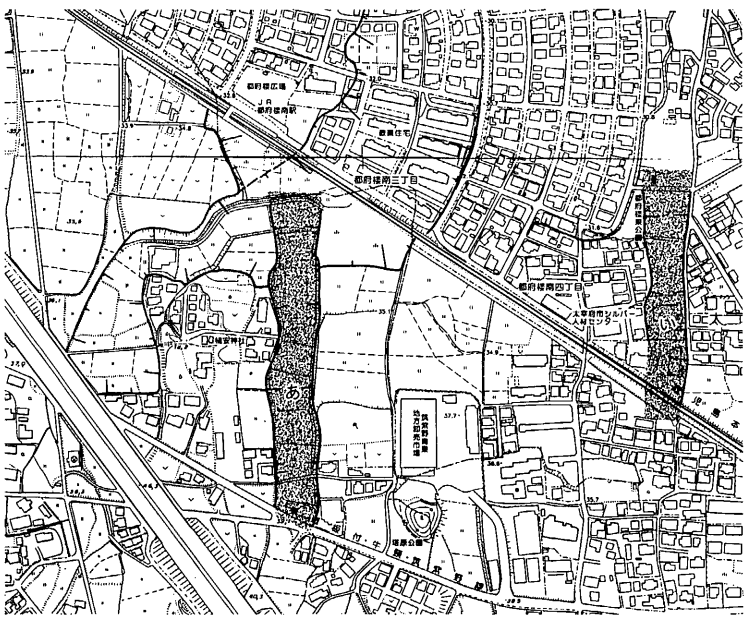


図２.報告地域周辺の地形

2.報告にあたって

遺物記号化によって報告の簡便化と閲覧の強化を図るべく、整理報告過程の検討に入ったが、遺物記号化を進めるにあたって、どの程度まで、業務遂行にあたって必要な分類か、換言するならば太宰府市教育委員会の担当者が理解し、かつ簡便に利用できる表記方法は



図3.報告調査地点と周辺の調査地点（ゴチック体文字：報告調査地点）

どのような方法か、といった初期段階の課題解決に難航し、記号化を進めた報告書内容とはなっていない。また、先の記号化を進めた報告書（太宰府市教育員会、1999）の活用にあたって、編集者自身、通常の検索過程がアナログ情報に慣らされていることもあり、記号化された情報に戸惑いを覚えることもしばしばである。

したがって、今後どのような報告に移行すべきかは、暗中模索状態ながら検討を続けてゆくことになる。今回の報告にあたって、各担当者へ遺物記号化の指示は特にせず、太宰府市教育委員会がこれまで発刊してきた報告書の編集内容で行ってもらった。　（中島恒次郎）

筑紫野市教育委員会（1991）『大宰府条坊跡　-第86次発掘調査-』

太宰府市教育委員会（1999）『大宰府条坊跡　XII』

II.調査組織

今回報告する調査は、複数年次にまたがるため、各調査を実施した際の調査組織を年度ごとに記載する。また調査担当者については、ゴチック体にて記載している。

整理報告についても、調査終了後に随時進めてきたが、報告書作成など主たる整理事業を進めた、平成11年度の組織を記載している。（中島恒次郎）

大宰府条坊跡　第77次調査（昭和63年度）

総括	教育長	藤　寿人
庶務	教育部長	西山義則（63年12月1日～）
	社会教育課長	花田勝彦（～63年11月30日）
		関岡　勉（63年12月1日～）
	文化財係長	鬼木冨士夫
	主　　事	岡部大治（63年12月1日～）
		白水伸司
		川原和典（～63年11月30日）
調査	技　　師	山本信夫
		狭川真一
		緒方俊輔
	技師（嘱託）	**山村信榮**

大宰府条坊跡　第120次調査（平成３年度）

総括	教育長	長野治己
庶務	教育部長	中川シゲ子
	文化課長	佐藤恭宏
	埋蔵文化財係長	富田　譲
	文化振興係長	大田重信
	主任主事	岡部大治
		川谷　豊
調査	主任技師	山本信夫
		狭川真一
		城戸康利
		緒方俊輔
	技　　師	山村信榮
		中島恒次郎
		塩地潤一
	技師（嘱託）	田中克子（3年10月1日～）

大宰府条坊跡　第154次調査（平成６年度）

総括	教育長	長野治己
庶務	教育部長	白木三男
	文化課長	花田勝彦
	文化財保護係長	高田克二
	文化振興係長	大田重信
	主任主事	岡部大治
		川谷　豊
	主　　事	今村江利子
調査	技術主査	山本信夫
	主任技師	狭川真一
		城戸康利
		山村信榮
		中島恒次郎
		重松麻里子
	技　　師	井上信正
	技師（嘱託）	田中克子（～6年7月31日）
		下川可容子

大宰府条坊跡　第177次調査（平成７年度）

総括	教育長	長野治己
庶務	教育部長	白木三男
	文化課長	花田勝彦
	文化財保護係長	高田克二（～7年5月31日）
		和田敏信（7年6月1日～）
	文化振興係長	大田重信
	主任主事	岡部大治
		川谷　豊
	主　　事	今村江利子
調査	技術主査	山本信夫
	主任技師	狭川真一
		城戸康利
		山村信榮
		中島恒次郎
		重松麻里子（～7年6月30日）

	技　師	井上信正
		髙橋　学
	技師（嘱託）	下川可容子

大宰府条坊跡　第194次調査（平成９年度）

総括	教育長	長野治己
庶務	教育部長	小田勝弥
	文化財課長	津田秀司
	文化財保護係長	和田敏信
	文化財調査係長	山本信夫
	主任主事	藤井泰人
	主　事	今村江利子
調査	技術主査	**狭川真一**（9年10月1日～）
	主任技師	**狭川真一**（～9年9月30日）
		城戸康利
		山村信榮
		中島恒次郎
		井上信正
	技　師	髙橋　学
		宮崎亮一
	技師（嘱託）	下川可容子
		森田レイ子

大宰府条坊跡　第206次調査（平成11年度）

総括	教育長	長野治己
庶務	教育部長	小田勝弥（～11年6月30日）
		白石純一（11年7月1日～）
	文化財課長	津田秀司
	文化財保護係長	和田敏信
	文化財調査係長	山本信夫
	主任主事	藤井泰人
		今村江利子（～11年6月30日）
		野寄美希（11年7月1日～）
	嘱　託	鈴木弘江
調査	技術主査	**城戸康利**
	主任技師	**山村信榮**

		中島恒次郎
		井上信正
	技　師	髙橋　学
		宮崎亮一
	技師（嘱託）	下川可容子
		森田レイ子

整理報告年度（平成11年度）

総括	教育長	長野治己
庶務	教育部長	小田勝弥（～11年6月30日）
		白石純一（11年7月1日～）
	文化財課長	津田秀司
	文化財保護係長	和田敏信
	文化財調査係長	山本信夫
	主任主事	藤井泰人
		今村江利子（～11年6月30日）
		野寄美希（11年7月1日～）
	嘱　託	鈴木弘江
調査	技術主査	**城戸康利**
	主任技師	**山村信榮**
		中島恒次郎
		井上信正
	技　師	髙橋　学
		宮崎亮一
	技師（嘱託）	下川可容子
		森田レイ子

発掘調査および整理報告にあたって、次の方々から御教示、資料提供を賜った。記して心より感謝申し上げます（順不同、敬称略）。

伊野近富、川越俊一、栗原和彦、狭川真一、西口壽生、水野正好、森隆、森島康雄、

百瀬正恒、橋本久和、林部均、横田賢次郎、平尾政幸

遺物洗浄、接合、注記などの遺物整理作業、写真整理および作表作業等については、以下の者が行った。

原野正子、吉田勝子、久保喜代香、菊武淑子、中村房子、林美知子、占部民子、小西晴代、武堂年子、藤野由貴子、瀬戸口みな子、安藝明江、相川寿美子、横山美津子、田崎道子、伊藤孝子

III.調査報告

1.77次調査

a.調査に至る経緯

本調査は民間の鉄筋アパート建設に伴う緊急調査であり、調査箇所は太宰府市都府楼南4丁目769-5（鏡山案右郭17条5坊）にあたり、調査期間は1988年（昭和63年）8月26日から同年11月2日に及ぶ。調査対象面積は1268㎡で、その内調査面積は787㎡であった。調査は狭川真一、山村信榮が担当した。

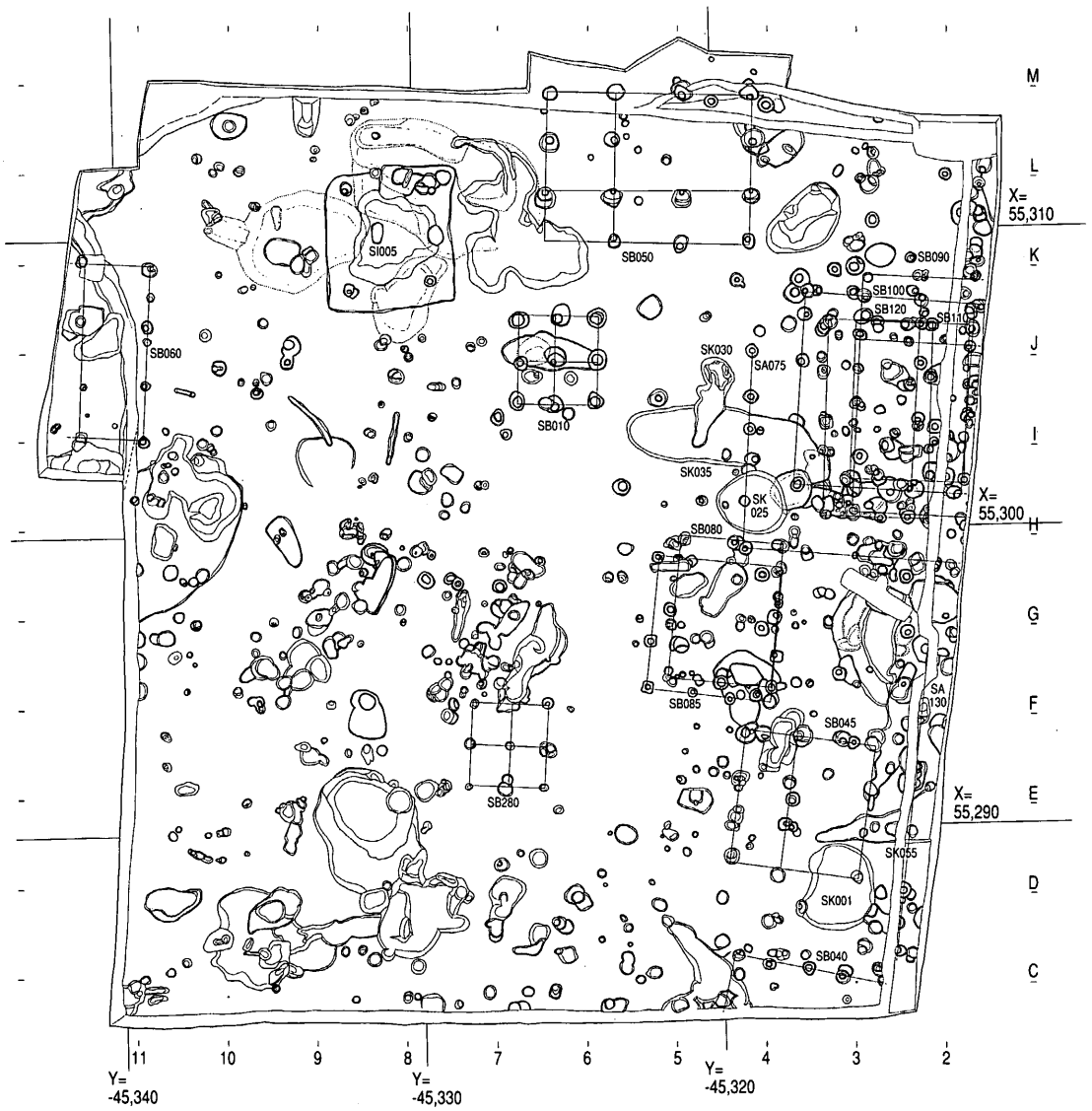


図4.条坊跡77次遺構配置図（S=1/250）

b.基本土層

遺構は厚さ約0.3mの耕作土下で検出された遺物包含層である茶褐色土下の標高約32mの面で確認された。基盤となる土壌は茶色、褐色、黄色の砂混じりの沖積作用によって形成された土である。調査区D3区で標高29mのレベルまで掘削して遺構検出面以下の土壌の堆積状況を確認したが、砂と粘土、シルト層が順次堆積している状況が確認された。なお、今回の調査では対象地区の南側で黒曜石のチップや石鏃が出土しているが、土層観察のための掘削の際には遺物を伴う文化層は今回の遺構検出面以下では確認できなかった（図5）。

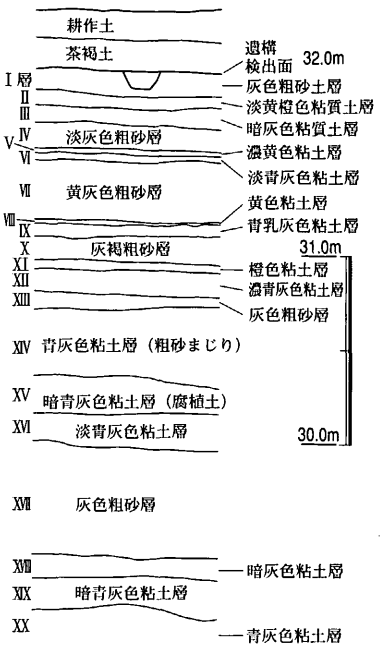


図5.地盤土層図（S=1/40）

c.遺構

今回の調査では竪穴住居1棟、柵列3条、掘立柱建物14棟、土坑6基、溝のほか溜まり状遺構やピット群が検出された（図4）。以下に主要な遺構について報告する。

1）竪穴住居

77SI005（図6、写4）

調査区北側中央付近で検出された南北約4.8m、東西約4.2mの規模の掘り方を持つ竪穴住居で、掘り方内に4本の柱痕跡が確認された。主柱軸の振れはN-3°26′31″-Wと多少西に振れている。柱間は南北から3.3m、東西2.7mで、柱掘り方は円形で、長さ0.4m、深さ約0.3mを測る。柱材の太さは約0.15m。住居全体の掘り方自体は深さが0.1m以下の残存状況であった。柱に囲まれる中央部付近が若干高く掘り残されている。北側中央に移動式の竈を据えたと考えられる炭層を伴った窪み（遺物取り上げ名称は「カマドpit」）があり、東側に長さ約0.3mの土手状の高まりが残されている。竈の堆積層中から打ち欠いた丸瓦が出土している。

竈の堆積層で出土した遺物から本住居の使用時期は8世紀前半代に位置づけられる。

2）掘立柱建物

77SB010（図7、写2下・3）

調査区中央付近で検出された南北2間、東西2間の総柱式の掘立柱建物で、主軸の振れはN-2°18′49″-Eと若干東に振れている。柱間は、南北方向が北から1.53m、1.45m、東西方向が

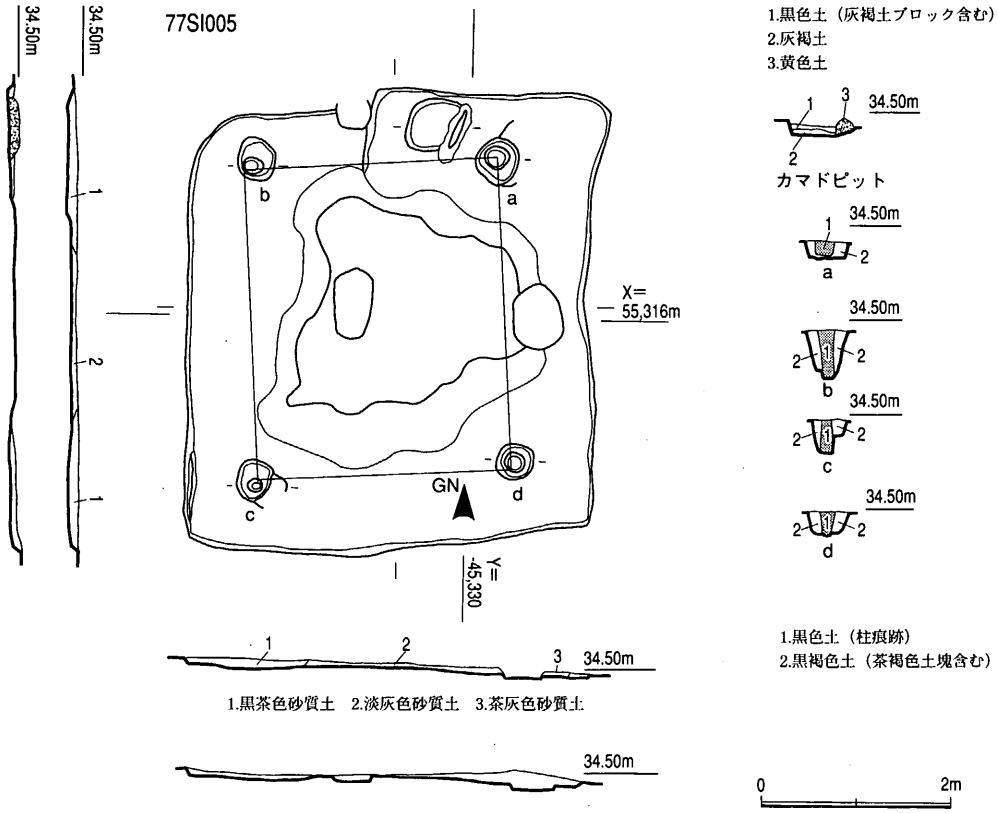


図６.77SI005遺構実測図（S=1/80）

東から1.42・1.2mとなっている。柱掘り方は略円形を呈し、径0.4～0.6m程度、深さ0.2～0.3mを測る。太さ0.2～0.4m程度の柱痕跡が確認されている。

77SB280（図７）

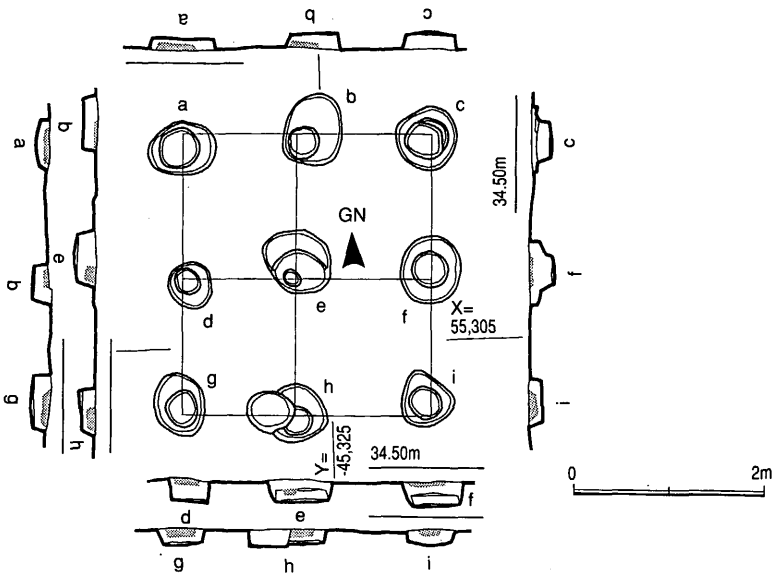
調査区中央付近で77SB010と同等規模で検出された南北2間、東西2間の総柱式の掘立柱建物で、主軸の振れはN-3° 8′ 53″ -Eと若干東に振れている。77SB010に比して柱掘り方が小さい。柱間は、南北方向が北から1.4・1.38m、東西方向が東から1.16・1.35mとなっている。柱掘り方は円形を呈し、規模は不揃いで長さが0.2～0.4m、深さ0.1～0.2mを測る。太さ0.15m程度の柱痕跡が確認されている。

77SB040（図８）

調査区南東隅で検出された南北1間以上、東西4間以上の掘立柱建物で、主軸の振れはN-12° 50′ 52″ -Eとかなり東に振れている。柱間は、南北方向が1.74m、東西方向が東から1.3・1.2・1.4・1.05mとなっている。柱掘り方は円形を呈し、径0.4～0.5m程度、深さ0.2～0.25mを測る。太さ0.2m程度の柱痕跡が確認されている。

77SB045（図８）

77SB010



77SB280

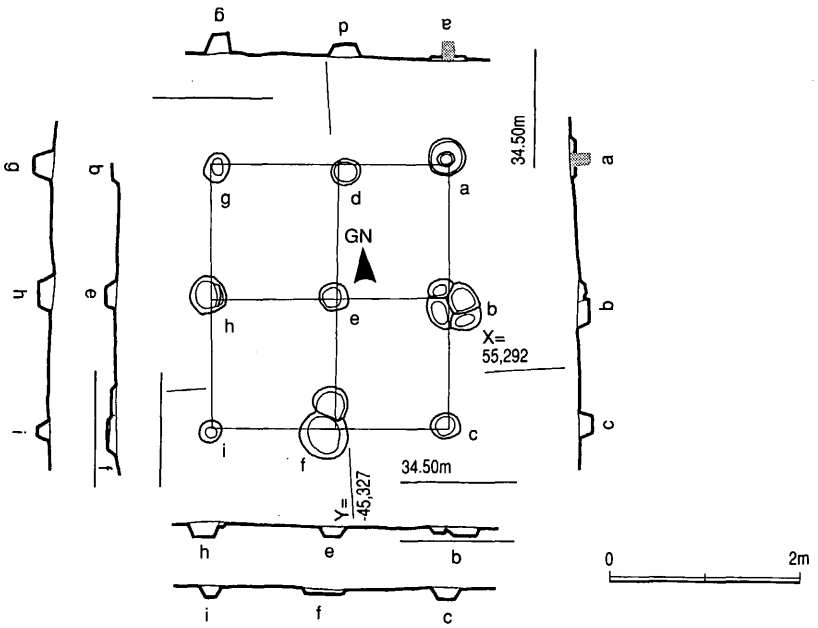
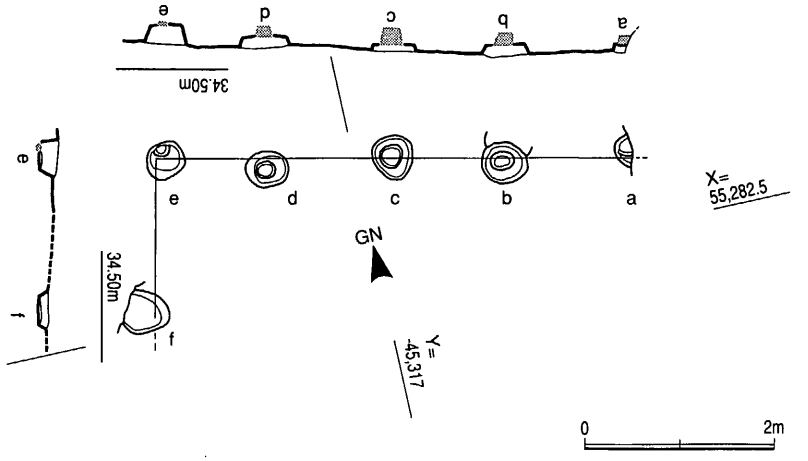


図 7 .77SB010・77SB280遺構実測図（S=1/80）

77SB040



77SB045

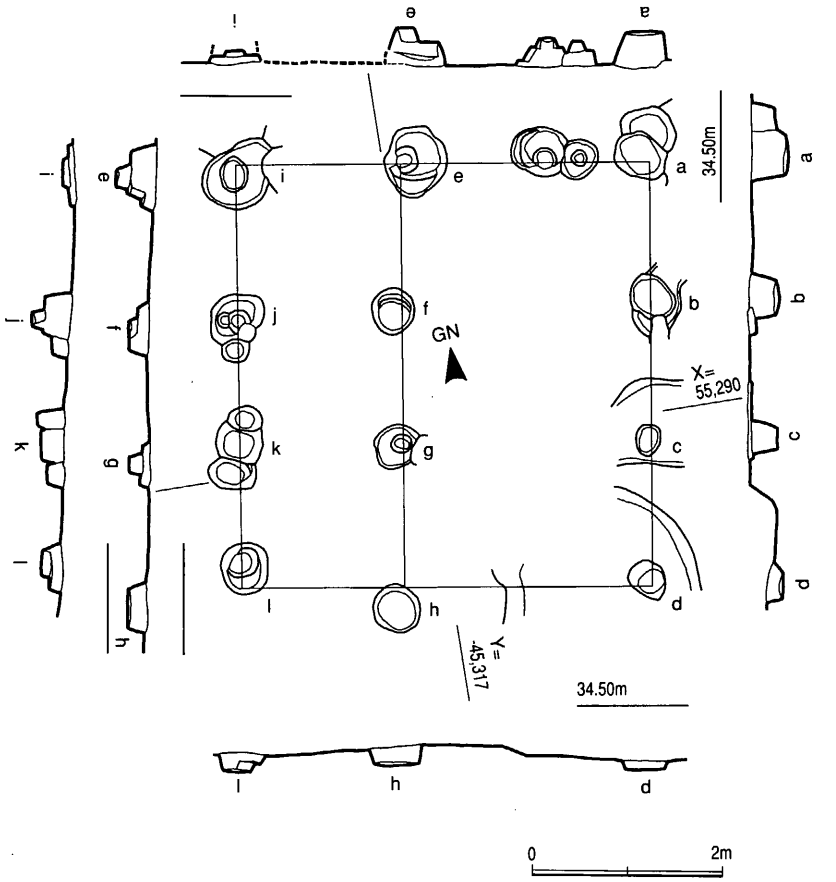


図 8 .77SB040・77SB045遺構実測図（S=1/80）

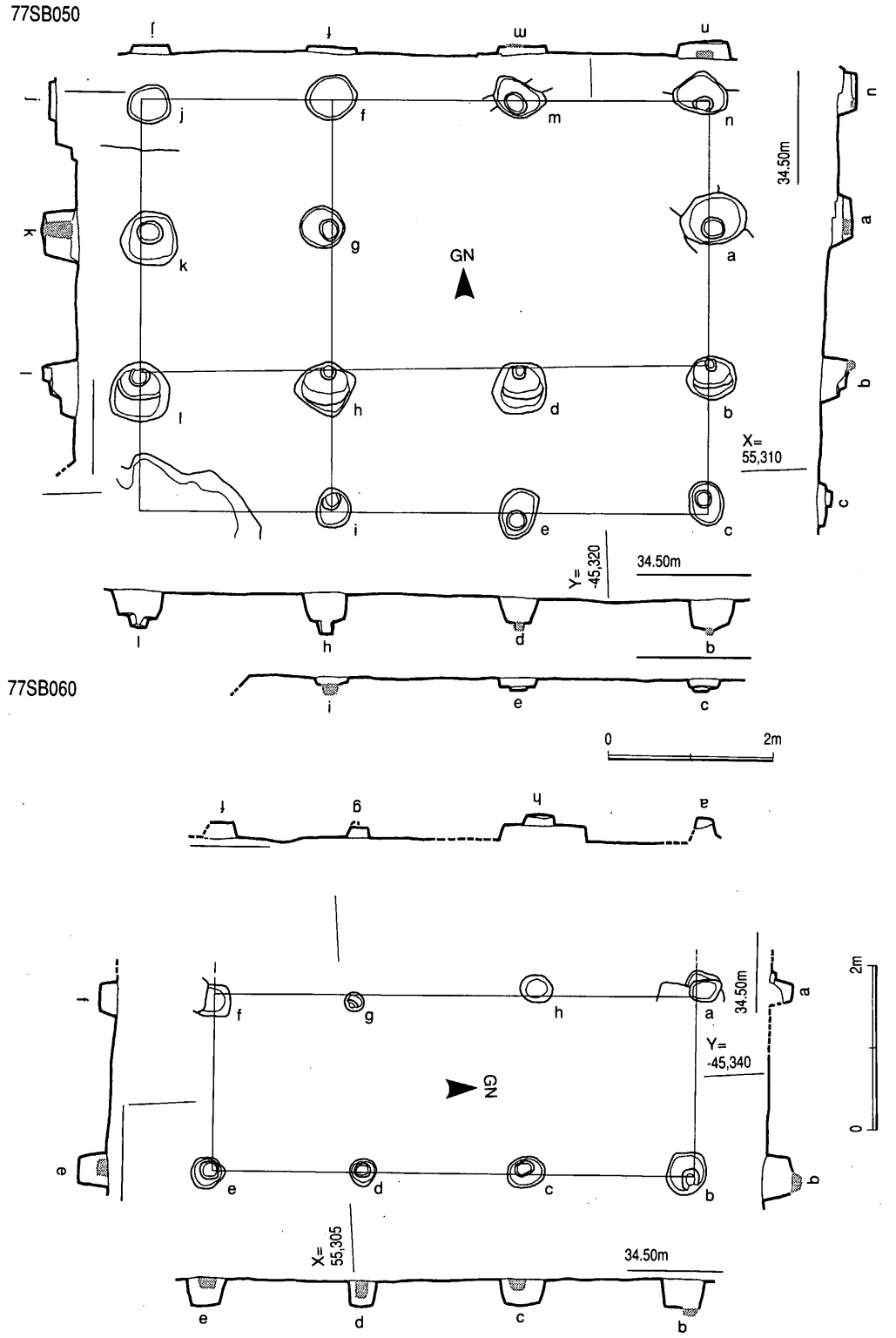


図 9 .77SB050・77SB060遺構実測図（S=1/80）

77SB080
77SB085

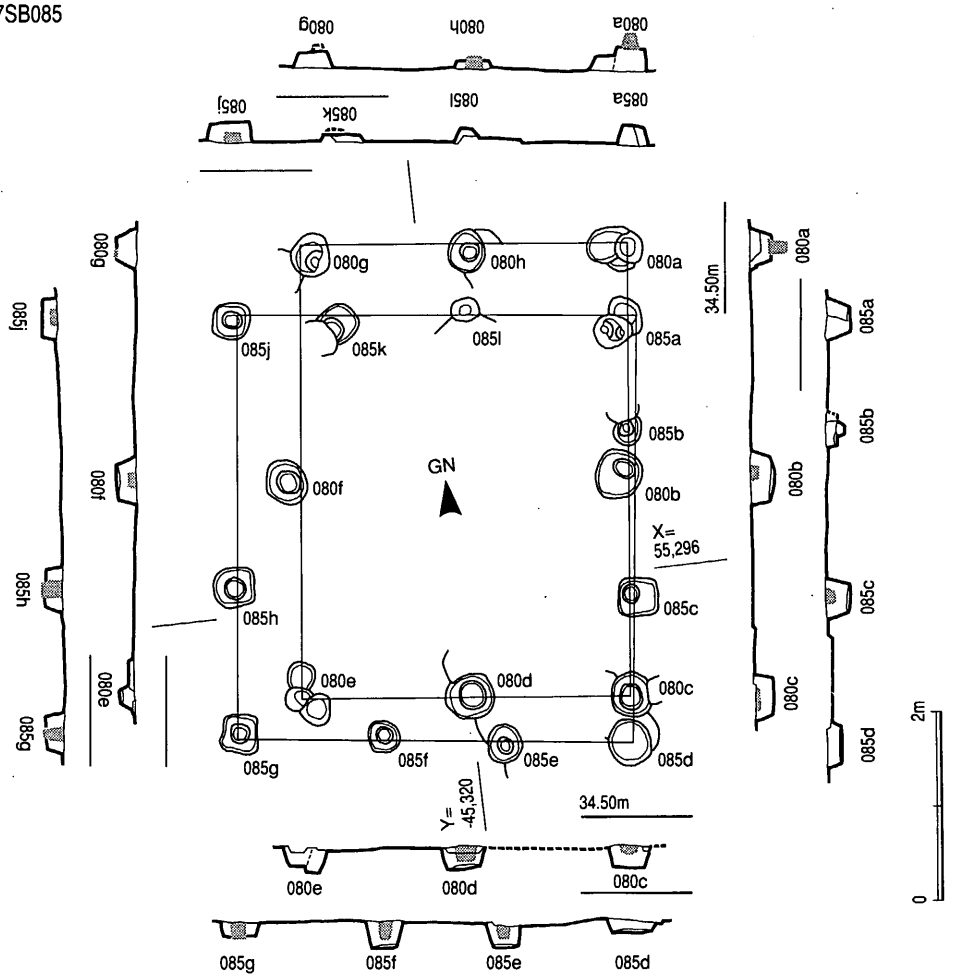


図10.77SB080・77SB085遺構実測図（S=1/80）

調査区南東隅で検出された南北3間、東西2間の掘立柱建物で、主軸の振れはN-8° 43′ 28″ -Eと若干東に振れている。柱間は、南北方向が北から1.52・1.49・1.55m、東西方向が東から2.5・1.8mで、a～e間に補助的なピットが二つある。柱掘り方は円形を呈し、径0.4～0.7m程度、深さ0.15～0.4mを測る。西側1間分は廂ないし間仕切りと考えられる。

77SB050（図９、写３下）

調査区中央北側で検出された南北3間、東西3間の掘立柱建物で、主軸の振れはN-2° 20′ 49″ -Eと若干東に振れている。柱間は、南北が北から1.51・1.69・1.62m、東西方向が東から2.3・2.22・2.2mとなっている。柱掘り方は略円形を呈し、径0.5～0.6m程度、深さ0.2～0.5mを測る。南側1間分は廂と考えられる。太さ0.1～0.25m程度の柱痕跡が確認されている。

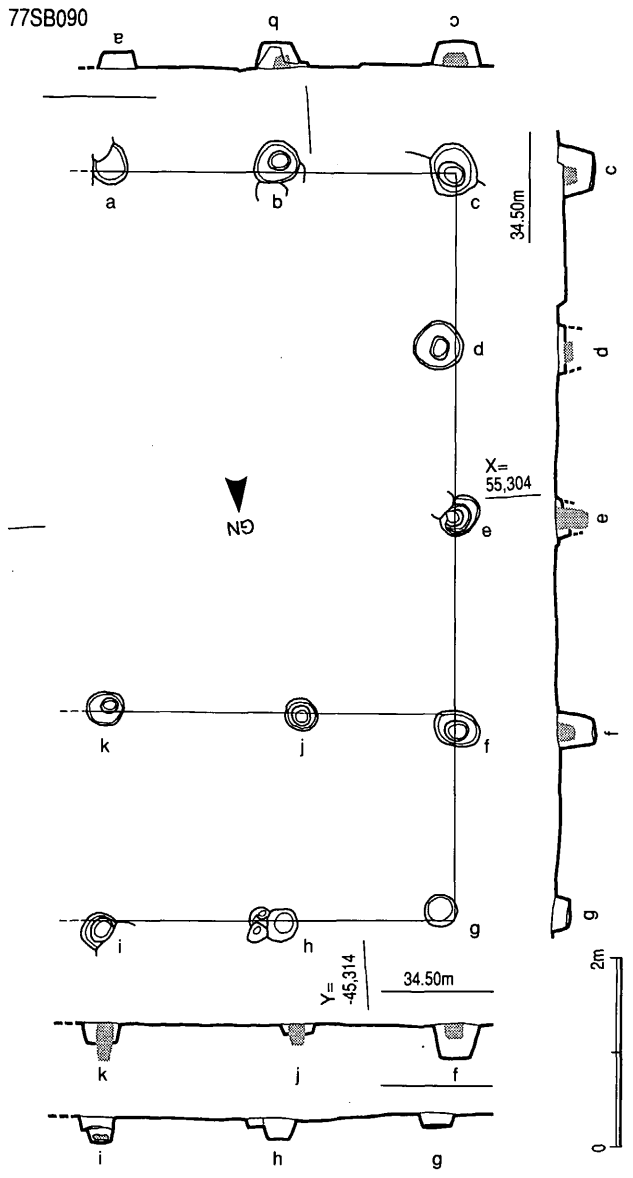


図11.77SB090遺構実測図（S=1/80）

77SB060（図9）

調査区北東側で検出された南北3間、東西1間以上の掘立柱建物で、主軸の振れはN-3° 28′ 5″ -Eと若干東に振れている。柱間は、南北方向が北から2.1・1.87・1.87m、東西方向が2.32mとなっている。柱掘り方は円形を呈し、径は多少ばらつきがあり大半は0.4m程度、深さ0.2～0.5mを測る。検出されたプランは南北棟の廂部分と考えられる。太さ0.2m程度の柱痕跡が確認されている。

77SB080（図10）

調査区南東側で検出された南北2間、東西2間の掘立柱建物で、主軸の振れはN-6° 35′ 59″ -Eと若干東に振れている。柱間は、南北方向が北から2.4・2.42m、東西方向が1.64m間隔となっている。柱掘り方は円形を呈し、径0.4～0.6m程度、深さ0.15～0.4mを測る。太さ0.15～0.2m程度の柱痕跡が確認されている。77SB085と同等規模で重複しており、どちらかが建て替えられたものと考えられる。

77SB085（図10）

調査区南東側で検出された南北3間、東西3間の掘立柱建物で、主軸の振れはN-6° 8′ 14″ -Eと若干東に振れている。柱間は、南北方向が東側が北から1.18・1.76・1.55mで、西側はj～h間のピットが一つ欠落しており2.88・1.52mを測り、東西方向が東から1.75・1.4・1.08mとなっている。柱掘り方は方形ないし円形を呈し、径0.4～0.5m程度。北西角から南1間目の柱は検出できなかった。その他の柱は深さ0.3～0.5mを測る。太さ0.15～0.2m程度の柱痕跡が確認されてい

77SA095
77SB100

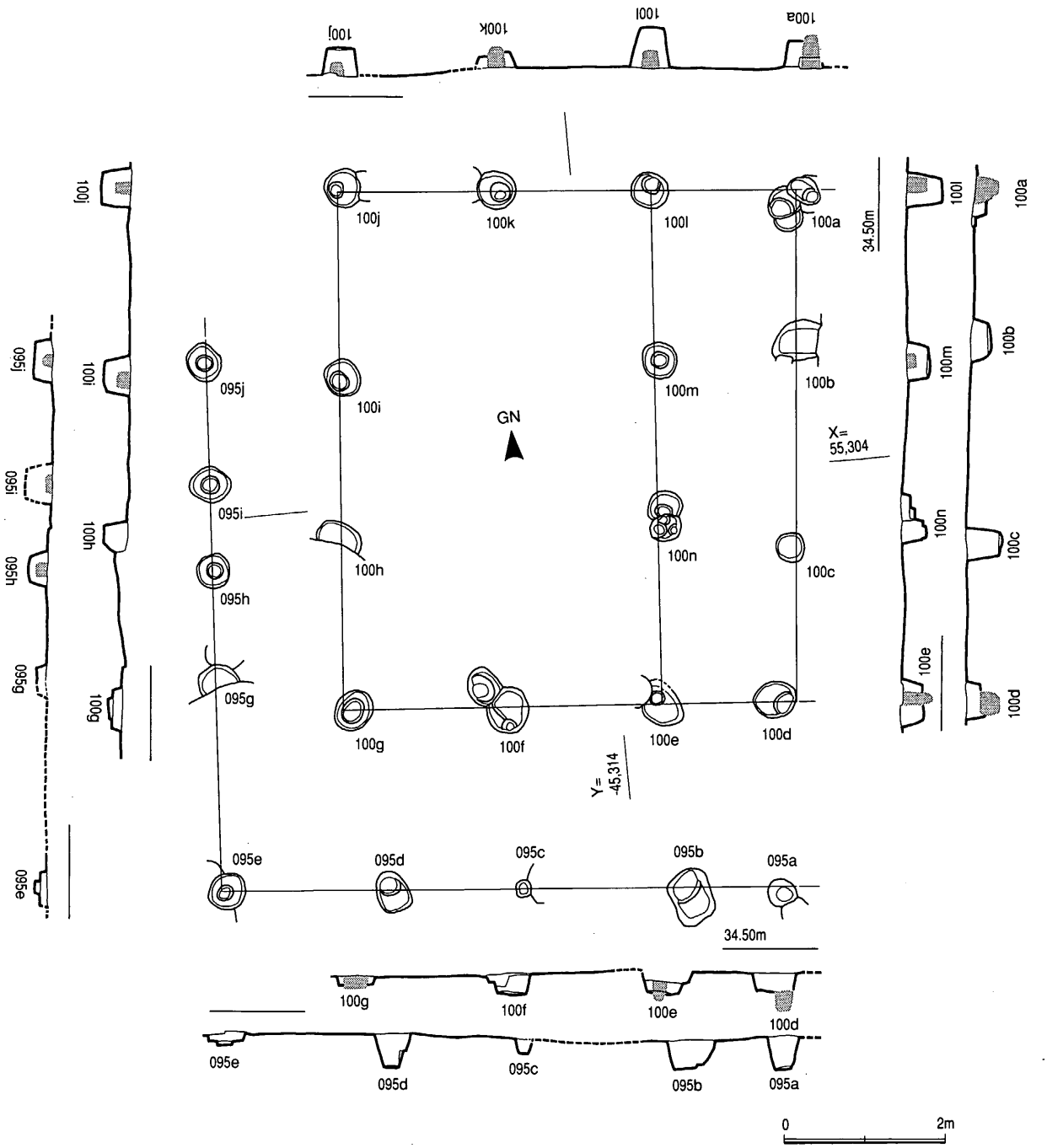


図12.77SB100・77SA095遺構実測図（S=1/80）

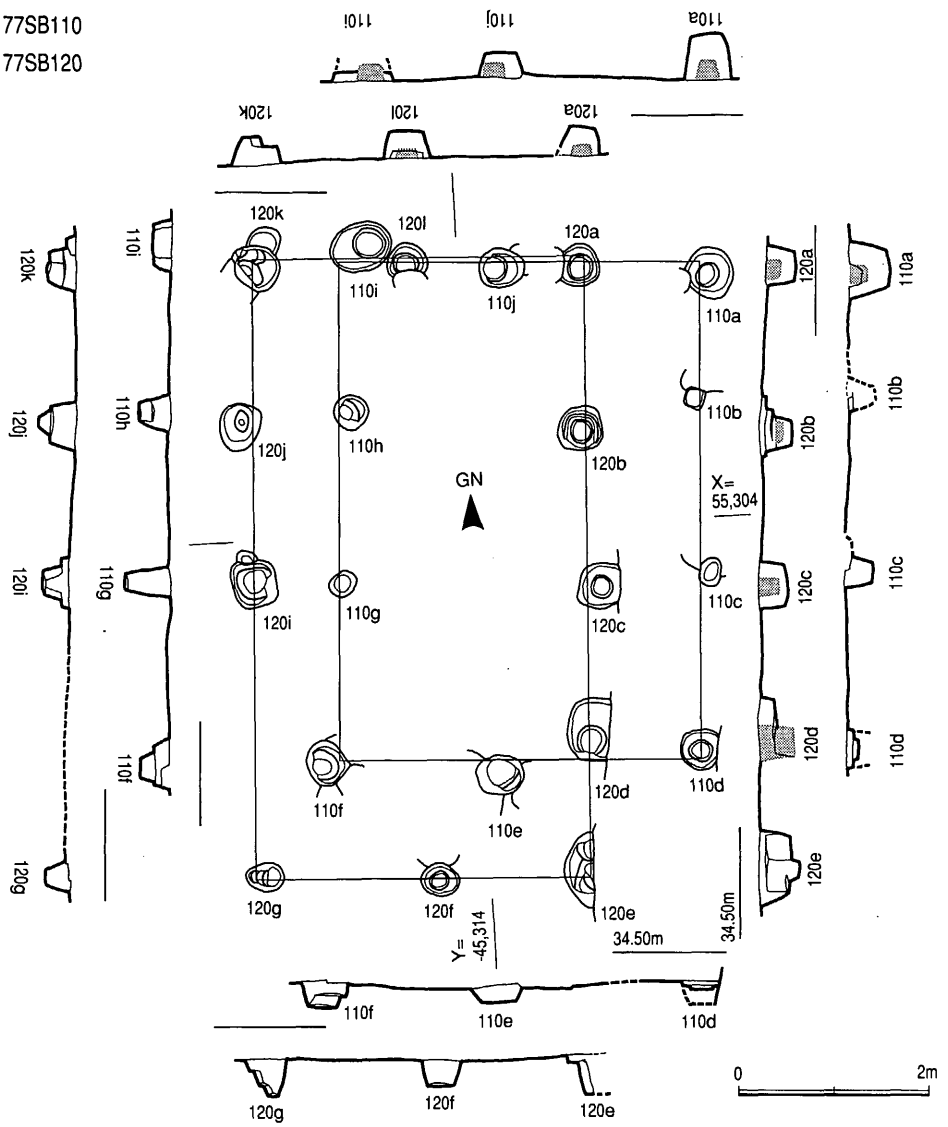


図13.77SB110・77SB120遺構実測図（S=1/80）

る。

77SB090（図11）

調査区南東側で検出された南北4間、東西2間以上の掘立柱建物で、主軸の振れはN-3° 38′ 17″ -Eと若干東に振れている。柱間は、南北方向が北から1.9・2.26・1.78・1.85m、東西方向が東から1.86・1.68mとなっている。柱掘り方は円形を呈し、径0.4～0.5m程度、深さ0.3～0.4mを測る。北側1間分は廂と考えられる。太さ0.2m程度の柱痕跡が確認されている。

77SB100（図12、写２上）

調査区南東側で検出された南北3間、東西3間の掘立柱建物で、主軸の振れはN-4° 40′ 38″ -

Eと若干東に振れている。柱間は、南北方向が北から1.89・2.57・2.02m、東西方向が東から1.99・1.95・2.0mとなっている。柱掘り方は円形を呈し、径0.4～0.6m程度、深さ0.4～0.5mを測る。東側1間分は廂と考えられる。太さ0.2～0.3m程度の柱痕跡が確認されている。南と西方向にL字に展開するSA095は距離や方向性の類似などからこの建物に伴うものと考えられる。調査区東側の状況が判明していないが、廂付きで目隠し塀をともなうなど、主殿的性格を持つ建物の可能性も考えられる。この建物周辺が集中して何度も建て替えがおこなわれたことも主要な建物であったことを示唆するものと考えられる。

柱掘り方から出土した遺物はSA095と共に8世紀中ごろから後半代に納まる時期を示している。

77SB110（図13）

調査区南東側で検出された南北3間、東西2間の掘立柱建物で、主軸の振れはN-3° 33′ 6″ -Eと若干東に振れている。柱間は、南北方向が北から1.8・1.8・1.97m、東西方向が東から2.23・1.29mとなっている。柱掘り方は円形を呈し、径0.4～0.5m程度、深さ0.4～0.6mを測る。太さ0.2～0.3m程度の柱痕跡が確認されている。77SB120と同等規模で重複しており、どちらかが建て替えられた可能性がある。

77SB120（図13）

77SB100南西側で検出された南北4間、東西2間の掘立柱建物で、主軸の振れはN-2° 12′ 9″ -Eと若干東に振れている。柱間は、南北方向が東側が北から1.73・1.63・1.64・1.35mで、西側はi～g間のピットが一つ欠落しており1.75・1.7・3.12mを測り、東西方向が東から1.84・1.65mとなっている。柱掘り方は円形ないし隅丸方形を呈し、径0.4～0.5m程度、深さ0.3～0.4mを測る。太さ0.2～0.3m程度の柱痕跡が確認されている。

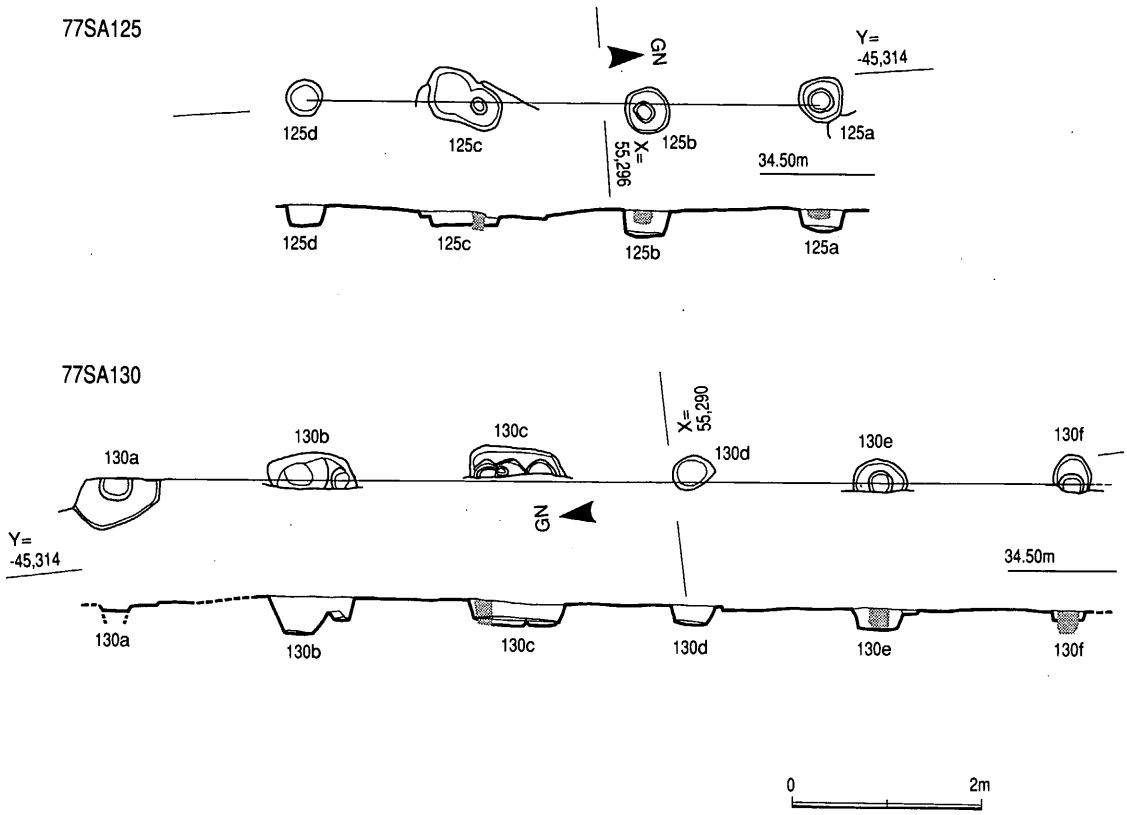
3）柵列

77SA095（図12）

77SB100南西側で検出された南北4間以上、東西4間以上の柵列で、南北方向の主軸の振れはN-3° 37′ 26″ -Eと若干東に振れている。柱間は、南北は北から1.53・1.09・1.41・2.56m、東西は西から2.07・1.64・2.02・1.24mとなっている。柱掘り方は基本的に円形を呈し、径0.4～0.6m程度、深さ0.4～0.6mを測る。太さ0.15～0.3m程度の柱痕跡が確認されている。

77SA125（図14）

調査区南東側で検出された南北3間の柵列で、主軸の振れはN-3° 58′ 46″ -Eと若干東に振れている。柱間は、北から1.88・1.73・1.84mとなっている。柱掘り方は基本的に円形を呈し、径0.4～0.8m程度、深さ0.15～0.3mを測る。太さ0.15～0.25m程度の柱痕跡が確認されている。aな



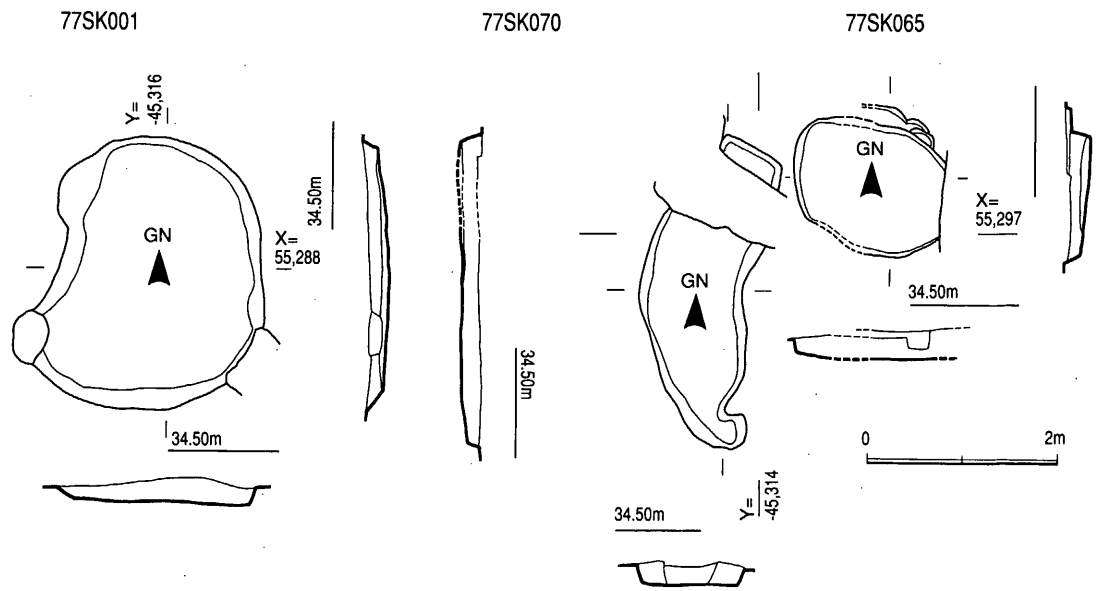


図14.77SA125・77SA130、77SK001・77SK065・77SK070遺構実測図（S=1/80）

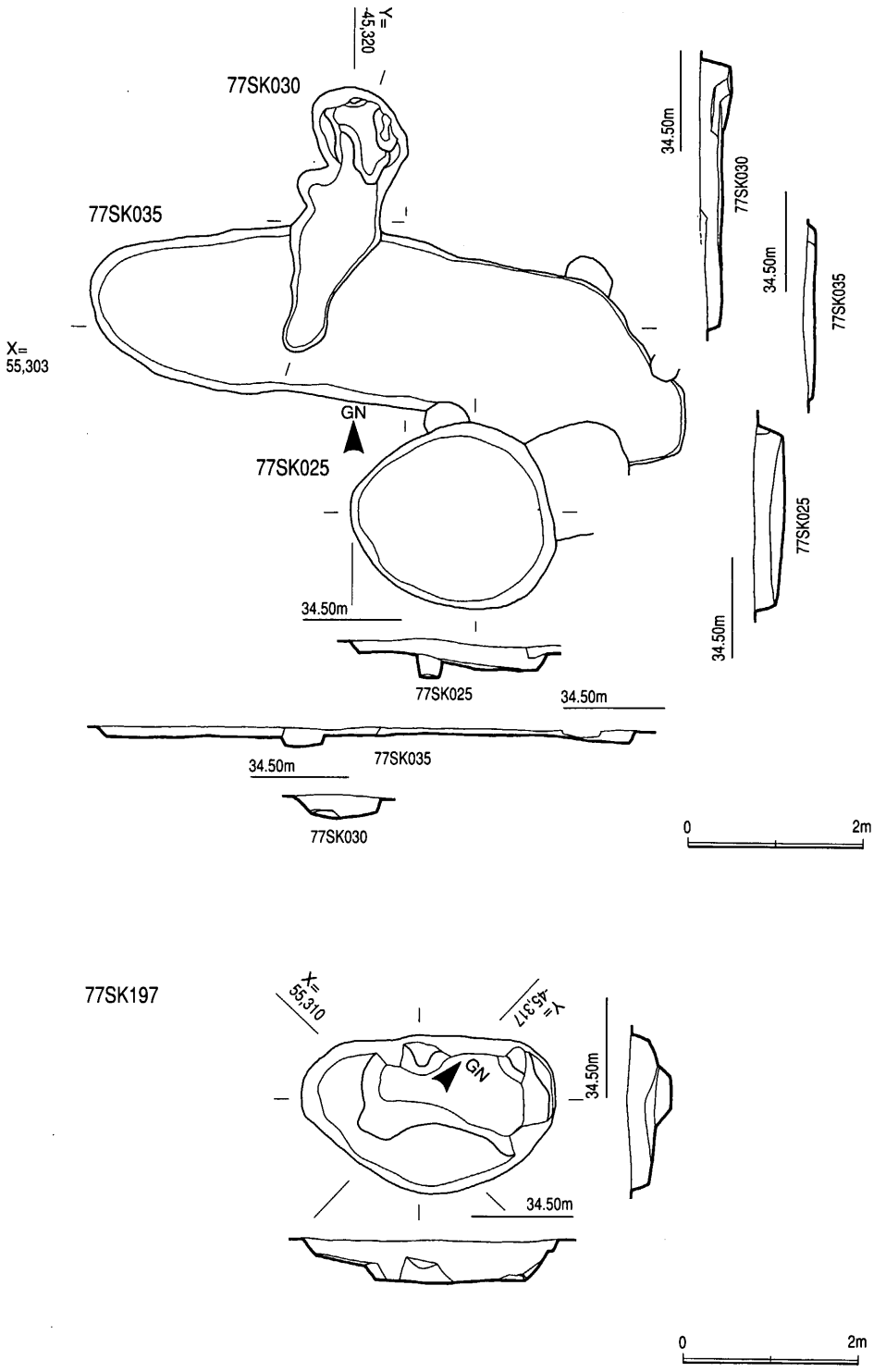


図15.77SK025・77SK030・77SK035・77SK197遺構実測図（S=1/80）

いしbの柱で東に折れて掘立柱建物になる可能性も否定できない。

77SA130（図14）

調査区南東側で検出された南北5間の柵列で、主軸の振れはN-6° 34′ 8″ -Eと若干東に振れている。柱間は、北から1.95・1.95・2.17・1.97・2.0mとなっている。柱掘り方は基本的に円形を呈すが北側のabcは掘り方が多少南北に長く重複も考えられる。径は0.4～1.0m程度、深さ0.3～0.4mを測る。太さ0.3m程度の柱痕跡が確認されている。

4）土坑

77SK001（図14）

調査区の東側77SB045の西側に位置する。長楕円形を呈する土坑で、長さ2.83m、幅0.92m、深さ0.2～0.4mを測り、割り合い平坦な床面を呈す。77SB045dを削平して形成される。

77SK065（図14）

調査区の南東側で検出され、遺構の中央が調査時の排水溝で欠損しており、遺物の取り上げは調査時点では排水溝の東西別の認識でおこなっていた 。検出長1.0m、幅1.22m、深さ0.5mを測り、埋土は黒褐色土で構成される。

77SK070（図14）

北側の一部が現代の攪乱で破壊されている。平面形はゆるく屈曲する「く」字を呈す。現状での検出長は1.7m、幅1.0m、深さ約0.4mを測る。

77SK025（図15）

調査区の東側にあり、77SK030とともに77SK035を切って形成される。土坑の平面形はタマゴ形を呈するもので、長さ2.2m、幅1.65mで、深さは0.4～0.5mを測る。

77SK030（図15）

調査区の東側にあり、77SK035を切って形成される。土坑の平面形はいびつな楔形を呈するもので、長さ2.2m、幅1.65mで、深さは0.3～0.4mを測る。北側が一部深くなっている。

77SK035（図15）

調査区の東側にあり、77SK025,030に切られる。土坑の平面形は長楕円形を呈するもので、長さ2.2m、幅1.65mで、深さは0.2m程度が残存していた。

77SK197（図15）

調査区の東側にあり、77SK025,030に切られる。土坑の平面形は長楕円形を呈するもので、長さ2.2m、幅1.65mで、深さは0.5m程である。北側が一部深くなっている。

d.出土遺物

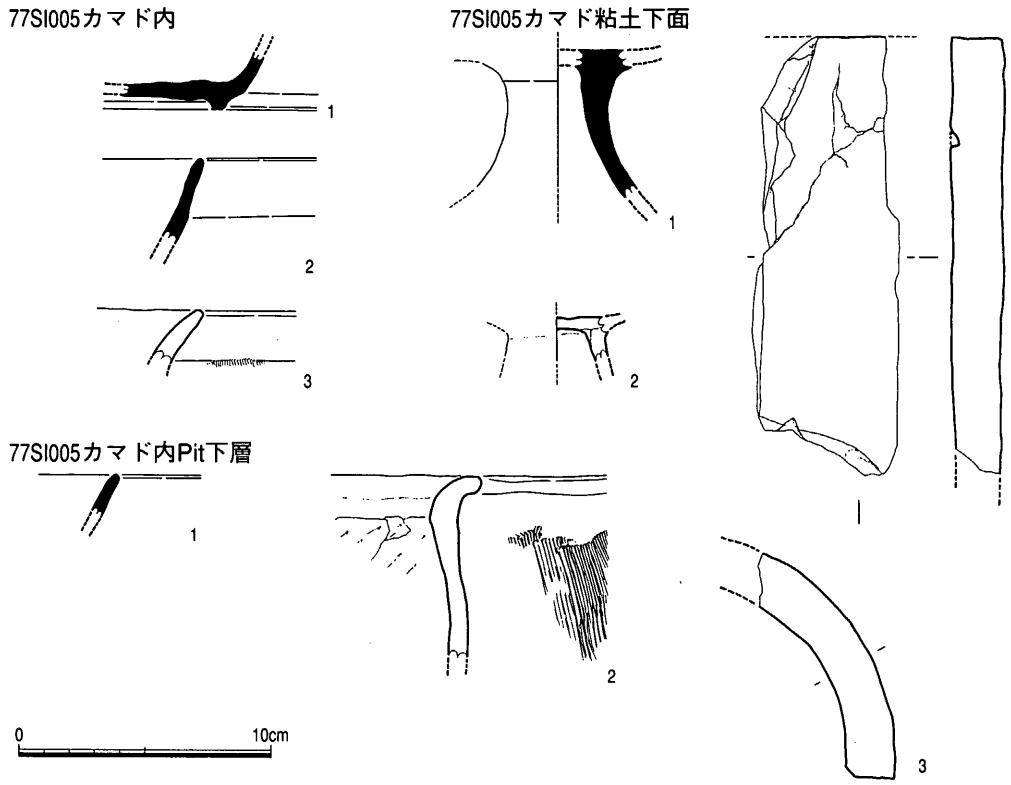


図16.77SI005出土遺物実測図（S=1/3）

1）竪穴住居出土遺物

77SI005カマド内出土遺物（図16）

須恵器

坏c3（1）　高台の接合部位の外側の傾向が側面から横方向に強いナデが施される。

坏（2）　坏aないしcの口縁部である。

土師器

甕（3）　甕aの口縁部である。外側にあまり反らないタイプである。

77SI005カマドpit下層出土遺物（図16）

須恵器

坏（1）　坏aないしcの口縁部である。

土師器

甕a（2）　口縁が短く外側に反るタイプである。

77SI005カマド粘土下面出土遺物（図16）

須恵器

高坏（1）　短脚型の脚部である。

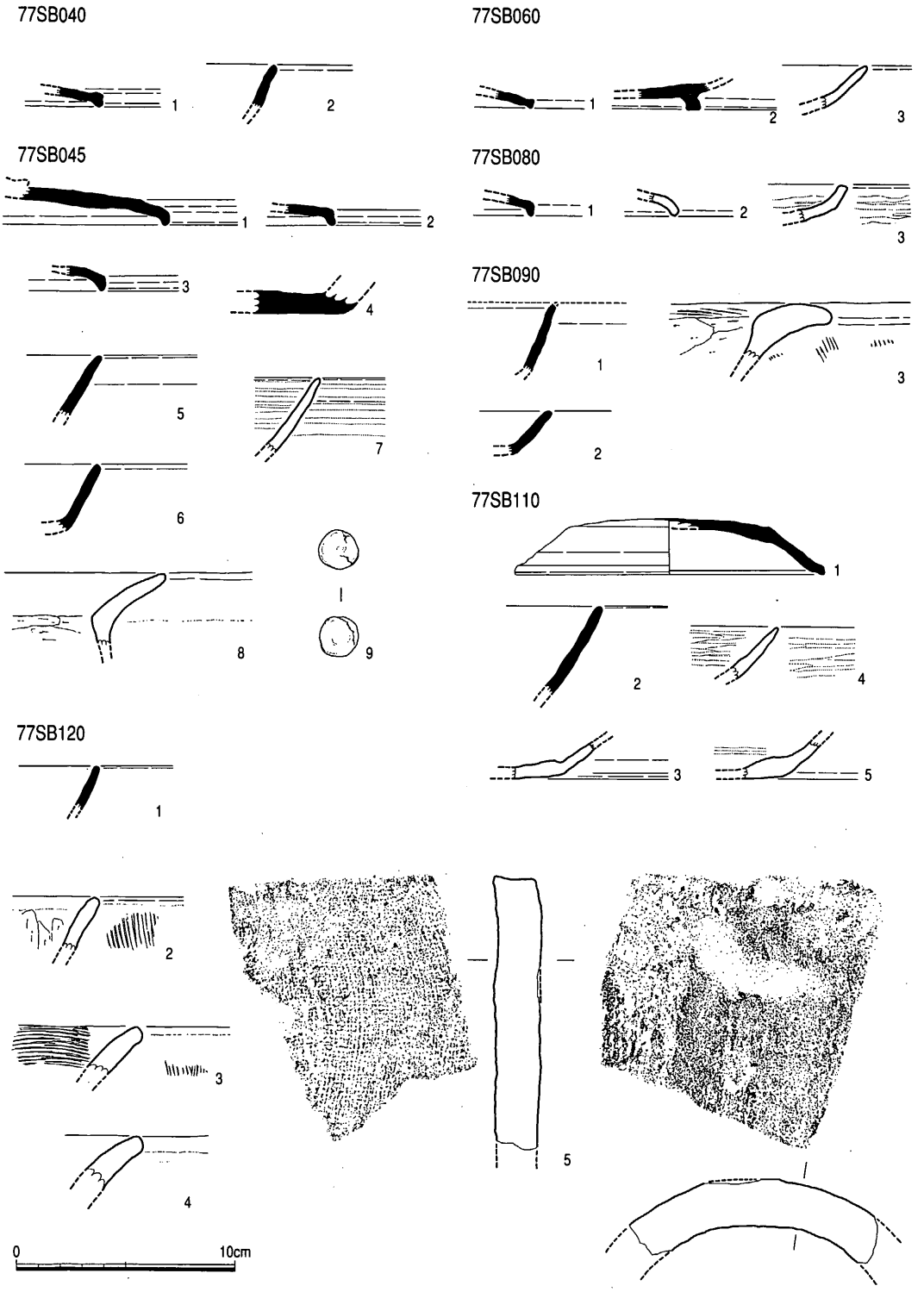


図17.77SB040・045・060・080・090・110・120出土遺物実測図（S=1/3）

土師器

高坏（2）　脚部と坏部の接合部位であるが、坏部内底は欠落する。

瓦

丸瓦（3）　須恵質で表面は無文、内面には布目の痕跡が残る。

2）掘立柱建物出土遺物

77SB040出土遺物（図17）

須恵器

蓋3（1）　端部は三角形を呈す。体部はヨコナデされる。

坏（2）　坏aないしcの口縁部である。端部は外反気味。柱掘り方b出土。

77SB045出土遺物（図17）

須恵器

蓋3（1～3）　端部は三角形を呈す。2は折り曲げた外側の平坦面の中央が窪む。1の上面には回転ヘラケズリが施される。

鉢（4）　底が平坦な鉢bの底部片と考えられる。底部外面には回転ヘラケズリが施される。

坏（5・6）　坏aないしcの口縁部である。端部は外反気味。柱掘り方b出土。

土師器

坏d（7）　口縁部である。内外面にミガキaが見られる。柱掘り方b出土。

甕a（8）　口縁が長く直線的に延びるタイプである。

土製品

土玉（9）　素焼きの土玉で球形に近い形状を持つ。

77SB050出土遺物（図18）

須恵器

蓋1（1・2）　かえりの付く蓋で焼成が甘く軟質で灰色から橙色を呈す。1には2条のヘラ記号が天井部に施される。

蓋3（3）　端部を折り曲げて一度ナデてつぶしたような端部形状を成し、側面は沈線が施される。

土師器

皿（4・5）　端部に向かい弧を描いて集束する形状で、ミガキは観察できない。橙色を呈す。

壷（6）　端部が若干つまみ上げられる口縁で、多少肩が張るプロポーションを持つ。シャモット様の褐色粒が淡い橙色の胎土に混入する。

甕（7）　口縁が強いヨコナデ整形で胴部より径が小さいプロポーションを持つ。壷同様に

77SB050

77SX182

77SX166

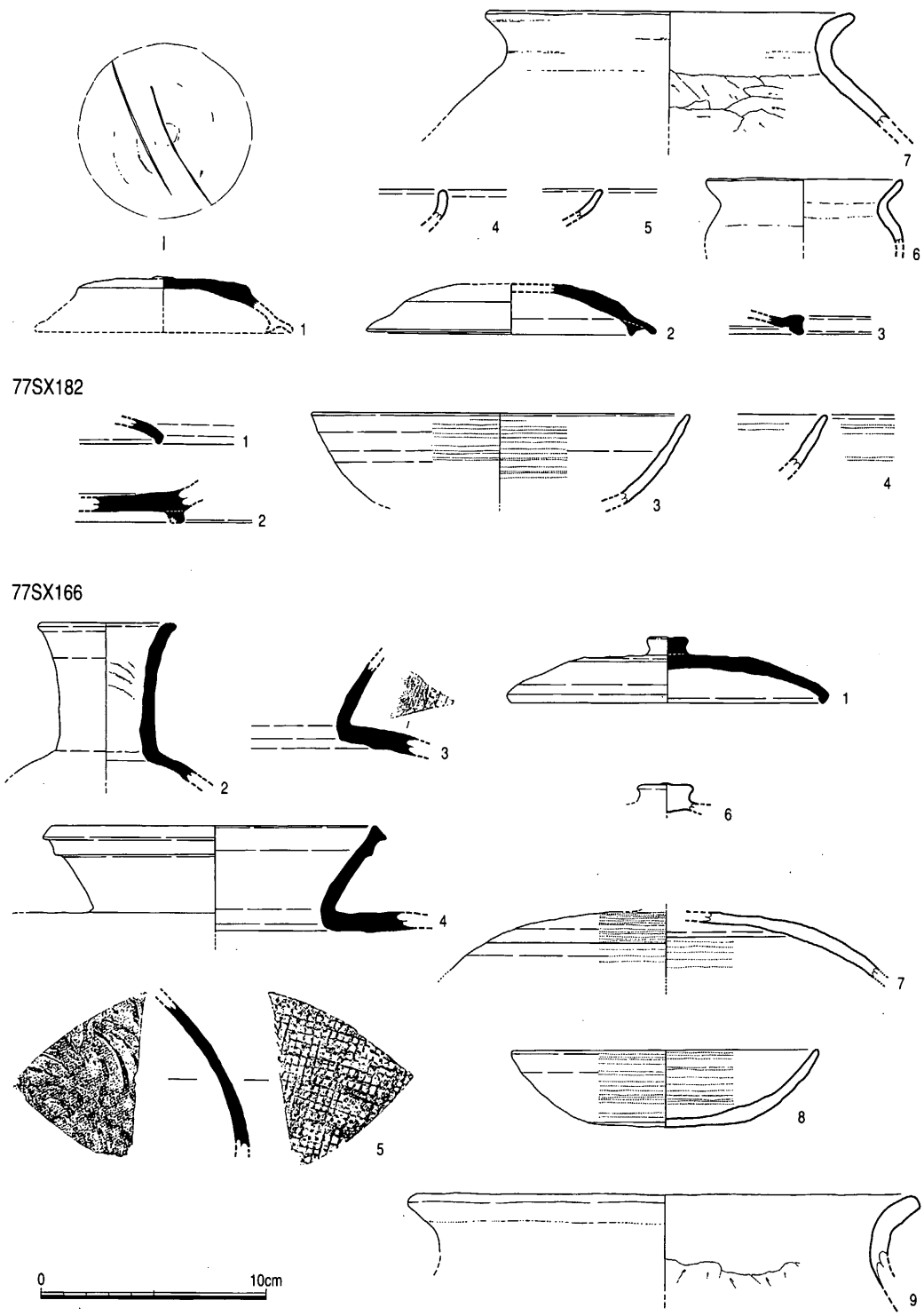


図18.77SB050、77SX166・77SX182出土遺物実測図（S=1/3）

シャモット様の褐色粒が淡い橙色の胎土に混入する。

77SB050は遺構埋没後に77SX182に切られ、さらに182は77SX166に切られる。このことから77SB050埋没時期を知るため以下のその他の遺構出土遺物を紹介する。

77SB050と切り合い関係にある遺構

77SX182出土遺物（図18）

須恵器

蓋3（1）　端部断面が小さめの三角形を呈す。

坏c3（2）　微細な黒色粒を含む灰色の胎土を持ち、焼成は良好で堅緻。

土師器

坏d（3・4）　ミガキaを持つもので、3は橙色、4は褐色（被熱によるものか）を呈す。

77SX166出土遺物（図18）

須恵器

蓋c3（1）　天井部はヘラ切りのままで端部は浅い三角形を呈す。つまみは横に張り出さない縦長い形状のもの。

壷（2）　長頸の壷で口縁端部が外開きに整形される。黒灰色を成し硬質堅緻。

甕（3～5）　3と4は口縁の傾きや胎土が共通し同一の可能性が高い。胎土は灰色を成し黒色粒が混入する。5も胎土は類似し格子叩を持つ。

土師器

蓋c（6・7）　橙色の発色をする胎土を持つ。つまみはボタン状を成す。7はつまみ部分は欠損するが、つまみ接合のためのナデが中央部に見られる。天井部はヘラケズリののちミガキaを施す。

坏d（8）　底部は回転ヘラケズリを施し、他の部分はミガキaで仕上げられる。橙色を呈す。

甕a（9）　カーブを描いて屈曲する口縁を持つ。胎土には多量の角閃石が混入する。

77SB060出土遺物（図17）

須恵器

蓋3（1）　端部は三角形を呈す。体部はヨコナデされる。

坏c3（2）　高台が外側に開く要素を持つ。

土師器

皿（3）　口縁部である。体部がゆるく屈曲する。柱掘り方b出土。

77SB080出土遺物（図17）

須恵器

蓋3（1）　端部は折り曲げた形状を呈す。体部はヨコナデされる。

土師器

蓋3（2）　端部は垂下した形状を呈す。体部外面はミガキaの痕跡が見られる。

高坏（3）　端部が斜め上に伸びて上に平坦面を形成する。体部内外面はミガキaが見られる。

77SB090出土遺物（図17）

須恵器

坏（1）　坏aないしcの口縁部である。

皿（2）　体部は屈曲せず底部からストレートにのびる。

土師器

鉢（3）　口縁は甕の形状に近いが底部に向かって内傾するプロポーションを持つ。大宰府地域では出土例は少なく、近くでは干潟遺跡など北筑後に見られる。

77SB110出土遺物（図17）

須恵器

蓋a（1）　小形のつまみのない蓋で、口縁端部はゆるいS字のカーブを描き後出的傾向を持つ。

坏（2）　坏aないしcの口縁部である。

土師器

坏d（3～5）　内外面にミガキaが見られる。柱掘り方b出土。

77SB120出土遺物（図17）

須恵器

坏（1）　坏aないしcの口縁部である。

土師器

坏a（2）　底部である。外面にミガキaが見られる。

甕a（3～5）　口縁が長く直線的に延びるタイプである。4と5は端部で外に若干屈曲する。

瓦

丸瓦（6）　凸面に縄目のタタキを持つ。小口はヨコナデが施される。

77SB100出土遺物（図19）

須恵器

蓋3（1・3・4）　端部は垂下の程度は異なるが三角形を呈す。体部はヨコナデされる。1には外部上面に回転ヘラケズリが見られる。

蓋（2）　天井部中央に向かって若干の立ち上がりが見られ、つまみの付くcタイプと考えられる。内面に丸に十字を重ねた朱書きが残存する。朱の主成分は鉄である（分析の詳細後述）。

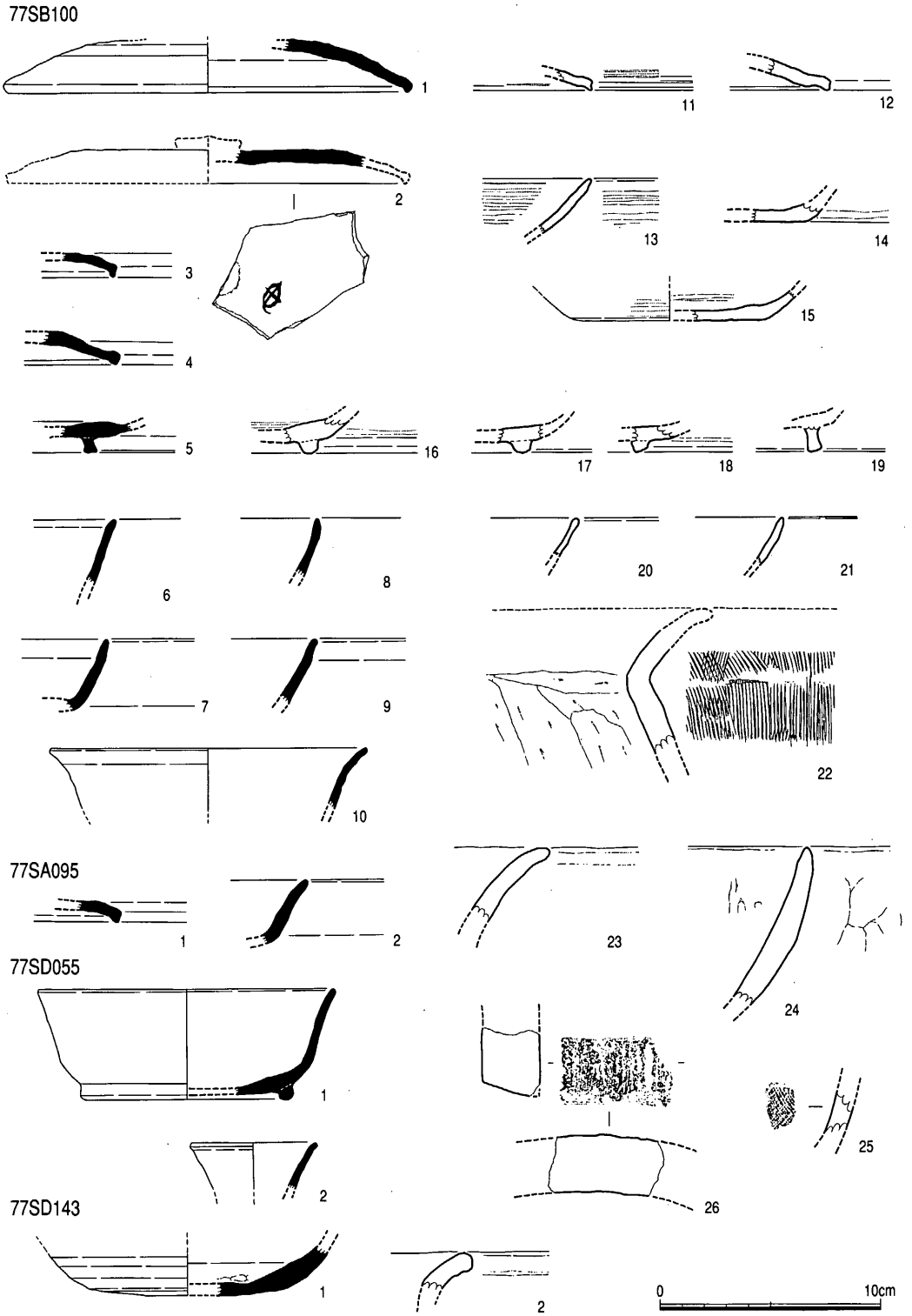


図19.77SB100、77SA095、77SD055・77SD143出土遺物実測図（S=1/3）

坏c3（5）　高台は底部端よりやや内側に付けられ、形状はやや外開き。

坏（6～10）　坏aないしcの口縁部である。10のみ口縁端部が外に開く。

土師器

蓋3（11・12）　端部は浅い三角形を呈す。11にはミガキaが見られる。

坏d（13・14）　内外面にミガキaが見られる。柱掘り方b出土。

坏c3（15～18）　高台は底部端よりやや内側に付けられ、18の形状はやや外開き。

坏（19・20）　坏aないしcである。20ミガキaの痕跡が見られる。

甕a（21・22）　21は口縁端部が欠損する。内面のヘラケズリは最終段階でヨコ方向に施される。22は口縁端部が外側に屈曲する。

製塩土器

焼塩土器(23・24)　23は胴の短いII型に相当する。両者とも赤褐色を呈し内面に布の圧痕が見られる。

瓦

丸瓦（25）　凸面に縄目のタタキを持つ。

3）柵出土遺物

77SA095出土遺物（図19）

須恵器

蓋a（1）　口縁端部は緩く垂下する。

坏（2）　坏aないしcの口縁部である。ヨコナデが施される。

4）溝出土遺物

77SD055出土遺物（図19）

須恵器

坏c3（1）　体部下半は多少丸みを持つ。

瓶（2）　口縁端部が短く外に屈曲する。

77SD143出土遺物（図19）

須恵器

鉢（1）　体部下半は回転ヘラケズリを施す。

土師器

甕（2）　口縁端部が丸く納められる。

5）土坑出土遺物

77SK001出土遺物（図20）

須恵器

蓋3（1）　端部はゆるく垂下する三角形を呈す。体部はヨコナデされ天井部は回転ヘラケズリが施される。

蓋（2）　端部は垂下せず、ゆるいS字に屈曲する。体部はヨコナデされる。

坏a（3）底部は平坦で口縁端部が短く外に屈曲する。

坏（4）　坏aないしcの口縁部である。ヨコナデが施される。

鉢b（5）　体部外面が幅の広いヘラケズリが施される。

甕（6・7）　6は平行、7は疑似格子のタタキが施される。6は当て具の刻みも平行である。

土師器

蓋（8）　口縁端部はゆるく垂下する。

坏d（9）　底部外面はケズリの痕跡が見られ、体部はヨコ方向に開く。

甕a（10）　口縁がゆるく外に開く。

瓦

平瓦（11）　縄目のタタキを有す。小口はヘラケズリにより整形される。

77SK025出土遺物（図20・21）

越州窯系青磁

椀（1・2）　いずれも口縁部片で釉調は薄い緑灰色を呈す。I類。

白磁

椀（3）　口縁部片で光沢のある乳白色を呈す。胎土は灰色の細かな砂目状の斑をもつが表面が白色の土で化粧がけされる。I類。

須恵器

坏（4・6）　4は坏aないしcの口縁部である。ヨコナデが施される。6は傾きがあり口縁端部が外反する椀なりの形状を持つ。

坏c4（5）　高台が体部外側に付けられる新しい傾向を示すもの。

高坏（12）　短脚の脚部で坏部と裾部を欠く。ヨコナデが施される。

土師器

蓋3（7）　端部は外に垂下する三角形を呈す。

皿（8）　復原径が12.4cm程度の口径が小さめの皿で、体部外面が多少反る。

坏a（9）　底部外面はヘラキリのままで体部はヨコナデを施す。色調は灰色系。

椀c（10・11）　10の底部内面は中央に向かって窪む。高台は多少角張っている。色調は灰色系。11の色調は褐色系。

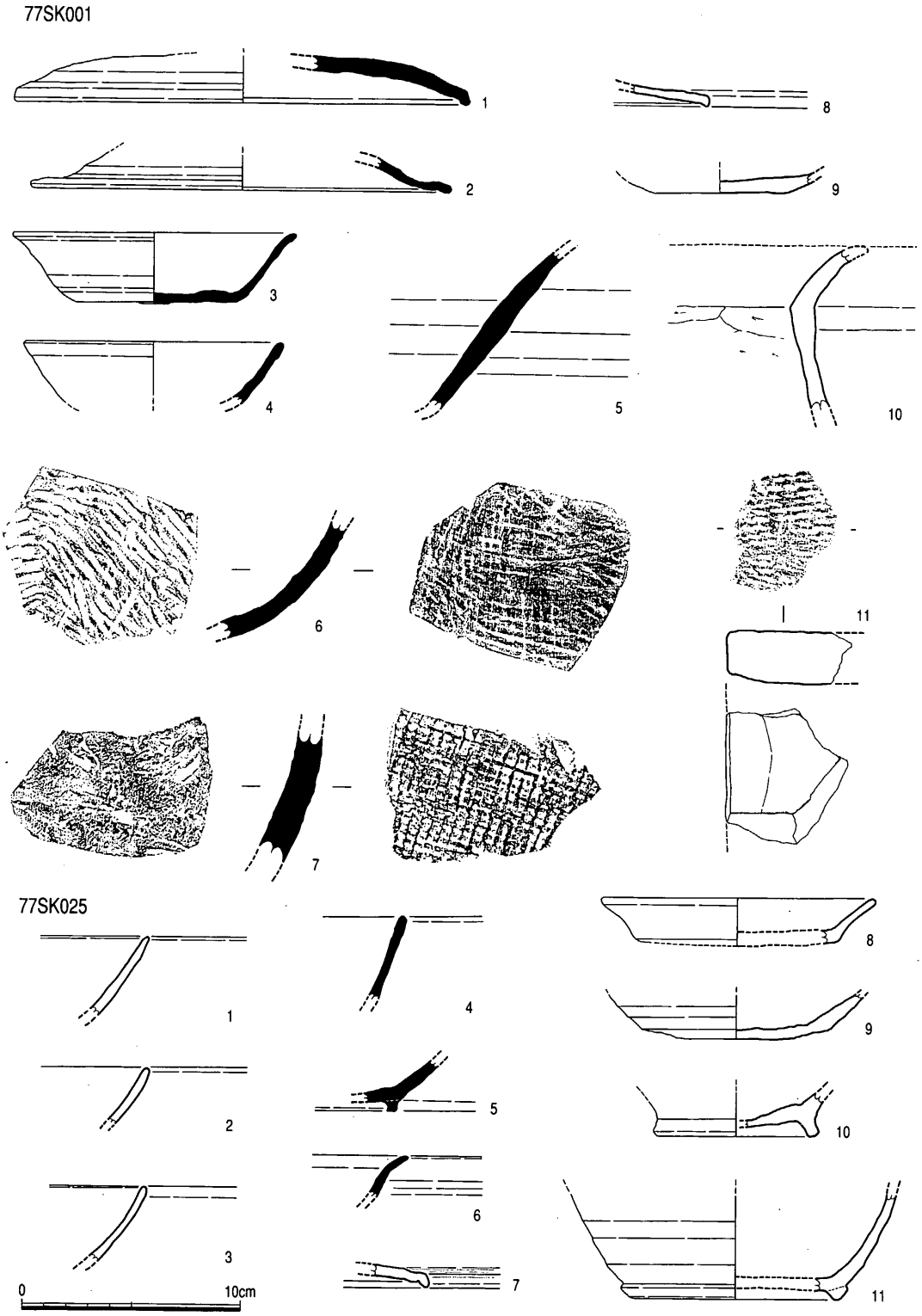
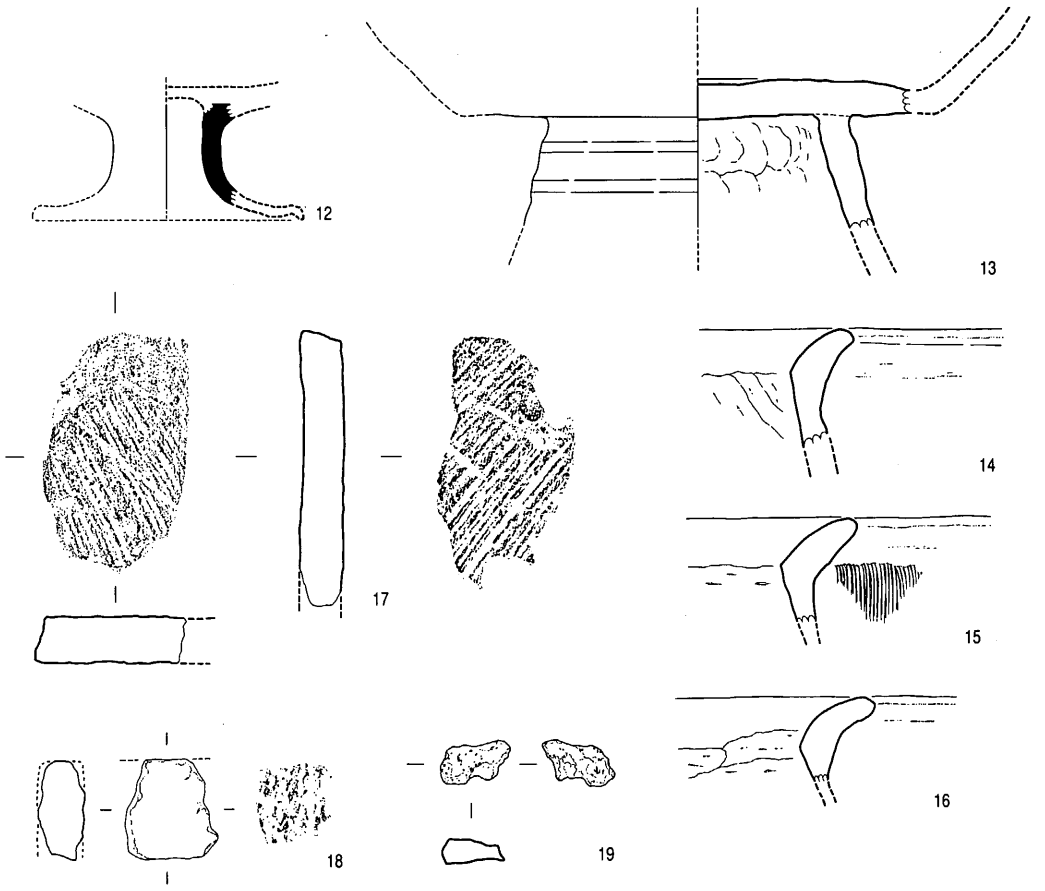


図20.77SK001・025出土遺物実測図（S=1/3）

77SK025



77SK030

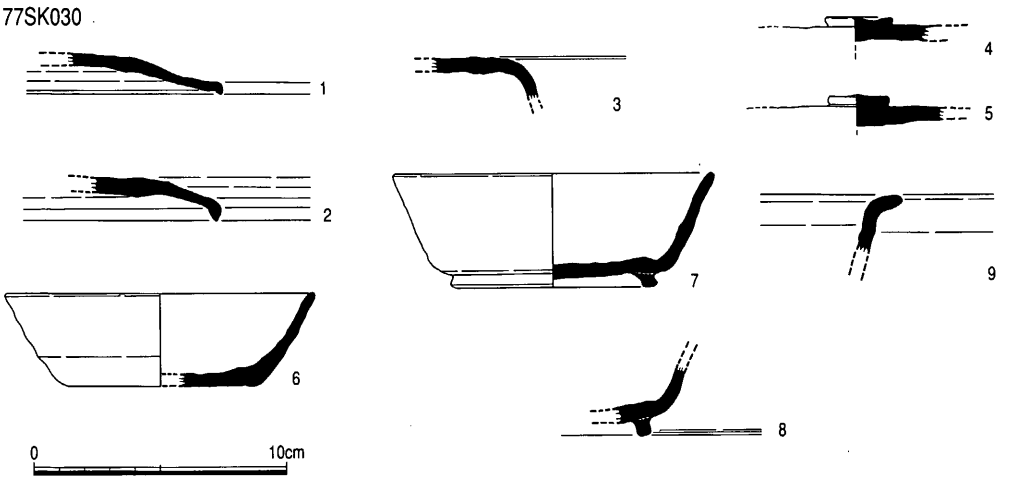


図21.77SK025・030出土遺物実測図（S=1/3）

脚付鉢（13）　鉢の底が平たいタイプ。脚内側にはユビオサエが体部外面にはヨコナデが明瞭に残る。胎土の芯は灰白色で表面はオレンジ色を呈す。

甕a（14～16）　短く屈曲する口縁を持ち、内面はヘラケズリを残す。

瓦

平瓦（17・18）　17は工具に拠るナデないしは弓切りによる条線を残す。18は表面の残存状況が悪いが、縄目のタタキがあったらしい。

焼土

塊（19）　鈍い赤褐色の多孔質の鉱石のような塊で、鋳造などの生産に係わる遺物である可能性がある。

77SK030出土遺物（図21・22）

須恵器

蓋3（1・2）1の屈曲は小規模。体部はヨコナデされ2の天井部は回転ヘラケズリが施される。

蓋（3）　天井部と体部は緩く屈曲する。壷類の蓋か。

坏a（6）　底部が平坦なもので、体部はストレートに延びる。

坏c3（7・8）　7は多少高台が外に広がるもので、体部はストレートに延びる。

壷b（9）口縁端部が外に屈曲するもので、ヨコナデが施される。

土師器

蓋3（10～12）　口縁端部が下に短く突出する。器面にはミガキaが施される。赤褐色系の色調を呈す。部分的に煤が付着したように黒色化しており12の内面はそれが顕著である。

蓋c（13）　やや背の高い擬宝珠のつまみを持つ蓋で12同様に内面が黒色化している。

坏d（14）底部外面は回転ヘラケズリされ、内面には部分的にナデが施される。内外面ともに部分的に黒色化している。

皿a（15・16）　底部は回転ヘラケズリをし、その他の部位はミガキaで仕上げられる。基本的に赤褐色系の胎土であるが、16は内外面ともに部分的に黒色化している。

鉢b（17）　底部に近い体部片。内外面共にミガキaで仕上げられる。

甕（18・19）　屈曲部から端部までが短い口縁部だが、18はケズリのくりこみが深く鉢の可能性もある。

77SK035出土遺物（図22）

須恵器

蓋（1・2）　1は天井部に丁寧な回転ヘラケズリが施され、つまみに続くと考えられる高まりを中央方向に持つ。2は内外面ともに丁寧なナデが施される。高坏の坏部の可能性も考えられる。端部は屈曲したり沈線が入ったりはしない。

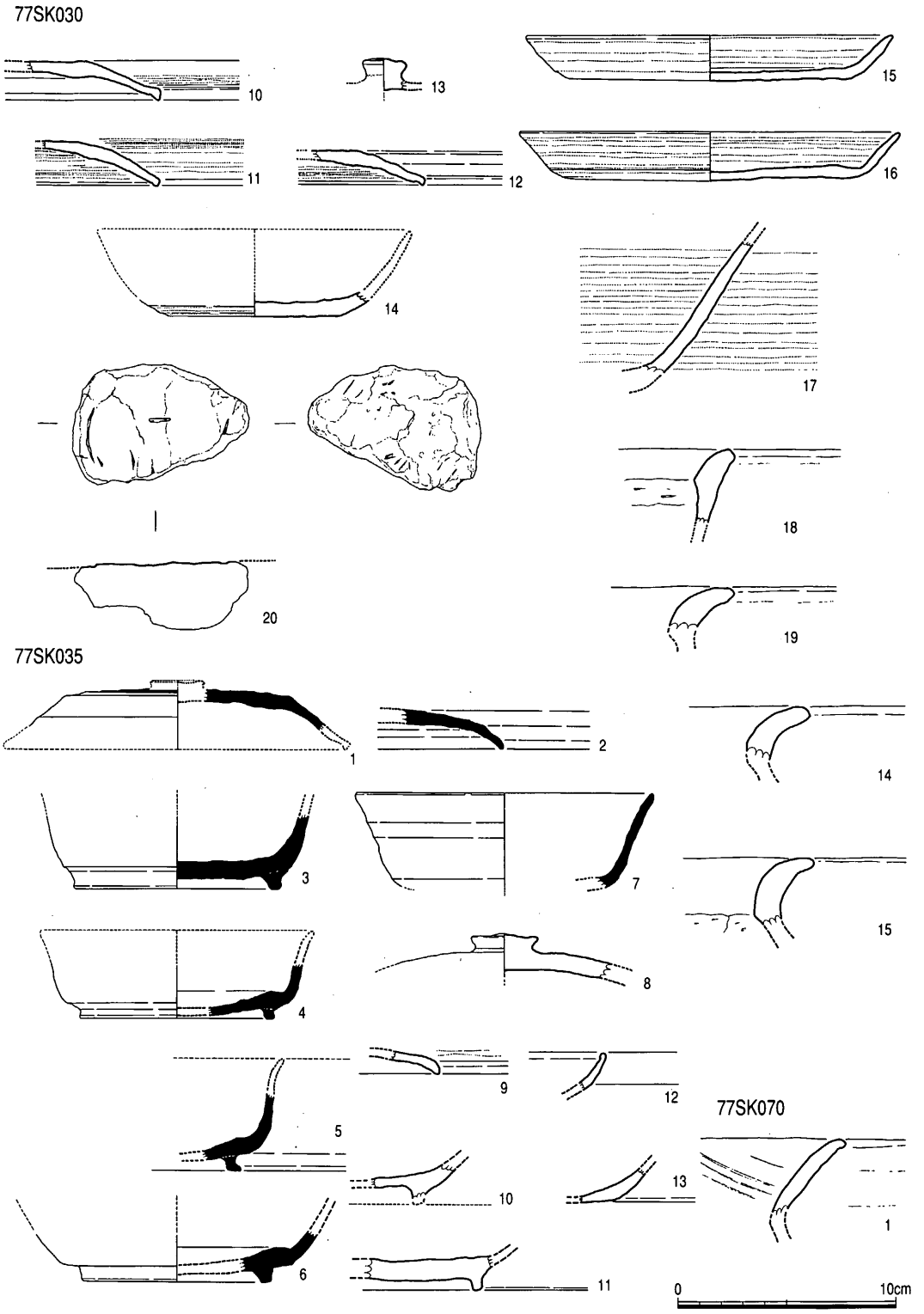


図22.77SK030・035・070出土遺物実測図（S=1/3）

坏c3（3～6）　硬質、軟質の両者がある。4の内底部には墨痕跡がある。

坏（7）　やや軟質で黄灰色の坏aないしcの口縁部である。

土師器

蓋c（8）　背の低い擬宝珠のつまみを持つ蓋で色調は赤褐色系。天井部のミガキaは間隔をあけて施される。

蓋3（9）　端部がゆるく折れ曲がる口縁を持ち胎土は赤褐色系の色を呈す。

坏c3（10・11）　10は高台端部が磨耗して形状が変化している。基本的に褐色系の焼きで11にはミガキaが施される。

皿b（12）　薄い赤褐色系の口縁で端部が内側に屈曲する。

坏a（13）　色調は赤褐色系で内側芯の部分は灰色がかっている。

77SK065(S-65)出土遺物（図23）

緑釉陶器

椀（1）　口縁端部が外反する乳灰色の胎土を持つものに、うすく透明な釉の皮膜が部分的に残存する。

黒色土器

椀（2～4）　それぞれに接合しないが、乳灰色の胎土の表面が一部橙色化する状況などから同一個体である可能性もある。体部外面下半は回転ヘラケズリによって整形され、内面は手持ちのミガキが残る。A類。

須恵器

坏（5～7）　坏aないしcの口縁部と思われる。6は端部にむかって膨らみaの可能性が高い。

皿（8）　小型の皿で口縁端部がゆるく外反する。底部はヘラキリまま。

甕（9・10）　外面には平行する刻みを持つタタキが施され、10は当て具も平行刻みになっている、また、この破片は胴部下半の屈曲部に当たり、当て具の方向も帯状のヨコ方向のナデを境に変化している。9の口縁は先端に向かって細い。

土師器

蓋（11）　口縁端部がゆるく折り曲げられる。天井部は回転ヘラケズリが施される。

椀c（12～15）　発色が乳灰色系の胎土を持ち、高台は短く外反する。15の底部外面には「本」字がヘラ描きされる。

坏d（16）　赤褐色の胎土を持ち、内外面にミガキaが施される。

坏a（17～21）　底部はヘラキリ後軽くナデられる。底部は割り合い平坦である。18は褐色系、他は乳灰色系の発色。19と20は口縁端部がゆるく外反する。

鉢（22）　屈曲して直線的に外反する口縁を持つ。鉢になるものと思われる。

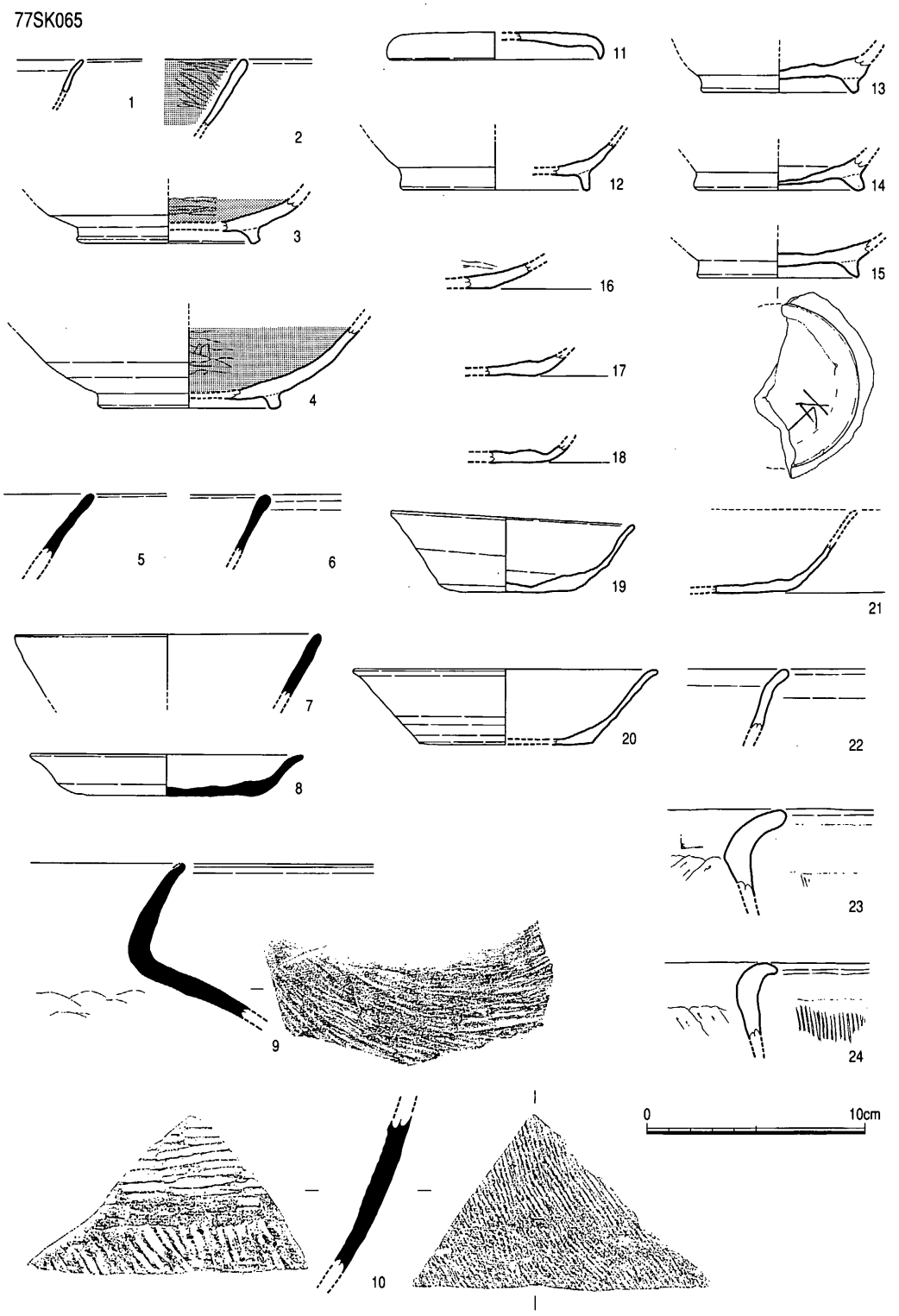


図23.77SK065出土遺物実測図（S=1/3）

甕a（23・24）　屈曲部からカーブを描いて外反する。24は先端に向かって細い。

77SK065(S-96)出土遺物（図24）

須恵器

蓋（25～27）　口縁の端部がくぼみや沈線で表現される。26はゆるいS字になる。

甕（28）タタキ、当て具痕跡ともに平行する刻みを持つ。

土師器

坏（29～31）　30と31は底が平坦なaタイプ。30は乳白色で他は褐色系の発色を成す。

椀c（32）　短く先端が磨耗した高台を持つ。色調は乳灰色の発色。

甕a（33～35）　33と34は口縁の中央が一旦膨らんで先端に細くなる形状を持つ。34の内面屈曲部はケズリの後にナデがかぶっている。35はゆるく外反する。

石製品

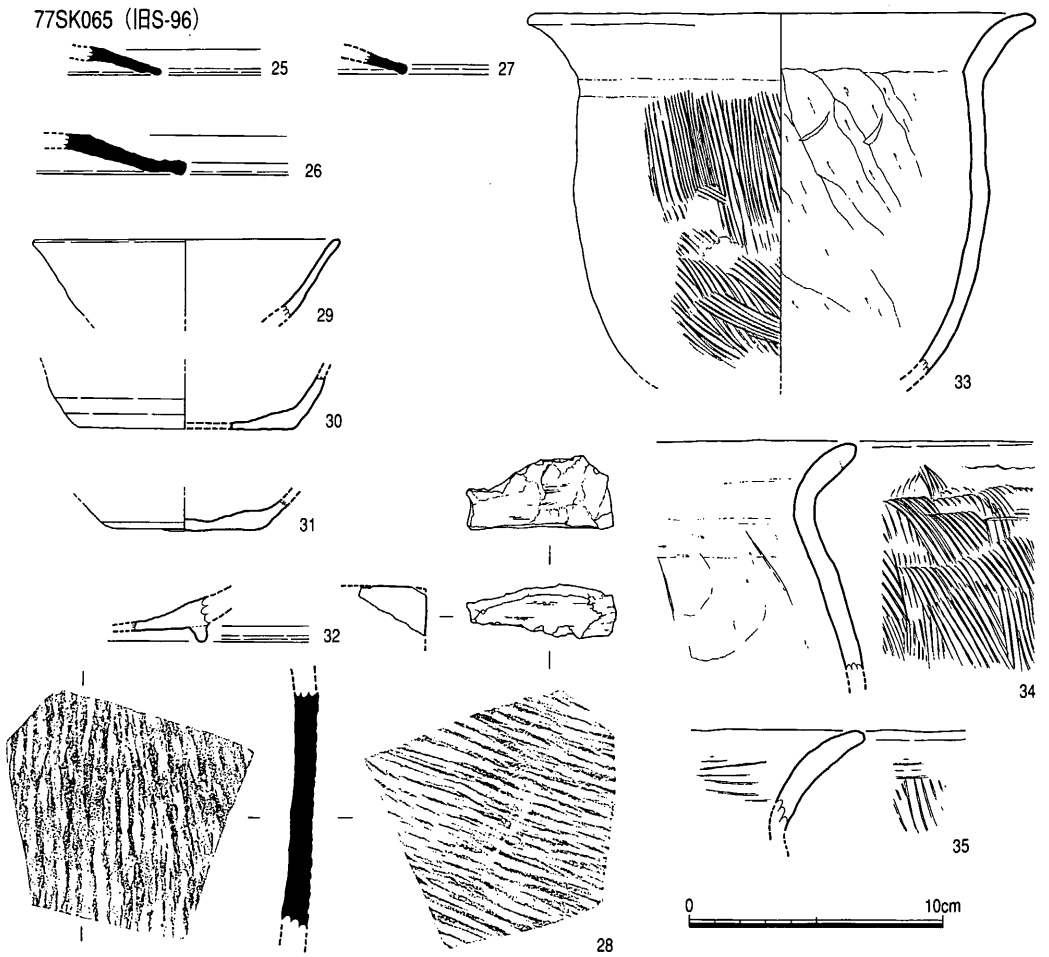


図24.77SK065（旧S-96）出土遺物実測図（S=1/3）

砥石（36）　天草砥石のようなキメの細かな堆積岩で側面が欠損後に利用され、未発達な滑面を形成する。

77SK070出土遺物（図22）

土師器

甕（1）　「く」字形の口縁部分で、全体に薄手である。先端部が外側に短く屈曲する。

6）土層出土遺物

茶褐土出土遺物（図25）

須恵器

坏蓋（1）　かえりを持つ蓋で天井部は切り離しのまま。ヨコナデは比較的丁寧である。灰色を呈し硬質。

甕（2）　上面に平坦面をもち、く字に屈曲する口縁を持つ。この口縁の形状は同形式の中でも後出的な要素である。

土師器

鉢c（3）　胎土が明るい褐色系で内外面にミガキaが施される。体部は斜め上方に延びている。底部は外面がきれいな回転ヘラケズリを施しており平たい形状を成す。

甕a（4）　肩付きで口縁が一旦くびれヨコ方向の条線を残すナデによって仕上げられる属性を持つ甕で、口縁部から肩にかけて赤色顔料を塗布している。7世紀に属す土器であろう。

製塩土器

焼塩土器(5) 胴の短いII型に相当する。くすんだ茶褐色を呈し内面に布の圧痕が見られる。

表土出土遺物（図25・26）

須恵器

坏c3（1）　口径の小さな坏で外よりに高台が付けられる。

円面硯（2）　脚部は方形の連続した透かしが入るもので、上面は滑面になっている。焼成は硬質で良好。

壷(3～5)　3は上位に最大径をもつ球形の胴部をなしてやや長めの高台が付く。胴部下半は回転ヘラケズリが施される。底部はやや突出気味。焼成は硬質で良好。5はやや焼きが甘く軟質で芯はうすい赤褐色を呈す。

高坏（6）　裾端部がS字に屈曲する。内面に「中」の文字を墨書する。

甕（7）　口縁端部が尖りながら短く垂下するもので、焼成終了の時期に酸化して表面に赤褐色の皮膜が被ったようになっている。ただし端部付近は磨耗して下地が露出している。

土師器

甕（8～10）　8は胴部より口縁が小さな甕で口縁の端部はやや尖り気味でヨコ方向の条線を

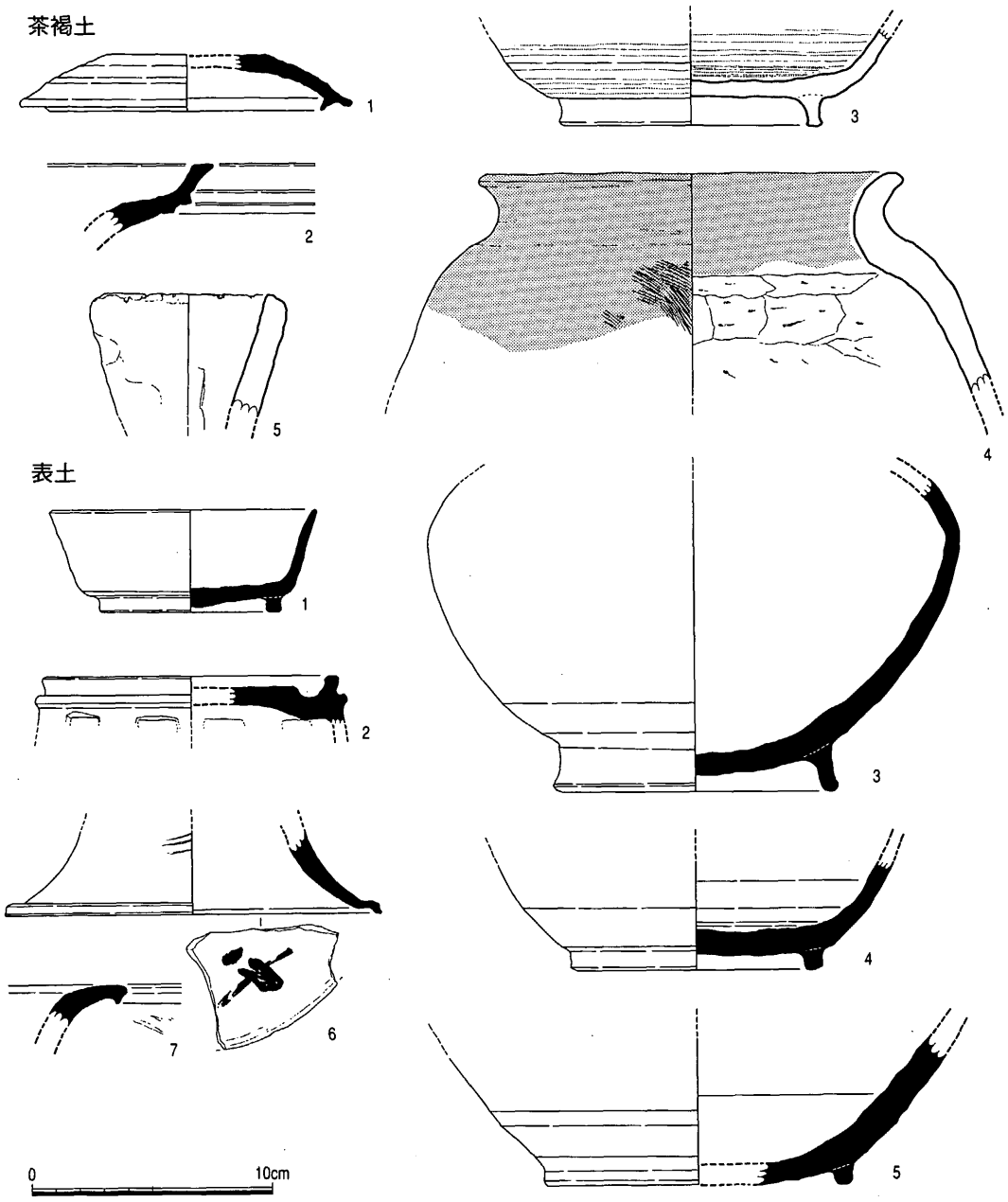


図25.茶褐土、表土出土遺物実測図（S=1/3）

残すナデによって仕上げられる。9は直線的に延び端部に平坦面をつくる形状を成すもので、口縁外面の上部まで被熱によって器表面が赤色化している。10は口縁端部の外反りがきつく口縁内側はヨコ方向のハケ仕上げで処理される。

すり鉢（19）　口縁端部は撥形に厚みを持ち、端部は凹面を成す。中世後半期の所産と考えられる。

表土

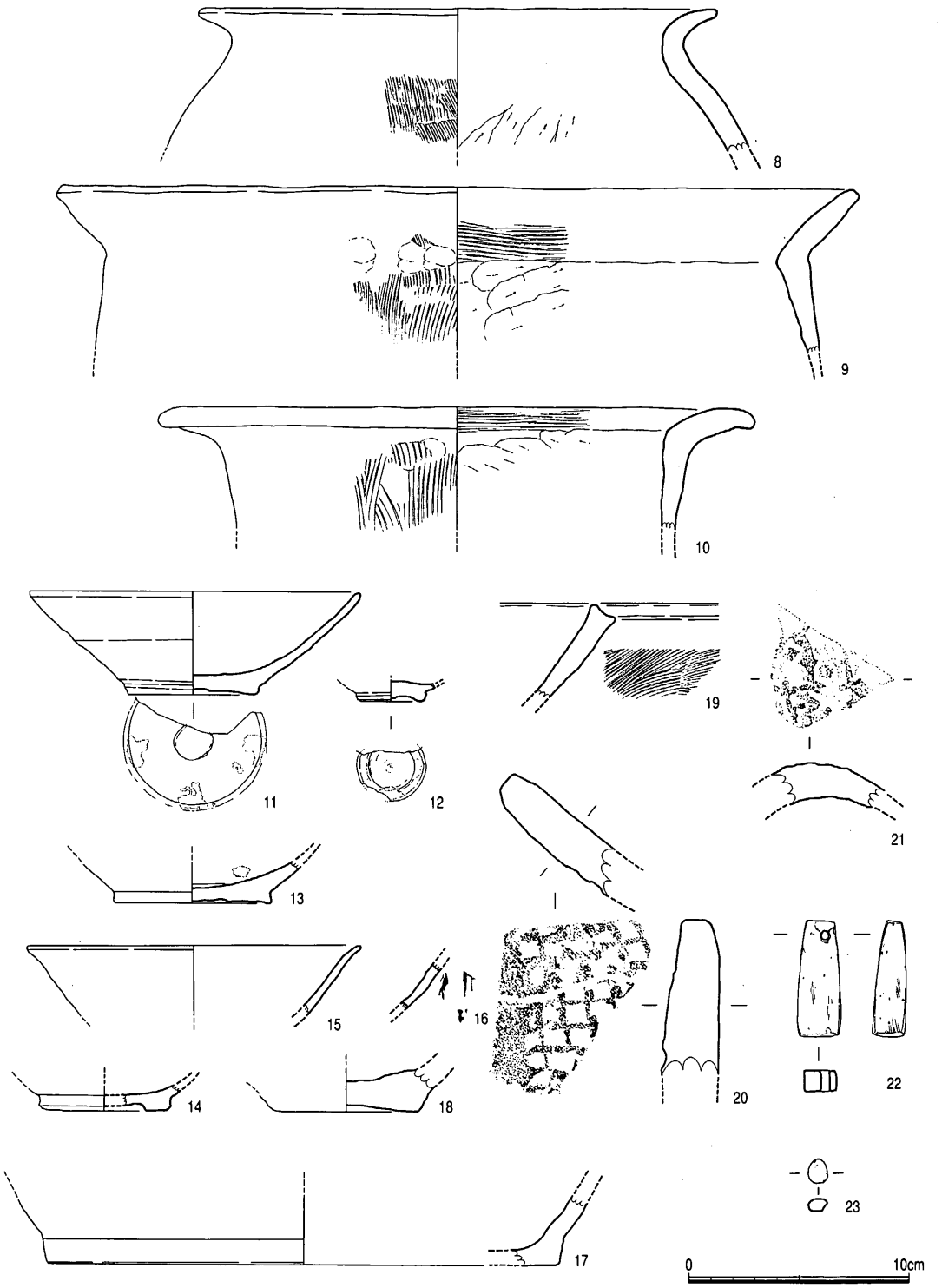


図26.表土出土遺物実測図（S=1/3）

越州窯系青磁

椀（11・13）　全面施釉で底部に目跡が四方にあったと考えられる。内底にはハリ跡のような小さな円形の釉の欠損が目跡として見られる。釉はくすんだオリーブ色の色調。I類。

小椀（12）　ケズリ出しによって輪高台を造り出す。くすんだオリーブ色の釉が全面に施され、底部に白色の目跡が高台上の3箇所に付着、残存する。I類。

白磁

椀（14）　ケズリ出しの輪高台を持ち、施釉後に高台畳付け部分の釉が拭き取られている。内底面に特に傷が多い。I類。

緑釉陶器

椀（12・13）　12の胎土は、うすい灰色の須恵器質で芯の一部が酸化して赤色化している。高台は蛇の目のケズリ出し高台で縁が一段高くなっている。緑黄色のうすい釉が全面施釉される。13は土師器質のうすい橙色の胎土に緑色の不透明な釉がかかる。口縁端部は外反する。

器種不明（16）　土師器質のうすい橙色の胎土にうすい緑色の透明な釉がかかり、部分的に濃い緑色の釉が固まり一部が一つの方向に流れている。緑釉緑彩か。

陶磁器

黄釉盤（17）　平坦な底部から斜め上方に体部が立ち上がる。胎土は須恵器質で灰色の小斑が見られる。釉は緑黄色を呈す。

縄文土器

深鉢（18）　乳灰色の胎土に底部から体部にかての一部に黒斑が入る。底部は浅い上げ底状を成し、よこ方向に開く体部につづく。後晩期の鉢の底部と考えられる。縄文に属する遺物に雁叉式の抉り込みが深い黒曜石製の石鏃が出土している。

瓦

平瓦（20）　正格子のタタキを持つ平瓦で、端部はヘラケズリで面取りを施す。土師器質でやや軟質。

丸瓦（21）　「平井」銘のタタキの部分破片。須恵質で硬質。

石製品

権（22）　孔質の属性を持つ火成岩製で26.1gを測る。

碁石（23）　多少透明感のある長石製で特に加工痕跡が見られる箇所はないが、現場調査時に同質のものが他に出土しておらず、可能性があるというレベルで報告している。

e.小結

遺構的には掘立柱建物を中心とし竪穴住居を含む居住施設と広場的な空間、廃棄土坑からな

る古代の生活空間が検出された結果となった。

時期的には7世紀第四半期以降に77SB050主殿+77SB010倉という構成を主体とする屋敷地的な土地利用が始まり、８世紀には目隠し壁77SA095を伴う77SB100周辺を主殿とする構成に移行する。この時期には西側に77SB080、085の脇殿的な要素を持つ建物とその北側に77SK025、035、030という廃棄空間を伴っている。南側に77SB040という東西棟の建物があり、77SB080、085の東側は８世紀中においては広場的な空間であった可能性も考えられる。しかし、9世紀になるとこの広場空間に廃棄土坑77SK065、070が形成された。

建物群からは８世紀を中心とする土器片しか出土しておらず、その中での建設の順や共存状況については客観的なプランを提示できない。しかし、主殿と脇殿とした建物の同等規模での建替えが想定される状況は上記のような空間構成が一定期間（8、9世紀の間）踏襲されたものとして理解される。建物群の方向性は北に対して東に振って設定されるが振れは3度代後半を中心とし、約1度前後の幅が認められる（表26・27参照)。

竪穴住居はカマド周辺の出土遺物から8世紀でも前半の頃に位置付けられるが、先の掘立柱建物群からは距離を置いて設定され、副次的な要素として捉えられる。以前から指摘されている「産屋」や「竈家」ないしは作業施設としての性格付けで理解されるのかも知れない。倉と考えられる77SB280も同様に主要空間から多少距離をおいている。

そのさらに西側に廂を持つ77SB060があり西に展開する次の主要空間があるのかも知れない。この東西の建物群間には柵などの囲繞施設はなく、開放的な様相が指摘される。

出土した遺物を概観すると須恵器、土師器からなる供膳具と煮炊具としての甕という一般的な生活空間的なセットが見られるが、土師器の供膳具においては条坊外の集落に見られる外底面にケズリを多用する在地伝統的な坏や皿が欠落している様相が指摘される。甕は7世紀的な口縁径が胴部より小さく強いヨコナデで仕上げられるものから、口縁径が胴部より大きく、口縁内側がハケで仕上げられる8世紀的な甕が出土し、時期的な推移があったことが見られる。須恵器には貯蔵具としての甕と坏、皿類の一般的な供膳具が出土するが、墨書土器と共に円面硯が出土している。建物群内の家政機関的な機能の中で使用されたものか。生活に係わるものとしては表土からは「権」も出土している。

平安時代は大宰府VI,VII期に相当する土師器、黒色土器と共に中国製品のI類（精製）の越州窯系青磁椀や初期の白磁が出土している。残念ながらVII期以降の古代の遺物の出土は見られず、以降は耕地化した可能性も考えられる。

古代以外の遺物には縄文時代の石鏃や粗製鉢片と中世前半期の中国製黄釉盤片、中世後半期のすり鉢片などがあるがいずれもその時期に該当する顕著な遺構は今回の調査では確認できなかった。

このように今回の発掘調査では大宰府条坊内での7世紀後半から9世紀にわたる条坊I期の段階の土地利用のありかたがモデル的に理解された。惜しむらくは8、9世紀の主体部分の東側が調査対象地外で把握できなかったこと、西側の次の空間との関係が明確にできなかったこと、以降の土地利用がどう変化したか、など残された課題もある。（山村信榮）

2.120次調査

a.調査に至る経過

調査地は、太宰府市都府楼南4丁目566-383に所在し、鏡山推定条坊案右郭十五・十六条五坊に位置している。平成3年10月に実施された平成4年度予算実施計画にて、太宰府市シルバー人材センター建設計画が厚生課を主管課として予算化されていることがわかり、急遽文化財取り扱いに関しての回答を行うとともに、発掘調査についての予算化および期間について協議に入った。当該地は旧字市ノ上にあり、大宰府条坊跡内の西市に推定されている地域にあたっていることもあり、発掘調査が必要であるとの回答を行った。協議の結果、平成4年度まで行う可能性を示唆しつつ平成4年1月より発掘調査を開始した。調査期間は、平成4年1月9日～同年3月31日に行った。開発対象面積は、1194.2㎡、発掘調査面積は1000㎡を測る。発掘調査は、中島恒次郎が担当した。

調査の結果、条坊痕跡および掘立柱建物などの成果が得られたため、当初建設予定であった敷地北側への建設計画を変更し、遺構の希薄であった南側への建物建設を行っている。

b.基本土層（図35）

調査前状況は、すでに造成されており、現地表標高から約1.00mほどが造成に伴う盛土であった。これら造成に伴う盛土を除去すると耕作地であった時の旧耕作土が約0.3mほどあり、旧耕作土を除去すると、遺物を包含する灰茶黒色土、茶黒色粘質土、灰色砂が堆積していた。堆積物の厚さは平均して約0.2mほどで、この遺物包含層を除去すると、遺構が検出できた。遺構上位に堆積している遺物包含層は、調査区西方へゆくにつれて粗粒化する傾向にある。遺構検出面には凹凸があり、一部遺構と間違えて包含層の取り残しを処理した箇所もある。これについては、遺構番号台帳に遺構の別を記載している。

c.遺構（図27～34）

今次調査にて検出した遺構は、性格不明な凹み状の遺構もしくは小穴が多く、遺構の配置を考える際に苦慮した。主要な遺構についてのみ詳述し、遺構の埋土および性格については、別表として記載した遺構番号台帳を御参照いただきたい。

検出した主要な遺構は、掘立柱建物跡3棟、溝11条である。特に溝遺構については、大宰府条坊跡の区割り痕跡と考えられる遺構を含んでおり、これまで検出された条坊痕跡としては、規模の大きな溝がある。

1）掘立柱建物

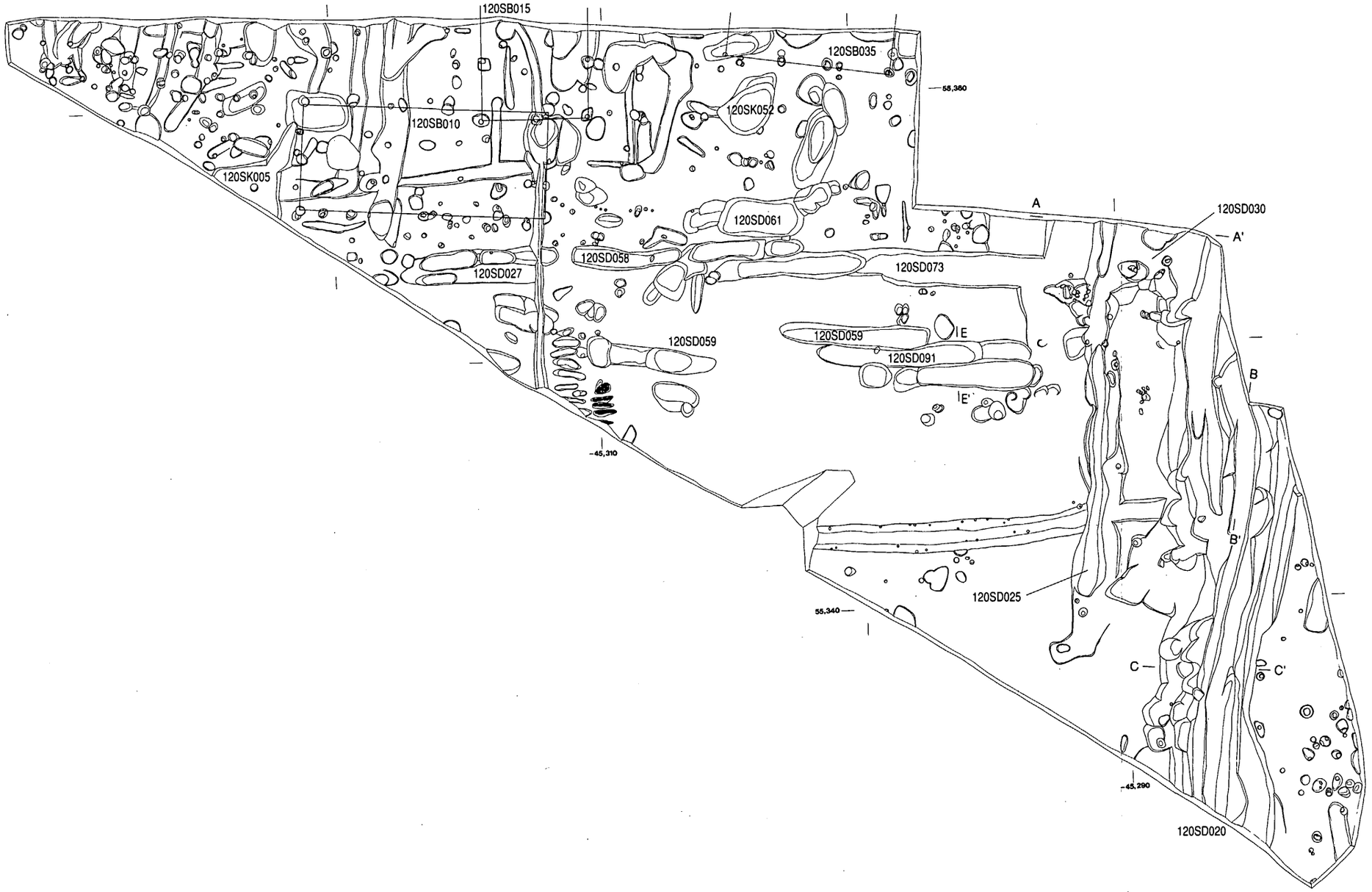


図27.条120次遺構配置図（S=1/200）

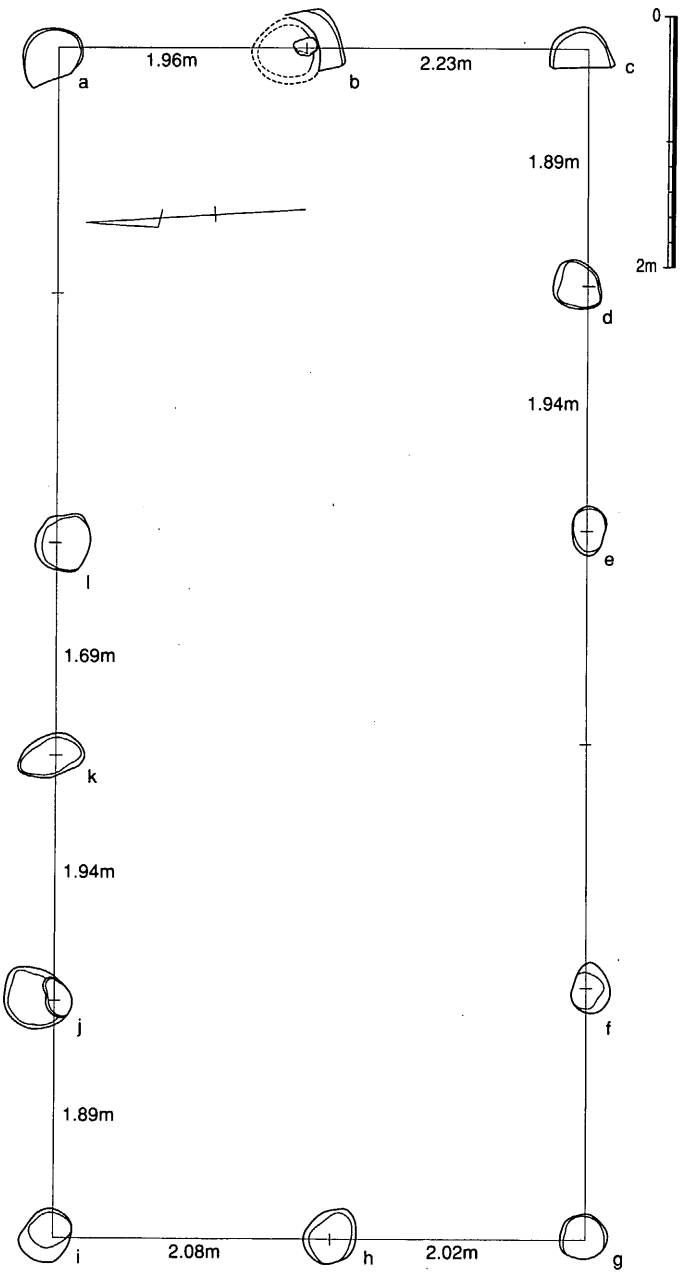


図28.120SB010遺構実測図（S=1/60）

『大宰府条坊跡』XIV

調査区中央に集中して検出できたが、全貌が明らかなものは1棟にすぎない。

柱間距離は、柱痕跡が残存しているものに関しては、柱中心間の距離を計測し、柱痕跡が残存していなかったものに関しては、柱掘り方の中心で計測している。建造方向については、梁行方向で計測すべきであるが、規模不明確なものがあるため、梁行および桁行方向を問わず、全て座標南北軸に対し小数値をもって表現している。したがって、桁行の方向をもって算出した数値については、90°を加算して算出していただきたい。

包含層および検出遺構中から目立った瓦の出土が確認できていないことから、瓦葺き建物であった可能性は極めて低い。

120SB010（図28）

調査区のやや西よりに検出した建物で、梁行5間×桁行2間の東西棟で、数基ほど柱穴痕跡

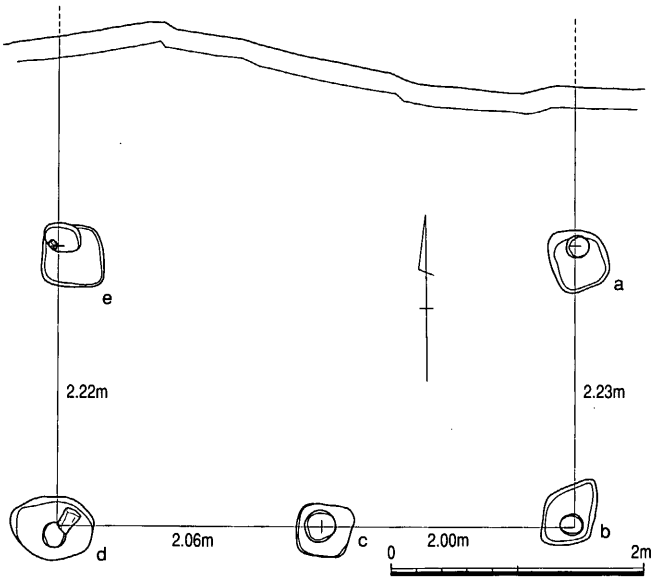


図29.120SB015遺構実測図（S=1/60）

を欠失している。残存標高からの柱の深さが、平均して約0.2mほどであるため、後世の削平によって欠失した可能性もある。各柱穴には柱痕跡は明瞭に残存しておらず、抜き取られた可能性もある。柱間は平均で1.90mほどであるが120SB010lおよびkのように短い場合もある。また南梁行線上には柱間が一定していないため、建物柱痕跡からは除外したが、穴底に柱を支える根石を埋置したものもあり、建物の柱穴である可能性は否定できない。

120SB015（図29）

調査区中央北寄りに検出した建物跡で、調査区外へ展開しているものと考えられることから、遺構規模の詳細については不明である。柱間の数値から東西方向が狭く、桁行を東西にする可能性がある。したがって南北棟の建物の可能性を考えておく。各柱穴には柱そのものないしは柱痕跡が残存していた。120SB015dの柱穴については、柱を支える根石的なものが埋置されているが、柱痕跡の最下部には何も残存していなかったことから、建物柱全てに根石を埋置する建物構造をとっていなかったものと考えられる。

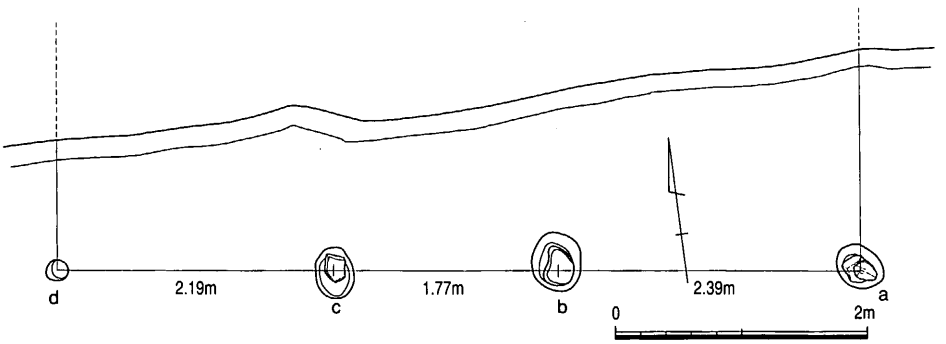


図30.120SB035遺構実測図（S=1/60）

120SB035（図30）

調査区中央北寄りに検出した柱列で、1基を除く柱穴に根石と考えられる石が埋置されていることから、単に柵ないしは塀としての構造物ではなく、建物と解した。建物と解した場合、南北に付随する柱穴が検出できなかったことから、調査区北側へ展開するものと推定される。この場合、先の120SB015と異なり、梁桁の方向を考える手だてが無いため、全体規模については不明確である。したがって、梁桁方向は不明ながら、3間×？の建物と推定できる。

2）溝

溝遺構に関しては、一般的に溝と性格付与できる長い形状のものと、土坑の連なり状態で個々分断されているが、直線状に配列するものの二種が存在している。さらに検出幅約5.0mほどの溝も検出しており、通常の排水溝とは考え難い遺構も存在していた。

120SD020

調査区東端に検出した南北溝で、検出幅約5.35m～3.46mを測り、深さ0.98m程度を測る。また溝東側には2段掘り様の断面形状を有しており、約3.22m～2.00mの幅を測る。溝北部では、後述する120SD025および120SD030と錯綜し一条の溝として調査区北側へ展開してゆくものと考えられる。これら三条の溝は前後の関係として把握したが、通常条坊内で検出する条坊痕跡としての溝遺構とは性格が異なっているものと考えられる。また溝の北部には横断するように14基の杭列が残存しており、堰として機能した可能性はある。ただしこの杭列は、溝に中粒砂ないしは細粒砂を堆積させる流れがあった時点では打ち込まれていなかったようで、溝の開削された当初の面までは達していない（図35）。中粒砂およおび細粒砂が堆積した後に打ち込まれ、上位に堆積している堆積物が土質のものであることから、開削当初の流速から流れが衰え、あまり排水機能を果たさなくなった時期に打ち込まれたものと考えられる。ただし全く流れが途絶したわけではなく、3層上面に古流向を示すうねりが観察できることから、2層堆積時には再び流れが復活したものと考えられる。先の杭の配列を堰として考えた場合、この2層堆積時に打ち込まれた可能性が高い。このうねりの形状から南から北への古流向が復原できる。この遺構からは、古環境復原のための試料として、花粉分析試料を採集している。

120SD025

調査区東端に検出した南北溝で、先述した溝北部で120SD020に切られている。溝幅はほぼ一定しており、0.6mを測り、深さは約0.26mを測る。木質を多く混入する灰茶色粘質土が堆積しており、先の120SD020が流れを想定できるのに対し、この遺構は流れが想定できない。したがって、通常条坊痕跡として検出される溝で、一方が排水機能を持ち、他方は単に区画施設としての機能を有していたものと考えられる。このことを傍証するように、120SD020は調査区外へ延びるのに対して、この遺構は調査区南側で欠失している。

120SD027

調査区西側で検出した遺構で、東西に延びる土坑状を呈している。後述する120SD058および120SD092に連続する一連の溝と考えられる。調査時は便宜的にS-27・28・29と分けて遺物を取り上げたが、黒色土の単一層から構成されていることから、同一遺構として解釈した。遺構の状況から、後述する120SD059ならびに120SD091と対になる条路痕跡と考えられる。

120SD030

調査区東端に検出した遺構で、遺構形状については東西を先述した120SD020および120SD025によって切られていることから定かではない。また南側についても本来あった遺構が欠失したという状況ではなく、検出した範囲内で留まっていたものと考えられる。したがって、120SD020および120SD025に挟まれた空間で、120SD020および120SD025を合わせた遺構幅で、調査区北側に開放された遺構であったと考えられ、大規模な人工流路の堆積層である可能性もある。中粒から粗粒砂が互層状に堆積しており、流れを想定できる堆積層であった。この遺構からは、木製人形が出土している。

120SD032

調査区西側に検出した遺構で、南北に延びている。調査区南側では欠失しており、全体様相としては把握できない。溝幅は、1.00m、残存する深さは0.13mを測る。先述した120SD025からは約28mほどしか離れていないことから、条坊痕跡ではなく敷地区画のための施設の可能性が高い。

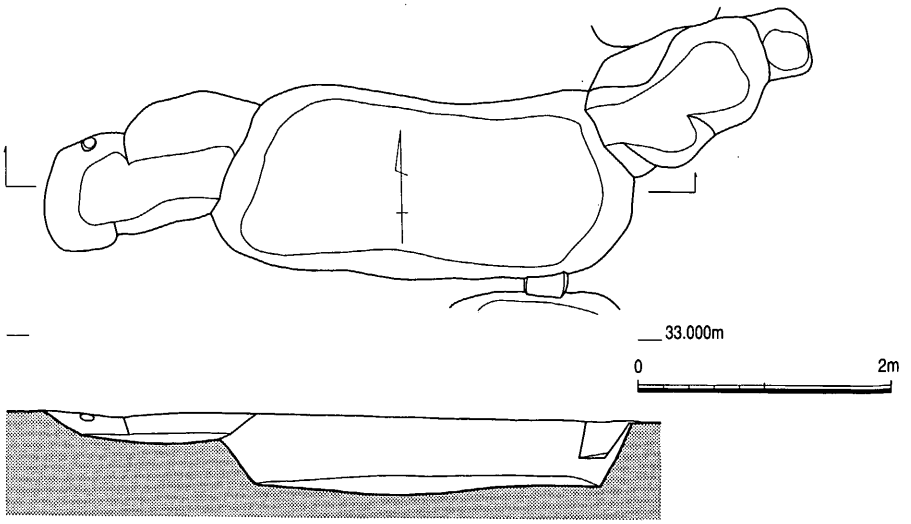


図31.120SD061遺構実測図（S=1/60）

120SD058

調査区中央で検出した東西の土坑で、先述したように120SD027および120SD073と一連の溝を形成するものと考えられる。遺構幅は0.98m、残存する深さは0.22mをそれぞれ測り、長軸長は5.44mを測る。遺構内には黒茶色土が堆積していた。

120SD059

調査区中央に検出した土坑状の遺構で、120SD091と切り合い関係にあるものの、一連の溝遺構であると考えられる。遺構幅は0.81m、残存する深さは0.14mを測り、長軸長は5.6mを測る。120SD091に切られている。堆積土は黒茶色土が堆積していた。

120SD061（図31）

調査区中央に検出した遺構で、遺構形状からは土坑状を呈している。しかし、北に隣接する120SD066を介して北方へ展開することを考えると溝遺構である可能性は高い。長軸長3.22m、短軸長1.44m、深さ0.62mを測る長土坑に東西両側に小規模な土坑が付帯する形状を取る。付帯する土坑を加えると長軸長は6.21mになる。遺構内には黒茶色土が堆積しており、花粉分析試料として土壌試料を採集した。分析の結果、稲花粉を多量に含んでおり、稲花粉の飛散する時期に堆積したか、稲花粉を多量に埋没させるものが土坑内に保管されていた可能性がある。

120SD066

調査区中央に検出した遺構で、先述した120SD061と一連の溝遺構であると考えられる。長軸長3.10m、短軸長1.26m、残存する深さ0.37mをそれぞれ測り、東に張り出す弧状を呈している。

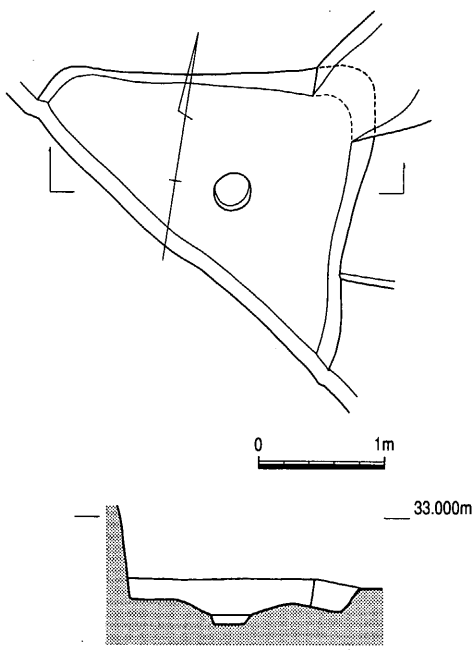


図32.120SK005遺構実測図（S=1/60）

120SD073

調査区東から西へ延びる溝遺構で、120SD058と前後関係にあるが、遺構検出状況から一連の溝遺構であると考えられる。また調査区西側では、120SD025ならびに120SD030の上位にこの遺構の堆積層がのっている。検出長は18.4m、遺構幅は1.00mを測り、残存する深さは0.49mを測る。遺構内には茶黒色土が堆積していた。

120SD091

調査区中央にて検出した遺構で、先述したように120SD059と一連の遺構であると考えられる。検出長は8.34m、幅1.21mを測り、残存する深さは0.6mを測る。遺構内には上位より黒色粘質土→やや茶色味を帯びた黒色粘質土→灰茶色粘質土が堆積しており、上位2層には緑青色粘質土ブロックが混入していた。したがって流れについては、積極的に肯定できない。

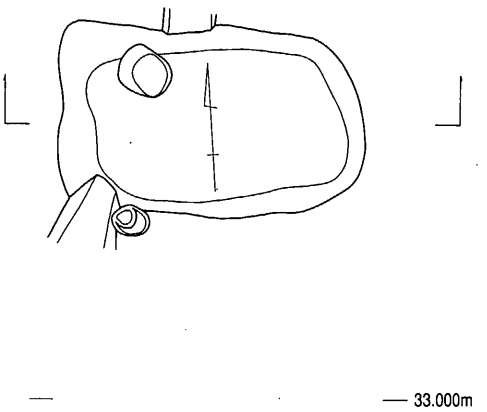


図33.120SK016遺構実測図（S=1/60）

3）土坑

120SK005（図32）

調査区南西部に検出した遺構で、調査区外へ展開することから、遺構全形については判然としない。堆積土は、上位から炭化物を多く含む黒色土→茶黒色土が堆積しており、上層には多量の遺物が廃棄行為を想定できる状況で出土した。残存する深さは、0.5mを測る。

120SK016（図33）

調査区西部に検出した遺構で、長方形の形状を呈している。120SX013に切られるが、遺構底より建物の柱穴120SB010iが検出できており、120SB010の廃絶後に形成されたものと考えられる。長軸長は2.42m、短軸長は1.52mを測り、残存する深さは0.3mを測る。遺構内の堆積土は上位より、黒色土→砂混じり茶黒色土が堆積していた。

120SK051（図34）

調査区中央北部に検出した土坑で、調査区北側へ展開することから、溝遺構になる可能性も残されている。検出長軸長は2.13m、幅は0.6m～0.85mを測り、残存する深さは0.27mを測る。遺構内には灰茶色粘質土が堆積しており、花粉分析試料として土壌を採集した。分析

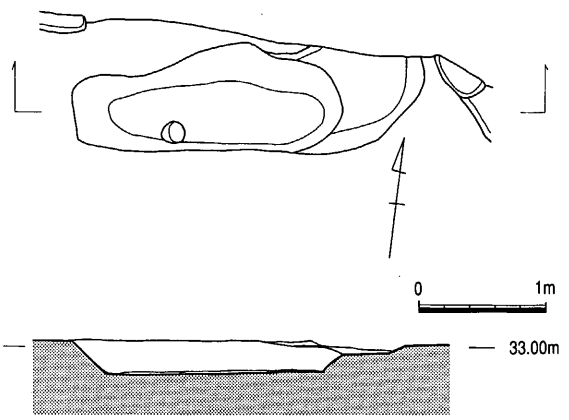


図34.120SK051遺構実測図（S=1/60）

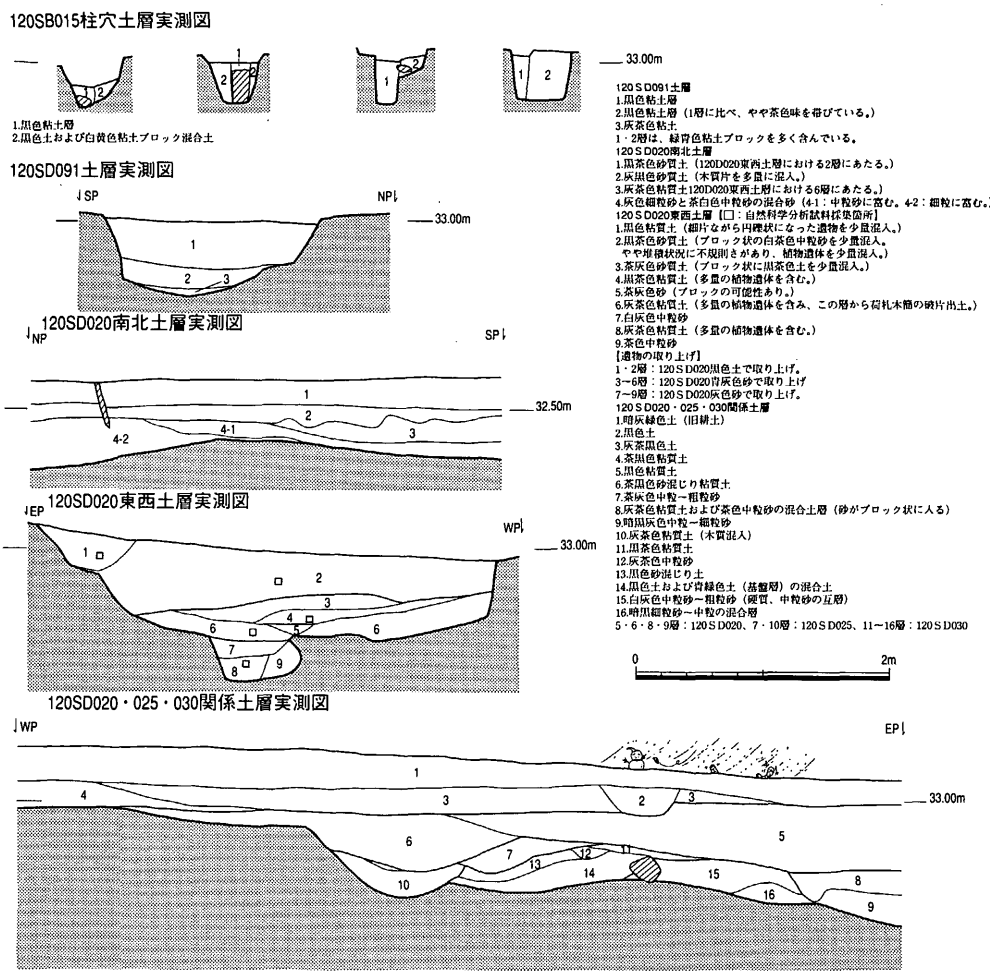


図35.条120次土層実測図（S=1/60）

の結果、花粉の残存状況は悪く、環境および遺構の性格復原には至っていない。

d.遺物

1）掘立柱建物跡出土遺物

掘立柱建物を構成すると考えられる柱穴より、須恵器・土師器などの食器の他、土錘などの土製品が出土している。食器は、奈良時代全般に渡るものが出土しているが、最も新しい型式のもので考えると奈良時代後半のものが多い。したがってこの時期に建物の建築時期の上限を求めることは可能であろうと考えられる。

120SB010出土遺物（図36）

各柱穴出土の遺物は、柱a（1～4）、柱b（5）、柱d（6・7）、柱j（8・9）、柱k（10～12）であ

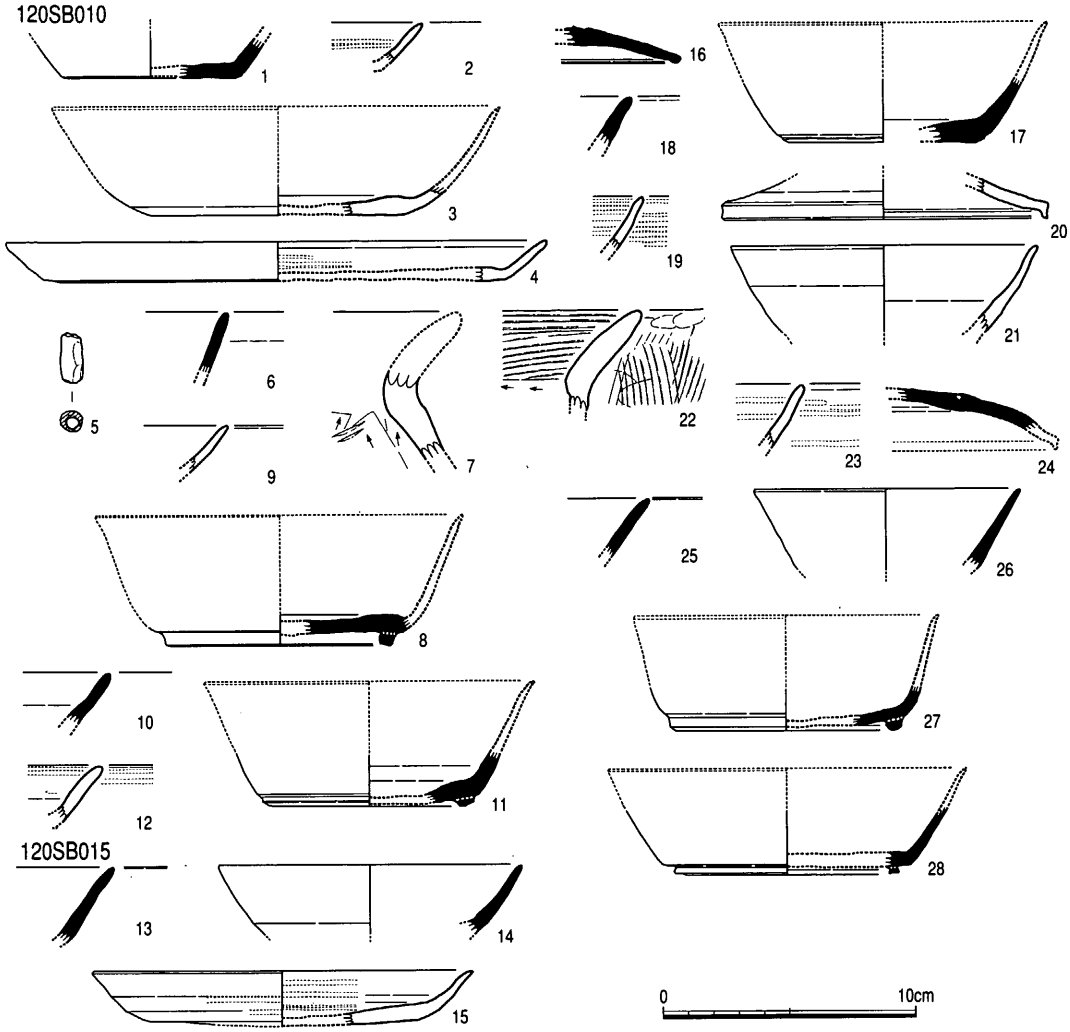


図36.掘立柱建物出土遺物実測図（S=1/3）

る。

須恵器

坏（1・6・8・10・11）　8および11は、高台を貼付する坏cで、底部と体部の境界部分に高台を貼付する11、境界部分より底部寄りに貼付する8がある。底部外面の処理が観察できる8は、ヘラ切り後丁寧なナデによって仕上げられている。1は底部のみの破片で、高台を貼付しない小坏aに該当する。底部外面の処理はヘラ切り後丁寧なナデによって処理されている。6・10は口縁部の破片のため全形は不明。

土師器

坏（3）　底部の小片であるが、体部外面下位から底部外面にかけてヘラ削りによって仕上げられている。形態が丸みを帯びていることから坏dに該当するものと考えられる。

皿（2・4・9・12）　4は、器高の低い皿で、底部外面はヘラ削り、底部外面を除く全面を横方向のミガキによって仕上げている。2・9・12については、口縁部の破片のため詳細は不明。

甕（7）　頸部の破片で屈曲具合から胴張りのある形態を有するものと考えられる。体部外面は刷毛調整の後丁寧にナデられている。

土製品

土錘（5）　小破片で、全体に指頭圧痕が残存し、棒状のものに粘土を巻き、長軸方向のナデによって調整されたものと考えられる。残存する重量は、1.20gを測る。

120SB015出土遺物（図36）

出土柱穴は、柱a（13～15）、柱a掘り方（16～18）、柱b（19～22）、柱c柱痕（23・24）、柱d（25～28）である。

須恵器

蓋（16・24）　16は、天井部から口縁部にかけての破片で、天井部外面はヘラ切り未調整で、口縁端部外面は丸く、口縁部内面に凹線状の窪みが形成されている。24は天井部のみの破片で、口縁部形状については不明。天井部外面はヘラ切り後丁寧にナデられている。

坏（13・14・17・18・25～28）　高台を貼付する坏c（27・28）、高台を貼付しない坏a（17）があり、他のものは口縁部の破片のため形式は特定できない。27は底部と体部の境界は不明瞭で、体部の立ち上がりはきつい。28は底部と体部の境界は明瞭で、体部は外方に開く。17は底部を粗くヘラ切りされており、体部は外方に開く形状を有している。

土師器

蓋（20）　形状から高坏脚の可能性もある。口縁端部外面の処理は丁寧に面取りされている。

坏（19・21・23）　19および23は内外面を横方向のミガキによって仕上げられている。21は内外面ともに横ナデによって仕上げられている。いずれも破片資料のため形式特定には至っていない。

皿（15）　体部外面下位から底部外面にかけてヘラ削りされるもので、底部外面以外の全面を粗い横方向のミガキによって仕上げている。

甕（22）　頸部から口縁部の破片で、内外面を刷毛によって調整している。頸部以下の内面は横方向のヘラ削りをしている。

2）土坑出土遺物

今回の調査では、一括廃棄等、極めて時間の短い行為を想定できる遺構として、120SK005があり、この遺構からは緑釉陶器の破片が出土している。細片のため器種ならびに生産地の特定に苦慮し、課題を残す結果となっている。他の遺構については、時間軸上で長短はあるが自

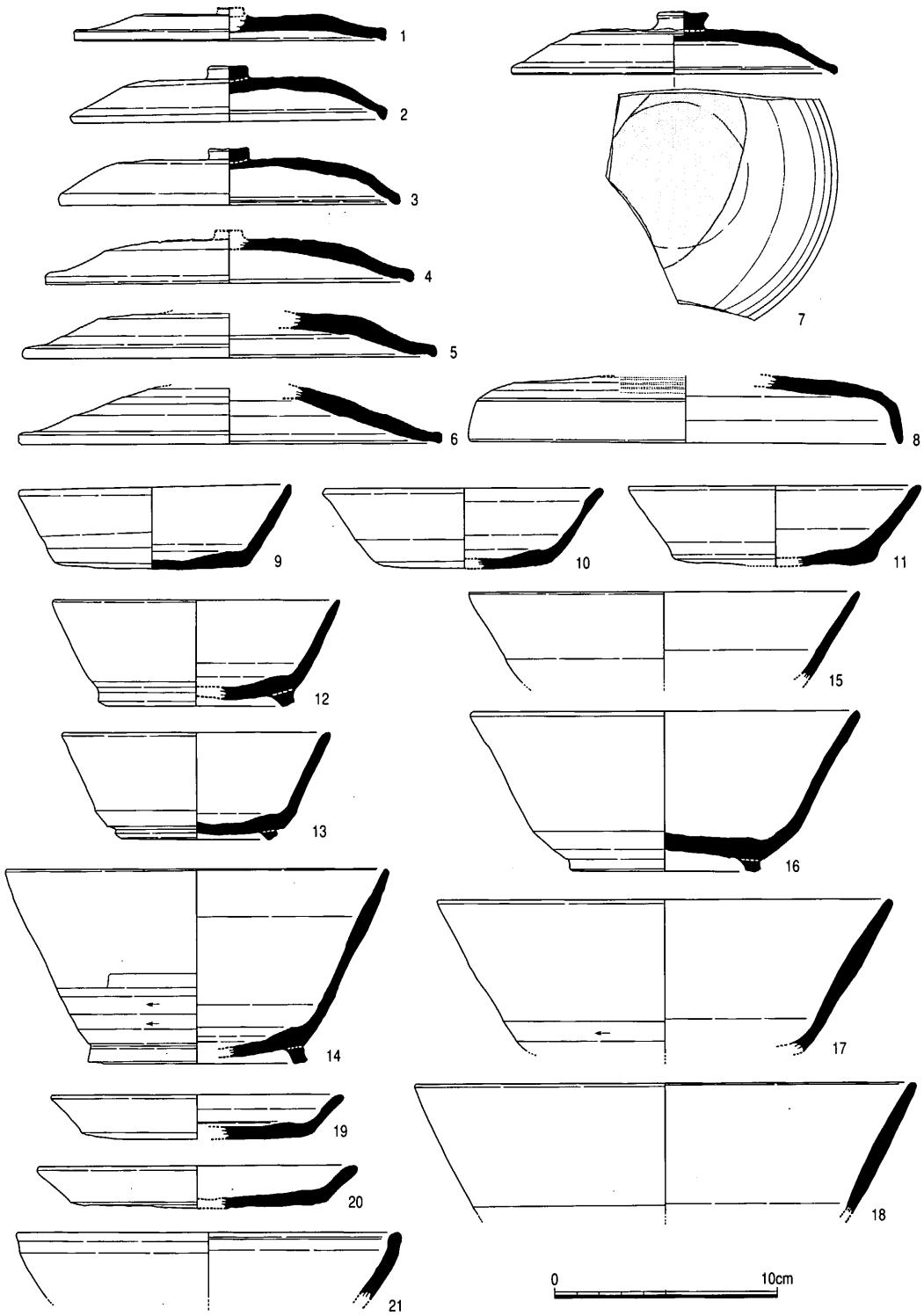


図37.120SK005黒色土出土遺物実測図（１）（S=1/3）

然堆積による土坑埋没が考えられる遺構であった。

120SK005出土遺物（図37～41）

この遺構は、下位から茶黒色土→黒色土と堆積しており、上位の黒色土から遺物が出土している。出土状況は、一括廃棄状態で出土しており、器種についても供膳具・煮炊き具など多器種にわたって出土している。

須恵器

蓋（1～8）　1～4・7はつまみ貼付ないしは貼付が推定できるもので、口縁部を断面三角形につくり出す蓋c3に該当する。いずれも天井部外面の処理はヘラ切り後、精粗の別はあるがナデによって仕上げられており、口縁端部外面は、1が丁寧に面取りする以外は、粗くナデられ丸みを有している。7は天井部内面に擦り痕跡が観察でき、硯に転用された可能性がある。8は、大形の皿の蓋と考えられるもので、天井部外面を回転ヘラ削りの後、ミガキaによって調整している。

坏（9～13）　高台を貼付しない坏a（9～11）と、高台を貼付する坏c（12・13）がある。底部外面の処理は、いずれもヘラ切り後ナデによって仕上げられており、底部から体部への開きは大きい。

椀（14～18）　器高が高いものないしは、高いと判断できるものを椀とした。全形の判断できるものは14および16であるが、いずれも体部下位を回転ヘラ削りによって仕上げているが、14は底部外面までをヘラ削りしている。

皿（19・20）　底部から外反気味に体部へ移行するもので、底部外面の処理はヘラ切り後粗いナデによって仕上げている。

鉢（21）　口縁端部内面にやや内傾する平坦面を形成するもので、口縁部の破片であるが鉢と判断した。体部外面は回転ヘラ削りによって調整されており、鉢aに該当する可能性もある。

壺（22）　頸部から口縁部にかけての破片で、全形については判然としない。頸部内面には接合のための指頭圧痕が観察でき、還元がやや不良である。体部外面には格子叩き痕跡が観察できる。

土師器

坏（23～36・39）　体部外面下位から底部外面までを回転ヘラ削りし、体部形態が丸みを帯びている坏d（23～33・35・36）と、底部外面をヘラ切りするのみで体部形態も直線的な坏a（34）、さらに高台を貼付する坏c（39）がある。坏aとした34以外は、最終調整に精粗の差はあるもののミガキaを用いており、精製品の印象を受ける。ただし底部外面まではミガキは及んでいない。また坏cとした39は、坏dに高台を貼付したものであり、底部外面に墨書が観察でき

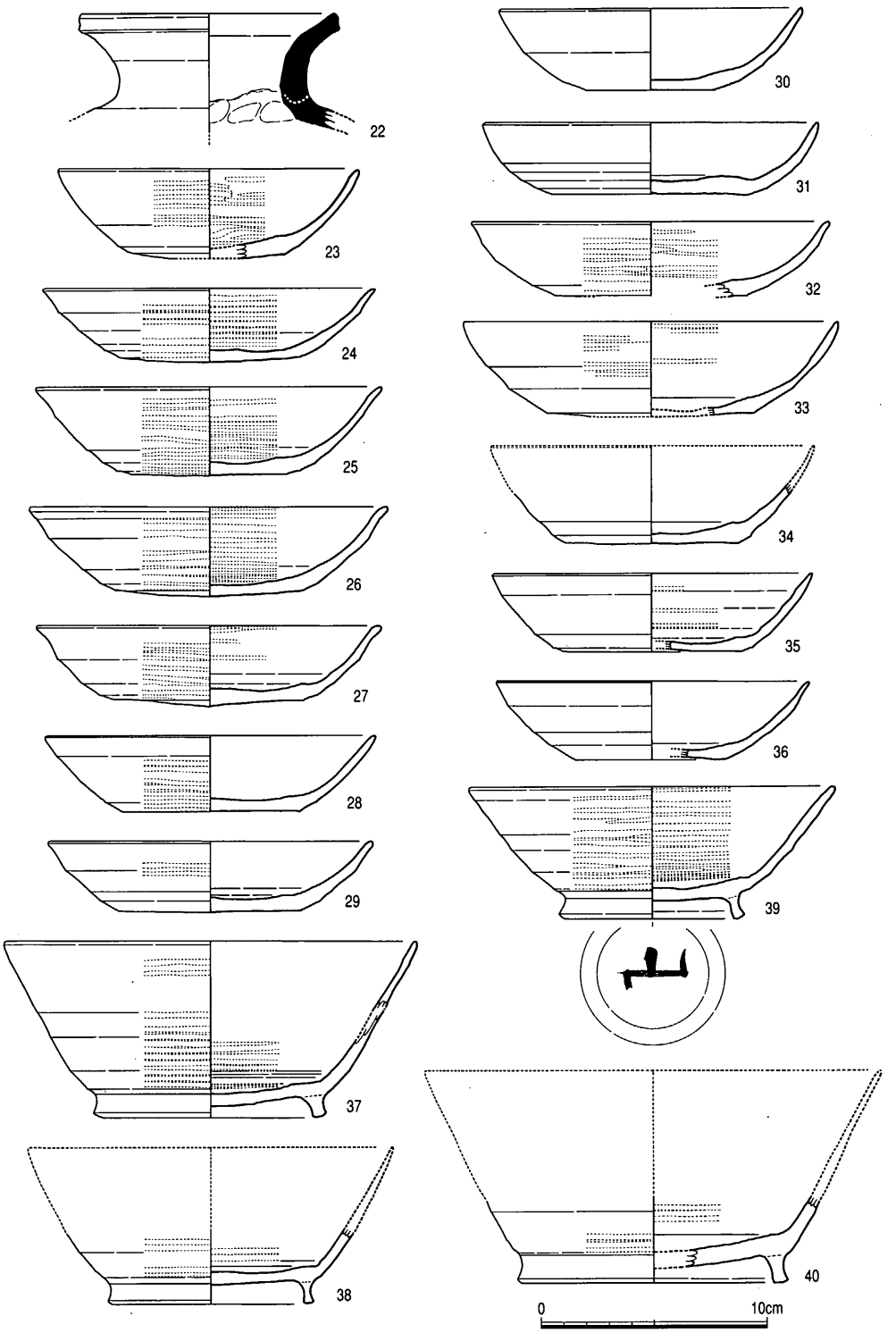


図38.120SK005黒色土出土遺物実測図（２）（S=1/3）

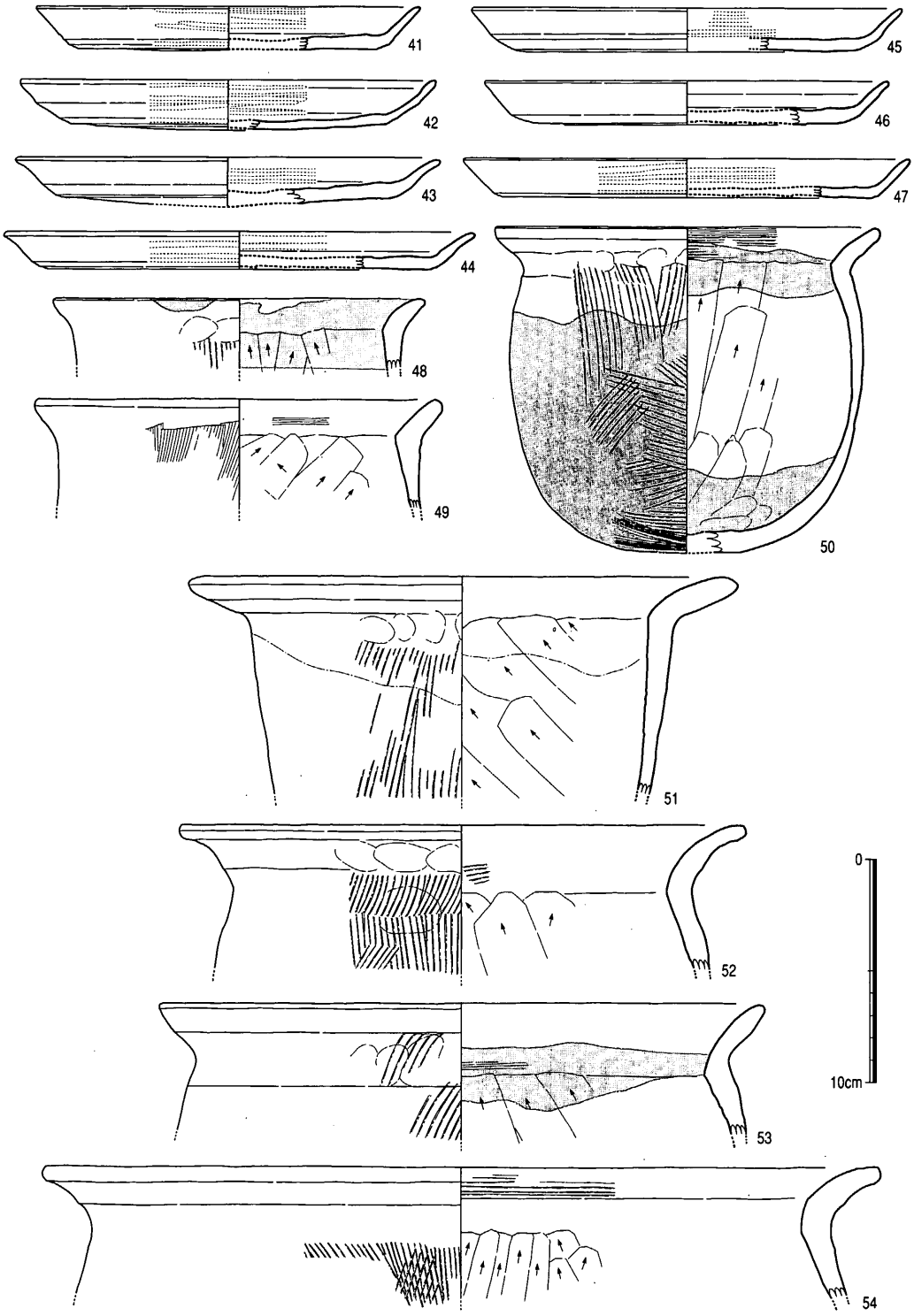


図39.120SK005黒色土出土遺物実測図（３）（S=1/3）

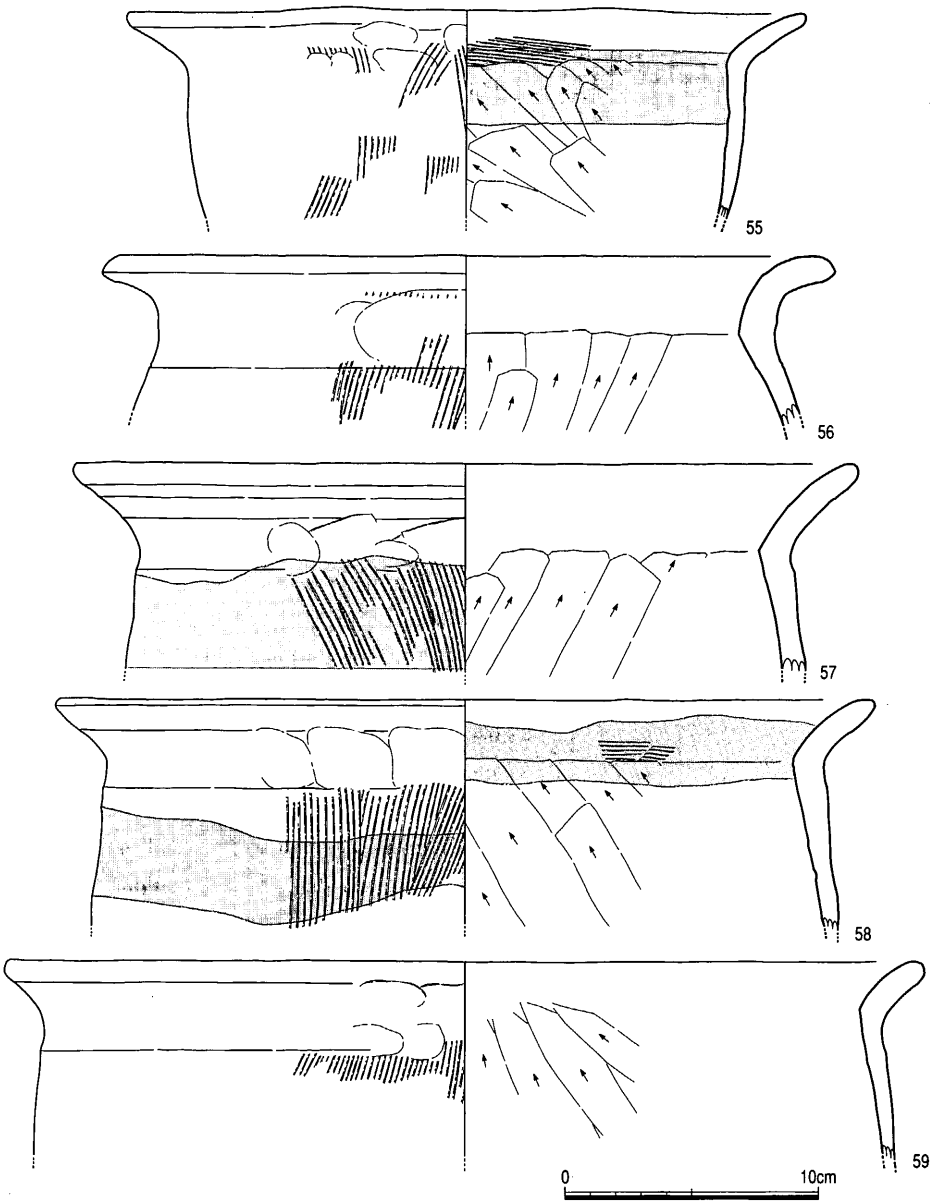


図40.120SK005黒色土出土遺物実測図（４）（S=1/3）

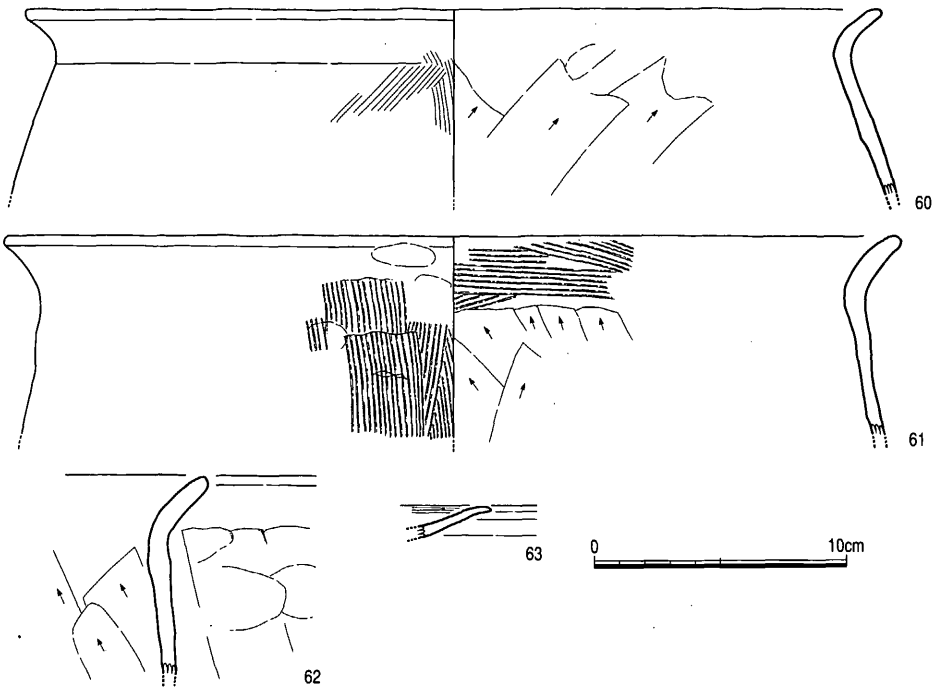


図41.120SK005黒色土出土遺物実測図（５）（S=1/3）

る。

椀（37・38・40）　38および40については、口縁部が残存していないことから、坏cになる可能性もある。37については、同一個体と考えられる口縁部破片があったことから、図上で復原した。いずれも体部外面下位から回転ヘラ削りし、底部外面を除く内外面をミガキaによって仕上げている。

皿（41～47）　底部から外反気味に口縁部へ至るもので、底部外面をヘラ切りのみによって処理する46以外は全て回転ヘラ削りによって器面調整している。また先の46以外は底部外面を除いて内外面をミガキaによって仕上げている。

甕（48～62）　大小があり小形の甕（48～51）、大形の甕（52～61）がある。62については口径が判然としないことから法量については判断できない。いずれも体部内面をヘラ削り、体部外面を刷毛によって調整するもので、筑前に一般的な製作技法を有している。しかし、59～62については、頸部内面の屈曲が緩やかであり、また胎土に角閃石を含むなど筑後地域に一般的な特徴を有している。

緑釉陶器

皿（63）　口縁端部の破片で、皿になるものと推定できるが、具体的にどのような形になるのかは判然としない。内外面に薄黄緑色の釉が掛けられ、外面はヘラ削り、内面にはミガキ痕

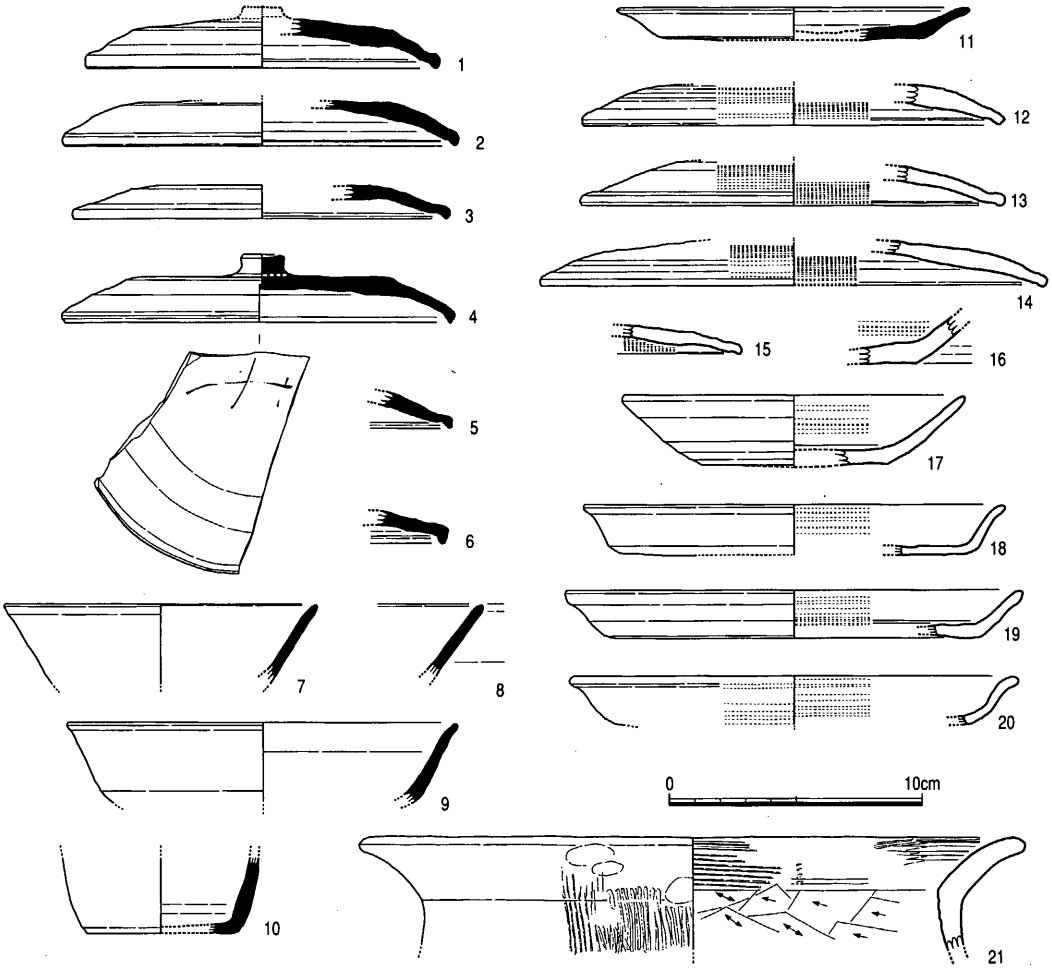


図42.120SK016出土遺物実測図（S=1/3）

跡が観察できる。

120SK016出土遺物（図42・43）

茶黒色土出土遺物にあたる。

須恵器

蓋（1）　口縁部をやや屈曲させ、端部を断面三角形に形づくるもので、天井部外面は回転ナデによって処理されている。口縁端部外面は丁寧にナデによって面取りされている。

椀（2）　口縁部のみの破片で、やや器厚が厚く、外面に凹凸が顕著である。破片資料のため、全形については不明。

土師器

皿（4）　底部から外方へ開く体部形態を有し、底部外面を回転ヘラ削り、底部外面以外の内外面をミガキaによって仕上げている。

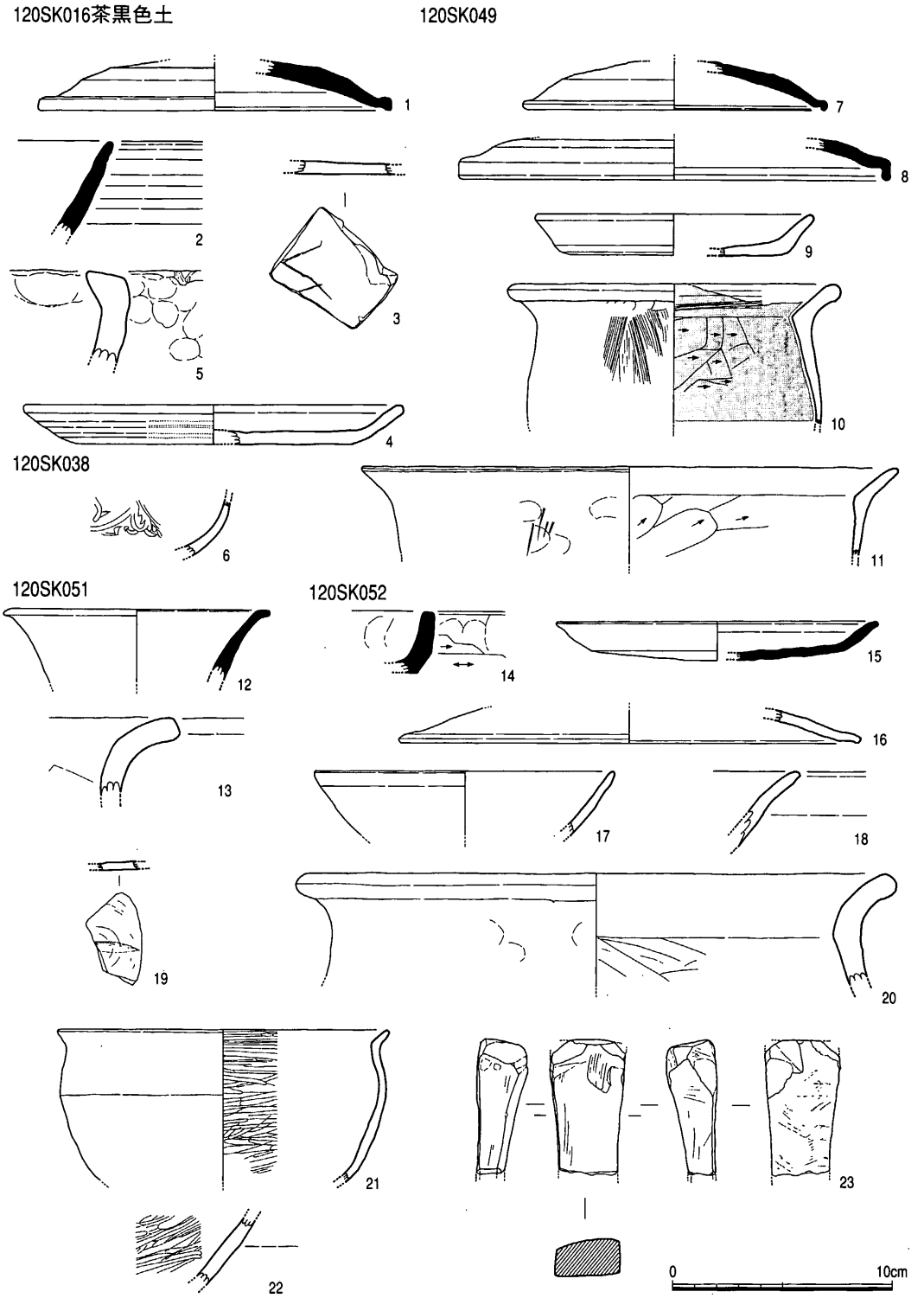


図43土坑出土遺物実測図（S=1/3）

器種不明（3）　供膳具の底部破片と考えられるが、器種特定にまでは至らない。外面と考えられる箇所にヘラ記号が観察できる。

製塩土器

焼塩壺（5）　やや大形のもので、残存状況から浅鉢形のものになるものと推定できる。内面には布痕跡が、外面には指頭圧痕が観察できる。

黒色土出土遺物にあたる。

須恵器

蓋（1～6）　ボタン状のつまみを貼付するもの、ないしは貼付する可能性のあるもの（1・4）があり、他は口縁部から天井部までの破片で、つまみ貼付の有無については不明。天井部外面の処理が観察できるものは、いずれもヘラ切り後ナデによって処理されている。口縁端部外面は、丁寧に面取りしている5・6以外は、丸く仕上げられている。なお4は、墨書が観察できる。

坏（7～9）　いずれも口縁部のみの破片で、高台の有無については判然としない。なお復原状況から9は器高の低い浅い形態と推定できる。

皿（11）　器高の低い形態のもので、底部から外方へ大きく開く形態をとる。底部外面はヘラ切り後ナデによって仕上げている。

壺（10）　小形の壺で、体部下位から底部にかけての破片のため全形については判断できない。

土師器

蓋（12～15）　天井部から口縁部までの破片で、天井部外面は丁寧な回転ヘラ削り、内外面ともに丁寧なミガキaによって仕上げられている。口縁端部外面の処理はいずれも甘く丸みを有している。

坏（16・17）　体部下位から底部外面をヘラ削りし、内面のみをミガキaによって仕上げている坏dに該当する。

皿（18～20）　器高は高く、18および19は内面のみをミガキaによって仕上げ、20は内外面を磨く。18は、底部外面を回転ヘラ削りによって処理している。

甕（21）　頸部を「く」の字形につくる甕で、体部内面をヘラ削り、体部外面および口縁部内面を刷毛によって調整する甕aに該当する。頸部外面以下に煤が付着。

120SK038出土遺物（図43）

青白磁

椀（6）　体部中位の破片資料と考えられ、全形については不明。内面に陽刻による文様が観察できる。素地は混入物の少ない白色を呈し、内外面に白青色の釉が施される。

120SK049出土遺物（図43）

須恵器

蓋（7・8）　7は天井部から口縁部までの破片で、天井部外面の処理はヘラ切り後ナデによって仕上げられている。口縁端部外面は丁寧に面取りされておらず、丸みを有している。8はやや大形のものと考えられ、口縁部のみの破片で、口縁端部外面は丁寧に面取りされている。

土師器

皿（9）　やや小形の皿で、底部から外方へ開く体部形態を有する。底部外面の処理はヘラ切り後ナデによって仕上げられている。

甕（10・11）　10は、小形の甕で、体部外面を刷毛、体部内面をヘラ削りによって仕上げている。頸部の屈曲具合から体部はやや張るものと考えられ、最大径は下位にあるものと考えられる。11はやや大形の甕で、頸部の屈曲具合からあまり胴張りのないものと推定できる。10および11ともに甕aに該当する。

120SK051出土遺物（図43）

須恵器

壺（12）　壺bに該当するものと考えられ、口縁端部がやや外方へ屈曲する。

土師器

甕（13）　口縁部の破片のため、全形については不明。内外面ともに磨耗しており調整痕跡についても観察できない。

120SK052出土遺物（図43）

須恵器

皿（15）　底部が下方へやや膨らむもので、底部から外反するように外方へ開く体部形態を有している。底部外面の処理はヘラ切り後粗いナデによって仕上げられている。

硯（14）　器厚が厚く、内外面に指頭圧痕が顕著に観察できることから硯と判断した。ただし墨痕が顕著に観察できるというわけではなく、盤の可能性もある。

土師器

蓋（16）　やや大形の蓋で、口縁端部を丸く仕上げ、内外面はナデによって調整されている。

坏（17）　17は内外面ともに横ナデによって調整する坏で、口縁部の破片のため、全形については不明。

鉢（18）　口縁部の小破片のため、全形については不明。外面を横ナデによって調整する他は、器面磨耗のため詳細はつかめない。

甕（20）　大形の甕で、体部内面にヘラ削り痕跡が、また口縁部内面から外面にかけては指頭圧痕が観察できる。

器種不明（19）　小破片のため全形は不明。外面と考えられる箇所に墨痕が観察できる。

黒色土器

甕（21・22） 22は小破片のため全形は不明。21は体部上位以上が残存しており、やや小形の甕に該当する。内面はミガキcによって仕上げられており、内面のみ黒色化している。外面には全面に煤が付着しており、調整痕跡については判然としない。A類。

石製品

砥石（23） 五面を使用面とするもので、長軸方向および長軸方向に斜行するような擦痕跡が観察できる。材質は頁岩。

120SK068出土遺物（図44）

須恵器

蓋（1） 口縁端部を内傾気味に平坦面を形成し、天井部外面をヘラ削りする。形状から高坏の坏部である可能性が高い。

坏（2・3） 2は、高台を貼付する坏cで、底部と体部の境界部分に高台を貼付している。底部外面の処理はヘラ切り後未処理。3は高台を付さない坏aで、体部内外面が焼き斑のため茶黒色に変色している。

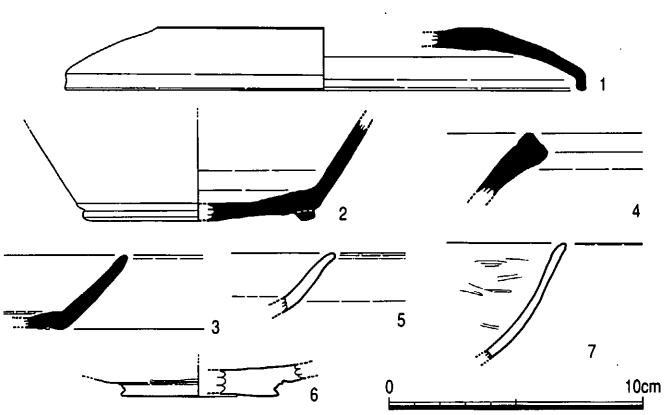


図44.120SK068出土遺物実測図（S=1/3）

甕（4） 口縁部のみの破片であることから、全形については判断できない。

黒色土器

椀（7） 口縁部から体部にかけての破片で、形状から丸みを有する椀と考えられる。A類。

越州窯系青磁

皿（5） 形状および素地特徴から皿I類に該当するものと考えられる。

緑釉陶器

皿（6） 円盤状高台のもので内外面ともに釉が剥離している。洛北産のものと考えられる。

3）溝出土遺物

溝からは、自然堆積と考えられる状況で遺物が出土しており、周辺の主要遺構が奈良時代であることから、多くは奈良期の遺物を多く包含している。しかし、埋没時期は、少ないが平安後期の遺物を含むことから、当該時期に求め得る可能性が高い。

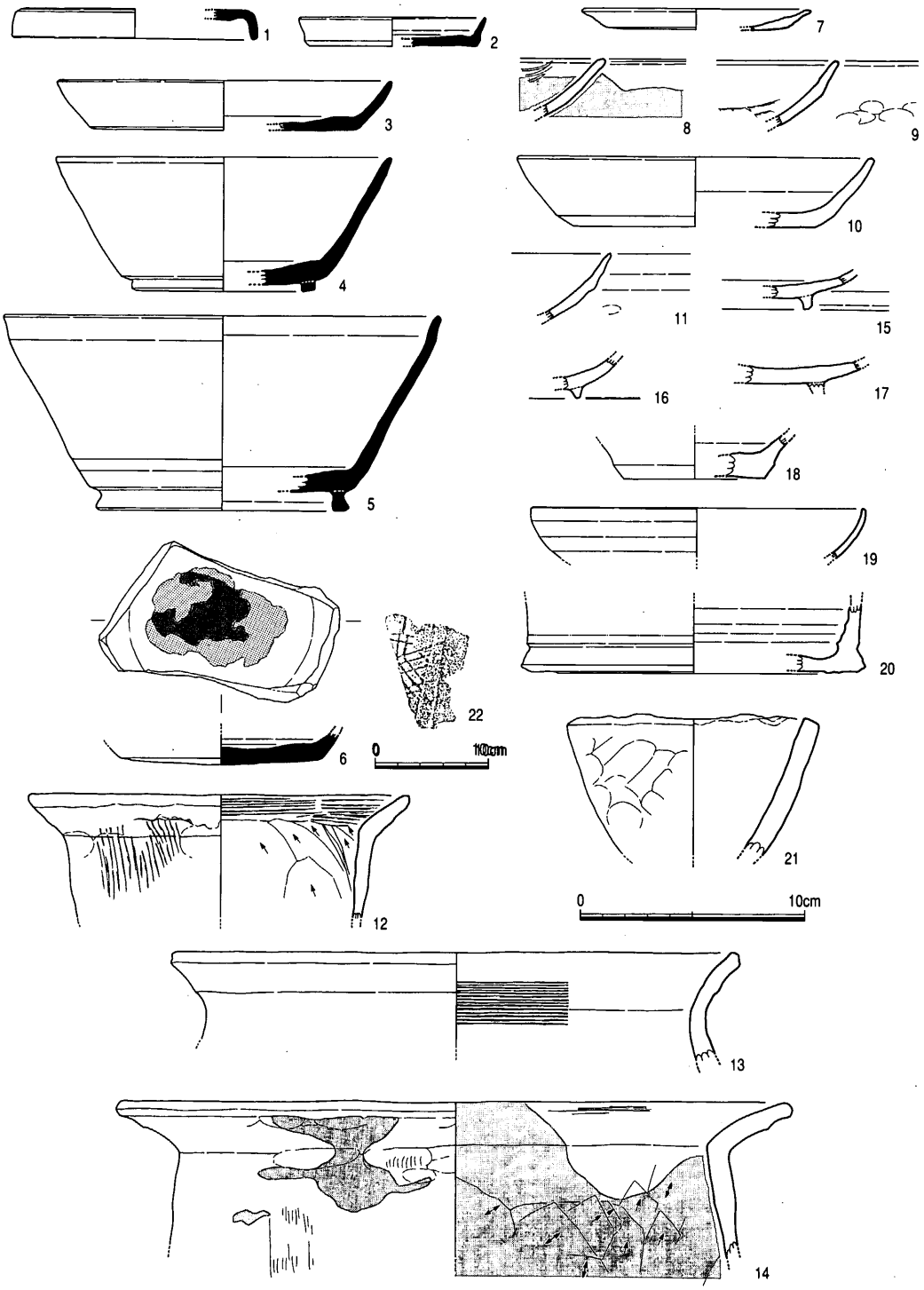


図45.120SD020黒色土出土遺物実測図（S=1/3・1/6）

120SD020出土遺物

120SD020からは、下位より灰色砂→青灰色砂→黒色土の順で堆積しており、上位より解説する。

120SD020黒色土出土遺物（図45）

須恵器

蓋（1）　小形の壺蓋と考えられ、天井部から体部へ屈曲しつつ口縁部へ至る。天井部外面は回転ヘラ削りによって仕上げられており、口縁端部は平坦面を形成している。

皿（2・3）　2は底部外面を回転ヘラ削りしており、1同様に小形の蓋になる可能性もある。3は器高がやや高く、底部と体部の境界は明瞭。底部外面の処理は不定方向のナデ痕跡があり、粘土紐痕跡をとどめている。

坏（6）　底部のみの破片で坏aに該当するものと考えられるが、全形については不明。なお見込み部分に墨痕跡が観察できる。

椀（5）　大形の椀で、底部と体部の境界は明瞭で、外方へ開く体部形態を有している。底径と口径を比較した場合、前代の型式より次第に底径の縮小化傾向がうかがえる。

土師器

皿（7）　小皿aで、底部外面はヘラ切り。

丸底坏（8・9・11）　いずれも口縁部の破片で、器高については判然としない。8は内面にミガキcの痕跡をとどめ、他の個体は内面にミガキbの痕跡が観察できる。

坏（10）　底部外面を糸切りするもので、法量から大宰府XV期に分布中心を有するものである。

甕（12～14）　小形の甕a（12）と、大形の甕a（13・14）で、13は内面を刷毛によって調整する。他は体部内面をヘラ削り、口縁部内面から外面にかけて刷毛によって調整する。

灰釉陶器

椀（15～17）　いずれも丸い形態を有するものと考えられ、15は三日月形の高台を貼付している。

高台部分の破片のため、全形に関する詳細は不明。

越州窯系青磁

壺（18）　底部破片のため全形は不明。便宜的に壺としたが器種特定には不安がある。素地に黒色粒子を含むことや、内面に施釉することからII類系の粗製の青磁に該当するものと考えられる。

白磁

皿（19）　白磁分類の皿VI-1bに該当する。

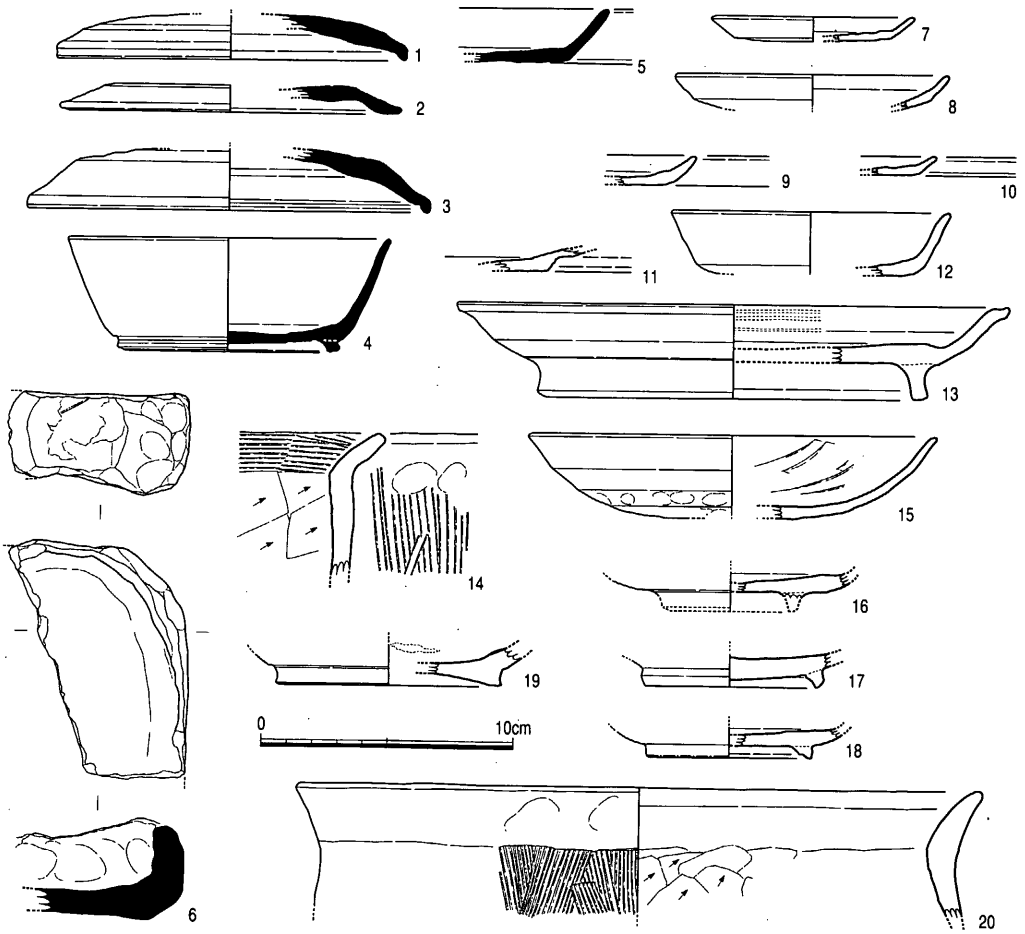


図46.120SD020青灰色砂出土遺物実測図（S=1/3）

長沙窯系青磁

水注（20）　水注の底部と考えられ、体部下位までを施釉している。

製塩土器

焼塩壺（21）　浅鉢形のもので、内面に布痕跡、外面には指頭圧痕が観察できる。口縁端部は平坦面を形づくる。

120SD020青灰色砂出土遺物（図46）

須恵器

蓋（1～3）　口縁部を断面三角形に形づくる蓋3（1・3）と直線的につくる蓋4（2）がある。いずれも天井部外面の処理はヘラ切り後ナデによって処理されており、蓋3の口縁端部外面の処理は丁寧にナデによって面取りされている。

坏（4）　高台を貼付する坏cに該当し、高台は内端を接地させる丁寧なつくりを有している。底部外面は、ヘラ切り後刷毛によって再調整されている。底部から体部への開きは大きく直線

的な形状を有している。

皿（5）　小破片のため口径復原には至っていない。底部外面はヘラ切り後やや丁寧な不定方向のナデによって仕上げられている。底部から外方へ直線的に開く体部へ移行する。

硯（6）　風字硯と考えられ、海部分の破片と推定できる。内外面ともに指頭圧痕をとどめ、口縁端部は平坦面を形成する。120SK052の小破片は同一個体の可能性がある。

土師器

皿（7～10・13）　7～10はいずれも小皿aに該当し、底部痕跡が磨耗によって不明な9以外は、いずれもヘラ切りによって処理されている。13は大形の高台付皿で、口縁端部に凹線を巡らすような形状を有している。内面にミガキ痕跡をとどめている。

坏×皿（11）　底部破片であり、かつ底部から体部へ屈曲するなど器種特定のために必要な属性が認識できない。したがって坏および皿の可能性を考える。底部外面の処理はヘラ切り。

坏（12）　小形の坏で、底部外面の処理は器面磨耗のため不明。

丸底坏（15）　器高の低いもので、内面にミガキbの痕跡、外面には押し出しと考えられる凹凸が観察できる。底部外面はヘラ切り。

椀×皿（16）　高台の貼付されるもので破片資料であることから器種特定には至っていない。

甕（14・20）　いずれも刷毛を器面調整するもので甕aに該当する。両者ともやや粗い刷毛を工具として用いている。

灰釉陶器

椀×皿（17）　高台部分の破片資料で、断面三日月状の高台形態を有している。

緑釉陶器

椀×皿（18）　高台部分の破片で、高台内面に一条の凹線を有しており、近江産の緑釉陶器と考えられる。

越州窯系青磁

椀（19）　高台を輪状に削り出さず、素地に黒色粒子を混入する。粗製のII類系の製品と考えられ、中形の椀形態を有するものと考えられる。

120SD020灰色砂土出土遺物（図47）

須恵器

坏（1・2）　1は体部が立つもので、2は体部が外方へ大きく開くものである。1は口縁端部外面が黒灰色に変色し、重ね焼きによるものと考えられる。

甕（11）　頸部から体部上位の破片で、器面磨耗のため調整痕跡が判然としないが、内面に同心円当て具痕跡が観察できる。

土師器

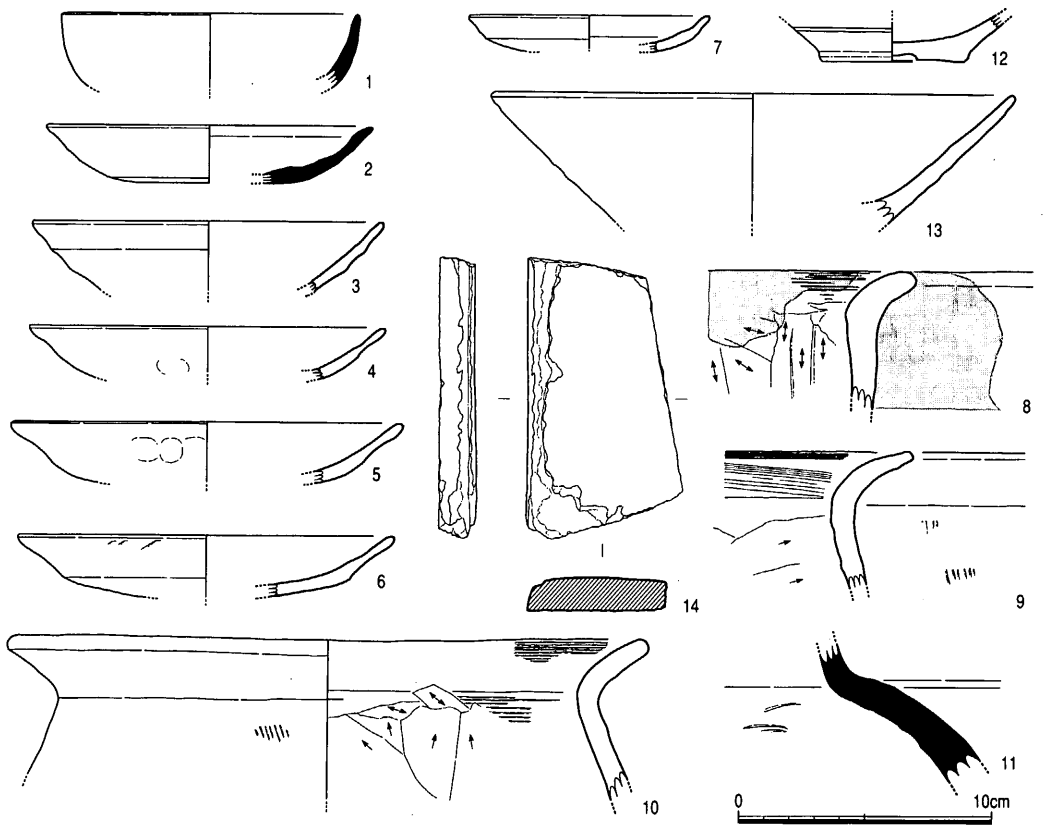


図47.120SD020灰色砂土出土遺物実測図（S=1/3）

丸底坏（3～6）　3はやや器高があるが、他のものは器高の低いものに該当する。底部外面の処理は、5および6が観察でき、いずれもヘラ切りによる。

皿（7）　小皿aに該当し、底部はヘラ切りによって処理されている。またやや底部が下方へ張り出している。

甕（8～10）　いずれも刷毛によって器面調整される甕aに該当し、9および10は頸部内面の屈曲が顕著ではない。

越州窯系青磁

椀（12・13）　いずれも精製のI類に該当し、12は高台部分、13は口縁部の破片で、全形を知り得るものではない。12は高台畳付け部分を釉カキ取りしている以外は全面施釉のもの。

石製品

砥石（14）　扁平な石を用いて砥石としたもので、 二面を砥石面として使用している。石材は細粒砂岩。

120SD025出土遺物（図48）

須恵器

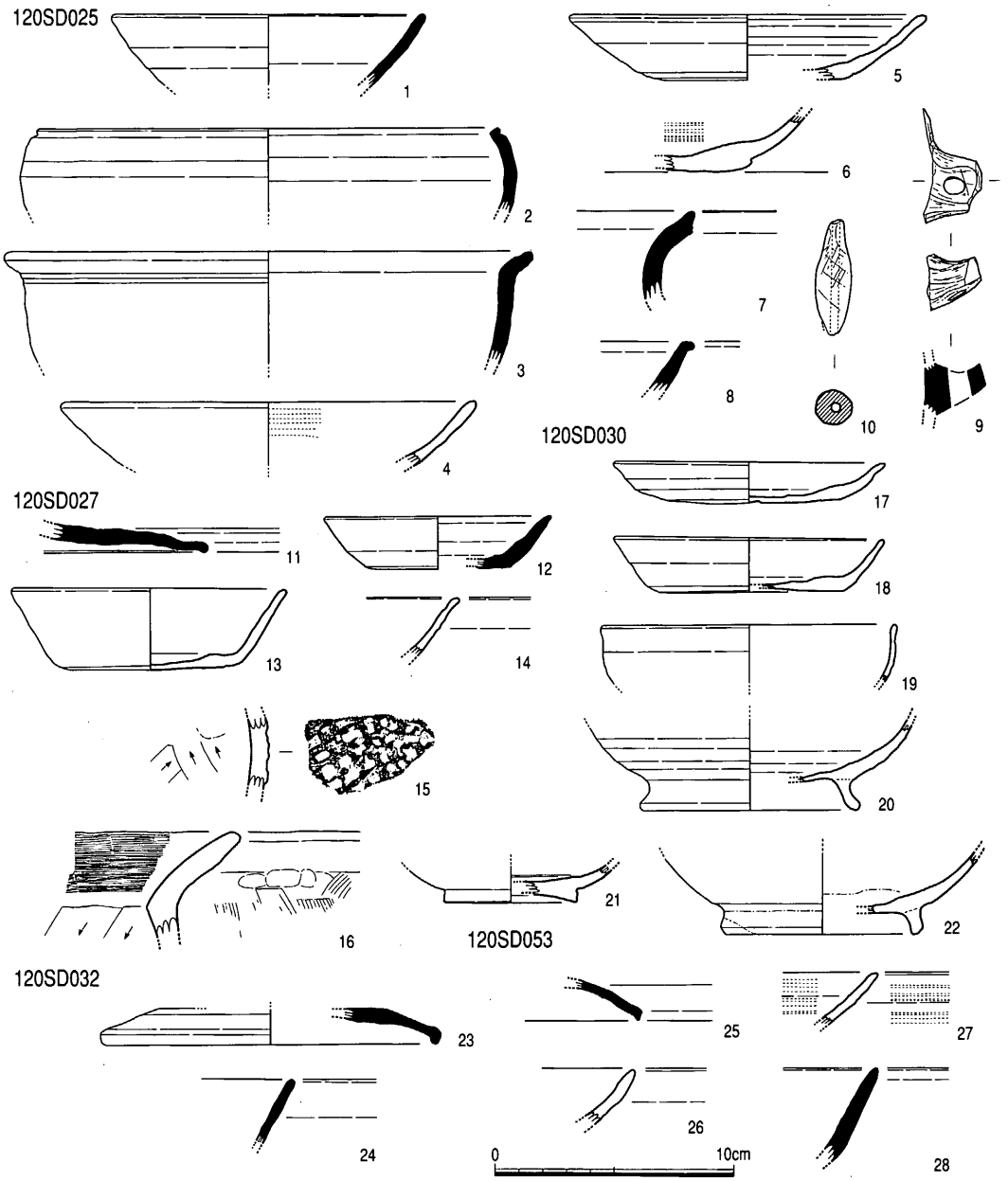


図48.溝出土遺物実測図（1）（S=1/3）

坏（1）　口縁部のみの破片で、高台の有無については不明。口縁部外面が重ね焼きのため淡黒灰色に変色している。

鉢（2・3）　2は形状から鉢aに該当し、体部外面を上位から回転ヘラ削りする。3は土師器の甕に近い形状を有している。内外面ともに回転ナデによって仕上げられている。

甕（7・8）　口縁端部の破片で、全形については不明。

把手（9）　一カ所穿孔するもので、器面調整をヘラ状のもので行っている。

土師器

坏（4～6）　体部形状が丸みを有していることから坏dと考えられる。5は内外面ともに横ナデによって仕上げられており、底部外面はヘラ切りのままであるが、体部形状が丸みを有していることから、坏dの形骸化した型式と判断した。6も同様であるが、4と同じく内面にミガキaの痕跡が観察できる。

土製品

土錘（10）　器面に長軸に沿ってナデの痕跡が観察できる。重さは、6.3gを量る。

120SD027出土遺物（図48）

須恵器

蓋（11）　天井部外面をヘラ切り後ナデによって処理するもので、口縁端部外面は粗く処理され、丸みを帯びている。

坏（12）　小形の坏で、底部外面はヘラ切り後ナデによって仕上げられている。底部から外方へ開く体部形態を有している。

土師器

坏（13・14）　13は底部ヘラ切りで、底部と体部の境界が不明瞭なもの。14は口縁部の破片のため詳細は不明。

甕（15・16）　15は体部のみの破片で、形状については不明であるが、器面調整に叩きを用いる甕bに該当する。16は器面調整に刷毛を用いる甕aに該当する。

120SD030出土遺物（図48）

土師器

皿（17・18）　いずれも底部外面をヘラ切りによって処理されるもので、17は器高が低く皿aに該当するが、18はやや器高が高く、坏a×皿aに該当するものと考えられる。

椀（19・20）　19は口縁部のみの破片で高台の有無については不明。20は高台を貼付するもので、19および20ともに丸みのある椀と考えられる。

緑釉陶器

椀（21）　円盤状高台を有するもので、外面は削り、内面はナデによって調整されているものと考えられる。京都系緑釉陶器と考えられる。

灰釉陶器

椀（22）　高台を貼付するもので、外面は削り、内面はナデによって調整されているものと考えられる。　折戸53窯式のものと考えられる。

120SD032出土遺物（図48）

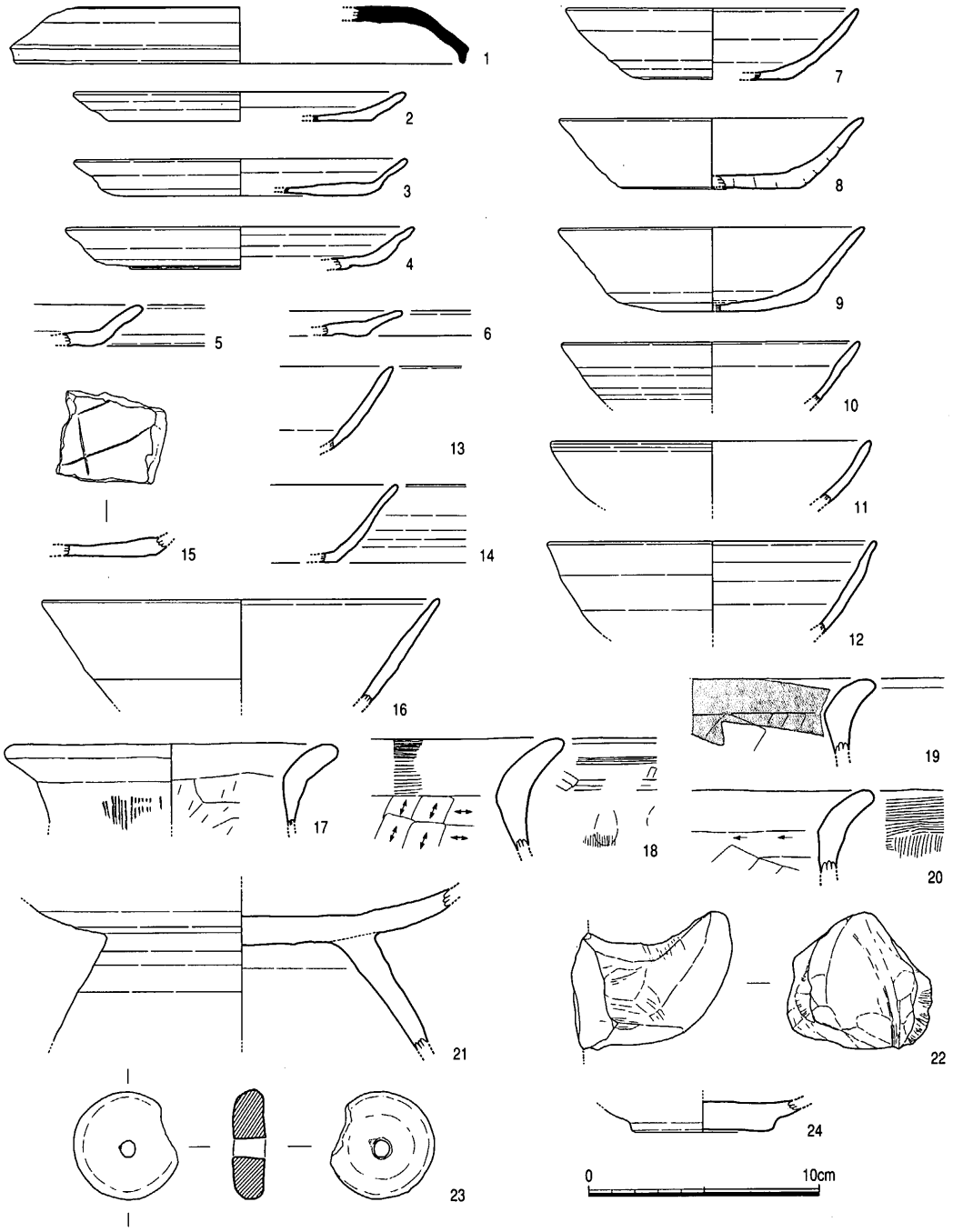


図49.120SD058出土遺物実測図（S=1/3）

須恵器

蓋（23）　天井部から口縁部までの破片で、天井部から口縁部へ移行する箇所を回転ヘラ削りし、天井部中央付近はヘラ切り後ナデによって仕上げている。口縁端部外面は、丁寧な面取りはされておらず、丸みを有している。

坏（24）　口縁部の破片で、内外面回転ナデによって仕上げられている。

120SD053出土資料（図48）

須恵器

蓋（25）　口縁部のみの破片で、詳細は不明。口縁端部は丁寧に面取りされている。

坏（28）　口縁部のみの破片で、詳細は不明。やや器厚が厚い。

土師器

坏（26・27）　26は内外面横ナデによって仕上げられ、27は内外面ミガキaによって仕上げられている。しかし両者とも丸みをやや有していることから坏dに該当するものと考えられる。

120SD058出土遺物（図49）

須恵器

蓋（1）　大形の蓋で、天井部外面は回転ヘラ削り、口縁端部外面は丁寧なナデによって面取りしている。

土師器

皿（2～6）　底部から外方へ大きく開く体部形態を有しており、底部外面はいずれもヘラ切りによって処理されている。器高は低いものが多い。

坏（7～15）　全形が判明するものは全て坏aで、14以外は底部外面をヘラ切り後ナデによって処理している。8は底部外面に粘土紐痕跡をとどめている。15は器種を特定できるだけの破片資料ではないが、外面と考えられる面にヘラ記号が観察できる。

椀（16）　口縁部のみの破片であるが、やや器高が深いため椀と判断した。体部下位をヘラ削りし、他の部位は横ナデによって仕上げている。

甕（17～20）　いずれも刷毛によって器面調整する甕aに該当し、20は頸部の屈曲具合から粗製の鉢になる可能性がある。

鉢（21）　高台を貼付する大形の鉢で、高台も高脚のものになるものと考えられる。

把手（22）　把手のみの破片資料で、本体については不明。

土製品

紡錘車（23）　内外面にナデ痕跡をとどめるもので、直径4.7cm～4.5cm、厚さ1.35cmをそれぞれ測る。

緑釉陶器

椀×皿（24）　円盤状高台を有するもので、器面は磨耗のため詳細は判断できない。洛北産と考えられる。

120SD059出土遺物（図50）

須恵器

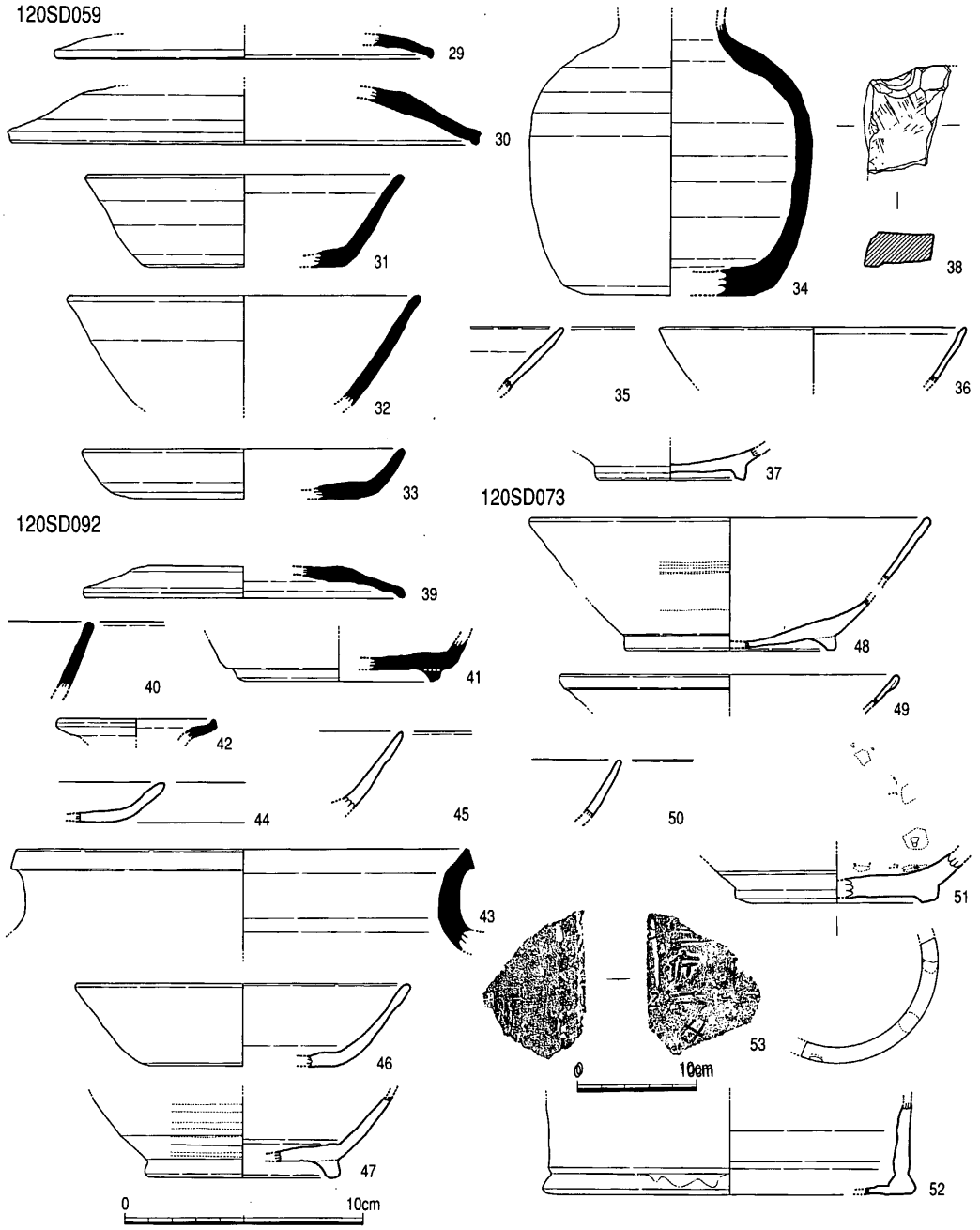


図50.溝出土遺物実測図（２）（S=1/3・1/6）

蓋（29・30）　天井部外面はナデによって処理されており、口縁端部外面を粗く仕上げる29と、丁寧に面取りする30がある。

坏（31・32）　底部から外方へ開く形態のもので、31は底部外面はヘラ切り後ナデによって仕上げている。底部の状態がわかる31は、底部と体部の境界は不明瞭。

皿（33）　底部外面をヘラ切り後ナデによって仕上げ、やや立ち気味に開く体部形態を有し

ている。

壺（34）　頸部以上が欠損するもので、平底の壺と考えられる。体部最大径以下を回転ヘラ削りされる。

土師器

坏（35・36）　口縁部のみの破片で、形式特定までの詳細は不明。

緑釉陶器

椀×皿（37）　高台のみの破片で、器種特定には至っていない。削り出し高台と考えられる。

石製品

砥石（38）　一面を使用面としてとどめるもので、長軸方向に斜行する方向に擦痕が観察できる。材質は細粒砂岩。

120SD061出土遺物（図51～53）

須恵器

蓋（1～8）　ボタン状のつまみを貼付する蓋c3（1～3）と環状のつまみを貼付する蓋b3（5・6）がある。蓋c3は、1および2は、天井部外面をヘラ切り後ナデによって仕上げ、3はヘラ削りによって仕上げている。2はさらに天井部外面に墨痕が観察できる。蓋b3は、外面の調整として天井部と口縁部の境界部分をヘラ削りし、他の部分は回転ナデによって調整している。いずれも口縁端部外面は丁寧に面取りしている。

坏（9～12）　高台を貼付しない坏a（9～11）、高台を貼付する坏c（12）がある。9は小形の坏で、底部外面をヘラ切りし、口縁部内外面が黒色に変色している。10および11は中形の坏で、底部から外方へ開く体部形態を有している。なお11は底部外面に墨書が観察できる。12は底部から体部への立ち上がりはきつく、底部外面を回転ナデによって仕上げている。

皿（13～15）　底部から外方へ開く体部形態を有する13・14と、立ち上がりがきつい15があり、底部外面の処理は13が回転ヘラ削り、14および15はヘラ切り後ナデによって仕上げている。

鉢（16）　口縁部形状から鉢aに該当するものと考えられ、体部上位から回転ヘラ削りによって仕上げている。

壺（18・19）　18は、口縁端部を上方へつまみ上げるもので、全形については不明。19は肩部が屈曲し高台を貼付するもので、壺bの体部の可能性がある。

器種不明（17）　高台のみの破片で、器種特定に至らない。短脚の高坏脚部の可能性もある。

土師器

蓋（20）　口縁部のみの破片で、内外面をミガキaによって調整している。口縁端部外面は丁寧に処理されず、丸みを帯びている。

坏（21～32）　底部外面をヘラ切りし、直線的に外方に開く体部形態を有する坏a（21・23）

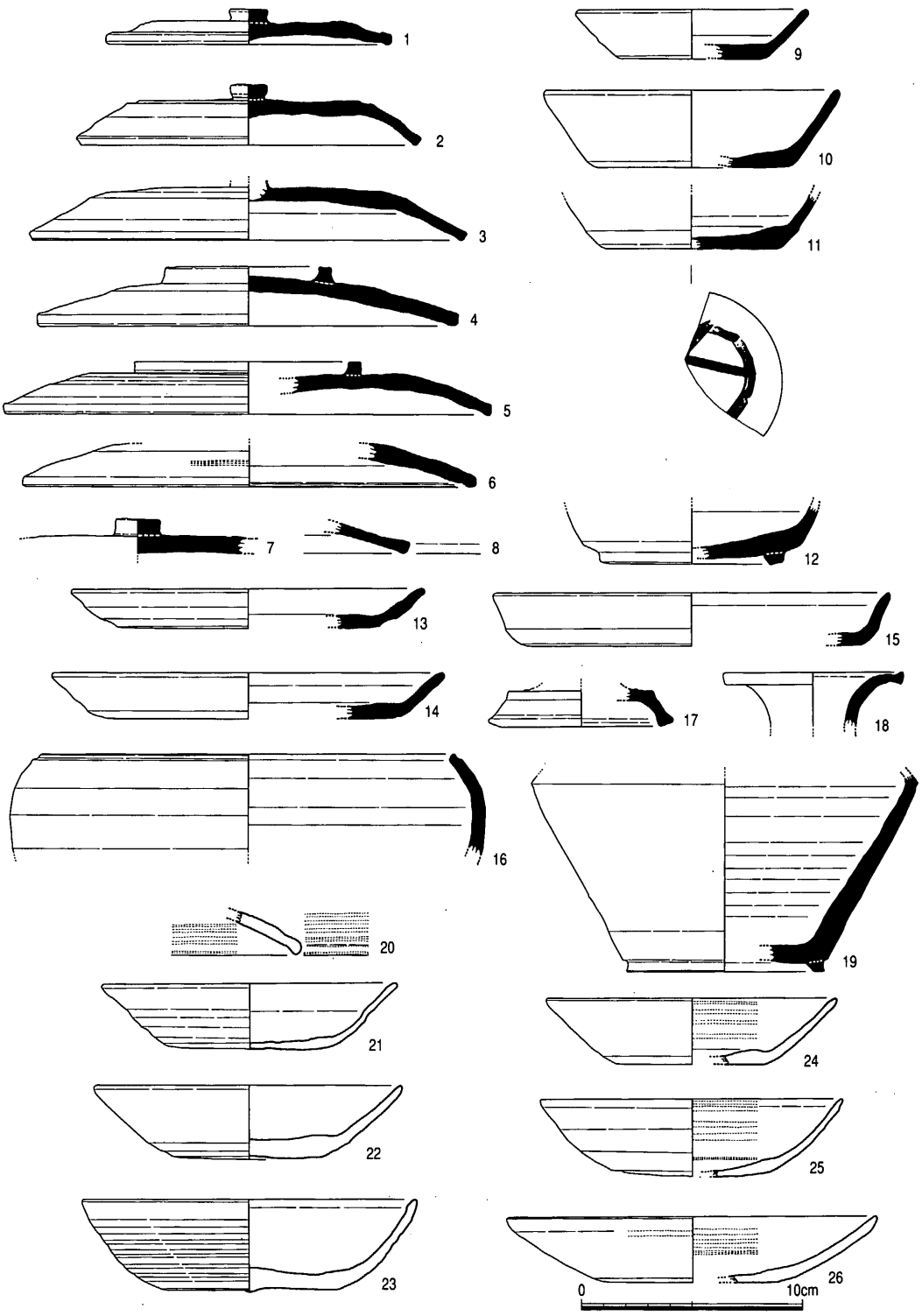


図51.120SD061出土遺物実測図（1）（S=1/3）

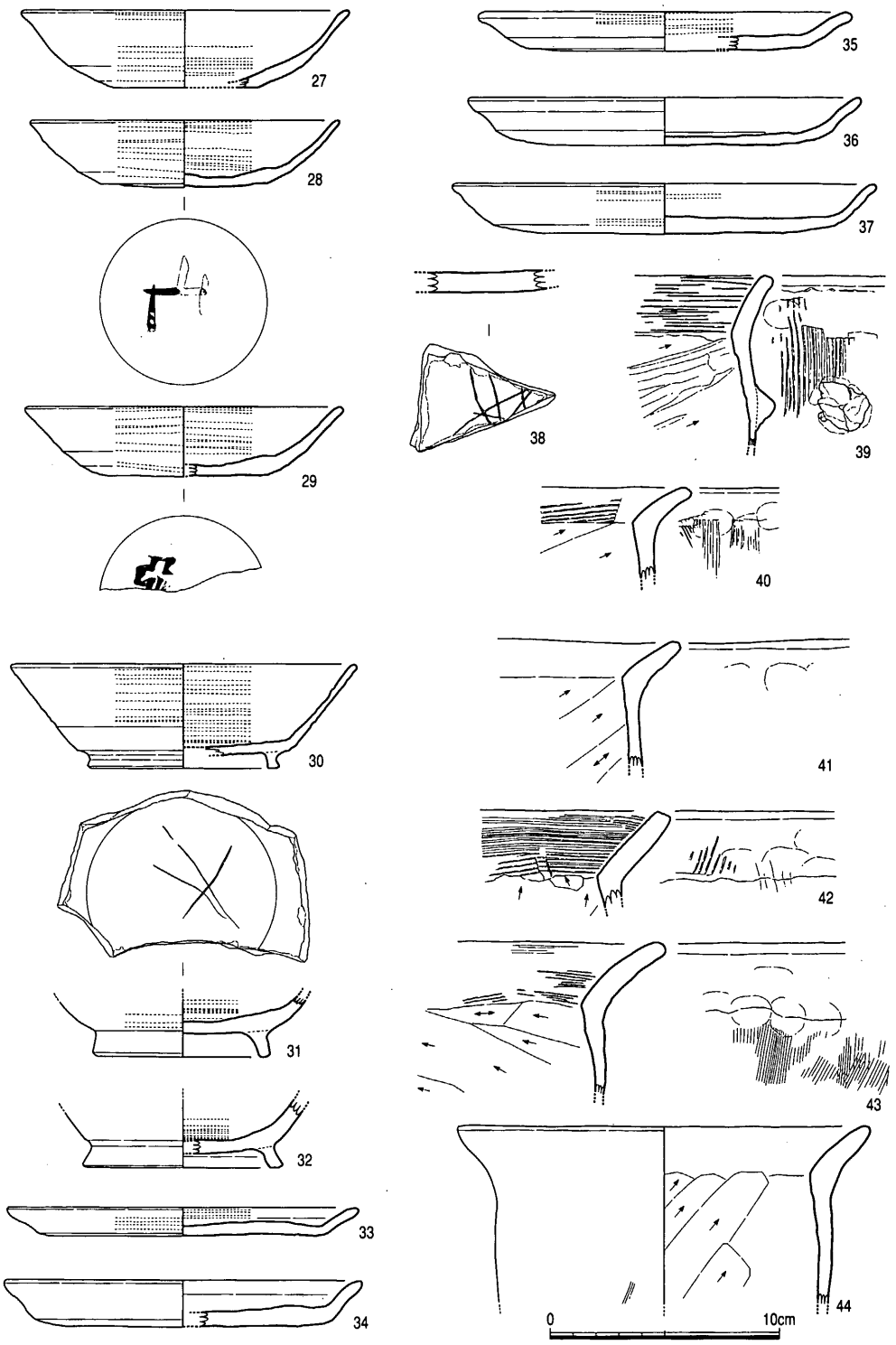


図52.120SD061出土遺物実測図（２）（S=1/3）

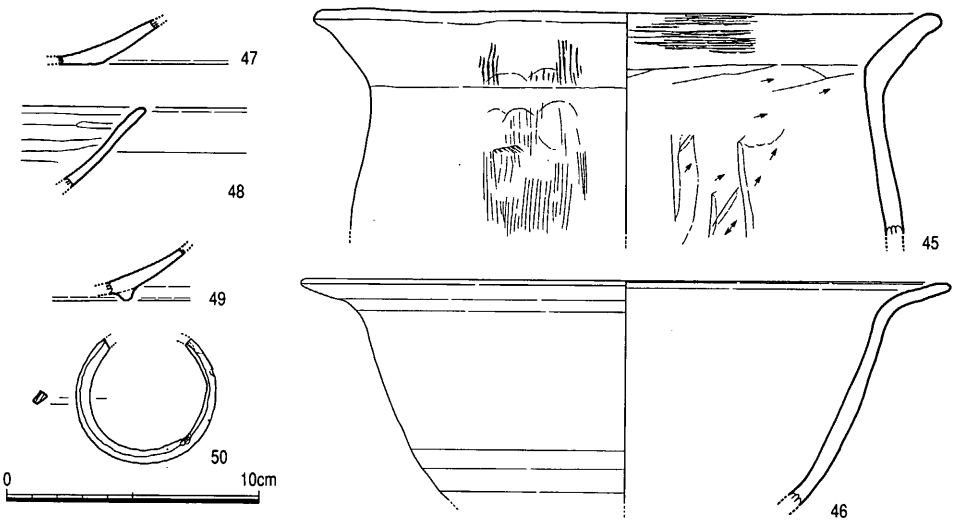


図53.120SD061出土遺物実測図（３）（S=1/3）

と、底部外面をヘラ削りし丸みのある体部形態を有する坏d（22・24～29）、さらに高台を貼付する坏c（30～32）がある。坏aは、底部と体部の境界は不明瞭で、底部外面はヘラ切り後ナデによって仕上げている。坏dは、内面のみ磨く24・25、内外面を磨く26～29がある。いずれも底部外面は磨かない。なお28・29の底部外面には墨書が観察できる。高台を貼付する坏cは、底部外面を除く全面を磨く。31は見込み部分にヘラ記号が観察できる。

皿（33～37）　器高が低く、底部外面を回転ヘラ削りする33と、器高はあまり低くなく底部から外方へ開き底部外面をヘラ切り後ナデによって処理する34・36、形態は34・36と同様で、底部外面をヘラ削りする35・37がある。36および37は底部が下方へやや膨らむ。

器種不明（38）　底部の破片と考えられるが、小破片のため器種特定には至っていない。底部外面にはヘラ記号と考えられる擦痕が観察できる。

甕（40～45）　いずれも頸部を「く」字形に屈曲させるもので、39は体部上位外面に粘土粒が貼り付いている。形骸化した把手と考えられるが、破片資料のため判断できない。

鉢（46）　精製の鉢で、体部外面下位を回転ヘラ削り、他の内外面は全て丁寧な回転ナデによって処理されている。口縁部が外方へ屈曲し、端部を丸く仕上げている。

黒色土器

坏（47～49）　47は、内面を黒化し、ミガキcによって仕上げているもので、底部外面はヘラ切りによって処理している。48は口縁部の破片のため形式特定には至っていない。内面はミガキc。49は高台を貼付するもので椀c1に該当する。A類。

金属製品

錫杖（50）　錫杖に用いられる金具と考えられるが、単品のため特定するには至っていない。

可能性として考えておく。材質は鉄製と考えられる。

120SD073出土遺物（図50）

黒色土器

椀（48）　直線的に外方へ開く体部形態を有する椀c1に該当し、内面および体部中位にミガキ痕跡が観察できる。A類。

120SD087出土遺物（図54）

須恵器

坏（55）　口縁部のみの破片で、やや丸みを有する体部形態を呈しているものと推定される。

椀（54）　大形の椀で、口縁端部がやや内湾している。口縁部内面には指頭圧痕が観察できる。また体部外面下位は回転ヘラ削りによって器面調整されている。

120SD088出土遺物（図54）

土製品

紡錘車（56）　瓦を加工したものと考えられ、器面に瓦製作時の痕跡は観察できないが、焼成状況から瓦再加工品と判断した。

120SD091出土遺物（図54）

須恵器

蓋（57）　口縁端部を直線的に引き出すもので蓋4に該当する。内外面ともに回転ナデ調整。

坏（58・59・60）　58は口縁部の破片で、高台の有無については不明。59は高台を貼付しない坏aに該当し、底部外面は粗いナデによって仕上げている。60は器種不明であるが、底部外面に「彼作日」と判読できる墨書がある。

土師器

蓋（61）　口縁端部内面がやや窪むもので、わずかに観察できる天井部外面はヘラ切り後ナデによって処理されている。

坏（62・63）　62は、やや大形のもので、内外面を横ナデによって処理されている。63は器種特定できないが、底部外面にヘラ記号がある。

椀（64）　口縁部の破片であるが、体部外面下位を回転ヘラ削りし、内外面ともにミガキaによって処理されている。

皿（65）　底部から外方へ開き気味に立ち上がる体部形態を有し、底部外面はヘラ切り後ナデによって処理されている。

甕（66・67）　66は、頸部から口縁部までの破片で、体部内面はヘラ削り、外面に指頭圧痕をとどめ、口縁部内面および口縁部外面には横ナデ痕跡が観察できる。67は体部上位から口縁部の破片で、やや大形の甕。体部内面をヘラ削り、口縁部および体部外面を刷毛によって器面

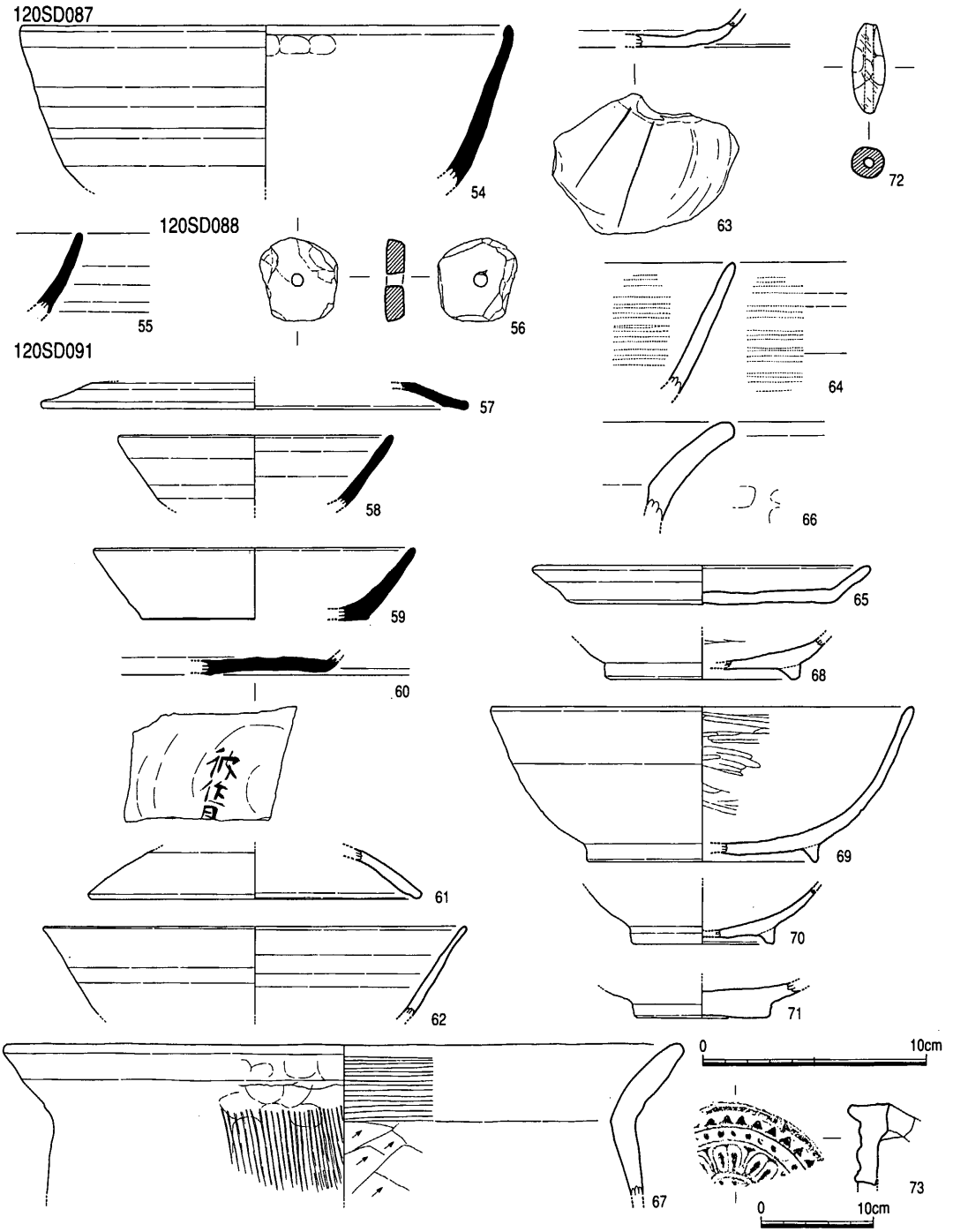


図54.溝出土遺物実測図（３）（S=1/3・1/6）

調整する。

黒色土器

椀（68・69）　いずれも底部外面はヘラ削りによって処理され、68は高台のみの破片で、全

形については判然としない。69はやや丸みを有する椀c2に該当し、内面にはミガキcによって仕上げられている。A類。

緑釉陶器

椀（70・71）　70は高台を貼付するもので、畳付け部分が内傾する平坦面を形成する。体部外面はヘラ削り。71は器種特定には困難であるが、円盤状高台のもので、洛北産のものと考えられる。

土製品

土錘（72）　器面調整のためのナデ痕跡が長軸方向に平行に観察できる。

瓦

軒丸瓦（73）　軒丸瓦の瓦当部分の破片で、老司式瓦に該当する。

120SD092出土遺物（図50）

須恵器

蓋（39）　天井部外面をヘラ切り後ナデによって仕上げるもので、口縁端部外面は丸く仕上げられている。

坏（40・41）　40は口縁部の破片で詳細は不明。41は高台部分の破片で、底部外面はヘラ切り後丁寧なナデによって処理されている。

壺（42）　小形の壺で、口縁端部をつまみ上げる形状を呈している。

甕（43）　口縁部から頸部にかけての破片で、口縁端部外面を面取りによって仕上げている。

土師器

坏（45～47）　45は口縁部の破片のため詳細は不明。46は底部外面をヘラ切りによって処理し、底部と体部の境界は不明瞭。47は高台を貼付する坏cに該当し、体部内外面をミガキaによって仕上げる。

白磁

椀（49）　椀I-1類に該当する。口縁部のみの破片で、全形については不明。

越州窯系青磁

椀（50・51）　いずれも精製のI類に該当し、口縁部のみの50は小分類まで特定できないが、51はI-2類にあたる。

長沙窯系青磁

水注（52）　体部下位から底部にかけての破片で、底部外面および内面を露胎とし、体部外面下位は施釉されている。

瓦

平瓦（53）　「佐」文字が判読できるもので、II-5類に該当するものと考えられる。

120SD093出土遺物（図55）

土師器

坏（1）　底部外面をヘラ切りし、体部の立ち上がりがきつい形態を有している。

製塩土器

焼塩壺（2）　浅鉢形を有するもので、内外面ともに指頭圧痕跡を留めている。

4）その他の遺構出土遺物

性格不明の小穴や、窪み状の遺構が、これに該当する。出土状況から一括性が看取できるものはなく、自然埋没ないしは人為的な埋没によっても、周辺の遺物が散在的に埋没したと考えられる状況で出土している。

120SX001出土遺物（図56）

須恵器

蓋（1・2）　いずれもボタン状のつまみを貼付し、口縁端部外面の処理は丁寧ではなく丸みを帯びている。1は小形の蓋、2は大形の蓋になる。

坏（3～7）　3～5は、高台を貼付するもので、底部と体部の境界は明瞭。体部の立ち上がりはきつく、底部外面の処理はヘラ切り後ナデによって仕上げている。6は高台を貼付しない坏aに該当し、器面磨耗のため調整痕跡は観察できない。体部の立ち上がりは外方へ開く形状をとる。7は大形の坏で、口縁部のみの破片のため全形は判然としない。

皿（13）　器高の低いもので、底部から外方へ大きく開く体部形態を有する。底部外面はヘラ切り後ナデによって仕上げる。

土師器

坏（8）　口縁部外面下位までヘラ削りするもので、内面は器面磨耗のためミガキ痕跡は観察できない。外面はミガキaによって仕上げられている。

把手（9）　やや長めの把手で、指頭圧痕が顕著に残存している。把手のみであることから本体については不明。

甕（10）　頸部形状が「く」の字状になるもので、体部内面をヘラ削りし、口縁部内面下位から体部内面にかけて黒色に変色している。

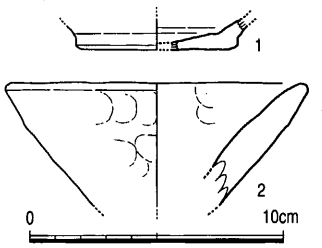


図55.120SD093出土遺物実測図（S=1/3）

製塩土器

焼塩壺（11・12）　浅鉢形のもので、内外面ともに指頭圧痕が残存している。

120SX002出土遺物（図56）

須恵器

蓋（14）　口縁部の破片で、口縁端部外面は粗くナデ、やや丸みを有している。

壺蓋（15）　口縁端部内面を内傾気味に平坦面を形成しているもので、観察できる箇所では内外面ともに回転ナデによって仕上げられている。

皿（16）　底部が下方へやや膨らむもので、体部の立ち上がりが外方へ大きく開く形態を有する。

土師器

皿（17）　外方へ大きく開く体部形態を有するもので、体部外面に煤状のものが付着している。

坏（18）　口縁部外面下位からヘラ削りするもので、口縁端部内面および外面をミガキaによって仕上げている。

甕（19）　頸部形状が「く」の字形になるもので、頸部外面に刷毛痕施がわずかに観察できる。

製塩土器

焼塩壺（20）　口縁部のみの破片で、浅鉢形のものになるものと推定できるが、立ち上がりの状況から特定は困難である。器面調整については磨耗しており、口縁端部にヘラ状工具による調整痕跡が残存している。

120SX006出土遺物（図56）

須恵器

蓋（21～23）　口縁部の破片で、21および23は口縁端部外面を丁寧に面取りして仕上げているのに対し、22は丸みを有している。

坏（25）　口縁部のみの破片で、残存状況から外方へ開く体部形態を有しているものと考えられる。

土師器

蓋（24）24のつまみはボタン状のもので、つまみ中央が窪んでいる。

120SX008出土遺物（図56）

須恵器

壺蓋（26）　口縁端部を平坦に作り出すもので、天井部外面を回転ヘラ削りする。

坏（27）　口縁部のみ残存するもので、大形の坏にあたる。器高が判然としないため椀に該当する可能性もある。

120SX013出土遺物（図57）

須恵器

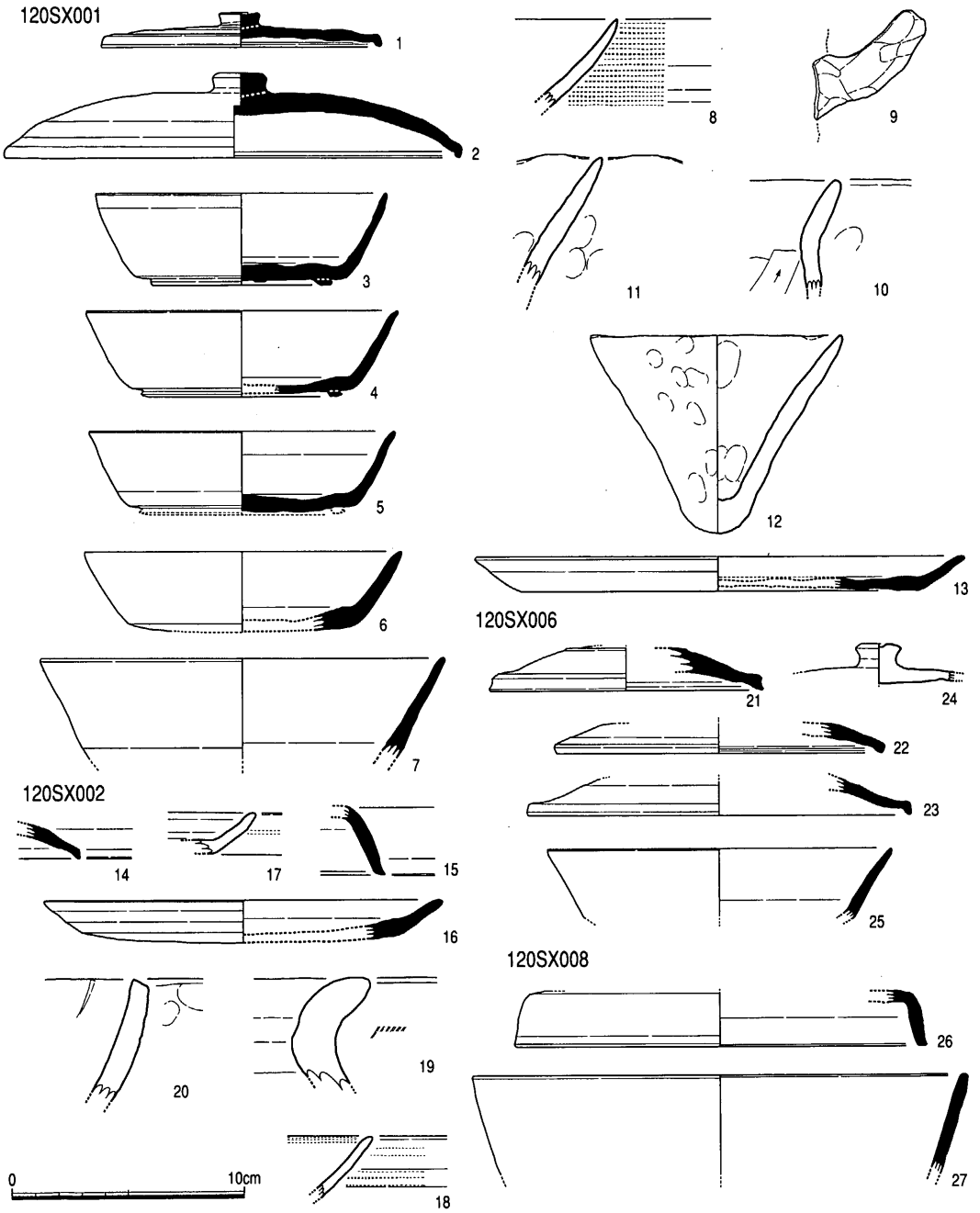


図56.その他の遺構出土遺物実測図（1）（S=1/3）

蓋（28）　大形の蓋で、口縁端部を断面三角形に形作る蓋3に該当する。口縁端部外面の処理は丁寧ではなく、端部をつまむのみの成形痕跡を留める。

土師器

坏（29・30）　内外面をミガキaによって仕上げる点ならびに、まるみのある体部形態を有していることから坏dに該当する。30は底部外面を回転ヘラ削りしており、底部外面を除いて

磨いている。

皿（31）　器高の低いもので、底部が下方にやや膨らむ形態を有している。底部外面は回転ヘラ削りによって調整され、内外面にわずかながらミガキaの痕跡が残存している。

甕（32・33）　32は小形の甕で、内外面ともに横ナデによって仕上げられており、精製の甕に該当するものと考えられる。口縁部内面から外面全体にかけて煤状のものが付着している。33は口縁部の破片で、法量については判然としない。

120SX018出土遺物（図57）

須恵器

坏×皿（34～36）　いずれも小破片のため、器種特定に至らない。

120SX022出土遺物（図57）

土師器

甕（37）　小形の甕で、器面磨耗のため調整痕跡については判然としない。

鉢（38）　鉢aに該当するものと考えられ、内面は横ナデ、外面にミガキ痕跡が観察できる。口縁端部がやや平坦面を形成する。

120SX024出土遺物（図57）

須恵器

蓋（39・40）　いずれも天井部外面はヘラ切り後ナデによって仕上げているもので、口縁端部外面は丁寧になでられず、やや丸みを有している。

坏（41・42）　41は高台を貼付する小形の坏cで、底部外面にヘラ記号が観察できる。42は体部の立ち上がりがきつい口縁部の破片である。

120SX043出土遺物（図57）

土師器

皿（43）　底部が下方へやや膨らむもので、底部から外反気味に体部は開くように立ち上がる。底部外面はヘラ切りのみ。

120SX047出土遺物（図57）

黒色土器

甕（44）　内面のみ黒色化し、ミガキcによって内面を調整するもので、外面は横ナデによって仕上げられている。A類。

120SX048出土遺物（図57）

須恵器

坏（45）　口縁部外面がやや肥厚するもので、内外面ともに回転ナデによって仕上げられている。

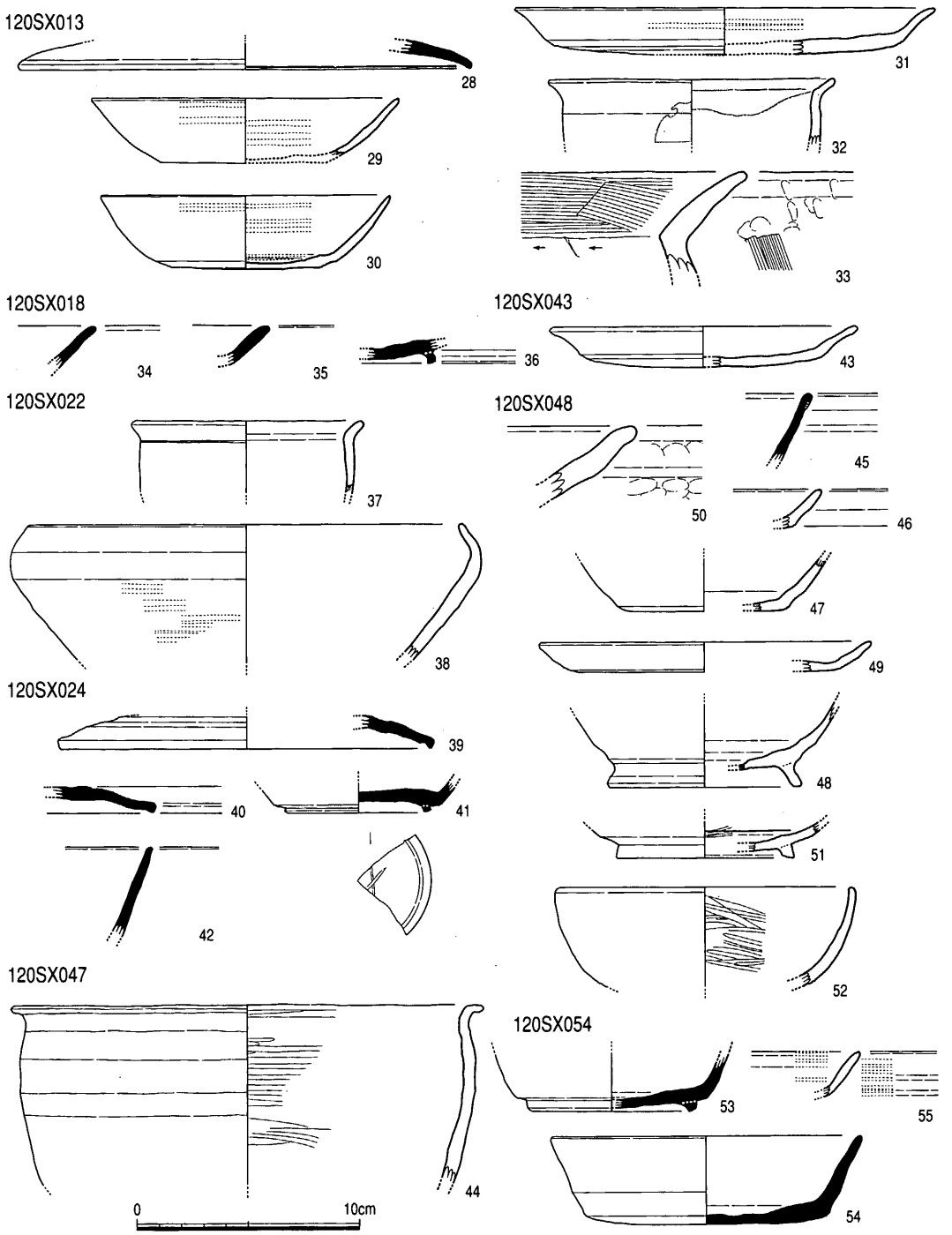


図57.その他の遺構出土遺物実測図（２）（S=1/3）

土師器

坏（47・48）　47は高台を貼付しない坏aで、底部外面の処理については、器面磨耗のため観察できない。48は高台を貼付するもので、やや丸みを有しているかのようにも見受けられる。

皿（46・49）　46は口縁部の破片のため法量については判断できない。49は器高の低い皿aで、底部外面はヘラ切り後ナデによって仕上げられている。

器種不明（50）　粗製の大形製品で、外面に指頭圧痕が顕著に残存している。

黒色土器

椀（51・52）　51は高台を貼付するもので、体部が残存しないことから体部形態については判断できない。52は体部から口縁部にかけての破片で、丸みを有する形態をとる。内面はミガキcによって仕上げられている。A類。

120SX054出土遺物（図57）

須恵器

坏（53・54）　53は、高台を貼付する坏cで、底部と体部の境界は明瞭。底部外面の処理はヘラ切り後粗いナデによって仕上げられている。54は、高台を貼付しないもので坏aに該当する。底部から体部への立ち上がりはきつく、底部外面の処理はヘラ切り後粗いナデによって仕上げられている。

土師器

皿（55）　口縁部から底部の破片で、内外面をミガキaによって仕上げている。

120SX056出土遺物（図58）

須恵器

蓋（56・57）　口縁端部外面の面取りは丁寧ではなく、つまんだ状態で仕上げている。天井部外面の処理はヘラ切り後ナデによって仕上げられている。

土師器

坏（58）　高台のみの破片であるが、底部外面を削りによって高台を作り出している。体部内外面は横ナデによって仕上げている。

120SX063出土遺物（図58）

須恵器

蓋（59～61）　いずれも天井部外面をヘラ切り後ナデによって処理するもので、口縁端部外面の面取りは丁寧ではなく、やや丸みを有している。

坏（62・63）　62は小形の坏で、底部から外方へ大きく開く体部形態を有している。底部外面はヘラ切り後ナデによって仕上げている。63は、底部と体部の境界が明瞭で、底部外面に粘土紐痕跡をとどめている。

土師器

坏（64～66）　64は高台を貼付する坏cで、体部の調整は不明瞭ながらミガキaの痕跡が内外面観察できる。底部外面の処理は削り痕跡らしきものが観察できるが判然としない。65・66は

底部外面を回転ヘラ削りし、体部内外面をミガキaによって仕上げている坏dに該当する。

甕（67）　角閃石を多く混入するもので、体部内面はヘラ削り、外面は刷毛によって調整されている。筑後国からの搬入品と考えられる。

120SX066出土遺物（図58）

須恵器

蓋（68・69）　68は口縁部断面三角形を呈するもので、天井部外面はヘラ切り後ナデによって仕上げられている。口縁端部外面の面取りは丁寧ではなく、ややまるみを有している。69は口縁端部内面に凹線を巡らす蓋4に該当する。

坏（70・71）　口縁部の破片で、全形については判然としない。71は口縁端部外面がやや肥厚している。

土師器

坏（73）　体部が外方に開くもので、内外面ともに横ナデによって仕上げられている。

椀（72）　高台を貼付するもので、丸みを有する体部形態を有しているものと考えられ椀c2に該当する。

黒色土器

椀（74）　直線的に外方へ開く体部形態を有し、内外面にミガキcの痕跡が確認できる。A類。

越州窯系青磁

皿（75）　素地特徴および形態から皿I類に該当するものと考えられる。口縁端部外面は使用によるためか釉は薄く剥離している。

120SX069出土遺物（図58）

須恵器

蓋（76）　天井部外面をヘラ切り未調整のもので、口縁端部外面の面取りは丁寧になされている。

土師器

坏（77）　直線的に外方へ大きく開く体部形態を有しており、形状から丸底坏の口縁部の可能性もある。

120SX071出土遺物（図58）

須恵器

坏（78）　高台を貼付しない坏aと考えられ、底部からの体部の立ち上がりは緩く、外方へ開く。

120SX078出土遺物（図58）

須恵器

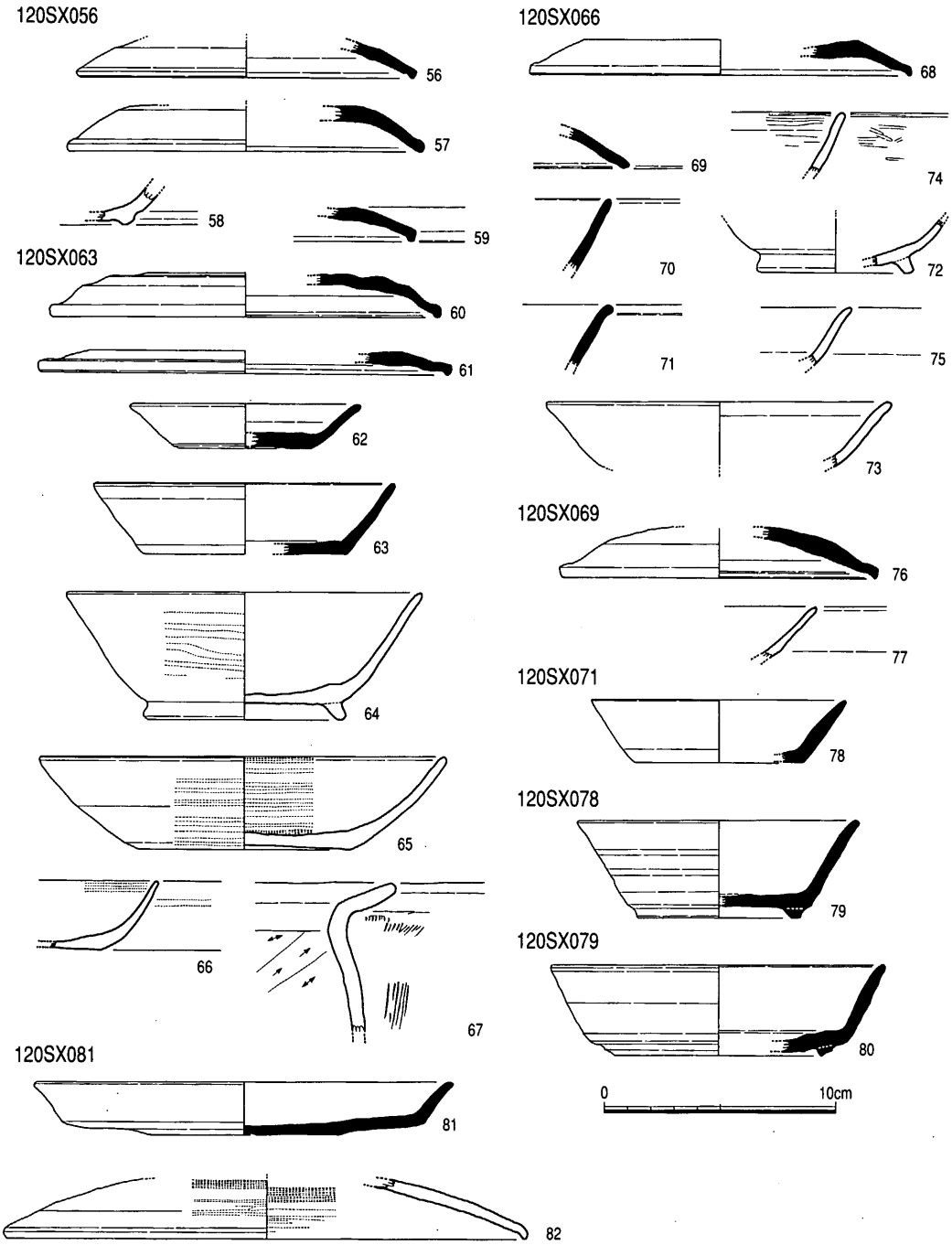


図58.その他の遺構出土遺物実測図（３）（S=1/3）

坏（79）　高台を貼付するもので坏cに該当する。底部外面はヘラ切り後ナデによって処理されている。体部の開きは大きく、底部と体部の境界は明瞭。

120SX079出土遺物（図58）

須恵器

坏（80）　高台を貼付する坏cに該当し、高台内端で接地している。底部から体部の立ち上がりはきつい。

120SX081出土遺物（図58）

須恵器

皿（81）　底部が下方へ膨らむもので、底部外面の処理はヘラ切り後粗いナデによって処理される。底部から体部へは外反気味に立ち上がる。

土師器

蓋（82）　天井部外面は回転ヘラ削りによって処理され、内外面ともにミガキaによって仕上げられている。口縁端部外面の面取りは丁寧ではなく、やや丸みを有している。

120SX096出土遺物（図59）

須恵器

坏（1）　口縁部の破片で、体部が外方へ開く形状を呈する。

皿（2）　高台を付さない皿aで、底部外面はヘラ切り後ナデによって処理する。体部の開きは大きい。

甕（3）　体部上位から口縁部にかけての破片で、口縁端部を上方につまみ上げる。口縁部外面には平行叩き痕跡が観察できる。

土師器

甕（4）　「く」字状の頸部形状を呈するもので、体部内面ヘラ削り、口縁部内面から外面にかけて刷毛によって器面調整する。

5）土層出土遺物

遺構検出時および表土除去作業時に出土したものである。

灰色砂土出土遺物（図60）

須恵器

蓋（1～3）　1および3は小形の壺蓋と考えられ、天井部外面を回転ヘラ削りによって仕上げている。2は口縁端部内面に凹線を巡らすもので、口縁端部外面の面取りは省略されている。

坏（4・5）　4は体部の開きの大きい坏で、高台を貼付しない坏aに該当する。底部外面の処理はヘラ切り後粗いナデによって処理されている。5は口縁端部をわずかに外傾させるもので、内外面ともに回転ナデによって仕上げられている。形態から金属器模倣形態と推定される。

甕（6）　頸部を「く」字形に屈曲させるもので、内外面ともに回転ナデによって調整され

ている。

壺（7）　底部外面を手持ちヘラ削りによって処理されているもので、形状から甕の可能性がある。

硯（8）　風字硯になるものと考えられるが、破片資料のため全形は判然としない。陸部分と考えられる箇所に墨痕が観察できる。

盤（9）　大形のもので、体部外面下位から底部外面にかけて回転ヘラ削りによって仕上げている。口縁端部は平坦面を形成し、全体として器厚が厚い。

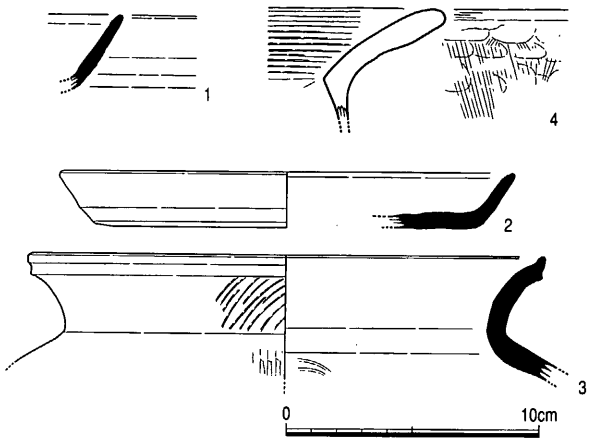


図59.120SX096出土遺物実測図（S=1/3）

土師器

皿（10）　底部外面は糸切りで、体部から口縁部内外面は横ナデによって仕上げている。

耳皿（11）　小坏aの口縁部を折り曲げ、耳皿様に形づくるもので、底部外面はヘラ切りによって処理されている。

坏（12）　外面を手持ちによって削り、内面に暗文を施すもので、器厚が厚い。

甕（13）　頸部内面の稜が無く、緩やかに外反する頸部形態を有し、体部内面をヘラ削りによって仕上げている。胎土に角閃石を多く混入している。

緑釉陶器

椀×皿（14・15）　14は口縁部がわずかに外反するもので、体部外面下位をヘラ削り、内面をミガキによって調整されている。焼成状態および施釉状況から洛西産の製品と考えられる。15は、高台部分の破片で、見込み部分を磨き、貼付高台である。防長産と考えられる。

灰釉陶器

椀×皿（16）　体部外面および底部外面をヘラ削りし、畳付け内側を凹線状に窪ませる形状を有している。

白磁

椀（17・18）　いずれも口縁部のみの破片で、椀I-1類に該当する。

越州窯系青磁

椀（19）　素地組成および輪状高台に削り出す形態から、椀I-b類に該当する。

水注（20）　把手であるが、水注に貼付されたものと考えられる。把手は貼付られ、把手表面はヘラで三条の沈線が描かれている。

灰色砂土

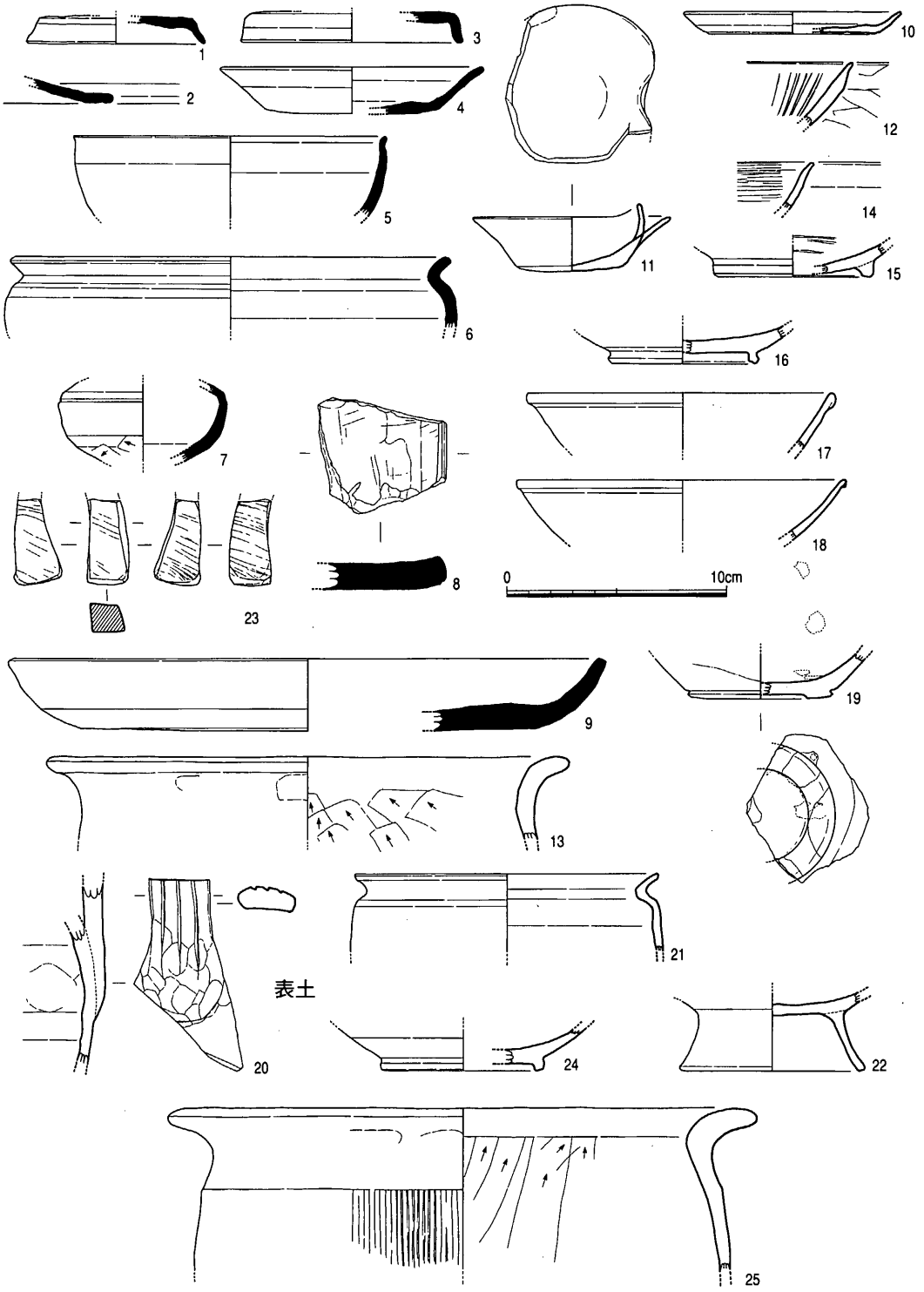


図60.灰色砂土・表土出土遺物実測図（S=1/3）

壺（21）　「く」の字状に屈曲する頸部形態を有し、全面に施釉。素地組成から精製品に入るものと考えられる。

石製品

砥石（23）　四面を使用面として残存するもので、長軸方向に斜行するように擦痕が観察できる。

表土（図60）

土師器

甕（25）　頸部形状が「く」の字のもので、体部内面ヘラ削り、体部外面は縦方向の粗い刷毛によって調整されている。

黒色土器

椀（22）　高脚の高台で、極めて器厚が薄いことから金属器模倣のものと考えられる。A類。

緑釉陶器

椀（24）　削り出し高台で、内面はミガキによって仕上げている。洛西産の製品と考えられる。

木製品（図61・62）

溝遺構から出土したもので、1～3は120SD020黒色土、4・5は120SD020灰色砂、6・7は120SD030出土である。

杭（1～3・6）　いずれも120SD020の溝古流向に対して直交するように打ち込まれていたもので、自然木をそのまま活用し、杭先端部分を削り出しにより尖らせているのみである。長短があり、3は自然木の湾曲をそのままとどめている。

木簡再加工品（4）　荷札木簡と考えられるが、文字などは器表面が削り取られているため消失している。上部は木簡であった時の形態をとどめているが、下位は削りによって尖らせている。残存形状から木簡の半裁状態のものと推定できる。

板（5）　板材を棒状に加工したものと考えられ、用途については判断できない。下位に下がるにつれて削りによって細くなっている。

人形（7）　棒状の木材を削りによって形づくられたもので、顔面部分に近いほど加工の手が加えられている。ただし、人形残存部下位は手ズレによる加工痕磨耗の可能性もあり、使用過程を考慮して観察する必要もある。頭頂部は細かく削られており、やや凸気味に仕上げられている。全体に粗削り状態で、滑らかさに欠けている。

e.小結

遺構

条坊痕跡

条路および坊路と考えられる痕跡を検出しており、それぞれについて南門中点からの距離を

算出している。

坊路

坊路痕跡として考えられるのは、120SD020・120SD025・120SD030の三遺構であり、調査区北東部分については、この三者が全て重複しており道路と考えるには困難な状況となっている。堆積物が砂など水流を想定できる堆積物であり、調査区北東部幅で約7.0m、深さ約0.7mを測り、これまで条坊域内で検出した条坊路とは規模、埋没環境が異なっている。ただしこれらの遺構が南へいくと道路側溝のような遺構配置をとるようになり、これまでの調査で得られた条坊痕跡と同様な傾向にある。したがって、調査区東北部における三者の遺構状況からは、人工的な河川（運河）の性格が想定できるが、南東部においては道路痕跡の性格が付与できる。各遺構の政庁中軸線からの距離は、東側溝心で約450m、道路心（坊路）で約455mを測る。

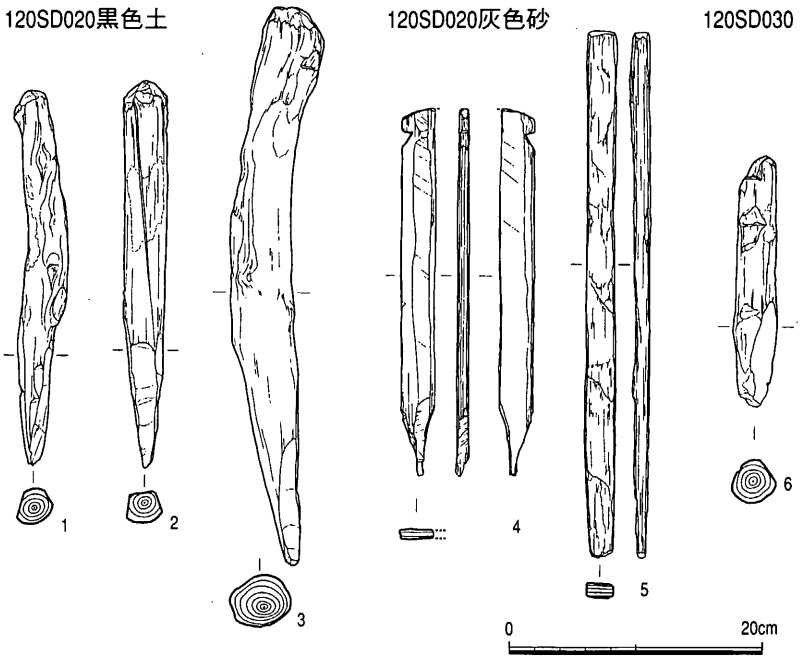


図61.溝出土木製品実測図（S=1/3）

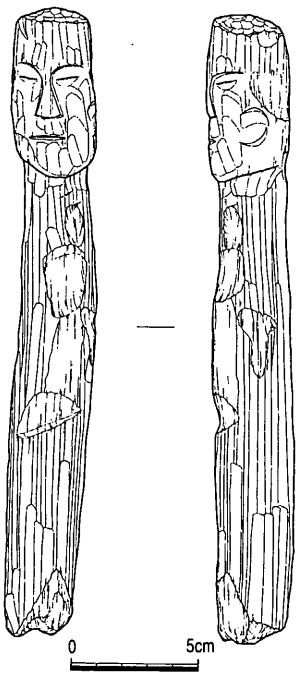


図62.溝出土木製人形実測図（S=1/3）

条路

条路痕跡としては、120SD027を北側溝、120SD059・120SD091を南側溝とする道路と考えられ、検出面が当時の地表面であると仮定すると、条坊域内で検出される土坑の連続によって道路を表現するものと考えられる。先述した坊路側溝である120SD025は、北側側溝である120SD027との切り合い関係が看取できる状況にあるが、堆積土層の分層など明確に判断を下せる状況ではなかった。この条路は、政庁南門中点から南へ約1360mに位置している。

建物

建物は、いずれも掘立柱建物で、柱沈下を防ぐために根石を埋設したものも見受けられた。建築時期については、柱穴出土遺物から以下の時期に上限を求めることができる。

奈良期後半　120SB010、120SB015

時期不明　　120SB035

各建物の建造方向は、表2のようになる。

振れの大小は看取できるが、いずれもわずかに東に振れる点は共通している。遺構配置からも建物の南に存在している条路に規制されたものと解することができる。ただし奈良期後半とした二棟については重複関係にあるものの遺構上での切り合いを確認できていないことから、新旧については判然としない。

遺物

120SK005出土遺物

時期

ほぼ完形に近い状態での出土であり、いずれも黒色土からの出土であることから、一括廃棄資料であると考えた。出土した食器は、本文にて解説してきたとおり、須恵器・土師器が出土しており、その中に小破片ながら緑釉陶器が出土している。

ではこれら須恵器・土師器から導き出せる埋没時期は、いつ頃になるであろうか。

まず須恵器は、ボタン状のつまみを貼付した蓋が主流で、中に前代に主流であった扁平つまみを貼付したものがわずかに含まれている。また口縁端部外面の処理は、丁寧ではない面取りを行ったものが多く、丁寧に面取りしたものは少ない傾向にある。一方坏体部は外方に開くものが主流であるが、中には体部立ち上がりがきついものがわずかに存在している。皿は、体部の立ち上がりがきついものと外方へ開くものが半々に存在しており、傾向の強弱については判然としない。

続いて土師器は、坏dが主流をなしているが、内外面のミガキaが丁寧なものが多く、器高も高いものが多い。ただし、底部外面のミガキは省略されており、やや形骸化の傾向は認められる。一方ミガキaの形骸化しつつあるものも少ないが存在している。椀については、まだ高台と体部はわずかに独立しており、一体化傾向は認められない。皿については、底部外面を回転ヘラ削りするものが大半であり、ヘラ切り後未処理ものは微量にしか存在していない。ミガキaは坏d同様に底部外面は省略されている。時間変化があまり鋭敏ではないが甕は、やや胴張りのするものが多い傾向にある。

以上のことを総合すると、様相として大宰府IV期＜＜V

表2.掘立柱建物建造方向

遺構	建造方向
120SB010	N3° 0′ 40″ E
120SB015	N2° 21′ 5″ E
120SB035	N7° 13′ 28″ E

期に該当するものと考えられ、長岡京期頃が都と大宰府の食器の平行関係から求めることが可能であろう。

緑釉陶器の位置づけ

小破片であり、全形が判然としないことが残念だが、口縁部の傾きから皿と推定できるものである。素地焼成は黒色に変色していることから須恵質と判断できそうであるが、軟質であることから、土師質が埋没によって変色した可能性もある。釉調は淡い黄緑色を呈し、銀化傾向が認められる。口縁部形態から全形を推定すると平安期に特有な皿に復原できるのではないかと考えられ、その初現資料として位置付けられる可能性が生じる。しかし生産地に近く多量に消費している都においては、長岡京期での平安期緑釉陶器の出土はみられず、大宰府と都との食器使用形態の差として解決するには問題が大きすぎる。今後の資料増加を待つ必要があるが、大宰府での共伴例の検証を視野に入れて検討してゆく必要がある。

木製人形

時期

木製人形が出土した遺構は、本文にて記載してきたとおり、120SD030の溝遺構であり、木製人形の廃棄年代を推定するには、困難な点が多く存在する。この溝は、上位に120SD020、120SD025など性格を同じくする遺構が形成されており、さらに120SD030自体も砂を主体とする堆積物によって構成されている。また、この遺構自体調査区北側へ展開していることから、堆積時期は調査区内で出土した遺物にて判断するしかない。換言すると、同一遺構が調査区北側で検出される可能性もあり、堆積時期については、現状で判断できる内容での推定にしかすぎないということである。また、判断材料とする遺物についても、最も新規の型式によって判断されるが、これと木製人形の廃棄された年代が等しい関係にあるのではない。

では木製人形の残存状況から考えて、製作技法が顕著に観察されること、調査時の欠損以外、顕著な欠損箇所が観察できないことから、廃棄されてあまり時間経過を考慮する必要がないものと考えられる。したがって、水による磨耗がないことから廃棄後の時間経過を長く見積もる必要がなく、廃棄と同時ないしは近似した時期に埋没したものと考えられる。

さて120SD030の堆積時期については、図38－17～22が判断する材料となる。土師器皿a、坏a×皿a、椀c2、などがある。その多くの形式については大宰府IX期に分布中心を有するもので、搬入品としての灰釉陶器椀が折戸53窯式に比定できることを考えると、大宰府IX期の食器が多く出土していることになる。しかし、この中で皿aに最も新規の型式があり、法量から大宰府X期に分布中心があるもので、存続幅を考慮するとIX期～XI期ということになる。したがって現状では、最も古く考えて大宰府IX期、新規に考えて大宰府XI期ということになるが、全て存続時間幅の中で許容できる範囲内であることから、大宰府IX期頃に埋没した可能性が高い。

分布

今回出土したような古代の木製人形は現在のところ、長岡京・平安京の二カ所から出土しており、大宰府例を加えると3カ所ということになる。大宰府例を除くといずれも都にあたっている。京内出土品は、烏帽子を頭部に表現し、、官人の様を忠実に表したものや、大宰府の例のように削りによって頭部を丸く仕上げているものなど様々である。大宰府例については、頭部は細かく削られ付帯するものは何も表現されていない。このことが等しく造形対象物を表現できなかったと考えることは早計であり、造形対象物の追求を含めて今後検討してゆくべき課題である。しかし、木製人形が平安京において「市」推定地に出土しているという共通性を考慮すると、「市」の機能を考えた場合、物資のみならず人の集合を背景として十分考慮できることになる。

（中島恒次郎）

3.154次調査

a.調査に至る経過

調査地は、太宰府市都府楼南３丁目665-1で、鏡山推定条坊案右郭七条十五坊に位置している。

平成５年７月８日にダイワハウス工業を仲介とし、調査地を含む他２筆の土地について、共同住宅建設に伴う文化財の取り扱いの有無に関する問い合わせがなされた。また平成６年３月28日に（株）ナガタ建設を仲介とし、地権者である本岡孝文氏より調査地を含む他３筆の土地について、共同住宅建設に伴う文化財取り扱いの有無に関して問い合わせがなされた。当該地域では、福岡県教育委員会による調査および太宰府市教育委員会による調査が、大宰府西市の所在を求めて発掘調査が進められており、今次調査の対象地についても、奈良時代の遺物が表面採集できるなど、地下に埋蔵文化財が包蔵されている可能性は極めて高かった。したがって、平成６年４月７日に試掘調査を実施し、埋蔵文化財の状況を確認した。試掘調査は各筆の土地に一条ないし二条のトレンチを設定し、遺構の有無および規模、遺構までの地表標高からの深さを確認した。試掘調査の結果、条坊痕跡と考えられる南北溝、および井戸の可能性が高い土坑、さらには小穴が多数検出され、遺構密度は極めて高いことが判明した。遺跡の規模および地表標高からの深さについての回答文書を地権者である本岡孝文氏に送付するとともに、開発担当者である（株）ナガタ建設との協議へ入った。その後数度にわたる協議の結果、発掘調査に関わる合意がなされたため、平成６年７月～９月にかけて発掘調査を実施した。開発対象面積は1000㎡、発掘調査面積は820㎡を測る。試掘調査および発掘調査は、中島恒次郎が担当した。なお発掘調査地以外の３筆の土地については、耕作地および駐車場として活用され、埋蔵文化財は地下に保存されている。

b.基本土層

調査前状況が水田であったことから、約0.4mほどの耕作土および床土が形成されている。これら水田耕作に関わる土を除去すると、遺物を多量に包含する茶黒色土が堆積しており、この遺物包含層下に遺構を検出した。これら遺構の大半は、黄色土に切り込むかたちで検出されたが、調査区南東部分では灰茶色土による整地層が薄く堆積しており、この灰茶色土上面を生活面とした遺構が形成されている。この灰茶色土を除去した下面からは遺構が検出できなかったことから、後述する各遺構を形成する際の整地事業である可能性が高い。

c.遺構

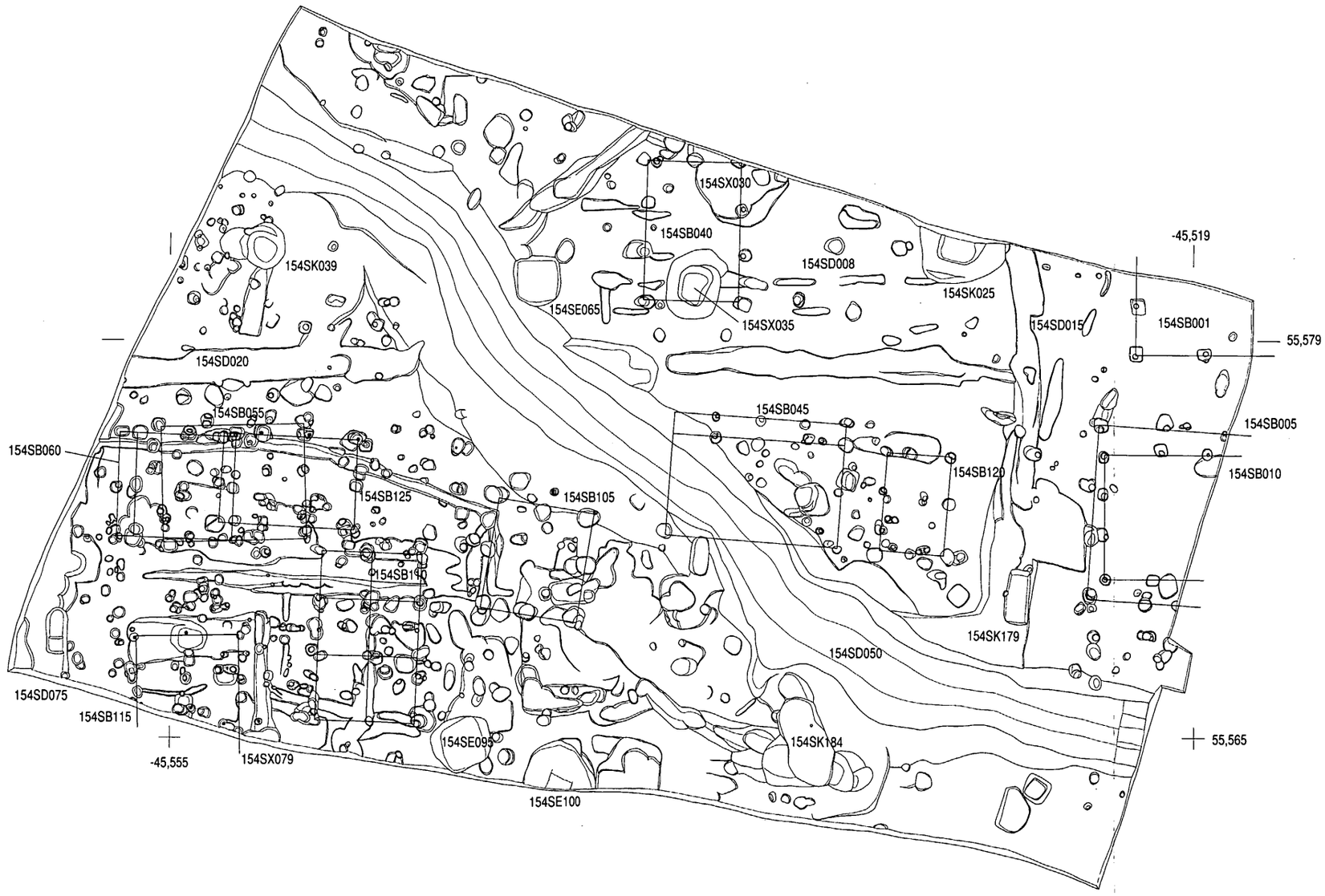


図63.条坊跡154次遺構配置図（S=1/200）

1）掘立柱建物

今回の調査で確認できた建物跡は、全て掘立柱建物跡で、調査区北西部および南東部以外の全域で確認している。特に、調査区西部においては、５棟の建物が検出され、うち３棟は前後の関係にある。各建物の建造方向および柱間距離は、表３および図64～75にまとめている。

なお柱間距離は、柱痕跡が残存しているものに関しては、柱中心間の距離を計測し、柱痕跡が残存していなかったものに関しては、柱掘り方の中心で計測している。建造方向については、梁行方向で計測すべきであるが、規模不明確なものがあるため、梁行および桁行方向を問わず、全て座標南北軸に対し小数値をもって表現している。したがって、桁行の方向をもって算出した数値については、90°を加算して算出していただきたい。

包含層および検出遺構中から目立った瓦の出土が確認できていないことから、瓦葺き建物であった可能性は極めて低い。

154SB001

調査区北東隅に検出した建物で、柱穴３基を検出したのみであるため、建物規模に関しては不明確である。柱掘り方は、すべて略長方形を呈しており、約0.15mほどの柱痕跡を留めていた。全ての柱は、黄色土ブロックを混入する黒色土によって裏込めされ、礎盤としての部材は確認できなかった。なお154SB001cについては、柱穴内土層に乱れがあることから、柱抜き取りの可能性がある。

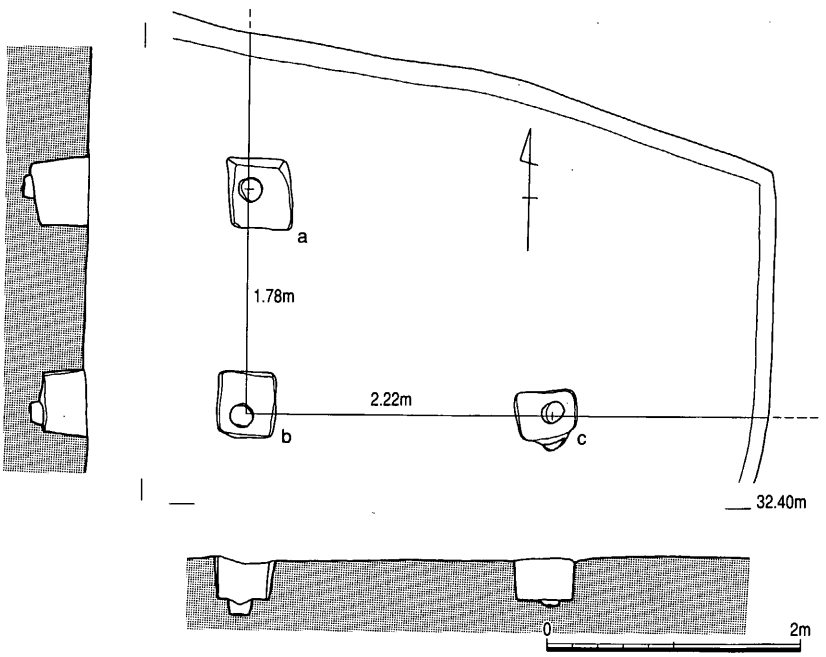


図64.154SB001遺構実測図（S=1/60）

154SB005

調査区東部に検出した建物で、調査区東部へ展開するものと考えられる。柱掘り方は、略長方形のものがあるが、略円形ないしは不整形なものと統一性が見られない。特に154SB005g柱穴に関しては、柱痕跡と考えられる柱穴のみを検出しており、遺構形成面の後世の削平による形状損失の可能性が高い。各柱穴の柱痕跡は、154SB005cおよびdにおいて確認しているが、他

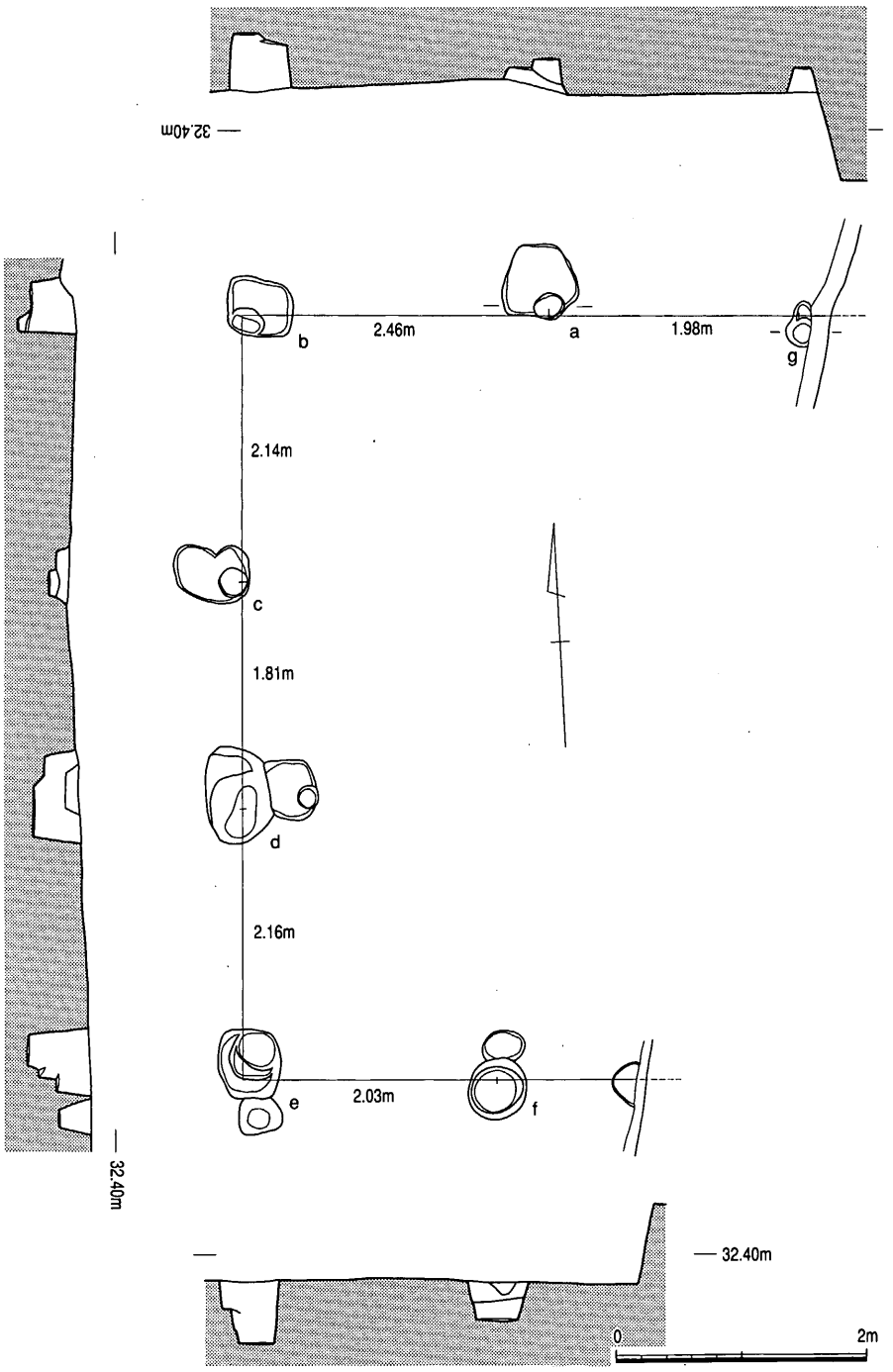


図65.154SB005遺構実測図（S=1/60）

の柱穴に関しては、確認できなかった。

154SB010

調査区東部に検出した建物で、154SB005同様に調査区東部へ展開するものと考えられる。な

お154SB005の内部に検出されており、154SB010eと154SB005d柱穴との切り合い関係から、154SB010が先行する建物であると考えられる。ただし、建造方向にずれが生じていることから、建て替えとするにはお互いの時間軸上での位置づけなど解決すべき課題がある。なおg柱穴以外は全て柱痕跡を留めており、直径約0.2m前後の柱材が使用されていたものと考えられる。

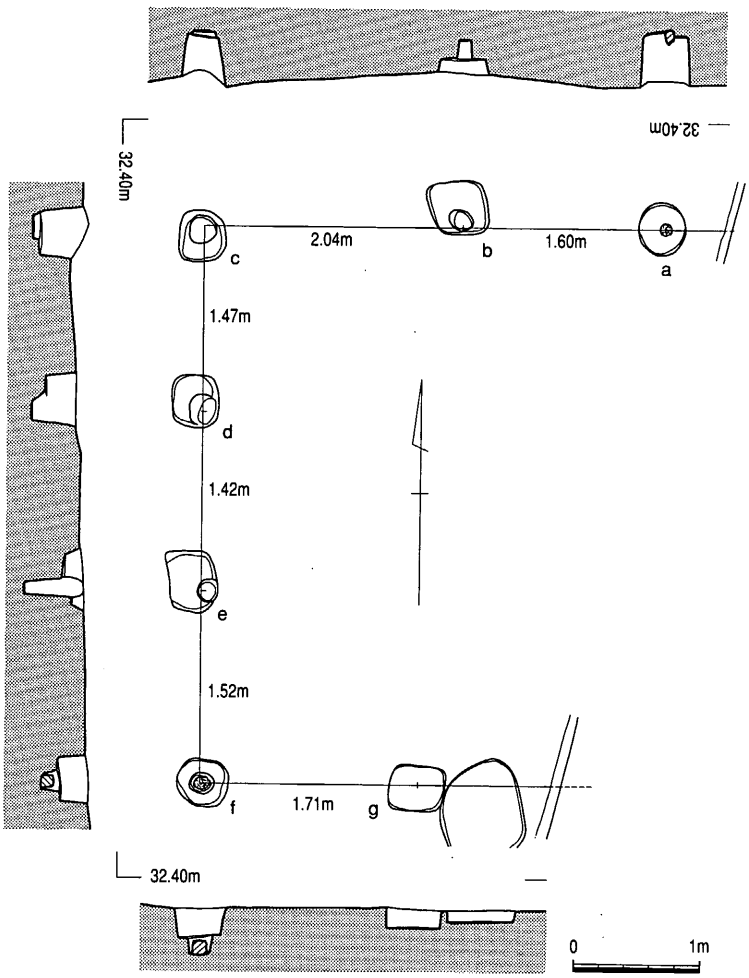


図66.154SB010遺構実測図（S=1/60）

154SB040

調査区北部中央にて検出した建物で、梁行3間、桁行2間の南北棟で、柱穴1基を154SX035の形成によって欠失している。柱掘り方は、略方形から円形と様々な形を留めているが、略方形のものが大半を占めることから、建築当初は方形の柱掘り方を留めていたものと考えられる。なお建物南側に2基凹み状の遺構が検出され、建物に平行に並んでいることから、154SB040に付帯する柱穴である可能性も考えたが、遺構の深さが極めて浅かったため、除外して考えた。柱間距離は、約1.7m前後を測るが、西梁行の柱間は規則性がみられない。

154SB045

調査区中央部にて検出した建物で、梁行4間、桁行2間の東西棟で、北側に庇が取り付く構造であったと考えられる。なお建物南西部の大半を154SD050によって欠失した状況になっているが、遺構の切り合いからは、154SB045が154SD050を切っている。柱穴掘り方は、略円形のものがほとんどで、柱痕跡を留めるものも少ない。柱間は桁行のほうが若干広い。

154SB055

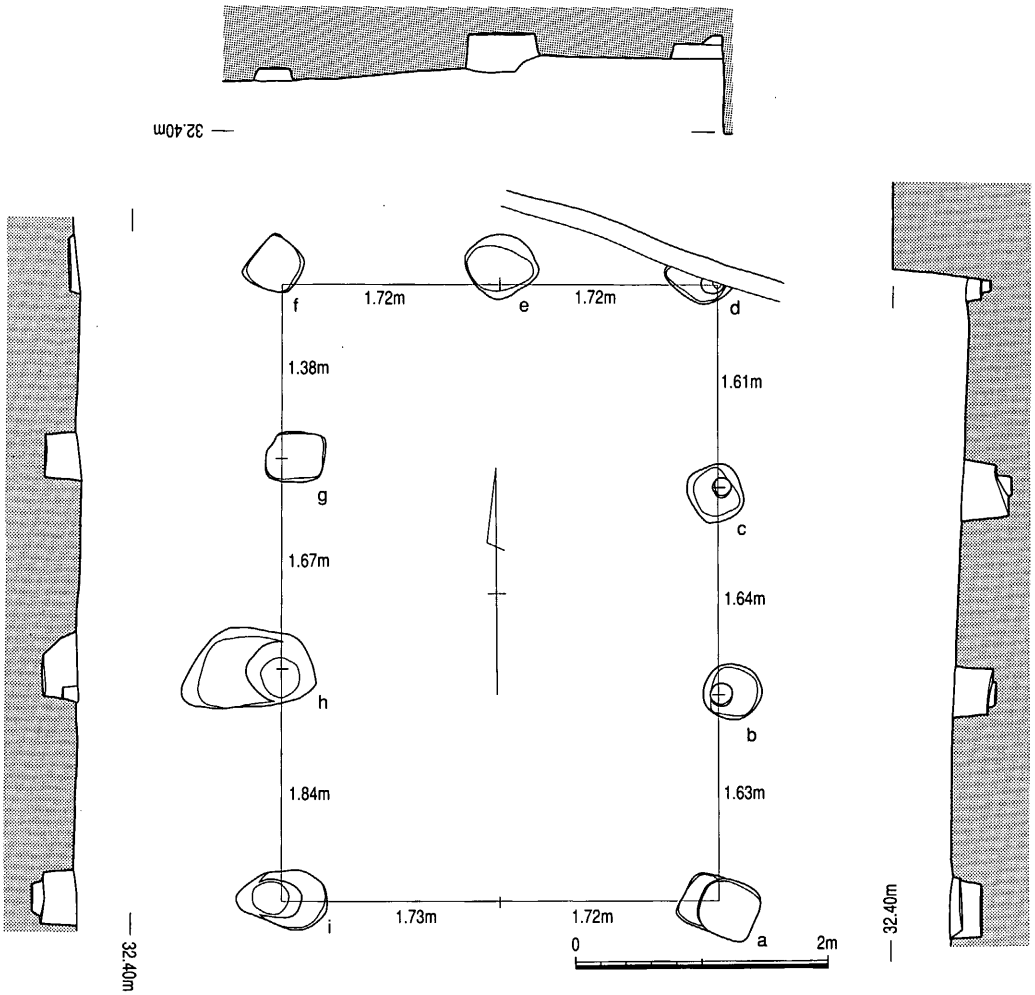


図67.154SB040遺構実測図（S=1/60）

調査区西部に検出した建物で、梁行３間、桁行３間の東西棟の建物と考えられる。梁桁ともに等間の建物であるが、柱間距離の差から建造方向を推定した。柱掘り方は、様々な形状を呈しているが、概して略方形を呈するものが多い。柱痕跡を留めるものは少なく、他の建物に対して、柱掘り方の深さが著しく浅い。後世の削平による欠失も考慮に入れておく必要はある。

154SB060

調査区西部に検出した２間×２間の建物で、西側に庇が取り付くものと考えられる。建物中央部にも柱痕跡を確認したことから、束柱ないしは主柱の可能性があり、庇部分を含めると東西棟であったものと考えられる。柱穴には、柱そのものが残存するものや、柱痕跡が残存するものなどがあり、残存していた柱痕跡から、円柱であったものと考えられる。柱の直径は、0.15m前後を測る。

154SB105

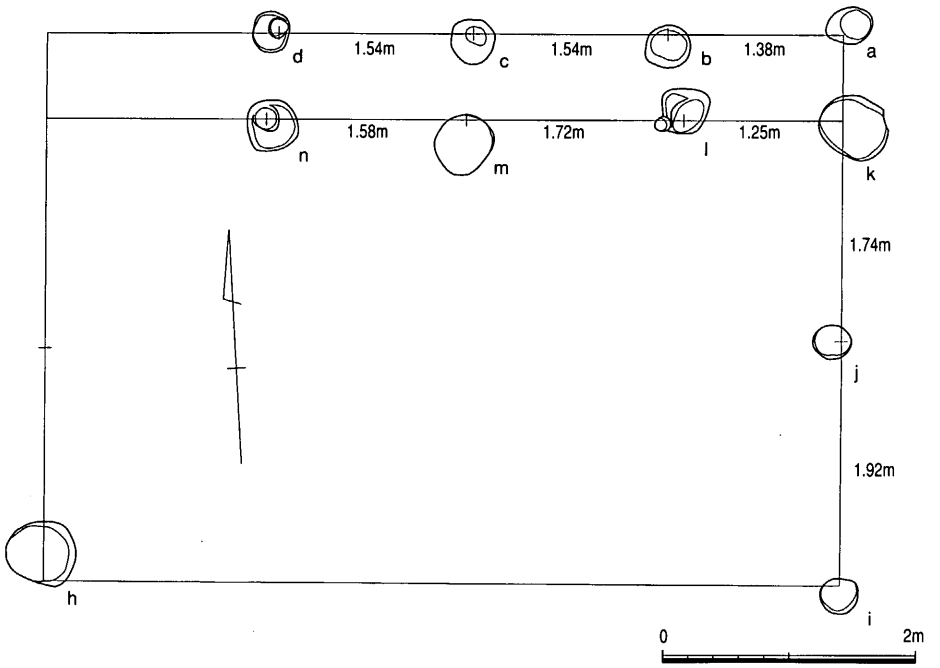


図68.154SB045遺構実測図（S=1/60）

調査区中央部にて検出した２間×２間の建物で、柱掘り方が平均で約0.5m前後を測る。柱規模から見ると、他の建物に比して規模が大きい。柱痕跡も残存しているものがあり、柱そのものの残存する154SB105aについては、柱掘り方北東隅に検出し、直径約0.2mを測る。柱形状は、残存状況からみて円形を呈していたものと考えられる。この柱穴aは、154SD050の堆積土下位より検出していることから、154SD050に先行する建物ないしは同時併存していた可能性はある。

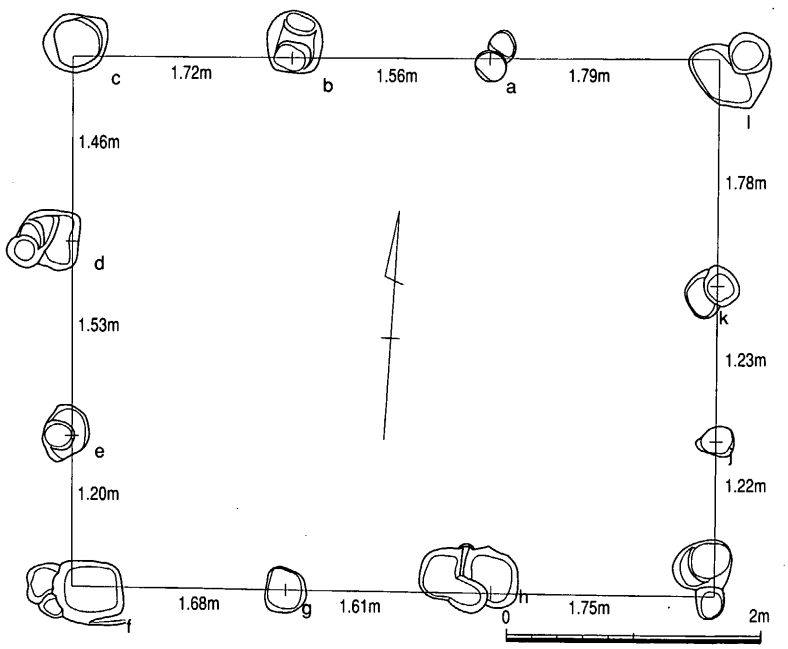


図69.154SB055遺構実測図（S=1/60）

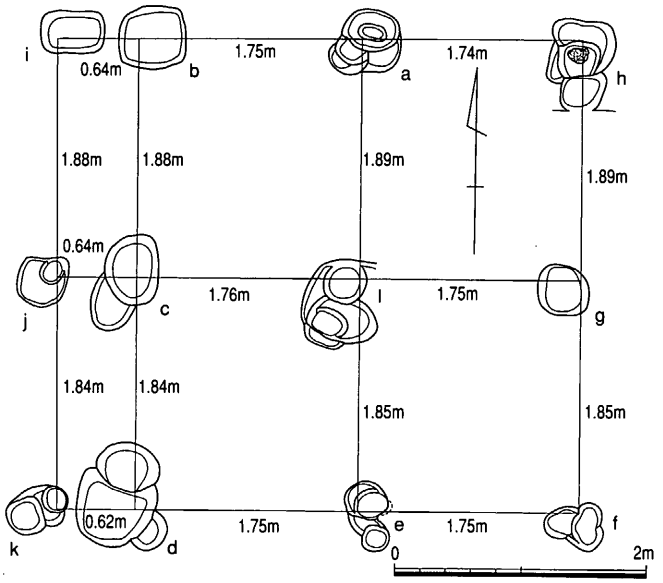


図70.154SB060遺構実測図（S=1/60）

154SB110

調査区南西部に検出した建物で、梁行3間、桁行2間の南北棟で、建物中軸線上に2基の柱穴を検出している。梁行の柱間が、北側のものが約0.16mほどを測るのに対して、南側のものが約0.2mと規模が大きい。したがって、北側に庇の取り付く構造も想定できるが、柱規模が他の柱規模と同等であることから、別の構造を想定する必要がある。

154SB115

調査区南西部に検出した建物で、調査区南側へ展開するものと考えられる。建物内部にも柱痕跡を検出している。なお154SB115f柱穴には、白色粘土が堆積し、礎盤として0.2m大の角礫が埋置されていた。154SB115dおよびeについては柱そのものが残存しており、径約0.15mを測る。柱が残るものについては、礎盤としての部材は確認できなかった。建物東側には南北方向に溝が検出できており、規模からみて154SB115に伴う雨落ち溝である可能性がある。

154SB120

調査区中央に検出した建物で、154SB045の東側に近接している。梁行2間、桁行2間の南北棟で154SB120dには柱材が残存していた。残存状況からみて、直径約0.1mを測る。柱掘り方の規模は、一定していない。さらに北側の桁については中央の柱が欠失しており、やや西側にずれた小穴が、中央の柱穴である可能性はある。

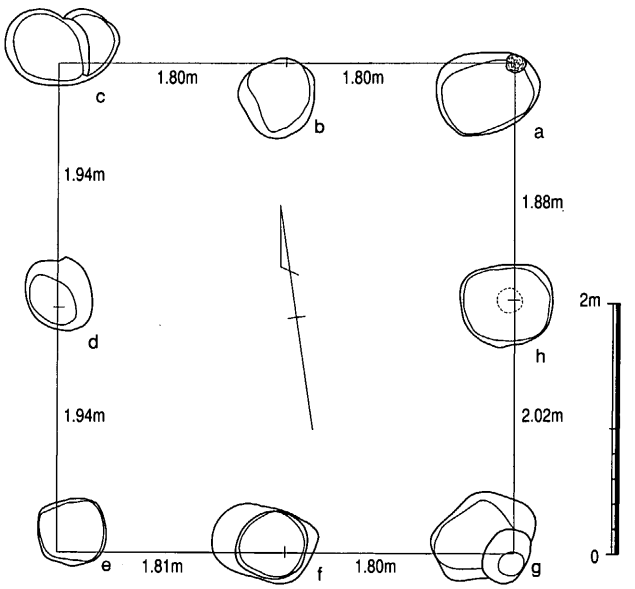


図71.154SB105遺構実測図（S=1/60）

154SB125

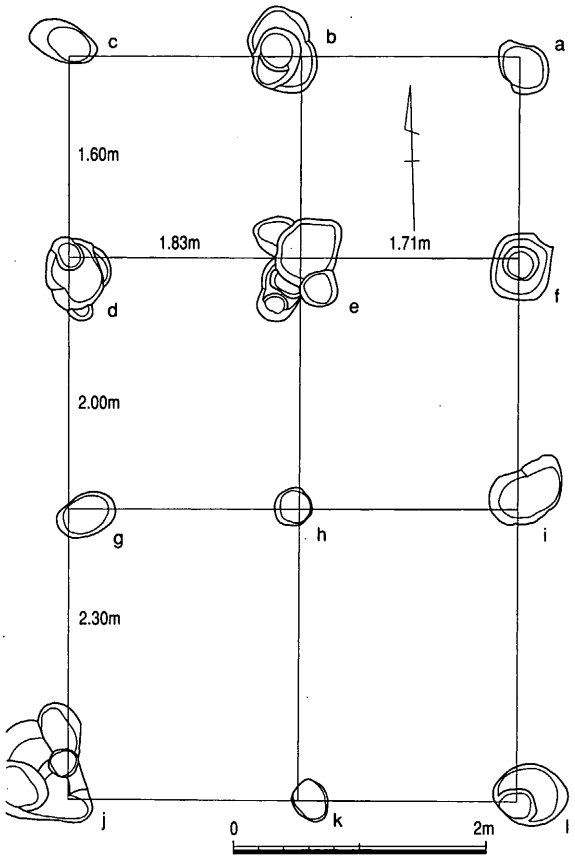


図72.154SB110遺構実測図（S=1/60）

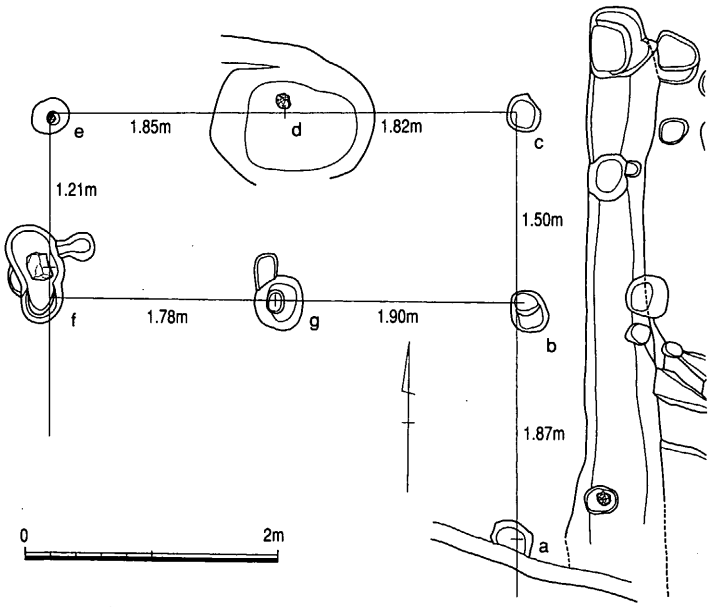


図73.154SB115遺構実測図（S=1/60）

調査区西部にて検出した建物で、梁行3間、桁行2間の東西棟の建物である。柱掘り方は、略長方形のもので、梁行南側の柱列については、上位に包含層状の堆積層および試掘トレンチによって確認し難かった関係から、遺構形状を欠失してしまった可能性が高い。

154SB125aおよびbについては柱材が残存しており、直径約0.15mを測る。

2）井戸

154SE065

調査区北西部にて検出した遺構で、一辺約1.6mを測る略方形の掘り方形状を呈している。内部には一辺0.9mの方形の井戸枠が検出された。井戸枠は、腐植が著しく板材の痕跡程度しか残っていなかったが、板材に臍を切って組み合わせる構造を取っていた。また井戸底には、長軸長0.5m、短軸長0.3mの楕円形に変形した曲げ物が置かれている。また井戸枠四隅には丸木が固定材として利用されていた。この井戸154SE065は、溝154SD050を切っている。

154SE095

調査区南部にて検出した遺構で、裏込めに人頭大の亜円礫を使用し、方形枠を有する井戸であった。井戸枠材には、扉材など他の部

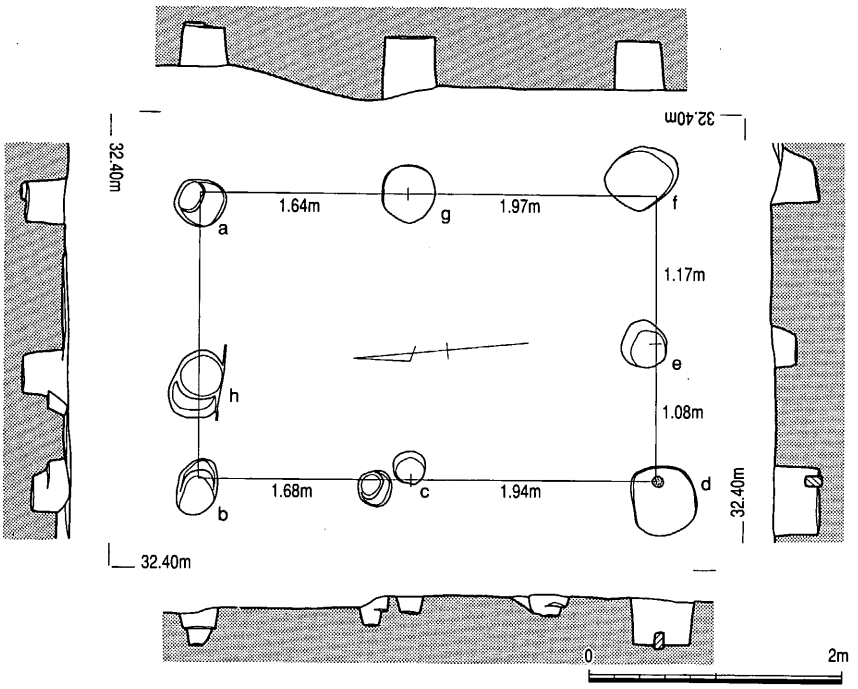


図74.154SB120遺構実測図（S=1/60）

材を転用しており、井戸枠形状も台形を呈するなど、極めて粗雑な造りを有しているものと考えられた。遺構調査を進めると、遺構東部の裏込め土の崩壊による井戸枠形状崩壊が生じており、さらに完掘すると下位より、一辺1.10mほどの井戸枠痕跡が検出された。したがって井戸構築当初は、最下部にて検出した一辺1.10mのほどの方形枠を有する井戸が、使用に伴って崩壊し、補修を行う目的で他の部材を転用して、井戸枠を補修したものと考えられる。

154SE100

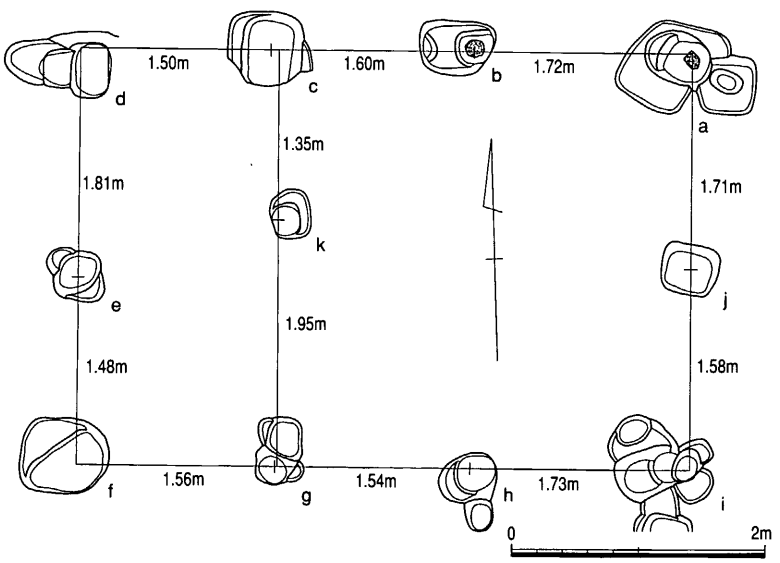


図75.154SB125遺構実測図（S=1/60）

調査区中央、先述した井戸154SE095の東側に隣接して検出した井戸で、調査区南へ展開するものと考えられ、遺構全形については不明である。計測可能な法量は、直径約2.4mを測り、遺構内部に一辺約0.8mの方形枠を有している。枠材の

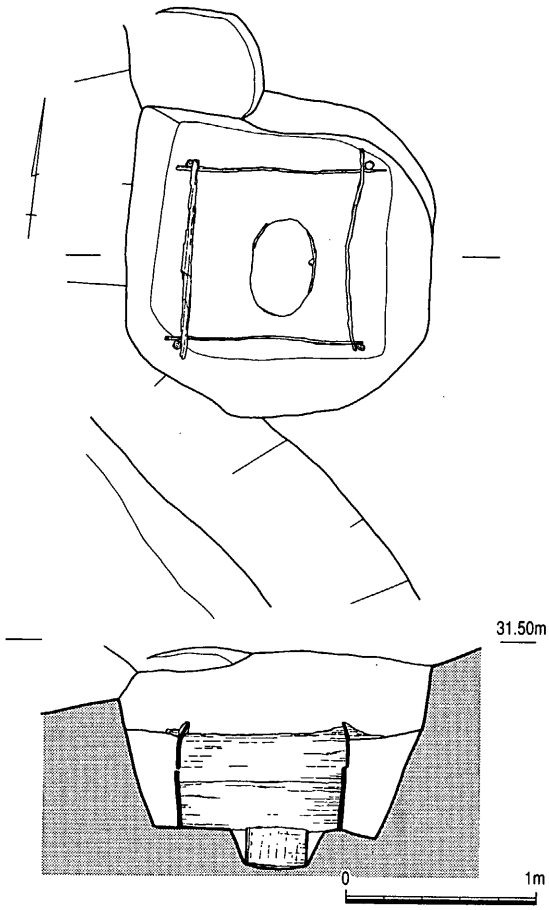


図76.154SE065遺構実測図（S=1/40）

残存状況は極めて悪く、板材痕跡のみを確認できる程度であった。

3）溝

検出した溝と考えられる遺構は、調査区を斜めに横断する自然流路と、条坊痕跡と考えられる溝、さらには敷地を区画する溝など性格付与に苦慮するものまで様々なものを検出した。

154SD008

調査区北側を東西に横断する遺構で、後述する154SD020に平行に並んで土坑状に連続することから、溝上端が欠失した遺構という判断から溝として報告した。堆積土の状況は灰茶色土が浅く堆積しており、154SD020と対になって何らかの土地区画を示すための標識遺構であると考えられる。この遺構は154SX035を切っている。

154SD015

調査区東部に検出した南北溝で、やや東に膨らむように弧状を呈する。後述するように154SD020および154SD050と接しているが、切り合い関係は確認できなかった。またこの遺構の下位から154SK179が確認でき、溝が機能していた際には、154SK179も機能していたものと考えられる。茶黒色土が堆積していた。

154SD020

調査区中央を東西に横断する東西溝で、途中154SD050によって寸断されてはいるものの、東西に延びる一連の溝の可能性があると考え、両者を154SD020として報告した。断面形状台形を呈しており、154SD015および154SD050との前後関係については、明確に確認できていない。各遺構の切り合いが想定できる箇所での精査を行った結果であることから、3者の遺構は同時埋没の可能性がある。

154SD050

調査区中央を南東から北西に流れる溝で、溝形状および規模からみて自然流路としての性格を考えた方が蓋然性は高いものと考えられる。遺構上面には、遺構堆積土の沈み込みに伴って、

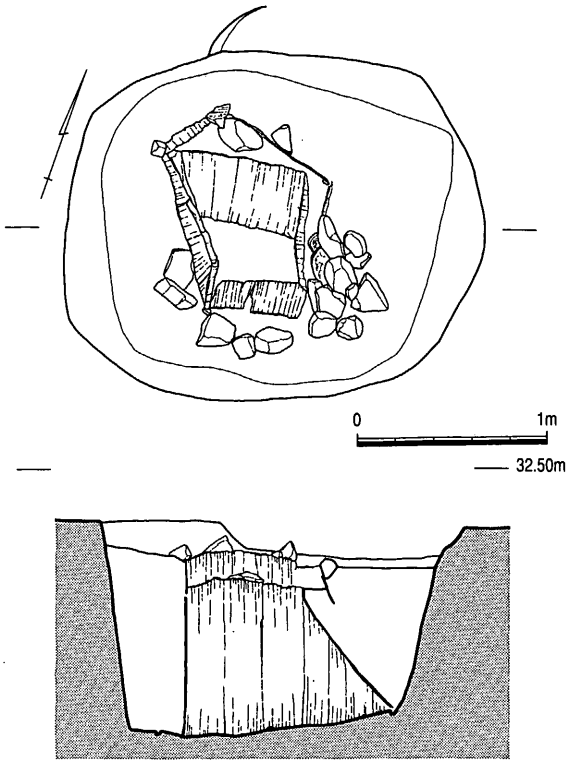


図77.154SE095遺構実測図（S=1/40）

上位に堆積している茶黒色土（遺物包含層）が覆っていた。当初遺構最終堆積層として調査を進めていたが、土層観察図（図84）に見るように茶黒色土の沈み込みおよび、その下位に整地層と考えられる黄白色砂質土を含む淡茶黒色土が確認できたため、この茶黒色土は遺物包含層の未除去状況と判断し、遺構最終埋没土からは除外した。先述した整地土と考えられる土層は溝中央部分に検出でき、掘立柱建物154SB045の柱穴は、この整地層上面から切り込んでいる。この整地層下には、自然流路として機能していた際の堆積土で、粘質土および砂質土の混合土層を呈している。ただし下位に堆積している土層ほど粒度が粗いことから、当初は流れが想定でき、次第に流速の遅い河川へと移行していったものと考えられる。

154SD075

調査区西端部に検出した遺構で、遺構全形を調査区内で確認できていない。しかし調査区の南に所在する水田を試掘調査した際、南北溝を確認しており、この154SD075がこの南北溝の延長部分にあたることから溝と判断した。溝堆積層の氾濫に伴う乱れ部分が、溝北側に見られるが、残存状況全体からみて、ほぼ直線に南北に延びるものと考えられる。

4）土坑

154SK025

調査区北東部に検出した土坑で、調査区北部へ展開するものと考えられ、全体規模に関しては不明である。計測できる規模は、最大長約3.1mを測り、内部に一辺約1.5mの掘り込みがある。深さは、検出標高から約0.95mを測る。遺構形状から井戸の可能性もあるが、井戸枠等の井戸構成施設は確認できなかった。遺構内からは散在的に遺物が出土しており、「諸公」と墨書した土師器坏が出土している。

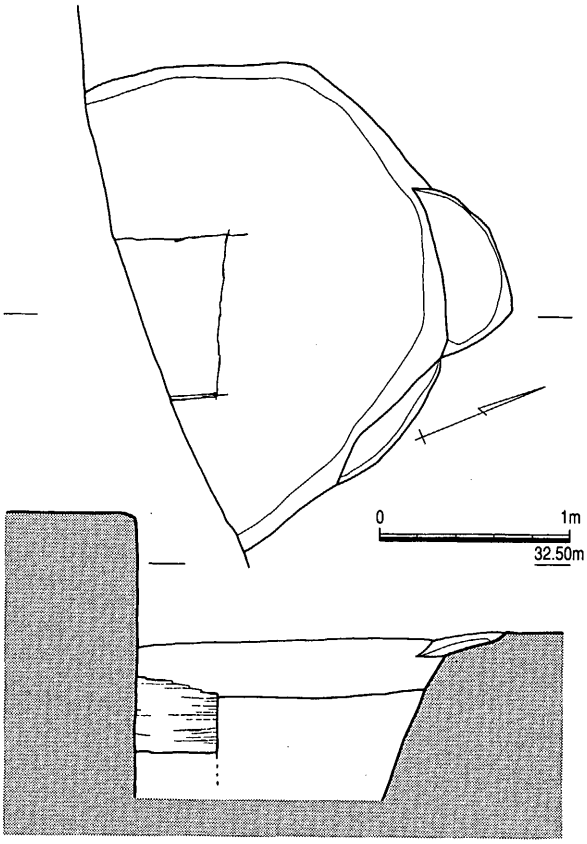


図78.154SE100遺構実測図（S=1/40）

154SK039

調査区西部に検出した遺構で、略円形を呈していたため、井戸ではないかと考えて調査を進めたが、遺構の深さが浅く、井戸構成施設が検出できなかったため、土坑として報告した。遺構西方に一段段を形成し、略円形の深さ約0.3mを測る遺構を形成している。遺構規模は直径約1.7mを測る。

154SK179

溝154SD015の下位に検出した遺構で、遺構内には黄色土ブロックを混入する茶黒色土が堆積しており、人為的に埋められた可能性が高い。また上位に堆積している溝154SD015の堆積土とは異なっていることから、同時埋没とは考え難い。遺構形状は長方形を呈しており、四隅を鋭角に仕上げるなど極めて人為的に形成された可能性が高い。法量は、長軸長約2.0m、短軸長約0.8m、検出標高からの深さは、0.8mを測る。

154SK184

不整形であるが長楕円形を呈し、遺構内の堆積状況は、板材および自然木が包含された灰色粘土および白色砂の互層の堆積層が確認できた。遺構底には藁状のものが敷かれ、藁の下位には灰色粘土が堆積していた。長軸方向は約4.10m、短軸方向は約1.72m～0.84mを測り、残存する深さは約0.73mを測る。遺構内からは、散在的に遺物が出土しており、河川堆積層のような埋土堆積状況を呈することから自然条件下に堆積していったものと考えられる。

5）その他の遺構

154SX030

調査区北部に検出した凹み状の遺構で、調査区北部に展開するものと考えられる。検出標高からの深さは、約0.03mと極めて浅いことから包含層の取り残しであった可能性が高い。

154SX035

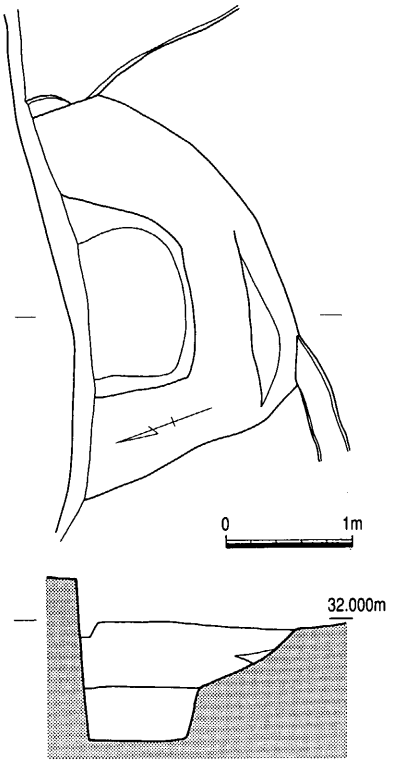


図79.154SK025遺構実測図（S=1/60）

154SK025同様に井戸の可能性を考えたが、井戸構成施設が確認できなかったこと、ならびに遺構の深さが浅いことなどから、凹み状の遺構と考え報告した。

154SX090

溝154SD050に切られる遺構で、略長方形の形状を呈している。長軸長2.0m、短軸長1.5mを測り、検出標高から約0.3mの深さを測る。

d.遺物

1）掘立柱建物跡出土遺物

掘立柱建物を構成すると考えられる柱穴より、須恵器・土師器・黒色土器など食器の他に、鋳型ではないかと考えられる土製

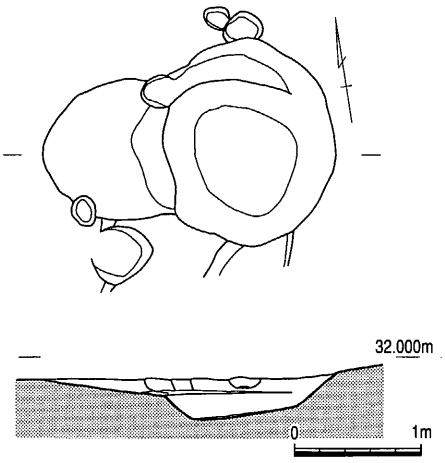


図80.154SK039遺構実測図（S=1/60）

調査区北部にて検出した遺構で、長軸長約2.6m、短軸長約1.9m、検出標高からの深さ0.5mをそれぞれ測る。

遺構内部には、長軸長1.4m、短軸長1.0mを測る土坑が形成され、二段掘りの形状を呈している。遺構上位には黒茶色土が堆積しており、炭化物のみで構成される薄層を挟んで、下位に灰茶色土が堆積していた。この遺構も

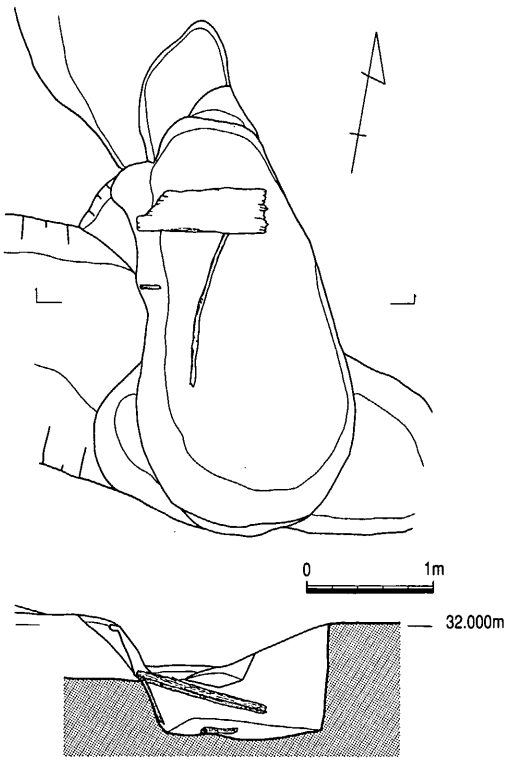


図81.154SK184遺構実測図（S=1/60）

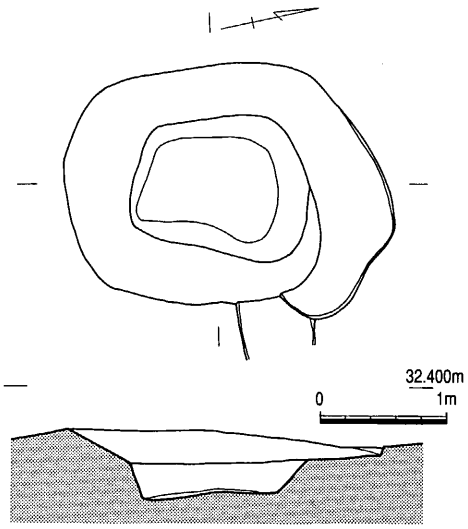


図82.154SX035遺構実測図（S=1/60）

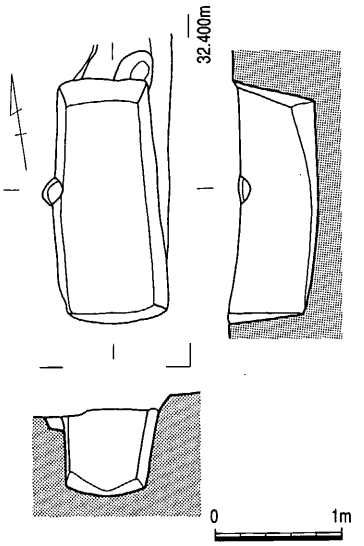


図83.154SK179遺構実測図（S=1/60）

品が出土している。食器は一部建物を除いて主に奈良時代前半に位置づけられる製品が多く、多くの建物の建築時期の上限をこの時期に考えることができる。

154SB005出土遺物（図85）

須恵器

蓋3（1～4）　口縁部のみの破片で、詳細は不明であるが、口縁端部外面を面取りする丁寧な仕上げを有している。

坏（5・6）　5は口縁部から体部下半の破片で、残存状況から丸味を持って底部へ移行するものと考えられる。6は底部から体部下半の破片で、底部外面は回転ヘラ切り後、粗雑なナデによって仕上げられている。この個体も5と同様に底部から体部へ丸味を持って立ち上がる。

土師器

皿b（7）　手持ちによって成形された皿と考えられ、調整痕跡は磨耗によって観察がやや困難であるが、底部外面にはハケ状工具による条痕が残存しており、内面は手持ちによるミガキによって仕上げられている。

154SB040出土遺物（図85）

須恵器

蓋（8～11）　いづれも蓋3で、11のみツマミまで残存しており蓋c3になる。11のツマミ高は1cmとやや高く、ツマミ径も1.5cmを測る。天井部外面は回転ヘラ切り後やや丁寧なナデによって仕上げられている。口縁端部外面は9～11は丁寧に面取りされているが、8はやや粗く仕上げられている。8～10に関しては、細片であり詳細は不明。

坏（12～17）　12～15は坏c、17は坏a、16は口縁部のみの破片であり、皿になる可能性もある。坏cについては、小破片であり底部から体部への移行する角度は不明確であるが、残存状況から15等は丸味をもって体部へ移行するものと考えられる。17の底部外面は回転ヘラ切りの後、丁寧なナデによって仕上げられている。

皿（18）　18は細片のため高台が付されるものかどうか判断できない。体部外面下位にミガ

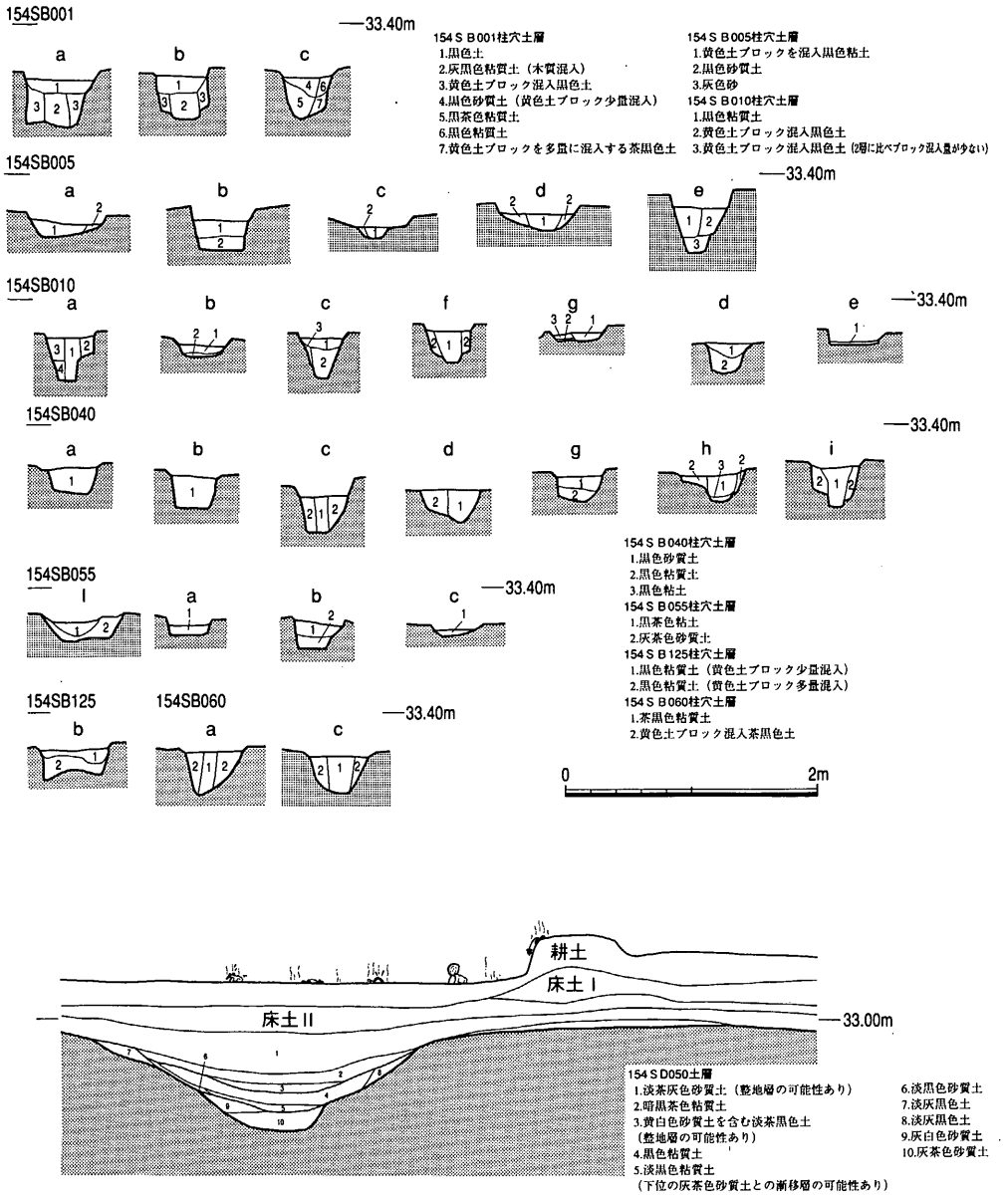


図84.掘立柱建物柱土層・154SD050実測図（S=1/60）

キらしき痕跡があるが判然としない。

土師器

皿（19・20）　いづれも高台を付さない皿aで、19は底部外面をヘラで切り離したような痕跡が観察できるが、全体に凹凸があり、手持ちによる成形も考えられる。20は器面全体に磨耗気味であるが、体部内外面は丁寧に回転ヘラミガキによって仕上げられている。底部外面に関しては、磨耗しているため観察が困難であるが、回転ヘラ削りによって調整されているものと考えられる。この個体は雲母片をやや多めに含んでいる。

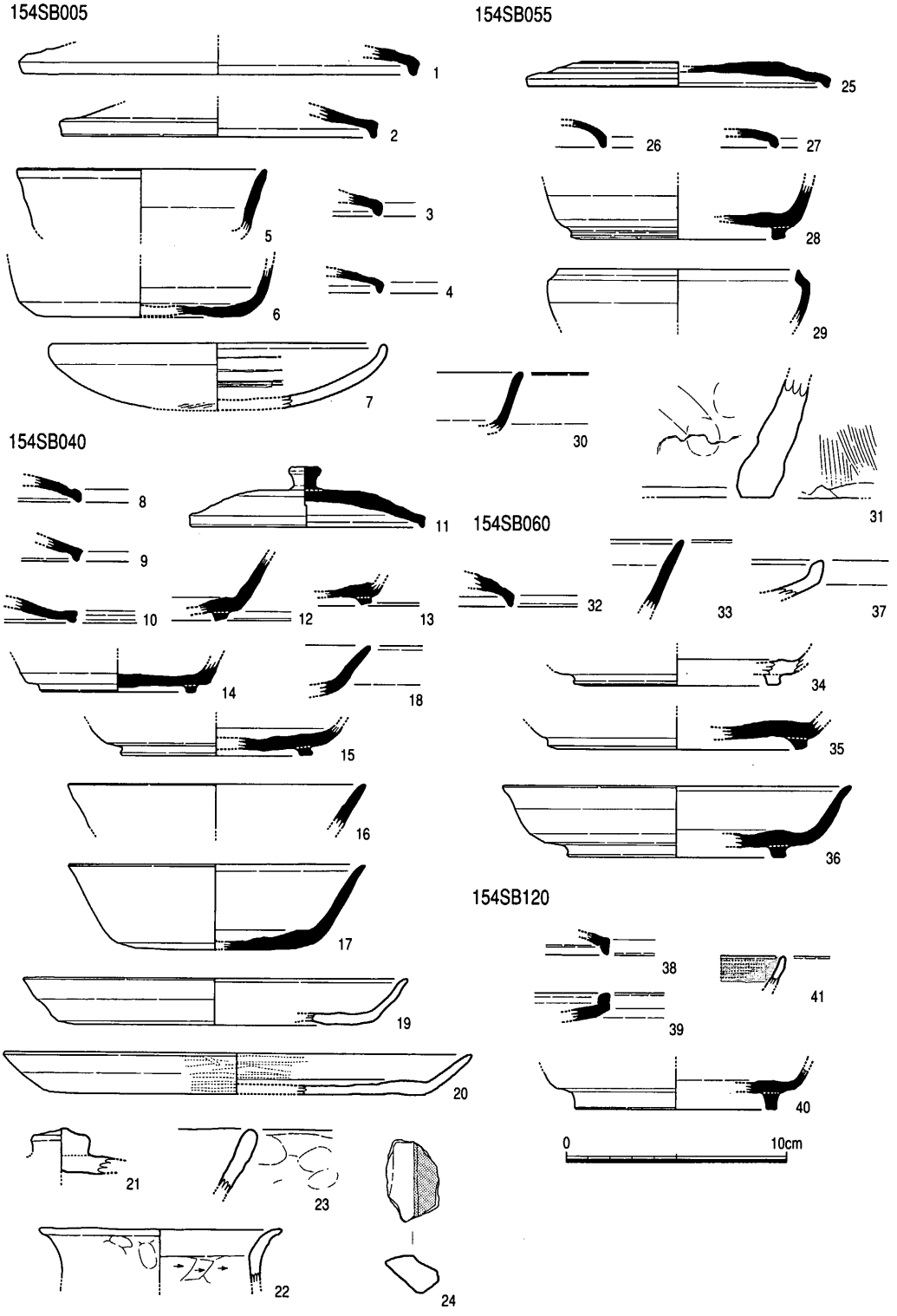


図85.掘立柱建物跡出土遺物実測図（１）（S=1/3）

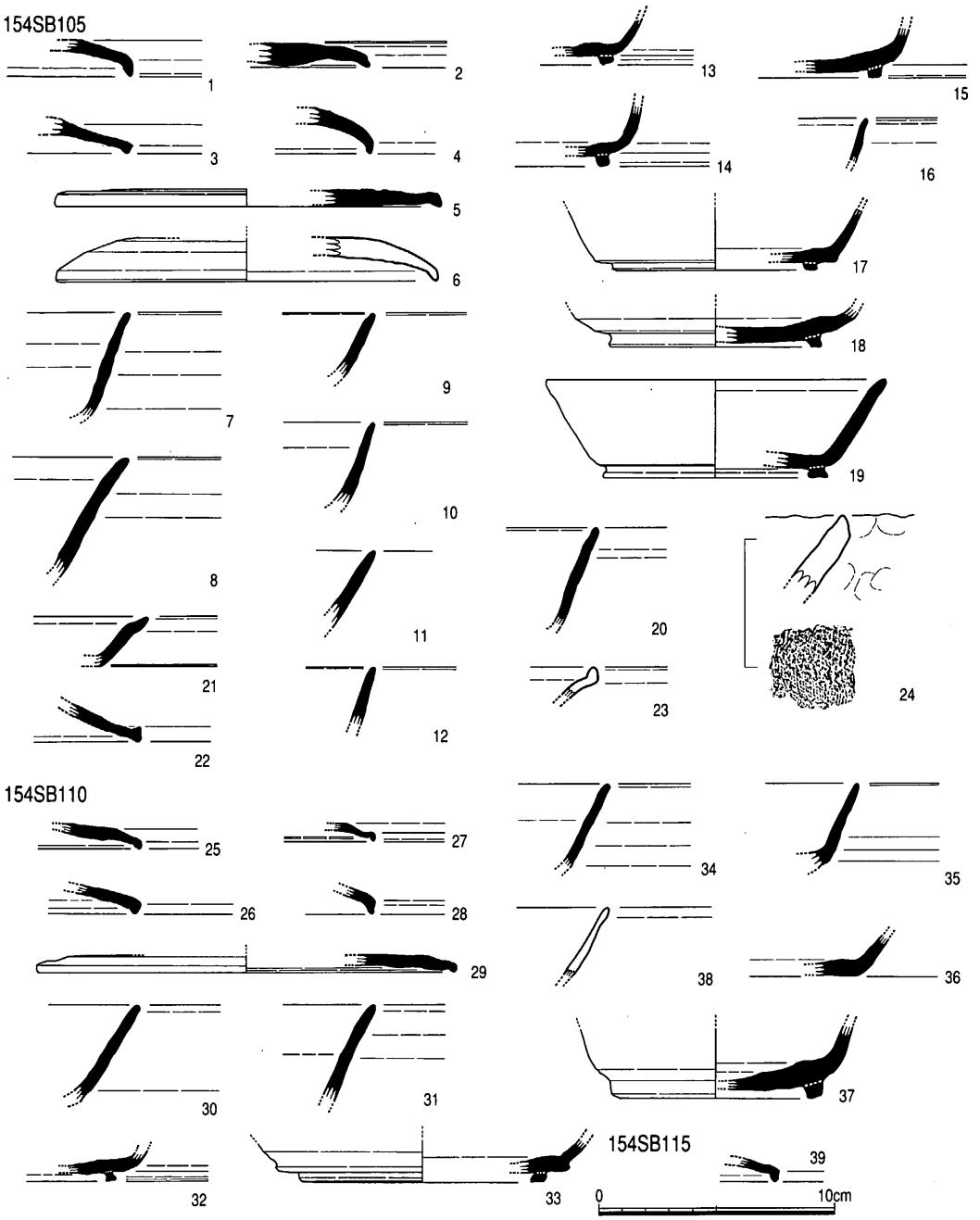


図86.掘立柱建物跡出土遺物実測図（２）（S=1/3）

蓋（21）　蓋のツマミと考えられ、擬宝珠形が形骸化した形状を有している。

小甕（22）　小片のため全体形状については不明確であるが、あまり体部の張らないものと考えられる。体部内面は手持ちによるヘラ削りによって仕上げられており、体部外面から頸部外面には指頭圧痕が観察できる。雲母片を多く含む。

製塩土器

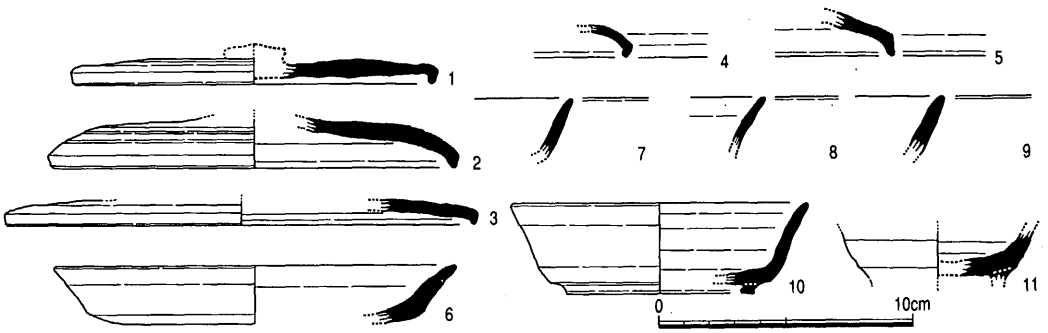


図87.掘立柱建物跡出土遺物実測図（３）（S=1/3）

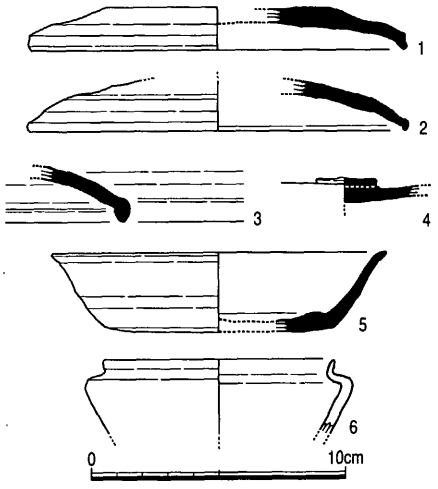


図88.掘立柱建物跡出土遺物実測図（４）（S=1/3）

焼塩壷(23)　口縁部のみの破片で、器面磨耗のため調整痕跡は不明であるが、鉢形の形状を有するII類に該当するものと考えられる。

土製品

鋳型（24）　小破片であり、鋳型とする確証に欠けるものの、型面と考えられる面に直線の段が観察でき、断面色調が型面側が暗灰色、反対側が茶白色を呈している。胎土は砂質で微細な雲母片を多く含んでいる。

154SB045出土遺物（図88）

須恵器

蓋（1～4）　1～3は口縁部の破片で、4はつまみの破片である。1～3ともに口縁端部外面の処理は、丁寧に面取りを行って仕上げており、1は天井部外面を回転ヘラ削り、2は回転ヘラ切り後ナデによって仕上げている。3については残存状況が悪いため不明確。4は扁平なつまみ形状を有している。

坏（5）　底部から口縁部まで残存するもので、底部外面の処理は回転ヘラ切り後、丁寧にナデによって仕上げている。底部から体部への移行は屈曲し直線的に外方へ開く体部形状へ移行する。

土師器

小壺（6）　短頸壺の小形品で、口縁部から体部上位まで残存する個体である。残存する破片部分では、内外面ともに回転ナデによって仕上げている。

154SB055出土遺物（図85）

須恵器

蓋（25～27）　26および27は小破片のため、詳細は不明であるが、口縁端部の形状は明確な断面三角形を呈しておらず、粗雑な印象を受ける。ただし、26については、粗雑に折り曲げたのみのものである可能性があり、蓋2の可能性もある。25は、口縁端部を丁寧に面取りし、断面三角形を丁寧に作り出しており、天井部外面は回転ヘラ切り後不定方向の粗いナデによって仕上げている。

坏（28）　高台を貼付する坏cで、高台内面端部で接地し、底部から体部へ丸味を持って移行するものと考えられる。底部外面は回転ヘラ切りによって処理され、後調整がなされていない。

小壷（29）　口縁部の立ち上がりがあまり無い小型の壷で、やや丸味を持って底部へ移行するものと考えられる。

皿（30）　口縁部から体部下位までの破片で、詳細は不明。

土製品

竈（31）　竈裾端部であろうと考えられる破片で、内面には指圧痕ならびにナデ上げの痕跡が残存し、外面にも裾端部には指圧痕跡が残存し、ハケ調整による器面調整を行っている。内面下位は炭化物が付着している。

154SB060出土遺物（図85）

須恵器

蓋（32）　口縁端部の破片で、詳細は不明だが口縁端部の面取りは丁寧になされている。

坏（33・35・36）　33は口縁部の破片で詳細は不明。35・36は高台を貼付する坏cで、35は底部のみの破片であることから詳細は不明だが、底部外面の処理は丁寧にナデ調整されている。また高台内端で接地し、外端を跳ね上げる形状を取っている。36は浅めの坏cで、底部外面の処理は回転ヘラ切りによって仕上げられている。高台は断面長方形の形状を有し、底部から体部へは丸味を持って緩やかに移行する。

土師器

坏（34）　高台を貼付する坏cで、全体形状は不明。内外面ともにナデによって仕上げられている。

高坏（37）　器面磨耗が著しく、口縁端部を内傾させ平坦面を形成する形状を呈している。

154SB105出土遺物（図86）

須恵器

蓋（1～5）　全て口縁端部を折り曲げた蓋3で、4を除いて全て端部外面を面取りし、仕上げている。4は、口縁端部を折り曲げたのみのもので、端部外面の面取りが顕著ではない。天井部外面の処理は、3がナデによる仕上げを行う他は、全て回転ヘラ削りによって仕上げられて

いる。

坏（7～20）　7～12および16・20は口縁部のみの破片で、体部の立ち上がりがきつい傾向を有している。また7の残存状況から底部から体部への移行は、丸みを持つものと考えられる。13～15および17・18は高台のみの破片で、13～15および18は底部から体部へ丸みを持って立ち上がっている。これに対し、17・19は底部から体部への移行が屈曲を持って形作られており、体部形態もやや開き気味である。

皿（21）　口縁部の破片で、口縁端部が外方へ屈曲している。

器種不明（22）　高坏の脚端部の可能性が高い。端部外面を丁寧に回転ナデによって仕上げている。

土師器

蓋（6）　口縁端部を折り曲げたもので、ミガキは観察できない。

鉢（23）　口縁端部のみの破片で、154SK025灰黒色粘土層出土土師器鉢（図102-9）と同様な形態を有するものと考えられる。

製塩土器

焼塩壺（24）　浅鉢形になるもので、内面に布痕跡を留めている。

154SB110出土遺物（図86）

須恵器

蓋（25～29）　いづれも口縁端部の破片で、28は口縁端部を丁寧に面取りするが、他のものは、端部を丸く仕上げている。26のみ天井部外面の処理を回転ヘラ削りによって仕上げている他は、天井部が観察できる個体は全てナデによって仕上げている。

坏（30～37）　口縁部のみの破片もしくは底部のみの破片資料で全形を知り得る資料は無い。37は底部から体部への移行が丸みを持ち、さらに体部の立ち上がりがきついが、他の個体に関しては、体部が開く形状を留めているものと推定できる。

土師器

坏（38）　口縁部のみの破片で全形については不明。体部は開き気味に立ち上がるものと考えられる。

154SB115出土遺物（図86）

須恵器

蓋（39）　口縁部のみの破片で全体の形状については不明。口縁端部外面は、丁寧な面取りによって仕上げている。

154SB120出土遺物（図85）

須恵器

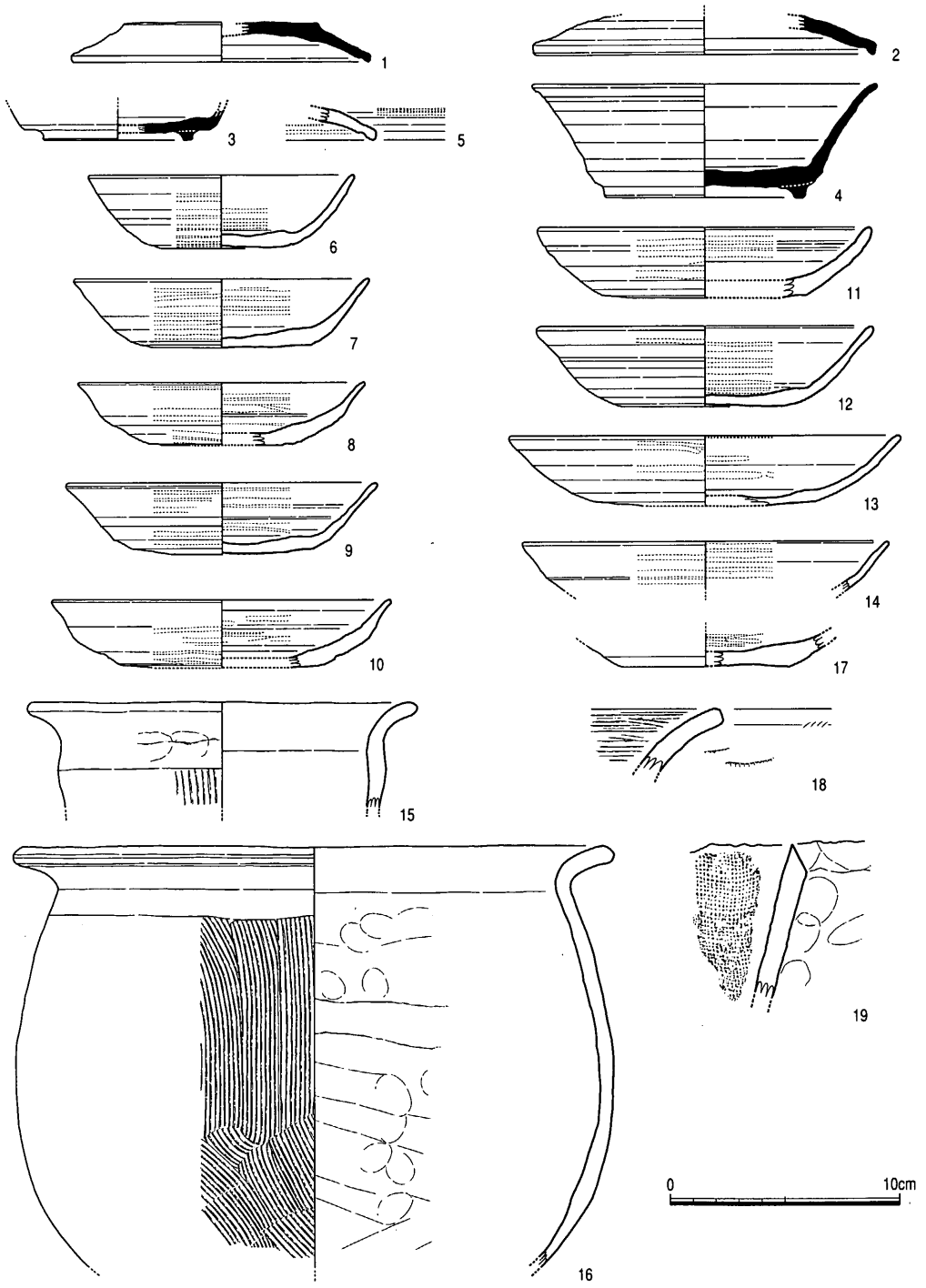


図89.154SE065黒色粘土出土遺物実測図（１）（S=1/3）

蓋（38）　口縁端部の破片で、端部外面を丁寧に面取りする。

高坏（39）口縁端部の破片で、口縁端部内面を内傾させる形状を有している。

坏（40）　高台を貼付する坏cで、断面長方形の高台を貼付する。

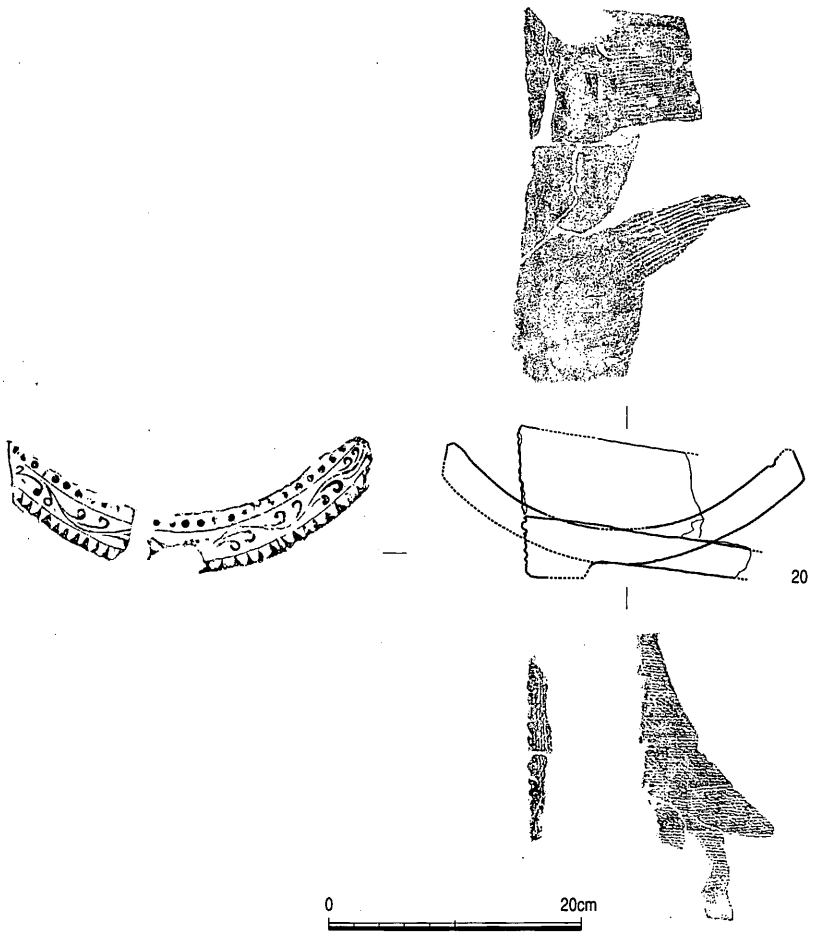


図90.154SE065黒色粘土出土遺物実測図（2）（S=1/6）

黒色土器

坏（41）　口縁端部の破片であり、器種特定には無理がある。したがって、皿の可能性もある。内面はミガキによって仕上げられている。A類。

154SB125出土遺物（図87）

須恵器

蓋（1～5）　口縁部から天井部までを残す1～3と、口縁部のみの破片資料4・5がある。残存状況が良い1～3の資料では、天井部外面を全て回転ヘラ削りによって仕上げている。いずれの資料も口縁端部外面は、丁寧な面取りによって仕上げている。

皿（6～9）　6は底部がやや下方へ張り出すものと考えられ、体部は外方へ開く形状をとっている。7～9は口縁端部の破片であり、坏になる可能性もある。

坏（10・11）　いずれも高台が貼付されるもので、体部の立ち上がりはきつい。10は底部を欠損するが、高台貼付部分から口縁部まで残存しており、底部から体部への移行は、丸みを持っている。

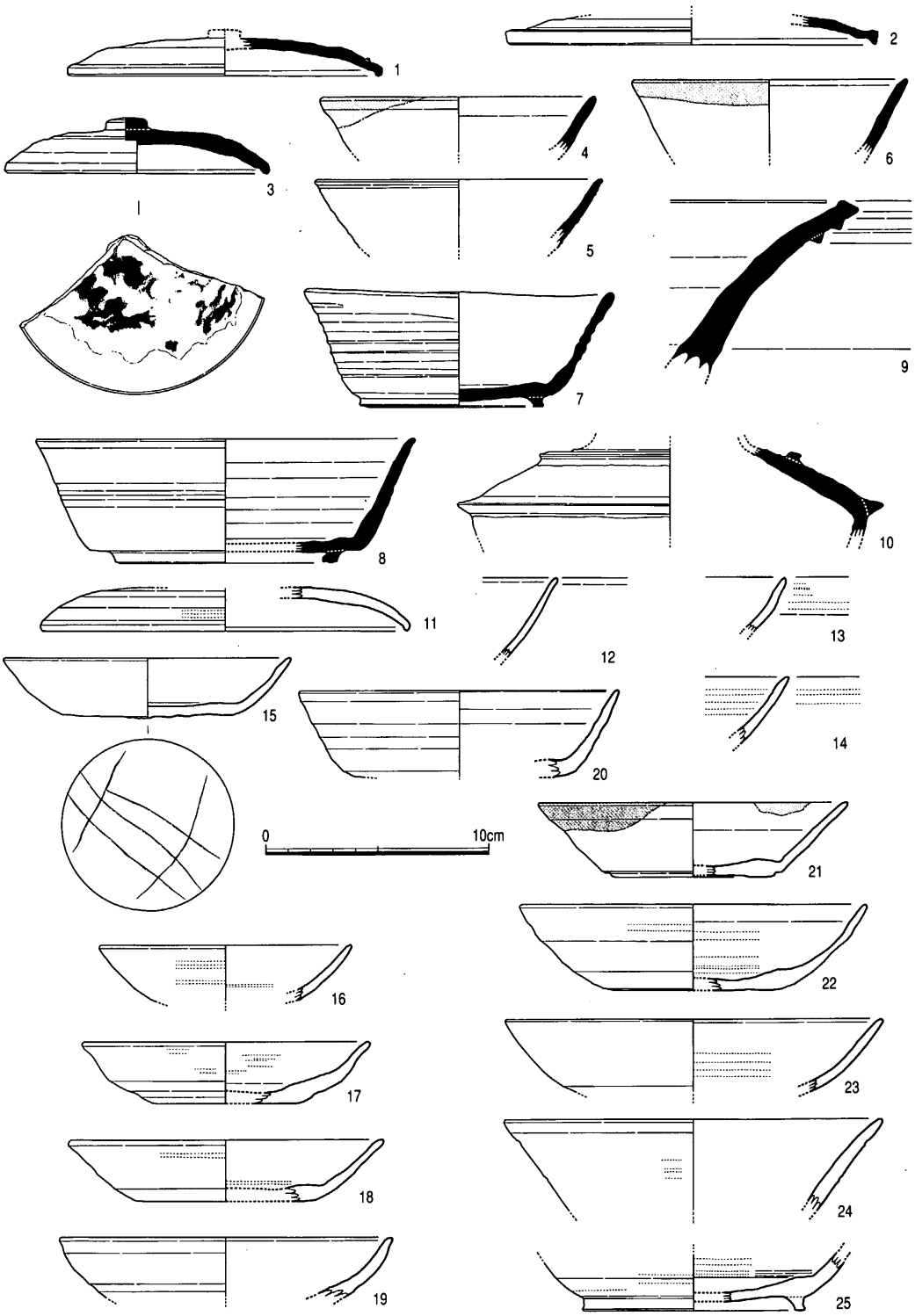


図91.154SE065黒褐色土出土遺物実測図（１）（S=1/3）

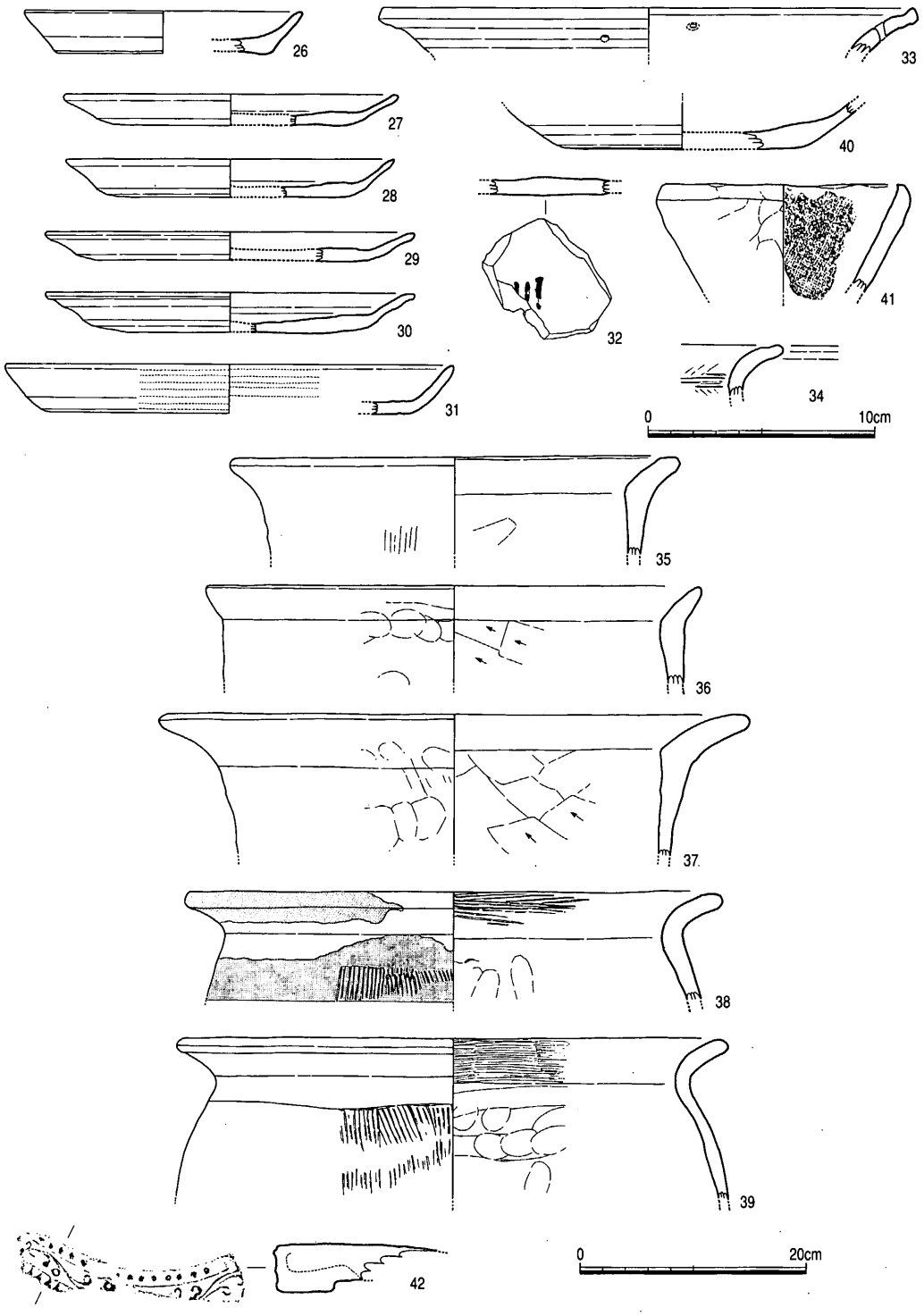


図92.154SE065黒褐色土出土遺物実測図（２）（S=1/3・1/6）

2）井戸出土遺物

井戸出土遺物は、以下の手順で取り上げている。

a.遺構検出時に出土。

井戸として枠なしは枠の残存状況を平面で確認するまでは、単に円形ないしは不整円形の平面形を呈しているため、遺構性格を確定せずに掘り下げたため、単一土層ないしは単に遺構番号のみで遺物取り上げを行った。したがって、土層上は人工層位に近い状況である。

b.井戸枠内の堆積土

上記土層を除去した後、枠ないしは枠が腐植し土層上枠の範囲が平面形で押さえられた場合、井戸枠内の堆積土と判断し遺物を取り上げた。したがってこの土層出土遺物は井戸が機能しなくなった埋没土ということになる。

c.井戸裏込め土

井戸構築時に人為的に埋め土されたもので、この土層出土遺物の中で最も新しい遺物が、井戸構築時の下限時期を示している可能性が高いことになる。

以上三種に大きく弁別して遺物を取り上げている。それぞれの土層の先後関係は、遺構の記述の中で記載してきている。

154SE065黒褐色土（遺構検出時の遺物）出土遺物（図91・92）

須恵器

蓋（1～3）　1および2は天井部まで残存する破片で、口縁端部は丁寧に面取りを行い、天井部外面の処理は回転ヘラ切りの後、粗くナデによって仕上げている。3は図上完形になるもので、ボタン状のつまみを貼付し、天井部外面は1および2同様に回転ヘラ切り後、粗くナデによって仕上げている。口縁端部は1および2ほど丁寧に仕上げられていない。また天井部内面を硯として転用されたようで、平滑に研磨され墨痕が観察できる。

坏（4～8）　4～6は口縁部の破片で高台の有無については判断し難い。7・8は高台を貼付し、体部の開きは大きく、7は体部外面に凹線状の沈線を多数巡らしている。底部外面が観察できる7は、ヘラ切りのみによって仕上げている。

甕（9）　大形の甕の口縁部で口縁端部外面に突帯を二条巡らしている。全形については不明。

壺（10）　肩部および頸部に突帯を巡らすもので壺eに該当するものと考えられる。

土師器

蓋（11）　天井部から口縁部の破片で、焼成が悪く、外面に回転ヘラミガキがわずかに残存している。

坏（12～25）　12・13は口縁部の破片のため形式の判断はできない。15・20・21は坏aで底

部外面を回転ヘラ切りによって仕上げている。内外面ともに回転ナデによって仕上げる。14・16～23は、坏dに該当し、体部下位から底部外面を回転ヘラ削りによって調整し、内外面ともに精粗の差はあるが回転ヘラミガキによって仕上げている。ただし19は内外面ともに回転ナデによって仕上げており、坏dの退化形態にあたる。24は直線的に外方へ開く体部形態を有しており、高台が貼付されている可能性は高い。外面に僅かに回転ヘラミガキの痕跡が残存している。25は底部のみの破片で坏cに該当し、体部内外面ともに回転ヘラミガキによって仕上げられている。

皿（26～32）　26は口径が小さく小皿aに該当し、底部外面は回転ヘラ切りによって仕上げられている。27～31は、底部外面を回転ヘラ削りし、31はその後回転ヘラミガキによって仕上げている。また31は体部の立ち上がりがきついのに対し、27から30は外方へ外反気味に立ち上がっている。32は底部のみの破片で、形式については判断できないが、底部外面に墨書が観察できた。

鉢（33）　精製の鉢と考えられ、口縁部に穿孔が確認できた。同様な例として宝満山遺跡群採集品がある（太宰府市、1992）。

甕（34～39）　口縁部から体部上位までの破片で、外面を刷毛によって調整する甕aに該当する。34は口縁部から頸部の破片で体部内面の処理は観察できないが、胎土中に角閃石を多量に含んでいる。35～37は体部内面をヘラ削りし、体部径があまり大きくないものと考えられる。一方38・39は体部内面を縦方向のナデによって仕上げており、体部径が大きく胴張りのするものと考えられる。この形式は筑前に一般的なものではなく、154SE065黒色粘土層出土の甕と同形態のものと考えられる。

黒色土器

坏（40）　底部のみの破片で、底部外面は磨耗のため観察できないが、体部外面は回転ヘラ削りによって仕上げられている。内面は顕著ではないがミガキcが施されている。A類。

製塩土器

焼塩壺（41）　浅鉢形のもので、内面に布痕跡、外面には指頭圧痕跡をとどめている。

瓦

軒平瓦（42）　154SE065黒色粘土層出土の軒平瓦と同笵瓦と考えられる。

154SE065黒色粘土（井戸枠内）出土遺物（図89・90）

須恵器

蓋（1・2）　2については、口縁部の破片でありつまみの有無については判断し難いが、1はつまみが付かない可能性が高い。天井部まで残存する1は、天井部外面の処理は回転ヘラ切り後ナデによって仕上げており、1および2ともに口縁端部外面の処理は丁寧な面取りによって仕

上げている。

坏（3・4）　4は図上完形になる個体で底部から外反気味に立ち上がる体部形状を有している。高台の貼付状況は粗いものの、安定した断面正方形の形状を高台は有している。底部外面の処理は、回転ヘラ切り後ナデによって仕上げている。底部および高台部分の破片である3は、底部より体部へ丸みを持って移行している。

土師器

蓋（5）　口縁部のみの破片で、口縁端部内面に沈線状の凹みを有する個体である。内外面ともにやや粗めの回転ヘラミガキによって仕上げられている。

坏（6～14）　いずれも坏dに属するもので底部外面を削りによって仕上げており、ミガキは体部内外面にとどまっている。12および13は体部外面のミガキは粗い。他の個体は内外面ともに丁寧に回転ヘラミガキによって仕上げている。なお10は底部外面のみを回転ヘラ削りによって仕上げており、体部外面まで回転ヘラ削りは及んでいない。

甕（15・16）　いずれも頸部内面が緩やかに曲がるもので、体部内面をナデによって仕上げている。筑前に一般的な形式と異なる製作技法を有しており、また胎土組成は、白色粒子を含むなど花崗岩風化生成物による製品と考えられ、製作地について今後検討すべき個体である。

黒色土器

坏（17）　底部のみの破片で、底部外面から体部下位までを回転ヘラ削りによって仕上げて

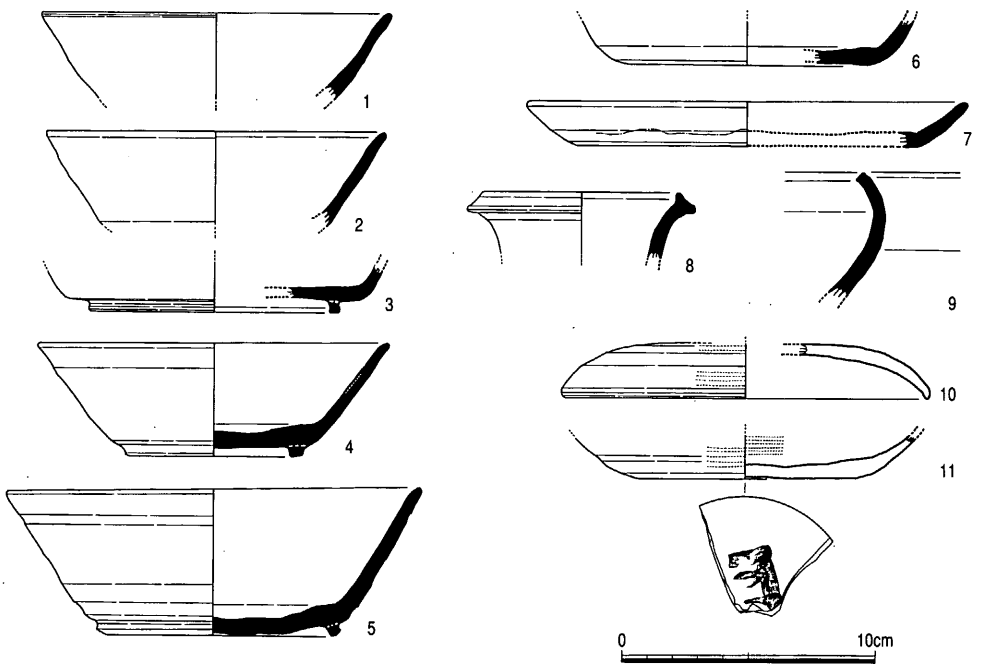


図93.154SE065灰茶色砂質土出土遺物実測図（S=1/3）

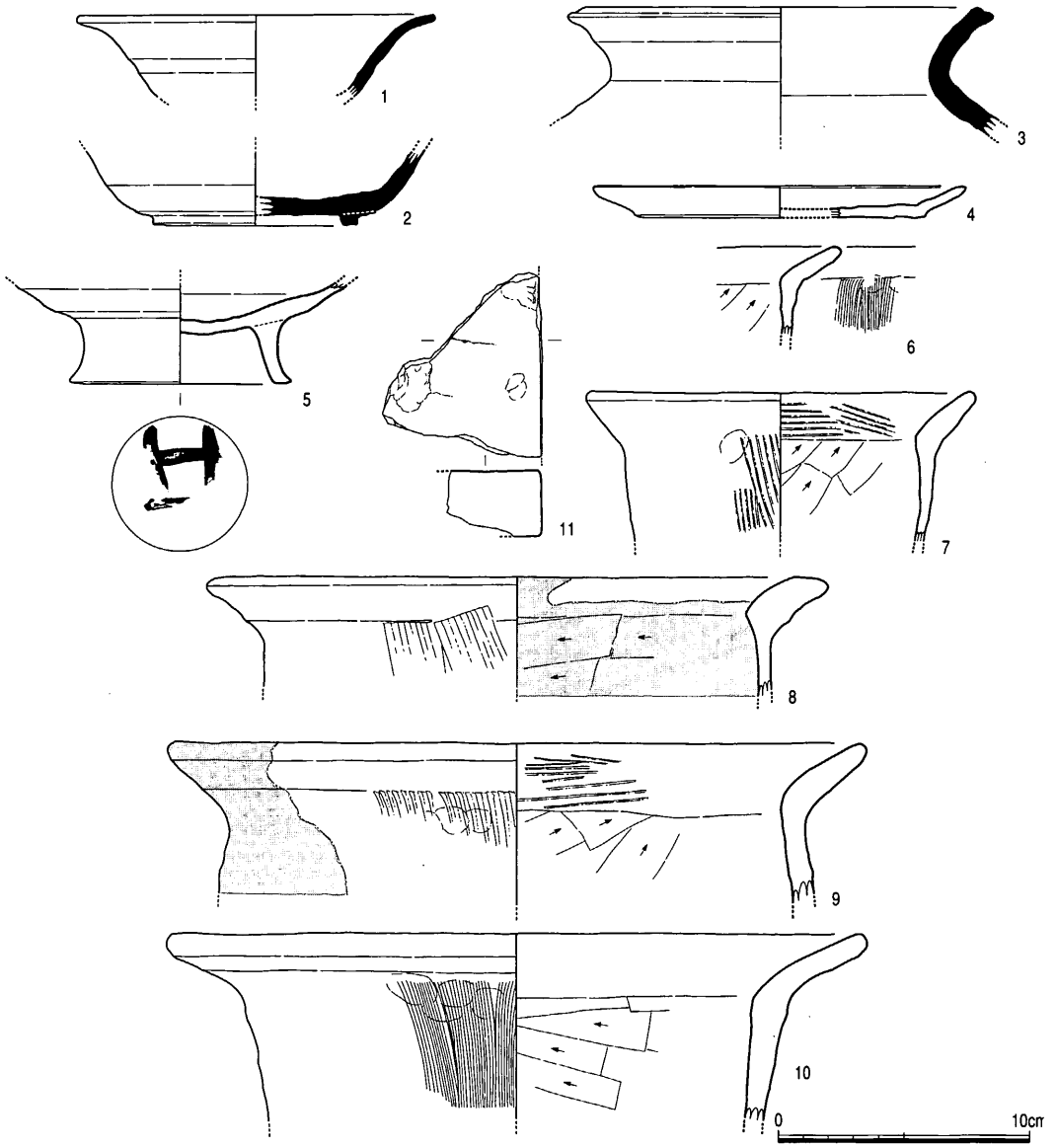


図94.154SE095出土遺物実測図（S=1/3）

いることから坏dに属するものと考えられる。内面は、丁寧なミガキcによって仕上げている。A類。

古式土師器×弥生土器

甕×壺（18）　口縁部のみの破片で、形式および帰属時期については判断できない。内外面ともに刷毛によって仕上げている。

製塩土器

焼塩壺（19）　口縁部から体部上位の破片で、内面に布痕跡をとどめている。外面は指頭圧痕を多く残す。

瓦

軒平瓦（20）　左から右に流れる偏行唐草文を配した軒平瓦で、154SE065黒褐色土層出土の軒平瓦と同笵瓦と考えられる。

154SE065灰茶色砂質土（裏込め土）出土遺物（図93）

須恵器

坏（1～6）　1・2は体部上位の破片で高台の有無については不明。3および6は底部のみの破片で、両者とも底部から体部への移行は丸みをもって移行している。4・5は底部から外方へ大きく開く体部形状を有しており、高台も底部と体部の境界付近へと移行している。

皿（7）　底部と体部の境界付近から口縁部までの破片で、底部と体部の境界にヘラ削り痕跡をとどめている。残存箇所がわずかなため、底部まで広がる回転ヘラ削りか、回転ヘラ切りに伴うヘラ挿入痕跡かの判断はつかない。体部外面下位部分から口縁部外面にかけて焼き斑と考えられる黒灰色に変色している。

壺（8）　口縁部の破片で全形については不明。内外面ともに回転ナデによって仕上げられている。

鉢（9）　口縁部から体部上位にかけての破片で、鉄鉢形の鉢aに該当する。内面および口縁部外面は回転ナデによって仕上げられており、体部外面は回転ヘラ削りによって仕上げられている。

土師器

蓋（10）　口縁部から天井部が残存する破片で、口縁端部の処理は丁寧ではない。外面のみに回転ヘラミガキをとどめており、内面はヨコナデによって仕上げられている。

坏（11）　底部のみの破片で、底部外面から体部外面下位にかけて回転ヘラ削りによって仕上げている坏dに該当するものと考えられる。体部外面および底部内面は回転ヘラミガキによって仕上げられている。なお底部外面に墨書が観察できる。

154SE095（遺構検出時の遺物）出土遺物（図94）

須恵器

坏（1・2）　1は口縁部から体部下位までの破片で、口縁部の外反が強く小形の鉢になる可能性もある。2は底部の破片で底部から体部への移行は、丸みをもって移行する。底部外面の処理は回転ヘラ切り後粗いナデによって仕上げられている。

甕（3）　口縁部が外反する甕で中形の甕と考えられる。体部には叩き痕跡がわずかに観察できる。

土師器

皿（4）　底部外面を回転ヘラ切り後、粗いナデによって仕上げ、体部を外方へ大きく開き、

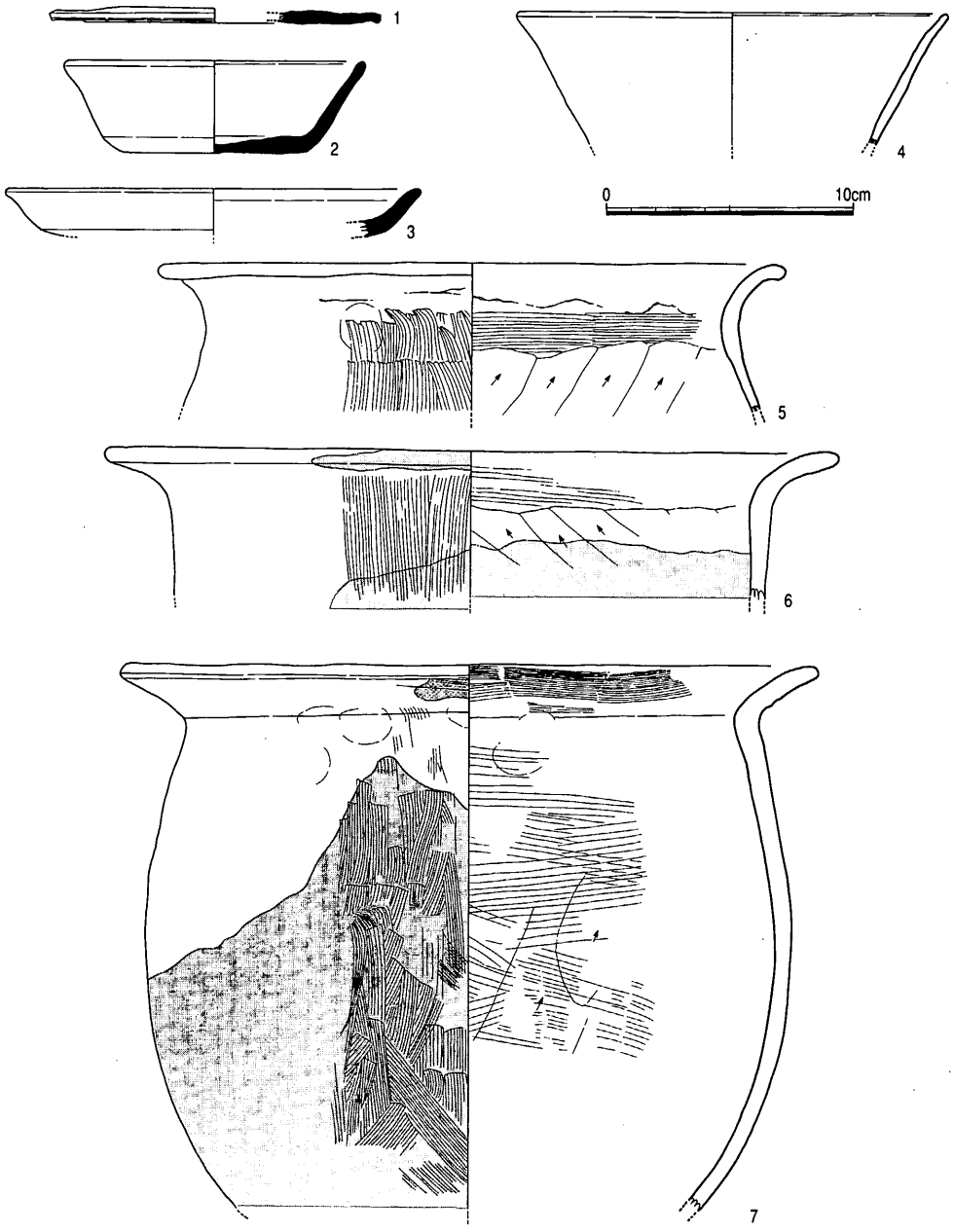


図95.154SE095灰黒色粘土出土遺物実測図（S=1/3）

器高はあまり高くない製品である。

椀（5）　高脚の高台で底部から高台部分の破片資料であることから、全形については不明。底部外面の処理は横ナデによって仕上げられている。底部外面に墨書がある。

甕（6～10）　6および7は小形の甕、8～10は中形の甕である。いづれも内面はヘラ削り、外面は刷毛によって器面調整を行い、胴張りの少ないものである。

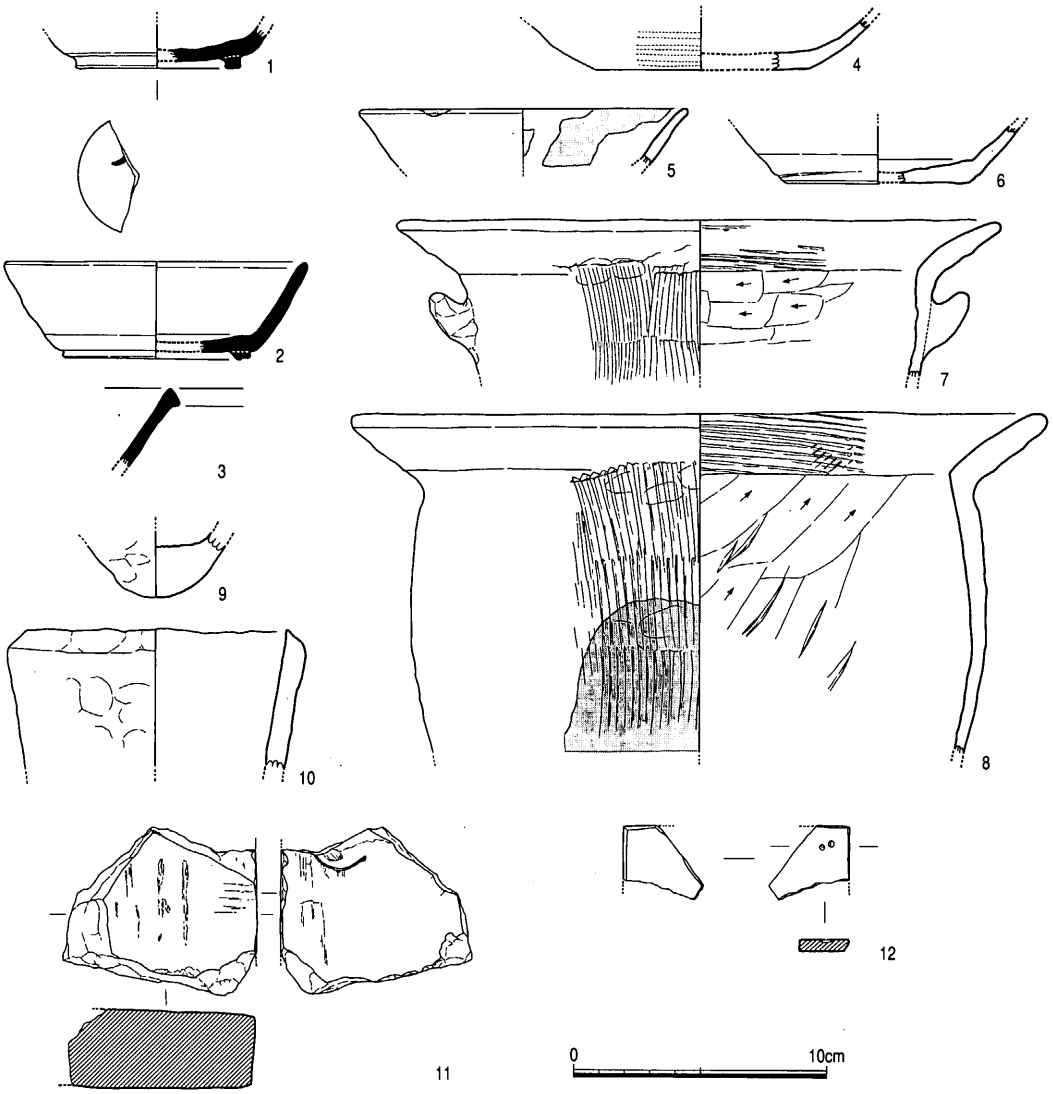


図96.154SE095黄灰色砂土出土遺物実測図（S=1/3）

瓦製品

磚（11）　無文磚で一部に指頭圧痕を留めている。

154SE095灰黒色粘土（井戸枠内）出土遺物（図95）

須恵器

蓋（1）　天井部から口縁部の破片で、口縁端部外面をわずかに面取りして仕上げている。器高は高くなく扁平な形状をしている。天井部外面は、回転ヘラ切りのみで特に調整は行われていない。

坏（2）　底部から直線的に外方へ開く体部形態を有し、底部外面の処理は回転ヘラ切り後、

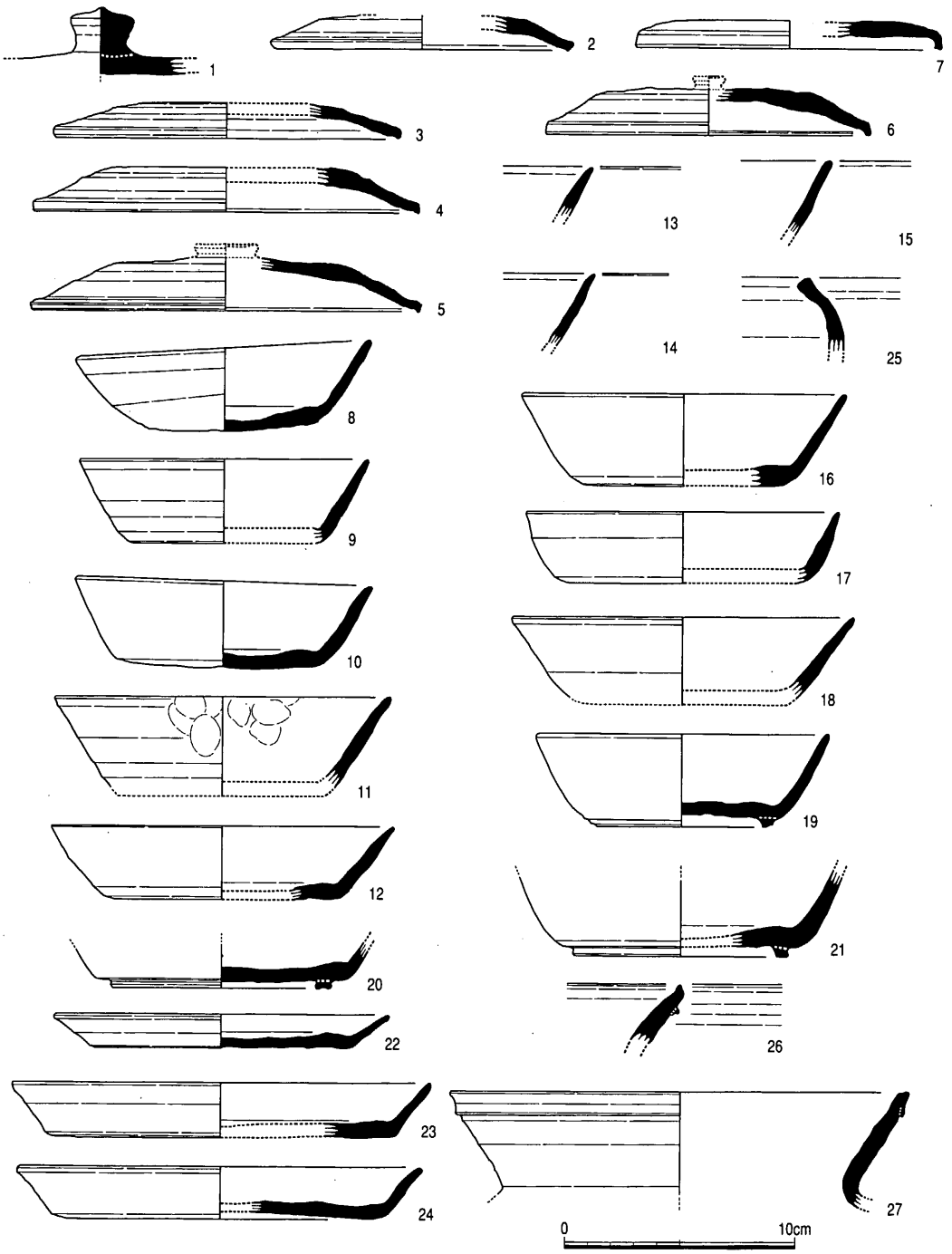


図97.154SE100出土遺物実測図（1）（S=1/3）

未調整。

皿（3）　底部から丸みを持って体部へ移行する形状を有する。底部から体部への移行部分のみが観察できるため、底部処理後の詳細は不明。

土師器

椀（4）　体部から口縁部の破片資料で、器高が高いため椀とした。内外面を横ナデによって仕上げている。

甕（5～7）　5・6は内面ヘラ削り、外面刷毛によって器面調整がなされており、筑前に一般的な手法を用いてつくられている。しかし5は胎土に角閃石を多く含み、頸部内面の稜が明瞭でない点から筑後国でつくられた可能性が高い。6は胴張りが無く、胎土も花崗岩風化生成物によって構成されているため筑前国内でつくられたものと考えられる。7は内外面ともに刷毛によって最終調整されており、胴部の張りは強い。胎土は花崗岩風化生成物によって構成されていることから、原料土採集地は花崗岩分布域に求めることが可能であるが、具体的な製作地については現在のところ明確にし難い。体部外面には煤が付着している。

154SE095黄灰色砂（裏込め土）出土遺物（図96）

須恵器

坏（1・2）　高台を貼付する坏cで、底部から直線的に外方へ開く体部形態を有している。底部外面の処理は回転ヘラ切り後、丁寧にナデている。

甕（3）　口縁部のみの破片で、具体的な器種および形状については不明。可能性として甕口縁部を考えている。焼成および還元状態も悪く、須恵器かどうかも判断し難い。

土師器

坏（4～6）　4は体部外面下位から底部外面にかけて回転ヘラ削りを行い、体部のみを回転ヘラミガキによって仕上げている。内面には漆が付着している。5および6は坏aで、6は底部外面の処理を回転ヘラ切りし、丁寧なナデによって仕上げている。

甕（7・8）　いずれも体部内面をヘラ削りし、外面を刷毛によって調整するもので、7は胴張りがなく、把手を貼付している。8はやや胴張りするもので体部外面下位が暗灰色に変色している。

製塩土器

焼塩壺（9・10）　9は底部のみの破片で、内面に布痕跡をとどめるが、全形については判断できない。10は円筒形を呈するものと考えられ、内面は磨耗のため調整痕跡等については不明。

瓦製品

磚（11）　無文磚で破片化しているため全形については不明。加工痕跡としてはナデ痕跡が観察できる。

石製品

巡方（12）　蛇紋岩製で、暗緑色を呈しており、破片のため法量は不明。紐通しのための穴が穿たれている。

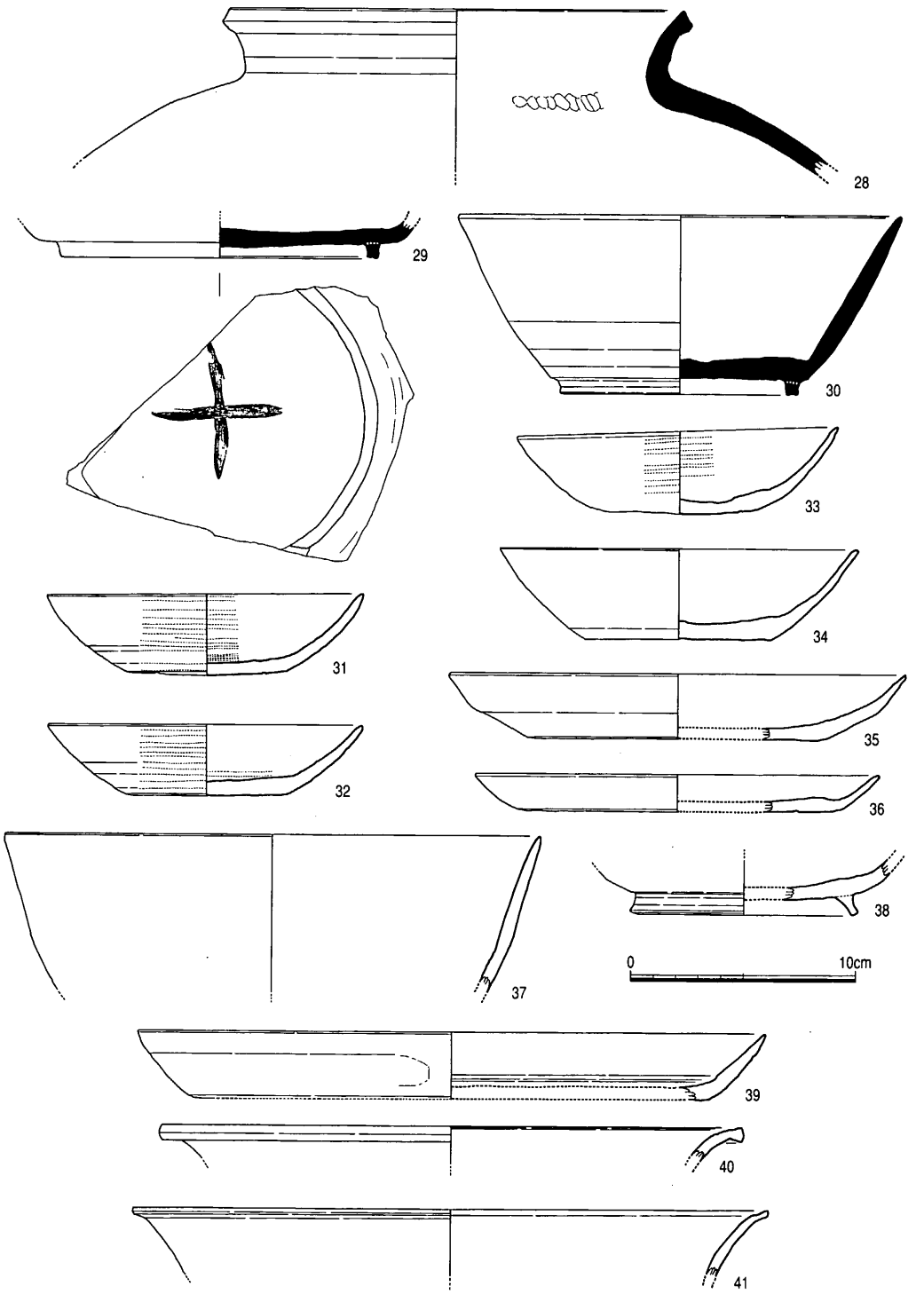


図98.154SE100出土遺物実測図（２）（S=1/3）

154SE100（遺構検出時）出土遺物（図97～99）

須恵器

蓋（1～7）　1はつまみのみの破片で大形の蓋に貼付されていたものと考えられる。2～6は口縁部から天井部まで残存する破片資料で、いずれも天井部外面は回転ヘラ切り後、ナデによって仕上げている。また7を除いて口縁端部外面の面取りは丁寧ではなく、やや形骸化しつつあるものと考えられる。7は高坏とも考えられ、蓋とした場合、天井部内面に研磨痕跡が観察できる。硯として転用されていた可能性が残る。

坏（8～21・29）　13～15は口縁部のみの破片で、全形は不明。8～12および16～18は高台を貼付しないもので、坏aに該当する。17は体部の立ち上がりがきついが、他のものは、外方へ開く体部形態を有している。なお11の口縁部内外面には指頭圧痕が観察できる。19～21・29・30は高台を貼付した坏cで、いずれも外方へ開く体部形態を有している。底部外面は回転ヘラ切り後ナデによって仕上げられている。30は高台を貼付するもので、やや器高が高いものにあたる。体部外面下半を回転ヘラ削りによって仕上げており、内外面は回転ナデによって仕上げている。29は底部外面に「十」と判読できる墨書がある。

皿（22～24）　22は外方へ開く体部形態を有し、23および24は体部の立ち上がりがきつい。底部外面の処理は回転ヘラ切り後、ナデによって仕上げているが、23は刷毛状工具で器面調整した痕跡をとどめている。

鉢（25）　口縁部のみの破片で全形は判断し難いが、鉄鉢形のものと推定でき鉢aに該当する。

甕（26～28）　26・27は口縁部のみ、28は体部上位までのもので、いずれも甕aに該当する。口縁端部のみの破片である26を除いて他のものは、中形の甕であろうと考えられる。

土師器

坏（31～34・38）　34は器面磨耗のため調整状況に関して判断できないが、31～33は体部外面下位を回転ヘラ削りし、底部外面を除く内外面を回転ヘラミガキによって仕上げている。38は高台部分の破片で、高台端部を外方に跳ね上げる形状を有している。器面磨耗のため調整痕跡については観察できない。

皿（35・36）　35はやや深めのもので、器面磨耗のため調整状況が判断し難いが、坏dである可能性もある。36は底部外面を回転ヘラ削りによって仕上げている他は、器面磨耗のためミガキ等に関しては観察できない。

椀（37）　口縁部から体部にかけての破片で、体部内面に漆が付着している。体部外面下位に回転ヘラ削り痕跡が観察できる。

大皿（39）　底部から体部への移行部分のみを回転ヘラ削りしているため、底部切り離しの

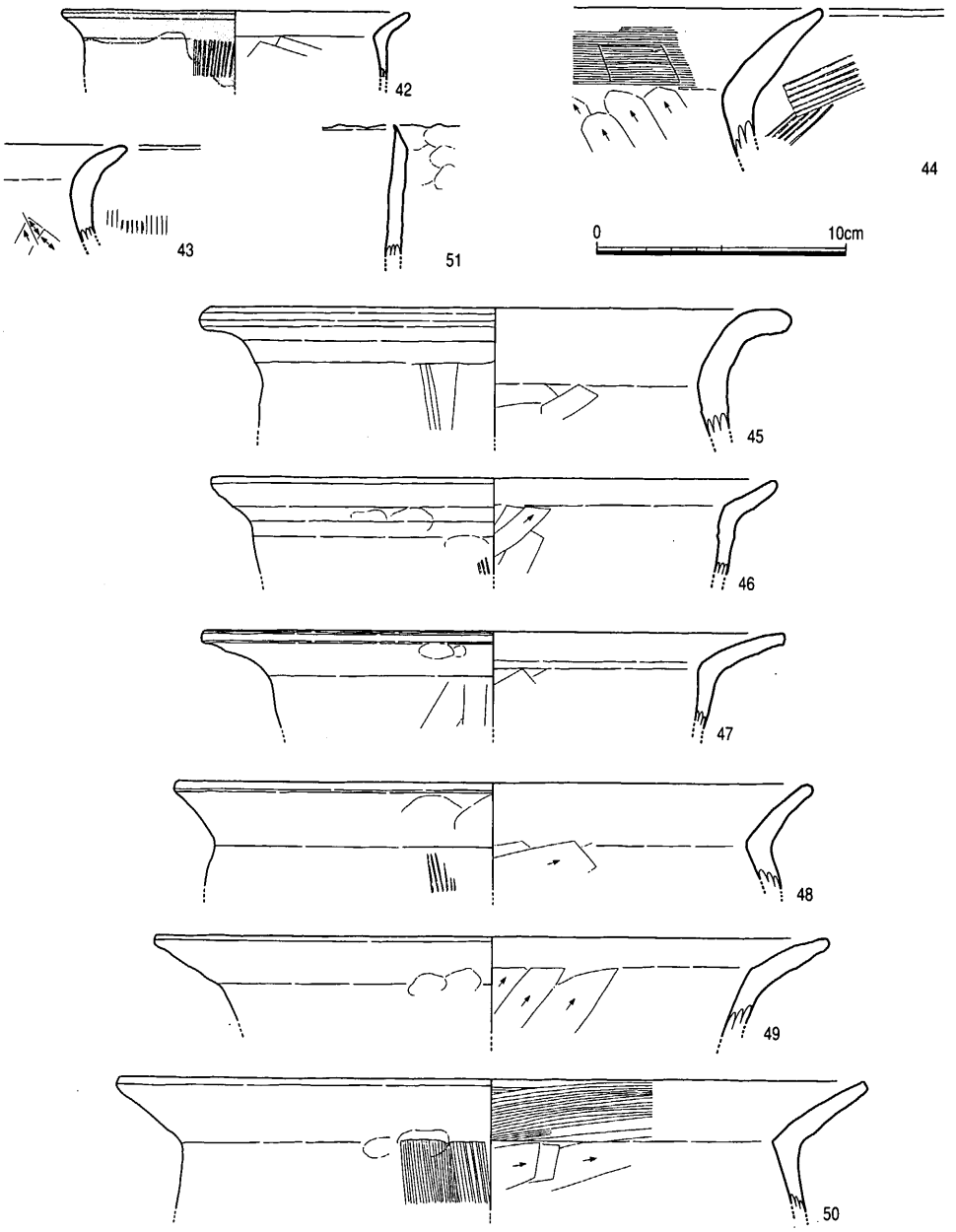


図99.154SE100出土遺物実測図（３）（S=1/3）

ためのヘラ挿入に伴う削り痕跡である可能性がある。体部は外方へ開く。口縁部は器面磨耗のため調整痕跡は観察できない。

鉢（40・41）　口縁部のみの破片で、全形は判断し難いが、精製の鉢と考えられ、154SK025出土の鉢（図102－9）と同様の形態をとるものと考えられる。

甕（42～50）　いずれも体部内面をヘラ削りし、外面を刷毛によって調整する。42・43は小形甕、44～50は中形甕と考えられる。

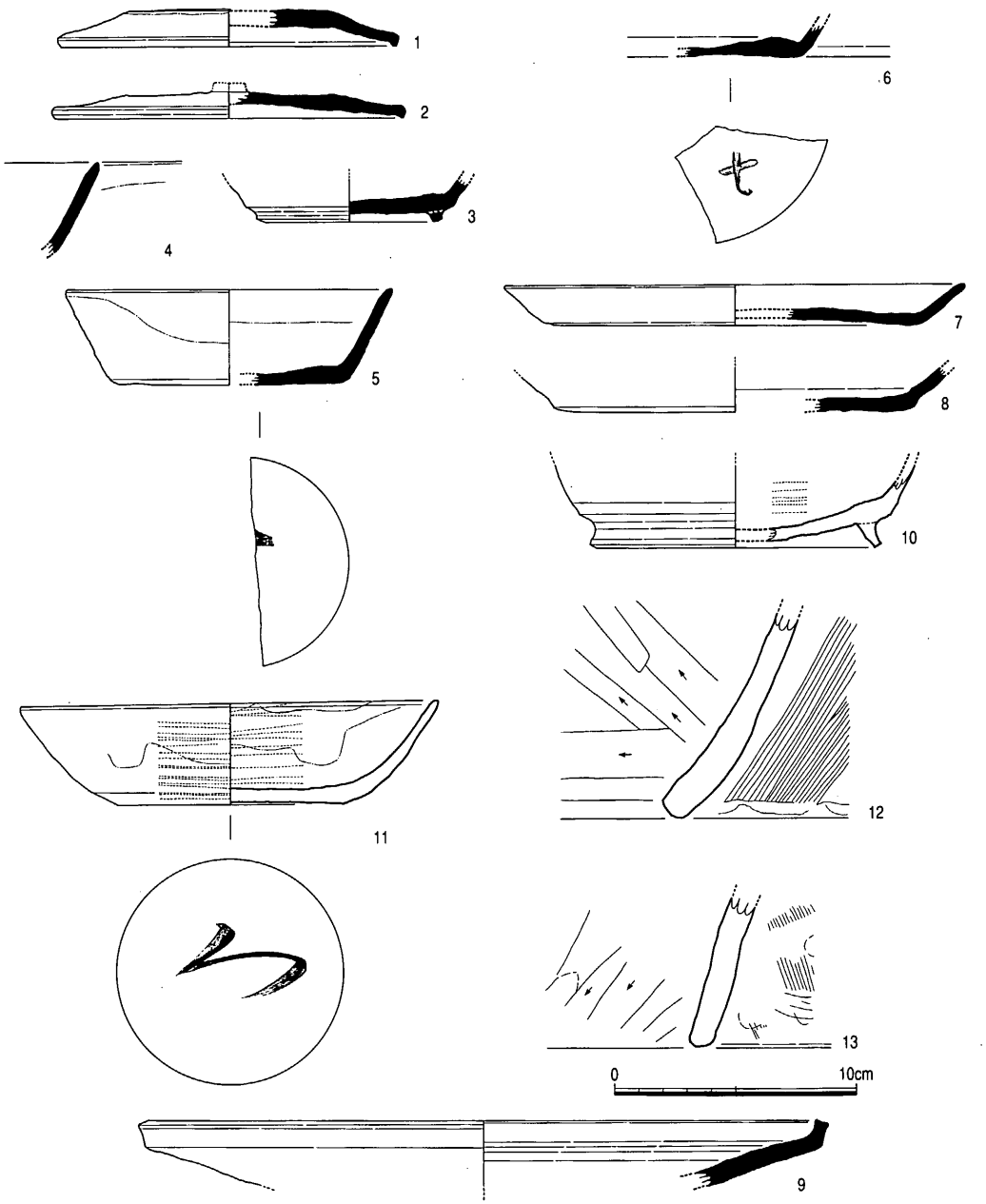


図100.154SE100灰色粘土出土遺物実測図（S=1/3）

製塩土器

焼塩壺（51）　円筒形を呈するものと考えられ、内面に細かい布痕跡が観察できる。

154SE100灰色粘土（井戸枠内）出土遺物（図100）

須恵器

蓋（1・2）　1は口縁部から天井部までの破片で、つまみの有無については判断できない。2

はつまみ貼付のナデが確認できることから、つまみは貼付されていたと考えられるが形状については不明。天井部外面は回転ヘラ切り後、ナデによって仕上げられている。口縁端部の面取りは明瞭ではなく、やや手抜きされた不明瞭な断面三角形を呈している。

坏（3～6）　全形を観察できるのは、5のみで底部から外方へ開く体部形態を有し、底部外面の処理は回転ヘラ切り後ナデによって仕上げられている。口縁部内外面は焼き斑によって灰黒色に変色している。底部外面には墨書が確認できるが、わずかに確認できるもので判読はできない。3および6は高台および底部の破片で、3は底部外面磨耗のため処理状況については観察できない。6は底部外面を回転ヘラ切りによって仕上げており、「七」様の文字が観察できる。

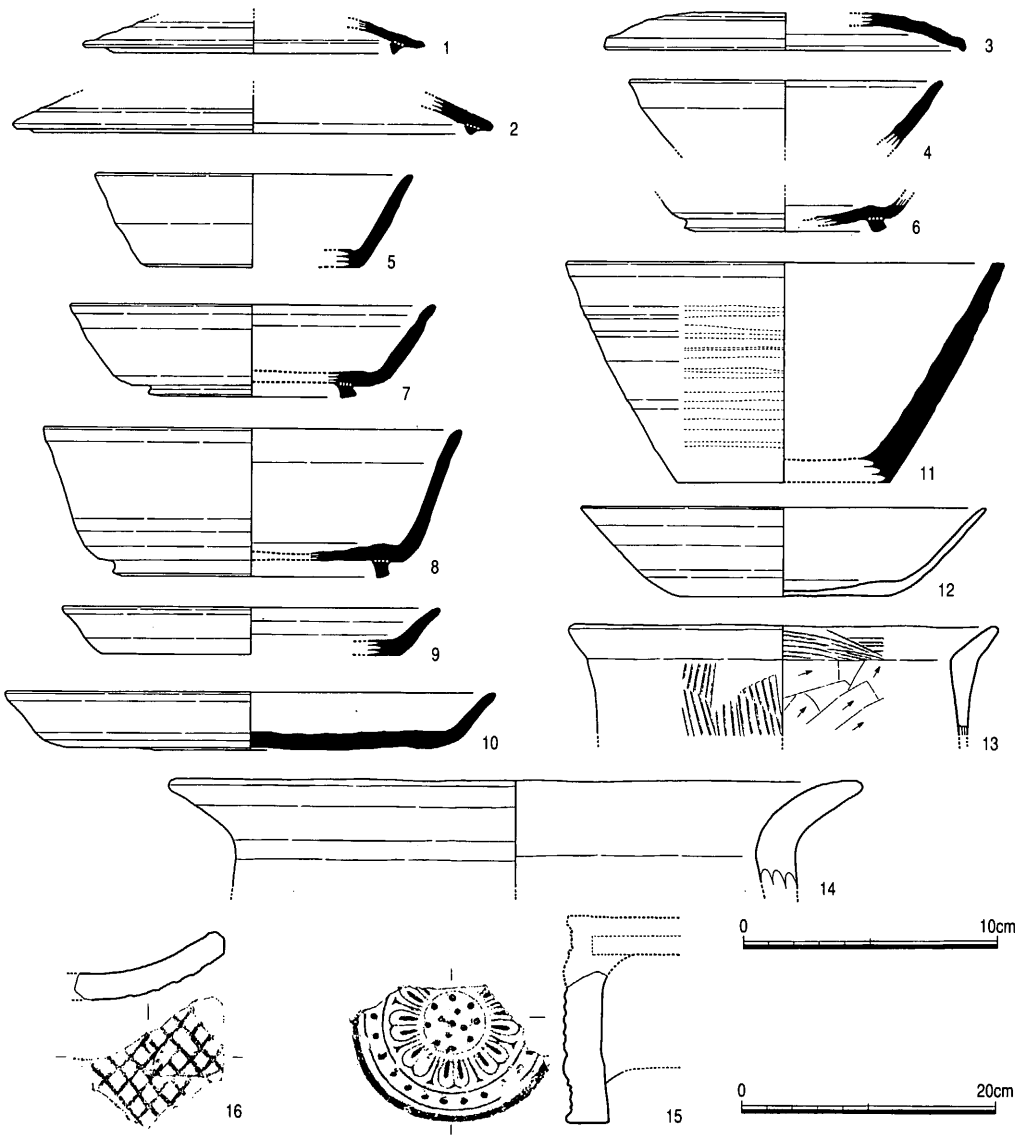


図101.154SK025出土遺物実測図（S=1/3・1/6）

4は口縁部のみの破片で内外面ともに回転ナデによって仕上げられており、口縁部外面に焼き斑のため黒灰色に変色している。

皿（7・8）　底部から体部へ丸みを持って移行する形状を有し、底部外面の処理はいずれも回転ヘラ切りの後、粗いナデによって仕上げている。8は底部外面に屈曲を有しており皿の他、大形の坏になる可能性がある。

高坏（9）　口縁部を上方へ折り曲げ、端部に平坦面を形成するもので、坏部外面下位を回転ヘラ削りするのみで、他の部位は回転ナデによって仕上げている。

土師器

坏（10・11）　10は高台が貼付される坏cで、高台端を外方に跳ね上げる形状を有している。内面に回転ヘラミガキが観察でき、底部外面は回転ヘラ削りによって仕上げられている。11は体部外面下位を回転ヘラ削りし、底部外面以外を全て回転ヘラミガキする坏dに該当する。口縁部内外面は黒褐色に変色し、底部外面に墨書がある。

甑（12・13）　甑の底部付近の破片と考えられ、内面はヘラ削り、外面は刷毛によって調整されている。

3）土坑出土遺物

今回の調査では、一括廃棄等、極めて時間の短い行為を想定できる状況を看取できる遺構はなく、時間軸上で長短はあるが自然堆積による土坑埋没が考えられる遺構であった。したがって、遺構周辺の散在する遺物が入り込んだ状況で新旧の遺物が混在するものがある。

154SK025出土遺物（図101）

須恵器

蓋（1～3）　1および2は、口縁部内面にかえりを有する蓋1、3は口縁部を断面三角形に作り出す蓋3に該当する。1および2は口縁部のみの破片であるため詳細は不明。3は口縁端部の面取りを丁寧に行い、天井部外面は回転ナデによって仕上げられている。

坏（4～8）　4および6は破片資料で、全形については不明。6は高台端部を外方に跳ね上げる形状を有しており、4は内外面ともに回転ナデによって仕上げられている。5は高台を付さない坏aに該当し、底部外面の処理は、回転ヘラ切り未調整である。7・8は高台を貼付する坏cで、7は底部から体部へ丸みを持って移行し高台端を外方に跳ね上げている。8も同様の製作工程が看取できるが、8の方が体部の立ち上がりがきつい。底部外面の処理は回転ナデによって仕上げられている。

皿（9・10）　底部から体部への移行が丸みを持って移行しており、底部外面は回転ヘラ切り未調整である。

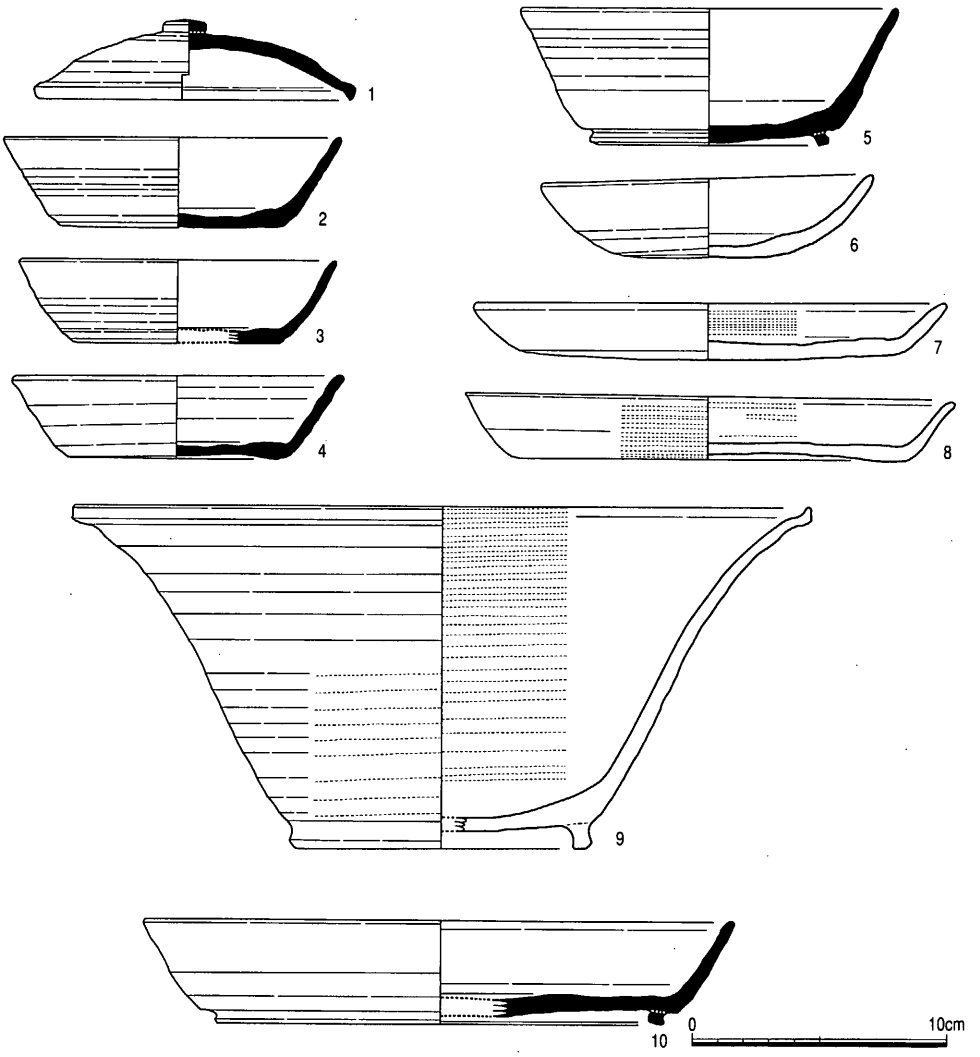


図102.154SK025各土層出土遺物実測図（S=1/3）

鉢（11）　小形の鉢bと考えられ、口縁端部を平坦に仕上げる。体部外面は回転ヘラ削りの後、回転ヘラミガキによって仕上げている。体部は外方に開いている。

土師器

坏（12）　内外面ともに磨耗が著しく、ミガキ痕跡は確認できない。体部外面下位から底部外面にかけて回転ヘラ削り痕跡は確認できる。また底部外面には、赤褐色を呈する顔料が付着している。

甕（13・14）　13は小形甕a、14は中形甕で、13は内面ヘラ削り、外面刷毛調整で、口縁部内外面に黒色の付着物が観察できる。14は器面磨耗のため詳細は不明。

瓦

軒丸瓦（15）　瓦当部分のみ残存するもので、鴻臚館I式に該当するものと考えられる。

平瓦（16）　凸面に格子叩き目を有するもので、凹面には布痕跡をとどめている。

154SK025灰黒色粘土出土遺物（図102）

須恵器

蓋（1）　ボタン状のつまみを貼付し、口縁部断面三角形を呈するもので蓋c3に該当する。天井部外面は、回転ヘラ切り後丁寧なナデによって仕上げられており、口縁端部は、やや形骸化した面取りを行っている。

坏（2～5）　2～4は高台を貼付しない坏a、5は高台を貼付する坏cに該当する。2および3は、底部外面をヘラ切りし、丁寧にナデるのに対し、4は粗くナデている。5は底部から外方に開く体部形態を有し、底部外面はヘラ切りの後、ヘラ状工具によって調整されている。

土師器

坏（6）　器面磨耗のため調整痕跡は不明。形状から坏dに該当するものと考えられる。

皿（7・8）　いずれも底部外面を回転ヘラ削りするもので、7は外面磨耗のためミガキ痕跡については不明ながら、内面は回転ヘラミガキによって仕上げており、8は底部外面以外の内外面は丁寧に回転ヘラミガキによって仕上げている。8の方が体部の立ち上がりがきつい。

鉢（9）　精製の鉢で、底部より口縁部へ大きく開く体部形態を有しており、体部中位より下位ならびに底部外面を丁寧に回転ヘラ削りし、底部外面を除く内外面を丁寧に回転ヘラミガキによって仕上げている。

154SK025青灰色粘土出土遺物（図102）

須恵器

大皿（10）　体部外面下位から底部外面にかけて回転ヘラ削りによって調整しており、他の部位は回転ナデによって仕上げられている。高台部分は歪みのためか、高台外端部を接地している。

154SK035出土遺物（図103・104）

須恵器

蓋（1～3）　口縁部から天井部まで残存する破片資料で、1はつまみ貼付のための回転ナデ痕跡が確認できるため、つまみ貼付が推定できるが、形状については不明。他の2点については、つまみの有無については判断できない。天井部外面は、ヘラ切り後、ナデによって仕上げている。口縁端部外面は丁寧に面取りを行っている。

坏（4～6）　4は底部より外方に開く体部形状を有し、底部外面の処理は回転ヘラ切りによって仕上げている。高台を付さない坏aに該当する。5はやや丸みを有する体部形態を有し、体部外面に一部回転ヘラ削りを施す。坏dないしは皿aに該当するものと考えられる。6は、高台を貼付した坏cに該当し、底部から直線的に立ち上がる体部形態を有するが、立ち上がりはき

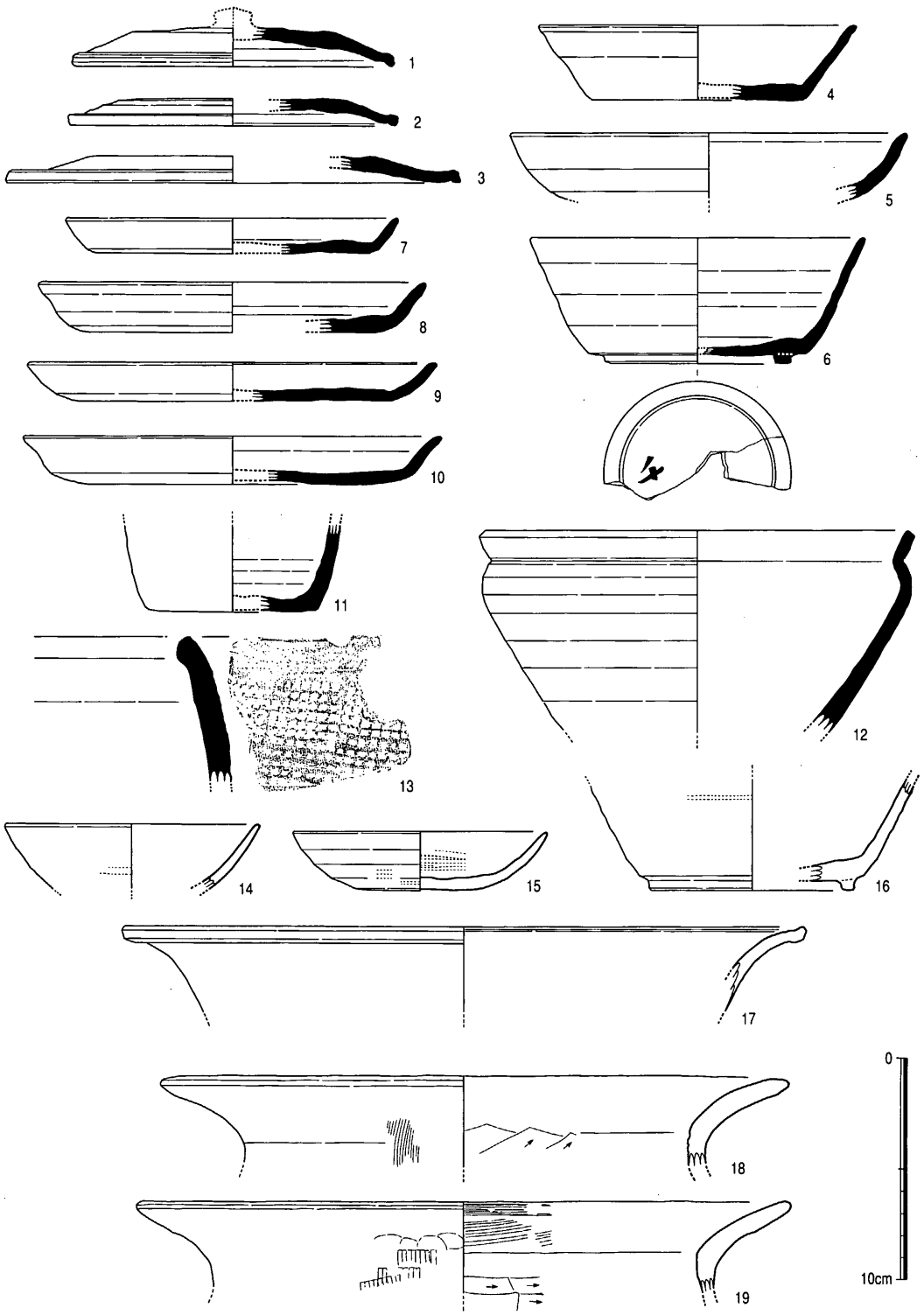


図103.154SK035出土遺物実測図（１）（S=1/3）

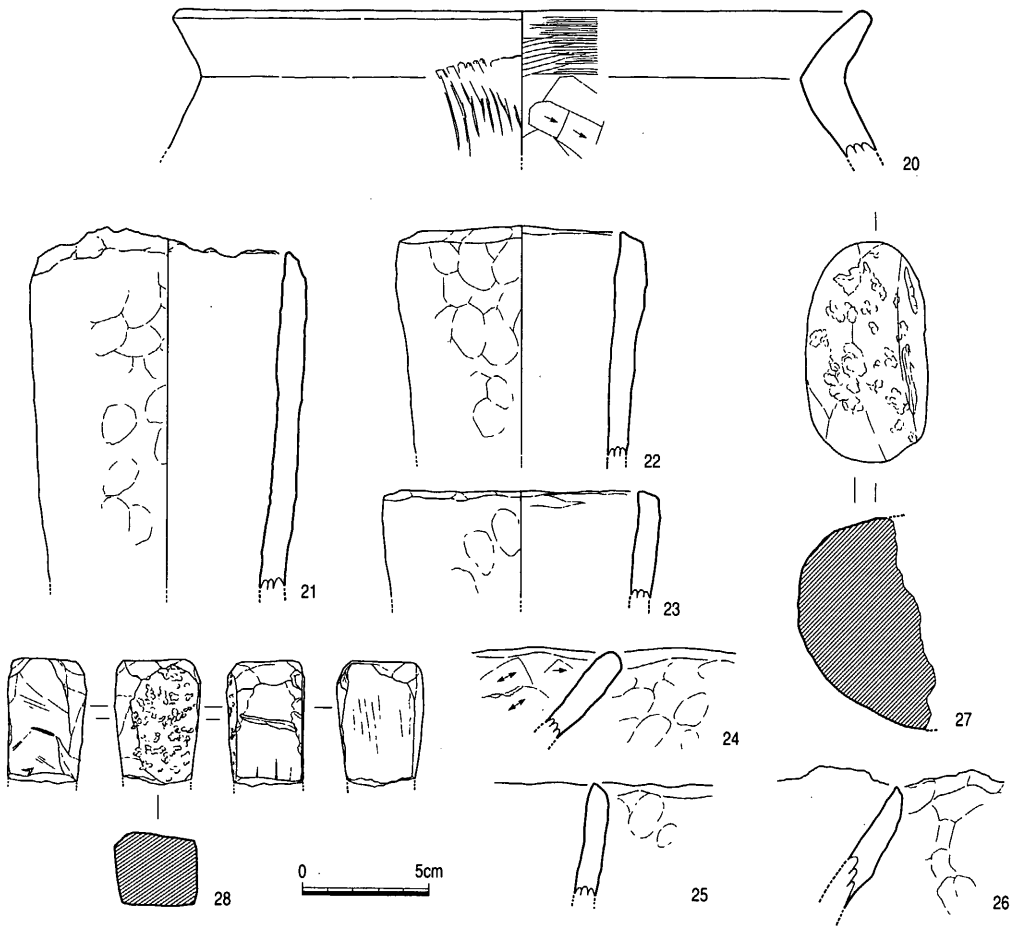


図104.154SK035出土遺物実測図（２）（S=1/3）

つい。底部外面の処理は丁寧なナデによって仕上げられている。底部外面には墨書が確認できる。

皿（7～10）　法量に大小があるが、いずれも底部から体部への移行は丸みを帯びている。底部外面の処理は回転ヘラ切り後、丁寧なナデによって仕上げられている。

小壺（11）　底部の破片で全形については不明。底部外面の処理はヘラ切り後、丁寧なナデによって仕上げられている。体部下位も回転ナデによって仕上げている。

鉢（12～13）　12は、口縁部を屈曲させ体部外面下位を回転ヘラ削りする。13は体部外面に格子叩き目を残し、内面は回転ナデによって仕上げている。

土師器

坏（14～16）　14および15は、体部外面下半に回転ヘラ削り痕跡を留めていること、ならびに丸みを有する体部形状を有していることから坏dに該当するものと考えられる。15は内外面に回転ヘラミガキがわずかに観察できる。法量から小坏dにあたる。16は高台を貼付する坏cにあたるが、器面磨耗のため調整痕跡については不明。

鉢（17）　精製の鉢で、外面下位は横方向のヘラ削り、他の部位は横ナデによって仕上げている。

甕（18～20）　18および19はあまり胴の張らないものと考えられるが、20は頸部の張り具合から、胴が張るものと考えられる。内面ヘラ削り、外面刷毛調整を行う甕aに該当する。

製塩土器

焼塩壺（21～26）　21～23・25は円筒形を有する焼塩壺で25以外は内面に布痕跡を残している。24・26は鉢状の形態を有するもので、24は内面をヘラ状工具で削り、26は布痕跡を留めている。

石製品

擂り石（27）　玄武岩製で、叩き痕跡も留めているが、擦痕が観察できるため擂り石と考えた。

砥石（28）　細粒砂岩製で、4面を使用している。砥石の長軸方向への擦痕跡が観察できる。

154SK035灰茶色土出土遺物（図105）

須恵器

坏（1）　高台を貼付しないもので、底部外面の処理はヘラ切り後丁寧なナデによって仕上げている。底部から体部への立ち上がりはきつい。

皿（2）　底部から直線的に体部へ移行し、底部外面の処理はヘラ切り後、丁寧なナデによって仕上げている。なお底部外面には不定方向の条痕が観察できる。

土師器

坏（3～7）　3は、高台を貼付する坏cで、体部形態はやや丸みを有している。体部外面は回

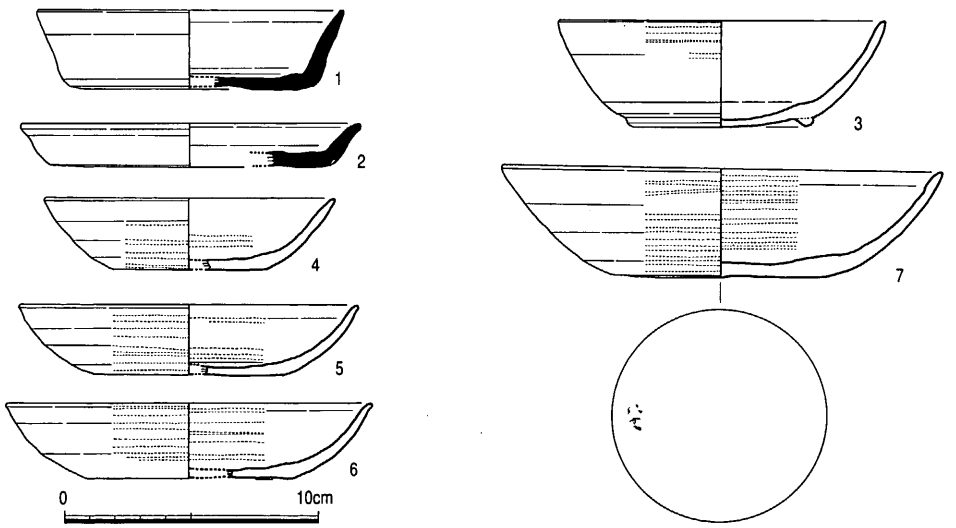


図105.154SK035灰茶色土出土遺物実測図（S=1/3）

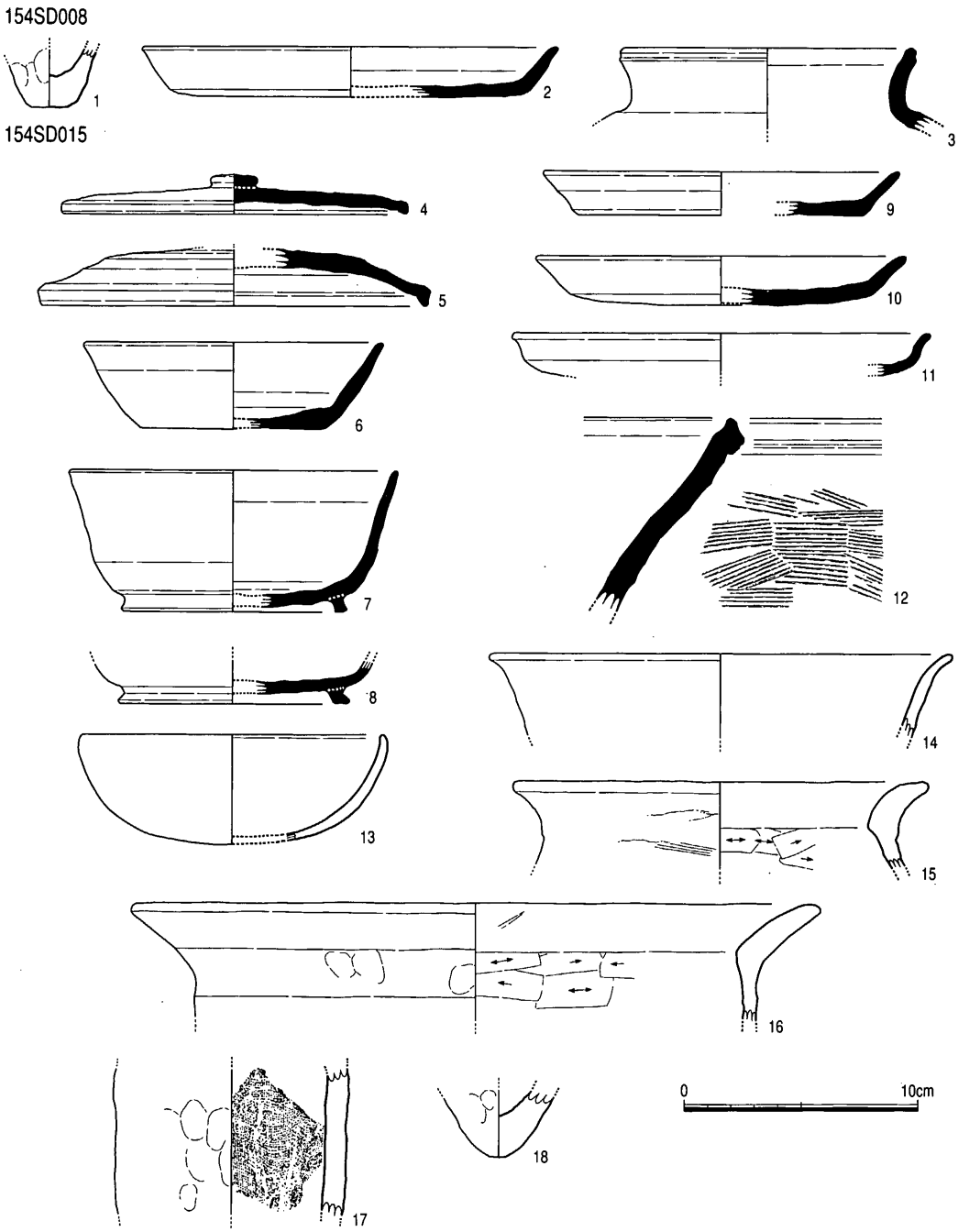


図106.溝出土遺物実測図（１）（S=1/3）

転ヘラ削り痕跡が観察できるが、器面磨耗のためミガキ痕跡がわずかに残存している。4～7は底部外面を回転ヘラ削りし、内外面を回転ヘラミガキによって仕上げる坏dに該当する。いずれも底部外面はミガキがない。法量に大小があり4～6は中形のもの、7は大形に属している。7の底部外面には「安」と判読できそうな墨書がある。

4）溝出土遺物

今回の調査では、溝埋没にあたって廃棄された遺物の出土はなく、土坑同様に時間軸上で長短はあるが自然堆積によって埋没したもののみであった。したがって述べるまでもなく溝出土遺物は、溝の機能が放棄され、埋没した時期を推定する上で指標になる遺物であるが、溝出土遺物で最も新しい型式が溝埋没時期に近い可能性を示唆していることになる。したがって、今回の出土遺物の場合、最新型式＝埋没時期ではなく、最新型式≒埋没時期ということになる。

154SD008出土遺物（図106）

須恵器

皿（2）　底部から体部へ屈曲を持って移行し、底部外面の処理はヘラ切り後ナデによって仕上げている。体部は外方へ開き気味に立ち上がるが、立ち上がりの傾斜はややきつめである。

製塩土器

焼塩壺（1）　底部のみの破片で、全形については不明。

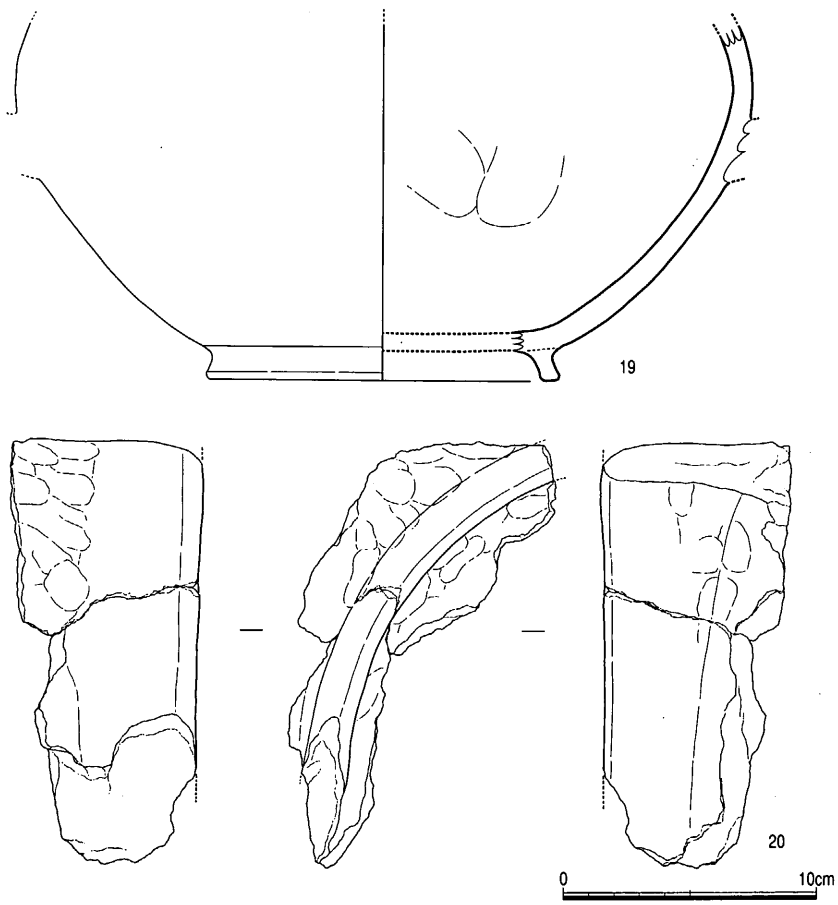


図107.溝出土遺物実測図（2）（S=1/3）

154SD015出土遺物（図106～107）

須恵器

蓋（4・5）　4はつまみを貼付し、断面三角形を呈する蓋c3に該当し、天井部外面はヘラ切り後ナデによって仕上げている。5はつまみの有無については不明、天井部外面の処理は回転ヘラ削りによって仕上げている。口縁端部は両者とも丁寧に面取りしている。

坏（6～8）　6は高台を貼付しない坏aで、底部外面の処理はヘラ切り後条痕様の痕跡をとどめる再調整がなされている。7・8は高台を貼付する坏cに該当し、全形が観察できる7は、底部から体部への移行は丸みを持って移行し、体部の立ち上がりはきつい。7の底部処理は丁寧なナデによって仕上げられており、8は回転ヘラ削りによって仕上げられている。

皿（9～11）　9は底部から体部への移行が屈曲をもってなされ、底部外面の処理はヘラ切りの後、粗いナデによって仕上げられている。10は、9と同様に底部から体部への移行が屈曲をもってなされるが、底部がやや下位に膨らむ形状を有している。底部外面の処理はヘラ切り後、丁寧なナデによって仕上げられている。11は底部から体部へ丸みを持って移行し、口縁部がやや外反する。

甕（3・12）　3は直立気味に立ち上がる口縁部形態を有し、口縁部外面にヘラ状工具による文様らしきものが観察できる。12は大形の甕で、口縁部外面に刷毛による調整痕跡をとどめている。

土師器

坏（13）　丸底の坏で器面磨耗のため、成形・調整痕跡については不明。

鉢×甕（14）　口縁部の破片のため全形は不明だが、胎土組成がやや粗く、坏よりは精製の鉢ないしは甕と判断した。器面磨耗のため、成形・調整痕跡については不明。

壺（19）　把手が貼付されるものと考えられ、上位形態については不明。器面磨耗のため調整痕跡については観察できない。

甕（15・16）　15は小形の甕で、頸部の屈曲具合から胴が張るものと考えられる。16は中形の甕で、あまり胴の張らないものと考えられる。両者とも調整痕跡から甕aに該当する。

製塩土器

焼塩壺（17・18）　体部ならびに底部の破片のため、全形については不明。内面には布痕跡を留めている。17は残存形状から円筒形のものと考えられる。

土製品

竈（20）　鍔部分の破片と考えられ、指頭圧によって貼付されている。鍔内面が黒褐色に変色している。

154SD020出土遺物（図108・115）

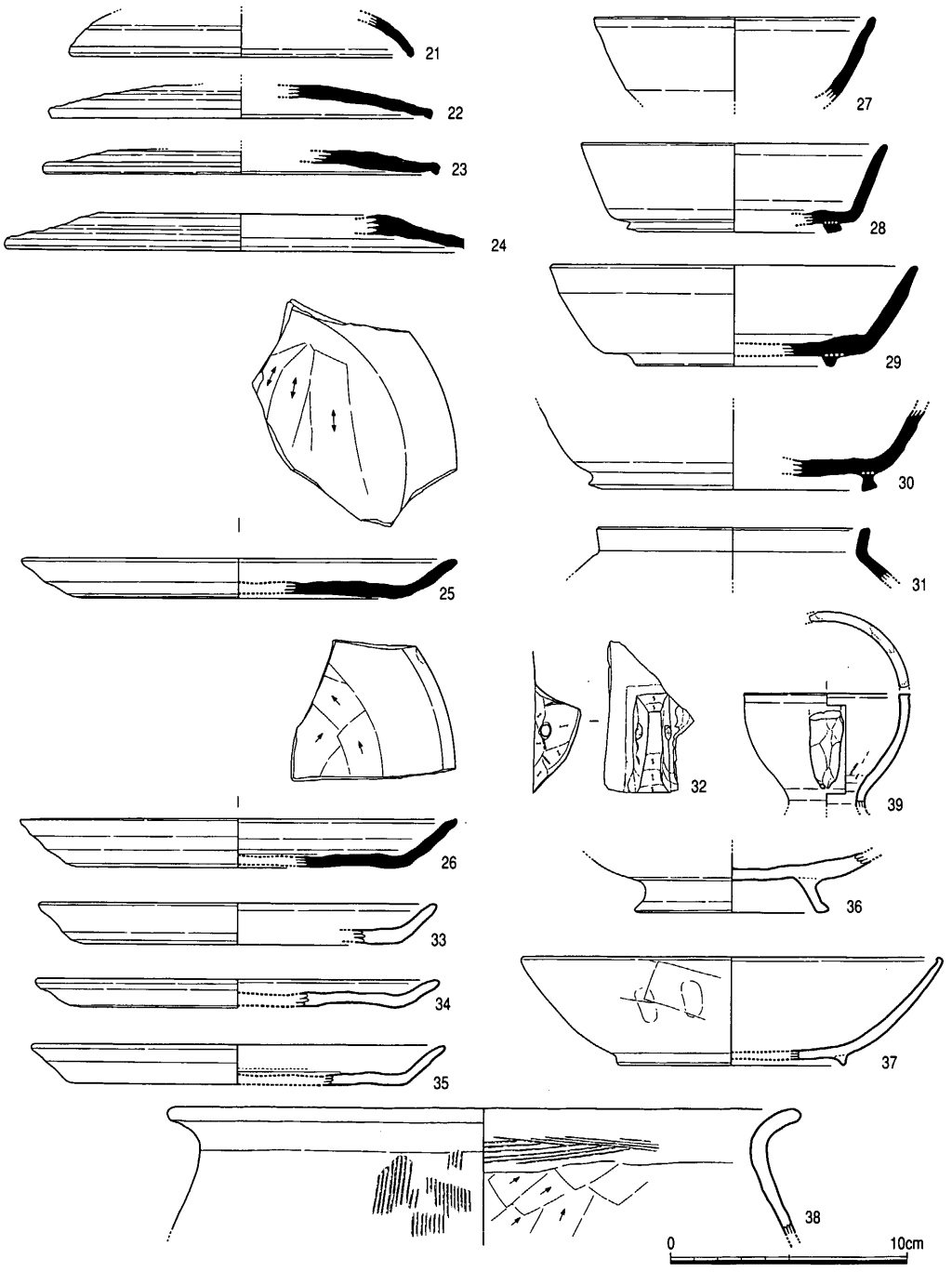


図108.溝出土遺物実測図（３）（S=1/3）

須恵器

蓋（21～24）　口縁部の破片で、つまみの有無については不明。口縁端部の処理は、21は１工程に省力化され、他の３点も２工程で処理されており、面取りが粗くなってきている。天井部外面は22および23はヘラ切り後ナデによって仕上げられているが、24は回転ヘラ削り痕跡を

とどめている。

皿（25・26）　器高が浅くなったもので、体部の開きは大きく、底部外面の処理はヘラ切り後ナデによって仕上げられている。両者とも見込み部分には研磨痕跡を留めており、硯として転用された可能性もある。

坏（27～30）　口縁部の破片である27以外は高台を貼付するもので、いずれも体部の立ち上がりはきつい。底部外面の処理が観察できる30はヘラ切り後、粗いナデによって仕上げている。28および30は高台外端を跳ね上げる形状をとどめている。

壺（31・32）　31は口縁部のみの破片であるが、壺aに該当する。32は把手のみの破片で、全形は判断できないものの、ここでは壺とした。把手全面に貼付のためのナデ痕跡をとどめている。

土師器

皿（33～35）　器高の低いもので、33が底部外面を回転ヘラ削りする他は、ヘラ切り後ナデによって底部外面の処理を行っている。器面残存状況が悪く、判断し難いものが多いが、35の内面にはミガキaの痕跡がわずかに観察できる。

椀（36・37）　やや高めの高台を有するもので、椀部分の形状は判断し難い。37は口縁端部内面をわずかに窪ませたもので、外面は手持ちによるヘラ削り、断面三角形を呈する高台を貼付している。外面のミガキ痕跡については器面の状態が悪いため判断できない。この37は、畿内からの搬入品で、平安京I期新段階のものと考えられる。

甕（38・64）　38の製作技法は、内面ヘラ削り、外面刷毛調整を行うもので、筑前に一般的な甕と考えられたが、胎土組成が角閃石を多く含み、花崗岩風化生成物による製品ではないため、他地域からの搬入食器と考えられる。現在可能性が高いのは筑後国に分布中心を有する甕と考えられる。64は、先述した筑前に一般的な甕で、胎土組成も花崗岩風化生成物によって構成されている。口縁部内面はわずかに暗褐色に変色し、口縁部から体部外面を同様に変色している。

把手（65）　甕の把手と考えられるが、把手のみの破片のため、具体的な器種は特定できない。把手上面には縄目叩き痕跡が確認できており、特異な調整を施している。

越州窯系青磁

水注（39）　口縁部の破片で、把手が欠損しているが、やや大きめの扁平な把手が貼付されているものと考えられる。口縁端部に目跡が確認できる。

154SD024出土遺物（図109）

土師器

坏（40）　外面は磨耗しているが底部回転ヘラ削り、内面に回転ヘラミガキ痕跡をわずかに

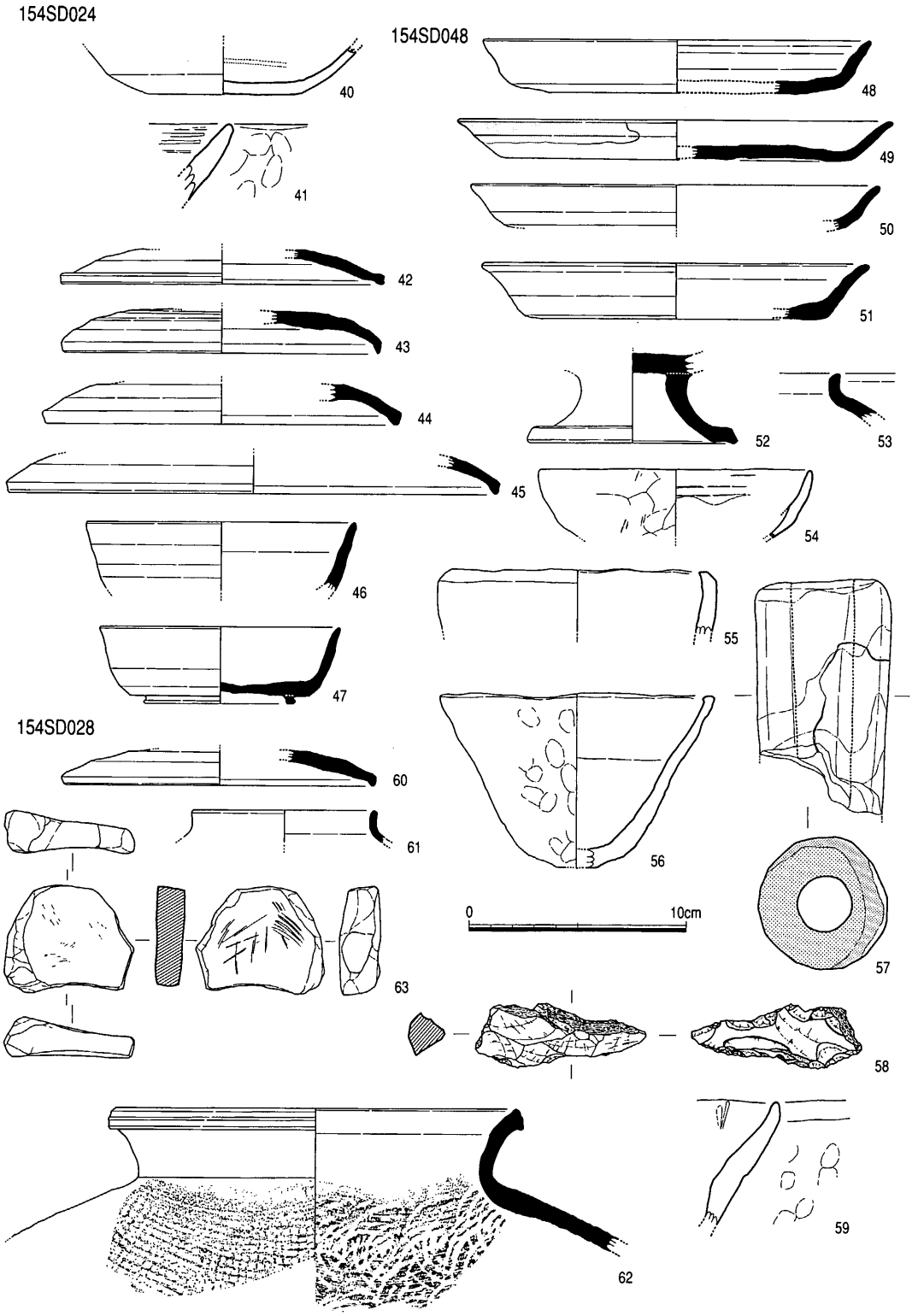


図109.溝出土遺物実測図（４）（S=1/3）

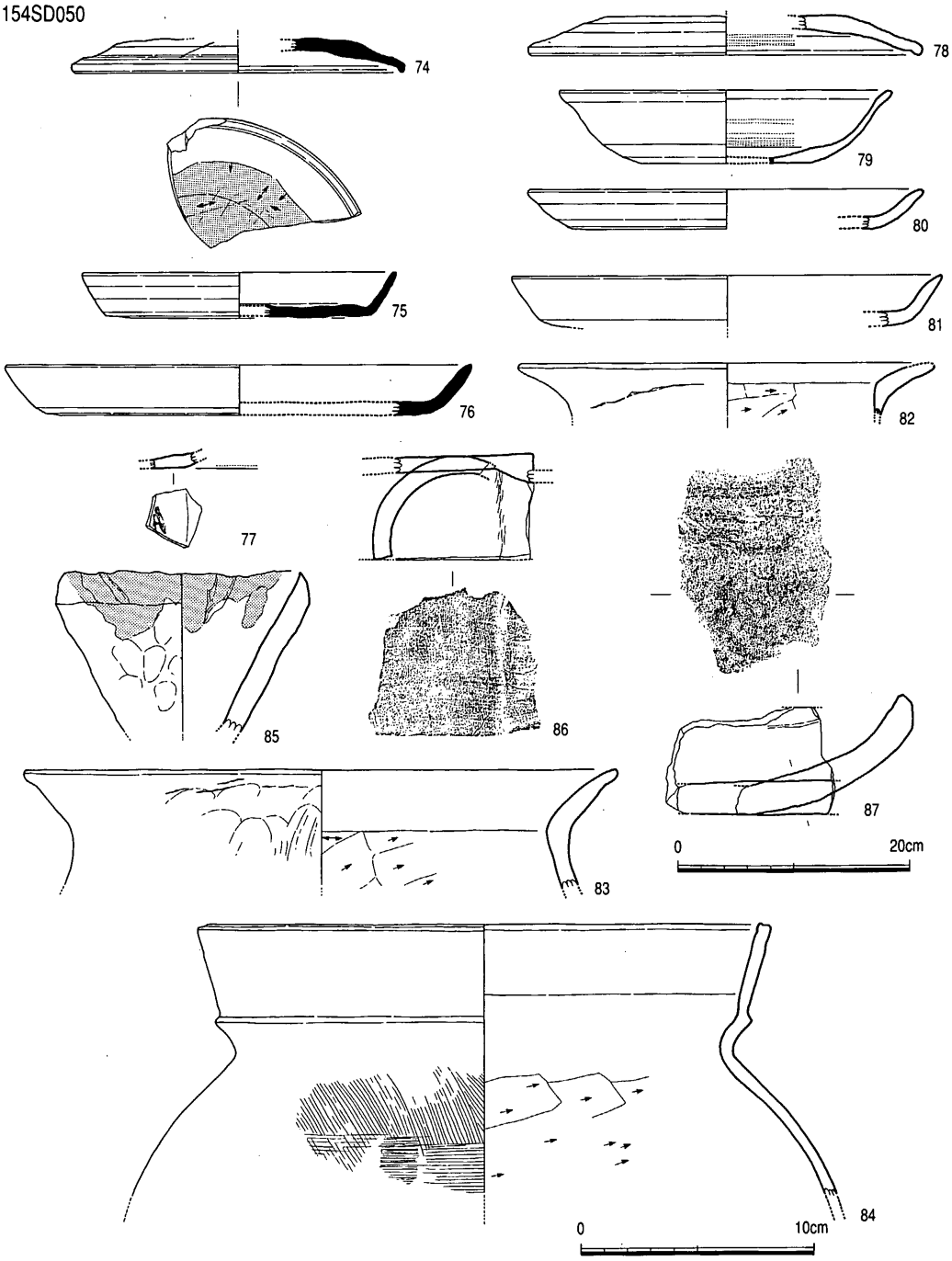


図110.溝出土遺物実測図（５）（S=1/3・1/6）

観察できる。

製塩土器

焼塩壺（41）　浅鉢形のもので、内面は横方向に刷毛によって仕上げられている。

154SD028出土遺物（図109）

須恵器

蓋（60）　天井部から口縁部が残存する破片で、天井部外面は回転ヘラ切り後丁寧なナデによって仕上げられている。口縁端部の処理は丁寧に面取りされている。

壺（61）　口縁端部の破片で、短頸壺だが把手が貼付される可能性もあり、壺a×cに該当する。

甕（62）　中形の甕で、口縁端部外面には凹線が二条観察できる。体部外面には格子叩き、内面には同心円当て具痕跡を留めている。また内面には当て具痕跡の上にカキ目痕跡が残存しており、再調整がなされている。

154SD048出土遺物（図109）

須恵器

蓋（42～45）　口縁部から天井部の破片で、天井部外面の処理が観察できる42～44は、42がナデによって仕上げている他は、回転ヘラ削りによって仕上げられている。口縁端部の面取りはいずれも丁寧に仕上げられている。

坏（46・47）　46は口縁部の破片で、体部の立ち上がりはきつい。47は底部外面の処理をヘラ切り後、ナデによって仕上げている。体部の立ち上がりは46同様にきつく、底部から体部への移行箇所が丸く膨らむ。

皿（48～51）　48は底部から体部への移行が丸く、底部がやや下位に膨らむ形状を呈する。他のものは底部から体部への移行は屈曲をもって移行し、底部外面の処理が観察できる個体は全てヘラ切り後ナデによって仕上げている。

高坏（52）　短脚の高坏で、脚端部の面取りを丁寧に行っている。

壺（53）　短頸壺の壺aに該当し、口縁端部が内面に傾斜している。

土師器

坏（54）　手持ち成形のもので、外面に指頭圧痕を明瞭にとどめている。また胎土に角閃石を多く混入しており、塩基性岩の分布域からの搬入品と考えられる。

製塩土器

焼塩壺（55～56・59）　55は円筒形の形状を有するものと考えられ、内面には布痕跡をとどめている。56・59は浅鉢形のもので外面には指頭圧痕跡および内面には板状工具によるナデによって仕上げられている。

土製品

フイゴ羽口（57）　羽口の挿入部分が欠損したもので、二次焼成のため暗灰色・橙灰色・淡褐色に変色している。

154SD050黒褐色土

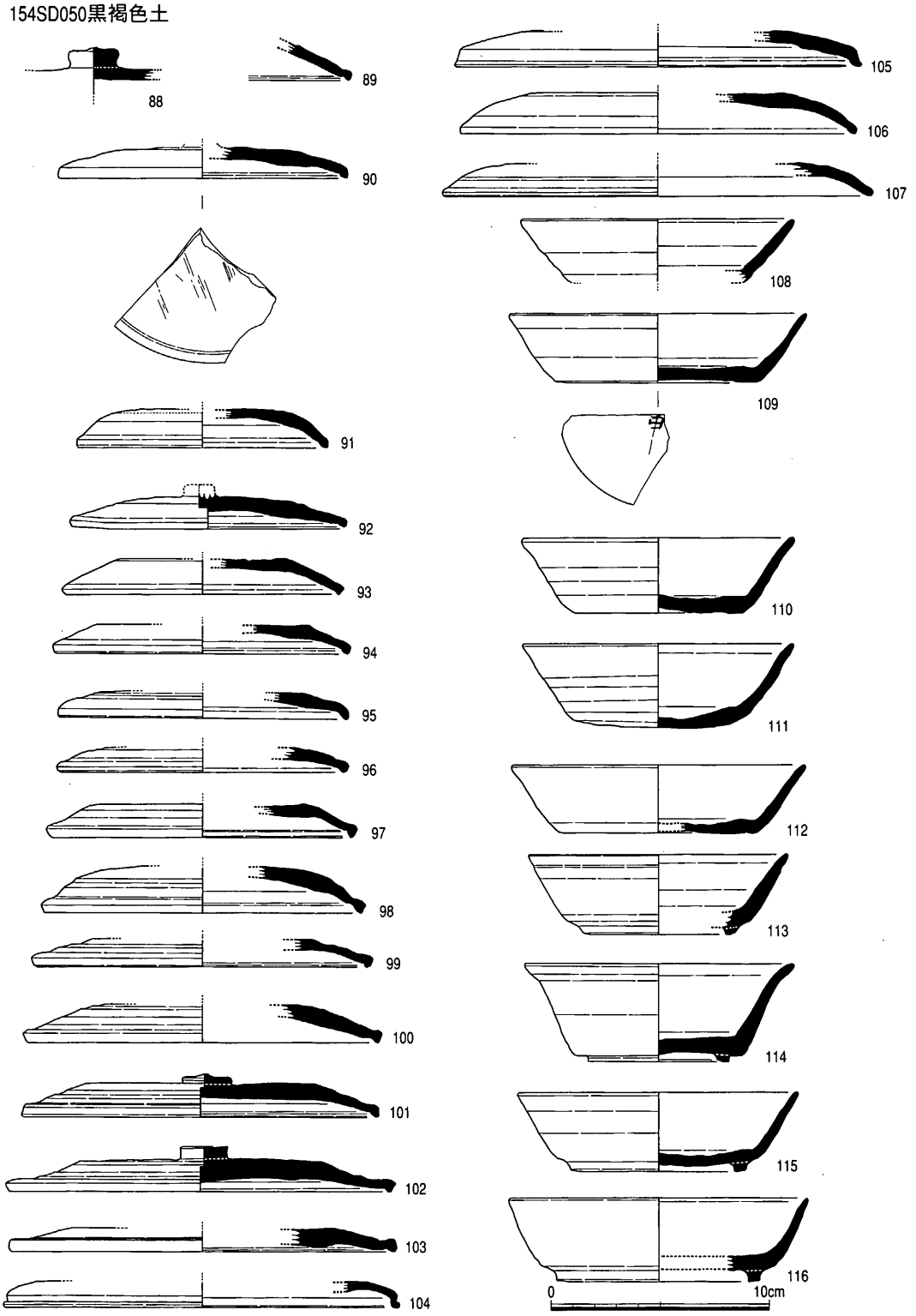


図111.溝出土遺物実測図（6）（S=1/3）

154SD050黒褐色土

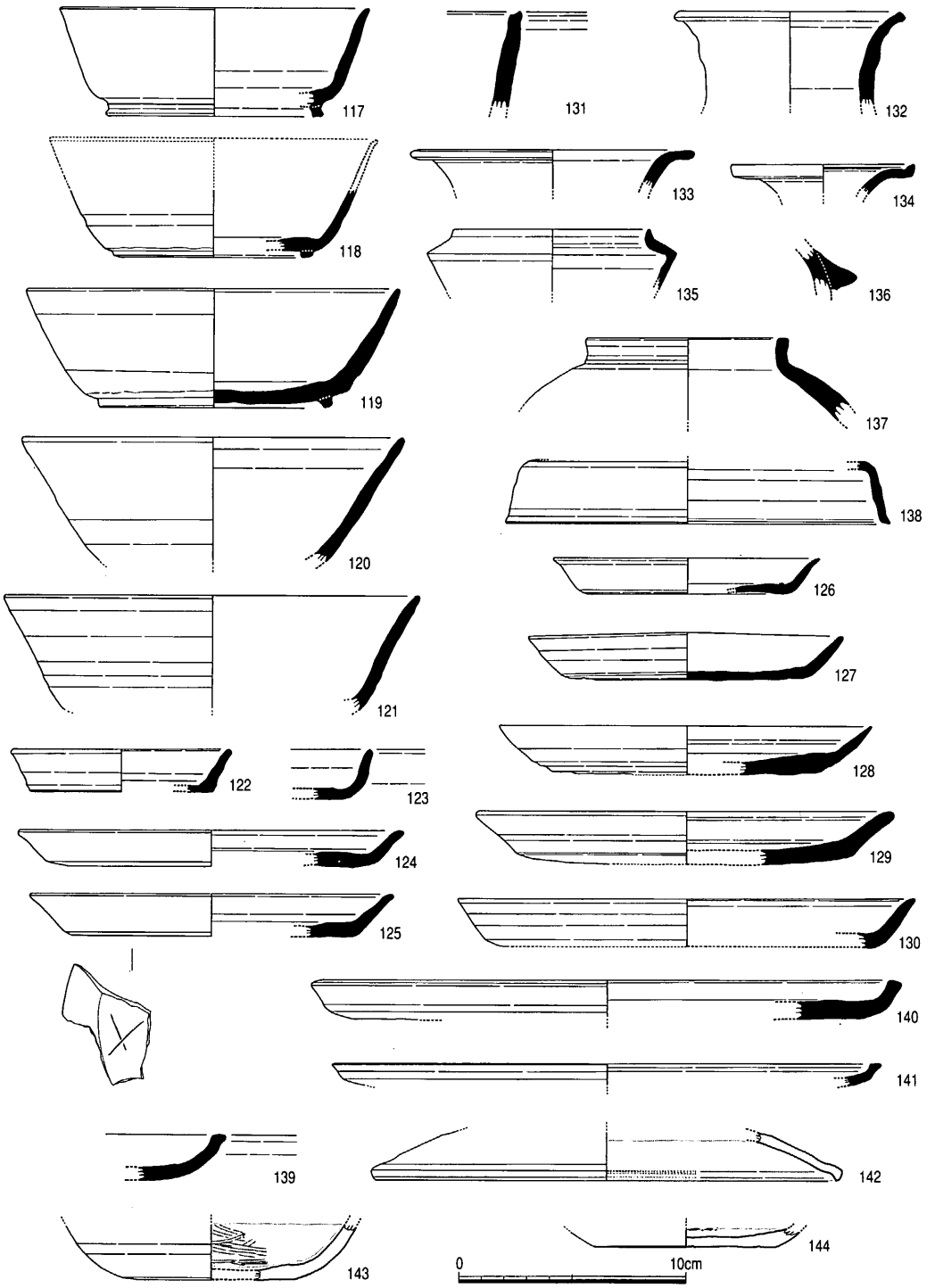


図112.溝出土遺物実測図（７）（S=1/3）

石製品

剥片（58）　材質は安山岩で、断面三角形を呈する。長軸長、7.9cmを測る。

154SD050出土遺物（図110）

須恵器

蓋（74）　天井部から体部までの破片で、天井部外面の処理はヘラ切り後丁寧なナデによって仕上げられている。口縁端部の処理は明瞭な面取りによって仕上げられていない。天井部内面には擦痕が観察でき、硯として転用されたものと考えられる。

皿（75・76）　75は中形の法量を有する皿で、底部から体部への移行を屈曲によって行い、体部の立ち上がりはきつい。76は底部から体部への移行箇所にヘラ挿入痕跡に伴う削り痕跡が観察でき、体部の開きは75比べきつい。底部外面の処理は両者ともヘラ切り後ナデによって仕上げている。

土師器

蓋（78）　天井部から口縁部まで残存するもので、天井部外面を回転ヘラ削りによって仕上げている。口縁端部は丁寧に面取りされて仕上げられており、天井部内面は回転ヘラミガキによって仕上げられている。蓋3に該当する。

坏（77・79）　77は小破片のため器種特定は困難だが、底部外面が横方向のヘラ削りによって仕上げられていることから坏dの底部であると考えられる。底部外面に墨書が残存している。79も同様に体部外面下位から底部外面を回転ヘラ削りし、内面のみを回転ヘラミガキする坏dにあたる。

皿（80・81）　80は器高の低いもので、底部から体部への移行はやや丸みをもっている。底部から体部への移行箇所にヘラ挿入痕跡と考えられるヘラ削り痕跡が観察でき、体部の開きは大きい。81は底部が下位に膨らむものと考えられ、底部外面の処理は不明。

甕（82・83）　82は、頸部の屈曲具合から胴張りのないものと考えられ、外面は磨耗のため調整痕跡不明、内面はヘラ削りによって仕上げられている。83はやや胴張りのあるものと考えられ、口縁端部外面に粘土紐痕跡を留めている。

古式土師器

壺（84）　二重口縁壺で口縁部の開きは弱い。体部内面はヘラ削り、体部外面は刷毛によって仕上げられており、口縁部内外面はナデによって仕上げられている。

製塩土器

焼塩壺（85）　浅鉢形のもので、内面磨耗のため成形・調整痕跡は確認できない。口縁部内外面に乳白色部分の変色箇所がある。

瓦

丸瓦（86）　凸面には縄目叩きをとどめ、凹面には布痕跡が観察できる。端部には折り曲げ切断によって切り離された痕跡がある。

平瓦（87）　凹面には布痕跡がわずかに残り、その後ナデによって再調整がなされている。凸面には縄目叩き痕跡、端部はヘラ切りによって切断されている。

154SD050黒褐色土出土遺物（図111～114）

須恵器

蓋（88～107）　法量から大中小に分けられ、小形のもの（91）、中形のもの（92～104）、大形のもの（105～107）がある。また天井部外面は、100以外は全てヘラ切り後ナデ調整によって再調整がなされており、100のみ回転ヘラ削りによって仕上げられている。口縁端部の処理は、丁寧に面取りされるもの（91・98・100・101・103・105）、やや丁寧に面取りされるが処理工程が省略されたもの（89・90・93・94・97・102）、工程省略によって端部処理が不明瞭なもの（92・95・96・99・104・106・107）がある。つまみ形状が判明するものは、88、101、102で擬宝珠形を呈する88・101があり、ボタン状を呈する102がある。

坏（108～121）　高台を貼付しない坏a（108～112）、高台を貼付する（113～119）がある。120および121は、口縁部のみの破片のため高台貼付の有無は不明。坏aは小形のものが多く、底部より屈曲して体部へ移行し、底部外面はヘラ切り後ナデによって仕上げている。109の底部外面には「甲」ないしは「申」と判読できる墨書が観察できる。坏cには小形のものと中形のものがあり、底部から体部の境界が不明瞭で、体部の立ち上がりがきつい。底部外面の処理が観察できるものは、ヘラ切り精粗の差はあるがナデによって調整されている。

椀（155～157）　155は器種が判然としないが、底部外面に「十」字様のヘラ記号が観察できる。156・157は器高が深いため椀とした。器面磨耗が著しいものの、体部外面下位を回転ヘラケズリによって調整し、外面を回転ヘラミガキによって仕上げている。

皿（122～130）　法量から小形のもの（122・126）、中形のもの（124・125・127～130）がある。小形のものとしてあげた122は、底部外面を回転ヘラ削りするため、小形の短頸壺（135）の蓋である可能性も高い。他の個体は底部外面の処理が明らかものは、ヘラ切り後ナデによって仕上げられている。123については口縁部の破片のため全形は不明だが、底部から体部への境界は不明瞭で丸みをもっている。他の個体については境界が明瞭であり体部は外方へ大きく開く。129は底部が下位へ膨らむものである。

高坏（139～141）　口縁端部に平坦面を形成するものでいずれも口縁部のみの破片であることから、高坏かどうか確定するべきではないが、上述した皿とは異なった形状を呈していることから、可能性の範囲で高坏とした。140は坏底部外面を回転ヘラ削りしている。

黒色土器

154SD050黒褐色土

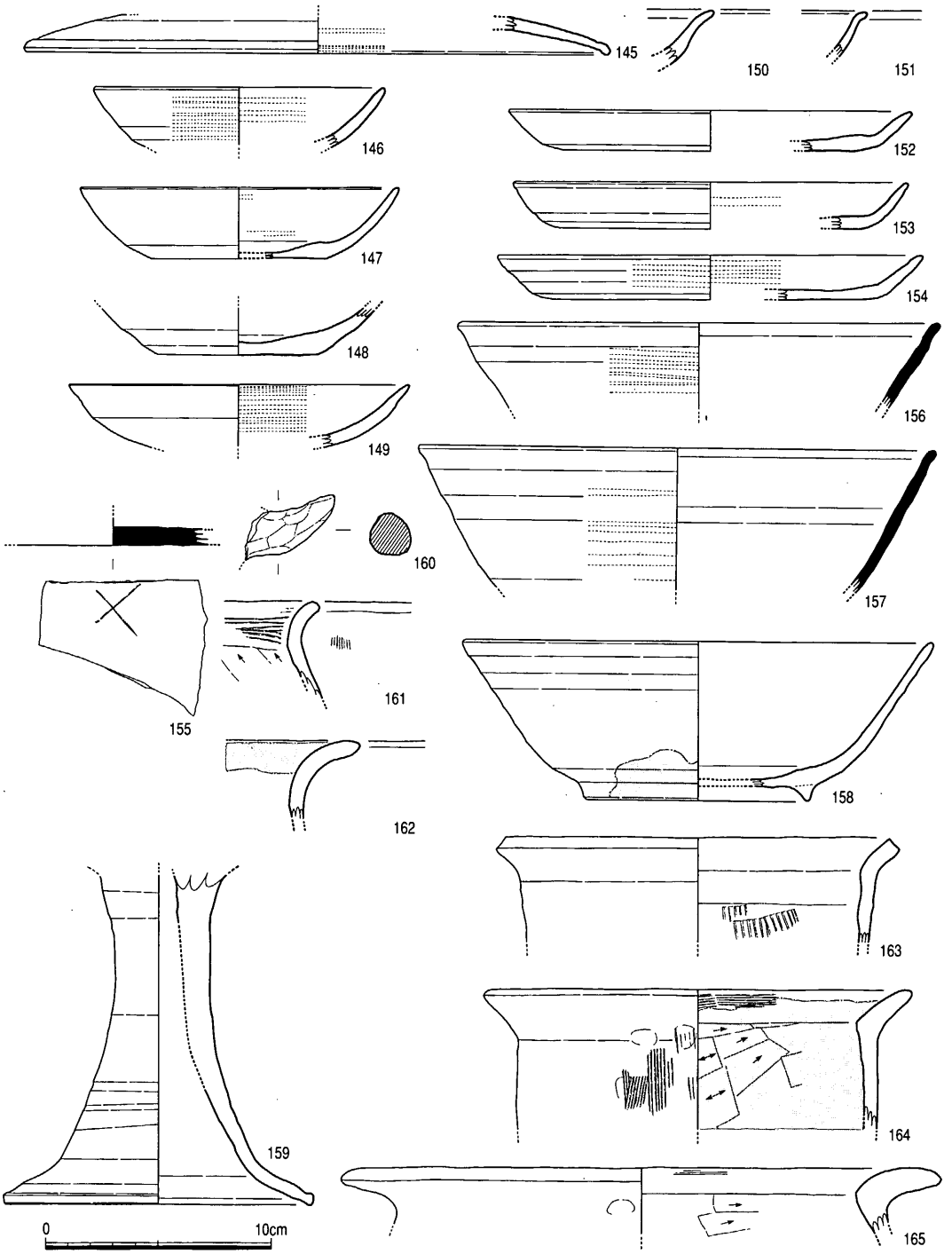


図113.溝出土遺物実測図（８）（S=1/3）

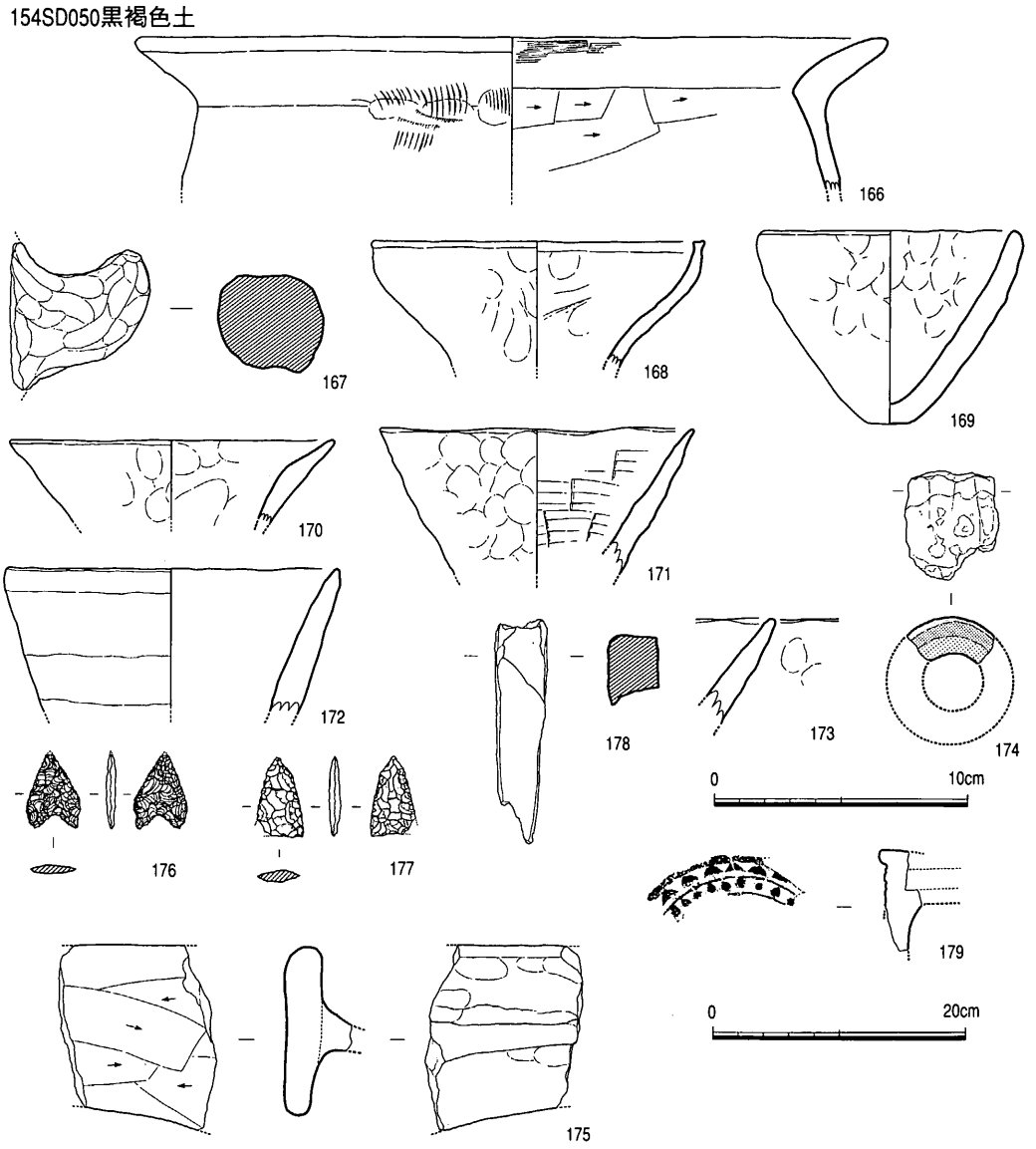


図114.溝出土遺物実測図（９）（S=1/3・1/6）

蓋（142）　口縁端部を断面三角形に整えるもので、器面磨耗のため調整痕跡が判然としない。A類。

坏（143・144）　143は外面が磨耗しており調整痕跡については判然としないが形状から坏dに相当するものと考えられる。内面は手持ちによるミガキによって仕上げられている。144も同様に磨耗によって調整痕跡が確認し難い。A類。

土師器

蓋（145）　やや大形の蓋で天井部から口縁部にかけての破片。口縁端部の面取りは丁寧ではなく、天井部外面の処理はヘラ削りによって仕上げられている。天井部内面に横方向のミガ

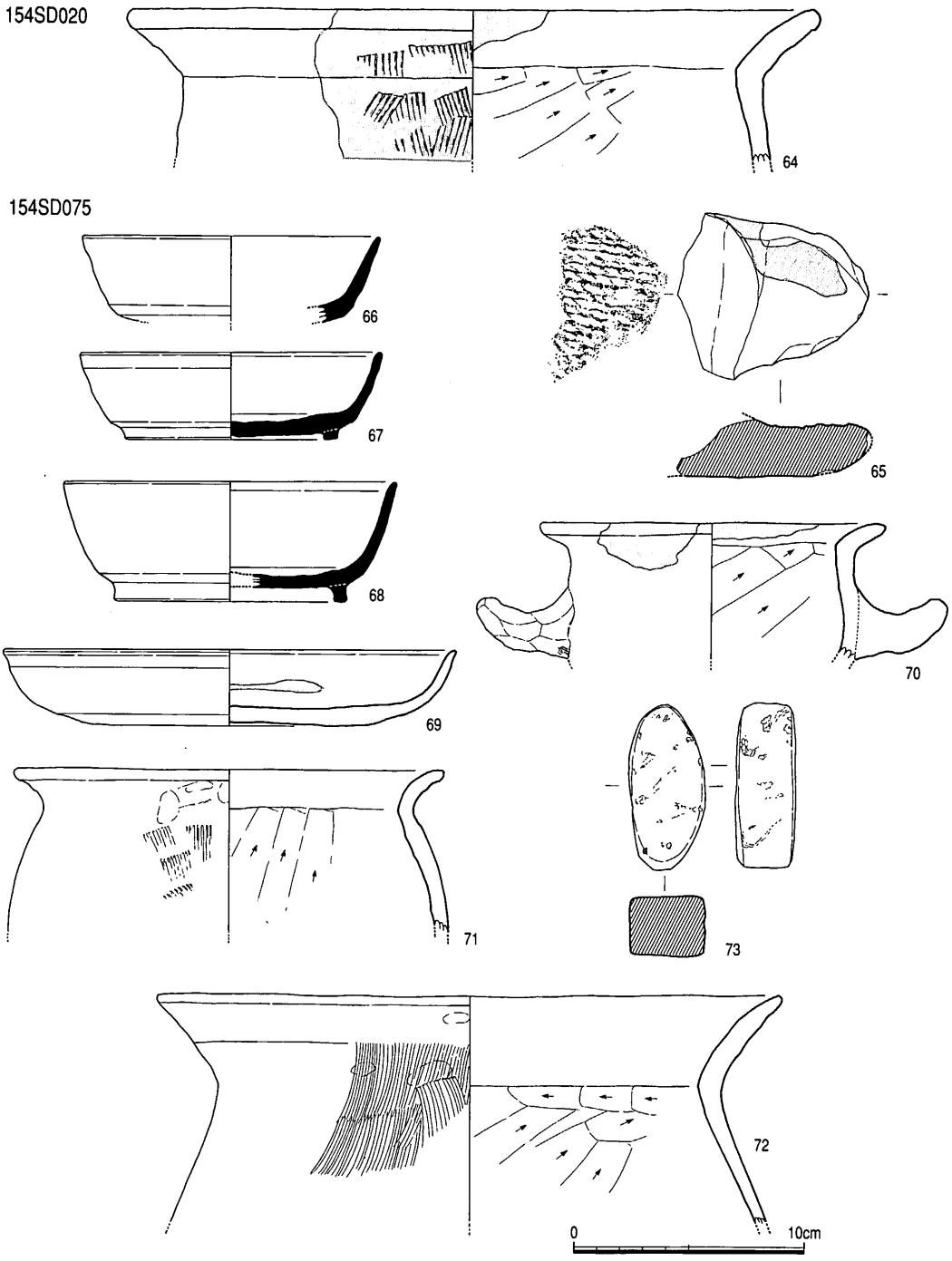


図115.溝出土遺物実測図（10）（S=1/3）

キ痕跡をとどめている。

坏（146～149）　いずれも形状および体部外面下位から底部外面にかけて回転ヘラ削りを行っていることから坏dに該当するものと考えられる。146は内外面ともに回転ヘラミガキによっ

て仕上げられており、149は内面のみ回転ヘラミガキによって仕上げられている。他の個体については器面磨耗のため不明確。

皿（150～154）　150および151は口縁部の破片のため詳細は不明。器種特定についても151は坏になる可能性がある。器面磨耗のため内外面の処理が不明確な152およびヘラ切りの155以外は、底部外面の処理は回転ヘラ削りによって仕上げており、154は底部外面以外を回転ヘラミガキによって仕上げている。

椀（158）　158は底部から体部への移行は丸みをもって移行し、体部の開きは大きい。

高坏（159）　高脚の高坏で、断面円形を呈している。脚端部は丁寧に面取りされており、内外面横ナデによって仕上げられている。

把手（160・167）　160は細目の把手で、把手のみの破片のため、貼付される器種が判断できない。167はやや太めの把手で、これも把手のみの破片のため、何に貼付されているのかは判断できない。

甕（161～166）　161・162は口縁部のみの破片で、頸部内面の屈曲が弱く、胎土に角閃石を多く含む。163は口縁端部を面取りするもので、体部内面を刷毛にて調整している。164は中形の甕、165・166は頸部の屈曲度合いから胴が張るものと考えられる。165は他の個体に比べ、口縁部が大きく外反する。

製塩土器

焼塩壺（168～173）　いずれも浅鉢形のもので171が内面を刷毛状原体によって器面調整するほかは、指頭圧によって調整している。

土製品

フイゴ羽口（174）　小形の羽口で、小破片の資料である。

竈（175）　竈の鍔部分の破片で、全形については判然としない。

石製品

鏃（176・177）　いずれも打製によって成形されており、176は黒曜石、177は安山岩を材質とする。

砥石（178）　玄武岩製の砥石で残存状況が悪く、一面のみが砥石面として残っていた。

瓦

軒丸瓦（179）　瓦当上位部分の破片で、丸瓦挿入箇所が観察できる。

154SD050茶色土出土遺物（図116）

須恵器

坏（180）　高台を貼付する坏cで、底部から体部への境界は明瞭に屈曲し、体部の立ち上がりはきつい。高台の貼付状況は粗く、粘土の乱れがある。

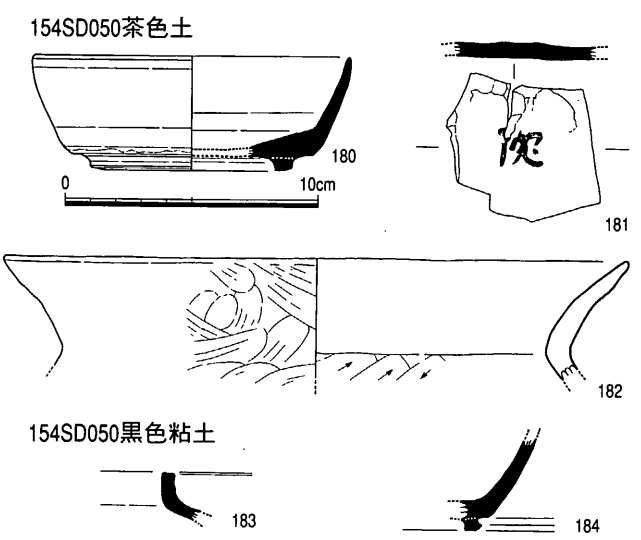


図116.溝出土遺物実測図（11）（S=1/3）

用途不明製品（181）　底部と考えられる破片資料で、器種については特定できない。外面と考えられる箇所に「沈」と判読できる墨書がある。

土師器

甕（182）　屈曲部の形状から、やや胴張りのある個体と考えられ、口縁部が大きく外方へ立ち上がる。

154SD050黒色粘土出土遺物（図116）

須恵器

壺（183）　口縁部のみの破片で詳細は不明だが、短頸壺と考えられる。分類では壺a×cと考えられる。

坏（184）　高台を貼付する坏で、破片資料であるため全形は判断できない。外方へ開く体部形態を有していると考えられる。

154SD075出土遺物（図115）

須恵器

坏（66～68）　66は高台を貼付しない坏aに該当するもので、底部から体部への移行は丸みを持って移行し、体部の立ち上がりはきつい。67・68は高台を貼付する坏cで、66同様に底部から体部への移行は丸みをもって立ち上がっており、体部の立ち上がりはきつい。底部外面の処理は、ヘラ切り後丁寧なナデによって仕上げられている。

土師器

皿（69）　底部から体部への移行は丸みを有しており、底部と体部の境界が極めて不明瞭になっている。底部外面の処理はヘラ切り後ナデによって仕上げられている。体部内面に黒色の煤状のものが付着している。

甕（70～72）　70・71は小形の甕で、70は強固な把手を貼付しており、胴張りの少ないものである。71は胴張りがややあるものである。72はやや大形のもので、口縁部が外方へ大きく外反する。

石製品

用途不明製品（73）　材質は軽石で断面長方形を呈し、表面に擦痕が観察できる。

154SD131出土遺物（図117）

須恵器

蓋（185）　図上完形になるもので、やや扁平なつまみを貼付し、断面三角形の口縁部形状を有する。天井部外面はヘラ切り後ナデによって仕上げられており、口縁端部の面取りはやや粗い。

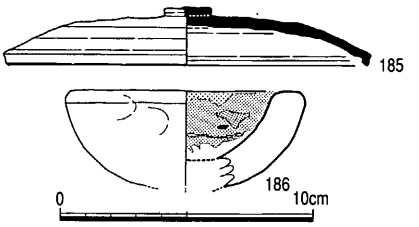


図117.溝出土遺物実測図（12）（S=1/3）

土製品

トリベ（186）　内外面に灰白色、黄茶色等様々な色調の付着物が観察できる。口径9.0cmと小形のものである。

5）その他の遺構出土遺物

性格不明遺構として取り上げられた遺物で、遺構埋没時期に近い遺物が埋没しているものと考えられる。

154SX004出土遺物（図118）

須恵器

蓋（1）　つまみを欠損するもので、つまみ貼付のためのナデ痕跡が残存している。天井部外面はヘラ切り後丁寧なナデによって仕上げられており、口縁部を下方に折り曲げたもの。口縁端部外面の面取りは丁寧になされていない。

154SX016出土遺物（図118）

須恵器

坏（2）　口縁部のみの破片で全形は不明だが、内面に漆が付着している。

154SX026出土遺物（図118）

須恵器

蓋（3）　断面三角形を有する蓋口縁部の破片で、口縁端部外面は丁寧に面取りされている。

土師器

坏（4）　口縁部のみの破片のため、全形については不明。

154SX027出土遺物（図118）

須恵器

坏（5）　器高が低く、底部からほぼ直立する体部形状を呈するもので、底部外面を回転ヘラ削りによって仕上げている。底部から体部への移行は丸みをもっている。

土師器

皿（6）　器面磨耗のため調整痕跡は不明、外方へ直線的にのびる口縁部形態を有する。

154SX029出土遺物（図118）

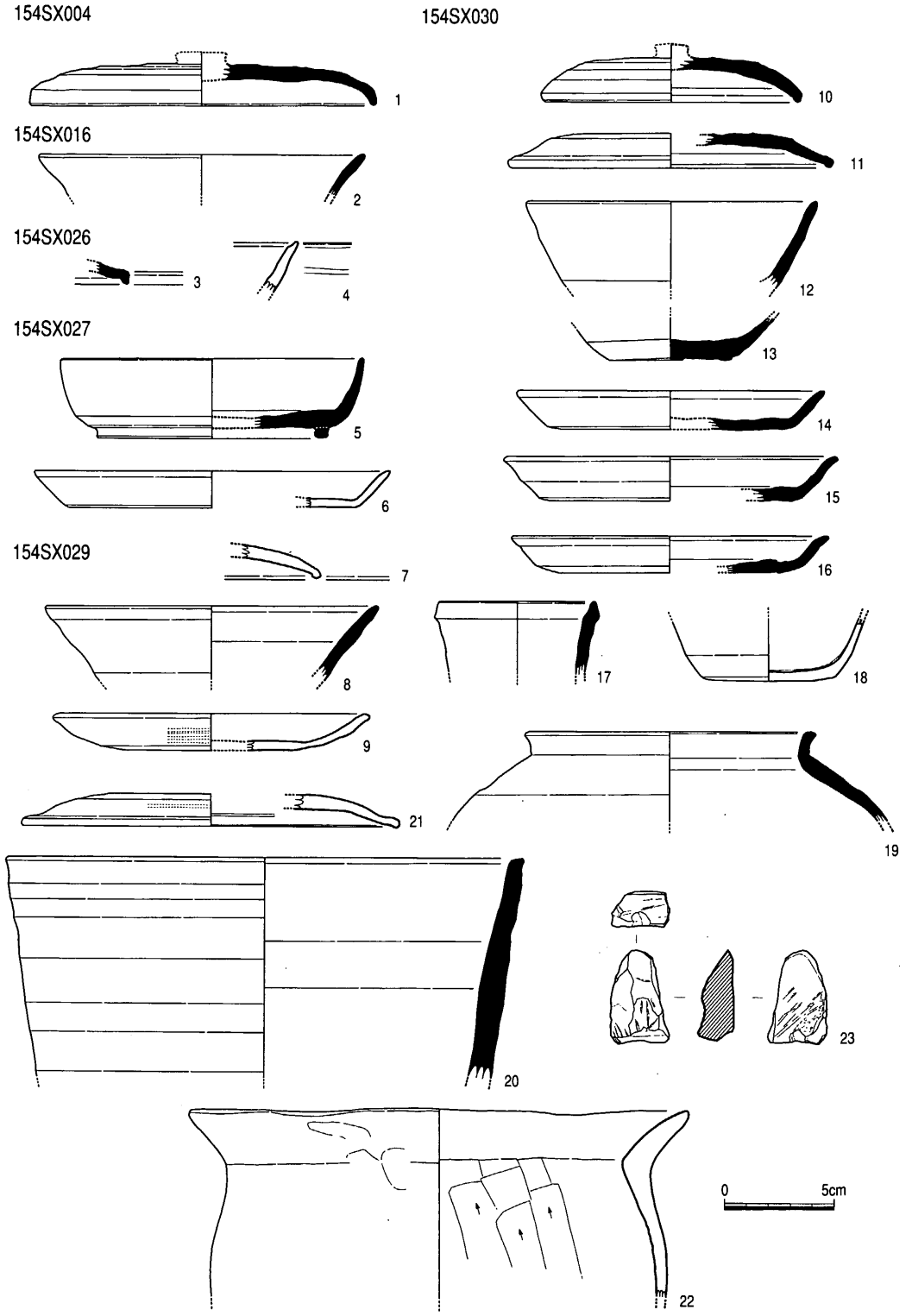


図118.その他の遺構出土遺物実測図（１）（S=1/3）

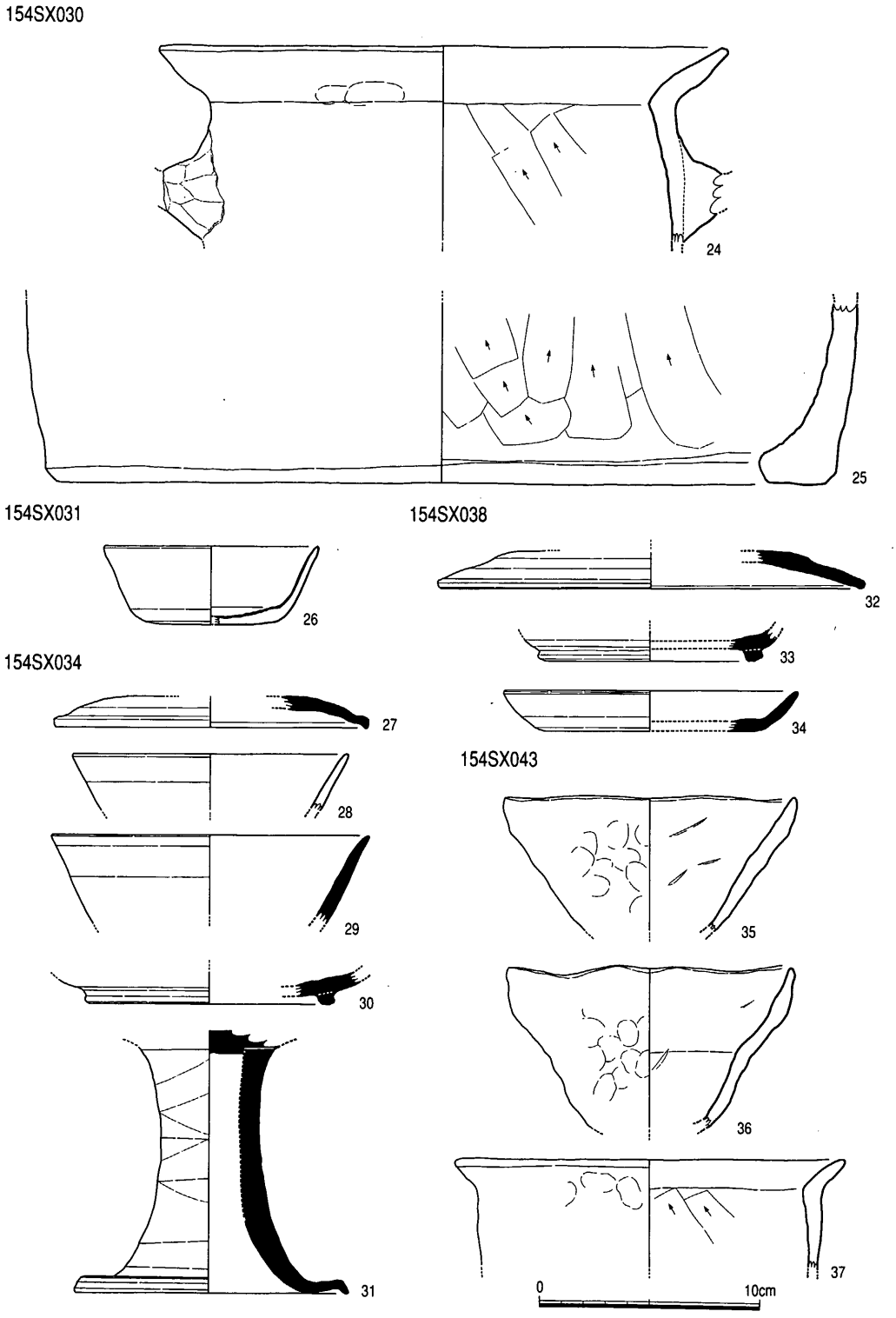


図119.その他の遺構出土遺物実測図（２）（S=1/3）

須恵器

坏（8）　口縁部の破片で、内外面ともに回転ナデにより仕上げられている。

土師器

蓋（7）　口縁部の破片で、器面磨耗のため調整痕跡は不明。形状から畿内系土師器の可能性があるが、成形痕跡が判然としないため判断できない。

皿（9）　形状から蓋の可能性がある。底部外面を横方向にヘラ削りし、体部外面を横方向のヘラミガキによって仕上げている。内面は磨耗のため調整痕跡不明。

154SX030出土遺物（図118・119）

須恵器

蓋（10・11）　10はつまみ貼付のための回転ナデ痕跡を留めていることから、つまみが貼付されているものと考えられる。天井部外面の処理は回転ヘラ削り後粗いナデによって仕上げられ、11は天井部外面をヘラ切り後粗いナデによって仕上げている。いずれも口縁端部外面はあまり面取りが丁寧ではない。

坏（12・13）　12は口縁部から体部の破片で、体部下位を回転ヘラ削りする。13は底部の破片で底部外面を回転ヘラ切り後粗いナデによって仕上げている。

皿（14～16）　14および15は、底部と体部の屈曲が明瞭で、外方へ大きく開く体部形態を有している。底部外面の処理はヘラ切り後丁寧なナデによって仕上げられている。16は、底部と体部の屈曲が不明瞭で、丸みをもって移行している。底部外面の処理はヘラ切り未調整。

壺（17・19）　17は瓶とも考えられ、口縁部のみの破片のため全形は不明。19は短頸壺で、あまり肩の張らないものと考えられる。

鉢（20）　円筒形の鉢で、口縁端部を内側に傾斜させるもので、体部の立ち上がりがきつい。体部上位より下方を回転ヘラ削りによって仕上げている。

土師器

蓋（21）　天井部外面をヘラ削りするもので口縁端部の面取りは弱い。天井部外面に一部ミガキ痕跡が観察できる。

壺（18）　18は底部のみの破片のため器種についても判断し難いが、内面に漆様の付着物が覆っている。

甕（22・24）　22の外面は器面磨耗のため調整痕跡は不明だが、内面はヘラ削りによって仕上げている。24は強固な把手が貼付されるもので、あまり胴張りのないものと考えられる。器面磨耗のため調整痕跡は判然としないが、内面はヘラ削りによって仕上げている。

石製品

砥石（23）　小形の砥石で製品長軸に対して斜行するように擦痕跡が観察できる。材質は泥

岩。

土製品

竈（25）　脚部の破片で、内面をヘラ削りによって仕上げている。

154SX031出土遺物（図119）

土師器

坏（26）　高台を貼付しない小坏aで、体部外面下位から底部外面にかけて、回転ヘラ削りによって仕上げている。底部から体部への境界は不明瞭。

154SX034出土遺物（図119）

須恵器

蓋（27）　口縁部から天井部にかけての破片で、つまみの有無については判断できない。天井部外面の処理は粗いナデによって仕上げている。口縁部外面はやや丁寧に面取りしている。

坏（29・30）　いずれも破片資料で、全形を判断できるものはない。30については、器面磨耗のため、底部外面の処理状況は不明。

高坏（31）　高脚高坏の脚部と考えられ、端部の面取りは丁寧に為されている。脚部外面には絞り痕跡が観察できる。

土師器

坏（28）　破片資料で、全形は判断できない。

154SX038出土遺物（図119）

須恵器

蓋（32）　天井部から口縁部までの破片で、口縁端部の面取りは省略され、丸い形状を呈している。天井部外面の処理はヘラ切り未調整。

坏（33）　高台を貼付するもので、破片資料であること、ならびに器面磨耗のため詳細は判断できない。

皿（34）　小形の皿で、高台は貼付しない。底部外面の処理はヘラ切り後、丁寧にナデられている。口縁端部に重ね焼きのための変色部分が観察できる。

154SX043出土遺物（図119）

土師器

甕（37）　小形の甕で器面磨耗のため、内面のヘラ削りおよび頸部外面の指頭圧痕跡が観察できるのみである。

製塩土器

焼塩壺（35・36）　内面をヘラ状工具によって器面調整するもので、浅鉢形のものである。

154SX047出土遺物（図120）

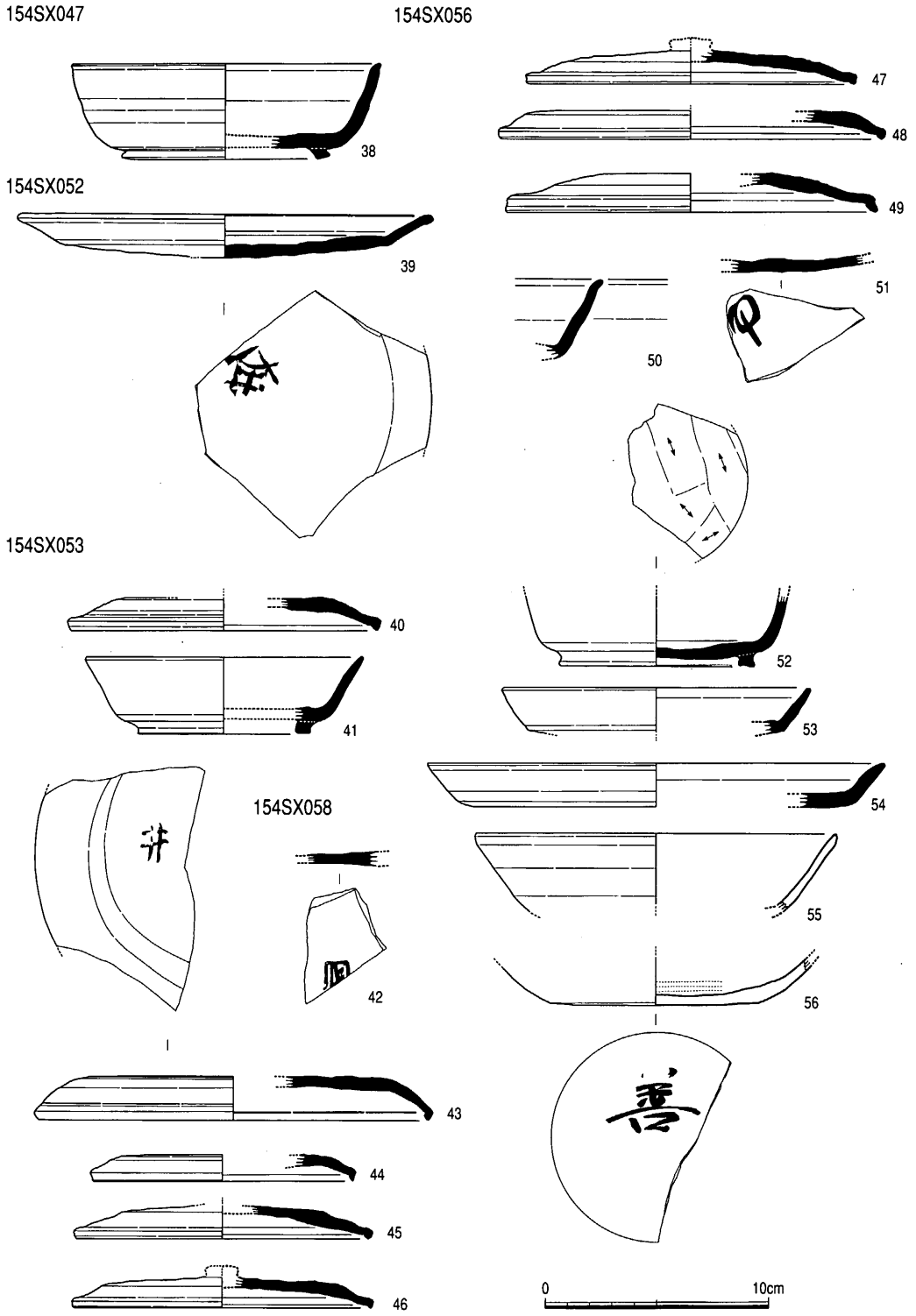


図120.その他の遺構出土遺物実測図（３）（S=1/3）

須恵器

坏（38）　高台を貼付する坏cで、底部と体部の境界は丸みを帯びている。高台も高台外端を跳ね上げる形状を呈している。底部外面の処理はヘラ切り後ナデによって仕上げている。

154SX052出土遺物（図120）

須恵器

皿（39）　器高が低く、底部が下方へやや膨らむもので、体部の開きが大きい。底部外面の処理はヘラ切り後丁寧なナデによって仕上げられている。底部外面には墨書がある。

154SX053出土遺物（図120）

須恵器

蓋（40）　天井部から口縁部の破片で、天井部外面の処理はヘラ切り後粗いナデ、口縁端部の面取りは丁寧に行われている。

坏（41）　底部と体部の境界は丸みを有しており、体部の立ち上がりは外方へ開く形態をとっている。

154SX056出土遺物（図120・121）

須恵器

蓋（43～49）　小形のもの（44）と中形のもの（45～49）があり、天井部外面を回転ヘラ削りによって仕上げる44・45以外は、ヘラ切りによって仕上げている。口縁端部外面の面取りは

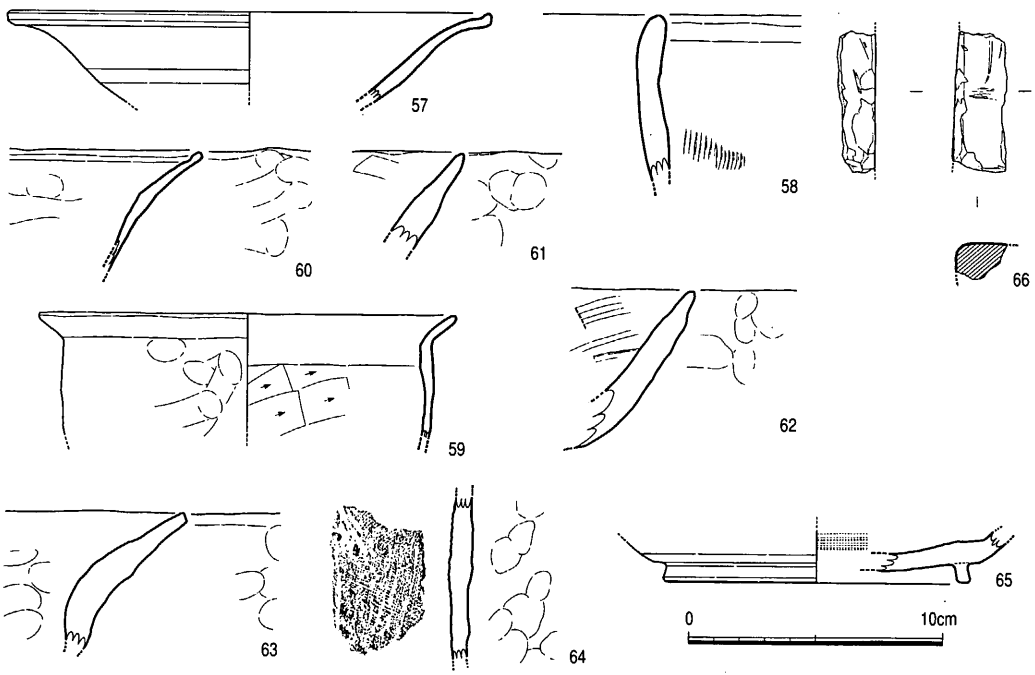


図121.その他の遺構出土遺物実測図（４）（S=1/3）

44・47・49は丁寧に行われているが、他のものは丁寧に為されておらず手抜きが看取できる。46および47はつまみ貼付のナデ痕跡が観察できるため、つまみが付されていたと考えられるが、具体的な形状については不明。

坏（50・52）　50は口縁部の破片で、口縁端部外面が暗灰色に変色している。52は高台が貼付された坏cで、底部と体部の境界は丸みをもっており、底部外面の処理はヘラ切り後丁寧にナデられている。見込み部分には不定方向のナデが観察できる。

皿（51・53・54）　51は破片資料のため器種特定は困難であるが、外面と考えられる面に墨書がある。53は小形の皿で、底部と体部の境界が明瞭で体部の傾きは外方へ開く。54はやや大形の皿で、底部外面は丁寧なナデによって仕上げられている。53同様に体部の開きは大きい。

土師器

坏（55・56）　55は口縁部の破片で、高台の有無については不明。内外面に煤状のものが付着しており、黒褐色に変色している。56は底部下位から回転ヘラ削りによって仕上げられている坏dに該当し、内面に粗いミガキ痕跡が観察できる。底部外面には刷毛状の条痕が残り、「善」と判読できる墨書がある。

鉢（57）　精製の鉢で、154SK025灰黒色粘土出土の鉢（図102-9）より小形のものと考えられる。体部外面を横方向のヘラ削りによって仕上げ、他の部位は横ナデによって仕上げられている。

甕（58・59）　58は頸部が形成されておらず、竈の可能性もある。外面刷毛調整、内面はナデによって仕上げられている。59はやや小形の甕で、体部内面をヘラ削りし、外面は磨耗のため判然としないものの、指頭圧痕跡が観察できる。

製塩土器

焼塩壺（60～64）　64が円筒形を呈する焼塩壺と考えられる他は、浅鉢形のものと考えられる。64は内面に布痕跡をとどめ、他のものは刷毛状工具による器面調整ないしは指頭圧による調整がなされている。

黒色土器

坏（65）　高台を貼付する坏cの形状を呈するものと考えられるが破片資料のため判断し難い。内面は横方向のミガキ痕跡が観察できる。A類。

石製品

砥石（66）　小形のもので、長軸方向および短軸方向に擦痕が観察できる。材質は滑石。

154SX058出土遺物（図120）

須恵器

坏×皿（42）　小破片のため器種特定は困難であった。外面と考えられる面に墨書がある。

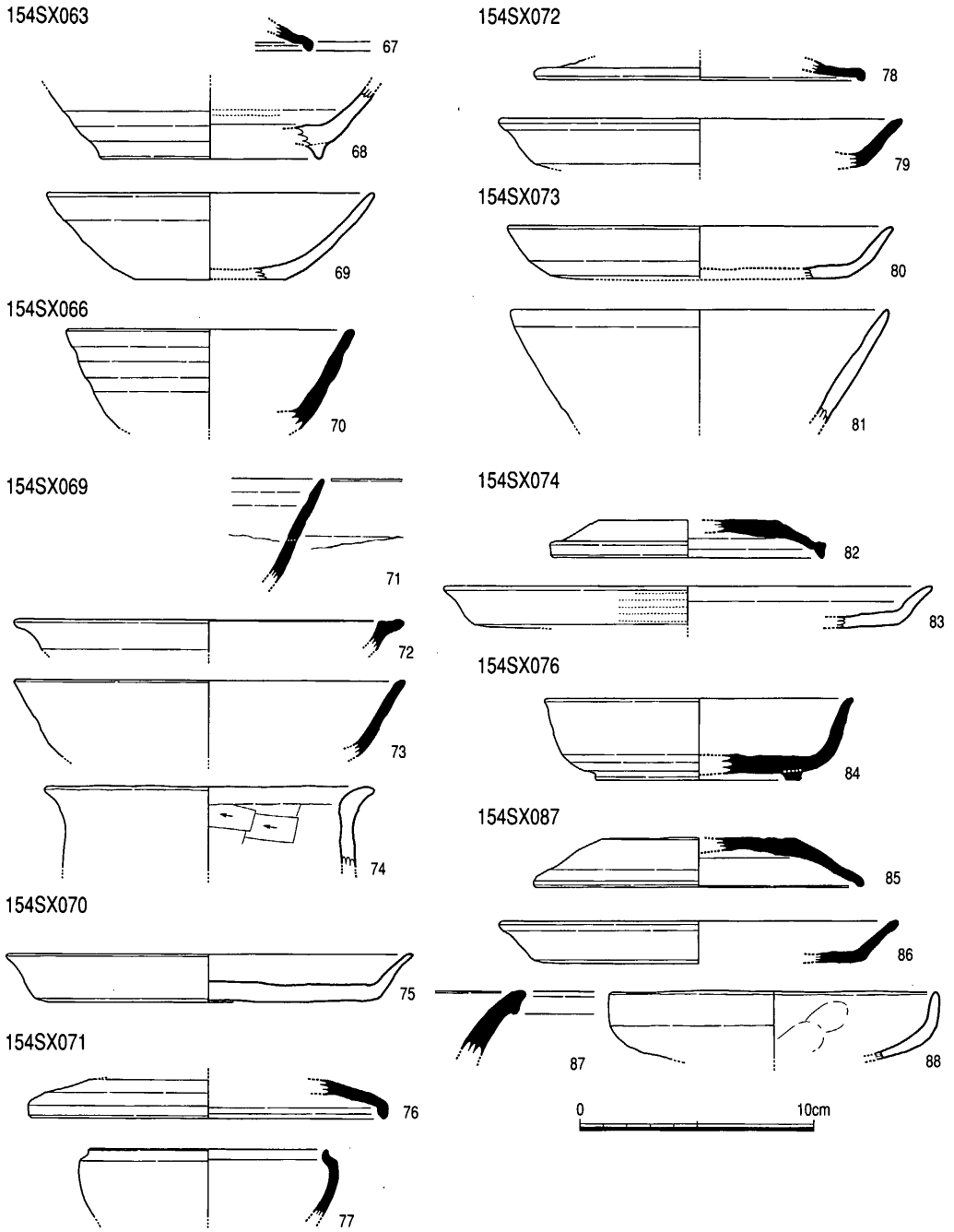


図122.その他の遺構出土遺物実測図（５）（S=1/3）

154SX063出土遺物（図122）

須恵器

蓋（67）　口縁端部の破片で、全形については判然としない。口縁端部外面の面取りは省略されている。

土師器

坏（68・69）　68は高台を貼付する坏cで体部外面下位を回転ヘラ削りによって仕上げている。見込み付近にミガキ痕跡がわずかに観察できる。69は体部外面下位から底部外面にかけて回転ヘラ削りするもので、他の調整痕跡については器面磨耗のため不明確。

154SX066出土遺物（図122）

須恵器

坏（70）　口縁部のみの破片資料で、全形については不明。

154SX069出土遺物（図122）

須恵器

坏（71・73）　いずれも口縁部の破片で、高台の有無については不明。71は体部中位に粘土紐痕跡が観察できる。

高坏×坏（72）　口縁端部に平坦面を形成するもので、小破片のため全形が判然としないため、器種特定ができない。内外面ともに回転ナデによて仕上げられている。

土師器

甕（74）　小形の甕で、体部内面のヘラ削り痕跡が観察できる他は、器面磨耗のため詳細は不明。

154SX070出土遺物（図122）

土師器

皿（75）　底部と体部の境界が明瞭で、底部から外方へ開く体部形態を有している。底部外面の処理はヘラ切り後、ナデによって仕上げられている。

154SX071出土遺物（図122）

須恵器

蓋（76）　口縁部から天井部の破片で、天井部外面を回転ヘラ削りによって仕上げている。口縁端部の処理は、丁寧に面取りされている。

小壺（77）　口縁部の破片で、口縁端部をわずかに屈曲させた短頸壺の形状を呈している。

154SX072出土遺物（図122）

須恵器

蓋（78）　口縁端部の破片で、口縁端部は丸みを帯びている。内外面ともに回転ナデ調整。

皿（79）　底部をわずかに残存するもので、底部より外方へ開く体部形態を有している。

154SX073出土遺物（図122）

土師器

皿（80）　器面磨耗のため、調整痕跡に関しては不明。底部から体部への移行は、やや丸み

をもって移行している。

椀（81）　器高がやや高いことから、椀とした。器面磨耗のため調整痕跡は不明。

154SX074出土遺物（図122）

須恵器

小蓋（82）　天井部外面は、ヘラ切り後ナデによって仕上げられており、口縁端部の面取りは丁寧。天井部内面は、不定方向のナデによって仕上げられている。

土師器

皿（83）　底部が下方へ、やや膨らむもので体部は外方へ外反気味に開く。底部外面は回転ヘラ削りによって仕上げられており、体部外面に横方向のミガキ痕跡が観察できる。

154SX076出土遺物（図122）

須恵器

坏（84）　底部より丸みをもって体部へ移行し、底部外面をヘラ切り後ナデによって仕上げられている。

154SX087出土遺物（図122）

須恵器

蓋（85）　口縁端部を丸く仕上げているもので、天井部外面はヘラ切り後、やや丁寧なナデによって仕上げている。形態から蓋a4に該当するものと考えられる。

皿（86）　底部より外反気味に開く体部形態を有しており、底部外面はヘラ切り後丁寧なナデによって仕上げられている。

壺×甕（87）　小破片のため、器種特定には至っていない。内外面ともに回転ナデによって仕上げられている。

土師器

皿（88）　手持ち成形の皿で、内面に指頭圧痕跡が観察できる。

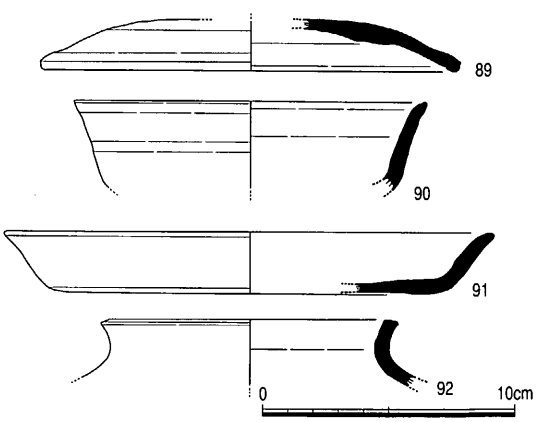


図123.その他の遺構出土遺物実測図（６）（S=1/3）

154SX090出土遺物（図123）

須恵器

蓋（89）　天井部外面をナデによって仕上げるもので、口縁端部外面を丁寧に面取りしている。口縁端部内面はやや扁平な断面三角形を呈している。

坏（90）　口縁部のみの破片であることから、高台の有無については不明。体部の立ち上がりはきつい。

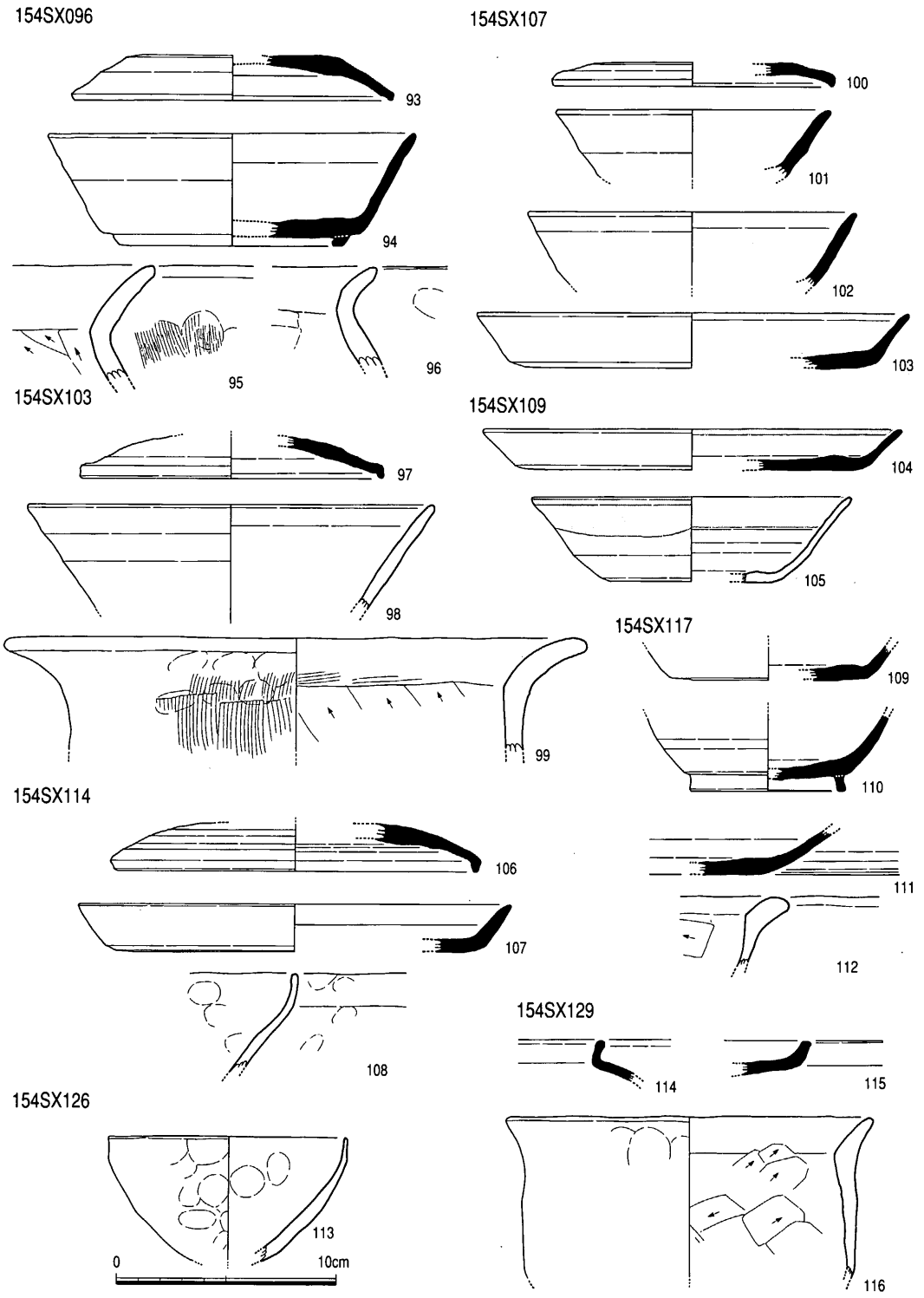


図124.その他の遺構出土遺物実測図（７）（S=1/3）

皿（91）　底部外面をヘラ切りによって仕上げるもので、底部と体部の境界はやや明瞭。口縁部がやや外反している。

壺（92）　口縁部のみの破片のため、把手の有無については不明。壺a×cと判断される。

154SX096出土遺物（図124）

須恵器

蓋（93）　口縁部から天井部にかけての破片で、天井部外面はヘラ切り後丁寧なナデによって仕上げられている。口縁端部外面の処理は、丸みをもっている。つまみの有無については不明。

坏（94）　底部と体部の境界は明瞭で、外方へ直線的に開く。底部外面の処理はヘラ切り後、ナデによって仕上げられている。

土師器

甕（95・96）　95は頸部内面の屈曲が明瞭であり、体部内面はヘラ削り、体部外面は刷毛によって仕上げられている。96は器面磨耗のため調整痕跡は不明だが、胎土に角閃石を含み、頸部内面の屈曲が不明瞭など、筑前国に一般的な甕ではなく筑後国から持ち込まれたものと考えられる。

154SX103出土遺物（図124）

須恵器

蓋（97）　天井部から口縁部にかけての破片で、天井部外面の処理はヘラ切り後ナデによって仕上げられている。口縁端部外面は、丁寧に面取りをしている。

土師器

椀（98）　器高が高いため椀と推定した。体部の開きが大きく、内外面ともに横ナデによって仕上げられている。

甕（99）　中形の甕で、頸部の屈曲具合から、あまり体部の張らない形態を呈するものと考えられる。体部内面はヘラ削り、体部外面は刷毛によって調整されており、甕aに該当するものと考えられる。

154SX107出土遺物（図124）

須恵器

蓋（100）　天井部外面を回転ヘラ削りによって仕上げ、口縁端部外面は顕著な面取りではなく、丸みをもっている。

坏（101・102）　いずれも口縁部のみの破片で、内外面とも回転ナデによって仕上げられている。高台の有無については不明。

皿（103）　体部が外反しつつ立ち上がるが、立ち上がりはきつい。内外面ともに器面磨耗のため調整痕跡は不明。

154SX109出土遺物（図124）

須恵器

皿（104）　底部外面をヘラ切りし、板状圧痕跡が残存している。体部の外方への開きは大きく、口縁部内面が黒灰色に変色している。

土師器

坏（105）　底部と体部の境界が不明瞭で、内外面ともに横ナデによって仕上げている。底部外面の処理はナデのみ観察できる。口縁部内面が黒褐色、体部下位が黒色に変色している。

154SX114出土遺物（図124）

須恵器

蓋（106）　天井部から口縁部にかけての破片で、天井部外面は回転ヘラ削りによって仕上げられている。口縁端部外面は丁寧な面取りがなされている。

皿（107）　底部外面はヘラ削りによって仕上げられており、底部から外上方へ開く体部形態を有している。

製塩土器

焼塩壺（108）　浅鉢形のもので、内外面ともに指頭圧痕が観察できる。

154SX117出土遺物（図124）

須恵器

坏（109～111）　高台を貼付しない坏a（109）、高台を貼付する坏c（110）、底部と体部の境界をヘラ削りし丸みのある体部形態を有する坏d（111）がある。坏aおよび坏cはいずれも底部外面をヘラ切り後ナデによって仕上げている。

土師器

甕（112）　口縁部の破片のため、粗製の鉢になる可能性もある。外面については器面磨耗のため不明。体部内面はヘラ削り。

154SX126出土遺物（図124）

製塩土器

焼塩壺（113）　浅鉢になると考えられ、内外面ともに指頭圧痕が観察できる。

154SX129出土遺物（図124）

須恵器

壺（114）　口縁部から頸部の破片のため壺aおよび壺cに該当すると考えられる。

高坏（115）　口縁端部に平坦面を持つもので、口縁部は底部から屈曲させている。

土師器

甕（116）　小形の甕で、体部内面はヘラ削りによって仕上げている以外は、器面磨耗のた

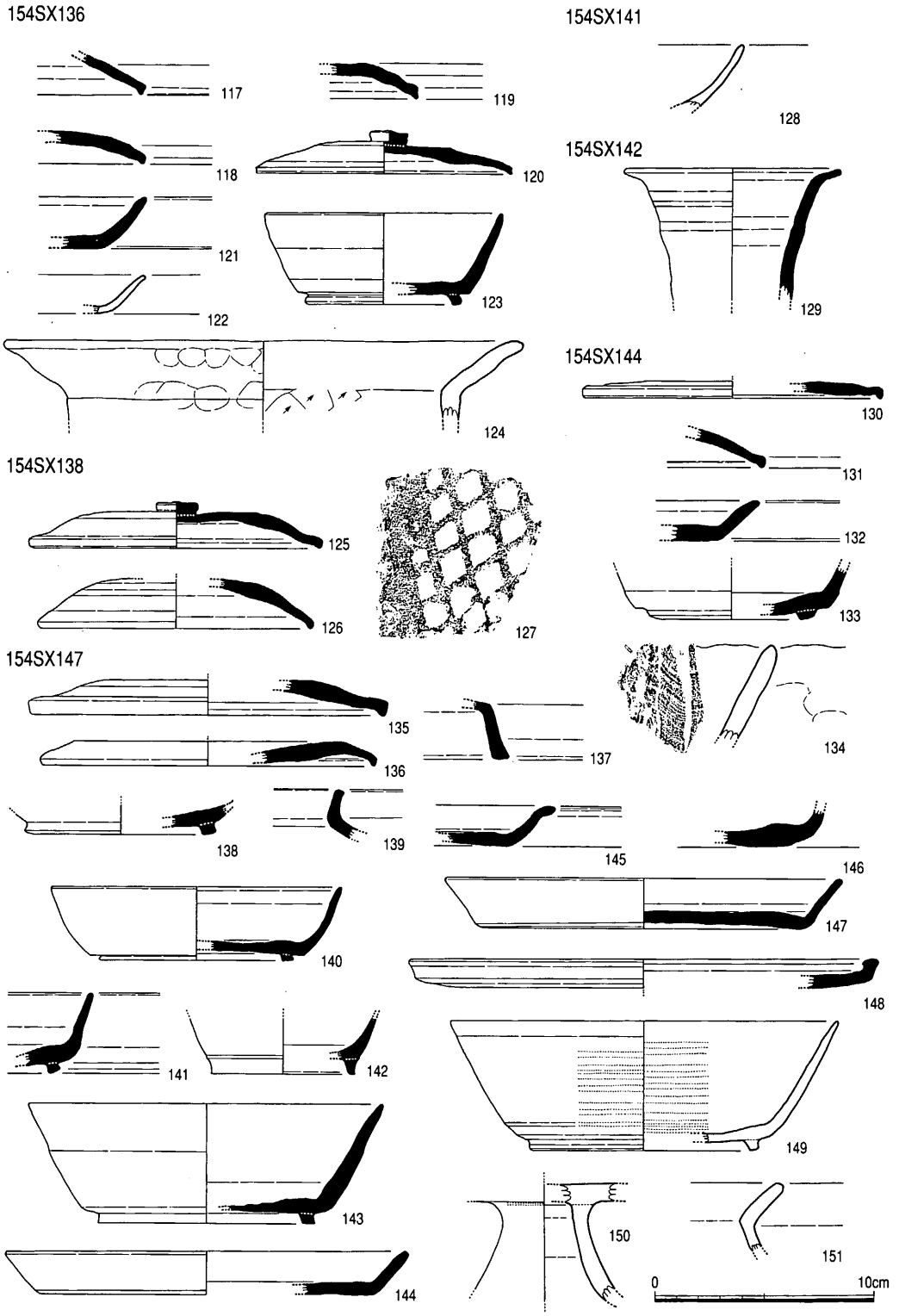


図125.その他の遺構出土遺物実測図（８）（S=1/3）

め不明。

154SX136出土遺物（図125）

須恵器

蓋（117～120）　全形が観察できる120は、ボタン状のつまみが貼付され、天井部外面はヘラ切り後ナデによって仕上げられている。口縁端部外面はあまり丁寧に面取りされておらず、丸みを有している。117～119は口縁部から天井部までの破片で、天井部外面の処理はヘラ切り後ナデによって処理されている。117および119は口縁端部外面を丁寧に面取りし、118は丸みをもつ口縁端部形態を有している。

坏（123）　高台を貼付する坏cで、底部と体部の境界は明瞭で、底部から外方へ開く体部形態を有している。底部外面の処理はヘラ切り後ナデによって処理されている。

皿（121）　底部と体部の境界付近から口縁部までの破片で、底部より外方へ大きく開く体部形態を有している。

土師器

皿（122）　底部より外方へ大きく開く体部形態を有している。

甕（124）　頸部より外方へ大きく開く口縁部形態を有するもので、体部内面はヘラ削りによって仕上げられている。

154SX138出土遺物（図125）

須恵器

蓋（125・126）　125は全形が観察できるもので、扁平な擬宝珠形のつまみを貼付し、天井部外面はヘラ切り後粗いナデによって処理されている。口縁端部外面は面取りが丁寧ではなく丸い形状をとっている。126は口縁部から天井部にかけての破片資料で、天井部外面の処理はヘラ切り後ナデによって処理されている。口縁端部外面は125同様に丸みをもっている。

瓦

平瓦（127）　凸面に1cm内外の菱形の格子叩き痕跡をとどめている。

154SX141出土遺物（図125）

土師器

坏（128）　口縁部外面にミガキ痕跡が観察できる他は、器面磨耗のため調整不明。丸みを有する器形をとることから坏dに該当するものと考えられる。

154SX142出土遺物（図125）

須恵器

壺（129）　壺bの口縁部と考えられ、口縁端部を外方へ屈曲させる形状を有している。

154SX144出土遺物（図125）

須恵器

蓋（130・131）　天井部から口縁部の破片で、天井部外面はヘラ切り後ナデによって処理されている。口縁端部外面は丸みを有している。

皿（132）　底部から外方へ大きく開く体部形態を有している。底部外面は、ヘラ切り後ナデによって処理されている。

坏（133）　高台を貼付する坏cに該当し、底部外面はナデによって仕上げられている。

製塩土器

焼塩壺（134）　浅鉢形のものと考えられ、内面に布痕跡をとどめ、外面には指頭圧痕が観察できる。

154SX147出土遺物（図125・126）

須恵器

蓋（135・136）　いずれも天井部外面を回転ヘラ削りしているもので、135は口縁端部外面を丁寧に面取りし、136は丸く仕上げている。136はやや歪みがある。

壺蓋（137）　口縁部から天井部へ移行する部分までの破片資料で、口縁端部を平坦に仕上げており、天井部外面は回転ヘラ削りを施している。

坏（138・140～143）　いずれも高台を貼付する坏cに該当し、143は底部外面を回転ヘラ削りによって仕上げている。138および140の底部外面は回転ナデによって処理されている。

皿（144～147）　144および147は底部外面をナデによって仕上げており、147は底部外面に粘土紐痕跡をとどめている。145は口縁部を外反させ、146は全形は判然としないが、底部から体部への移行が丸みをもっている。

高坏（148）　坏底部と体部の屈曲付近から口縁部までの破片で、口縁端部に平坦面を形成する。

土師器

椀c（149）　底部と体部の境界が不明瞭で、体部外面下位から底部外面にかけて回転ヘラ削りを行い、体部内外面はミガキaによって仕上げている。

高坏（150）　坏部と脚部の接合付近の破片で、全体の残存状況から短脚の高坏と考えられる。

甕（151・156）　151は頸部を「く」の字形に屈曲させるもので、器面磨耗のため調整痕跡は不明。156は体部上位から口縁部までの破片で、体部内面はヘラ削りが観察できるものの、煤状炭化物が頸部内面以下に付着するため、削りの単位は不明。体部外面には刷毛痕跡が観察できる。体部の張りはあまり無いものと考えられる。

製塩土器

焼塩壺（152～155）　いずれも浅鉢形のものと考えられ、152および154は内面にヘラ状工具

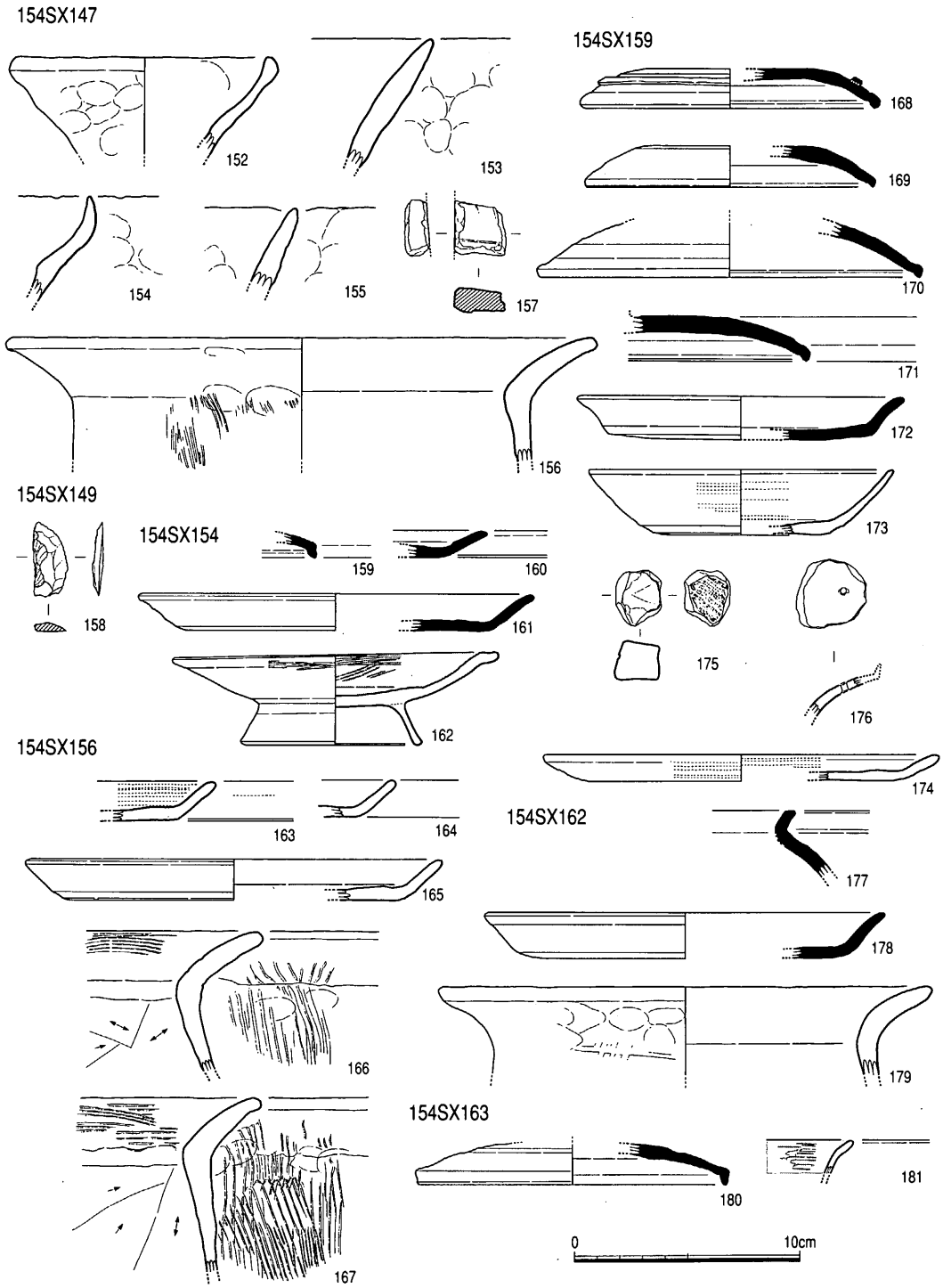


図126.その他の遺構出土遺物実測図（９）（S=1/3）

によって調整されており、155は内面に布痕跡が観察できる。

石製品

砥石（157）　小破片で、二面が使用されている。材質は細粒砂岩。

154SX149出土遺物（図126）

石製品

剥片（158）　材質はサヌカイトで、打製によって打ち出されている。

154SX154出土遺物（図126）

須恵器

蓋（159）　口縁端部外面を丁寧に面取りするもので、口縁部のみの破片のため詳細は不明。

皿（160・161）　160は底部から体部への境界部分から口縁部までの破片で、体部の外方への開きは大きい。161は、底部外面に粘土紐痕跡をとどめ、体部の外方への開きは160同様に大きい。見込み部分に墨痕が観察できる。

黒色土器

皿（162）　高脚の高台を貼付し、口縁部内面を窪ませる。皿部内面および口縁部外面をミガキcによって仕上げ、黒色化している。底部外面は回転ナデによって仕上げている。A類。

154SX156出土遺物（図126）

土師器

皿（163～165）　いずれも底部外面をヘラ削りし、163は内面にミガキ痕跡が観察できる。

甕（166・167）　体部外面に刷毛痕跡をとどめる甕aで、頸部の屈曲具合からやや体部の張る形態を有しているものと考えられる。

154SX159出土遺物（図126）

須恵器

蓋（168～171）　いずれも天井部外面は、ナデによって処理されており、口縁端部外面もあまり丁寧に面取りされず丸みをもっている。

皿（172）　口縁部が外反しており、底部外面の処理はヘラ切り後ナデによって仕上げられている。

土師器

坏（173）　体部外面下位から底部外面にかけてヘラ削りされ、体部内外面はヘラミガキによって仕上げられている。調整、装飾、形態から坏dに該当するものと考えられる。

皿（174）　器高が低いもので、底部外面の処理は磨耗のため判然としない。体部内外面はヘラミガキによって仕上げられている。

鉢（176）　精製の鉢と考えられ、口縁部に穿孔のあるものと推定できる。

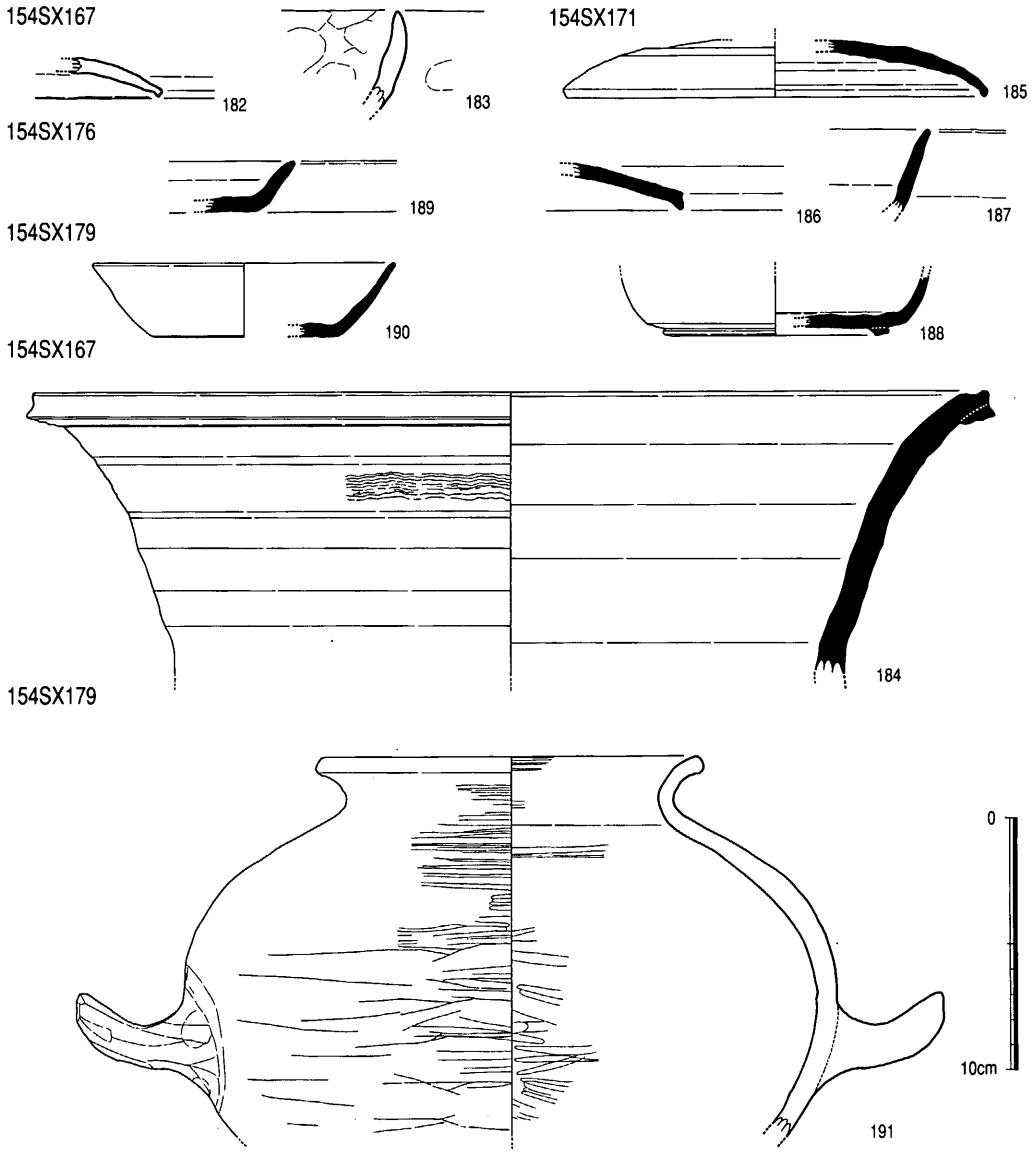


図127.その他の遺構出土遺物実測図（10）（S=1/3）

土製品

瓦玉（175）　凹面には布痕跡をとどめ、凸面には調整痕跡は観察できない。

154SX162出土遺物（図126）

須恵器

壺（177）　口縁部が外方へ開くもので、口縁部のみの破片のため壺aないし壺cと考えられる。

皿（178）　底部と体部の境界は不明瞭で、底部外面の処理はヘラ切り後ナデによって仕上げている。

土師器

甕（179）　体部外面に刷毛痕跡をわずかにとどめているもので、頸部の屈曲具合からあまり体部の張らないものと考えられる。

154SX163出土遺物（図126）

須恵器

蓋（180）　天井部外面はヘラ切り後ナデによって処理されており、口縁端部外面は丁寧に面取りして仕上げている。

黒色土器

甕（181）　口縁部のみの破片で全形は不明。内面にミガキ痕跡が観察できる。A類。

154SX167出土遺物（図127）

須恵器

甕（184）　大甕の口縁部と考えられ、口縁部外面に粗雑な波状文が描かれている。

土師器

蓋（182）　口縁端部を断面三角形に形づくるもので、器面磨耗のため調整痕跡については不明。

製塩土器

焼塩壺（183）　浅鉢形のもので、内外面には指頭圧痕をとどめている。

154SX171出土遺物（図127）

須恵器

蓋（185・186）　185は天井部外面をヘラ切り後ナデによって仕上げており、186はヘラ削りによって仕上げている。口縁端部の面取りは185は雑で丸みを帯びており、186は丁寧に仕上げられている。

坏（187・188）　187については口縁部の破片のため皿の可能性はある。188は高台を貼付するもので、高台外端をやや跳ね上げる。体部の立ち上がりはきつい。

154SX176出土遺物（図127）

須恵器

皿（189）　底部と体部の境界部分から口縁部までの破片で、底部外面の処理はヘラ切り後ナデによって仕上げられている。

154SX179出土遺物（図127）

須恵器

坏（190）　底部と体部の境界は明瞭で、底部から外方へ大きく開く体部形態を有している。底部外面の処理はヘラ切り後ナデによって仕上げている。

土師器

壺（191）　把手を貼付する壺cに該当するもので、成形および調整、装飾技法は手持ちによって行われている。体部中位から下位はヘラ削りされ、体部内外面ともにミガキによって仕上げられている。体部下位に白斑様の焼き斑が観察できる。成形技法が手持ちであることから他地域にて生産された製品と考えられる。

154SX181出土遺物（図128）

須恵器

坏（192）　高台部分の破片で、坏cに該当するものと考えられる。底部と体部の境界は明瞭で、外方へ開く体部形態を有しているものと考えられる。

土師器

坏（193・194）　いずれも器面磨耗のため調整痕跡は観察できないが、形状から194は坏dに該当すると考えられる。

壺（195）　無頸壺と考えられ、調整痕跡については器面磨耗のため不明。

甕（196）　体部上位から口縁部までの破片で、頸部の屈曲具合からあまり体部の張らないものと考えられる。

154SX182出土遺物（図128）

須恵器

蓋（197）　天井部外面はヘラ切り後ナデによって仕上げられており、口縁端部外面は面取りが粗く丸みをもっている。天井部内面には墨痕が観察できる。

土師器

甕（198）　体部下位まで残存し、あまり体部の張らない形態をとっている。外面は器面磨耗のため調整痕跡は不明、体部内面にはヘラ削り痕跡が観察できる。

154SX183出土遺物（図128）

須恵器

皿（199）　底部から外方へ大きく開く体部形態を有し、底部外面はヘラ切り後ナデによって仕上げられている。

土師器

甕（200）　頸部から口縁部までの破片で、体部の張り具合については小破片資料のため明確ではない。

製塩土器

焼塩壺（201）　浅鉢形のものと考えられ、内面にはヘラ状工具による調整痕跡が観察できる。

154SX184出土遺物（図128）

弥生土器

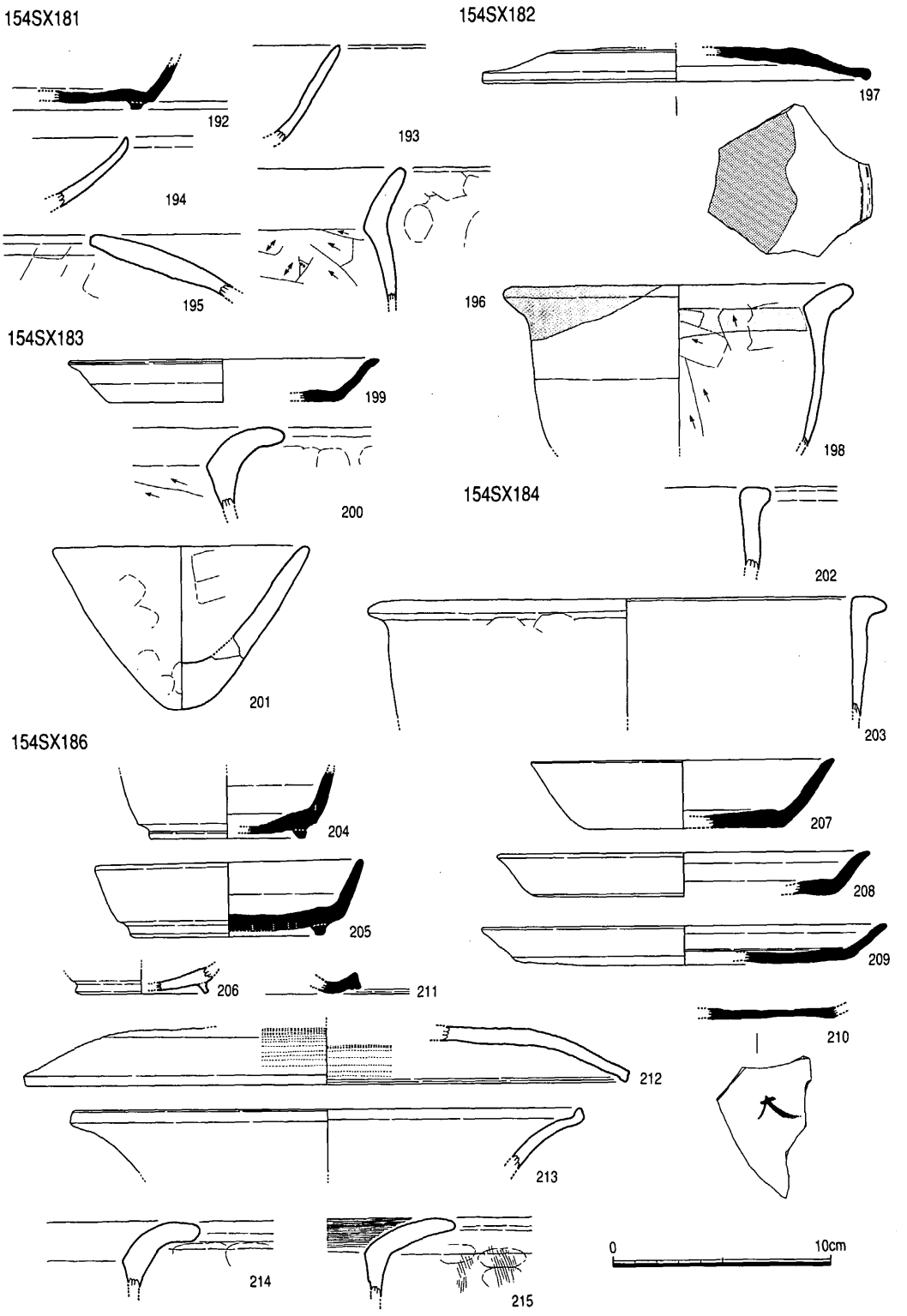


図128.その他の遺構出土遺物実測図（11）（S=1/3）

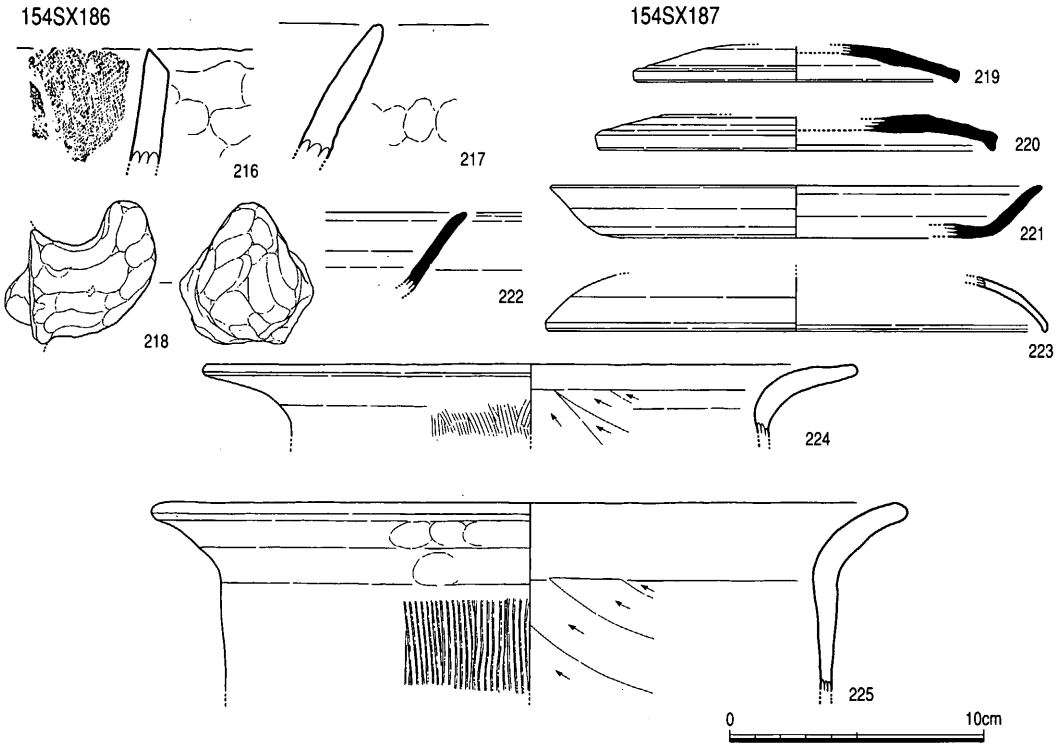


図129.その他の遺構出土遺物実測図（12）（S=1/3）

甕（202・203）　口縁部のみの破片で、口縁端部外面に突帯を貼付している。器面磨耗のため、突帯の刻み目の有無については不明。

154SX186出土遺物（図128・129）

須恵器

坏（204・205・207）　204・205は、高台を貼付する坏cで、底部と体部の境界は不明瞭で、体部の立ち上がりはきつい。207は高台を貼付しない坏aで、底部外面はヘラ切り後未調整。板状圧痕が観察できる。

皿（208・209）　208は底部外面ヘラ切りによって処理され、底部から外方へ開く体部形態をとる。209は底部が下方へやや膨らむもので、底部から外反気味に開く体部形態をとる。

器種不明（210）　底部の破片のため、坏ないしは皿と考えられるが、特定できない。底部外面と考えられる面に「大」と判読できる墨書がある。

高坏（211）　脚端部の破片で、端部の面取りは丁寧になされている。

土師器

杯（206）　高台を貼付する杯cで、小形のものと考えられる。

蓋（212）　大形の蓋で、天井部外面はヘラ削りによって調整され、内外面をヘラミガキによって仕上げられている。口縁端部外面の処理は丁寧になされている。

鉢（213）　精製の鉢と考えられるが、器面磨耗のため調整痕跡については判然としない。

甕（214・215）　頸部から口縁部の破片で、体部形状については小破片のため推測できない。

把手（218）　把手のみの破片のため本体は推定できない。把手を本体に挿入する突起がある。

製塩土器

焼塩壺（216・217）　216は円筒形のものと考えられ、内面には布痕跡が観察できる。217は浅鉢形のものと推定され、内面には布痕跡が残存する。

154SX187出土遺物（図129）

須恵器

蓋（219・220）　いずれも天井部外面を回転ヘラ削りによって仕上げ、口縁端部外面の処理は丁寧に面取りされている。

皿（221）　底部と体部の境界は不明瞭で、体部の開きは大きい。底部外面の処理はヘラ切り後ナデによって仕上げられている。

器種不明（222）　口縁部の破片のため、皿ないしは坏と考えられ、器種を特定するには至っていない。

土師器

蓋（223）　口縁部を断面三角形に形づくるもので、器面磨耗のため調整痕跡等については不明。

甕（224・225）　いずれも体部の張らないものと考えられ、体部内面はヘラ削り、体部外面は刷毛によって調整する甕aに該当する。

5）土層出土遺物

遺構検出時に出土したもので、調査区全域に広がる遺物包含層と考えられる。グリッドを設定し調査を行っていることから、グリッドごとに遺物を取り上げている。傾向としては、下位に遺物を多く包含する遺構が存在した場合に多くの遺物が出土している。

茶黒色土出土遺物（図130・131）

須恵器

蓋（1～7）　口縁部のみの破片（1～4・7）と口縁部から天井部まで残存する破片（5・6）があり、天井部が観察できるものは、いずれも天井部外面を回転ヘラ削りによって仕上げている。口縁端部外面の処理は、丁寧に面取りするもの（5～7）と、粗く丸みを有しているもの（1～4）がある。

坏（8～12）　高台を貼付する坏c（8～10・12）、高台を貼付しない坏a（11）がある。坏cは

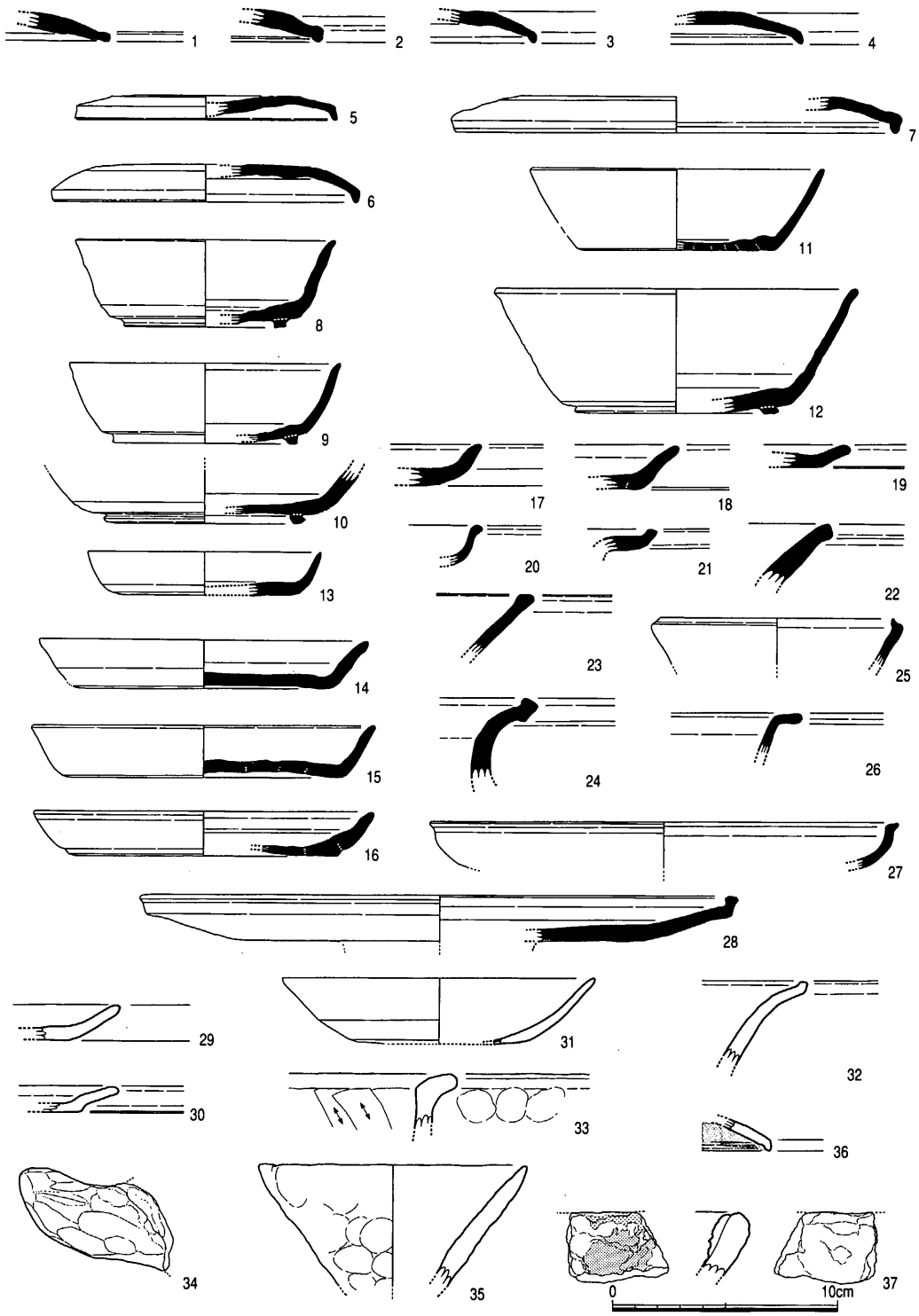


図130.茶黒色土出土遺物実測図（1）（S=1/3）

いずれも底部と体部の境界は丸く、体部の立ち上がりはきつい。坏aは底部と体部の境界は明瞭に屈曲しており、体部の立ち上がりは外方へ大きく開く。底部外面の処理は、回転ヘラ削りによって仕上げるもの（8・9）、ヘラ切り後ナデによって仕上げられているもの（10～12）がある。また坏aは底部外面に粘土紐痕跡が観察できる。

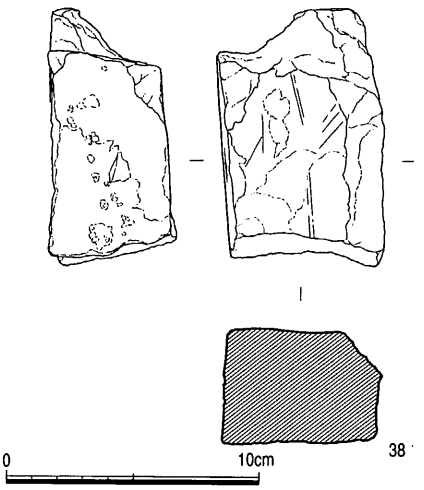


図131.茶黒色土出土遺物実測図（2）
（S=1/3）

皿（13～20）　13は小形の皿で底部と体部の境界は不明瞭、体部の立ち上がりはきつく、底部外面の処理はヘラ切り後、粗いナデによって仕上げられている。14～16は中形の皿で、器高はやや高めで、いずれも底部外面に粘土紐痕跡が観察できる。16は底部と体部の境界が乱雑で、粗製の印象を受ける。17～20については口縁部から底部境界付近までの小破片で、全形については不明。19は器高が低く、体部の開きは大きい。20は、口縁端部がわずかに外反している。

壺（21・25・26）　21は、口縁部下位が下方へ連続する可能性があるため壺f×dに該当する可能性がある。25は小形の壺で、肩部が鋭角に屈曲し、口縁部をつまみ上げる形状を呈している。26は壺bの口縁部と考えられ、口縁端部を外方へ屈曲させる。

甕（22～24）　いずれも口縁部の破片で、24のみ口縁端部を上方へ屈曲させる。

高坏（27・28）　27は、口縁端部を外方へ屈曲させる形状をとり、口縁端部に平坦面を形成する。口縁部のみの破片のため皿になる可能性をある。28は坏底部外面を回転ヘラ削りするもので、口縁部を屈曲させ、口縁端部に平坦面を形成する。

土師器

皿（29・30）　いずれも底部と体部の境界部分から口縁部に至るまでの破片資料で、口径については不明。

坏（31）　体部外面下半から底部外面にかけてヘラ削りをし、体部がやや丸みを帯びていることから、坏dに該当するものと考えられる。他の調整、装飾技法については器面磨耗のため不明。

鉢（32）　精製の鉢と考えられ、内外面ともに横ナデによって仕上げられている。

甕（33）　小形の甕になるものと考えられるが、口径が出せないため判然としない。頸部から肥厚しつつ外反する口縁部へと至る。体部内面をヘラ削りし、頸部外面に指頭圧痕が観察できる。

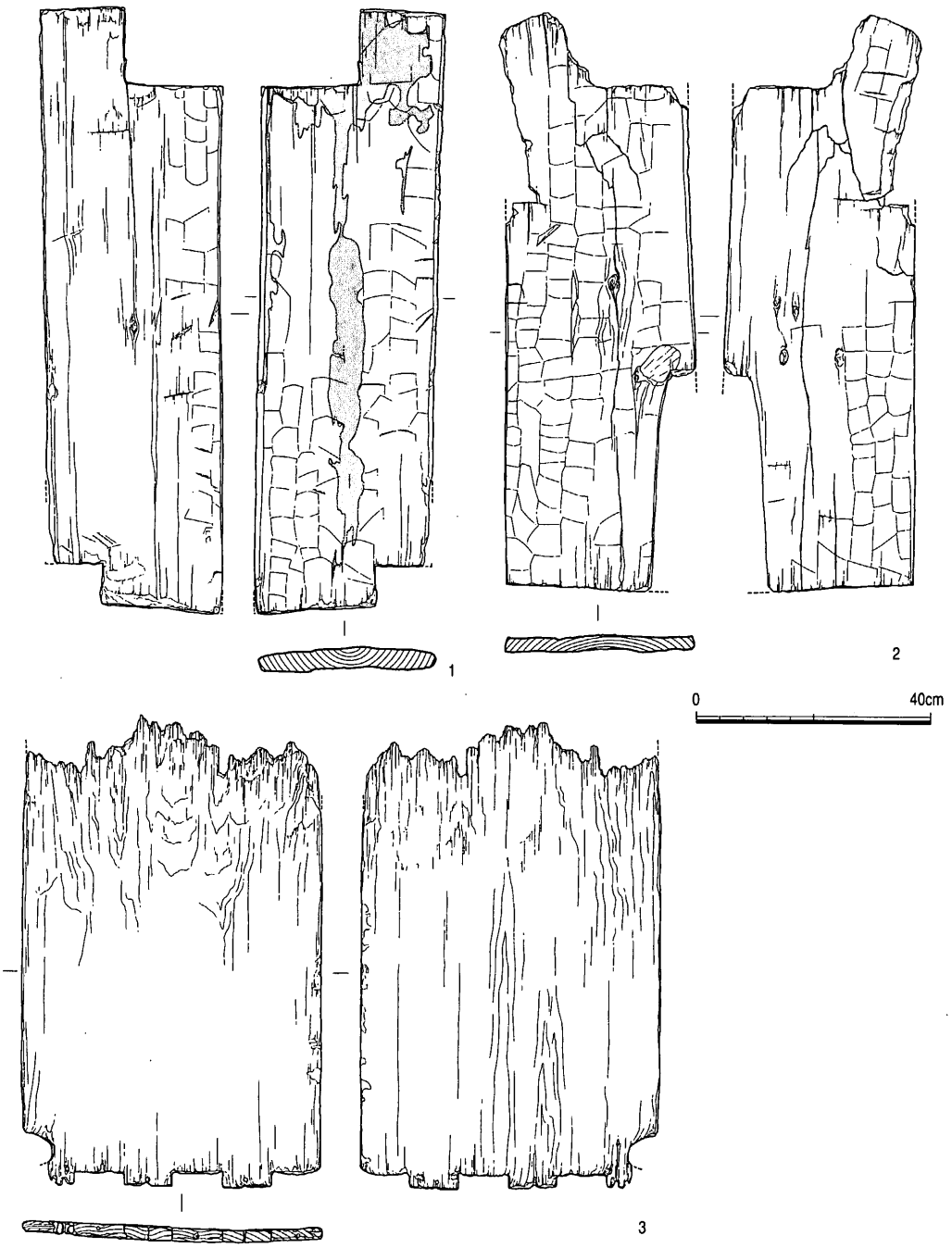


図132.154SE065出土木製品実測図（1）（S=1/12）

把手（34）　把手のみのため、詳細は不明。ただし本体に取り付ける挿入突起はない。

製塩土器

焼塩壺（35）　浅鉢形のもので内外面には指頭圧痕が観察できる。

黒色土器

蓋（36）　口縁部の破片で、全形は不明だが、口縁端部内面には沈線が施されており、内面にはミガキ痕跡が観察できる。A類。

土製品

坩堝（37）　口縁部の破片で、白紫灰色、赤灰色、黒色の付着物が内面にある。

石製品

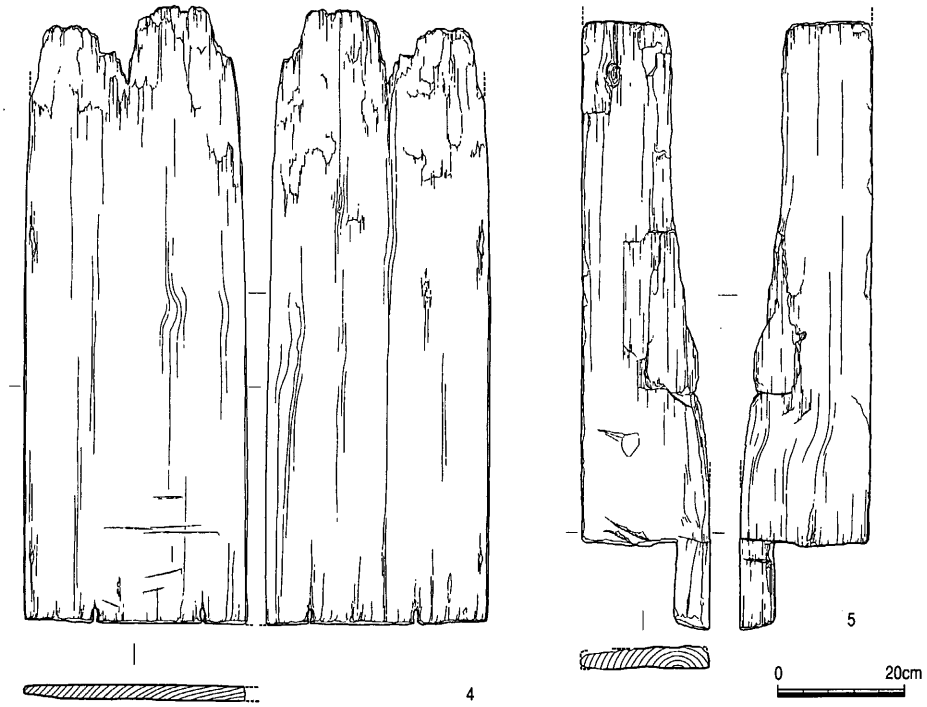


図133.154SE065出土木製品実測図（２）（S=1/12）

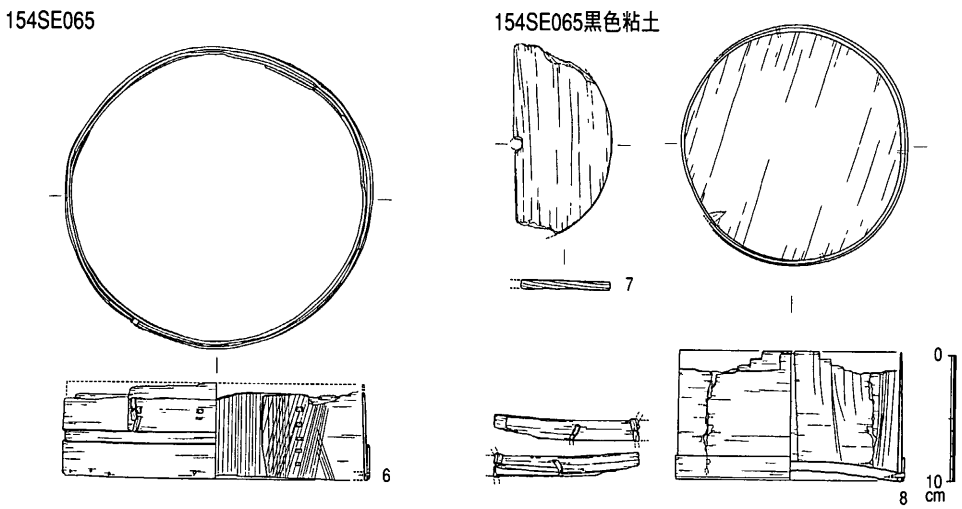


図134.154SE065出土木製品実測図（３）（S=1/12）

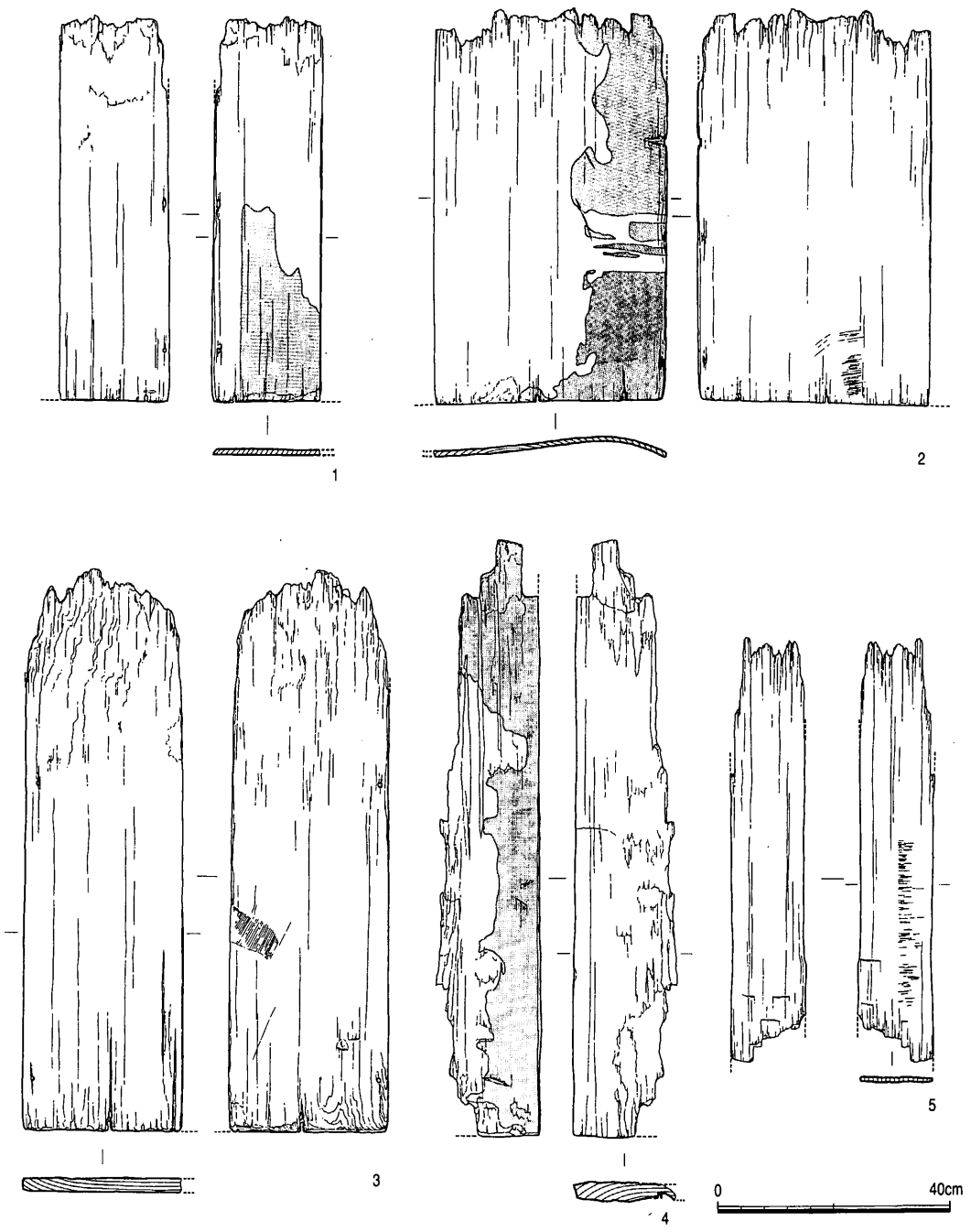


図135.154SE095出土木製品実測図（1）（S=1/12）

砥石（38）　材質は細粒砂岩で、二面を使用し、長軸方向および長軸方向に斜行する擦痕跡が観察できる。

木製品

154SE065出土木製品（図132～134）

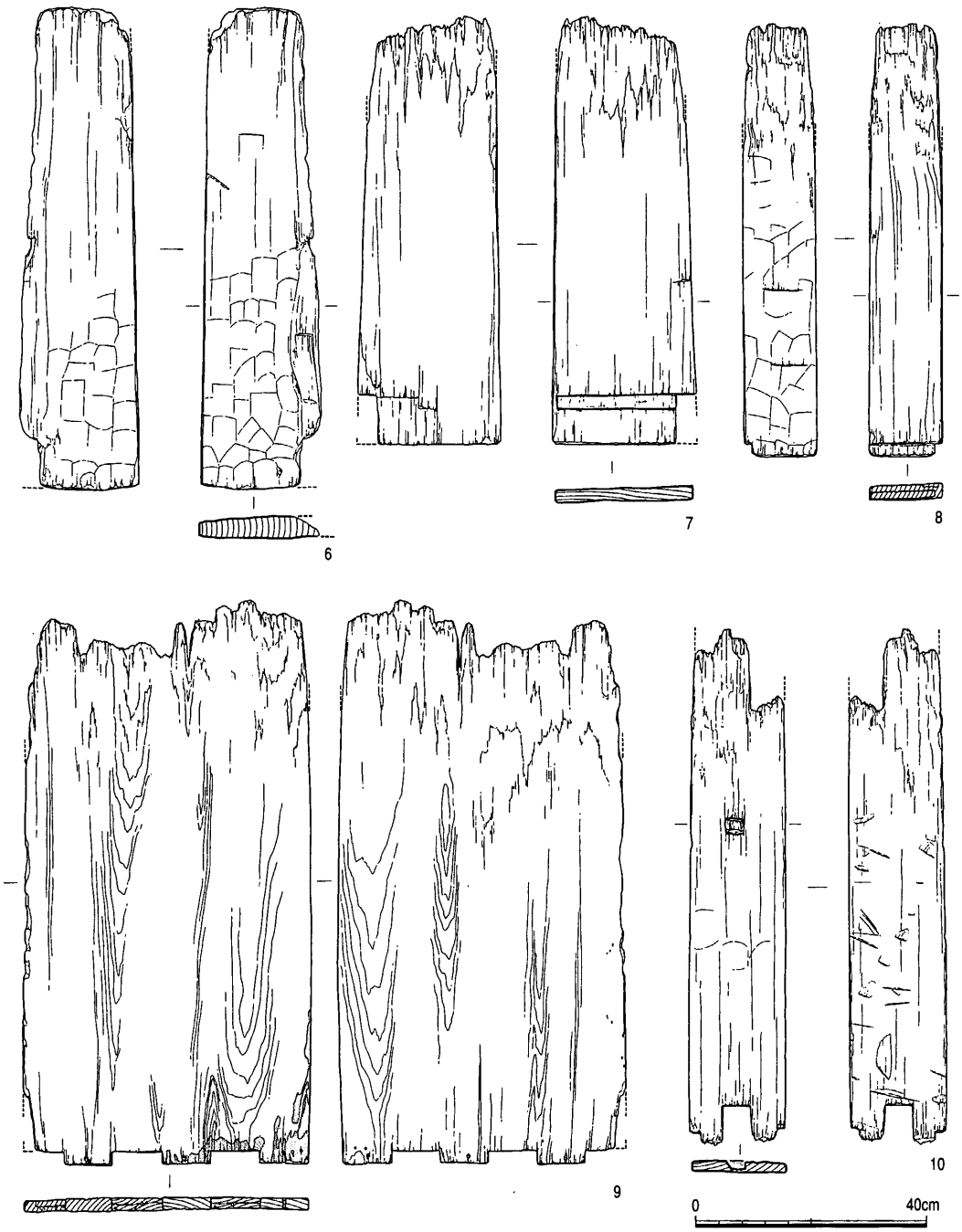


図136.154SE095出土木製品実測図（２）（S=1/12）

板材（1～5） いずれも井戸枠材で、煤が付着していることから転用材の可能性もある。ホゾを大きくつくり出すもの（1・2・5）と、細かくつくり出すもの（3・4）がある。1・2・5は表面を粗削りするもので、削り痕跡が顕著に観察できる。3・4は、比較的丁寧に削り出されており、ホゾ部分には木釘痕跡も観察できる。

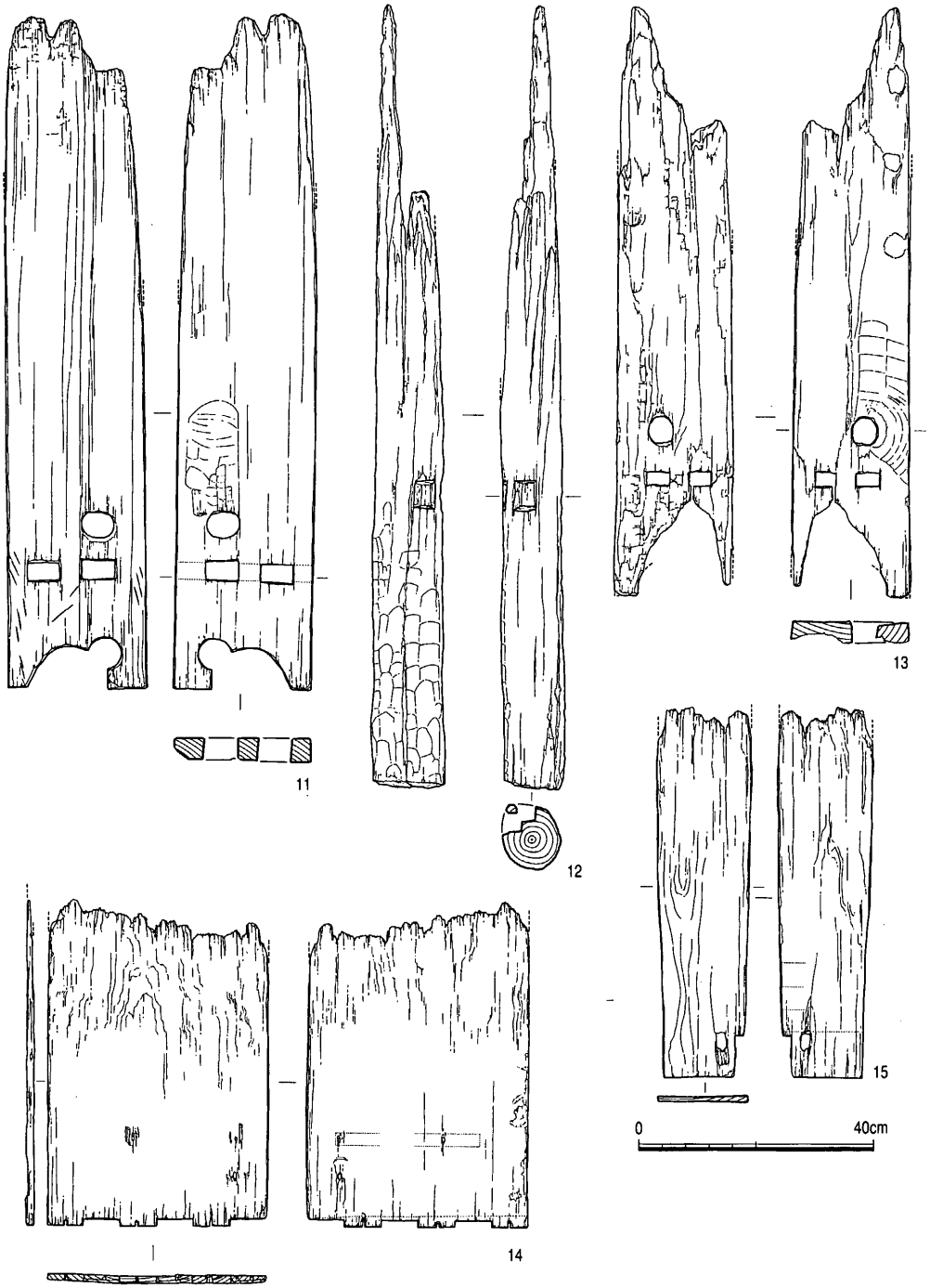


図137.154SE095出土木製品実測図（３）（S=1/12）

曲物（6～8）　6は、井戸最下部に据えられていたもので、井戸材に転用されたものと考えられる。底板は無く、曲物継ぎ材としての木皮が顕著に残存している。内外３枚の材を使用して作られている。

7は曲物板材と考えられるもので、中央に穿孔が一カ所残存する。縁辺部分が焼け焦げている。

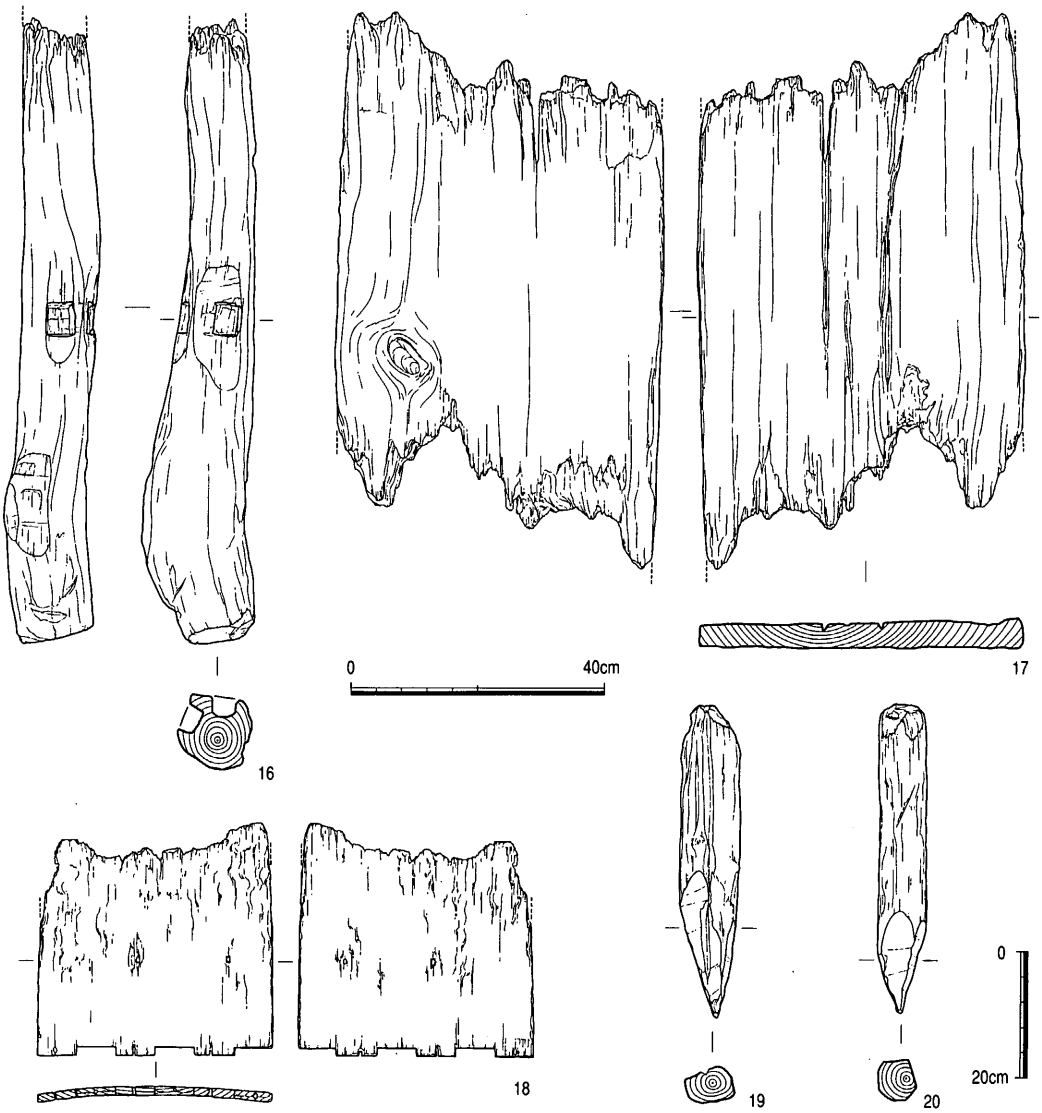


図138.154SE095出土木製品実測図（４）（S=1/12）

8は井戸内に転落したものと考えられる曲物で、底板まで残存していた。底板と側板は木釘様のもので接着されていたと考えられるが、釘自体は残念ながら残存していなかった。

154SE095出土木製品（図135～139）

板材（1～11・13～15・17・18・21）　井戸枠材であるが、井戸が構築された当初に使用されていたものは無く、全て井戸補修材として転用された材と考えられる。ホゾなどの加工があまり見られないもの（1～6・17）、ホゾなどが削り出されたもの（7～10・14・15・18）、明らかに扉材と考えられるもの（21）や、ホゾ穴など円形・長方形の穴が穿たれたもの（11・13）がある。また1～3・9・14には釘穴と考えられる穴が残存している。

柱材（12・16）　建築部材としての柱材を転用したと考えられるもので、方形のホゾ穴が顕著

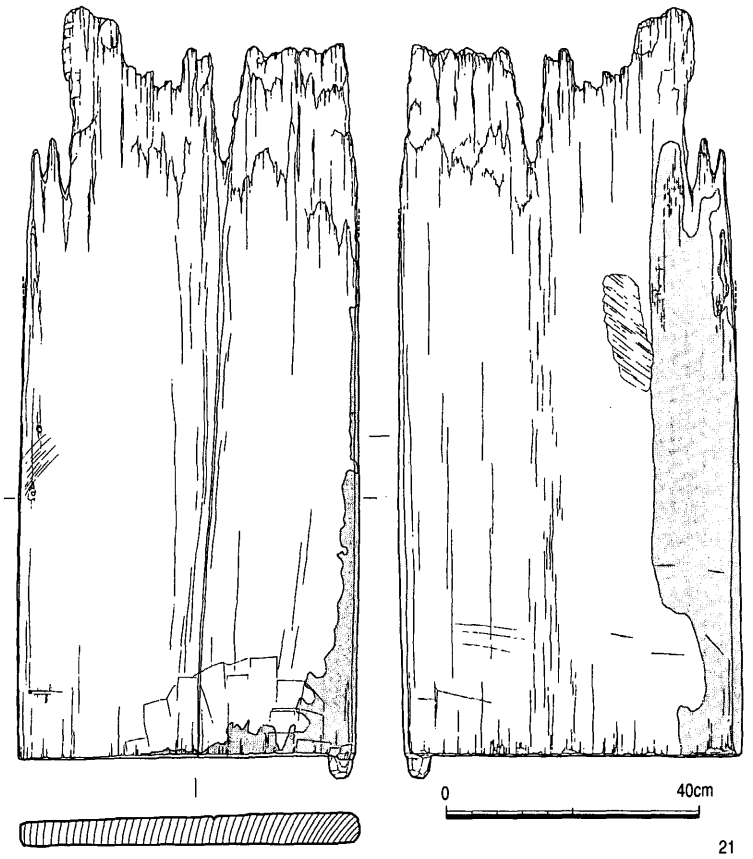


図139.154SE095出土木製品実測図（5）（S=1/12）

に残る。

杭（19・20）　井戸四隅に打ち込まれた杭で、井戸構築当初からあったものと考えられる。自然木をそのまま活用し、打ち込み箇所を削ることによって尖らせている。

154SX184出土木製品（図140）

板材（1）　表面を含め木口部分も腐植が著しく、加工痕跡は観察できない。

e.小結

遺構

今次調査では、掘立柱建物や井戸など性格が特定できる遺構が顕著に検出できた。遺物を含めて、土地利用状況の考察を行うべきであるが、遺跡性格を論じるだけの積極的な遺物の出土は、あまりなかった。強いて上げるとすれば、漆付着食器が19点、金属製品生産に関わると考えられる坩堝、鞴羽口が極少量出土しているが、工房を考える上での生産用具、工房本体の遺構など性格特定に必要なものは検出しきれていない。したがって、「市」付帯の生産工房が存在していたかどうかについては、課題として残すことになった。

ここでは、今次調査にて検出した主要な遺構について、造営時期ならびに可能な範囲での性格について考えてみる。

条坊痕跡

調査区内において土地を区画すると考えられる遺構に、溝が検出できた。報告文にて記述してきたように、調査区を南東から北西に斜行する溝154SD050は、形状に企画性は看取できず、この遺構に関しては除外できる。さて区画溝と考えられるものは、ほぼ東西南北軸に沿った遺構方向を有しているもので、以下の各遺構が該当する。

154SD015・154SD020・154SD048・154SD075

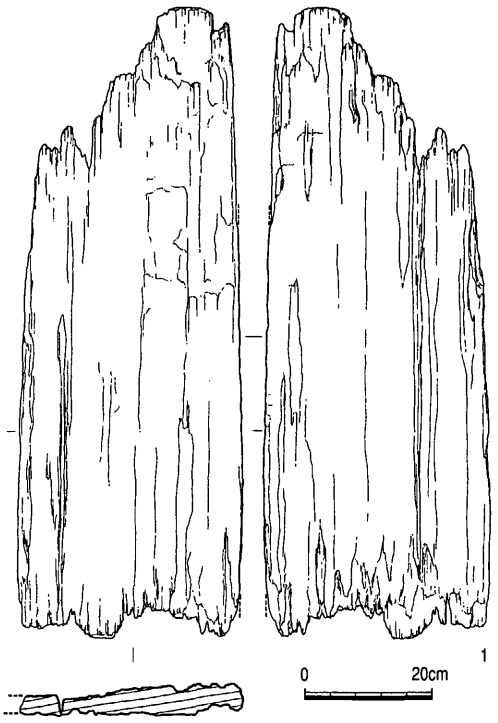


図140.154SX184出土木製品実測図（S=1/12）

154SD015・154SD020と154SD050は切り合い関係が、調査時に確認できていない。したがって、同時存在の可能性もあり、自然流路として機能していた154SD050への排水機能を有していた可能性がある。また154SD020下位に検出した154SX179は、長方形の形状ならびに掘り方に人為性が強く看取でき、溝排水を考慮に入れた施設の可能性がある。ただし154SD015・154SD020は東西に各一条のみの検出であること、溝のどちらかに路面としての空間が確保されていないため、条坊痕跡としての道路とは考え難く、宅地境界を画する遺構の可能性が高い。この154SD020の北側に154SD008ならびに154SX012がほぼ平行して形成されており、こちらは道路痕跡である可能性がある。ただし溝としての確認ではなく、「連続土坑」と呼称される状況で確認できている。

154SD048は、直線的ではなく湾曲する箇所があるなど規則性が看取できない。西に開放する「コ」の字形を呈しており、内部の施設をその外と画するために敷設された可能性がある。しかし溝154SD048と切り合うように154SB055・154SB060・154SB125が重複関係を有して建築されている。したがって「コ」の字形に呈する溝154SD048に完全に画された遺構は存在していないこともあり、性格特定については判断できない。

154SD075は、調査区南西端に検出したこともあり、調査区内の所見では溝とは特定できていない。しかし、調査区南に位置している水田で試掘調査を実施したところ、この遺構の延長箇所と考えられる遺構を検出している。したがって、154SD075は南北に伸びる溝遺構であると考えられる。現存する地形では、一段低くなった地形が、調査区南にほぼ南北に伸びており（図２－あ）、この地形に関連する遺構である可能性が高い。先述したように遺構の全貌が明らかではないため、性格付与には今後の課題を残すことになった。

建物

検出した建物は12棟で、建造方向から５群に分けることができる。154SB055が座標北に対し西に振れる状況を有しているが、他の建物は、全て東に振れる傾向にある。唯一東に振れる154SB055は、柱穴から出土した遺物から、奈良期前半に建造時期の上限を求めることができる。もっとも振れの大きい154SB105および154SB120は、154SB105の建造時期が判然としないものの、154SB120の柱穴から出土した遺物を手がかりとすると、奈良期後半を建造時期の上限として捉えることができる。建造方向の一致のみを根拠にするには躊躇するが、154SB120も同様の

時期を上限として捉えておく。ほかの建物は、建造方向に微妙なズレがあり、建造時期に前後関係があるように推定できるが、柱穴から出土した遺物からは、奈良期中頃を建造時期の上限と捉えるしかない状況にある。したがって、大きく三時期の建造時期が想定できるが、建物の建造時期については、あくまでも上限として捉えておく必要がある。

表3.建物建造方向

遺構番号	計測柱番号	X座標	Y座標	建物振れ	遺構群
154SB001	154SB001a	55580.260	-45521.020		
	154SB001b	55578.480	-45521.000	N0° 38′ 37″ W	1
154SB010	154SB010c	55575.000	-45522.130		
	154SB010f	55570.590	-45522.120	N0° 7′ 48″ W	1
154SB040	154SB040a	55580.350	-45534.860		
	154SB040d	55585.240	-45534.850	N0° 7′ 2″ E	1
154SB060	154SB060b	55575.740	-45557.150		
	154SB060d	55572.010	-45557.110	N0° 36′ 52″ W	1
154SB115	154SB115a	55565.240	-45553.540		
	154SB115c	55568.620	-45553.590	N0° 50′ 51″ W	1
154SB005	154SB005b	55575.990	-45522.400		
	154SB005e	55569.890	-45522.720	N3° 0′ 11″ E	2
154SB045	154SB045a	55576.080	-45531.270		
	154SB045i	55571.720	-45531.540	N3° 32′ 37″ E	2
154SB055	154SB055c	55575.950	-45556.450		
	154SB055f	55571.800	-45556.160	N3° 59′ 50″ W	3
154SB105	154SB105a	55572.950	-45540.100		
	154SB105g	55569.110	-45540.560	N6° 49′ 52″ E	4
154SB120	154SB120b	55575.100	-45529.740		
	154SB120d	55571.500	-45530.070	N5° 14′ 15″ E	4
154SB110	154SB110a	55571.400	-45547.190		
	154SB110l	55565.520	-45547.360	N1° 39′ 22″ E	5
154SB125	154SB125a	55575.560	-45549.400		
	154SB125i	55572.300	-45549.500	N1° 45′ 25″ E	5

遺構番号	計測点	X座標	Y座標	溝の振れ	遺構群
154SD075	154SD075N	55572.720	-45559.480		
	154SD075S	55567.290	-45559.750	N2° 50′ 48″ E	2

井戸

調査区内で検出した井戸は、報告してきたように3カ所で、井戸の可能性のあるものを含めると5カ所になる。井戸と確定した3カ所については、井戸枠材を確認したことから判断した。全て略円形の掘り方で、正方形に井戸枠材を組む構造を有している。調査区南端に位置し、全貌が明らかにできなかった154SE100以外は、最下部に曲物を置いていた。154SE065は、前後関係から自然流路154SD050を切るように構築されており、ほぼ154SD050の河床と同一標高まで掘られていることから、整地され埋没した自然流路を地下水として流れる水を活用したものと考えられる。

154SE095は、報告にて記述してきたように、構築当初は方形の井戸枠形状を有していたが、井戸崩壊に伴って、修理行為をうかがわせる扉材など建築部材を井戸枠に転用し、上方より不規則に差し入れられていた。

井戸構築時期は、ほぼ奈良期中頃と推定でき、建物が多く建造されていた時期に相当する。

弥生期の遺構

今次調査では、154SX184から弥生前期末頃に埋没したと考えられる遺構を検出した。条坊関連の遺構のみ注意される中で、性格不明ながらこの遺構の検出は、弥生期における太宰府の土地利用状況を考える上で貴重な成果を納めることができた。遺構内には、腐植が著しかったが板材が出土しており、周辺に何らかの構造物ないしは板材を使用する人々の生活痕跡が埋没している可能性が出てきた。今次調査地の南には、背振山系から北東にのびる低丘陵があり、丘陵両側は谷地形として地形観察できることから、弥生期の集落立地には適した環境にあるといえる。今次調査地はこの丘陵の先端部に位置していることから、154SX184は貯蔵穴などの遺構としての性格が考えられる。

（中島恒次郎）

太宰府市（1992）『太宰府市史—考古資料編—』

4.177次調査

a.調査に至る経過

調査地は太宰府市都府楼南３丁目658-8外に所在する。専用住宅建築にともない確認調査をおこなったところ遺構を検出した。協議の結果、発掘調査をおこなうことと決定し、平成８年３月21日から同年３月28日まで調査した。調査対象面積は140㎡、調査面積は約40㎡である。調査は城戸康利が担当した。

b.基本土層

調査地は標高約32mを測る平坦な沖積地で、現況は水田である。現耕作土直下に黄色粘質の地山があらわれる。この面で遺構が検出されたが、すでに削平を受けていた。北側は氾濫原とみられ砂層が堆積しており遺構は消滅していた。この氾濫による堆積層には18世紀以降の所産と考えられる肥前系磁器が含まれる。現地表面から遺構面までの深さは約0.2mである。

c.遺構

散漫にピットを検出した。調査範囲が狭小なため柱痕跡を残すものの掘立柱建物と認識できたのは１棟のみである。

１）掘立柱建物

177SB020

調査区中央で検出した掘立柱建物である。調査区外に延びるため規模は確認できない。柱間は2.7m間隔である。方位はN-39°50′-Eである。ピットの形状は揃わず、bは方形に近く、a、cは円形である。柱痕跡は経10～20cm程度である。埋土の単位はaは細かいが、b、cは粗い。

２）その他の遺構

177SX005

調査区西南端で検出した遺構である。方形または長方形と推測される。長辺2.5m以上、短辺0.4m以上、深さ0.15m程を測る。埋土は単一で地山と考えられる黄色土ブロックを含む暗灰茶色土である。

177SX014

調査区西よりで検出した遺構である。経0.5mの円形をしている。掘立柱建物の柱穴の可能性がある。S-13に切られており、立て替えも考えられる。

177SX016

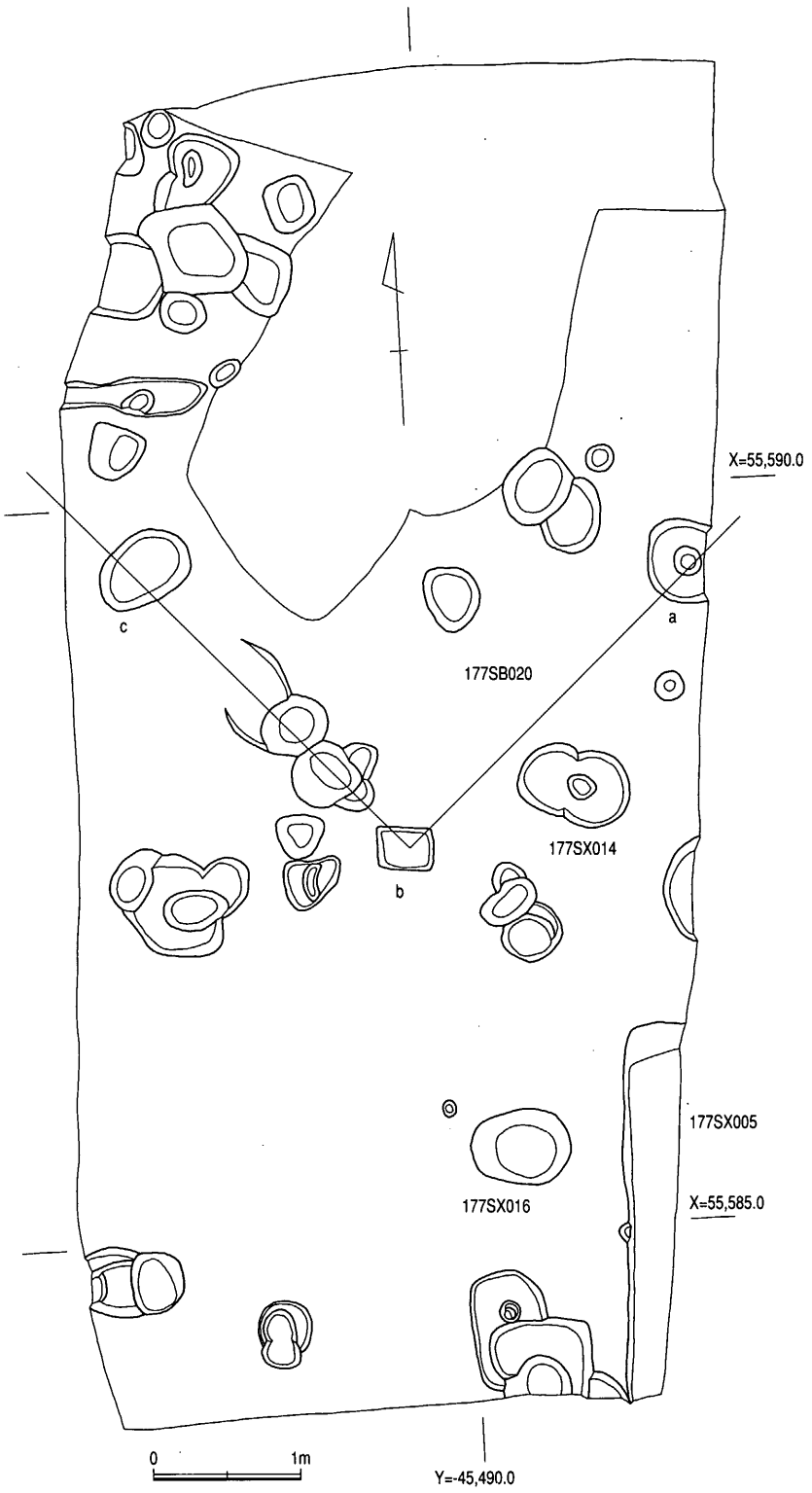


図141.条坊跡177次遺構配置図（S=1/50）

調査区西よりで検出した遺構である。0.7×0.5mの楕円形をしている。

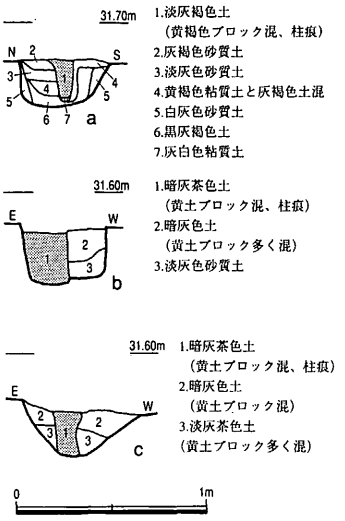


図142.177SB020土層実測図

d.遺物

1）掘立柱建物出土遺物

177SB020b出土遺物（図143）

6は須恵器小皿aで柱痕跡から出土した。口径9.8、底径6.0、器高2.5cmを測る。底部は回転ヘラ切り後軽くなでている。その他はヨコナデをおこなう。胎土は精良な中に1mmくらいの石英粒を混ぜている。焼成は良好で硬質、青灰色をしている。7、8は掘方出土の須恵器坏cである。高台径7.2、8.8cmを測る。7は体部外面に回転ヘラ削りを施す。ほかはヨコナデである。8は全面ヨコナデをおこなっている。胎土はどちらも精良である。焼成は良好で、7は明灰色、8は暗青灰色をしている。写真aは土製品が高熱を受けガラ状を呈している。フイゴ羽口の可能性がある。

2）その他の遺構出土遺物

177SX005出土遺物（図143）

1は須恵器蓋c3である。口径17.0、器高1.4cmを測る。外面は回転ヘラ削りとヨコナデ、内面はヨコナデと中央部に不整方向のナデがみられる。胎土は粗く、3mmの石英粒や黒色の粒子を含む。焼成は良好で、暗灰色をしている。2は壷の口縁と考えられる。口径6.4cmを測る。調整はヨコナデである。胎土には空隙がおおくビスケット状をしている。胎土に含まれる有機物が飛んだものと考えられる。焼成は良好で暗灰色をしている。

177SX014出土遺物（図143）

3は須恵器蓋c3である。口径19.0cmを測る。調整はヨコナデ。胎土には細かい白色粒子を含む。焼成は良好で灰色をしている。4、5は須恵器坏cである。高台径10.4、9.6cmを測る。どちらも底部ヘラ切り、体部ヨコナデ。胎土は精良で5は微細な白色粒子を含む。焼成は良好。4は焼膨れがあり外面に自然釉がかかり、明灰色を呈する。5は白灰色である。

177SX016出土遺物（図143）

9は須恵器壷蓋である。口径10.6cm、器高3.8cm以上である。丁寧な造りで、ヨコナデされている。天井部外面は屈曲部分まで細い回転ヘラ削りが施される。精良な胎土の中に微細な石英、長石粒を含む。焼成は良好で灰色をしている。

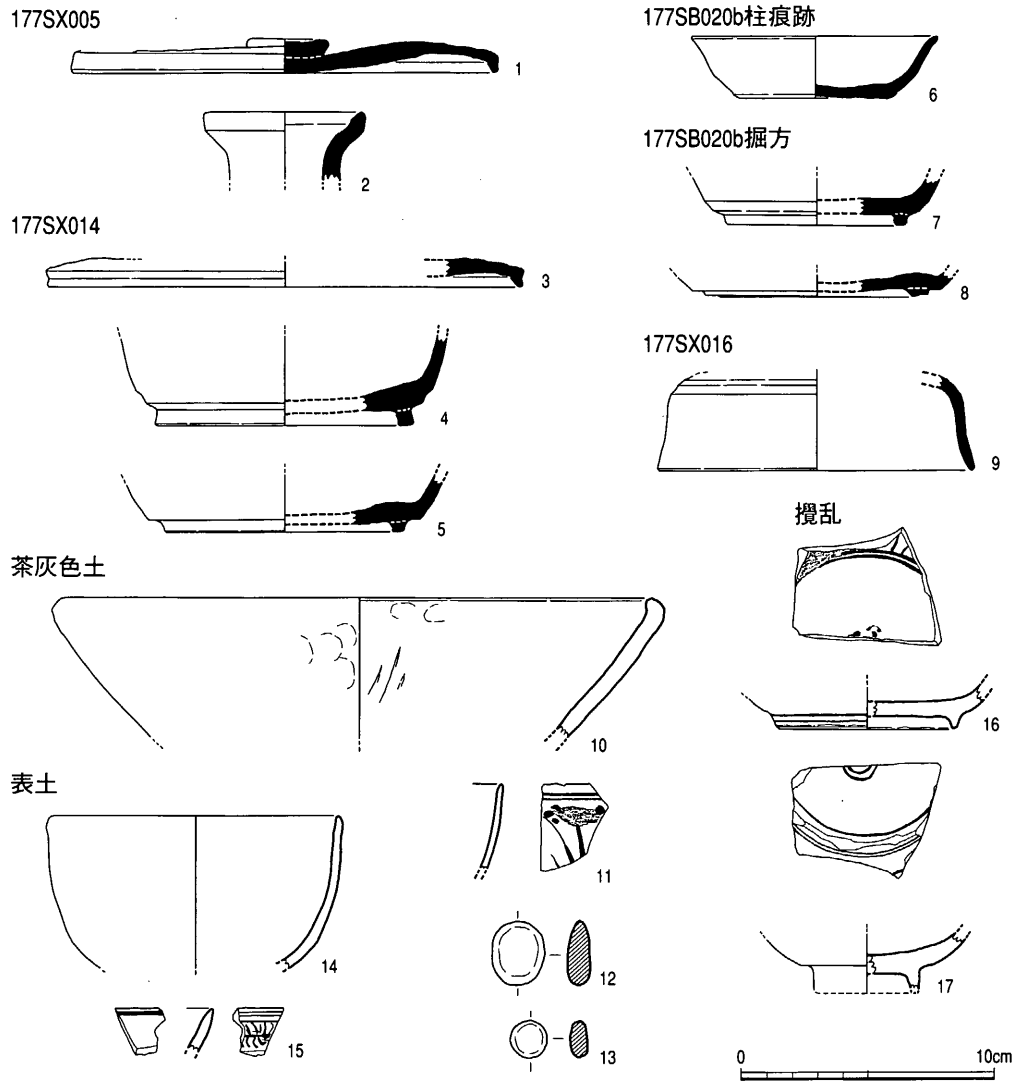


図143.出土遺物実測図（S=1/3）

177SX019出土遺物（写77）

写真eは陶器片である。外面緑色の透明釉、内面青味を帯びた緑色釉がかかる。

3）土層出土遺物

茶灰色土出土遺物（図143）

10は瓦質のすり鉢である。口径24.4cmを測る。外面は粗いナデで仕上げている。内面は口縁部に指圧痕が残るが、以下は擂り目がようやく見える程度に磨耗している。使用によるものと考えられる。胎土には石英粒を含む。11は肥前系磁器椀である。外面に呉須で下絵が描かれている。12、13は研磨された円形の平たい石である。径2.3、1.5cm程である。砂岩製である。写

真bは須恵器甑の底部である。断面方形で一辺約1cmである。ヘラ状のもので切り取り角を小さく面取りしている。焼成良好で白灰色をしている。写真cは砂岩製砥石の破片である。きめは細かく灰黄色を呈する。長い辺で3cmくらい残存する。

表土出土遺物（図143）

14は陶器の椀である。口径10.8cmを測り、わずかに玉縁に作る。黄色の透明釉がかかる。近現代の所産と考えられる。15は肥前系磁器の小片である。内外に呉須で下絵をつけている。

撹乱出土遺物（図143）

16は肥前系磁器の皿と考えられる。見込みには五弁花がある。高台端部は露胎である。17は磁器椀である。表面は被熱したらしく釉が発泡して白く濁っている。青磁の可能性がある。写真dは陶器片である。外面に黒褐色釉がかかる。内面は無釉である。壷の類であると考えられる。胎土は赤褐色をしている。

e.小結

調査区が狭小のため成果は多くない。時期的には奈良時代後半を中心としたところにピークがあり、あとは近世以降に考えられる。奈良時代には掘立柱建物が想定され、さらに周辺に拡がるようすが窺える。（城戸康利）

5.194次調査

a.調査に至る経過

調査地は太宰府の南部、太宰府市都府楼南4丁目789-1に位置し、天拝山麓から鷺田川に向かう扇状地上にある。1997（平成9）年3月24日に（株）三愛建物より共同住宅建設に伴う埋蔵文化財の取扱いの問い合わせがあった。

対象地は鏡山猛氏推定復原案による大宰府条坊跡右郭18条5坊に位置しており、筑紫野市が西隣で行った第86次調査でも遺構の存在が確認され、事前に行った試掘調査でも希薄ながら遺構存在が確認された。このため（株）三愛建物と協議を重ねた結果、開発対象地のうち建物が建つ範囲のみ調査を行い、その他は将来調査ということで合意をみ、1997（平成9）年5月6日から5月31日にかけて第194次調査として発掘調査を実施した。その後建築計画の変更が出され、未調査部分も建築対象になったため、1998（平成9）年1月26日から2月17日にかけて第194-2次調査として発掘調査を実施した。現地での発掘調査に関わる費用の全ては（株）三愛建物が負担した。調査対象面積3473㎡、調査面積は第194-1次が905㎡、第194-2次が480㎡で合計1385㎡を測る。試掘調査は井上信正が、調査は狭川真一・宮崎亮一が担当した。

b.層位

現況は水気の多い水田で、耕作土を除去すると約40cm程で遺構が存在する地山に達する。地山は黄色粘土で随所に灰茶色砂や黒褐色粘土のブロックが混在する。標高は約33mで、調査区の南西に向かって僅かに高くなっている。

c.遺構

1）溝

194SD001

この溝は調査区東端で南北方向に検出され、南北はさらに調査区外に続いている。溝の西側肩は確認できたが、東側肩については道路下になり確認することはできなかった。溝の西側肩は幅約5mほどなだらかに下がった後に段を付けて急に下がっている。第194-1次調査時点でなだらかな部分に堆積していた黒灰色粘質土は溝の埋土と考えていたが、第194-2次調査によって溝の埋没後広い範囲に堆積したものであることがわかり、溝の範囲は第194-2次調査検出の段落ち部分から東側と考えられる。よって今回検出できた溝の最大幅は7.5m、深さは約0.9～1.5mを測り、溝は南から北に向かって下がり、調査区の北端と南端とでは約1.2mの高低差が認められる。溝底の地盤は全体的に青灰色の粘質土で、若干の起伏が認められる。また、検出さ

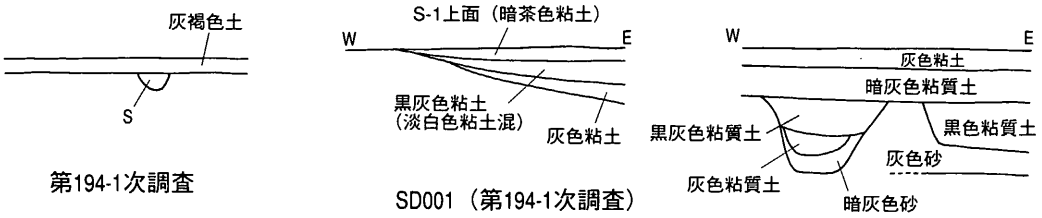


図144.土層模式図

れた西側肩は全体的に蛇行し、一部で抉られている状況を示していることなどから、一定量の流水があったと推測される。

埋土は細かく入り乱れているが、およそ2層に分けられ、上層が黒灰色粘質土、下層が灰色砂である。黒灰色粘質土には僅かながら木片を含んでいた。

194SD004

第194-1次調査で検出され、調査区をSD001の大溝に向かって西から東に蛇行している。第194-1次調査で検出された溝は、SD001上面に堆積する黒灰色粘質土の下に続いている。埋土はおよそ上下2層で上層は暗灰色粘質土、下層は灰色砂である。第194-2次調査で検出された溝もその延長部分と推定されるが、第194-1と2次調査の調査区が連続していないため、同一のものかについては確実性に欠ける。

2）井戸

194SE005

194-1次調査で検出されたほぼ円形をした井戸で、南北1.0m、東西0.98m、深さ0.7mを測る。埋土は黒色粘質土と暗灰色粘質土に分かれ、上層の黒色粘質土中からは木片や木の葉が原形をよく残した状態で検出された。暗灰色粘質土を除去した面からは、曲物痕跡と考えられる直径約0.6m、深さ0.35mの円形状の掘り込みが検出された。

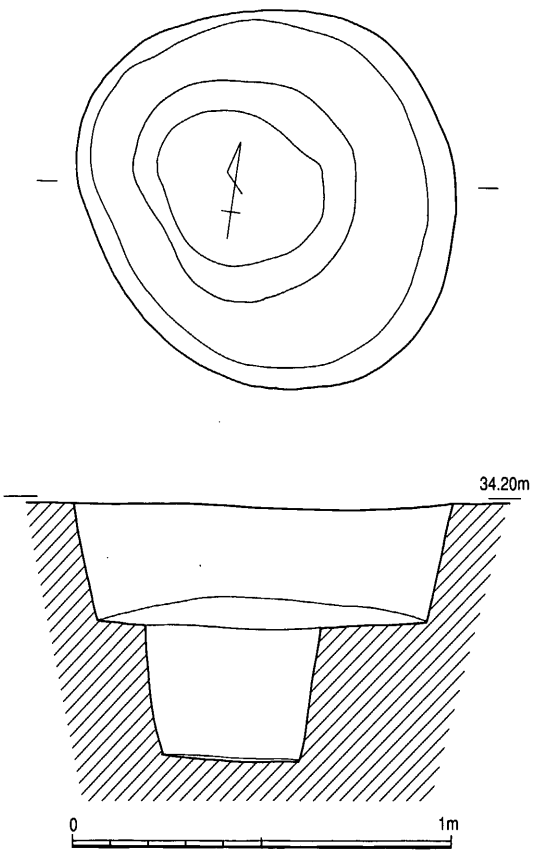


図145.194SE005遺構実測図（S=1/20）

3）その他の遺構

194SX010

SD001の西隣から南北6.0×東西4.2mの長方

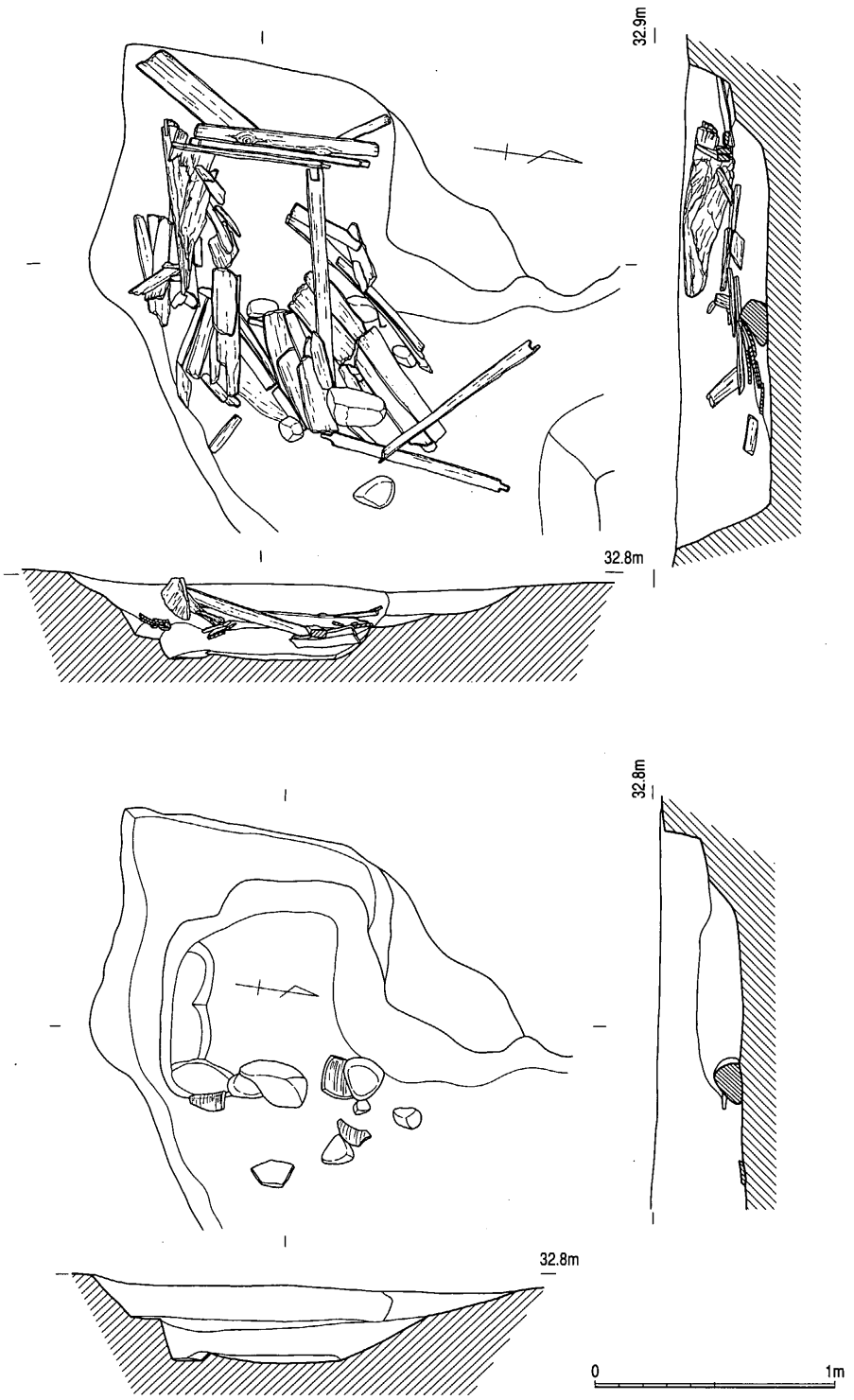


図146.194SX010遺構実測図（S=1/30）

【上図：部材出土状況。下図：部材撤去後状況】

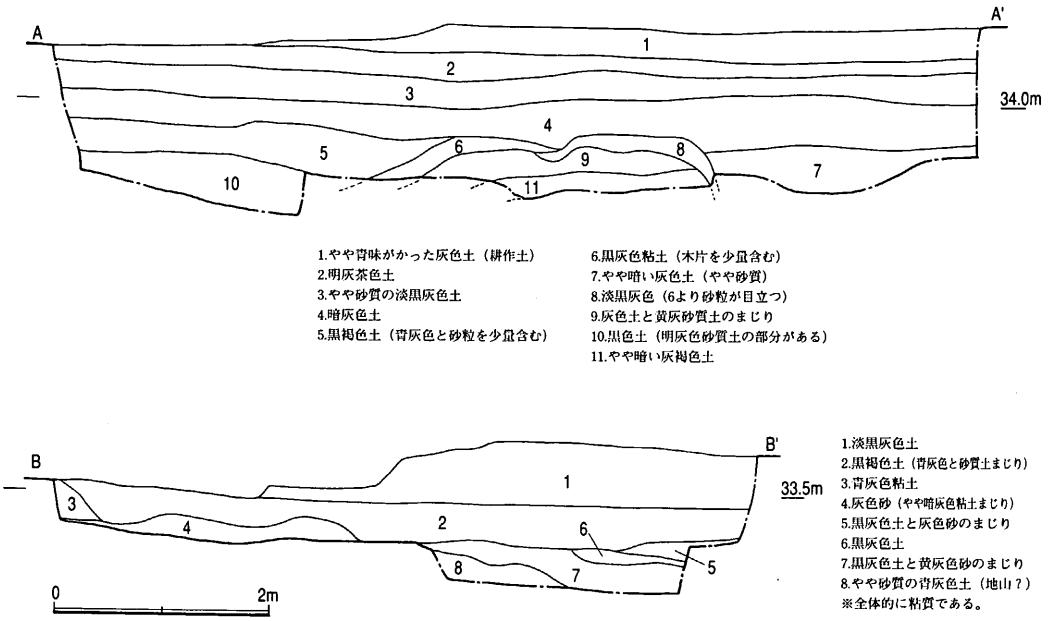


図147.194SD001・194SX015土層実測図（S=1/70）

形の土坑が検出され、さらにその中央付近に一辺1.2mの方形の掘り方があり、ホゾなどの加工を施した角材やベニヤ板のような薄い板材が大小70枚以上重なって検出された。SD001とSX010は長さ2.5m、幅0.5m、深さ約1mの溝で繋がっている。土坑の埋土は大溝と同じく黒灰色粘質土で、木材はその溝の方向に崩壊し、溝にも木片や川原石が検出された。このことからSX010とSD001は併存していたものと考えられる。また、元の位置を保っている木材は確認できなかったが、西側と南側の木材に関しては検出状況から元位置に近い位置を保っていると考えられる。そして、その木材と掘り方との間には裏込めと考えられる黒茶色の固くしまった砂質土が確認された。

出土した木材等から、一辺1.2mの方形の掘り方には、約68×78cmの方形の木枠が造られていたと推定される。

194SX015

SD001の西側肩に入り込んだような土坑である。遺構検出段階にSD001との切り合いは明確に把握できなかったが、土層を見る限り同じ堆積状況を示しているため、同一時期に存在したものと考えられる。また、SD004との切り合い関係についても明確に把握できなかった。それからSX010に見るような構造物や痕跡も想定されたが、SD001との境に木片を検出したのみで、人為的な工作が行われた痕跡は確認できなかった。

e.出土遺物

1）溝出土遺物

194SD001

194SD001灰色砂出土遺物（図148）

土師器

坏a（1・2）1は復原口径11.1cm、器高1.9cm、底径7.3cmを測る。全体的に磨滅が著しい。底部はヘラ切り。2は復原底径6.8cm。底部ヘラ切り。

椀（3）口縁端部内面に僅かな沈線を残す。胎土は不純物が少なく精製されている。都城系。

椀c（4）高台径8.0cm。高台内面はナデ。その他は回転ナデ。

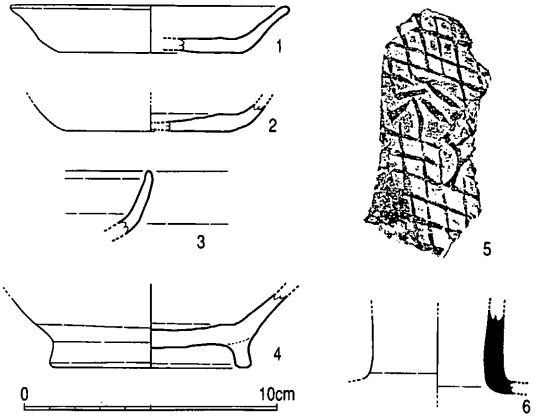


図148.194SD001灰色砂・黒色粘質土出土遺物実測図（S=1/3）

瓦

平瓦（5）平瓦で縦に長い斜格子目に「佐瓦」の文字が反転した状態で見られる。

194SD001黒色粘質土出土遺物（図148）

須恵器

長頸壷（6）頸部復原径5.2cmを測る。胎土は他と異なり薄い灰色で、僅かに細砂粒を含むが精製されている。自然釉が頸部付け根付近に厚く残っている。東海産か。

194SD001暗灰色砂出土遺物（図149）

須恵器

坏c（1）高台径8.0cm。体部と底部の境付近に高台を貼付する。胎土は0.3cm程の白色砂粒を含んでいる。

皿（2）復原底径8.0cm。底部はヘラ切り。底部端は使用による磨滅が見られる。

鉢（3）復原口径29.8cm。体部下位を欠損し、全体の形状は不明。体部中位付近に回転ヘラ削りを行う。その他の調整は回転ナデ。

長頸壷（4）長頸壷の体部と考えられる。復原最大径16.8cm。体部の調整は回転ナデ。体部の屈曲部付近に櫛描き波状文を施す。

土師器

椀a（5）口径12.6cm、器高4.2cm、底径5.6cm。底部はヘラ切り。その後体部中位まで指押さえ。口縁部は回転ナデ。内面底部には不定方向のナデが明瞭に残る。

椀c1（6）高台径7.8cm。体部と底部の境が明瞭に屈曲している。

椀c2（7～9）7は復原口径13.0cm、器高4.8cm、底径7.6cm。底部はヘラ切り。8、9はそれぞ

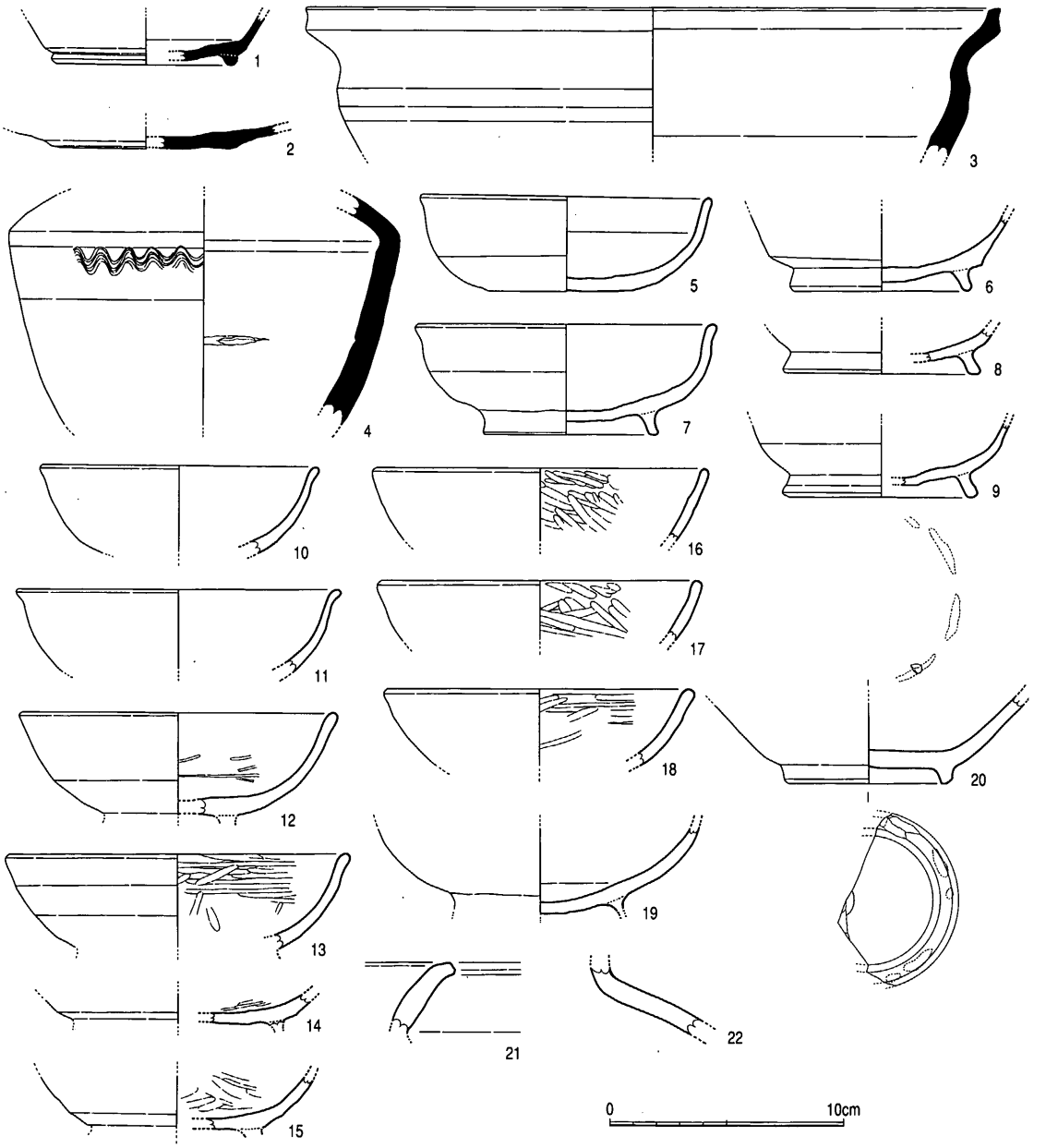


図149.194SD001暗灰色砂出土遺物実測図（S=1/3）

れ底径8.5cm、8.4cmである。焼成は良好で、内面底部には不定方向のナデが明瞭に残る。

椀（10・11）10、11は復原口径12.0cm、14.0cm。内面中位まで不定方向のナデが施される。

黒色土器

椀c（12～15）内面の調整はミガキc。外面は回転ナデもしくはヨコナデ。12、13の復原口径は13.6cm、14.8cm。A類。

椀（16～18）復原口径13.4～14.4cm。内面の調整はミガキc。外面は回転ナデもしくはヨコナデ。A類。

椀c（19）体部外面には底部押し出しの指頭圧痕が残る。内面の調整は不明瞭。瓦器のような色調をしているが、高台がしっかりとヨコナデにより貼付されているため、黒色土器B類と考えたが、瓦器の可能性も考えられる。

越州窯系青磁

椀（20）復原底径7.2cm。釉は緑茶色で鈍い光沢がある。全面に施釉する。高台畳付けの目跡は粗く削り取る。I-2類。

灰釉陶器

甕（21・22）21は口縁部で、全面回転ナデのあと施釉。22は頸部付近と見られ、外面は回転ナデのあと施釉。内面は叩きのあとナデ消している。屈曲部付近に釉が厚く堆積する。

194SD001灰色粘質土出土遺物（図150）

須恵器

甕a（1）口縁部のみであるが、全体にヨコナデ、ナデが施されている。端部は一部僅かに歪んでいる。

壷（2）全体の形状が掴めないが、壷ではないかと推測される。胎土は他と異なり、精良で目立った砂粒は見られない。

鉢b（3）復原口径22.8cm。全面回転ナデを施し、その後把手を貼付している。

土師器

坏a（4）口径11.0cm、器高2.1cm、底径7.8cmを測る。底部はヘラ切り後、板状圧痕を残す。内面には黒茶色の油のような痕跡が残り、中央付近に約1.6cmの穿孔がある。灯明皿として使用されたものと推測される。

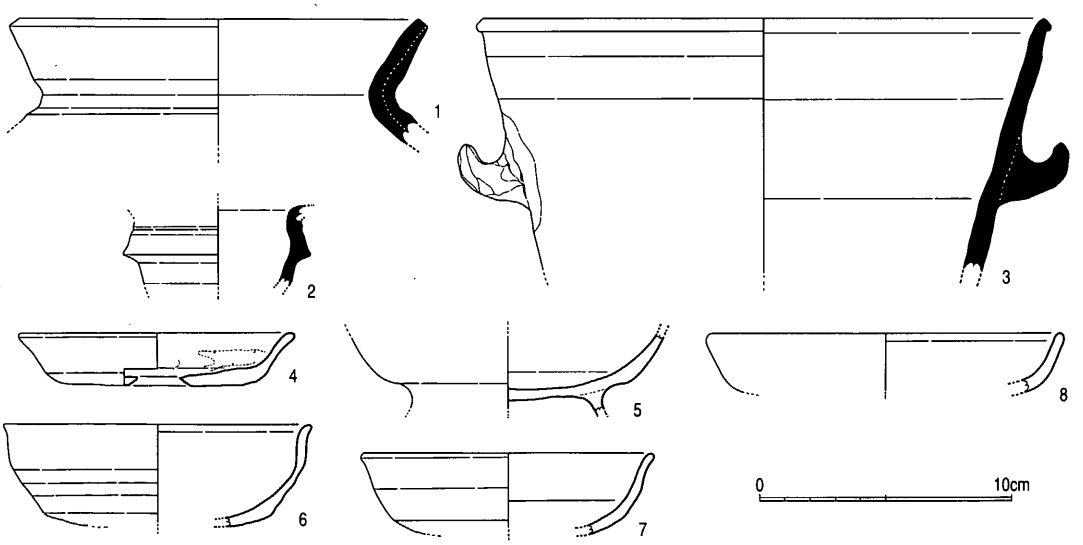


図150.194SD001灰色粘質土出土遺物実測図（S=1/3）

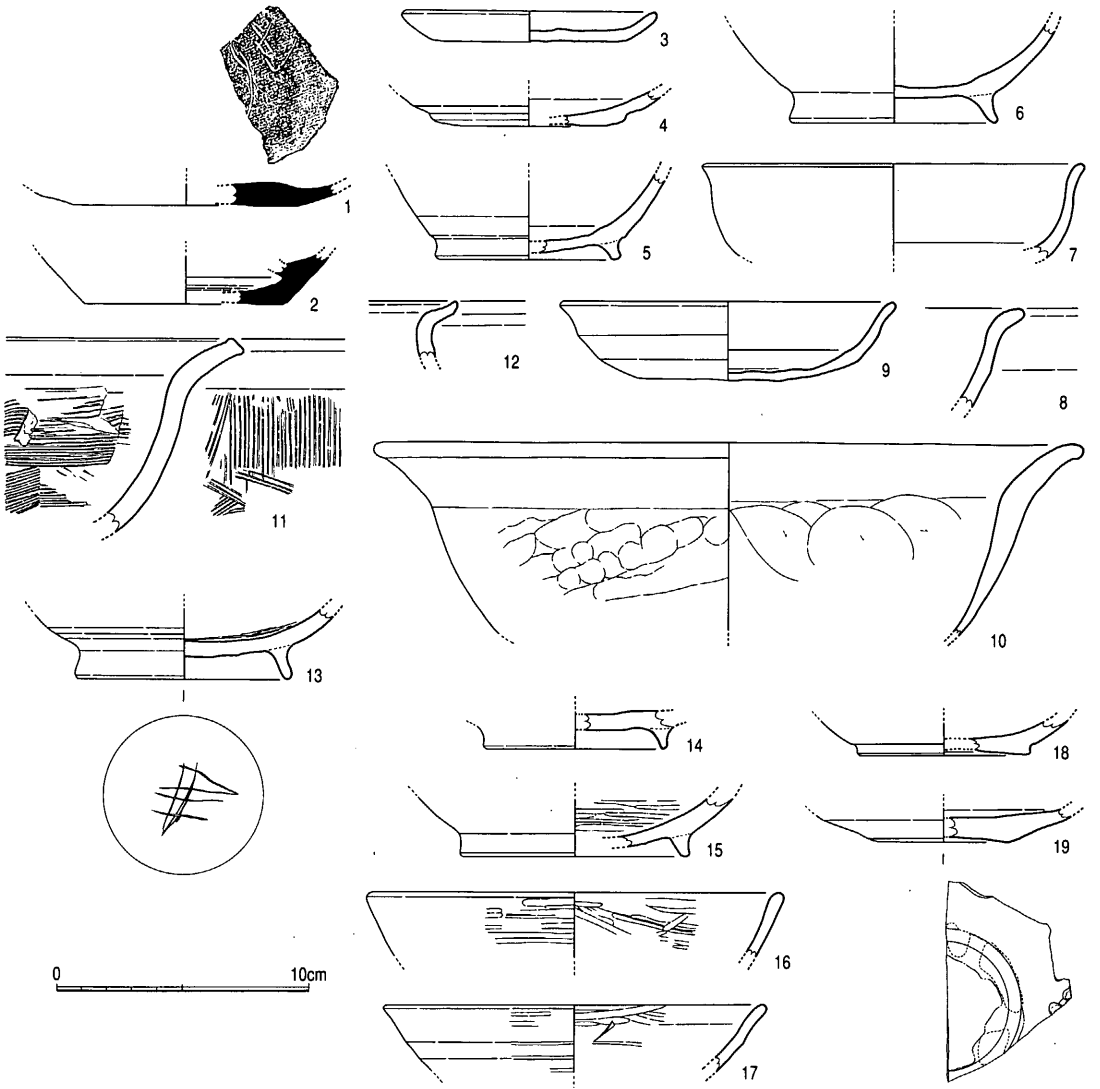


図151.194SD001黒灰色粘質土出土遺物実測図（S=1/3）

椀c（5）底部外面には板状圧痕が残り、内面底部付近は使用による磨滅が見られる。

椀（6・7）6、7の復原口径は12.2cm、11.7cm。底部は不定方向のナデ、その他は回転ナデ。6は僅かにヘラ切り痕跡と板状圧痕が残る。

皿（8）復原口径14.2cm。胎土は赤褐色で口縁端部内面に僅かな段を有する。都城系。

194SD001黒灰色粘質土出土遺物（図151）

須恵器

坏a（1）復原底径8.8cm。内面底部にヘラ記号が施されている。

壷（2）壷もしくは瓶の底部と推定される。

土師器

小皿a（3）復原口径10.2cm、器高1.25cm、底径7.8cm。底部はヘラ切り。胎土に細かな金雲

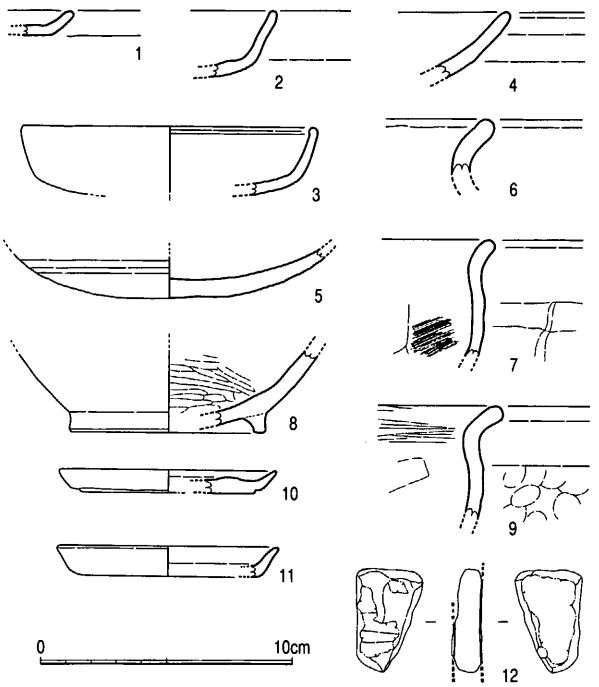


図152.194SD001暗灰色粘質土・
上面出土遺物実測図（S=1/3）

母を多く含んでいる。

坏a（4）底部は肥厚する。底部外面は粗いナデのあと板状圧痕を残す。

椀c（5・6）高台径は7.4、8.3cm。5は一部内面が黒灰色に変色している。6は内外面ともヨコナデ。

椀（7・8）7は復原口径15.2cm。

丸底坏a（9）復原口径13.4cm、器高3.15cm。内面底部は不定方向のナデ。底部外面に板状圧痕が残り、その他は回転ナデ。

鍋（10・11）10は復原口径28.2cmを測る。体部内面はヘラケズリ調整を行う。体部外面は指頭圧を行い、二次焼成によって器面が一部剥落している。また、底部に近づくにしたがって、厚さがかなり薄くなる。口縁部はヨコナデされ、端部は僅かに肥厚する。11は体部内面はヨコハケ、外面上位はタテハケ、中位は不定方向のハケ目を施す。口縁端部は僅かに肥厚し、沈線状になっている。また、外面の色調は薄赤灰色を呈する。

甕（12）小破片で磨滅も目立ち、全体の形状は不明であるが、胎土に目立った砂粒はなく、精製の甕と考えられる。

黒色土器

椀c（13～15）13は高台径8.6cm。内面にミガキc、高台内面に細いヘラ記号が施されている。14、15の復原高台径はそれぞれ7.3cm、9.1cm。磨滅が目立つが内面にミガキcを施している。A類。

椀（16・17）16、17の復原口径はそれぞれ16.6cm、15.2cm。内外面にミガキcを施している。B類。

白磁

椀（18）I-1類。

越州窯系青磁

坏（19）底部の目跡は削り取られている。I類。

194SD001暗灰色粘質土出土遺物（図152）

土師器

小皿a（1）底部糸切り。

坏a（2）体部中位に僅かな屈曲を持つ。

坏（3）復原口径11.8cm、口縁端部内面に僅かな沈線を残す。胎土は茶黄色で精製されている。

丸底坏a（4・5）4、5とも外面下半は粗いナデ。口縁部はヨコナデ。内面はミガキb。

甕（6・7）6は口縁端部内面に不規則な凹み状の沈線が施されている。7は小破片であるが、小型の甕に復原されるものと考えられる。

黒色土器

椀c（8）復原高台径7.8cm、内面にミガキcを施している。A類。

甕（9）口縁部内面にミガキb、体部外面には指頭圧痕を残している。

194SD001上面出土土器（図152）

土師器

小皿a（10・11）10は復原口径8.6cm、器高0.9cm、底径6.8cmを測る。底部は糸切り。11は復原口径8.8cm、器高1.2cm、底径7.0cmを測る。

イスラム陶器

不明（12）外面と考えられる面は、光沢のある緑青色の釉を施す。内面と考えられる面は薄い緑青色の釉で鈍い光沢がある。釉厚は内外面とも0.1cm弱で外面はやや剥落が目立つ。胎土は淡黄白色で精製されている。

194SD001出土遺物（図153）

金属製品

銅製絞金具（1）径2.0～2.6cm、幅0.6～0.7cm、最大の厚さ0.15cmを測る。棘状突起があり、実測図の上向きに2つ、下向きに1つあり、切断部分には突起は施されていない。表面はサビで荒れていて、淡灰青色や暗灰色を呈している。黒灰色粘質土出土。

石製品

砥石（2～5）2は両端を欠損しているが、2面に研磨が施されている。黒灰色粘質土出土。3は2面に研磨が施されている。暗灰色砂出土。4は2面が欠損しているが、3面に研磨が施され、そのうち1面には局部的に溝状の強い研磨が施されている。灰色粘質土出土。5は小口の一面を欠損しているが、その他現存する全面に研磨が施されている。一部現存長7.25cm、幅5.4×3.5cmを測る。灰色粘質土出土。

土製品

棒状土製品（6・7）6は端部の一方を欠損し、現存長6.9cm、幅3.2cmを測る。焼成は良好で赤褐色を帯びている。全面ナデで現存する端部はやや丸く仕上げる。灰色粘質土出土。7は両

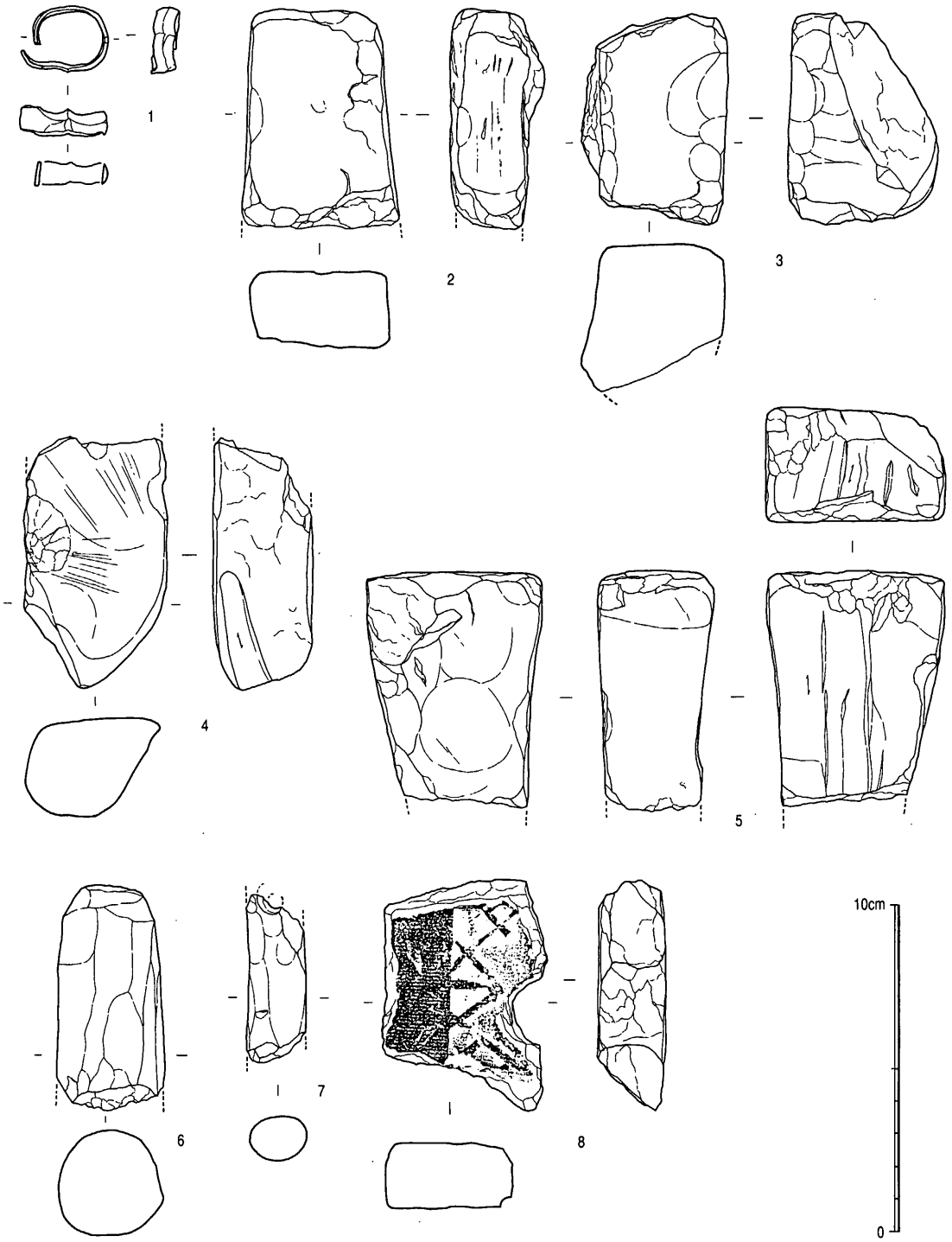


図153.194SD001出土遺物実測図（S=1/2）

端を欠損し、現存長5.15cm、幅1.4～1.7cmを測る。全面ナデで、淡茶色を呈する。欠損部分に径0.4cm程の孔の痕跡が認められるため、舌の可能性が考えられる。暗灰色砂出土。

瓦加工品

不明（8）欠損が目立ち全体の形状が掴めないが、粗いケズリによって両面から穿孔を施している。黒灰色粘質土出土。

194SD004出土遺物（図154）

須恵器

蓋3（1・2）1は復原口径13.1cm、器高1.8cmを測る。天井部は回転ヘラ切りを行ったあと回転ナデを施している。内面には不定方向のナデが施されている。2は口縁端部の折り曲げは僅かに肥厚させた程度である。

坏c（3）復原高台径6.8cmで、低く小さな高台を貼付する。

壷（4）内面は回転ナデ。白色微砂粒を僅かに含むが、精良である。

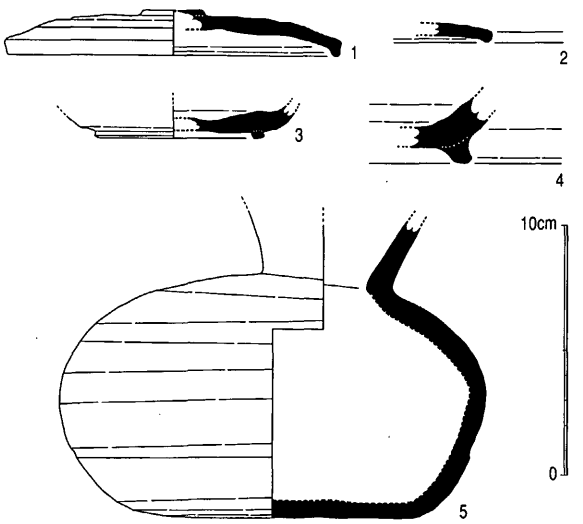


図154.194SD004、194SE005出土遺物実測図（S=1/3）

2）井戸出土遺物

194SE005出土遺物（図154）

須恵器

平瓶（5）口縁部を欠損し、底径10.3cmを測る。底部は手持ちヘラ削り。その他の調整は回転ナデ。

3）その他の遺構出土遺物

194SX010出土遺物（図155～157）

土師器

坏a（1・2）1、2ともに口縁部を欠損。底部は回転ヘラ切り。2には板状圧痕を残す。

椀c（3）復原底径7.4cm。調整は風化のため不明。

木製品

溜め桝部材

横桟（4～10）　4～6はホゾを作り出すもので、4は総長77.6cm、幅5.3cm、厚さ3.3cm、ホゾを省いた部分の長さは68.2cmを測る。5は総長78.3cm、幅5.5cm、厚さ2.3cm、ホゾを省いた部分の長さは69.3cmを測る。4・5ともホゾの付け根が僅かに抉れている。6は他の二つと異なりやや短く、総長68.5cm、幅5.5cm、厚さ2.5cm、ホゾを省いた部分の長さは57.5cmを測る。7～9はホゾをはめ込むための抉りを入れるもので、7は端部を一

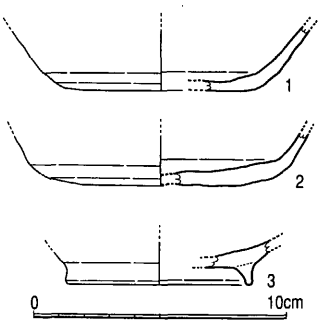


図155.194SX010出土遺物実測図（S=1/3）

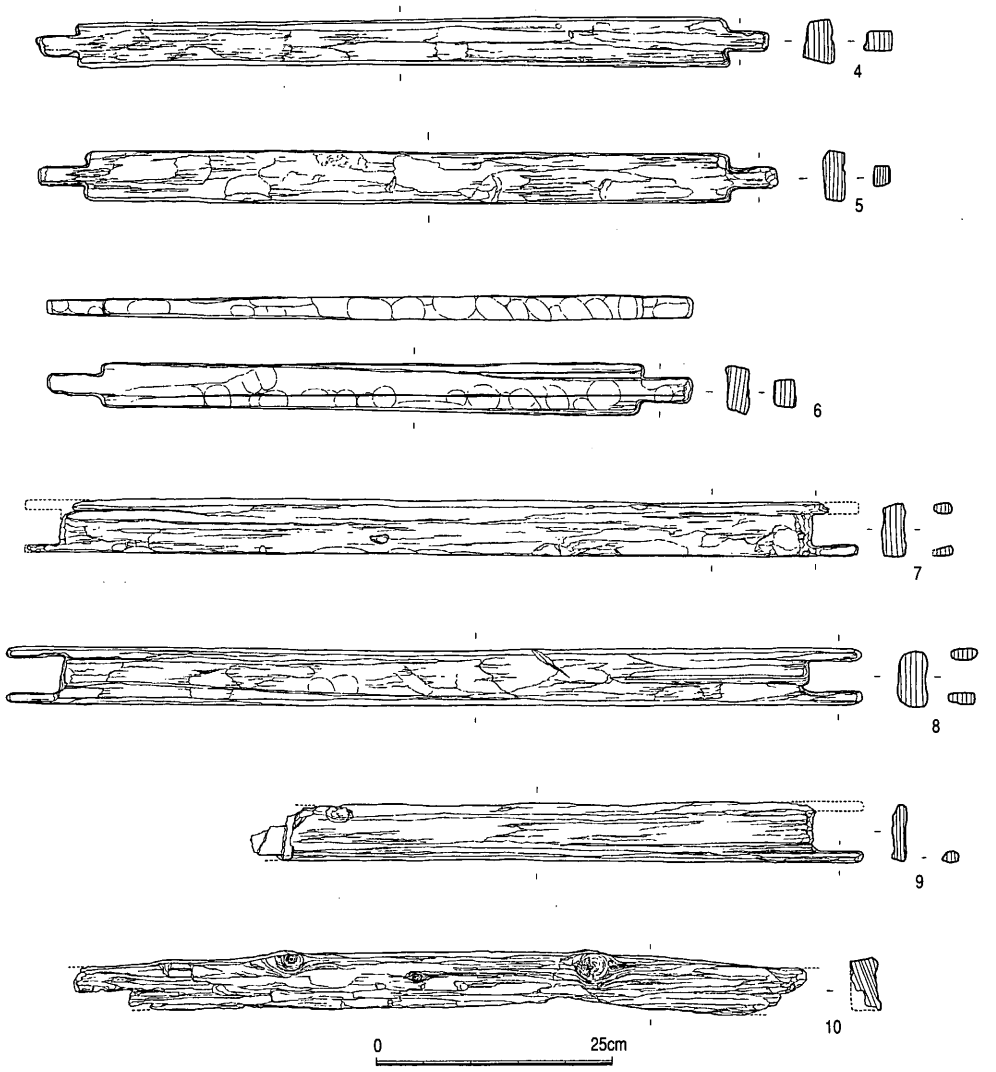


図156.194SX010出土木製品実測図（1）（S=1/8）

部欠損しているため総長は不明だが、現存長87.9cm、幅5.9cm、厚さ2.5cm、抉り込みを省いた部分の長さは79.6cmを測る。8は総長90.6cm、幅6.0cm、厚さ3.0cm、抉り込みを省いた部分の長さは79.4cmを測る。抉り込みの付け根が僅かに抉れている。9は大きく欠損し片側しか残存していないが、現存長64.7m、幅6.5cm、厚さ1.6cm、抉り込みの深さは5.2cmを測る。10は他と異なり、自然木に近い様子を示しているが、側面の一部が粗く加工を施されているため横桟と推測されるが、両端が欠損しているため、ホゾ・抉り込みのどちらが加工されていたかは不明である。

縦板（11～19）

ここには形状を良好に残しているものを掲載したが、出土数は小破片を含んで約70点を越え

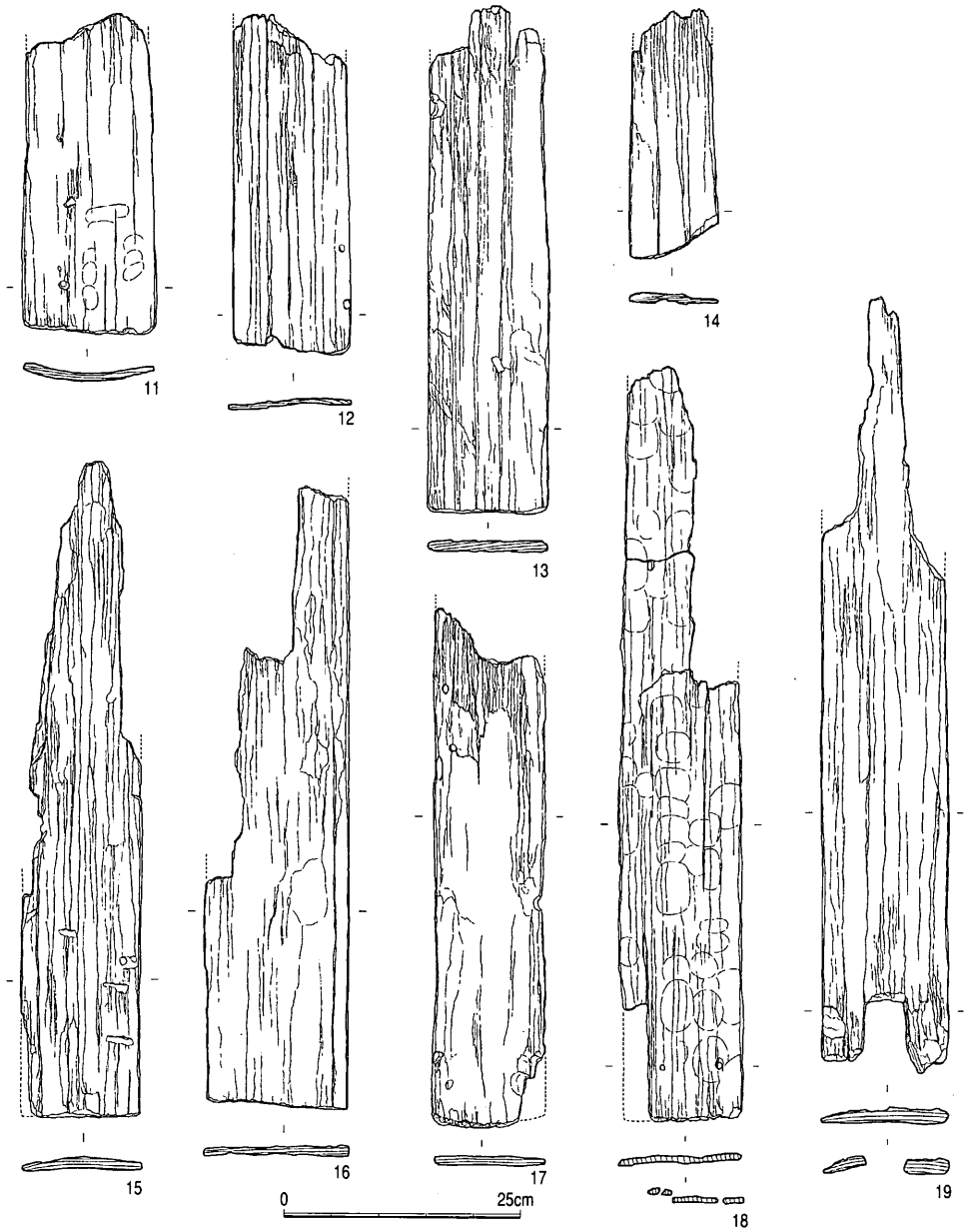


図157.194SX010出土木製品実測図（２）（S=1/8）

る。全体の平均は幅約7cm、厚さ約1cmを測るが、全体的に薄い板材が利用されている。表面が腐食しているため明瞭な加工痕は残っていないが、一部に加工痕と推測される僅かな凹凸が確認できる。切断・調整以外に加工が施されている板材は2点で、18は下方に0.6cm×0.6cm、0.5cm×0.7cmの穿孔が2個水平に並んで施されている。19はホゾをはめ込むための抉りのような凹型が施されている。端部が欠損しているため抉り込みの深さはわからないが、現存長7.7cm、幅4.0～4.7cmを測る。

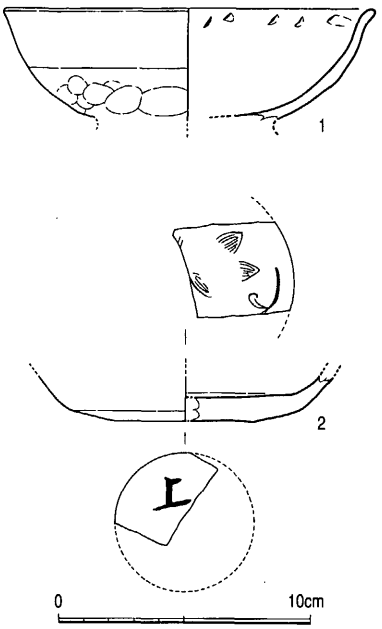


図158.194SX015、表土出土遺物実測図（S=1/3）

194SX015出土遺物（図158）

土師器

椀c（1）口径14.8cmを測る。底部は欠損するが、高台が貼付されていた痕跡が見られる。内面はミガキbが施され、口縁端部内面にはコテあての痕跡が残る。体部外面下半には底部押し出しによる指頭圧痕が残る。胎土は0.1cm未満の白色砂粒や灰色砂粒を含むが、全体的に精良である。

4）土層出土遺物

表土出土遺物（図158）

白磁

皿（2）底部のみで、復原底径5.4cmを測る。底部外面に「上」という墨書が書かれている。VIII-2-b類。

e.小結

第194次調査では東側に大溝が見られる以外、遺構が溝の西側には全く残ってなく、僅かに溝と井戸の残欠が確認されただけである。しかし、西側隣接地で行われた第86次調査（1）の遺構検出面と今回の調査地との高低差が0.5～1.5m程あり、194SE005の底面と第86次調査検出の井戸の底面の高さがほぼ同じであること、第86次調査検出の建物の掘り方の深さが50cm前後であることなどから、今回の調査地は全くの遺構が存在しない空き地ではなく、のちにかなり削平を受けたものと推測される。

各遺構の年代と若干の所見は以下の通りである。

194SD001

194SD001は、溝の東肩は現況道路の下になり確認できていないが、北側で調査した第120次調査と南側で行われた第192次調査でそれぞれその延長部が発見されており、幅は15m前後になる可能性がある。また、この溝のおよその中心は大宰府政庁中軸線から455m（1530～1540小尺）前後の位置にあたる。溝のレベルや砂の堆積状況から、この溝が使用されていた時期には南から北に向かって水が流れていたものと推定される。そして、調査中もかなりの湧水があり、溝の幅が他の条坊の側溝と異なり15m近くあり、水量も豊富であることから運河的要素も持ち得ていたことも考えておく必要がある。

出土遺物には須恵器を多量に含んでいるものの、丸底坏aを含んでいることから最終埋没時

期はXII期頃と推測される。

194SD004

自然流路と考えられる。SD001との取り付けについてはやや不明瞭であったが、第194-1次調査検出のSD004がSD001の堆積中に切り込んでいるため、SD001の堆積以前と考えられ、僅かな出土遺物から奈良時代に埋没したものと推測される。

194SE005

隣接する第86次調査検出の井戸のレベルから推測すると、この井戸はかなり削平されていることが窺える。出土遺物が少ないため年代の特定は困難だが、8世紀初頃の埋没と推測される。

194SX010

溜め桝状遺構と推定される。井戸とも考えられるが、SX010の底面の高さがSD001の大溝の底面より約50cm高いこと、取り付き溝が存在していること、溝に近接していることなどから溜め桝機能を持った遺構と推測され、取り付き溝は排水路として機能していたと考えられる。この溜め桝は水際に置く必要があった施設と推定されるが、その用途については不明である。

出土土器が少ないが、最終埋没時期はVII～VIII期と推測される。

194SX015

SX010の存在から同様に大溝から入り込んだ部分を土坑状のものと考えているが、単純にSD001の大溝の氾濫によって西側肩が抉り取られたことによって、土坑状になった可能性も考えられる。埋没時期は出土土器から平安中期と推測される。　（宮崎亮一）

註（1）筑紫野市教委『大宰府条坊跡　第86次発掘調査』筑紫野市文化財調査報告書　第27集　1991

6.206次調査

a.調査に至る経緯

本調査は簡易郵便局の鉄筋構造の建物立て替えに伴う緊急調査であり、調査箇所は太宰府市都府楼南4丁目566-290・566-442にあたり、調査期間は1999年（平成11年）10月8日から同年11月14日に及ぶ。調査対象面積は268㎡で、その内調査面積は187㎡であった。調査は城戸康利、山村信榮が担当した。

b.基本土層

層序は都府楼団地造成時の整地土層（表土）の下に厚さ20～30cmの上下2層からなる黒色系の耕作土層があり、その下に黄色を基調とする土、砂からなる河川堆積土層をベース面とした遺構検出面がある。遺構は平安前期のものが前記耕作土層に覆われ、近世末から近代の墳墓と考えられる遺構が耕作土層の上から切り込んで形成されている。遺構検出面上には耕作土が上から押し込まれたことによる動物（牛か）の足跡が全体で観察された。

c.検出遺構

この調査では古代の土坑4基、近代以降の墳墓と考えられる22基以上の土坑群、性格不明のピット群等が検出された（図160）。以下に主要な遺構について報告する。

1）土坑

206SK001（図161、写93上）

調査区の北西側に位置する。不整形な円形を呈する土坑で、長さ2.8m、幅0.9m、深さ0.1mを

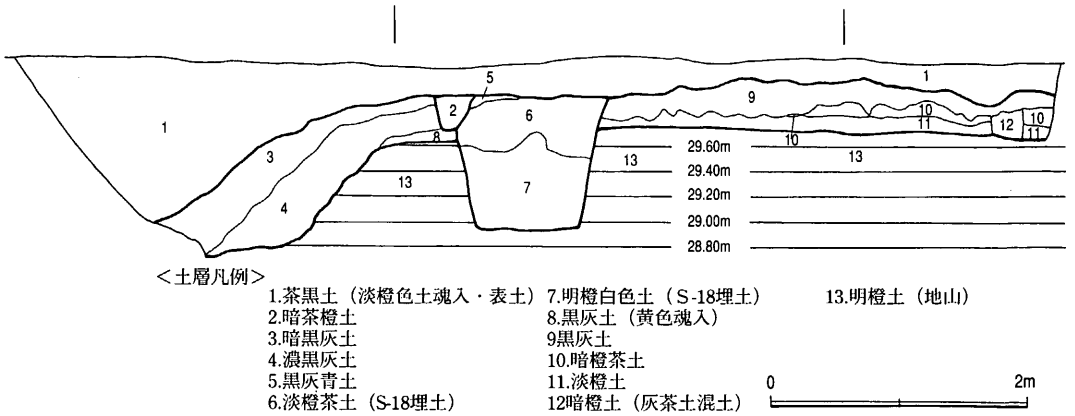


図159.南壁土層実測図（S=1/60）

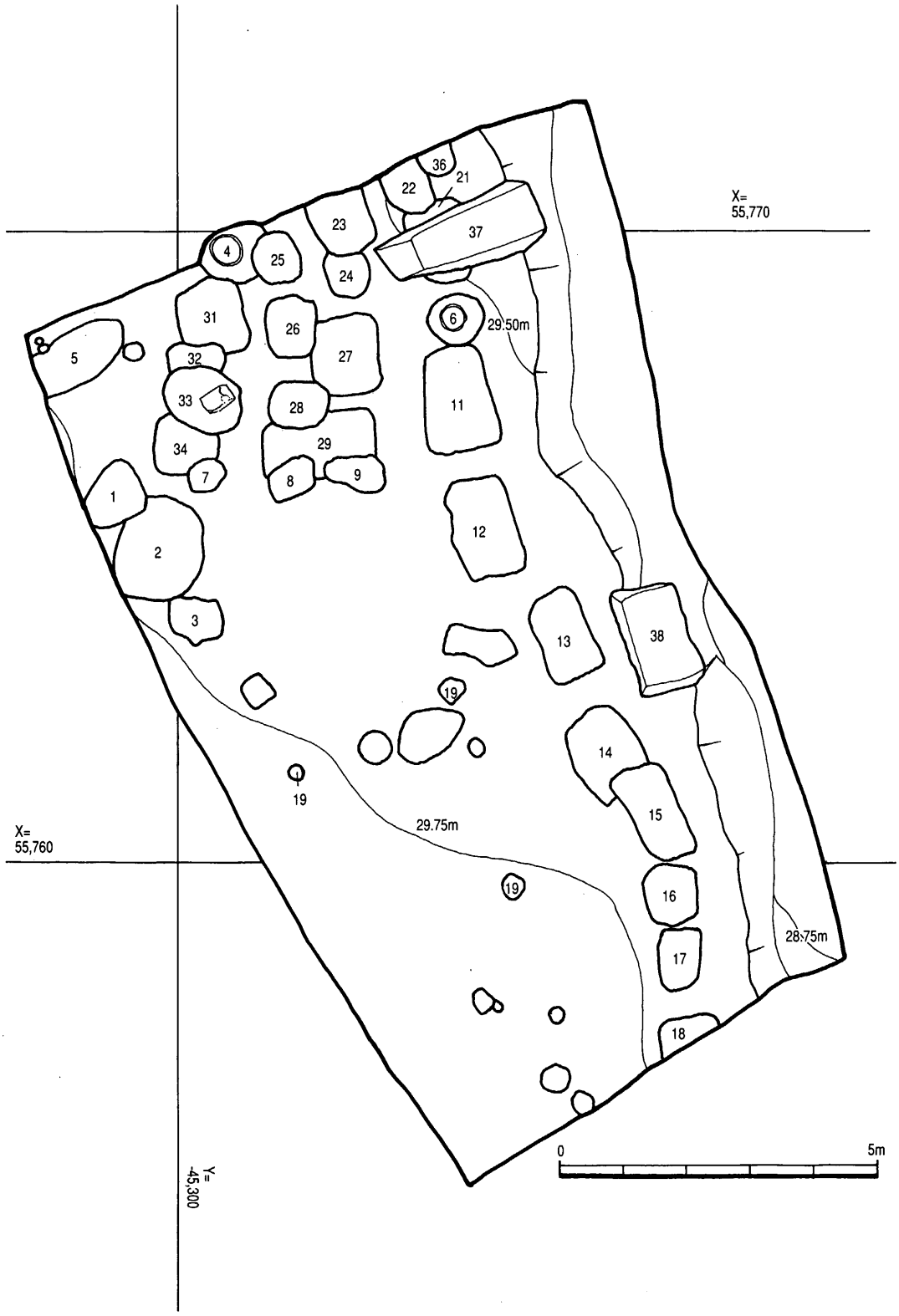


図160.条坊跡206次遺構配置図（S=1/100）

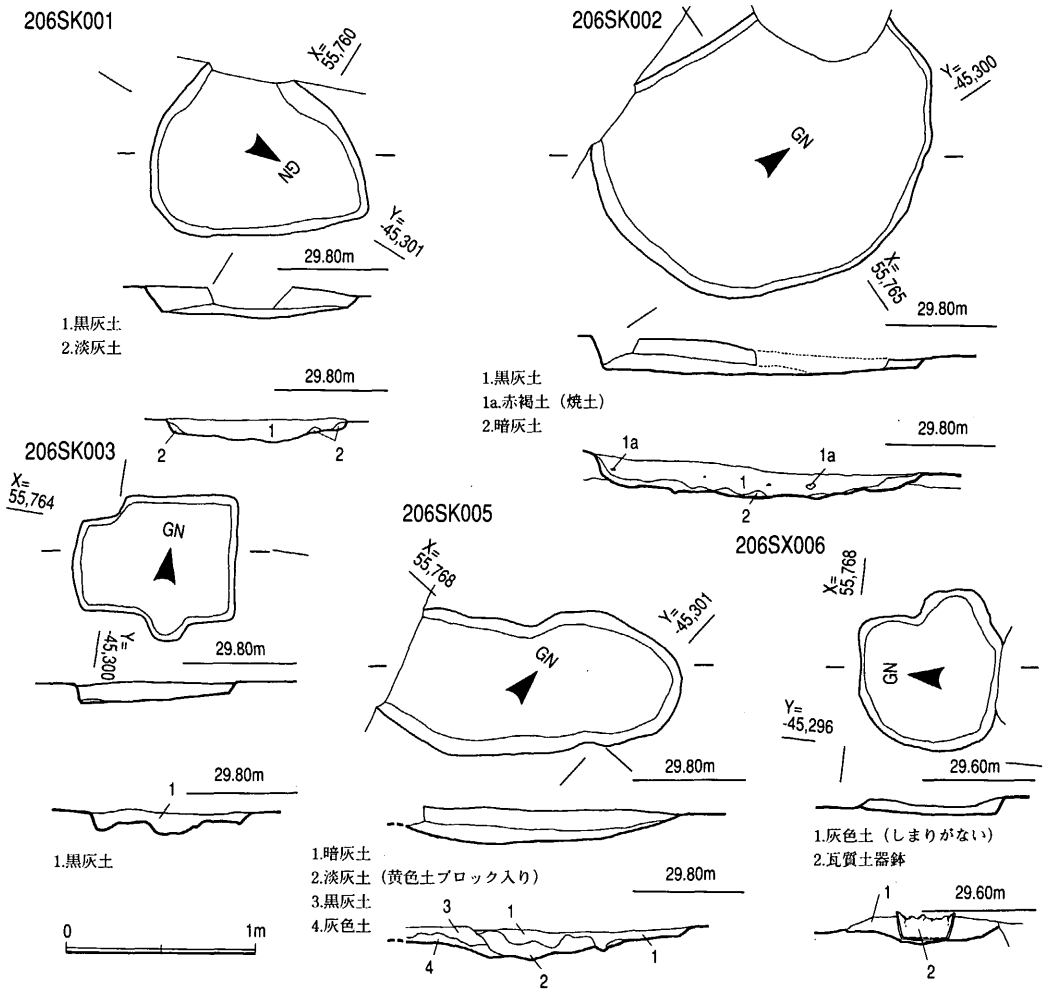


図161.土坑実測図（S=1/40）

測り、黒灰色土に覆われ、中央が若干窪む床面を呈す。西側に片寄って焼土塊が出土しいる。

206SK002（図161、写93下）

調査区の北西側に位置する。不整形な楕円形を呈する土坑で、長さ2.83m、幅0.92m、深さ0.2mを測り、大半が黒灰色土に覆われ、中央が若干窪む床面を呈す。206SK001に切られる。

206SK003（図161、写94上）

調査区の北西側、206SK002の南側に位置する。不整形な方形を呈する土坑で、長さ2.8m、幅0.9m、深さ0.4mを測り、黒色土に覆わる。

206SK005（図161、写94下）

調査区の北西側に位置する。不整形な楕円形を呈する土坑で、長さ2.8m、幅0.9m、深さ0.2mを測り、大半が暗灰色土に覆われ、中央が若干窪む床面を呈す。鋳型と焼土が出土しており、同じく焼土が出土した206SK001とともに鋳造に関連した廃棄土坑の可能性が考えられる。生産に関連する遺物に表土出土の炭状の付着物が見られる瓦片がある（図162、写95下）。

これら土坑群は出土遺物から9世紀の近しい時期に形成、埋没したものと考えられる。

2）その他の遺構

206SX006（図161、写95上）

調査区の北東側に位置する。不整形な円形を呈する土坑で、長さ0.8m、幅0.8m、深さ0.2mを測り、大半が灰色土に覆われ、中央が若干窪む床面を呈す。床面に据えられた形で瓦質の鉢が検出された（上半は削平により欠損）。

d.出土遺物

1）土坑出土遺物

206SK001出土遺物（図162）

須恵器

壷（3）　外面の上半部に斜め方向の平行する条線を残すタタキの痕跡があり、内面に当て具によると思われる窪みが見られる。高台らしい高まりが体部の延長の底部外側にあったらしい。灰色を呈す。

黒色土器

椀c（1・2）　丸みを持つ底部に高台が付けられる。2は角高台に近い。1は体部下半に屈曲がある。内面にミガキcが施される。A類。

206SK002出土遺物（図162）

黒色土器

椀（1）　下半に丸みを持つ体部を呈す。内面にミガキcが施される。A類。

206SK002黒灰土出土遺物（図162）

土師器

坏a（1）　黄褐色を呈し、底部は凹面を成しヘラ切りの痕跡を残す。

206SK005出土遺物（図162）

須恵器

坏a（1）　底部は平坦でナデの痕跡を残す。

黒色土器

椀c（2）　丸みを持つ底部に高台が付けられる。内面は残存状況が悪い。A類。

土製品

焼土塊（3）　表面が残存しておらず本来の状態は不明であるが、淡紅色を呈し部分的に多孔質である。

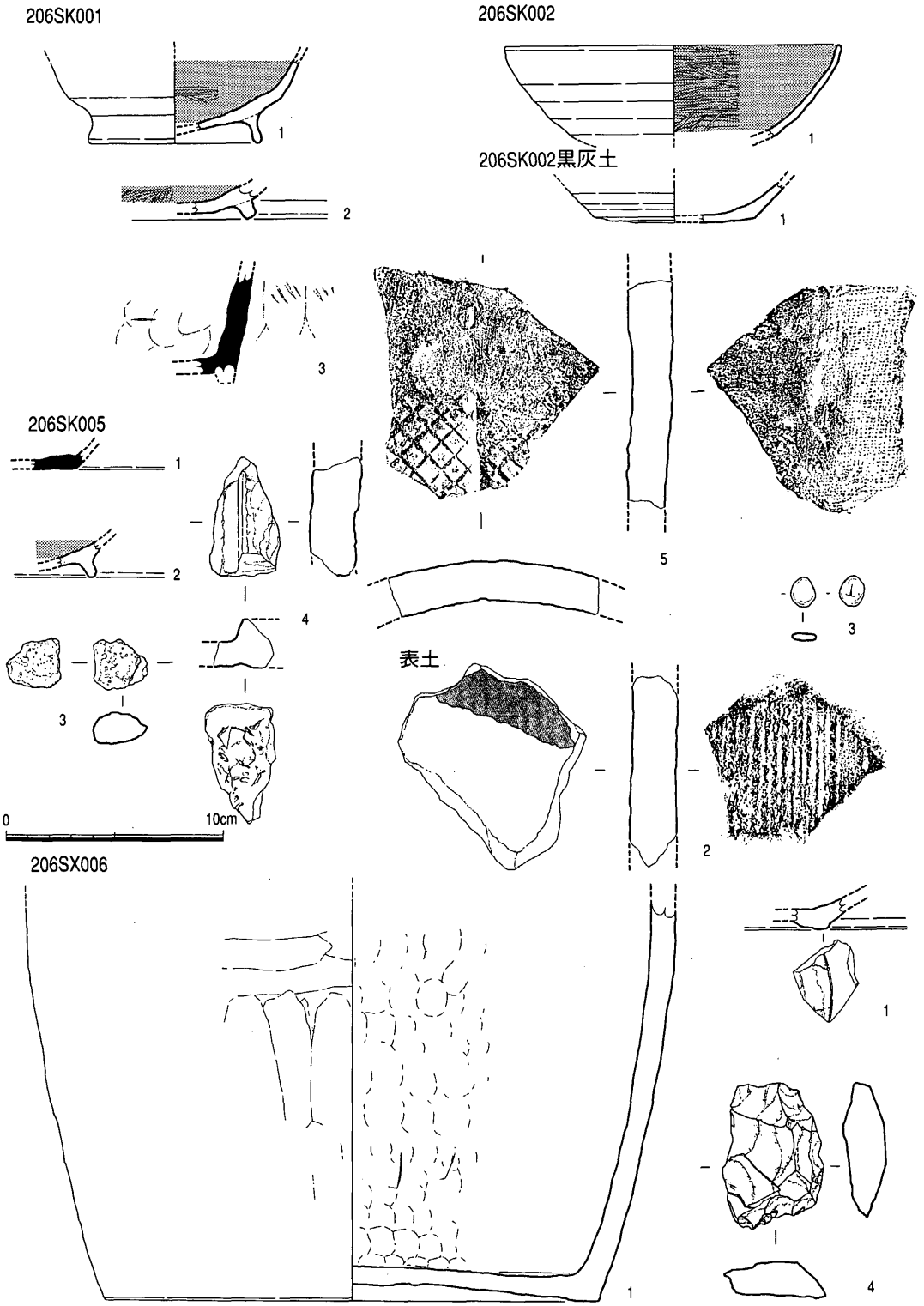


図162.出土遺物実測図（S=1/3）

鋳型（4）　約1cmの段差を持つ直線的な造形の鋳型で製品の形状は不明である。鋳込み面は細かな砂状の土で、裏面には植物繊維や稲籾の痕跡が見られる。

瓦

平瓦（5）　焼成は硬い須恵器質で凸面には正格子のタタキを持つ。

2）その他の遺構出土遺物

206SX006出土遺物（図162、写95下）

瓦質土器

鉢（1）　中央が持ち上がる底部に多少膨らみを持つ体部を持つ。外面にミガキが施される。底部には形成時の離れ砂が付着している。

3）土層出土遺物

表土出土遺物（図162、写95下）

越州窯系青磁

椀（1）　全面施釉のケズリ出し高台に目跡が見られる。I類。

瓦

平瓦（2）　赤褐色系の土師器質で凸面には縄目のタタキを持つ。凹面の表面には炭状の付着物が見られる。

石製品

碁石（3）　薄い緑色を呈す堆積岩でへん平な楕円形を呈す。

打製石器

二次加工を持つ剥片（4）　安山岩の横剥ぎの剥片の縁に二次加工を施す。多少風化が進行している。

e.小結

平安時代の遺構は調査区の北西側に片寄って検出された。遺構の残存度は耕作面形成時の削平によって浅く深いところでも20cm程度の残存となっている。小土器片に混じって206SK001からは焦土塊が西に偏って検出され、生産遺構に関わる可能性も考えられる。遺構が集中して検出された状況から同時期の遺構はさらに西に延びると見られる。

近世末から近代の土壙は自然堤防の方向に沿って南東から北西に列状に並び、一部に標識としての墓石を残し、中に慶應3年銘のものが見られた。また、基礎石にコンクリートが付着する物があることから近代を主体とする時期のものと判断している。断ち割りを206SX018と

206SX021でおこなったが棺の存在が確認できなかった。206SX004並びに206SX033では墓壙内に褐色の陶器甕が見られる。206SX006は瓦質鉢が平置されていた。

このことから、この場所は平安期以前に形成された自然堤防を基盤とし平安期には条坊の生活空間に取り込まれ、その後に耕作地化し（耕作時期は中世から近世の間で牛耕作が行われた時期があった)、近世末から近代には墳墓域となった経過が考えられる。

なお、今回の調査では近代以降と考えられる墓については基本的には調査対象外として取り扱った。（山村信榮）

Ⅳ.自然科学分析

今回分析を行ったのは、条坊跡120次調査にて検出した溝120SD020と土坑ならびに溝遺構と判断した120SK051・120SD061の三遺構にて抽出した土壌である。いずれも古環境を復原することを目的として分析を行った。特に120SK051については、遺物の出土がなかったため、性格を特定する手だてとして分析を行った。

また、条坊跡77次調査で検出した77SB100から出土している須恵器蓋内面に、記号様の朱書き部分が観察でき、この部分の成分分析を行った。

1.大宰府条坊跡第120次調査の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

a.はじめに

太宰府市は、福岡平野を南北に延びる三郡山地と、東西に延びる背振山地との会合部にあたる平野の南深部に位置する。河川は宝満山と天拝山とが迫るところで分水嶺となり、北は福岡平野、南は筑後平野へと流下する。北流する御笠川、鷺田川、大佐野川、牛頸川等の小河川が合流し、二級河川御笠山となり博多湾へそそいでいる（太宰府市教育委員会，1989)。今回分析調査を行う遺跡は、大宰府条坊跡である。

大宰府条坊遺跡では、古代大宰府の街割ともいえる条坊痕跡が南へ400mもの広がりをもって検出され、これまでに多くの遺構・遺物が検出された。今回は、古植生に関する情報を得る目的で、第120次調査で検出された土坑120SK051ならびに溝120SD061および溝120SD020を対象として花粉分析を行った。

なお、当時生産されていた食物のなかでも、稲は重要な作物のなかの一つであったと思われる。今回は、間接的ではあるが、当時の稲作に関する検討を行う目的で、イネ属同定についても合わせて行った。

b.試料

花粉分析は、当社に送付された試料全点（8点分）について行った。条坊遺跡の120SK051遺構は試料番号1、120SD061遺構は試料番号2・3、120SD020遺構は試料番号4～8にあたる（表4)。試料は、送付試料から必要量を抽出して分析に用いた。なお、参考資料からは各遺構の時代・時期について詳細を知ることができない。したがって、本報文中では各遺構とも古代の所産と仮定しておきたい。

c.分析方法

試料約10ｇについて、水酸化カリウム処理による試料の泥化および腐植酸の溶解、0.25mm

篩別による大型物質の除去、重液分離（臭化亜鉛：比重2.2）による有機物の濃集、弗化水素酸による鉱物質の溶解、アセトリシス処理（無水酢酸：氷酢酸＝9：1）によるセルロースの分解の順に行い、堆積物中から花粉化石を濃集した。

処理後の残渣の一部についてグリセリンで封入してプレパラートを作成し、その中に出現した全ての種類（Taxa）について同定・計数した。

結果を、木本花粉は木本花粉総数、草本花粉・シダ類胞子は総花粉・胞子数から不明花粉数を除いた数を基数とした百分率で出現率を算出し、花粉化石分布図を作成した。図表中で複数の種類をハイフォンで結んだものは、種類間の区別が困難なものである。

イネ属花粉化石同定は、プレパラート中に出現したイネ科花粉全てについて、イネ属と他のイネ科とに分類し、計数を行った。同定に関してはノマルスキー微分干渉装置もしくはプランアポクロマート100倍対物レンズ（油浸系）を使用し、中村（1974）、鈴木・中村（1977）の分類にしたがい、外膜の表面模様・発芽孔周辺の肥厚状況および花粉粒径などを基準として行った。

結果は、他の花粉分析結果と合わせて表示した。

d.結果

結果を表4に示す。以下に各地点毎の結果について述べる。

表4.花粉分析結果

遺跡名	条坊120次		
遺構名	120SK051	120SD061	
試料番号	1	2	3
木本花粉			
マツ属	-	9	-
コナラ属アカガシ亜属	-	2	-
クリ属	-	1	-
草本花粉			
イネ科	1	1103	-
ソバ属	-	1	-
アカザ科	-	3	-
ナデシコ科	-	1	-
アブラナ科	-	1	-
ヨモギ属	-	21	-
キク亜科	-	1	-
タンポポ亜科	-	2	-
シダ類胞子	1	7	16
木本花粉	0	12	0
草本花粉	1	1133	0
シダ類胞子	1	7	16
総花粉・胞子数	2	1152	16

ア）花粉組成

試料番号2・5・6・7からは花粉・胞子化石が検出されたが、他は保存が悪くほとんど検出されなかった。試料番号2の組成はほとんどがイネ科よりなり、その中には栽培種のイネの花粉が相当量含まれ、イネ科以外の花粉が極端に少ない。

試料番号5～7はほぼ同様な花粉化石群集組成を示す。木本花粉では、コナラ属アカガシ亜属が多産し、シイノキ属も比較的多い。また、マツ属

やコナラ亜属なども10%前後イネ科が多くその中にはイネ属も含まれている。また、ヨモギ属・セリ科・カヤツリグサ科などを伴っている。

イ）古植生について

1）試料番号1～3について

今回検出された試料番号2の組成は、ほとんどがイネ科の花粉よりなるという点で、これまで北九州地方で行われている花粉分析結果と比較して特異である。また栽培種であるイネ属に由来する花粉化石も相当量含まれている。遺構埋積物の特異な組成から局所的な植生や遺構埋積時の季節性について検討を行った例は、千葉県市原市の上総国分尼寺や（辻，1984）、奈良県奈良市の奈良女子大学構内遺跡（金原，1990）などがある。このような事例を考慮すると、試料番号2のイネ科花粉化石は局地的なもので、ごく近くに生育していた母植物に由来する可能性が高く、また短期間のうちに埋積したことが考えられる。このことから、120SD061遺構が埋積した古代当時、近くで稲作が行われていたと推測される。

なお、イネの花粉は籾中にも残存することが知られている（中村，1980）ことから、開花時でなくとも遺構内に稲籾が保存されていたり、籾穀が投棄されるなどして、花粉化石が遺構内にもたらされる可能性は十分に考えられる。堆積状況や遺物の出土状況等の吟味や、同一試料について植物珪酸体分析を行う必要もあるが、以上のことから、今回の花粉化石群集が季節性を反映している可能性は現段階では薄いといえる。他に栽培植物由来の花粉化石としてソバ属が検出されており、これも周辺で栽培されていたものに由来すると考えられる。

本調査で分析した他の試料中からは花粉化石がほとんど検出されなかった。この原因としては、好気的な環境下による酸化や微生物などの影響により花粉化石が分解してしまったことが考えられる。したがって、今回行った花粉分析の結果からは、古植生の復元に関する考察はできなかった。ただし、これまで当社にて行った佐野遺跡群や大宰府条坊跡の結果や北九州地域で行われてきた花粉分析結果をもとにすると（黒田・畑中，1979：三好・伊藤，1980）、当時周辺の山地を中心とし周辺の森林植生は、シイ・カシ類など照葉樹を中心とした暖温帯常緑広葉樹林（照葉樹林）であったと推測される。

2）試料番号4～8について

当時、山地を中心とした周辺の森林植生は、シイ・カシ類など照葉樹を中心とした暖温帯常緑広葉樹林（照葉樹林）であったと推測される。この他にも、マキ属・ヤマモモ属・アブラギリ属・サルスベリ属・アカメガシワ属・ツタ属といった暖温帯に分布の中心がある種類が検出され、これらも周囲の温暖帯林の構成要素となっていたのであろう。このような傾向は、九州北部にて行われた花粉分析結果（黒田・畑中，1979：三好・伊藤，1980）などでも同様に見ら

れる。

遺跡内など人手が加わった土地では、イネ科やヨモギなど開けた土地を好む草本類が多く生育し、いわゆる人里植物群落とよばれる草地が形成されていたと推測される。一方、イネ属やソバ属の花粉化石が検出されることから、周辺での稲作やソバ栽培が推測される。また、オモダカ属・ミズアオイ属・イボクサ属など水生植物の花粉化石の出現は、周囲での湿地の存在が示唆される。さらに、これらは遺跡周辺で行われていたと思われる水田に、いわゆる水田雑草として生育していた可能性も考えられる。

e.まとめ

大宰府が置かれていた奈良・平安時代における山地を中心とした周辺の森林植生は、シイ・カシ類など照葉樹を中心とした暖温帯常緑広葉樹林（照葉樹林）であったと推測される。また、人手が加わった低地部では草地となり、そこでは、稲作やソバ栽培が行われていたと推測される。

文献

太宰府市教育委員会（1989）「はじめに」『太宰府・佐野遺跡群Ⅰ　－向佐野・原口遺跡－』太宰府市の文化財　第14集 pp.2-6.

金原正明（1990）「遺跡における植物遺体分析について－堆積物の季節性など－」『日本文化財科学会第7会回大会研究発表要旨集』pp.22-23.

黒田登美雄・畑中健一（1979）「花粉分析よりみた北九州の過去2万年間の植生変遷」『花粉　13』pp.3-8.

三好教夫・伊藤秀三（1980）「雲仙・原生沼の花粉分析」『雲仙・原生沼の研究』pp.19-28. 長崎県環境部.

中村　純（1980）「花粉分析による稲作史の研究」『自然科学の手法による遺跡・古文化財等の研究－総括報告書－』pp.185-204　文部省科学研究費特定研究「古文化財」総括班.

辻　誠一郎（1984）「井戸内埋積物の季節性」『古文化財の自然科学的研究』pp.492-493　同朋社.

鈴木功夫・中村　純（1977）「イネ科花粉の堆積に関する基礎的研究」『文部省科研特定研. 古文化財. 稲作の起源と伝播に関する花粉分析学的研究－中間報告－（中村純編）』pp.1-10.

2.条坊跡77次調査出土須恵器蓋に用いられた朱の成分分析

a.はじめに

条坊跡77次調査にて出土した須恵器蓋の天井部内面に、意味不明ながら朱書きによる記号が確認できた。この朱の化学組成がどのような元素によって構成されているのか、端的に述べれば水銀朱であるのか、ベンガラであるのかの同定を試みた。

b.分析作業

分析作業は、大宰府史跡第170次調査報告時に実施した、エネルギー分散型蛍光X線分析による化学組成同定法を行った。具体的な方法に関しては、報告書を御参照いただきたい（太宰府市教育委員会、1997）。なお分析を実施した個体は以下に記載したものである（巻頭図版）。

①77SB100出土須恵器・蓋【R-004】

分析点については、巻頭図版に記載した点を行った。胎土部分２ヶ所、朱部分３ヶ所、計５ヶ所を分析点として選択した。

c.分析結果

分析を行った結果、胎土に一般的に含有される元素が検出できた（表５）。胎土組成を定量する方法にて、分析点における元素の定量値を求めた。定量方法については、地質調査所作成の花崗閃緑岩（JG2）を標準試料として、そのX線強度からの相対値で計算している。これは胎土組成と朱部分の化学組成に何らかの差異が見出せるのかという目的にのみ使用できるものであり、この値が分析試料全体の化学組成ではないことを注意していただきたい。

分析点個々の定量値を、表５に記載した。結果として朱部分の鉄含有量が胎土部分よりもわずかに高い傾向がある。また水銀の含有は全く見られないことから水銀朱の可能性は否定できる。ただし、鉄含有量が胎土部分と朱部分では、小数点以下による違いであることから、ベンガラの可能性はあるものの、特定までには至っていない。鉱物組成・顕微鏡観察など別分析による特定が必要なのかもしれない。（中島恒次郎）

文献

太宰府市教育委員会（1997）『大宰府史跡』

表５.赤顔料付着箇所分析結果

elememts＼sample - No	J7701001	J7701002	J7701003	J7701004	J7701005
SiO2	61.1794	60.3895	60.3936	59.5825	59.3680
TiO2	1.2403	1.2883	1.3389	1.4333	1.5549
Al2O3	28.4651	28.9806	28.0991	28.6516	27.6812
Fe2O3	2.3988	2.3017	2.9138	2.9775	3.2232
MnO	0.0249	0.0375	0.0761	0.0440	0.1246
MgO	1.6463	1.8200	1.6578	1.5713	2.0512
CaO	0.4458	0.4206	0.3960	0.5524	0.4363
Na2O	2.9360	3.2518	3.2623	3.2559	3.6262
K2O	1.5775	1.3872	1.7685	1.8386	1.7831
P2O5	0.0860	0.1227	0.0939	0.0928	0.1513
total	100.0001	99.9999	100.0000	99.9999	100.0000

Ⅴ.調査成果と課題

1.「市推定地」の調査

a.「市推定地」に関わる課題

大宰府条坊の存在が鏡山猛によって想定され、条坊の存否についての議論は終止符を打たれ、今や敷設時期とそれぞれの規模、条坊域内における土地利用状況の整理に焦点は移りつつある。これまでの条坊に関わる学史は、狭川真一によって整理されており、ここで改めて整理することは避ける（狭川、1998)。ここでは、今回報告した字「市ノ上」周辺における調査結果をまとめることで浮かび上がる、この地域の条坊域内での特異性を明らかにし、大宰府条坊域における「市」の存在について想定してみたい。

都における「市」に関する研究は、池田裕英がまとめたように、その推定地から機能面まで多くの業績が積み重ねられている（池田、1997)。一方地方における「市」に関する研究は、栄原永遠男が説くように国府における物資集散を考えた場合、十分想定可能であるとされている（栄原、1992)。しかし、考古事象上でどのように理解し、地方における「市」に関する根拠は何かという整理はなされていないことから、具体的に「市」発見に関わる報告は見あたらない。大宰府における「市」に関しても、旧字名からの推定で今回報告した字「市ノ上」の地に、大宰府条坊内における「市」が暗黙の中で推定されてきた。その推定地が大宰府条坊域の右郭にあたることから「西市」にあたるものと考えられるが、考古事象上での確認が待たれるところであった。

今回報告してきた地域が、字「市ノ上」に該当し、都の研究成果に導かれながら、「市」に関わる考古事象について考えてみたい。まず、都での「市」推定に関わる要素について、以下に記してみる。

ア.物資運搬のための交通路

イ.物資集散を物語る物証

ウ.市管理のための施設

エ.付帯事項としての生産工房

これら各要素について、今回報告した調査内容で、どこまで検証可能かについて検討を加えてみる。

b.物資集散を物語る物証

搬入食器

搬入食器については、都城系土師器・緑釉陶器・筑後産土師器甕などがあり、都城系土師器については、条坊跡154次、194次にて微量に出土していることもあり、当時の食器組成上から

は、客体的なものと考えられる。それに対し、緑釉陶器ならびに筑後産土師器甕は、条坊跡120次、154次にて散見するようにみられ、一定量の搬入量が想定できる。緑釉陶器に関しては、調査遺跡呼称が条坊になる前に用いられた「市ノ上遺跡」からも緑釉緑彩の蓋や東海産と考えられる透かし彫りのある香炉蓋など条坊域でも特異な製品が出土している。また筑後産土師器甕は、胎土中に角閃石を多く含むものの製作技法上は筑前産土師器甕と相似ていることから、条坊域内でも散見される。この筑後産土師器甕が、条坊域内においては散見されるが、今回報告した条坊跡120次・154次調査地において多く出土しており、内容物を運搬対象にしたのか、甕を運搬対象としたのかは、甕自体の持つ特性は、筑前形甕と何ら変わりがないことを考慮すると、前者である可能性が高い。また筑後形甕の搬入は、大宰府IB期から少量確認でき、今後は、単なる「持ち込み」から内容物搬入を目的とした流通材としての変化をつかむために、時期による量の変化を追う必要がある。

以上が国産食器についての出土状況であるが、国外産食器の流入についても、条坊域内では早い時期から使用されていたことがうかがえる。特に条坊跡154次調査にて出土した越州窯系青磁水注は、平安京I新段階の土師器椀と一緒に出土しており、都での使用が一般的ではなかった頃からの搬入例として注目できる。また、条坊跡194次調査地で、西日本各地でも出土例が稀少なイスラム陶器の破片が出土したことは、溝出土資料という原位置保持に不安定要素を認めざるを得ないながら、周辺においてこのような食器を搬入する要因があったことは看取できる。このように条坊域での搬入食器の出土状況では、特異な状況がうかがえる。

木製人形

報告文において記載してきたように、条坊跡120次調査検出の溝120SD030から木製人形が出土した。このような事例は、長岡京で2例、平安京で1例確認されている（(財）向日市埋文センター、1997。(財）長岡京市埋文センター、1998。(財）京都市埋文研究所、1988)。平安京例については、西市推定地にあたっているが、長岡京の例については、京域内にあたるのみで、性格は市に相当するものではない。120SD030出土の木製人形の用途については、当初、形代としての人形を想定していた。溝内にて出土したこともあり、形代の可能性を考えたが、長岡京の例および平安京の例に見るように、官人を写実的に表現していること、ならびに奈良期に一般的な板状の人形とは形態が異なっていることから、民俗例として福岡県築上郡吉富町に残る傀儡子舞に使用されるような人形の可能性も残されている（山路、1991)。

このような木製人形を集成し、用途について解釈を試みた中島信親の指摘にあるように、用途を出土状況ならびに形態から導き出すことは容易ではない（中島、1997)。遺物に残された使用痕跡の観察、出土地の集成、形態の分類など何らかの共通性を見出すことによって解決を図る必要がある。

c.物資運搬のための交通路

「運河」の推定

これまで、推定条坊域内から検出された条坊痕跡は、埋没時期にして様々な時期のものが確認されてきている。しかし条坊痕跡として確認される道路側溝の規模は、幅にして約1.0m前後に収まっている。今回報告してきた遺構の中で、条坊痕跡として考えられるものには以下のものがある。

120SD020・120SD058・120SD073・120SD059・154SD075・194SD001

調査条件から全体規模が判然としない154SD075は除外すると、120SD058・120SD059・120SD073は、従来検出されてきた条坊痕跡としての道路側溝の規模と同等規模であり、なんら特異性は看取できない。しかし、残りの120SD020および194SD001は、その走向からみて同一の溝であるばかりでなく、120SD020は最大幅約5.0mを測り、194SD001に至っては、幅約7.0mを測る。このような例は、条坊域内では今のところ検出例がなく、大宰府政庁に近い、史跡76次SD320や史跡85次をはじめとするSD2340などが検出されている。いずれも幅5.0m～10.0mを測り、単なる区画溝とするには大規模な印象を受ける。これら政庁周辺で確認される大規模な溝の性格については、府庁域を画する溝など様々な意見が出されており、今後性格付与について議論していく必要があるが、今回報告した溝についても単に道路を区画するのみの性格では理解できない規模を有している。特に120SD020については、調査区南部では二条の溝遺構に変化するが、北部では幅約5.0mの河川とでもいえる形状を有し、堆積物についても、一定の流速を想定し得る砂や、フルートマークと解せる堆積構造（地学団体研究会、1983）が観察でき、明らかに遺構内を水が移動していたことがうかがえる。したがって、単なる道路区画の溝ではなく、規模からみて適語が見出せないが人工的に造られた「河川」と考えられる。同じような状況は、194SD001にも見られ、194次例については、120次例に比べ規模が大きくなっている。120次調査所見からは、調査区南側で二条の溝へと移行していたため、このまま道路へと移行してゆくものと考えていたが、条194次調査およびその南に所在し筑紫野市教育委員会によって調査がなされた大宰府条坊跡192次調査にも延伸しており、南にも大規模な溝が存在するということが分かった。したがってこの条120次検出の溝と条194・192次検出の溝を結ぶ遺構の状況解明が必要となってきた。問題は残しているものの、検出幅5.0m～7.0m超の大規模な溝の持つ意味を考えた場合、平城京における市への運河と考えられる東堀河の検出幅が約6.0m～10.0mを測ることを考えれば、大宰府における「市」への運河とも解せなくはない（奈良国立文化財研究所、1976・1983）。今後「運河」認定のための考古事象を整理し、調査を行っていく必要がある。

陸路（官道）

条坊西域には、水城西門から南東方向に抜ける官道が推定されている。水城西門周辺および現在のところ大宰府条坊右郭十五・十六条十二坊にあたる条坊99次調査地にて、この官道と考えられる遺構の延長部分を検出している。したがって、鴻臚館から大宰府への陸路である官道が、今回報告した「市ノ上」周辺調査区の西を近距離で通過していることになる。筆者自身残存地形調査で周辺を調査した際、官道推定地まで約10分程度で歩くことができ、陸路使用の場合でも極めて利便性の高い位置にあるといえる。

d.市管理のための施設

建物

今回報告した調査成果の内、条坊跡194次および調査面積が狭小であった条坊跡206次を除く、4調査区で掘立柱建物が検出され、奈良期前半および奈良期中頃の二時期に建造時期の上限を置くことのできるものであった。規模については、いずれも掘立柱建物で、柱根石を埋置したものがあり、総柱の建物、庇を有する建物など、様々な形態を持って建造されていた。その配置については、今一つ判然としないが、条坊跡154次調査では、自然河川を埋め立てての建物造営など、宅地としての造成事業の規模の大きさを見ることができる。今回報告できなかったが、条坊跡120次調査地の東に隣接する条坊跡95次調査地でも奈良期の掘立柱建物が検出されており、ここからは「租」とヘラ描きされた土師器杯なども出土している。この食器の用途については、今後検討していく必要がある。筑紫野市教育委員会によって調査がなされた条坊跡86次調査を含めると、旧字名「市ノ上」周辺においては、建物が多く建造されていたものと考えられる。これらの建物が、「市」管理のための施設かどうかについては、別視点からの検討が必要となり、今回の不十分な検討からは即断し難い。

e.付帯事項としての工房

平城京西市に近接して、生産工房が検出されている（大和郡山市教委、1994）。この生産集団の背景については、「私工房」とするのか「官営工房」とするのか議論が分かれるところであるが、市周辺に工房が存在していた事実のみを捉えるならば、「市」の持つ物資ならびに人々の集散を考慮することで、工房の存在理由の一つは理解できる。ところで大宰府ではどうであろうか。今回報告した地域において、直接的に工房をうかがわせる遺構の検出はなかった。しかし条坊跡154次調査地から、漆付着食器、鞴羽口、坩堝など生産行為を想定させ得る遺物の出土があった。これらの遺物は、出土分布（図166）を見る限り、原位置不安定ながら溝154SD050からの出土と調査区南西部に隔たって出土している。南西部には掘立柱建物および井戸があり、これら建物および付帯する井戸周辺に散在していたものと考えられる。溝

154SD050からの出土は、上流からの流れ込みも想定でき、この調査区内に使用箇所を限定するには不安定な要素が強い。これに対し、調査区南西部に出土しているこれら生産用具は、調査区内にて使用ないしは保管、廃棄された可能性もある。いずれにしても直接的な生産遺構が検出できていない現状からは、生産工房を積極的に裏付ける物証に乏しいのが現状である。今後この条坊跡154次調査地周辺の調査の進展に委ねるしかない。

2.まとめ

考古事象から見た、「市ノ上」周辺の特異性を記述してきた。この特異性が等しく「市」に直結するとは考えていない。

まず条坊域内での他の地域と比較した場合、出土遺物、建物などはさほど大差ないようにも見える。あえて特筆するならば、木製人形の出土および「運河」を想定できる溝120SD020、194SD001など大規模な溝遺構を検出した点が上げられる。この大規模な溝遺構は、条坊跡194次以南にも伸びており、どこへ向けての溝であったのかが今後の課題といえる。丘陵の標高差および条坊跡120SD020の堆積土観察から導き出される北進する古流向から考えると、調査地北側にある鷺田川へ流れ込む溝であったことは想定可能である。この溝が博多湾から遡り鷺田川を南進してくる物資を取り込む文字通り「運河」の役割を担っていたと解することも可能となるが、これら物資を取り込む先に「市」が存在していたのかどうかは検討を要する課題である。

また字名「市ノ上」が等しく「市」ではなく、「市」の北方、政庁の存在する方向を上と見た場合に、「市」の上方という意味であったとも解せる。これは、南北に伸びる溝120SD020および194SD001から木製人形、イスラム陶器など出土事例が稀少な遺物が出土したことや、これら溝の古流向が南から北の方向であったことを考えると、あながち推定ともいえないと考えられる。

以上調査成果の羅列に終始し、推測の域を脱し得ないものとなった。これら推測を確定へと移行させるためには、今後の調査成果の集積と公表によって明らかにすべきものと考える。

文献

（財）京都市埋蔵文化財研究所（1988）『昭和60年度　京都市埋蔵文化財調査概要』

中島信親（1997）「6.まとめ」『向日市埋蔵文化財調査報告書　第45集』（財）向日市埋蔵文化財センター・向日市教育委員会

（財）長岡京市埋蔵文化財センター（1998）『長岡京市埋蔵文化財センター年報　平成8年度』

地学団体研究会（1983）『堆積物の研究法』

奈良国立文化財研究所編（1976）『平城京左京八条三坊発掘調査概報』

奈良国立文化財研究所編（1983）『平城京東堀河』

山路興造（1991）「古表神社の傀儡舞」『大系　日本歴史と芸能』

栄原永遠男（1992）『奈良時代流通経済史の研究』

池田裕英（1997）「平城京東市に関する覚書」『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要』

大和郡山市教育委員会（1994）『平城京右京八条一坊十三・十四坪発掘調査報告』

狭川真一（1998）「I.大宰府条坊跡調査研究履歴」『大宰府条坊跡　X』

付　表

1.遺構番号一覧

2.出土遺物一覧

3.遺物計測表・遺物観察表

4.遺構略測図

（遺物計測にあたっての計測点は、以下の文献を御参照いただきたい。）
太宰府市教育委員会（1996）『大宰府条坊跡　IX』

表6.大宰府条坊跡　77次調査 遺構一覧（1）

S-番号	遺構番号	種　　別	地区
1		窪み	D3
2	77SB045a	ピット	E2
3	77SA125b	ピット（柱穴？）	E2
4	77SB045b	ピット	E2
5		竪穴住居	K8
6		柱穴	D2
7		柱穴？	E3
8		ピット	D3
9		ピット	D3
10	77SB010	掘立柱建物　a~i	J6
11	77SB045e	ピット	E3
12		ピット	E3
13	77SB045f	ピット	E3
14	77SB045g	ピット	D3
15		柱穴	E8
16	77SB045h	ピット	D3
17			C3
18	77SB040c		C3
19	77SB040b	8c中	C3
20	77SB085g	ピット　7c末~8c	F5
21			E3
22			E4
23	77SB045j	ピット	E4
24	77SB045j	ピット	E4
25		土坑	H4
26	77SB045k	ピット	D4
27	77SB045l	ピット	D4
28		ピット	D4
29		ピット	K11
30		土壙　8c中	I4
31	77SB060f	柱穴	H11
32		ピット	H11
33		ピット	E7
34		ピット	C10
35		土壙　8c中	I4
36		ピット	C6
37		ピット	D7
38	77SB280e	ピット	E6
39	77SB280h	ピット	E7
40	77SB040	掘立柱建物　a~f（S-18.19.46.53）	
41		窪み	D8
42		窪み	D8
43		窪み	D8

表7.大宰府条坊跡　77次調査 遺構一覧（2）

S-番号	遺構番号	種　　別	地区
44		ピット	B3
45	77SB045	掘立柱建物　a~l（S-2.4.11.13.14.16.23.24.26.27）	
46	77SB040d	ピット	C3
47		ピット	C2
48		ピット	C2
49		ピット	C3
50	77SB050	掘立柱建物　a~p　7c末~8c前	K4
51		ピット	C5
52		ピット	B5
53	77SB040f	ピット	B4
54		ピット	B4
55		溝	D2
56		ピット	F10
57		ピット	F9
58	77SB280a	柱穴	F6
59		柱穴	G7
60	77SB060	掘立柱建物　a~h（S-31）	J10
61	77SB085e	ピット	F4
62		ピット	H3
63	77SB085f	ピット	F4
64	77SB080d	柱穴	F4
65	77SK065	土壙　S-96と同一　9c？	G1
66	77SB085d	ピット	F3
67	77SB080c	柱穴	F3
68		ピット	F3
69	77SB085c	柱穴	F3
70		窪み	F2
71		ピット	F2
72		柱穴	F3
73		ピット	G3
74		ピット	G3
75		窪み	I3
76		ピット	G3
77	77SB085a	ピット	G3
78	77SB080g	ピット	G4
79		ピット	G5
80	77SB080	掘立柱建物　a~h（S-64.67.78.81.83.252）	
81	77SB080h	柱穴	G4
82	77SA095e	ピット	G4
83	77SB080a	ピット	G3
84		ピット	G3
85	77SB085	掘立柱建物　a~l（S-20.61.63.69.77.253）	
86	77SA095d	ピット　8c	G3

表8.大宰府条坊跡　77次調査 遺構一覧（3）

S-番号	遺構番号	種　　別	地区
87		ピット	G3
88	77SB120g	ピット	H3
89		ピット	H3
90	77SB090	掘立柱建物　a～k（S-91.101.131.154.162.171.178.215.222.257）	
91	77SB090c	柱穴	H3
92		ピット	G2
93		ピット	G2
94		ピット	G2
95	77SA095	柵列　a～j（S-82.86.108.114.192.229.241）	G2
96	77SK065	土壙　S-65と同一	
97	77SA125a	ピット	G2
98	77SB120e	ピット	H2
99	77SB120e	ピット	H2
100	77SB100	掘立柱建物　a～n（S-107.126.137.151.159.161.164.191.207.209.211.218）	
101	77SB090b	柱穴	H2
102		ピット	H2
103	77SB110e	ピット	H2
104		ピット	H2
105		ピット（土壙？）	H2
106		ピット	H3
107	77SB100f	ピット	H3
108	77SA095h	柱穴	I4
109		柱穴	I4
110	77SB110	掘立柱建物　a～j（S-103.129.156.176.188.208.217）	
111		柱穴	H4
112		ピット	I4
113		ピット	I4
114	77SA095i	ピット	I4
116		ピット　8c	G2
117		ピット	G2
118	77SB120f	ピット	H2
119		ピット	H2
120	77SB120	掘立柱建物　a～l（S-88.98.99.118.124.128.138.139.153.158.173.177）	H2
121		ピット	H2
122		ピット　8c	I2
123		ピット　8c	I2
124	77SB120c	ピット	I2
125	77SA125	柵列　a～d（S-3.97.206）	I2
126	77SB100n	ピット	I2
127		ピット	H3
128	77SB120i	ピット	I3
129	77SB110g	ピット	I3
130	77SA125	柵列　a～f（S-199.202.203.232.236.251）	I2
131	77SB090e	ピット	I2

表9.大宰府条坊跡　77次調査 遺構一覧（4）

S-番号	遺構番号	種　　別	地区
132		ピット	I2
133		ピット	I3
134		ピット	I2
136		ピット	I2
137	77SB100m	ピット	I2
138	77SB120b	ピット	I2
139	77SB120j	ピット	I3
141		落ち	F4
142		ピット	E3
143		溝	F2
144		溝	J11
146		土壙	J11
147		ピット	H7
148		ピット	I2
149		ピット	I2
151	77SB100i	ピット	I3
152		ピット	J2
153	77SB120l	ピット	J2
154	77SB090f	ピット　8c中～	J2
156	77SB110i	ピット	J2
157		ピット	J3
158	77SB120k	ピット　8c中～	J3
159	77SB100k	ピット	J2
161	77SB100l	ピット	J2
162	77SB090h	ピット	J2
163		ピット	J2
164	77SB100j	ピット	J3
166	77SX166	溜まり状遺構 050a→182→166	L4
167		ピット	J3
168		ピット	J3
169		ピット	J3
171	77SB090g	ピット	J2
172		ピット	F2
173	77SB120d	ピット	H2
174		ピット	H2
176	77SB110j	ピット	J2
177	77SB120a	ピット	J2
178	77SB090j	ピット	J2
179		ピット	J2
181		ピット	K2
182	77SX182	溜まり状遺構 050a→182→166	L4
183		ピット	L5
184		ピット	L4

表10.大宰府条坊跡　77次調査 遺構一覧（5）

S-番号	遺構番号	種　　別	地区
186		ピット	K2
187		ピット	J4
188	77SB110f	ピット	H3
189		土壙	H3
191	77SB100g	ピット	H3
192	77SA095g	ピット	H4
193		ピット	
194		ピット	I11
196		ピット	E4
197		土壙	K3
198		ピット	E3
199	77SA130e	柱穴	D2
201		ピット	C2
202	77SA130c	ピット	E2
203	77SA130b	ピット	F2
204		ピット	G1
205		ピット	G2
206	77SA125b	ピット	F2
207	77SB100d	ピット	H1
208	77SB110d	ピット	H1
209	77SB100c	ピット	I1
211	77SB100h	ピット	I3
212		ピット	J2
213		ピット	I1
214		ピット	I1
215	77SB090k	ピット	J1
216		ピット	J1
217	77SB110a	柱穴	J1
218	77SB100a	柱穴	J1
219		ピット	J1
221		ピット	J1
222	77SB090i	ピット	J1
223		ピット	J1
224		ピット	K1
225		ピット	K1
226		ピット	K1
227		ピット	K1
228		溝	K1
229	77SA095j	柱穴	J4
231			L5
232	77SA130d	ピット	D2
233		ピット	D2
234			E2

表11.大宰府条坊跡　77次調査 遺構一覧（6）

S-番号	遺構番号	種　　別	地区
236	77SA130c	ピット	
237		ピット	G2
238		ピット	H3
239		ピット	H3
241	77SA095a	ピット	G1
242		ピット	J1
243		ピット	J2
244		ピット	K1
246		ピット	K1
247		ピット	J4
248		ピット	E5
249		土壙　　249→35	H3
251	77SA130a	ピット　　143→251	F2
252	77SB080b	ピット群	G3
253	77SB085j	ピット	G5
254		ピット	L3
256		ピット	F1
257	77SB090a	ピット群	H1
280	77SB280	掘立柱建物　a～i（S-38.39.58）	

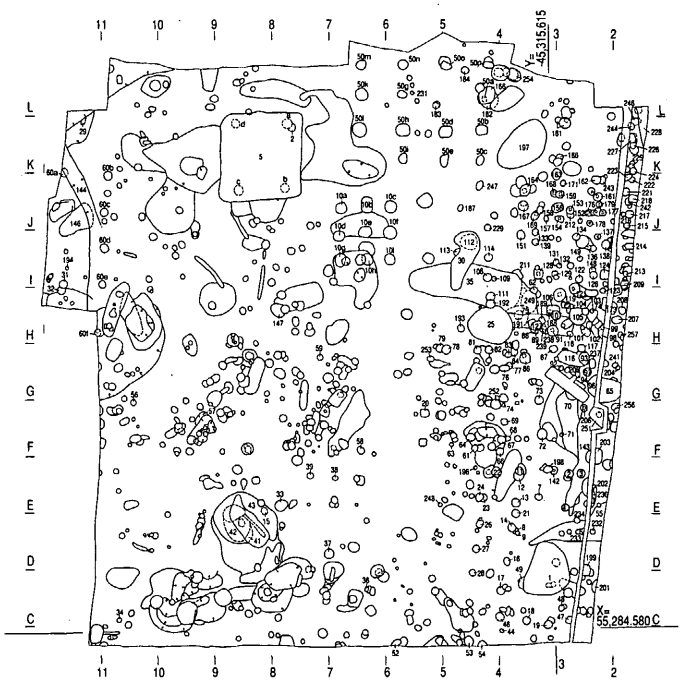


図163.条77次遺構略測図

表12.77次　遺物一覧表（1）

S-1

須	恵 器	坏a、坏c3、甕、高坏、蓋3
土	師 器	坏c、坏d、甕、蓋3
瓦	類	平瓦縄目叩

S-2

須	恵 器	坏、蓋3
土	師 器	坏、甕

S-2南ピット

須	恵 器	壷

S-3

須	恵 器	蓋、甕
土	師 器	蓋、甕

S-1、2、3、

須	恵 器	坏
土	師 器	甕

S-5

須	恵 器	破片
土	師 器	甕

S-5竈内

須	恵 器	坏c3
土	師 器	甕

S-5竈粘土下面

須	恵 器	高坏
土	師 器	高坏

S-5竈ピット下層

須	恵 器	坏
土	師 器	甕
瓦	類	丸瓦無文

S-6

須	恵 器	坏
土	師 器	坏蓋3

S-7

土	師 器	甕

S-10 g～i

土	師 器	破片

S-11

土	師 器	坏×、甕×

S-12

須	恵 器	破片
土	師 器	蓋4、甕
製 塩 土	器	破片

S-13

土	師 器	破片

S-14

須	恵 器	蓋3
土	師 器	甕

S-16

須	恵 器	鉢b

S-17

須	恵 器	蓋3
土	師 器	大坏（S-18と同一か？）、甕

S-18

土	師 器	大坏（S-17と同一か？）

S-19

須	恵 器	蓋3
土	師 器	坏（漆付着）、甕

S-20

須	恵 器	壷

S-20柱痕

土	師 器	坏

S-21

土	師 器	坏片

S-22

須	恵 器	坏、甕
土	師 器	坏×、甕

S-22（西）

須	恵 器	坏
土	師 器	甕
石	製 品	碁石

S-24

須	恵 器	坏
土	師 器	坏

S-25

須	恵 器	坏c4、蓋3、高坏、壷
土	師 器	坏a、坏c、Ⅲ、甕、脚付鉢、蓋
越州窯系青磁		椀；I(1)
		坏；I(1)
白	磁	椀；I(1)
瓦	類	平瓦

S-26

須	恵 器	坏、甕
土	師 器	甕

S-27

土	師 器	坏
土	製 品	土玉

表13.77次　遺物一覧表（2）

S-28

須恵器	皿
土師器	甕

S-29

土師器	坏×

S-30

須恵器	坏a、坏c3、坏c4、蓋3、壺
土師器	坏a、皿、甕、蓋3、蓋c
土製品	焼土塊

S-31

須恵器	坏a
土師器	坏×、甕

S-32

須恵器	坏a、蓋3、甕片
土師器	坏c4
瓦類	平瓦縄目叩

S-33

須恵器	坏×
土師器	破片

S-35

須恵器	坏c1、坏c3、蓋c、蓋1、蓋3、甕
土師器	坏c、坏c4、蓋c、甕
土製品	メンコ

S-36

須恵器	蓋3
土師器	破片

S-37

土師器	大坏c、甕

S-38

土師器	破片

S-39

土師器	甕×
石製品	ob-鏃（2）

S-40

土師器	破片

S-44

須恵器	坏

S-46

須恵器	坏
土師器	破片

S-4 7

須恵器	甕
土師器	甕

S-48

土師器	坏a、甕

S-50a

土師器	甕

S-50b

須恵器	鉢a×
土師器	甕片

S-50c

土師器	甕

S-50d

須恵器	蓋1
土師器	甕

S-50e

土師器	甕

S-50g

須恵器	蓋3

S-50h

土師器	破片

S-50j

須恵器	坏蓋×

S-50k

須恵器	坏、坏a、甕
土師器	小甕

S-50l

須恵器	坏片、鉢a×

S-50m

土師器	坏×、甕

S-51

土師器	甕

S-52

須恵器	蓋3
土師器	甕

S-54

土師器	坏×

S-55

須恵器	坏、坏c4、壺

表14.77次　遺物一覧表（3）

S-56

土師器	甕

S-57

石製品	円礫

S-58

土師器	甕片

S-59

土師器	甕片

S-60b

土師器	甕×

S-60c

須恵器	破片
土師器	坏、甕

S-60d

土師器	甕片

S-60e

須恵器	坏×、坏c3、蓋3
土師器	甕

S-60f

土師器	坏

S-61

須恵器	坏、蓋3、壺×
土師器	皿×、甕、破片

S-63

土師器	甕、破片

S-64

須恵器	蓋3

S-65

須恵器	坏蓋、坏蓋3、皿、壺、甕、長頸壺
土師器	坏a、坏c（ヘラ描き「本」）、坏d、蓋3、鉢、甕
黒色土器A	坏×、坏c

S-66

須恵器	甕
土師器	甕

S-67

土師器	破片

S-68

土師器	甕

S-69

須恵器	壺×、破片
土師器	甕

S-70

須恵器	破片
土師器	甕

S-71

土師器	甕片

S-72

須恵器	甕片

S-73

須恵器	蓋3、甕
土師器	甕

S-74

土師器	坏a、甕
瓦類	平瓦 縄目叩

S-75

土師器	甕

S-76

土師器	坏、甕
黒色土器A	坏
瓦類	平瓦無文

S-77

土師器	破片

S-78

土師器	坏、破片

S-79

土師器	蓋3×

S-81

土師器	蓋×

S-82

須恵器	蓋4

S-83

土師器	皿、甕

S-84

須恵器	坏c3、蓋3、甕
土師器	破片

S-86

須恵器	坏、甕、破片
土師器	甕

S-87

須恵器	甕
土師器	破片

表15.77次　遺物一覧表（4）

S-88

土	師 器	坏

S-89

須	恵 器	蓋1×、甕

S-91

須	恵 器	坏c
土	師 器	甕

S-92

須	恵 器	坏、鉢b
土	師 器	坏、甕

S-93

須	恵 器	坏a、甕
黒色土器A		椀×

S-93東ピット

土	師 器	坏a×

S-94

土	師 器	坏a、鉢b×

S-96

須	恵 器	坏a、蓋3
土	師 器	坏a、坏c、皿、甕

S-97

須	恵 器	坏
土	師 器	皿、高坏、甕

S-98

須	恵 器	坏、破片
土	師 器	甕
瓦	類	丸瓦縄目叩

S-99

須	恵 器	甕片
土	師 器	破片

S-101

須	恵 器	坏×、蓋3
土	師 器	坏×、甕×

S-102

須	恵 器	坏片
土	師 器	坏片、甕×

S-103

須	恵 器	坏a
土	師 器	坏、甕

S-104

土	師 器	甕片

S-105

土	師 器	坏、甕×

S-106

須	恵 器	坏、甕
土	師 器	大坏、甕

S-107

土	師 器	坏片、甕片

S-108

土	師 器	坏片

S-108柱痕

須	恵 器	坏
土	師 器	甕

S-108掘方

土	師 器	甕片

S-109

須	恵 器	坏、蓋3
土	師 器	甕

S-111

須	恵 器	破片
土	師 器	甕

S-111掘方

須	恵 器	坏×、蓋3×
土	師 器	坏、甕

S-111柱痕

土	師 器	坏
黒色土器A		坏×

S-112

須	恵 器	破片
土	師 器	甕

S-113

土	師 器	甕片

S-114

須	恵 器	坏片
土	師 器	坏片

S-114掘方

須	恵 器	坏、蓋3
土	師 器	坏×、甕

S-116

須	恵 器	坏c3、甕
土	師 器	坏a、坏c4、甕
黒色土器A		坏c

S-117

土	師 器	坏×

表16.77次　遺物一覧表（5）

S-118

須　恵　器	坏c3
土　師　器	坏a、坏片、甕

S-119

須　恵　器	甕
土　師　器	甕
黒色土器A	破片

S-121

土　師　器	蓋4、甕片

S-122

須　恵　器	蓋4
土　師　器	坏片、甕片

S-124

須　恵　器	坏a
土　師　器	甕片

S-126

土　師　器	坏片、坏c3、甕
黒色土器A	坏片

S-127

須　恵　器	坏
土　師　器	蓋片、甕、甕×
越州窯系青磁	椀；I(1)

S-128

土　師　器	坏、甕

S-128柱痕

土　師　器	甕

S-129

須　恵　器	坏、蓋3、蓋4
土　師　器	坏a、坏d、坏蓋4、甕

S-131

土　師　器	甕片

S-132

須　恵　器	蓋3
土　師　器	破片

S-133

須　恵　器	坏片
土　師　器	坏片

S-134

須　恵　器	坏片
土　師　器	坏、甕
製塩土器	破片

S-136

土　師　器	甕片、破片

S-137

須　恵　器	破片
土　師　器	坏c、甕×

S-137掘方

須　恵　器	坏
土　師　器	破片

S-138

土　師　器	坏片、甕

S-139

須　恵　器	坏a、坏c3
土　師　器	坏、甕

S-141

土　師　器	甕

S-142

須　恵　器	坏×
土　師　器	坏

S-143

須　恵　器	坏、鉢a
土　師　器	坏片、甕

S-144

須　恵　器	坏a、蓋、蓋3、甕
土　師　器	甕

S-146

須　恵　器	坏c4×
土　師　器	甕×

S-147

土　師　器	甕片

S-148

須　恵　器	坏×
土　師　器	坏d
黒色土器A	坏×

S-149

土　師　器	甕

S-151

土　師　器	坏片、甕片

S-152

土　師　器	坏a×

表17.77次　遺物一覧表（6）

S-153

須恵器	皿a
土師器	坏片、甕

S-153柱痕

須恵器	坏×
土師器	坏

S-154

須恵器	蓋3
土師器	破片

S-156

須恵器	鉢b
土師器	坏d×

S-156柱痕

須恵器	蓋a、壺
土師器	坏

S-157

土師器	坏×

S-158

須恵器	坏c4、甕、鉢
土師器	蓋3、甕

S-159

須恵器	坏
土師器	甕

S-161

須恵器	坏、鉢b、甕、壺
土師器	坏、坏d、蓋3
製塩土器	破片
瓦類	平瓦縄目叩

S-162

須恵器	坏×、甕
土師器	坏

S-163

須恵器	破片
土師器	坏片

S-164

須恵器	蓋3、甕
土師器	坏d、甕片
製塩土器	破片

S-166

須恵器	蓋c、蓋4、甕、長頸壺
土師器	坏d、蓋、蓋c
瓦類	丸瓦

S-167

土師器	坏、甕×
黒色土器A	椀片

S-168

土師器	坏、蓋4、甕×

S-169

須恵器	破片
土師器	坏片、甕片

S-171

須恵器	坏

S-172

土師器	坏a

S-173

須恵器	坏a
土師器	甕

S-174

須恵器	坏片
土師器	坏片
製塩土器	破片 (1)

S-176

須恵器	坏
土師器	破片

S-177

須恵器	破片
土師器	坏×、甕×

S-178

土師器	坏×、甕片

S-181

土師器	破片

S-182

須恵器	坏c×、蓋3、甕
土師器	坏d

S-183

須恵器	坏片
土師器	坏片

S-184

土師器	破片

S-186

須恵器	破片

S-187

須恵器	坏a
土師器	坏片、甕

表18.77次　遺物一覧表（7）

S-188

土師器	坏片、甕

S-189

土師器	破片

S-191

須恵器	坏c1
土師器	坏×、破片

S-192

須恵器	坏片、甕片

S-193

須恵器	蓋3
土師器	破片

S-194

土師器	破片

S-196

土師器	坏片

S-198

須恵器	坏a、甕
土師器	坏
製塩土器	破片

S-199

須恵器	坏
土師器	破片

S-201

土師器	甕

S-202

須恵器	坏
土師器	坏、坏d、甕片

S-203

須恵器	蓋3
土師器	坏、甕×
製塩土器	破片 (1)

S-204

須恵器	坏a
土師器	甕×
金属製品	鉱滓

S-205

須恵器	坏c3
土師器	坏a、坏c4、鉢×、甕

S-206

土師器	坏片

S-207

土師器	坏、蓋3、甕

S-207西ピット

須恵器	鉢b×

S-208

須恵器	坏×
土師器	甕片

S-209

須恵器	蓋4
土師器	甕

S-211

須恵器	蓋3、蓋（朱書あり）
土師器	坏c、甕

S-212

須恵器	坏×
土師器	皿×

S-213

土師器	坏×、甕片
製塩土器	破片

S-214

須恵器	坏片、蓋
土師器	坏、甕

S-215

土師器	坏×、甕

S-216

土師器	甕片

S-217

須恵器	坏、甕
土師器	坏×、皿a、甕

S-217掘方

須恵器	坏a
土師器	皿a

S-218

須恵器	坏片、甕
土師器	甕
黒色土器B	坏

S-219

須恵器	坏
土師器	甕

S-221

須恵器	坏
土師器	甕

表19.77次　遺物一覧表（8）

S-222

土師器	坏、甕

S-222柱痕

須恵器	坏片
土師器	甕片

S-223

須恵器	坏、皿
土師器	皿

S-224

須恵器	蓋4×
土師器	坏×

S-225

須恵器	蓋4
土師器	坏a、甕

S-226

須恵器	坏
土師器	坏片、甕片

S-227

須恵器	坏、坏a、甕
土師器	甕

S-228

須恵器	坏、蓋×
製塩土器	破片
国産磁器	肥前系染付椀×
白磁	椀；片 (1)

S-229

須恵器	破片
土師器	坏、甕

S-231

須恵器	坏

S-232

須恵器	蓋3
土師器	坏、甕×

S-233

土師器	甕片

S-234

須恵器	坏片

S-236

須恵器	坏a、坏c3

S-237

須恵器	甕×
土師器	坏、高坏

S-238

須恵器	坏片
土師器	甕

S-239

須恵器	坏
土師器	坏a×、坏c3

S-241

土師器	甕

S-242

須恵器	坏
土師器	坏片、甕片

S-243

土師器	甕片

S-244

須恵器	蓋3、甕
土師器	甕

S-246

須恵器	坏
土師器	坏×、甕

S-247

土師器	甕

S-248

土師器	破片

S-249

須恵器	鉢b
土師器	坏、蓋4、甕

S-251

土師器	鉢×、甕

S-252

須恵器	坏×
土師器	甕

S-253

土師器	坏c3

S-254

須恵器	坏c3、甕
土師器	坏片、甕

S-256

土師器	坏d、蓋3、甕

S-257

須恵器	蓋、甕
土師器	蓋3、甕
黒色土器A	坏
瓦類	丸瓦縄目叩

表20.77次　遺物一覧表（９）

茶褐色土

須恵器	坏c1、坏c3、坏c4、坏身、蓋、蓋1、皿a、甕、長頸壺
土師器	坏a、坏c、坏c3、蓋c、蓋3、蓋4、竈、甕（朱塗り） 甕、甕の把手
製塩土器	破片
黒色土器A	坏、破片(1)
越州窯系青磁	椀；I(1) 壷；破片(1)
瓦質土器	椀
肥前系陶磁器	椀×
瓦類	丸瓦、平瓦（無文、格子叩）
石製品	砥石(2)、ob-鏃(2)
金属製品	鉱滓(1)、鉄滓(1)
土製品	素焼人形×

表土

須恵器	坏、坏c3、高坏、蓋1、蓋3、蓋4、蓋b、皿、長頸壺 無頸壺、壷（肥後産）、壷（墨書「中」）、円面硯 甕
土師器	坏（搬入）坏d、椀c、竈
製塩土器	破片(1)
黒色土器A	椀、皿
越州窯系青磁	椀；I(3)、小椀(1)、×(1) 褐釉；片(1)
龍泉窯系青磁	椀；I(3)、I-5-a(1) 皿；片(1)
白磁	椀；I(1)、II(1)、IV(3)、V(1) 坏；IX(1)
土師質土器	すり鉢
瓦質土器	すり鉢
緑釉陶器	緑釉緑彩壷、椀
肥前系陶磁器	筒椀(1)
国産陶器	近世褐釉；壷、甕、すり鉢、徳利 透明釉；椀 東播鉢(1)
国産磁器	近世白磁・紅皿、緑釉皿(1)
中国陶器	天目椀片
瓦類	平瓦無文、平瓦格子叩、丸瓦（文字瓦・「平井」）、破片
石製品	権、石鏃(1)、砥石、碁石（白）、打具（珪化木）
縄文土器	深鉢
金属製品	釘(2)
土製品	焼土塊

表21.条77次遺物観察表（1）

遺構		No,	器種	図版番号	R番号	口径 cm	高さ cm	底径 cm	備考
77SI005竈内	(S-5竈内)	1	須恵器 坏c3	16	001	-	2.3+	-	
〃	(S-5竈内)	2	須恵器 坏	16	002	-	3.3+	-	
〃	(S-5竈内)	3	土師器 甕	16	003	-	2.15+	-	
77SI005竈粘土下面	(S-5竈粘土下面)	1	須恵器 高坏	16	001	-	5.5+	-	
〃	(S-5竈粘土下面)	2	土師器 高坏	16	002	-	1.8+	-	
77SI005竈ピット下層	(S-5竈ピット下層)	1	須恵器 坏	16	001	-	1.7+	-	
〃	(S-5竈ピット下層)	2	土師器 甕	16	003	-	7.2+	-	
〃	(S-5竈ピット下層)	3	瓦類 丸瓦	16	002	17.40	10.40	2.20	縦×横×厚 無文叩
77SB040 b	(S-19)	1	須恵器 蓋3	17	001	-	0.9+	-	
77SB040 d	(S-46)	2	須恵器 坏	17	001	-	2.0+	-	
77SB045 a	(S-2)	1	須恵器 蓋3	17	001	-	1.7+	-	
〃	(S-2)	2	須恵器 蓋3	17	002	-	0.7+	-	
77SB045 g	(S-14)	3	須恵器 蓋3	17	001	-	1.1+	-	
77SB045 h	(S-16)	4	須恵器 鉢b	17	001	-	1.0+	-	
77SB045 k	(S-26)	5	須恵器 坏	17	001	-	2.8+	-	
77SB045 j	(S-24)	6	須恵器 坏	17	001	-	3.0+	-	
77SB045 a	(S-2)	7	土師器 坏d	17	003	-	3.3+	-	
77SB045 g	(S-14)	8	土師器 甕	17	002	-	3.3+	-	
77SB045 l	(S-27)	9	土製品 土玉	17	001	1.85	1.80	1.90	
77SB060	(S-60e)	1	須恵器 蓋4	17	002	-	0.8+	-	
〃	(S-60e)	2	須恵器 坏c3	17	001	-	1.2+	-	ヘラ切り
〃	(S-60f)	3	土師器 皿	17	001	-	2.0+	-	
77SB080d	(S-64)	1	須恵器 蓋2	17	001	-	0.9+	-	
77SB080h	(S-81)	2	土師器 蓋	17	001	-	1.1+	-	
77SB080e	(S-83)	3	土師器 高坏	17	001	-	1.7+	-	
77SB090g	(S-171)	1	須恵器 坏	17	001	-	3.15+	-	
77SB090i	(S-222)	2	須恵器 皿	17	002	-	2.00	-	
〃	(S-222)	3	土師器 甕	17	001	-	2.5+	-	
77SB110g	(S-129)	1	須恵器 蓋4	17	001	14.3*	2.60		
〃	(S-129)	2	須恵器 坏	17	002	-	4.0+	-	
〃	(S-129)	3	土師器 坏d	17	003	-	1.7+	-	
〃	(S-129)	4	土師器 坏d	17	005	-	2.4+	-	
〃	(S-129)	5	土師器 坏d	17	004	-	1.8+	-	
77SB120e	(S-98)	1	須恵器 坏	17	003	-	1.9+	-	
77SB120b	(S-138)	2	土師器 甕	17	002	-	2.5+	-	
77SB120e	(S-98)	3	土師器 甕	17	002	-	2.2+	-	
77SB120b	(S-138)	4	土師器 甕	17	001	-	2.6+	-	
77SB120e	(S-98)	5	瓦類 丸瓦	17	001	12.60	11.40	2.10	長さ×幅×厚さ 縄目叩
77SB050	(S-50j)	1	須恵器 蓋a1	18	001	8.5*	1.3+	-	ヘラ切り
〃	(S-50c)	2	須恵器 蓋1	18	002	13.0*	2.3+	-	
77SB050	(S-50g)	3	須恵器 蓋3	18	001	-	0.8+	-	
〃	(S-50b)	4	土師器 皿	18	001	-	1.4+	-	
〃	(S-50l)	5	土師器 皿	18	001	-	1.30	-	
〃	(S-50k)	6	土師器 壷	18	001	8.8*	2.9+	-	
〃	(S-50c)	7	土師器 甕	18	001	16.5*	5.0+	-	
77SX182	(S-182)	1	須恵器 蓋3	18	003	-	1.1+	-	
〃	(S-182)	2	須恵器 坏c×	18	004	-	1.5+	-	
〃	(S-182)	3	土師器 坏d	18	001	17.0*	4.0+	-	

数値後の+は欠損状況での数値、*は復元状況での数値で表記している。

表22.条77次遺物観察表（２）

遺構		No,	器種	図版番号	R番号	口径 cm	高さ cm	底径 cm	備考
77SX182	(S-182)	4	土師器 坏	18	002	-	2.5+	-	
77SX166	(S-166)	1	須恵器 蓋c3	18	005	14.4*	2.95	8.8*	ヘラ切り
〃	(S-166)	2	須恵器 長頸壺	18	001	6.2*	7.1+	-	
〃	(S-166)	3	須恵器 甕	18	009	-	4.8+	-	4・5と同一個体か
〃	(S-166)	4	須恵器 甕a	18	007	15.40	4.8+	-	3・5と同一個体か
〃	(S-166)	5	須恵器 甕	18	008	-	6.6+	-	3・4と同一個体か
〃	(S-166)	6	土師器 蓋c	18	004	-	1.3+	-	
〃	(S-166)	7	土師器 蓋d	18	002	-	2.9+	-	
〃	(S-166)	8	土師器 坏d	18	003	13.8*	3.40	7.00	ヘラ切り
〃	(S-166)	9	土師器 甕	18	006	22.9*	4.3+	-	
77SB100c	(S-209)	1	須恵器 蓋3	19	001	18.8*	2.4+	-	ヘラ切り
77SB100h	(S-211)	2	須恵器 蓋c	19	004	-	1.0+	-	朱書あり
〃	(S-211)	3	須恵器 蓋	19	001	-	1.1+	-	ヘラ切り
77SB100l	(S-161)	4	須恵器 蓋3	19	010	-	1.6+	-	
77SB100g	(S-191)	5	須恵器 坏c1	19	001	-	1.4+	-	
77SB100a	(S-218)	6	須恵器 坏	19	002	-	2.7+	-	
77SB100l	(S-161)	7	須恵器 坏	19	003	-	3.2+	-	
〃	(S-161)	8	須恵器 坏	19	002	-	2.7+	-	
77SB100k	(S-159)	9	須恵器 坏	19	001	-	3.0+	-	
77SB100l	(S-161)	10	須恵器 坏	19	001	14.6*	2.8+	-	
〃	(S-161)	11	土師器 蓋3	19	005	-	1.0+	-	
77SB100d	(S-207)	12	土師器 蓋	19	001	-	1.5+	-	
77SB100l	(S-161)	13	土師器 坏d	19	004	-	2.5+	-	
77SB100h	(S-211)	14	土師器 坏d	19	002	-	0.8+	-	
77SB100l	(S-161)	15	土師器 坏d	19	007	-	1.35+	8.9*	ヘラ切り
77SB100n	(S-126)	16	土師器 坏d	19	001	-	1.5+	-	
77SB100h	(S-211)	17	土師器 坏c	19	003	-	1.3+	-	
77SB100l	(S-161)	18	土師器 坏d×皿d	19	008	-	1.2+	-	
〃	(S-161)	19	土師器 高台	19	009	-	1.15+	-	
77SB100d	(S-207)	20	土師器 坏	19	002	-	1.8+	-	
〃	(S-207)	21	土師器 坏	19	003	-	2.2+	-	
77SB100a	(S-218)	22	土師器 甕	19	001	-	5.9+	-	
77SB100k	(S-159)	23	土師器 甕	19	002	-	3.4+	-	
77SB100j	(S-164)	24	製塩土器 焼塩壷	19	001	-	7.3+	-	焼塩壷II
77SB100l	(S-161)	25	製塩土器 焼塩壷	19	006	-	2.3+	-	焼塩壷I×II-a
〃	(S-161)	26	瓦類 平瓦	19	011	3.15	5.40	2.65	長さ×幅×厚さ 縄目叩
77SA095i	(S-114掘り方)	1	須恵器 蓋3	19	001	-	1.0+	-	
〃	(S-114掘り方)	2	須恵器 坏	19	002	-	2.9+	-	
77SD055	(S-55)	1	須恵器 坏	19	002	13.6*	5.0*	9.6*	
〃	(S-55)	2	須恵器 瓶	19	001	5.8*	2.2+	-	
77SD143	(S-143)	1	須恵器 鉢a	19	001	-	2.3+	7.8*	ヘラ切り
〃	(S-143)	2	土師器 甕	19	002	-	1.7+	-	
77SK001	(S-1)	1	須恵器 蓋	20	004	21.0*	2.2+	-	
〃	(S-1)	2	須恵器 蓋	20	003	19.4*	1.7+	-	
〃	(S-1)	3	須恵器 坏a	20	001	13.00	3.25	7.10	ヘラ切り
〃	(S-1)	4	須恵器 坏c	20	002	12.0*	2.9+	-	
〃	(S-1)	5	須恵器 鉢	20	005	-	7.4+	-	
〃	(S-1)	6	須恵器 甕	20	009	-	5.4+	-	

数値後の+は欠損状況での数値、*は復元状況での数値で表記している。

表23.条77次遺物観察表（3）

遺構		No,	器種	図版番号	R番号	口径 cm	高さ cm	底径 cm	備考
77SK001	(S-1)	7	須恵器 甕	20	010	-	5.8+	-	
〃	(S-1)	8	土師器 蓋	20	006	-	1.0+		
〃	(S-1)	9	土師器 坏d	20	007	-	1.0+	6.00	
〃	(S-1)	10	土師器 甕	20	008	-	7.4+	-	
〃	(S-1)	11	瓦類 平瓦	20	011	5.55	5.85	2.50	縦×横×厚 縄目叩
77SK025	(S-25)	1	青磁 坏I	20	002	-	3.7+	-	越州窯系青磁
〃	(S-25)	2	青磁 椀I	20	001	-	2.6+	-	越州窯系青磁
〃	(S-25)	3	白磁 椀I	20	003	-	3.5+	-	中国磁器
〃	(S-25)	4	須恵器 坏	20	005	-	3.8+	-	
〃	(S-25)	5	須恵器 坏c4	20	004	-	2.4+	-	
〃	(S-25)	6	須恵器 椀	20	007	-	1.95+	-	
〃	(S-25)	7	土師器 蓋d	20	010	-	1.1+	-	
〃	(S-25)	8	土師器 皿	20	008	12.4*	2.1+	9.6*	ヘラ切り
〃	(S-25)	9	土師器 坏a	20	009	-	2.0+	8.6*	ヘラ切り
〃	(S-25)	10	土師器 椀	20	015	-	2.0+	7.6*	
〃	(S-25)	11	土師器 椀	20	014	-	4.8+	9.2*	
〃	(S-25)	12	須恵器 高坏	21	006	-	4.0+	-	
〃	(S-25)	13	土師器 脚付鉢	21	016	-	5.8+	-	
〃	(S-25)	14	土師器 甕	21	013	-	4.5+	-	
〃	(S-25)	15	土師器 甕	21	012	-	4.1+	-	
〃	(S-25)	16	土師器 甕	21	011	-	3.4+	-	
〃	(S-25)	17	瓦類 平瓦	21	018	10.90	6.00	1.90	縦×横×厚
〃	(S-25)	18	瓦類 平瓦	21	017	4.00	3.70	1.90	縦×横×厚
〃	(S-25)	19	土製品 焼土塊	21	019	1.75	2.80	1.05	縦×横×厚
77SK030	(S-30)	1	須恵器 蓋3	21	005	-	1.7+	-	
〃	(S-30)	2	須恵器 蓋3	21	006	-	1.75+	-	
〃	(S-30)	3	須恵器 蓋（壷蓋）	21	002	-	1.8+	-	
〃	(S-30)	4	須恵器 蓋c	21	007	-	0.9+	-	
〃	(S-30)	5	須恵器 蓋c	21	008	-	1.3+	-	
〃	(S-30)	6	須恵器 坏a	21	001	12.3*	3.50	7.4*	
〃	(S-30)	7	須恵器 坏c3	21	004	18.80	4.50	8.20	
〃	(S-30)	8	須恵器 坏c	21	003	-	2.7+	-	
〃	(S-30)	9	須恵器 壷b	21	009	-	2.35+	-	
〃	(S-30)	10	土師器 蓋3	22	012	-	1.8+	-	
〃	(S-30)	11	土師器 蓋3	22	013	-	2.1+	-	
〃	(S-30)	12	土師器 蓋3	22	011	-	1.6+	-	
〃	(S-30)	13	土師器 蓋c	22	014	-	1.5+	-	
〃	(S-30)	14	土師器 坏d	22	018	-	1.1+	7.8*	
〃	(S-30)	15	土師器 皿	22	020	17.00	2.30	13.00	
〃	(S-30)	16	土師器 皿	22	019	17.60	2.25	13.60	
〃	(S-30)	17	土師器 鉢b	22	015	-	6.4+	-	
〃	(S-30)	18	土師器 甕	22	017	-	3.4+	-	
〃	(S-30)	19	土師器 甕	22	016	-	1.9+	-	
〃	(S-30)	20	土製品 焼土塊	22	020	5.55	8.10	3.20	縦×横×厚（塼？）
77SK035	(S-35)	1	須恵器 蓋c	22	007	-	1.9+	-	
〃	(S-35)	2	須恵器 蓋3	22	006	-	1.9+	-	
〃	(S-35)	3	須恵器 坏c	22	004	-	3.4+	9.4*	

数値後の+は欠損状況での数値、*は復元状況での数値で表記している。

表24.条77次遺物観察表（4）

遺構		No,	器種	図版番号	R番号	口径 cm	高さ cm	底径 cm	備考
77SK035	(S-35)	4	須恵器 坏c3	22	002	-	2.5+	9.0*	
〃	(S-35)	5	須恵器 坏c1	22	001	-	4.15+	-	
〃	(S-35)	6	須恵器 壷b	22	003	-	2.4+	8.8*	
〃	(S-35)	7	須恵器 坏	22	005	13.8*	4.4+	-	
〃	(S-35)	8	須恵器 蓋c	22	013	-	2.1+	-	
〃	(S-35)	9	須恵器 蓋3	22	012	-	2.1+	-	
〃	(S-35)	10	土師器 坏c	22	009	-	1.85+	-	
〃	(S-35)	11	土師器 坏d	22	008	-	1.6+	-	
〃	(S-35)	12	土師器 坏	22	010	-	1.8+	-	
〃	(S-35)	13	土師器 坏a	22	011	-	1.6+	-	
〃	(S-35)	14	土師器 甕	22	015	-	2.5+	-	
〃	(S-35)	15	土師器 甕	22	014	-	3.1+	-	
77SK070	(S-70)	1	土師器 甕	22	001	-	3.5+	-	
77SK065	(S-65)	1	緑釉 椀？	23	002	-	1.55+	-	国産陶器
〃	(S-65)	2	黒A 椀	23	007	-	3.0+	-	
〃	(S-65)	3	黒A 椀c	23	005	-	2.0+	8.4*	
〃	(S-65)	4	黒A 椀c	23	006	-	3.7+	8.4*	
〃	(S-65)	5	須恵器 坏	23	011	-	2.9+	-	
〃	(S-65)	6	須恵器 坏	23	012	-	2.65+	-	
〃	(S-65)	7	須恵器 坏	23	022	14.1*	2.6+	-	
〃	(S-65)	8	須恵器 皿	23	003	12.6*	1.90	7.85*	ヘラ切り
〃	(S-65)	9	須恵器 甕	23	023	-	7.1+	-	
〃	(S-65)	10	須恵器 甕	23	024	-	7.2+	-	
〃	(S-65)	11	土師器 蓋	23	010	10.0*	1.30	-	
〃	(S-65)	12	土師器 椀c	23	018	-	2.2+	8.7*	
〃	(S-65)	13	土師器 椀c	23	019	-	1.6+	7.30	
〃	(S-65)	14	土師器 坏c	23	001	-	1.5+	7.8*	ヘラ切り・板状圧痕あり
〃	(S-65)	15	土師器 椀c	23	008	-	1.8+	7.5*	ヘラ描き・ヘラ切りあり
〃	(S-65)	16	土師器 坏d	23	015	-	1.2+	-	
〃	(S-65)	17	土師器 坏a×坏d	23	014	-	1.0+	-	
〃	(S-65)	18	土師器 坏a	23	013	-	0.8+	-	板状圧痕あり
〃	(S-65)	19	土師器 坏a	23	004	11.2*	3.5*	6.30	ヘラ切り・板状圧痕あり
〃	(S-65)	20	土師器 坏a	23	016	13.95*	3.50	7.8*	
〃	(S-65)	21	土師器 坏a	23	017	-	2.2+	-	ヘラ切り（？）
〃	(S-65)	22	土師器 鉢？	23	009	-	2.8+	-	
〃	(S-65)	23	土師器 甕	23	021	-	4.1+	-	
〃	(S-65)	24	土師器 甕	23	020	-	3.6+	-	
〃	(S-96)	25	須恵器 蓋4	24	002	-	1.1+	-	
〃	(S-96)	26	須恵器 蓋3	24	001	-	1.6+	-	
〃	(S-96)	27	須恵器 蓋	24	007	-	0.9+	-	
〃	(S-96)	28	須恵器 甕	24	011	-	9.4+	-	
〃	(S-96)	29	土師器 坏a	24	005	12.2*	3.1+	-	31と同一個体の可能性あり
〃	(S-96)	30	土師器 坏a	24	003	-	2.2+	8.5*	
〃	(S-96)	31	土師器 坏a	24	006	-	1.3+	5.8+	ヘラ切り・板状圧痕あり
〃	(S-96)	32	土師器 坏c	24	004	-	1.85+	-	
〃	(S-96)	33	土師器 甕a	24	008	20.2*	18.35	-	
〃	(S-96)	34	土師器 甕a	24	009	-	9.15+	-	

数値後の+は欠損状況での数値、*は復元状況での数値で表記している。

表25.条77次遺物観察表（５）

遺構		No,	器種	図版番号	R番号	口径 cm	高さ cm	底径 cm	備考
77SK065	(S-96)	35	弥生 甕a	24	010	-	4.0+	-	
〃	(S-96)	36	石器 砥石	24	012	5.95	2.15	2.70	長さ×幅×厚さ（砂岩）
茶褐色土	茶褐色土	1	須恵器 蓋I	25	001	13.9*	2.35	-	
〃	茶褐色土	2	須恵器 甕	25	002	-	2.9+	-	
〃	茶褐色土	3	土師器 鉢	25	003	-	4.0+	11.00	
〃	茶褐色土	4	土師器 甕	25	004	17.8*	9.4+	-	
〃	茶褐色土	5	製塩土器片	25	005	10.2*	5.2+	-	
表土	表土	1	須恵器 坏c	25	001	10.6*	4.30	7.6*	ヘラ切り
〃	表土	2	須恵器 円面硯	25	012	12.4*	1.80	-	
〃	表土	3	須恵器 壺c	25	006	-	13.1+	12.0*	イト切り
〃	表土	4	須恵器 壺	25	002	-	4.5+	10.4*	ヘラ切り
〃	表土	5	須恵器 壺	25	008	-	6.2+	13.0*	ヘラ切り
〃	表土	6	須恵器 高坏	25	020	-	3.5+	15.8*	墨書「中」あり
〃	表土	7	須恵器 甕	25	003	-	1.8+	-	
〃	表土	8	土師器 甕a	26	011	23.7*	6.1+	-	
〃	表土	9	土師器 甕a	26	009	36.6*	7.5+	-	
〃	表土	10	土師器 甕a	26	010	27.2*	5.6+	-	
〃	表土	11	青磁 椀I	26	018	15.20	4.70	6.15	越州窯系青磁
〃	表土	12	青磁 小椀I	26	019	-	0.95+	3.30	越州窯系青磁
〃	表土	13	青磁 椀	26	004	-	1.9+	7.2*	越州窯系青磁
〃	表土	14	白磁 椀I	26	005	-	1.2+	6.0*	中国磁器
〃	表土	15	緑釉 椀	26	022	15.3*	3.2+	-	国産陶器
〃	表土	16	緑釉 壺	26	021	-	1.95+	-	国産陶器
〃	表土	17	陶器 盤I×II	26	007	-	3.2+	23.7*	中国陶器
〃	表土	18	縄文 深鉢	26	017	-	2.9+	6.60	
〃	表土	19	土師器 擂り鉢	26	016	-	4.3+	-	
〃	表土	20	瓦類 平瓦	26	014				格子叩
〃	表土	21	瓦類 丸瓦	26	013				文字瓦
〃	表土	22	石製品 権	26	023	5.3+	2.0+	1.60	長さ×幅×厚さ
〃	表土	23	石製品 碁石？	26	024	1.10	0.95	0.60	縦×横×厚さ

数値後の+は欠損状況での数値、*は復元状況での数値で表記している。

表26.条77次掘立柱建物柱間計測表（1）

遺構	77SB010	
面積	7.8m²	
方向	N-2° 18′ 49″ -E	
柱間	南北cf間	1.53
	南北fi間	1.45
	南北平均	**1.49**
	東西cb間	1.2
	東西ba間	1.42
	東西平均	**1.31**
	全平均	**1.4**

遺構	77SB280	
面積	7.3m²	
方向	N-3° 8′ 53″ -E	
柱間	南北ab間	1.4
	南北bc間	1.38
	南北平均	**1.39**
	東西ad間	1.26
	東西dg間	1.35
	東西平均	**1.31**
	全平均	**1.35**

遺構	77SB040	
面積	8.6m²	
方向	N-12° 50′ 52″ -E	
柱間	東西ab間	1.3
	東西bc間	1.2
	東西cd間	1.4
	東西de間	1.05
	東西平均	**1.24**
	南北ef間	1.74
	全平均	**1.49**

遺構	77SB045	
面積	19.6m²	
方向	N-8° 43′ 28″ -E	
柱間	南北ab間	1.52
	南北cd間	1.49
	南北bc間	1.55
	南北平均	**1.52**
	東西ae間	2.5
	東西ei間	1.8
	東西平均	**2.15**
	全平均	**1.84**

遺構	77SB050	
面積	32.4m²	
方向	N-2° 20′ 49″ -E	
柱間	南北na間	1.51
	南北ab間	1.69
	南北bc間	1.62
	南北平均	**1.61**
	東西nm間	2.3
	東西mf間	2.22
	東西fj間	2.2
	東西平均	**2.24**
	全平均	**1.92**

遺構	77SB060	
面積	13.5m²	
方向	N-3° 28′ 5″ -E	
柱間	南北bc間	2.1
	南北cd間	1.87
	南北de間	1.87
	南北平均	**1.95**
	東西ba間	2.32
	全平均	**2.13**

遺構	77SB080	
面積	7.9m²	
方向	N-6° 35′ 59″ -E	
柱間	南北ab間	2.4
	南北bc間	2.42
	南北平均	**2.41**
	東西ah・hg間	1.64
	全平均	**2.03**

遺構	77SB085	
面積	19.0m²	
方向	N-6° 8′ 14″ -E	
柱間	南北ab間	1.18
	南北bc間	1.76
	南北cd間	1.55
	南北平均	**1.50**
	東西al間	1.75
	東西lk間	1.4
	東西kj間	1.08
	東西平均	**1.41**
	全平均	**1.45**

表27.条77次掘立柱建物柱間計測表（2）

遺構	77SB090	
面積	27.6m²	
方向	N-3° 38′ 17″ -E	
柱間	南北gf間	1.9
	南北fe間	2.26
	南北ed間	1.78
	南北dc間	1.85
	南北平均	**1.95**
	東西hg間	1.86
	東西ih間	1.68
	東西平均	**1.77**
	全平均	**1.86**

遺構	77SB100	
面積	38.5m²	
方向	N-4° 40′ 38″ -E	
柱間	南北ab間	1.89
	南北cd間	2.57
	南北bc間	2.02
	南北平均	**2.16**
	東西al間	1.99
	東西kj間	1.95
	東西lk間	2
	東西平均	**1.98**
	全平均	**2.07**

遺構	77SB110	
面積	19.6m²	
方向	N-3° 33′ 6″ -E	
柱間	南北ih間	1.8
	南北hg間	1.8
	南北gf間	1.97
	南北平均	**1.86**
	東西aj間	2.23
	東西ji間	1.29
	東西平均	**1.76**
	全平均	**1.81**

遺構	77SB120	
面積	22.2m²	
方向	N-2° 12′ 9″ -E	
柱間	南北ab間	1.73
	南北bc間	1.63
	南北cd間	1.64
	南北de間	1.35
	南北平均	**1.59**
	東西al間	1.84
	東西lk間	1.65
	東西平均	**1.75**
	全平均	**1.67**

遺構	77SA095	
面積	28.1m²	
方向	N-3° 37′ 26″ -E	
柱間	南北ji間	1.53
	南北kg間	1.09
	南北ik間	1.41
	南北平均	**1.34**
	東西ed間	2.07
	東西dc間	1.64
	東西cb間	2.02
	東西ba間	1.24
	東西平均	**1.74**
	全平均	**1.54**

遺構	77SA125	
方向	N-3° 58′ 46″ -E	
柱間	南北ab間	1.88
	南北bc間	1.73
	南北cd間	1.84
	南北平均	**1.82**

遺構	77SA130	
方向	N-6° 34′ 8″ -E	
柱間	南北ab間	1.95
	南北bc間	1.95
	南北cd間	2.17
	南北de間	1.97
	南北ef間	2
	全平均	**2.01**

条77全柱間平均	**1.76**

表28.大宰府条坊跡　120次調査　遺構一覧（1）

S-番号	遺構番号	遺構性格	堆積土	備考（先後関係など）	時期	地区
1	120SX001	凹み	灰黒色土		奈良末	F6
2	120SX002	凹み	茶色土		奈良末	E6
3	120SX003	凹み	黒色土		奈良	E5
4	120SX004	凹み	黒色土		奈良	E5
5	120SK005	土坑	茶黒色土→黒色土		奈良末	G8
6	120SX006	凹み	黒色土	包含層の取りのこし	奈良末	E5
7	120SX007	ピット群	黒茶色土		平安前期	F7
8	120SX008	ピット群	黒茶色土		奈良末	F5
9	120SX009	ピット群	黒茶色土	120SB010の柱穴を含む	奈良末	G10
10	120SB010	掘立柱建物			奈良末	E11他
11	120SX011	凹み	黒茶色土		平安	G10
12	120SB010	ピット	黒茶色土		奈良	G8
13	120SX013	ピット	黒茶色土		奈良末	F8
14	120SX014	凹み	黒茶色土		平安前期	E7
15	120SB015	掘立柱建物			奈良末	E11他
16	120SK016	土坑	茶黒色土→黒色土	120SB010→120SK016	奈良末	E8
17	120SX017	凹み	黒色土		奈良末	E7
18	120SX018	ピット群	黒色土		平安前期	E7
19	120SX019	凹み	茶色土		平安前期	E8
20	120SD020	溝	白色砂土・灰色砂土→青灰色砂土→黒色土	白色砂(平安前)、他は平安後期	平安前期・後期	20ライン
21	120SX021	ピット群	黒色土		奈良末	F6
22	120SX022	ピット群	黒色土		奈良	F5
23	120SX023	ピット群	黒色土		奈良	E6
24	120SX024	ピット	黒色土		奈良末	E5
25	120SD025	溝	黒色砂質土	120SD025→120SD093→120SD092	平安後期	19ライン
26	120SX026	凹み	茶色土		奈良末	F8
27	120SD027	凹み(溝か)		S-28・29→S-27	平安前期	G10
28	120SD027	溝か	黒色土		平安前期	G10
29	120SD027	溝か	黒色土		平安前期	G10
30	120SD030	溝	茶黒色砂	120SD030→120SD020・120SD025→120SD092	平安中期	E19
31	120SB010	ピット群	黒色土	120SB010hを含む	平安前期	F8
32	120SD032	溝			奈良	D9
33	120SD032	溝			奈良	F9
34	120SB015	ピット	灰色土ブロック混入茶色土→灰黒色土	120SB015dと同一	古代	E10
35	120SA035				平安前期	D15他
36	120SB010	ピット	茶黒色土	建物柱穴と判明	奈良	E9
37	120SX037	ピット	茶黒色土		奈良	E10
38	120SK038	土坑	暗黒色土	120SK038→120SD041	平安前期	G11
39	120SK039	土坑	暗黒色土		奈良末	H11
欠番						
41	120SD041	溝	灰色土	120SB015→120SD041	近世	G11他
42	120SX042	ピット群	黒色土		奈良後半	D11
43	120SX043	凹み		120SX043→120SB010→120SD041	平安前期	E11
44	120SX044	凹み	黒色粘質土		奈良後半	D11
欠番						
46	120SX046	凹み	茶色土		奈良	D11
47	120SX047	ピット群			古代	E13
48	120SX048	凹み	黒色砂質土	土壌試料採集	平安中期	D12
49	120SK049	土坑			平安後期	D12
欠番						
51	120SK051	土坑	灰茶色粘質土	土壌試料採集	奈良	D13
52	120SK052	土坑	黒色土		平安前期	E13
53	120SD053	溝	黒色土		奈良末	E13
54	120SX054	凹み		120SX054→120SK052→120SX047	奈良後半	E13
欠番						
56	120SX056	ピット群	黒茶色土		奈良末	E12

表29.大宰府条坊跡　120次調査　遺構一覧（2）

S-番号	遺構番号	遺構性格	堆積土	備考（先後関係など）	時期	地区
57	120SX057	凹み	灰色土		現代	H12
58	120SD058	溝	黒茶色土	120SD027・062は同一遺構の可能性あり	平安前期	G12
59	120SD059	溝	黒茶色土	120SD059→120SX072・120SD091	平安前期	H13
欠番						
61	120SD061	溝	黒茶色土		平安中期	F14
62	120SD058	溝			平安前期	F14
63	120SX063	凹み	黒茶色土	120SX063→120SD053→120SX048	奈良後半	E12
64	120SA035	ピット群		a・b・cの遺物はない	平安前期	D15
欠番						
66	120SX066	凹み			平安中期	E15
67	120SX067	ピット群	黒茶色土		平安前期	E14
68	120SK068	土坑	黒茶色土		平安前期	E15
69	120SX069	凹み	黒茶色土		平安前期	D16
欠番						
71	120SX071	ピット	緑色土ブロック混入黒系色土→黒茶色土		奈良	C15
72	120SX072	凹み	灰色土	120SD059→120SX072	近世以降	H13
73	120SD073	溝	茶黒色土	S-92と同一	平安前期	G13他
74	120SX074	凹み	黒色土		平安	D14
欠番						
76	120SK076	土坑	黒色土	120SX076→120SD091	平安初期	H16
77	120SX077	ピット	黒色土		平安	F16
78	120SX078	ピット群	黒色土		平安前期	F13
79	120SX079	ピット	黒色土		奈良後半	E6
欠番						
81	120SX081	凹み	黒色土		奈良後半	E5
82	120SX082	ピット	黒色土		奈良	E4
83	120SX083	ピット	黒茶色土		奈良	L22
84	120SX084	ピット群			奈良	L22
欠番						
86	120SX086	凹み	黒茶色土		奈良	K22
87	120SD087	溝	灰色砂	120SD093→120SD087		I20
88	120SD088	溝	カクラン		近世以降	J16
89	120SX089	ピット群	黒色土		平安前期	J17
欠番						
91	120SD091	溝			平安前期	G17
92	120SD073	溝			平安後期	F17
93	120SD093	溝	黒色土		平安後期	J19
94	120SD025	溝	黒色土	120SD025→120SD093	平安後期	J19
欠番						
96	120SX096	凹み	黒色土	120SD025・120SX096→120SD093	奈良末	J20
97	120SX097	ピット群	黒色土		平安	E17
98	120SX098	凹み	灰茶色土		古代	G17
99	120SX099	凹み	黒色土		平安後期	I17

表30.120次　遺物一覧表（1）

S-1

須恵器	坏a、坏c、大坏、皿a、大皿a、蓋3、蓋c3、小蓋c3、甕
土師器	坏d、甕a、把手
	焼塩壺
瓦類	破片

S-2

須恵器	皿a、鉢×皿、蓋3、壺蓋、甕
土師器	皿a、甕、大甕a
	焼塩壺

S-3

須恵器	坏c
土師器	甕、供膳具片
瓦類	平瓦(縄目叩)

S-4

須恵器	坏
土師器	甕a、供膳具片

S-5 茶黒色土

須恵器	皿a
土師器	坏d、皿c×坏c、蓋c、甕a

S-5 黒色土

須恵器	坏、坏a、坏c、椀×大坏、鉢a、皿a、蓋、蓋c3(墨書)、甕、壺
土師器	坏a、坏c、坏d、大坏c、高坏、大皿c×大坏c、皿a、椀c1(墨書)、甕a〔筑後〕、大甕a〔筑後〕
	焼塩壺
緑釉陶器	皿
金属製品	鉱滓
瓦類	平瓦(縄目叩)

S-6

須恵器	坏、蓋3
土師器	皿a、蓋c、甕a(角閃石混入)、把手、壺
	焼塩壺
土製品	竈

S-7

須恵器	坏×皿、甕
土師器	坏d、甕a

S-8

須恵器	坏、大坏、甕、壺蓋
土師器	坏、坏d、甕a(角閃石混入)

S-9

須恵器	坏、蓋3、甕
土師器	坏d、甕a

S-10 a

須恵器	坏a、小坏a
土師器	坏d、皿a、甕a
木製品	炭化物

S-10 b

土師器	甕a
土製品	土錘

S-10 c

須恵器	坏×皿、甕
土師器	坏d

S-10 d

須恵器	坏、高坏
土師器	坏d、甕、甕a

S-10 c

土師器	供膳具片、甕？

S-10 j

須恵器	坏c
土師器	坏×皿、甕a

S-10 k

須恵器	坏、坏c、皿×坏
土師器	坏a、皿、甕a

S-11

須恵器	坏、甕
土師器	坏a、甕
瓦類	平瓦(縄目叩)

S-12

土師器	坏×皿、甕a

S-13

須恵器	坏c、椀c、蓋3、大蓋3、甕
土師器	坏a(墨痕)、坏d、鉢、皿a、蓋3、甕a、大甕a

S-14

須恵器	坏、坏×皿、蓋3
土師器	甕a
黒色土器A	破片

S-15 a

須恵器	坏、坏×皿
土師器	坏、坏d、皿a、甕a

S-15 a 掘り方

須恵器	坏a、坏×皿、蓋3
土師器	甕a

S-15 a 柱痕

土師器	供膳具片、甕a

S-15 b

須恵器	供膳具片
土師器	坏、蓋×高坏脚、甕a

S-15 c 柱痕

須恵器	蓋、甕
土師器	坏、甕a

S-15 c 掘り方

土師器	坏×皿、甕a

S-15 d

須恵器	坏、坏a(ウルシ)、坏c、小坏、甕、壺
土師器	供膳具片、甕a

S-15 e

須恵器	坏c
土師器	甕a

S-16

須恵器	供膳具片
土師器	皿、甕a

表31.120次　遺物一覧表（２）

S-16 黒色土

須恵器	坏、坏c、高坏、皿a、蓋3、蓋c3、小壷
土師器	坏a、坏c×皿c、坏d、皿a、蓋3、把手、甕a
石製品	焼石

S-16 茶黒色土

須恵器	坏c、椀、蓋3、甕
土師器	坏d、皿(ヘラ)×坏d、皿a 、甕a
	焼塩壷
土製品	竈
瓦類	破片

S-17

須恵器	坏c、蓋3、甕
土師器	蓋3、甕a
瓦類	平瓦片(縄目叩)

S-18

須恵器	坏c、皿×坏、皿、甕
土師器	坏a、甕a

S-19

土師器	坏a×皿a、坏d、甕

S-20 黒色土

須恵器	坏、坏a、坏c(VIA期)、坏c(奈良期)、坏d、高坏、大椀c、皿a、小皿a、蓋1、蓋2、蓋3、蓋c 、甕a、甕b、大甕、壷、壷a？、壷b 、壷f×g、壷蓋
土師器	坏a、坏c、坏d、高坏、丸底坏、丸底坏a、小皿a、椀c、把手、蓋c、蓋3、甕、甕a
	焼塩壷
越州窯系青磁	椀；I-1b(1)、II-3、I(2)
	椀×皿 ；I(1)
	その他；鉢I-2(1)、壷、壷II(1)
長沙窯系青磁	壷(2)
白磁	皿；VI-1b(1)
緑釉陶器	椀〔洛西〕(1)、
灰釉陶器	椀c×皿a〔K-90〕(1)、椀c(1)、椀c×皿c(1)
黒釉陶器	壷破片(1)
国産陶器	破片(2)
木製品	井戸枠材(杭)
土製品	竈
石製品	焼石
瓦類	平瓦(縄目叩、格子叩)、平文字瓦（「井」I-8b)、丸瓦、破片(縄目叩)

S-20 青灰色砂土

須恵器	坏a、坏c、高坏、皿a、椀、硯、蓋1、蓋a3 、蓋4、甕、大甕、壷
土師器	坏a、坏c、坏d、高坏、丸底坏a、坏a×皿a、椀c、甕a
	坏a×皿a(ウルシ)大皿a×大坏a、皿c、小皿a、蓋、蓋b
	焼塩壷
黒色土器A	椀c2
越州窯系青磁	椀；II、I-1a(1)
	その他；壷II(1)
長沙窯系青磁	水注
白磁	皿；破片
緑釉陶器	椀×皿〔近江〕
灰釉陶器	椀×皿〔K-90〕
瓦類	平瓦(縄目叩)、丸瓦(縄目叩、格子叩)

S-20 灰色砂土

須恵器	坏a、坏c、小坏、皿、皿a、鉢、蓋2、蓋3、甕、甕a、甕b、大甕、壷、壷a、壷×鉢
土師器	坏a(VIB期)、坏c、丸底坏、丸底坏a、小皿a、椀c2、丸椀a、把手、甕、甕a
黒色土器A	破片

越州窯系青磁	椀；I-1a(1)、I(1)
	その他；水注I(1)
白磁	椀；I-1(2)
灰釉陶器	破片
木製品	斎串、木材
土製品	竈
石製品	砥石(細粒砂岩)
瓦類	平瓦 (縄目叩)、破片(縄目叩)

S-20 白色砂

須恵器	坏a、坏c×皿c、蓋3、蓋c、甕、壷、壷e
土師器	把手、甕
黒色土器A	椀c
長沙窯系青磁	水注(1)
土製品	竈
瓦類	平瓦(格子叩)、丸瓦

S-21

須恵器	坏c、蓋3
土師器	皿a、蓋4、甕a
	焼塩壷

S-22

須恵器	蓋
土師器	坏a、坏c、鉢a、甕a、小甕
瓦類	平瓦(縄目叩)

S-23

須恵器	坏×皿、蓋、甕
土師器	甕a、壷

S-24

須恵器	坏、坏c、小坏c、皿a、蓋3、甕、壷
土師器	坏a、皿a、皿c、甕a
瓦類	平瓦片(縄目叩)

S-25

須恵器	坏、坏a、坏c(蛸痕)、高坏、皿、鉢、鉢a、蓋c、甕、大甕a、甕把手、壷、壷(古墳)、壷e 、壷×甕
土師器	坏a、坏a(VI)、坏c、坏d、丸底坏、皿、椀c1、椀c2、蓋3、把手、甕、甕a
黒色土器A	椀c2
越州窯系青磁	椀；I、I-1、I-2a、I-3、II
	その他；越州×長沙？
土製品	土錘、竈
石製品	滑石石鍋
瓦類	平瓦 (縄目叩)、丸瓦(縄目叩)、塼、破片

S-26

須恵器	坏c
土師器	坏、甕a

S-27

須恵器	坏a、坏c、小坏a、坏×皿、蓋3、甕、壷
土師器	坏a、坏c、坏d、皿a、甕a
灰釉陶器	壷(原始灰釉？)

S-28

須恵器	坏c、坏a×皿a、壷
土師器	坏×皿、甕、甕a

S-29

須恵器	坏c、甕
土師器	坏a、坏a(VIB)×VII、坏a×皿a、甕a、甕b
	煎熬土器×甕b
瓦類	平瓦(縄目叩)、丸瓦(格子叩)

表32.120次　遺物一覧表（3）

S-30

須恵器	坏×皿
土師器	坏a、坏a×皿a、皿a、椀、椀c2
越州窯系青磁	椀；I-1a(1)、I(1)、I-1(1)
緑釉陶器	椀×皿〔洛西〕
灰釉陶器	椀(o-53)
木製品	井戸枠材(杭)

S-31

土師器	椀c1、甕a、供膳具

S-32

須恵器	坏c、蓋3、蓋3×高坏
土師器	供膳具、甕
瓦類	丸瓦

S-33

須恵器	小坏c、坏×皿、蓋3、甕
土師器	坏×皿、大坏d、把手、甕a

S-34 灰黒色土

須恵器	甕

S-34 茶色土

土師器	甕a

S-36

須恵器	皿、蓋3、甕
土師器	坏×皿、甕a

S-37

須恵器	壺
土師器	坏a、甕a

S-38

須恵器	坏c
土師器	坏c、坏d、甕
青白磁	椀(内面陽刻文)

S-39

須恵器	坏a、坏c、蓋3、甕
土師器	坏×皿、甕a
瓦類	平瓦 丶

S-41

須恵器	坏c、坏a×皿a、甕
土師器	坏、坏c、蓋c、甕a
褐釉陶器	器種不明(近世以降～)
国産陶器	椀
白磁	その他；破片

S-42

須恵器	坏c、蓋3、甕
土師器	坏d、皿a、甕a

S-43

須恵器	坏×皿
土師器	坏×皿、皿a、甕a

S-44

須恵器	坏、蓋3、甕
土師器	坏、坏d、甕a

S-46

須恵器	甕
土師器	坏×皿、甕

S-47

土師器	甕a、供膳具
黒色土器A	甕

S-48

須恵器	坏、坏c、鉢b、蓋c、甕
土師器	坏a、坏c、皿、皿a、皿×坏a、椀c1、甕a、器種不明
黒色土器A	坏c、椀c2
越州窯系青磁	その他；壺×水注(1)
白磁	椀；I
瓦類	丸瓦、破片(縄目叩)

S-49

須恵器	坏a、坏c、皿a、蓋2、蓋3、蓋c、平瓶、甕
土師器	坏a、坏c、坏d、高坏、皿a、大皿c、椀、蓋3、把手、甕a
	焼塩壺
白磁	その他；破片
土製品	土錘、碁
瓦類	平瓦、丸瓦(縄目叩、格子叩)

S-51

須恵器	坏a、壺？
土師器	甕、供膳具
瓦類	平瓦(格子)

S-52

須恵器	坏c、皿a、蓋3、甕、盤、盤×硯
土師器	坏、坏a、坏c、坏d、坏×皿、鉢、蓋4、把手、甕、甕a
	煎熬土器
黒色土器A	椀1、椀c、甕
緑釉陶器	椀×皿〔洛西〕
石製品	砥石(中粒砂岩製、細粒砂岩製)、砥石(頁岩)
瓦類	破片(格子叩)

S-53

須恵器	坏、蓋3、壺
土師器	坏、坏a、坏d、甕a

S-54

須恵器	坏a、坏c、壺
土師器	皿、甕a

S-56

須恵器	蓋3
土師器	坏c〔筑後〕、坏d、甕a

S-57

須恵器	坏、蓋、甕、壺

S-58

須恵器	坏a、坏c、蓋3、蓋c、壺
土師器	坏、坏a、皿a、椀、椀c1、大鉢c、把手、甕、甕a
黒色土器A	椀
越州窯系青磁	椀×皿；I(2)
緑釉陶器	椀×皿〔洛北〕
土製品	紡錘車
瓦類	平瓦(縄目叩)

S-59

須恵器	坏、坏a、坏c、皿a、蓋3、蓋c、甕a、平瓶、壺、壺e、小壺、高台付壺
土師器	坏、坏a(VIB)、坏c、坏d、坏c×皿c、蓋3、蓋c、甕a
	煎熬土器
黒色土器A	椀c
長沙窯系青磁	壺
緑釉陶器	坏c×皿c、椀×皿c〔洛西〕

表33.120次　遺物一覧表（4）

白磁	椀；I
土製品	焼土塊
石製品	砥石(細粒砂岩)
瓦類	平瓦(縄目叩、格子叩)

S-61

須恵器	坏a、坏a(墨書)、坏c、坏c(7c後半)、小坏a、皿a、鉢a、蓋3、蓋b3、蓋c、蓋c3、高台、甕、壷、壷b、壷f
土師器	坏a、坏a(墨書)、坏c、坏c(ヘラ)、坏d、皿a、蓋3、蓋c把手、甕、甕a
	焼塩壷
黒色土器A	坏a、坏d、坏×皿、椀、椀1
金属製品	用途不明鉄製品
土製品	竈
瓦類	平瓦(縄目叩)、丸瓦

S-62

須恵器	坏c(ウルシ)、蓋3、甕、甕a、壷
土師器	坏a(VIB)、坏c、坏a×皿a(ヘラ)、皿a、高台×器台
	甕a
	焼塩壷
黒色土器A	椀c2(VIII)
瓦類	平瓦（縄目叩）

S-63

須恵器	坏a、小坏a、蓋3、甕
土師器	坏c、坏d、小坏d、甕a(角閃石混入)

S-64

須恵器	供膳具
土師器	甕a、供膳具
白磁	その他；壷
瓦類	破片

S-66

須恵器	坏、坏c、蓋3、蓋4、把手、甕、壷b
土師器	坏、坏c、坏a×皿a、椀c1、椀c1×2、甕a、甕b
黒色土器A	椀、椀c
越州窯系青磁	皿；I(1)
	その他；水注I(1)
陶器	壷(1)
瓦類	平瓦

S-67

須恵器	蓋、壷
土師器	坏a、甕a

S-68

須恵器	坏a、坏c、鉢b、蓋3、甕a、壷、壷c
土師器	坏a(VIB)、坏c、甕a
黒色土器A	椀1
越州窯系青磁	皿；I(1)
緑釉陶器	椀×皿〔洛北〕(1)
瓦類	破片

S-69

須恵器	蓋3、甕
土師器	坏、坏a、椀c、甕a
黒色土器A	椀
石製品	剥片(黒曜石)
瓦類	破片（縄目叩）

S-71

須恵器	坏a、坏c、壷
土師器	甕a
黒色土器A	椀

S-72

須恵器	坏、坏c×皿c
土師器	坏a×皿a、把手
瓦質土器	火鉢

S-73

須恵器	坏、坏a、蓋3、甕、壷把手
土師器	坏、坏a、坏c、坏d、皿、皿a、椀c1、鉢、蓋3、甕a
	焼塩壷
黒色土器A	椀c1
緑釉陶器	椀〔洛北〕(2)
金属製品	鉱滓
土製品	竈
瓦類	平瓦（縄目叩）

S-74

須恵器	甕
土師器	坏、甕

S-76

須恵器	坏、坏×鉢、蓋3、甕、壷、壷e
土師器	坏a、甕a
瓦類	平瓦（縄目）

S-77

土師器	坏a×皿a、甕a

S-78

須恵器	坏c、甕
土師器	坏a(VI)

S-79

須恵器	坏c
土師器	甕a

S-80

須恵器	皿a、壷
土師器	蓋3、甕a(角閃石混入)
瓦類	平瓦（縄目）

S-82

須恵器	坏(ウルシ)、高坏、甕
土師器	供膳具

S-83

須恵器	壷
土師器	坏×皿、甕a

S-84

須恵器	坏、甕
土師器	坏a、甕a
瓦類	丸瓦

S-86

須恵器	坏×皿、甕
土師器	坏、蓋4、甕a

S-87

須恵器	坏、坏(内側に付着物)、坏c、大椀、甕
土師器	甕a

S-88

須恵器	皿a、供膳具、甕、壷、小壷
土師器	丸底坏a(ヘラ)、供膳具
越州窯系青磁	椀；I-1
瓦質土器	すり鉢、火鉢(菊文)
国産陶器	壷(近世以降)、椀
国産磁器	椀(染付)、小椀(青磁)、破片(白磁)

表34.120次　遺物一覧表（5）

土製品	紡錘車
瓦類	加工品、破片

S-89

土師器	供膳具、甕a

S-91

須恵器	坏、坏a、坏c(ウルシ？)、高坏、高坏(古墳)、皿a(墨書) 皿a×坏a、蓋4、蓋a3、蓋c、蓋c3、甕、甕a、壺、壺b 壺蓋
土師器	坏、坏a、坏a(VII×VIII)、坏c、坏d、皿a、大皿c、椀、 椀c、蓋4、把手、甕、甕a(雲母混入)
	焼塩壺
黒色土器A	椀c1
越州窯系青磁	椀；I
長沙窯系青磁	壺
緑釉陶器	椀〔東海？〕、椀c〔洛西〕、椀×皿〔洛北〕
木製品	炭化物
土製品	焼土塊、土錘
瓦類	平瓦(縄目叩)、丸瓦、軒丸瓦

S-91 茶色土

須恵器	甕
黒色土器A	椀c
瓦類	破片(縄目叩)

S-92

須恵器	坏、坏c、高坏、皿a、蓋3、蓋c、小蓋3、甕、大甕、壺 壺b、小壺、壺蓋a
土師器	坏a、坏c、坏d、高坏
	焼塩壺
黒色土器A	椀c、高台片
越州窯系青磁	椀；I、I-2
長沙窯系青磁	壺
白磁	椀；I-1
瓦類	平瓦(縄目叩)、丸瓦(縄目叩)、丸瓦(II-5)、 平文字瓦（「佐」II-5）

S-93

須恵器	坏c、坏c×皿a、甕a、壺
土師器	坏a、丸底坏、皿
	焼塩壺
石製品	滑石破片

S-94

須恵器	坏c、甕
土師器	坏d×皿a、甕a
瓦類	丸瓦

S-96

須恵器	坏、坏a、皿a、蓋×高坏、甕、甕a
土師器	坏d×皿a、椀c、甕a
	焼塩壺
瓦類	破片(縄目叩)

S-97

須恵器	甕
土師器	供膳具、甕a
瓦類	破片

S-98

須恵器	坏c
土師器	器種不明破片

S-99

須恵器	坏c、坏a×皿a、高坏、蓋3、蓋c、甕、壺、壺蓋
土師器	坏a×皿a、高坏、蓋c、把手、甕a
黒色土器A	椀c
越州窯系青磁	椀；I(1)
白磁	椀；V
石製品	碁石
瓦類	平瓦

表採

須恵器	坏c、甕、壺
土師器	坏
瓦類	平瓦(縄目叩)

灰色砂

須恵器	坏a、坏c、坏d、坏a×皿a、坏×鉢、高坏、皿a、鉢a、 大皿a×大皿c、大椀c、蓋(古墳)、蓋3(墨痕)、蓋4、蓋c 蓋c3、把手、硯、盤、甕、甕b、壺、壺a、壺b、壺e、 小壺、壺蓋
土師器	坏(暗文)、坏a(穿孔)、坏c、坏d、高坏、皿a、小皿a、 耳皿、大皿a×大坏a、椀c2、丸椀、鉢、蓋3、蓋c、 把手、甕a、甕b、壺
	焼塩壺、煎熬土器
黒色土器A	坏c〔奈良〕、椀c2、甕
黒色土器B	坏？(口縁部)
越州窯系青磁	椀；I-1a、I-1b その他；鉢I-2、水注I？、壺、壺I（把手）
長沙窯系青磁	壺
龍泉窯系青磁	皿；I-1
緑釉陶器	椀×皿〔洛西、防長、洛北〕
灰釉陶器	椀×皿〔K-14〕、段皿〔K-90〕
国産陶器	壺、褐釉陶器(近世以降)
白磁	椀；I-1、I-4、V 皿；III-1、VI
土製品	竈、焼土塊
石製品	砥石(細粒砂岩)
瓦類	平瓦(縄目叩、格子叩)、軒丸瓦、破片(格子叩)

Z

須恵器	甕
土師器	坏、坏a、椀c2、甕a
黒色土器A	椀c(金属器模倣)
越州窯系青磁	II-3
緑釉陶器	坏c〔洛西〕、椀〔洛西〕

表35.条120次　遺物計測表（1）

S-1

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	坏d	1	R-009	8		3.8+			
須	小蓋c3	1	R-002	1	12.15	1.5	1.8		
	蓋c3	1	R-001	2	19.5	3.7	2.3		
	坏c　ヘラ	1	R-003	3	12.6	4.0	7.8	○	—
	〃	2	R-005	5	13.3	3.5+		○	—
	〃	3	R-004	4	13.5	3.75	8.75	○	—
	坏a	1	R-007	6	13.7	3.4+	9.8	—	—
	大坏	1	R-006	7	17.5	4.4+			
	皿a　ヘラ	1	R-008	13	21.2	1.5	17.1	○	—

S-2

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	皿a	1	R-004	17		1.8+			
須	蓋3	1	R-002	14		1.5+			
	皿a	1	R-003	16	17.2	1.7+	13.8		

S-5 黒色土

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	坏a	1	R-042	34	—	2.2+	7.6	—	—
	坏c	1	R-048	38	—	3.2+	9.15	—	—
		2	R-049	40	—	3.7+	12.0	—	—
	坏d	1	R-014	23	13.35	4.0	6.9	—	—
		2	R-038	30	13.5	3.65	5.6	—	—
		3	R-041	36	13.9	3.55	6.6		
		4	R-037	35	14.2	3.55	7.6	○	—
		5	R-039	29	14.4	3.2	7.9	○	—
		6	R-035	28	14.7	3.4	7.8	—	—
		7	R-036	24	14.75	3.3	8.0	—	—
		8	R-040	31	14.9	3.2	8.6	×	—
		9	R-015	27	15.3	3.7	8.4	—	—
		10	R-013	25	15.35	3.95	6.9	—	—
		11	R-017	32	15.9	3.35	8.5	—	—
		12	R-012	26	15.9	4.0	8.25	—	—
		13	R-016	33	16.7	4.25	9.2	○	—
	大坏c	1	R-050	37	18.2	7.9	10.3	—	—
	椀c1	1	R-020	39	16.2	5.9	8.2	—	×
	皿a	1	R-018	41	17.2	2.0	13.3	—	—
	ヘラ	2	R-043	46	18.1	2.0	13.6	—	○
	〃	3	R-019	42	18.6	2.3	14.1	—	×
		4	R-046	43	19.0	2.1+	15.3	—	—
		5	R-047	45	19.3	2.0	15.4	—	—
		6	R-044	47	20.1	1.8	17.3	—	—
		7	R-045	44	21.15	1.7	17.15	—	—
須	蓋c3	1	R-023	2	13.95	1.85	9.4	○	×
		2	R-008	1	14.1	1.25+	9.0	○	×
		3	R-024	7	14.4	2.9	9.25	○	×
		4	R-006	3	15.2	2.6	10.4	○	×
		5	R-007	4	16.6	2.0+	11.3	○	×
	蓋3	1	R-025	5	18.4	2.4+	11.8	○	×
		2	R-026	6	18.8	2.6+	11.4	○	×
	蓋×皿a	1	R-031	8	19.6	3.0+	18.8	○	—
	坏a　ヘラ	1	R-003	9	12.35	3.85	8.75	○	×
	〃	2	R-004	10	12.6	3.6	8.0	○	—
	〃	3	R-005	11	13.1	3.6	8.9	○	—
	坏c　ヘラ	1	R-001	13	12.15	4.85	7.95	○	○
	〃	2	R-002	12	13.05	4.85	8.85	○	—
		3	R-063	14	17.2	8.8	9.85	○	
		4	R-027	16	17.5	7.2	8.6	○	×
	坏	1	R-029	15	17.6	4.1+			
		2	R-028	17	20.5	6.9+			
	大坏(椀)	1	R-010	18	22.6	6.0+			
須	皿a　ヘラ	1	R-030	19	13.2	2.0	10.5	○	×
	〃	2	R-009	20	14.4	1.9+	11.5	○	×

S-6

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	蓋c	1	R-005	24		1.7+			
須	蓋3	1	R-002	21	11.9	1.95+			
		2	R-001	22	14.0	1.3			
		3	R-003	23	16.4	1.6+			
	坏	1	R-004	25	14.85	3.1+			

S-8

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	坏d	1	R-003	18		2.7+			
須	大坏	1	R-002	27	21.3	4.3+			

S-10 a

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	坏d	1	R-002	3		1.2+	10.0	—	—
	皿a	1	R-004	2		1.65+			
		2	R-001	4	21.4	1.6+	18.3		
須	小坏a	1	R-003	1		1.3+	7.1	—	—

S-10 d

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	坏	1	R-001	6		2.5+			

S-10 j

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	坏×皿	1	R-002	9		1.9+			
須	坏c　ヘラ	1	R-001	8		0.8+	9.0	○	×

S-10 k

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	皿	1	R-003	12		2.3+			
須	坏c	1	R-001	11		2.1+	8.4	—	—
	坏×皿	1	R-002	10		2.1+			

S-13

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	坏d	1	R-004	30	13.0	3.3	6.65	—	—
	坏	1	R-002	29	13.85	2.6			
	皿a	1	R-003	31	18.9	2.1+	15.2	—	—
須	大蓋3	1	R-001	28	20.2	1.25+			

S-15 a 掘り方

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	蓋3	1	R-001	16		1.45+			
	坏a	1	R-003	17		2.1+	8.0		
	坏×皿	1	R-002	18		2.0+			

S-15 a

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	皿a	1	R-003	15	15.1	2.15+	10.6	—	—
須	坏	1	R-001	14	12.1	2.8+			
	坏×皿	1	R-002	13		3.0+			

S-15 b

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	蓋3×高坏脚	1	R-001	20	13.0	1.75+			
	坏	1	R-003	19		2.1+			
		2	R-002	21	12.2	3.5+			

表36.条120次　遺物計測表（2）

S-15 c 柱痕

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	坏	1	R-002	23		2.5+			
須	蓋	1	R-001	24		1.75+			

S-15 d

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	小坏	1	R-001	26	10.6	3.2+			
	坏c　ヘラ	1	R-003	27		1.8+	9.2	—	—
		2	R-002	28		2.6+	8.0		
	坏	1	R-004	25		2.4+			

S-16 黒色土

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	蓋3	1	R-015	15		1.2+			
		2	R-014	12	16.45	1.6+			
		3	R-013	13	16.6	1.8+			
		4	R-012	14	19.9	1.8+			
	坏d	1	R-017	16		1.9+			
		2	R-016	17	13.6	2.85+	7.3	—	
	Ⅲa	1	R-018	18	16.7	2.0	14.6	—	—
		2	R-019	20	17.8	1.9+			
		3	R-020	19	18.2	1.9	14.0		
須	蓋c3　ヘラ	1	R-003	1	13.75	1.9+	10.2	×	
	〃	2	R-001	4	15.3	2.7+	10.6	○	
	蓋3	1	R-005	6		1.3+			
		2	R-010	5		1.45+			
	ヘラ	3	R-002	3	14.7	1.35+		○	
		4	R-004	2	15.45	1.8+	10.95	○	
	坏	1	R-008	8		2.9+			
		2	R-007	7	12.4	3.2+			
		3	R-006	9	15.5	3.2+			
	Ⅲa　ヘラ	1	R-009	11	14.0	1.3+	10.6	○	

S-16 茶黒色土

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	Ⅲ×坏d	1	R-004	3	—	1.2+	—	—	—
	Ⅲa	1	R-002	4	17.4	1.8	12.8	—	—
須	蓋3	1	R-003	1	16.1	2.3+	—	—	—
	椀	1	R-005	2	—	4.4+			

S-18

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	坏c	1	R-003	36	—	1.1+	—	—	—
	Ⅲ×坏	1	R-002	34	—	1.9+			
	Ⅲ	1	R-001	35	—	1.8+			

S-20 黒色土

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	小Ⅲa　ヘラ	1	R-001	7	10.3	1.0	8.2	○?	○
	坏a　イト	1	R-004	10	16.0	3.15	10.8		
	丸底坏	1	R-002	8	—	2.6+			
		2	R-012	11	—	3.0+			
	丸底坏a	1	R-011	9	—	2.9+			
須	小Ⅲa	1	R-009	2	8.4	1.3	7.5	○	—
	坏a	1	R-005	6	—	1.5	9.0	○	—
	坏c	1	R-017	4	15.1	6.0	8.3	—	—
	Ⅲa	1	R-010	3	15.0	2.3	12.1	○	—
	大椀c	1	R-013	5	19.6	8.7	11.3	—	—

S-20 青灰砂土

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	小Ⅲa　ヘラ?	1	R-015	10	—	0.8+	—		
		2	R-014	9	—	1.2+		○	○
	ヘラ	3	R-012	7	8.0	1.0	6.2	○	○
		4	R-011	8	10.85	1.4+			
	坏a　ヘラ?	1	R-013	12	11.0	2.5	8.2		
	丸底坏a	1	R-018	15	16.2	3.35+	—	—	—
	坏a×Ⅲaヘラ?	1	R-016	11	—	1.0+	—	○	—
	椀×Ⅲc	1	R-003	16		1.0+			
	大Ⅲc	1	R-002	13	21.9	3.75	15.45		
須	蓋a3	1	R-007	1	13.9	1.8+	10.7		
		2	R-008	3	16.0	2.4+	12.2		
	蓋4	1	R-017	2	13.5	1.1+	—	—	—
	坏c　ヘラ	1	R-001	4	12.8	4.55	8.8	○	—
	Ⅲa　ヘラ	1	R-009	5		2.2	—	○	—

S-20 灰色砂土

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	小Ⅲa　ヘラ	1	R-003	7	9.6	1.5+	8.2	○	○
	丸底坏	1	R-010	3	14.0	2.8+	—	—	—
		2	R-006	5	15.6	2.5+	—	—	—
	丸底坏a	1	R-001	4	14.2	2.1+	—	—	—
	ヘラ	2	R-005	6	15.0	2.5+	—	—	—
須	小坏	1	R-007	1	11.9	3.0+	—	—	—
	坏a　ヘラ?	1	R-002	2	13.0	2.3	8.0	○	—

S-24

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	蓋3	1	R-004	40	—	1.2+	—		
		2	R-001	39	16.9	1.5+	—		
	小坏c	1	R-003	41	—	1.4+	6.6		
	坏	1	R-002	42	—	4.1+	—		

S-25

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	坏d	1	R-002	6	—	2.3+	—		
	ヘラ	2	R-008	5	15.0	2.75	8.0		
	丸底坏	1	R-001	4	17.4	2.7+	—		
須	坏	1	R-006	1	13.2	3.1+	—		

S-27

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	坏d	1	R-003	14	—	2.5+	—		
須	蓋3　ヘラ	1	R-004	11	—	1.25+	—	○	
	小坏a　ヘラ	1	R-002	12	9.5	2.2	6.1	○	

S-29

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	坏a　ヘラ	1	R-001	13	11.6	3.4	7.9	○	

S-30

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	坏a×Ⅲa　ヘラ	1	R-002	18	11.4		7.7	○	○
	Ⅲ　ヘラ	1	R-001	17	11.4		7.3	○	○
	椀	1	R-006	20	12.4	2.5+	—		
	椀c2	1	R-003	19	—	3.05+	9.2		

S-33

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	蓋3	1	R-001		14.2	1.55+	—		
	坏×Ⅲ	1	R-002		—	2.7+	—		

表37.条120次　遺物計測表（3）

S-43

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	皿a ヘラ	1	R-001	43	13.9	1.85	11.2	○	○?

S-48

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	坏a	1	R-001	47	—	2.4+	7.0	—	○
	坏c ヘラ	1	R-002	48	—	3.8+	8.7	○	—
	皿	1	R-007	46	—	1.7+	—		
	皿a ヘラ	1	R-005	49	15.0	1.35	12.2		
須	坏	1	R-008	45	—	3.0+	—		
黒A	坏c ヘラ	1	R-003	51	—	1.7+	8.0		
	椀c2	1	R-004	52	13.5	4.5+	—		

S-49

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	皿a ヘラ	1	R-002	9	12.8	1.9	11.0	○	○
須	蓋3 ヘラ	1	R-004	7	14.0	2.35+	—		
		2	R-003	8	19.8	1.95+	—	○	

S-52

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	蓋4	1	R-008	16	—	1.6+	21.2		
	坏	1	R-005	17	13.8	3.0+	—		
	坏×皿	1	R-001	19	—	0.4+	—		
須	皿a ヘラ	1	R-007	15	14.8	1.8	10.6	○	

S-53

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	坏	1	R-002	27	—	2.25+	—		
		2	R-003	26	—	2.4+	—		
須	蓋3 ヘラ	1	R-004	25	—	1.75+	—		
	坏	1	R-001	28	—	4.0+	—		

S-54

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	皿	1	R-003	55	—	2.1+	—		
須	坏a ヘラ	1	R-001	54	14.0	4.0	10.8	○	—
	坏c ヘラ	1	R-002	53	—	2.7+	7.6	○	○

S-56

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	坏c	1	R-003	58	—	1.6+	—		
須	蓋3	1	R-002	56	—	1.65+	14.8		
	ヘラ	2	R-001	57	—	2.0+	15.5	○	

S-58

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	坏a ヘラ	1	R-010	7	12.8	3.1	7.1	○	
	〃	2	R-008	9	13.4	3.7	8.2	○	○
		3	R-009	12	14.4	4.1+	—		
	坏 ヘラ	1	R-014	14	—	3.4+	—		
		2	R-015	13	—	3.7+	—		
		3	R-003	10	13.0	2.7+	—		
		4	R-001	11	14.0	2.8+	—		
	皿a ヘラ	1	R-013	6	—	1.1	—		
	〃	2	R-002	2	14.5	1.3	11.4	○	○
	〃	3	R-007	4	15.3	1.85	12.8		
	椀	1	R-011	16	17.4	4.6+	—		
須	蓋3	1	R-004	1	—	2.5+	20.0	○	

S-59

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	坏	1	R-009	35	—	2.85+	—		
		2	R-007	36	13.0	2.4+	—		
須	蓋3	1	R-002	29	—	1.05+	16.0	—	—
	ヘラ	2	R-004	30	—	2.1+	20.0	○	
	坏a ヘラ	1	R-008	31	13.4	3.9	8.6		
	坏	1	R-005	32	15.0	4.7+	—	○	
	皿a ヘラ	1	R-003	33	13.6	2.1	11.3	○	—

S-61

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	蓋3	1	R-013	20	—	2.0+	—	—	—
	坏a	1	R-039	21	13.4	3.0	8.1	○	—
	ヘラ	2	R-040	23	15.2	4.2	8.3	—	○
	坏c	1	R-035	31	—	2.5+	7.8	—	—
		2	R-031	32	—	3.1+	8.3	—	—
		3	R-034	30	15.2	4.6	8.4	—	—
	坏d	1	R-036	24	13.2	3.0	6.6	—	—
		2	R-008	28	13.7	3.0	7.2	○	—
		3	R-038	25	13.8	3.5	7.2	—	—
		4	R-007	29	14.0	3.1	6.7		
		5	R-009	22	14.0	3.4	8.0		
		6	R-030	27	14.4	3.45	6.2	—	—
		7	R-037	26	16.8	3.0	7.6	—	—
	皿a ヘラ	1	R-033	33	15.4	1.3	11.6	—	—
	〃	2	R-032	34	15.7	2.1	10.0	○	○
	〃	3	R-006	35	16.4	1.7	11.7		
		4	R-042	36	17.2	2.1	14.8	○	—
		5	R-041	37	18.6	2.2	15.0	—	—
須	蓋b3 ヘラ	1	R-002	4	19.0	2.7	7.5		
	〃	2	R-001	5	22.0	2.4	10.3		
	蓋c	1	R-028	7	—	1.6+	—		
	蓋c3	1	R-005	1	13.0	1.6	9.4		
		2	R-004	2	15.4	2.8	11.0		
		3	R-003	3	19.8	3.6	14.3		
	蓋3	1	R-012	8	—	1.4+	—	—	—
		2	R-025	6	20.6	2.0+	—	—	—
	坏a ヘラ	1	R-026	11	—	2.5+	8.1	—	○
	〃	2	R-018	10	13.4	3.5	9.0	○	○
	坏c	1	R-022	12	—	2.6+	8.2	—	○
	小坏a ヘラ?	1	R-017	9	10.6	2.3	7.0	○	○?
	皿a	1	R-021	13	16.0	1.8	11.9	○	—
	ヘラ?	2	R-020	14	17.8	2.1	13.3	○	—
	ヘラ	3	R-019	15	18.0	2.4	15.5	○	—
	高台	1	R-024	17	—	1.8+	7.2	—	—
黒A	坏a ヘラ	1	R-014	47	—	1.8+	—	—	—
	坏×皿	1	R-049	49	—	2.2+	—	—	—
	椀	1	R-015	48	—	3.3+	—	—	—

S-62

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	坏a イト	1	R-001	15	—	0.8+	—	—	○
		2	R-004	8	13.3	3.1	7.9	—	—
	皿a ヘラ	1	R-003	3	14.6	1.6	12.2	—	—
	〃	2	R-002	5	—	1.8+	—	○	—

S-63

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	坏c	1	R-007	64	15.5	5.6	8.8	—	—
	小坏d	1	R-006	66	—	3.0+	—	—	—
	大坏d	1	R-008	65	17.7	4.1	9.2	—	—
須	蓋c	1	R-001	59	—	1.5+	—	—	—
		2	R-003	60	16.8	1.9+	—	—	—
		3	R-002	61	17.6	1.0+	—	—	—
	小坏a ヘラ	1	R-004	62	10.0	2.0	5.6	○	○
	坏a —	1	R-005	63	13.1	3.1	8.7	○	—

表38.条120次　遺物計測表（4）

S-66

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	坏	1	R-007	73	15.0	2.8+	—		—
	椀c	1	R-008	72	—	2.4+	6.8	—	—
須	蓋3	1	R-006	68	16.4	1.6+			
	蓋4	1	R-003	69	—	1.8+			
	坏	1	R-001	71	—	2.7+			
		2	R-002	70	—	3.2+			
黒A	椀	1	R-004	74	—	3.1+			

S-68

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	蓋3 —	1	R-007	1	20.4	2.5+	—		
	坏a —	1	R-001	3	—	2.9+	—	○	—
	坏c —	1	R-006	2	—	4.1+	9.2	—	—
黒A	椀1 —	1	R-003	7	—	4.2+	—		

S-69

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	坏 —	1	R-001	77	—	2.3+	—	—	—
須	蓋3 —	1	R-002	76	13.8	2.2+	—	—	—

S-71

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	坏a —	1	R-001	78	11.0	2.8	7.2	○	○

S-73

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	坏 —	1	R-001	45	—	3.4+	—		
	坏a ヘラ	1	R-003	46	14.2	3.5	8.6	—	—
	椀c1 —	1	R-002	47	—	3.5+	8.2	—	—
	皿a —	1	R-005	44	—	1.7+	—		
黒A	椀c1 —	1	R-004	48	17.0	5.6+	9.0	—	—

S-78

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	坏c ヘラ	1	R-001	79	12.2	4.2	7.1	○	

S-79

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	坏c ヘラ	1	R-001	80	14.5	3.95	9.8	○	

S-81

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	蓋3	1	R-002	82	22.8	2.6+	—		
須	皿a ヘラ	1	R-001	81	18.2	2.3	15.8	○	

S-87

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	坏	1	R-002	55	—	3.7+	—		
	大椀	1	R-001	54	22.1	6.5+	—		

S-91

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	蓋4 ヘラ	1	R-003	61	15.0	2.3+	—		
	坏a 〃	1	R-002	63	—	1.2+	—	○	
	坏	1	R-008	62	19.0	4.0+	—		
	椀	1	R-012	64	—	5.9+	—		
	皿a ヘラ	1	R-001	65	15.2	1.75	12.2	○	
須	蓋4	1	R-009	57	19.2	1.2+	—		
	坏	1	R-007	58	12.4	3.2+	—		
	坏a	1	R-006	59	14.5	3.25+	10.2		
	皿a×坏a	1	R-015	60	—	0.9+	—		

黒A	椀c1	1	R-013	68	—	1.95+	8.8		
		2	R-004	69	19.0	7.0	10.4		

S-92

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	蓋3	1	R-010	39	13.6	1.35+	—		
	坏c	1	R-007	41	—	1.8+	8.6		
	坏	1	R-005	40	—	2.95+	—		

S-93

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	坏a ヘラ	1	R-001	1	—	1.3+	6.4+		

S-96

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	坏	1	R-001	1	—	3.0+	—		
	皿a ヘラ	1	R-004	2	18.0	2.2	15.5	○	—

S-灰色砂土

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	小皿a	1	R-004	10	9.9	1.1	7.9	○	×
	坏	1	R-001	12		2.9+			
須	蓋4	1	R-022	2	—	1.1+	—		
	坏a ヘラ	1	R-019	4	12.0	2.2+	6.0		
	坏	1	R-002	5	14.25	3.7+			

表土

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
黒A	椀c2	1	R-002	22	—	3.05+	8.4		

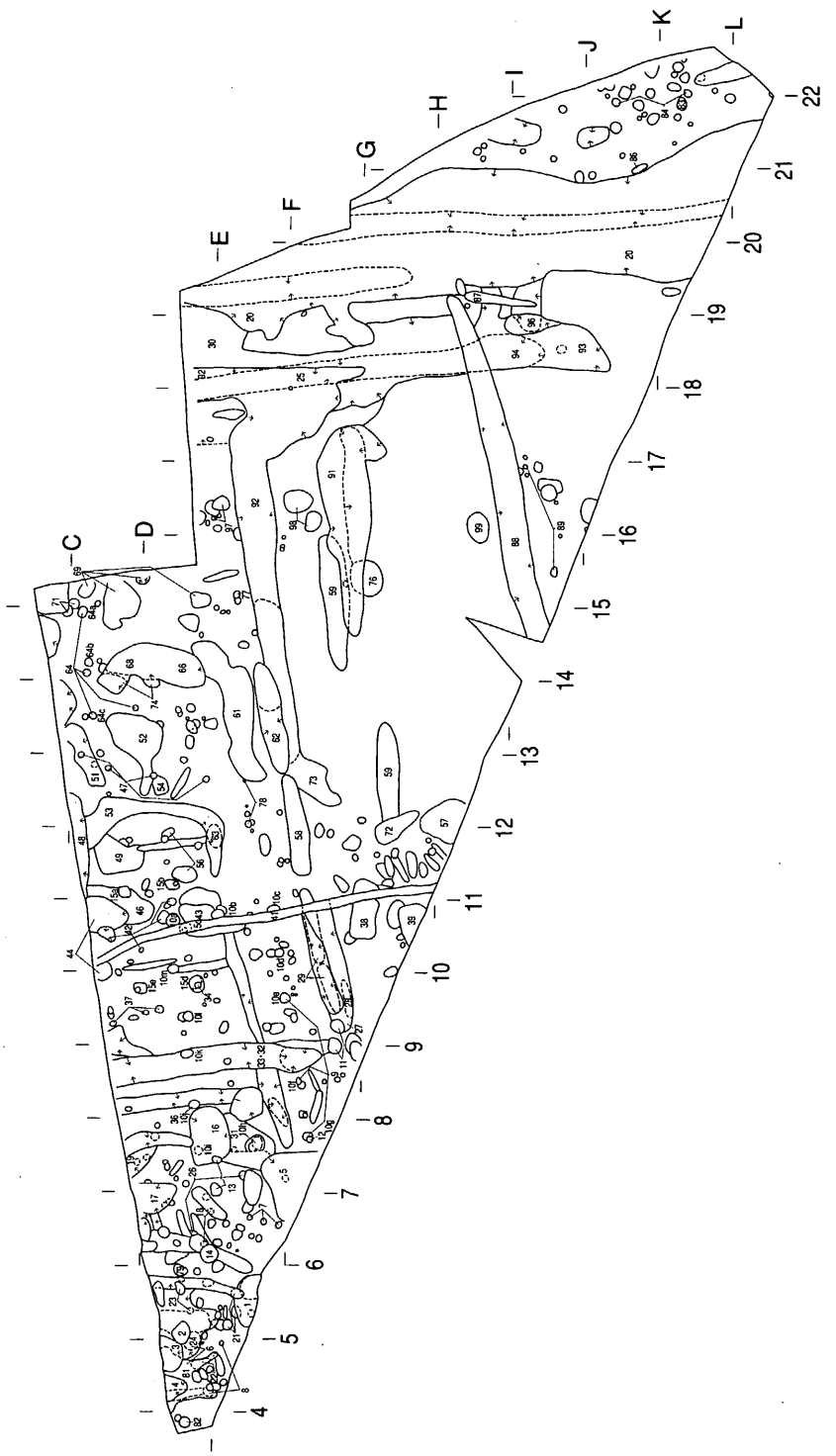


図164.条120次遺構略測図

表39.大宰府条坊跡　154次調査　遺構一覧（1）

S-番号	遺構番号	遺構性格	堆積土	備考（先後関係など）	時期	地区
1	154SB001	掘立柱建物				C7他
2	154SX002	ピット	黒茶色土		奈良	D4
3	154SX003	ピット	黒茶色土		奈良	C4
4	154SX004	ピット	黒茶色土		奈良	B6
5	154SB005	掘立柱建物	淡茶色土		奈良	C7他
6	154SX006	ピット	茶黒色土		奈良	E7
7	154SX007	ピット	茶黒色土		奈良	G9
8	154SD008	溝	灰茶色土		奈良	F8
9	154SX009	凹み	茶黒色土		奈良	F9
10	154SB010	掘立柱建物	黒茶色土		奈良	C6他
11	154SX011	ピット	黒茶色土		奈良	F8
12	154SD012	溝	黒茶色土		奈良	G8
13	154SX013	凹み	黒茶色土		奈良	F8
14	154SX014	凹み	黒茶色土		奈良	G6
15	154SD015	溝	茶黒色土		奈良末期	Eライン
16	154SX016	ピット群		154SB120の柱穴を含む	奈良	F6
17	154SX017	ピット群			奈良	G6
18	154SX018	ピット群			奈良	G6
19	154SB040	掘立柱建物	茶黒色土		奈良	H9
20	154SD020	溝	茶黒色土	154SD015との切り合いは明確ではない	奈良	7ライン
21	154SB040	掘立柱建物			奈良	H8
22	154SX022	ピット	茶黒色土		奈良末	H9
23	154SX023	ピット	茶黒色土		奈良	I9
24	154SD024	溝	茶黒色土		奈良	I9
25	154SK025	土坑	灰黒色粘土→茶黒色土		奈良末	E7
26	154SX026	ピット	茶黒色土		奈良	I9
27	154SX027	ピット	茶黒色土		奈良	H6
28	154SD028	溝	茶黒色土		奈良	J9他
29	154SX029	ピット群			奈良末	J10
30	154SX030	凹み	茶黒色土		奈良前半	H9
31	154SX031	ピット		154SD050→154SX031	奈良後半	J9
32	154SX032	ピット群			奈良後半	K10
33	154SX033	ピット	暗茶色土		奈良後半	K10
34	154SX034	凹み	暗茶色土		奈良後半	L11
35	154SK035	土坑	茶黒色土	154SK035→154SX011	奈良後半	H8
36	154SX036	ピット	茶黒色土		奈良	L10
37	154SX037	ピット	茶黒色土	S-36との一連のピットか	奈良	L11
38	154SX038	ピット群	茶黒色土		奈良	N9
39	154SK039	土坑	茶黒色土		奈良	N9
40	154SB040	掘立柱建物			奈良後半	H9他
41	154SX041	凹み			奈良後半	N8
42	154SX042	ピット群	茶黒色土		奈良後半	N8
43	154SX043	ピット群	茶黒色土	154SB060の柱穴を含む	奈良後半	N6
44	154SX044	ピット		S-50黒褐色土除去後確認		J6
45	154SB045	掘立柱建物				G7他
46	154SB045	ピット		柱痕（方形）あり		I6
47	154SX047	凹み	黒茶色土	154SX047→154SD050	奈良後半	J6
48	154SD048	溝	黒茶色土		奈良後半	O6他
49	154SD048	溝	黒茶色土		奈良後半	O6他
50	154SD050	溝	黒色粘質土→茶色土	自然流路と考えられる		L9他
51	154SX051	凹み	灰茶色土	整地層	奈良後半	N6
52	154SX052	ピット	黒茶色土		奈良後半	N6
53	154SX053	掘立柱建物	黒茶色土	154SB060、125の柱穴を含む	奈良後半	N6
54	154SX054	掘立柱建物	黒茶色土		奈良後半	N7
55	154SB055	掘立柱建物				O6他
56	154SX056	凹み	黒色砂質土（炭化物混入）			H5
57	154SB045	ピット		154SB045→154SD050		I5
58	154SX058	ピット	黒茶色土			L8
59	154SX059	ピット	黒茶色土		奈良	L7
60	154SB060	掘立柱建物				O6他
61	154SB055	ピット				M7

表40.大宰府条坊跡　154次調査　遺構一覧（2）

S-番号	遺構番号	遺構性格	堆積土	備考（先後関係など）	時期	地区
62	154SX062	ピット		154SX063→154SX062		M8
63	154SX063	ピット		154SX063→154SX062		M8
64	154SX064	凹み	灰茶色土		奈良か	L8
65	154SE065	井戸		154SD050→154SE065	平安前期	J8
66	154SX066	ピット			奈良か	O5
67	154SX067	ピット群			奈良か	O5
68	154SX068	ピット群				N4
69	154SX069	溝	茶黒色土			N5他
70	154SX070	ピット				M7
71	154SX071	ピット		154SB060の柱穴を含む		O5
72	154SX072	ピット			奈良前半	N5
73	154SX073	凹み				P5
74	154SX074	ピット群		ただし、ピットというよりは、湿地のたまり状態　54SB060の柱穴を含む	奈良後半	N5
75	154SD075	南北溝				P5他
76	154SX076	凹み				N4
77	154SX077	ピット群				N4
78	154SX078	ピット群		154SX078→154SB115		O4
79	154SX079	凹み		154SB115の雨落ち溝の可能性あり		N4他
80	154SB115	ピット	白色粘土混入	分析試料採集		O4
81	154SX081	ピット	黒茶色土			O4
82	154SX082	ピット	黒茶色土			O4
83	154SX083	ピット	黒茶色土	柱痕あり		P5
84	154SX084	ピット	黒茶色土			P4
欠番						
86	154SK086	土坑				N4
87	154SX087	凹み				N3
88	154SX088	ピット群		154SB115の柱穴を含む		N3
89	154SD089	溝				O3
90	154SX090	土坑		154SK090→154SD050		Z5他
91	154SX091	ピット				O5
92	154SX092	ピット	暗黒茶色土			M5
93	154SX093	ピット群		154SX093→154SX079→154SX076　154SB115の柱穴を含む		N4
94	154SB115	ピット		154SB115→154SX079→154SX076　154SB115の柱穴を含む		N4
95	154SE095	井戸				K3
96	154SX096	ピット				M8
97	154SB125	建物				M6
98	154SB125	建物				M6
99	154SX099	建物				M6
100	154SE100	井戸			平安前期	J3
101	154SX101	ピット群				L6
102	154SX102	凹みか（溝状）				L5他
103	154SX103	ピット群				M6
104	154SB125	掘立柱建物				L6
105	154SB105	掘立柱建物				J5他
106	154SX106	ピット群				L5
107	154SX107	ピット群		154SB060・SB110・SB125の柱穴を含む		M5
108	154SX108	ピット群		154SX108→154SX102　154SB110の柱穴を含む		L5
109	154SX109	ピット群		154SX109→154SD048		L6
110	154SB110	掘立柱建物				L3
111	154SB125	ピット（柱穴）				L6
112	154SX112	ピット	黒茶色土	154SX111→154SX112		L6
113	154SX113	ピット	黒茶色土			M5
114	154SX114	ピット群			奈良	K6
115	154SB115	掘立柱建物				N3他
116	154SX116	ピット群			奈良	K6
117	154SX117	ピット群			奈良中頃	K5
118	154SX118	ピット群			奈良中頃	K5
119	154SD048	溝		S-48と同一と考えられるが便宜的に分ける	奈良中頃	K5
120	154SB120	掘立柱建物				F5
121	154SB105	ピット（柱穴）			奈良	K6
122	154SB105	ピット（柱穴）		154SB105→154SD048	奈良	K5

表41.大宰府条坊跡　154次調査　遺構一覧（３）

S-番号	遺構番号	遺構性格	堆積土	備考（先後関係など）	時期	地区
123	154SX123	ピット	黄色土ブロック混入		奈良	K5
124	154SB110	ピット			奈良	K4
125	154SB125	掘立柱建物				L6他
126	154SX126	ピット群			奈良	L4
127	154SB110	ピット		154SB110→154SX126	奈良	L4
128	154SX128	ピット群			奈良	L4
129	154SX129	ピット			奈良	L4
欠番						
131	154SD131	溝			奈良	L4
132	154SX132	ピット群			奈良	M4
133	154SX133	ピット		154SX133→154SX079	奈良	M4
134	154SX134	凹み（包含層）			奈良	M4
欠番						
136	154SX136	ピット				M4
137	154SB110	ピット群				M4
138	154SX138	ピット群		154SB110の柱穴を含む	奈良	M3
139	154SD139	溝			奈良	L3他
欠番						
141	154SX141	凹み	茶黒色土	154SB110の柱穴を含む		L3
142	154SX142	凹み		154SB110の柱穴を含む		L3
143	154SX143	ピット				L3
144	154SX144	ピット群	褐色粘土混入			L4
欠番						
146	154SX146	ピット群				J5
147	154SX147	凹み	黒色土			J5
148	154SX148	凹み	淡黒色土			J5
149	154SX149	ピット群				N3
欠番						
151	154SB105	掘立柱建物		154SB105→154SD050		J5
152	154SX152	ピット群				I5
153	154SX153	ピット群				K4
154	154SX154	ピット群				K3
欠番						
156	154SX156	土坑				M3
157	154SX157	ピット群		154SX157→154SX158→154SX087　154SB110・115の柱穴を含む		M3
158	154SX158	凹み				M3
159	154SX159	ピット群		154SB110の柱穴を含む		K3
欠番						
161	154SB110	ピット				L4
162	154SX162	凹み				K4
163	154SX163	ピット群				K4
164	154SB110	ピット群				K4
欠番						
166	154SB105	掘立柱建物				K4
167	154SX167	凹み				K4他
168	154SB105	掘建柱建物				J5
169	154SX169	ピット		154SX169→154SX147		J5
欠番						
171	154SX171	ピット群				J4
172	154SB105	掘立柱建物			奈良前半	J4
173	154SB105	掘立柱建物		154SB105→154SX147	奈良前半	J4
174	154SX174	ピット群				G5
欠番						
176	154SX176	ピット群				F5
177	154SB120	掘立柱建物				F5
178	154SB120	掘立柱建物				E5
179	154SX179	土坑	黄色土ブロック混入土	人為的に埋められたものと考えられる　154SK179→154SD015		E5
欠番						
181	154SX181	ピット群				H4
182	154SX182	凹み				H2
183	154SX183	溝				H3他

表42.大宰府条坊跡　154次調査　遺構一覧（４）

S-番号	遺構番号	遺構性格	堆積土	備考（先後関係など）	時期	地区
184	154SXK184	土坑	灰色粘土、砂の互層		弥生前期	G3
欠番						
186	154SX186	凹み				I3
187	154SX187	土坑				J3
188	154SX188	凹み		154SX188→154SE100	奈良前半	J3
189	154SX189	ピット			奈良	J3
欠番						
191	154SX191	ピット群				G2
192	154SX192	凹み			奈良か？	E2
193	154SB045	掘立柱建物				H6



図165.条154次遺構略測図（S=1/250）

表43.154次　遺物一覧表（1）

S-2

須恵器	坏×皿
土師器	甕

S-3

須恵器	蓋3
土師器	甕

S-4

須恵器	蓋c3、甕
土師器	坏c×皿c

S-5a

須恵器	蓋3、坏
土師器	把手、坏×皿
	焼塩壷

S-5b

須恵器	坏、蓋3
土師器	供膳具

S-5c

須恵器	蓋3、椀a、坏
土師器	甕

S-5d

須恵器	坏
土師器	皿b、甕

S-5e

土師器	甕

S-5f

須恵器	蓋3

S-6

須恵器	甕
土師器	破片

S-7

須恵器	坏a×皿a
土師器	甕a、供膳具

S-8

須恵器	坏c、皿a、甕
土師器	坏d、甕a、供膳具
弥生土器	支脚

S-9

須恵器	蓋c、蓋3、坏
土師器	甕a

S-10a

土師器	甕

S-11

須恵器	供膳具
土師器	甕a

S-12

須恵器	供膳具
土師器	供膳具、甕

S-13

須恵器	坏×皿
土師器	破片

S-14

須恵器	小蓋3、坏c、甕
土師器	甕a、高坏、供膳具

S-15

須恵器	坏c×皿c、壷、坏c、皿a、甕、蓋c3、大甕a、坏a、蓋3
土師器	甕a、壷c、坏c、坏d、坏、鉢×甕、把手付壷
	焼塩壷I、焼塩壷II
土製品	竈
瓦類	破片、平瓦（縄目叩）

S-16

須恵器	壷、坏c、蓋3、甕、坏（漆）、蓋c
土師器	甕a、坏×皿

S-17

須恵器	壷、坏c、蓋3
土師器	甕、坏
瓦類	平瓦

S-18

須恵器	小坏c
土師器	皿、甕a
土製品	焼土塊

S-19

須恵器	坏c、甕
土師器	坏、甕a
土製品	竈
瓦類	破片

S-20

須恵器	皿a、壷a、大坏c、坏、把手、坏×皿、坏a、蓋3、坏c
	坏c×皿c、甕、壷b、小壷、高坏、蓋c
土師器	坏d、坏c(搬入)、把手、甕a(筑後)、甕a、坏×皿
	坏d×蓋、皿a、蓋3、蓋c、椀c2、高坏、坏（漆）
	焼塩壷、煎熬土器
黒色土器A	坏、椀c
越州窯系青磁	水注×壷I（1）
土製品	竈、鞴羽口
石製品	砥石
瓦類	平瓦（縄目叩）

S-21

須恵器	甕、坏
土師器	甕a、蓋c

S-22

須恵器	坏c×皿c、坏a（漆）、甕、坏c
土師器	甕a

表44.154次　遺物一覧表（2）

S-23

須恵器	坏c

S-24

須恵器	坏、甕、蓋3
土師器	坏d、甕a、蓋3
	焼塩壷

S-25

須恵器	蓋1、小坏c、坏c、壷（漆）、大蓋c、蓋3、甕、蓋1
	壷b、坏a（墨書）、小鉢b、坏a、蓋2、皿a、坏
土師器	甕a、坏d、大坏c、蓋3、蓋c、皿c、把手、大皿a、甕
瓦類	平瓦(縄目叩、格子叩)、軒丸瓦

S-25 青灰色粘土

須恵器	大坏c、蓋、大皿c

S-25 黒灰色粘土

須恵器	甕、坏、坏a、坏c、蓋c3
土師器	甕a、坏d、皿a、鉢
土製品	竈
瓦類	平瓦(縄目叩)、丸瓦(縄目叩)

S-26

須恵器	蓋3
土師器	坏（搬入）、甕、皿

S-27

須恵器	坏c
土師器	皿a

S-28

須恵器	大甕、壷a、蓋3、壷b、壷a×c、坏a×皿a、坏c、甕a
土師器	坏c、皿a、甕
石製品	砥石
瓦類	丸瓦(縄目叩)、平瓦(格子叩)

S-29

須恵器	坏c、壷a、蓋3、坏
土師器	皿a×蓋、蓋3、高坏

S-30

須恵器	皿a、坏a、坏、壷a×c、瓶?、破片（墨書）、坏c
	蓋3、蓋c、坏a×皿a、壷a、小皿a、鉢b、壷b、甕
	小蓋c3（墨痕）
土師器	蓋3、甕、坏e(漆)、甕a、坏c×皿c、坏a(漆)、坏d
	把手付甕、蓋c、高坏
	焼塩壷
白磁	椀；IV（1）
土製品	焼土塊、竈
石製品	砥石
瓦類	破片(縄目叩)、平瓦(縄目叩)

S-31

須恵器	小壷?
土師器	小坏a（漆）、甕a

S-32

須恵器	坏a×皿a
土師器	甕
土師器	坏d、甕
	焼塩壷

S-33

須恵器	坏c、蓋3
土師器	皿a、坏×皿、甕
金属製品	鉱滓

S-34

須恵器	高坏、甕、坏c、蓋3、坏、坏c×皿c
土師器	坏c×皿c、甕、坏

S-35

須恵器	坏a、甕（墨痕）、蓋c、皿a、皿a（墨痕）、蓋3、甕
	小壷、鉢、坏c、坏c（墨痕）、蓋c3、坏d×皿a
土師器	坏c（搬入）、小坏c、甕、蓋3、坏d、把手、皿a、甕a
	小甕a、坏c、小坏d（漆）、鉢
	焼塩壷 I、焼塩壷 II
緑釉陶器	椀［東海］
土製品	焼土塊、竈
石製品	玄武岩製叩石、砥石
瓦類	平瓦、破片（縄目叩）

S-35 灰茶色土

須恵器	皿a、坏c、甕（平行叩、格子叩）、蓋3、坏a
土師器	坏c、坏d、甕a

S-36

土師器	甕a

S-37

須恵器	皿
土師器	供膳具

S-38

須恵器	蓋3、坏a、皿a、坏c
土師器	蓋3、甕、供膳具
	焼塩壷

S-39

須恵器	鉢b
土師器	甕a、皿×坏

S-40a

須恵器	甕、蓋3、坏×皿、壷
土師器	甕a、皿a

S-40b

須恵器	甕、蓋c、壷、坏×皿、坏c×皿c
土師器	甕a、蓋3
瓦類	丸瓦(縄目叩)

S-40c

須恵器	蓋3、坏×皿、甕、蓋c、坏、坏c
土師器	甕a、高坏、坏×皿、蓋c

表45.154次　遺物一覧表（3）

S-40d

須恵器		蓋3、甕、坏c
土師器		甕a、供膳具
		焼塩壺

S-40e

須恵器		皿a
土師器		坏c×皿c、甕
		焼塩壺

S-40f

須恵器		蓋3
土師器		甕a

S-40g

須恵器		坏×皿
土師器		坏c、甕a、坏d
		焼塩壺

S-40h

須恵器		壺、蓋3、坏c、蓋c、甕、坏a、小蓋c3、壺a
土師器		皿a、坏d×皿a、小甕a、蓋c、甕a
土製品		焼土塊

S-40i

須恵器		甕、壺、皿、坏c、坏a
土師器		蓋c、甕a、坏d、皿a

S-40j

土師器		坏×皿
土製品		鋳型？
石製品		加工品

S-41

須恵器		坏c、壺
土師器		供膳具

S-42

須恵器		蓋3、小壺、坏a
土師器		甕a、供膳具

S-43

須恵器		破片、蓋3、坏c、甕
土師器		甕a、供膳具
		焼塩壺
土製品		鞴

S-44

須恵器		坏
土師器		甕a

S-45c

須恵器		蓋3、坏a
土師器		坏×皿、甕a、小壺、高坏
土製品		焼土塊

S-45d

須恵器		鉢a、供膳具、坏
土師器		甕a、供膳具

S-46

須恵器		甕、坏×皿
土師器		皿、甕a
		焼塩壺
土製品		焼土塊
瓦類		平瓦（縄目叩）

S-47

須恵器		坏c、甕
土師器		甕a
土製品		鞴

S-48

須恵器		坏c、皿a、蓋3、蓋c、壺a、高坏、甕、壺蓋
土師器		甕a、蓋3、把手、坏c、小甕、手捏坏
		焼塩壺 I、焼塩壺 II
土製品		竈、鞴羽口
石製品		サヌカイト剥片
瓦類		破片

S-49

須恵器		蓋3、坏
土師器		甕a
土製品		瓦玉

S-50

須恵器		高坏、皿a、坏c、鉢、甕、壺、蓋3
土師器		蓋3、甕a、坏a、坏d(墨書)、高坏、皿a、壺(古式)
		焼塩壺 II
土製品		竈
瓦類		平瓦（縄目叩）、丸瓦（縄目叩）

S-50 黒褐色土

須恵器		小蓋a3、大甕、壺、大甕a、壺b、蓋c3、壺e、小壺
		大坏、蓋×皿、壺a×c、小皿a、壺蓋、鉢b、高坏、坏c
		甕、蓋3、坏a、蓋c、壺f×d、皿a、坏d、壺a、皿、坏
土師器		大皿c、把手、椀、坏、大坏d、皿、大坏c、坏c、甕a
		坏d(漆)、蓋3、高坏、蓋c、皿a、鉢、甕a(筑後)、坏d
		煎熬土器、焼塩壺
黒色土器A		坏d、蓋c、蓋3、坏a×皿a
緑釉陶器		破片［京都］
弥生土器		甕
金属製品		鉱滓
土製品		鞴羽口、竈
石製品		碁石、砥石、石鏃（黒曜石・安山岩）
瓦類		軒丸瓦、平瓦（縄目叩）、丸瓦

S-50 茶色土

須恵器		坏c、蓋c、壺a、高坏、坏×皿（墨書）、壺蓋、蓋3
		皿、甕
土師器		甕a、坏d、小坏、皿a
		焼塩壺
土製品		鞴羽口、竈
石製品		碁石（白）

表46.154次　遺物一覧表（4）

S-50 黒色粘土

須恵器	壺a、壷、甕、坏c
土師器	鉢、甕a、坏×皿、坏d、蓋3
弥生土器	甕
石製品	サヌカイト

S-51

須恵器	甕、蓋×高坏、壺蓋、蓋3、坏×皿、坏
土師器	甕a、供膳具

S-52

須恵器	坏×皿、蓋3、坏c、皿a（墨書）
土師器	坏d、甕a
	焼塩壺
黒色土器A	椀

S-53

須恵器	蓋3、坏c
土師器	甕a

S-54

須恵器	蓋3、坏×皿
土師器	甕a

S-55b

須恵器	蓋c3、小壺、甕、坏、蓋3
土師器	甕、坏

S-55c

須恵器	蓋3、坏c
土師器	甕a、供膳具
	焼塩壺

S-55d

須恵器	坏×皿、壷、皿
土師器	甑、甕a
土製品	竈

S-55e

須恵器	坏c、坏c（漆）
土師器	甕a

S-56

須恵器	蓋3、坏c、皿a、甕、蓋c、坏a、壷、小坏c、蓋c3、坏
	小蓋3、破片（墨書）、蓋3（墨書）
土師器	坏、把手、坏d（墨書）、鉢、蓋3、小甕、高坏、甕a
	皿c
	焼塩壺I、焼塩壺II
黒色土器A	坏d、坏c
土製品	竈
石製品	砥石（滑石）
瓦類	破片、平瓦(格子叩)

S-57

土師器	破片、甕a

S-58

須恵器	蓋3、坏c、皿×坏（墨書）
土師器	坏c、坏a、甕a
	焼塩壺
瓦類	破片、平瓦

S-59

須恵器	供膳具
土師器	甕、供膳具

S-60a

須恵器	坏×皿、坏c
土師器	坏c、甕a
土製品	焼土塊
瓦類	平瓦(縄目叩)

S-60b

須恵器	坏c、蓋3、坏
土師器	甕a、供膳具

S-60c

須恵器	高坏
土師器	甕a、供膳具

S-60d

須恵器	大坏c、甕、坏c
土師器	甕a、坏c、高坏、坏a×皿a

S-61

須恵器	甕、坏×皿、蓋3
土師器	甕a、坏c
石製品	チャート剥片

S-62

須恵器	蓋
土師器	坏d、坏c、甕a
黒色土器A	供膳具

S-63

須恵器	蓋3、坏c
土師器	坏d、椀c1、甕a
黒色土器A	破片

S-64

須恵器	蓋3、坏×皿
土師器	甕a、坏×皿、坏d

S-65

木製品	井戸枠（板材）

S-65 黒褐色土

須恵器	壷b、甕、大甕a、坏a、小壷、蓋3、蓋c、小蓋c3、坏c
	坏、壷e、蓋c3、皿a
土師器	蓋3、皿a、鉢、甕a、坏c、坏d、甕（筑後）、蓋c、甕
	供膳具（漆）、椀c、甕b、坏、坏a
	焼塩壺
黒色土器A	坏、坏d
瓦類	破片、平瓦(縄目叩)、軒平瓦

S-65 黒褐色土（下半）

土師器	坏a、坏d、皿a、甕a、坏×皿（墨書）
	焼塩壺
瓦類	軒平瓦

S-65 灰茶色砂

須恵器	壷、坏c、鉢a、蓋3、皿a、高坏、小壷、蓋c、坏、坏a×椀a
土師器	蓋3、甕a、坏d（墨書）、坏c
灰釉陶器	壷（1）

表47.154次　遺物一覧表（5）

S-65 黒色粘土

須恵器	坏c、蓋3（墨書）、坏a×Ⅲa、甕、蓋a3
土師器	甕a、坏d、蓋3、高坏、坏
	焼塩壺
黒色土器A	坏d
弥生土器	甕
木製品	井戸枠（曲物）
土製品	竈
瓦類	軒平瓦(縄目叩)

S-66

須恵器	坏、甕
土師器	Ⅲ、甕

S-67

須恵器	坏×Ⅲ
土師器	甕a、坏×Ⅲ（坏d）

S-68

須恵器	坏a、坏c
土師器	甕a、坏×Ⅲ
瓦類	平瓦(縄目叩)

S-69

須恵器	坏c、壺、高坏×蓋2、甕、蓋3、高坏、坏
土師器	甕a、Ⅲ、坏d
	焼塩壺

S-70

土師器	Ⅲa、甕

S-71

須恵器	小壺、蓋3、坏c
土師器	甕a、蓋3
	焼塩壺

S-72

須恵器	蓋3、蓋c、Ⅲ、Ⅲa
土師器	甕a、小甕、坏d
	焼塩壺

S-73

須恵器	蓋3、坏×Ⅲ
土師器	椀、Ⅲa、甕
瓦類	破片(縄目叩)

S-74

須恵器	小蓋3、坏c、蓋3、甕
土師器	Ⅲa、甕a、坏d

S-75

須恵器	甕、坏c、蓋3、壺、蓋c、坏a、坏
土師器	甕a、Ⅲ、把手付甕、Ⅲa、大甕a、高坏
石製品	軽石
瓦類	平瓦(縄目叩)

S-76

須恵器	坏c
土師器	坏c×Ⅲc、甕a

S-77

須恵器	坏
土師器	坏a、甕a、供膳具破片
瓦類	破片

S-78

須恵器	蓋3、坏×Ⅲ、坏
土師器	甕、坏×Ⅲ

S-79

須恵器	蓋3、甕、坏c
土師器	甕a、大Ⅲ、供膳具
	焼塩壺

S-80

須恵器	蓋3、坏×Ⅲ
土師器	甕a

S-81

須恵器	蓋3、坏×Ⅲ
土師器	甕、供膳具
	焼塩壺

S-82

土師器	破片

S-83

須恵器	坏c
土師器	高坏、甕、坏d（漆）、坏c
	焼塩壺
瓦類	丸瓦(縄目叩)

S-84

土師器	甕

S-86

須恵器	坏c、蓋3、蓋c
土師器	甕a、供膳具

S-87

須恵器	壺、甕、蓋3、坏c、坏×Ⅲ、Ⅲa、壺×甕
土師器	坏c×Ⅲc、甕a、坏c、Ⅲb、坏a
	焼塩壺
土製品	鞴、焼土塊
石製品	水晶
瓦類	破片

S-88

須恵器	坏c、蓋3、甕
土師器	坏d、把手、甕a、坏c

S-89

土師器	供膳具

表48.154次　遺物一覧表（6）

S-90

須恵器	坏c、蓋3、甕、皿a、壷a、蓋c、蓋2×高坏、坏
土師器	坏d、甕a
	煎熬土器

S-91

須恵器	蓋3、蓋c、坏
土師器	破片、甕a

S-92

須恵器	壷、甕、皿、蓋3
土師器	甕a

S-93

須恵器	坏a×皿a、坏c
土師器	坏c、甕a
金属製品	鉱滓？
石製品	黒曜石片

S-94

須恵器	坏
土師器	甕a

S-95

須恵器	坏c、甕、蓋3、坏a、壷、坏、甕a
土師器	甕、蓋3、甕a、皿a、椀c
	焼塩壷
越州窯系青磁	破片；I（1）
木製品	井戸枠（板材・杭）
土製品	竈
瓦類	塼

S-95 灰黒色粘土

須恵器	坏a、甕、蓋3、壷蓋、壷、蓋c、皿a
土師器	蓋c、坏c、坏d×皿a、甕a、甕a（筑後）、甑、大椀
	焼塩壷
土製品	竈
石製品	軽石
瓦類	平瓦（縄目叩）

S-95 黄灰色砂土

須恵器	坏c、甕、蓋c、蓋3、皿a×坏a、大坏c、皿、壷
土師器	把手付甕a、坏d（漆）、皿a、甕a、坏a、蓋b、壷把手
	坏
	焼塩壷I、焼塩壷II-a
土製品	竈、鞴
石製品	石帯（蛇紋岩製）
瓦類	平瓦（縄目叩）、塼

S-95a

須恵器	甕、坏c、蓋3
土師器	甕a、皿a
瓦類	塼

S-95b

須恵器	甕、坏c、小坏c、蓋c、蓋3、皿a、壷
土師器	皿a、坏a、甕a、坏d、蓋c、把手
	焼塩壷
瓦類	平瓦（縄目叩）

S-95c

須恵器	甕、坏c、高坏、蓋3、壷、坏a
土師器	甕a、蓋c、坏a×皿a、坏、皿c
越州窯系青磁	水注×壷
金属製品	鉱滓？
石製品	滑石破片、碁石
瓦類	塼

S-95d

須恵器	坏a、坏c、蓋3、甕
土師器	椀c1、坏c、甕a
土製品	鞴羽口

S-96

須恵器	坏c、蓋3
土師器	甕（筑後）、甕a

S-97

須恵器	蓋3、小坏c、坏
土師器	甕a、供膳具

S-98

須恵器	破片、坏
土師器	甕a、供膳具

S-99

須恵器	蓋c、蓋3、甕、小壷、坏c
土師器	甕a、坏
	焼塩壷

S-100

須恵器	大蓋c、大皿c×大坏c（墨書）、坏、蓋3、甕a、大坏c
	坏a、甕、蓋c3、坏c、壷、蓋×高坏、大椀c、皿a
	鉢a、高坏、坏a（墨書）
土師器	甕a、鉢、蓋c、大椀、坏d、坏c、甑、把手、小甕a
	皿a、高坏、大皿、手捏土器
	焼塩壷I
土製品	竈
瓦類	丸瓦、平瓦（縄目叩）

S-100 灰色粘土

須恵器	大皿a×大坏a、皿a、蓋c3、壷、坏c、高坏、甕、蓋3
	坏a、坏
土師器	坏d、椀c1（穿孔）、甑、甕a

S-101

須恵器	坏、蓋3
土師器	甕a、蓋c

S-102

須恵器	坏a、甕、坏c、蓋3、小坏c、坏d
土師器	甕a、蓋3、坏a×皿a
	焼塩壷

S-103

須恵器	坏c、蓋3、坏×皿、壷
土師器	甕a、坏、坏c、大椀
瓦類	平瓦（縄目叩）

表49.154次　遺物一覧表（7）

S-104

須恵器	蓋c3、甕、坏×皿
土師器	甕a、供膳具
	焼塩壺
土製品	焼土塊

S-106

須恵器	甕、坏
土師器	甕a、坏×皿
瓦類	丸瓦

S-107

須恵器	坏、蓋3、皿a、鉢b、高坏
土師器	皿、甕a
土製品	輪

S-108

須恵器	皿a、坏
土師器	坏a、甕a
	焼塩壺

S-109

須恵器	皿a、坏c、蓋
土師器	坏a、甕

S-111

須恵器	坏c、壺、蓋3、皿a、甕、坏×皿
土師器	甕a、高台、供膳具

S-112

須恵器	甕、坏、坏c
土師器	甕a、坏d×坏a

S-113

須恵器	蓋3、坏×皿
土師器	甕a
	焼塩壺

S-114

須恵器	破片、皿a、蓋3、坏c
土師器	甕a、坏c
	焼塩壺
金属製品	鉱滓

S-116

須恵器	壺、坏c、蓋c、坏a、蓋3
土師器	甕a、供膳具、坏
	焼塩壺
土製品	輪羽口、焼土塊

S-117

須恵器	坏c、坏a、蓋3、壺、甕、蓋（墨痕）、坏d
土師器	甕a、蓋3、坏、甕×鉢
	焼塩壺
土製品	焼土塊
石製品	サヌカイト剥片

S-118

須恵器	蓋3、坏c、高坏
土師器	甕a
土製品	焼土塊
石製品	焼石

S-119

須恵器	坏c、蓋3、甕、坏a
土師器	甕
	焼塩壺

S-121

須恵器	蓋c、坏、皿、蓋3
土師器	蓋3、甕a
	焼塩壺
土製品	輪羽口×坩堝

S-122

須恵器	坏c、坏a、壺、蓋3、坏、高坏、坏×皿、坏d
土師器	甕a、高坏×蓋3、鉢
	焼塩壺

S-123

須恵器	坏c、蓋3、甕
土師器	甕、供膳具
土製品	土塊、輪羽口
瓦類	平瓦（縄目叩）

S-124

須恵器	蓋c、坏
土師器	坏d、甕a
	焼塩壺
土製品	焼土塊、輪

S-126

須恵器	蓋3、蓋c
土師器	甕a
	焼塩壺

S-127

須恵器	壺、蓋3、坏c
土師器	甕a

S-128

須恵器	坏c、甕
土師器	甕a
	焼塩壺
土製品	輪羽口×坩堝

S-129

須恵器	高坏、坏c、壺a、蓋3、壺a×c
土師器	甕a、壺、坏
	焼塩壺

S-131

須恵器	坏c、鉢、蓋c3
土師器	甕
	焼塩壺
金属製品	鉱滓
土製品	坩堝、輪羽口、焼土塊

表50.154次　遺物一覧表（8）

S-132

須恵器	坏c（漆）、蓋c、蓋3
土師器	甕a、供膳具

S-133

須恵器	坏、甕
土師器	甕a

S-134

須恵器	蓋3、坏
土師器	甕a
石製品	チャート剥片
瓦類	破片

S-136

須恵器	坏c、蓋c3、坏×皿、坏a、甕、皿、蓋3
土師器	甕a、把手、鉢×蓋、皿
	焼塩壷
土製品	輔羽口、焼土塊、坩堝×輔羽口
瓦類	平瓦（格子叩）

S-137

須恵器	托、坏c×皿c、皿、蓋3、坏、坏c（漆）、小蓋3、壷
	坏c（金属器模倣）
土師器	甕a、供膳具（漆）、甕（精製）
	焼塩壷
土製品	焼土塊

S-138

須恵器	皿a、坏、甕、蓋c3、高坏、蓋3
土師器	甕a、供膳具
	焼塩壷

S-139

須恵器	坏c
土師器	坏c
金属製品	鉱滓？

S-141

須恵器	坏c、蓋、甕
土師器	把手、坏、甕a、高坏、坏d
	焼塩壷
瓦類	丸瓦

S-142

須恵器	坏、蓋3、皿、坏c、壷b
土師器	甕a、供膳具、坏d×皿a、坏c×皿c、蓋3
	焼塩壷
土製品	輔羽口
石製品	碁石
瓦類	平瓦

S-143

須恵器	坏
土師器	甕

S-144

須恵器	蓋3、坏c3、甕、皿a
土師器	甕a、坏d
	焼塩壷
土製品	輔羽口

S-146

須恵器	坏c、蓋3、甕、坏a
土師器	供膳具、皿a、甕、坏c
	焼塩壷

S-147

須恵器	壷a×c、坏c3、坏（漆）、高坏b、皿a、坏a、蓋3、甕
	坏c（転用硯）、小坏c、壷a、壷蓋、蓋c
土師器	坏c、甕a、蓋c、蓋3、高坏、把手、椀c
	焼塩壷
金属製品	鉱滓
土製品	竈、土塊
石製品	砥石（細粒砂岩）

S-148

須恵器	蓋3、高坏、壷、甕、坏c、蓋c、蓋
土師器	蓋3、甕a
土製品	輔
瓦類	平瓦（縄目叩）

S-149

須恵器	坏
土師器	甕
石製品	サヌカイト剥片
瓦類	平瓦（縄目叩）

S-151

須恵器	蓋3、坏c、壷、高坏、大蓋3、坏c3、坏
土師器	甕a、蓋3、坏
	煎熬土器、焼塩壷
黒色土器A	供膳具

S-152

土師器	把手、供膳具、煮沸具

S-153

須恵器	壷f、供膳具
土師器	破片

S-154

須恵器	皿a、蓋3、坏c
土師器	甕a
	焼塩壷
黒色土器A	皿c
土製品	竈

S-156

須恵器	蓋3、坏c、甕、坏a
土師器	甕a、皿a、蓋3、坏d
土製品	焼土塊
瓦類	破片（格子叩）

表51.154次　遺物一覧表（9）

S-157

須恵器	蓋3、壺、供膳具（墨痕）
土師器	皿a、甕a、坏c
	焼塩壺
土製品	焼土塊

S-158

須恵器	坏c、甕、鉢a、蓋3、坏a×皿a
土師器	甕a、皿

S-159

須恵器	坏a、皿a、蓋3、小坏c、蓋c3、甕
土師器	坏d、皿a、甕a、鉢（精製）、坏c
	焼塩壺
土製品	竈、瓦玉、鞴羽口
瓦類	平瓦（縄目叩）

S-161

須恵器	坏a、坏c、蓋3、供膳具（漆）、坏（漆）、坏
土師器	甕a、供膳具
	焼塩壺

S-162

須恵器	坏c、皿a、蓋3、蓋c、壺a、甕、壺a×c
土師器	甕a、坏c
	焼塩壺
土製品	焼土塊
瓦類	平瓦（格子叩・縄目叩）

S-163

須恵器	蓋3、坏c
土師器	甕a、供膳具、坏
	焼塩壺
黒色土器A	坏×皿、甕

S-164

須恵器	坏c
土師器	甕、供膳具、坏
土製品	焼土塊

S-166

須恵器	坏c（漆）、蓋c、蓋3、甕
土師器	甕a、蓋c、蓋3、坏×皿、坏
	焼塩壺
土製品	竈

S-167

須恵器	蓋3、坏c、大甕a、供膳具（墨痕）
土師器	甕a、蓋c、坏、皿a、蓋3
	焼塩壺
黒色土器A	蓋3

S-168

須恵器	坏c、蓋3、甕、坏
土師器	甕a、坏
	焼塩壺

S-169

須恵器	甕
土師器	甕
	焼塩壺

S-171

須恵器	蓋3、坏c、高坏、甕、坏×皿
土師器	甕a、供膳具
	焼塩壺
土製品	竈
瓦類	破片（縄目叩）

S-172

須恵器	坏×皿、甕、坏c、蓋
土師器	甕a、小坏a
	焼塩壺

S-173

須恵器	坏、甕、蓋3、坏c、坏×皿
土師器	甕a
	焼塩壺
土製品	鞴羽口、焼土塊

S-174

須恵器	皿a、蓋c、坏×皿、甕、蓋3
土師器	甕a、鉢×蓋3

S-176

須恵器	皿a（墨痕）、坏c、蓋3、甕、皿
土師器	坏a、甕a、坏d×皿

S-177

須恵器	供膳具
土師器	破片

S-178

須恵器	坏c、蓋3、高坏、甕
土師器	甕a
黒色土器A	坏

S-179

須恵器	坏×皿、坏c、坏a
土師器	壷c（都城系）、甕

S-181

須恵器	坏c、高坏、蓋3、甕、蓋c
土師器	坏d、甕a、甑、把手、坏a、甕、無頚壷、坏
	焼塩壺
土製品	竈
石製品	碁石

S-182

須恵器	蓋3（墨痕）、坏c
土師器	甕a、甕
	焼塩壺

S-183

須恵器	坏c、甕、坏d、皿a、壺b、蓋3×高坏、蓋3、蓋c、壺
土師器	甕a、供膳具、坏d
	焼塩壺II、煮炊土器
瓦類	平瓦（縄目叩）

表52.154次　遺物一覧表（10）

S-184

弥生土器	甕、壷

S-186

須恵器	Ⅲa、小坏c、蓋3、坏a、蓋c、高坏脚、甕、高坏×蓋2
	蓋a（漆）、坏c（漆）、Ⅲ×坏（墨書）、小蓋3、壷
土師器	甕a、甕b、甕、坏d、坏a×Ⅲa、小坏c、Ⅲa、大蓋3
	把手、鉢
	焼塩壷
土製品	竈
石製品	碁石

S-187

須恵器	高坏×蓋、坏a（墨痕）、坏c（墨痕）、蓋c、Ⅲa
	蓋3、坏×Ⅲ
土師器	甕a、蓋3、高坏
	焼塩壷

S-188

須恵器	坏c
土師器	甕a、坏×Ⅲ

S-189

須恵器	坏c、蓋3、坏a×Ⅲa、Ⅲ、壷、蓋c
土師器	甕a、坏×Ⅲ
	焼塩壷

S-191

須恵器	蓋3
土師器	坏c×Ⅲc、甕a

S-192

須恵器	壷a、供膳具
土師器	坏d、甕

S-193

須恵器	甕、蓋c、蓋3
土師器	甕a

表土

須恵器	坏c(漆)、蓋c3、坏a、Ⅲa、甕、壷、把手、壷蓋、高坏
土師器	坏d(漆)、甕a、坏c、蓋3、高坏、Ⅲa
	焼塩壷
龍泉窯系青磁	坏：破片(1)
同安窯系青磁	Ⅲ：破片 I-2b(1)
国産陶器	瓶(1)
白磁	椀；IV×V(1)
肥前系陶磁器	染付(1)
国産磁器	染付(1)
土製品	竈
瓦類	平瓦(縄目叩、格子叩)

茶黒色土 B7

須恵器	甕、供膳具

茶黒色土 B8

須恵器	坏a×Ⅲa、壷×甕
土師器	破片

茶黒色土 C4

須恵器	壷
土師器	破片

茶黒色土 C5

須恵器	破片
土師器	破片

茶黒色土 C6

須恵器	坏
土師器	破片（漆）

茶黒色土 D4

須恵器	蓋3
土師器	甕a、破片
石製品	すり石

茶黒色土 D5

須恵器	坏a×Ⅲa、坏c
土師器	蓋3、甕a

茶黒色土 D6

須恵器	壷、坏、Ⅲa

茶黒色土 D7

須恵器	坏c、甕
土師器	坏×Ⅲ、甕
瓦類	平瓦（縄目叩）

茶黒色土 D8

須恵器	壷、坏×Ⅲ、坏c、甕、小坏c
土師器	甕、供膳具

茶黒色土 E2

須恵器	Ⅲ、坏a×Ⅲa、蓋3
土師器	破片

茶黒色土 E4

須恵器	甕、坏c、蓋3、壷、鉢a
土師器	甕a、鉢、坏c、甕
黒色土器A	蓋3
白磁	Ⅲ；II（1）
土製品	竈
石製品	碁石
瓦類	破片

茶黒色土 E5

須恵器	坏c、坏a、蓋4、甕
土師器	甕a、Ⅲa、坏、供膳具
瓦類	平瓦（縄目叩）

茶黒色土 E6

須恵器	甕、壷蓋×Ⅲ、Ⅲ、坏c、蓋3
土師器	甕

茶黒色土 E7

須恵器	壷、坏a、甕、坏c、蓋c、蓋3
黒色土器A	破片
土製品	竈
瓦類	平瓦（縄目叩）

表53.154次　遺物一覧表（11）

茶黒色土 E8

須恵器	坏c、甕、大甕、壺b
土師器	甕、坏c、小甕、坏×皿、蓋3、高坏、坏d

茶黒色土 E9

須恵器	甕、坏c、坏×皿
土師器	坏×皿、甕

茶黒色土 F2

須恵器	壺、蓋c、坏c
土師器	甕a、供膳具、坏

茶黒色土 F3

須恵器	坏c、甕、壺、蓋3
土師器	坏c×皿c、蓋3
	焼塩壺

茶黒色土 F5

須恵器	坏c、蓋3、坏a、甕
土師器	甕、坏c

茶黒色土 F6

須恵器	坏c
土師器	坏c、甕

茶黒色土 F7

須恵器	甕、蓋3、坏
土師器	煮たき具（甕）

茶黒色土 F8

須恵器	甕、坏c、壺、皿、坏a×皿a、蓋、蓋×高坏
土師器	甕、皿a、坏c、小皿a
土製品	硯

茶黒色土 G2

須恵器	蓋c、坏c、蓋3×高坏、皿
土師器	甕a、供膳具
土製品	硯

茶黒色土 G3

須恵器	坏c、甕、坏a、蓋3
土師器	甕a、供膳具

茶黒色土 G5

須恵器	甕、坏、小皿
土師器	甕a、皿×坏、坏c

茶黒色土 G7

須恵器	坏c、甕
土師器	坏×皿、蓋3、甕a
越州窯系青磁	その他；水注把手
瓦類	丸瓦

茶黒色土 G8

須恵器	蓋3、壺、甕
土師器	甕a、把手、供膳具

茶黒色土 G9

須恵器	蓋c、坏a、坏c、甕、鉢
土師器	坏d、把手
土製品	硯

茶黒色土 H2

須恵器	蓋3、坏、坏×皿、坏c
土師器	坏d、甕a
土製品	鞴羽口
石製品	碁石（白）
瓦類	平瓦（格子叩）

茶黒色土 H3

須恵器	甕、蓋c
土師器	坏（漆）、甕a

茶黒色土 H4

須恵器	坏×皿
土師器	供膳具（漆）、甕a

茶黒色土 H6

須恵器	坏c、壺、蓋3、坏a×皿a
土師器	甕a、皿a×坏a
石製品	砥石（細粒砂岩製）

茶黒色土 H7

須恵器	甕、蓋c、坏×皿
土師器	甕a、坏×皿

茶黒色土 H8

須恵器	坏c、壺a、甕
土師器	坏c、甕a
瓦類	破片

茶黒色土 H9

須恵器	皿a、坏a、甕
土師器	甕a、蓋3
土製品	硯

茶黒色土 I3

須恵器	蓋c、蓋3、壺蓋、坏c、壺、甕、椀、皿a
土師器	高坏、坏c、蓋3、甕a
	焼塩壺

茶黒色土 I4

須恵器	高坏、壺×鉢b、蓋3、皿、坏c
土師器	甕a、供膳具
	焼塩壺

茶黒色土 I5

須恵器	坏c、壺、蓋c
土師器	甕a、壺、供膳具

茶黒色土 I6

須恵器	坏c、蓋3、甕、坏a
土師器	甕a、供膳具

表54.154次　遺物一覧表（12）

茶黒色土 I7

須恵器	蓋c、蓋3、坏c、甕、鉢a
土師器	坏d、蓋3、蓋c、甕a

茶黒色土 I8

須恵器	坏、大甕、蓋3
土師器	供膳具
瓦類	破片（縄目叩）

茶黒色土 I9

須恵器	甕、蓋3、坏
土師器	甕、坏d
瓦類	平瓦（縄目叩）

茶黒色土 J2

須恵器	壷、坏c、蓋3
土師器	坏d、甕a
	焼塩壷
瓦類	破片（縄目叩）

茶黒色土 J3

須恵器	壷b、皿a、蓋3、甕、坏a、坏c、高坏、蓋c、小坏c 壷f×d、破片（漆）
土師器	把手、高坏、甕a、坏c、皿a×坏a
	焼塩壷
土製品	竈
石製品	碁石
瓦類	丸瓦

茶黒色土 J4

須恵器	蓋3、坏c、壷、甕
土師器	坏c、甕a、坏d
	焼塩壷
土製品	竈

茶黒色土 J5

須恵器	蓋3、甕、坏c、坏a×皿a
土師器	甕a、坏、供膳具
	焼塩壷
瓦類	破片

茶黒色土 J6

須恵器	甕、坏
土師器	甕a、坏×皿、坏c
瓦類	破片

茶黒色土 J8

須恵器	坏、皿a、蓋3、甕
土師器	坏、甕a、坏×皿、蓋3

茶黒色土 J9

須恵器	甕
土師器	坏c

茶黒色土 J10

須恵器	甕、坏c
土師器	坏c

茶黒色土 K3

須恵器	坏、甕、蓋3、坏a
土師器	甕a、供膳具、蓋3
	焼塩壷
黒色土器A	坏（漆）
瓦類	破片

茶黒色土 K4

須恵器	坏c（漆）、蓋c、坏、皿a、蓋3
土師器	皿a、甕a
	焼塩壷
瓦類	丸瓦

茶黒色土 K5

須恵器	坏a、蓋3、甕、壷b、坏a×皿a、壷
土師器	甕a、坏c×皿c
瓦類	破片

茶黒色土 K6

須恵器	甕、大坏c、蓋3×高坏、蓋3、坏c、壷a、甕a
土師器	坏d、甕、甕a

茶黒色土 K7

須恵器	供膳具
土師器	把手、甕

茶黒色土 K8

須恵器	坏c、蓋3
土師器	蓋c、坏c、甕

茶黒色土 K9

須恵器	壷、蓋3、坏c、皿a
土師器	甕、坏a×皿a

茶黒色土 K10

須恵器	蓋c、坏c、甕、坏a、壷蓋
土師器	坏×皿、甕、皿a、皿
瓦類	丸瓦

茶黒色土 L4

須恵器	坏
土師器	甕

茶黒色土 L5

須恵器	坏c、甕、鉢a、皿、高坏
土師器	供膳具、甕a、坏
土製品	坩堝
瓦類	平瓦（縄目叩）

茶黒色土 L6

須恵器	坏c、壷a、小蓋3、甕
土師器	坏c、供膳具、坏a×皿a

茶黒色土 L7

須恵器	甕a、坏c、壷、蓋3、坏a×皿a
土師器	甕a、坏c、高坏、坏d、蓋c、坏a
	焼塩壷
土製品	竈
瓦類	破片

表55.154次　遺物一覧表（13）

茶黒色土 L8

須恵器		坏a、蓋3、甕
土師器		甕a、坏c、蓋3、坏d
瓦類		丸瓦

茶黒色土 L9

須恵器		蓋3
土師器		蓋3、破片

茶黒色土 L10

須恵器		甕、蓋3、坏、壷、高坏、坏×皿
土師器		甕a
石製品		碁石

茶黒色土 L11

須恵器		甕、坏c
土師器		甕a、供膳具
瓦類		平瓦

茶黒色土 M4

須恵器		皿a、坏c、甕、蓋3、高坏
土師器		甕a、皿、皿a
瓦類		破片

茶黒色土 M5

須恵器		大蓋3、小坏c、蓋3、高坏、坏a、蓋c、高坏×皿、皿a 甕、坏c、壷蓋
土師器		甕a、甑、供膳具 焼塩壷
土製品		竈、鞴、坩堝
石製品		碁石
瓦類		平瓦（縄目叩）

茶黒色土 M6

須恵器		甕、蓋c、坏c、蓋3×高坏、蓋3、蓋a3、壷蓋、壷e 小皿a、皿a
土師器		椀c、甕a、坏、把手 焼塩壷
土製品		竈
石製品		砥石
瓦類		丸瓦、平瓦（縄目叩）

茶黒色土 M7

須恵器		坏c、甕、蓋3、皿a、壷
土師器		甕a、坏c

茶黒色土 M8

土師器		甕a、供膳具

茶黒色土 M9

須恵器		壷、蓋3、甕×壷
土師器		破片

茶黒色土 M10

須恵器		蓋、甕
土師器		破片

茶黒色土 M11

須恵器		供膳具
土師器		破片

茶黒色土 N5

須恵器		蓋c、坏a、壷、坏c、甕、蓋3、皿a×坏a、高坏
土師器		甕a、坏d、坏c 焼塩壷
瓦類		丸瓦、平瓦（格子叩、縄目叩）

茶黒色土 N6

須恵器		大甕、壷蓋、蓋3、壷
土師器		坏c、甕a、蓋3

茶黒色土 N7

須恵器		甕、坏c、小壷、蓋3
土師器		甕a、坏c

茶黒色土 N・O7

須恵器		甕、坏c、小壷、蓋3
土師器		甕a、坏c

茶黒色土 N8

須恵器		鉢b、坏c、甕a
土師器		坏c、甑、甕

茶黒色土 O4

須恵器		坏×皿
土師器		高坏、甕a

茶黒色土 O5

須恵器		甕、壷、蓋3、坏c、高坏、転用硯（坏×皿）、供膳具
土師器		皿a、把手、坏c、甕a、小壷、甕、坏×皿、小甕 焼塩壷
瓦類		平瓦（縄目叩）

茶黒色土 O6

須恵器		蓋3、坏c×皿c、坏×皿
土師器		甕a、坏×皿 焼塩壷

茶黒色土 P4

須恵器		壷蓋（漆）、坏c、蓋3、甕
土師器		供膳具、坏c、甕a、坏d（漆）

茶黒色土 P5

須恵器		小坏c、蓋3
土師器		破片、坏×皿

茶黒色土

須恵器		壷b
土師器		供膳具、甕a

灰茶色土 M4

須恵器		坏×皿
土師器		甕

Z

須恵器		甕、蓋c1
土師器		甕
瓦類		平瓦（縄目叩、格子叩）、丸瓦（文字瓦「左」） 丸瓦（格子叩）

表56.条154次　遺物計測表（1）

S-4

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	蓋c3 ヘラ	1	R-001	1	16.0	2.0+	—	○	

S-5a

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	蓋3	1	R-001	1	18.2	1.3+	—		

S-5b

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	蓋3	1	R-001	3	—	1.0+	—		
	坏	1	R-002	5	11.4	3.0+	—		

S-5c

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	蓋3	1	R-001	2	14.5	1.5+	—		
	椀a ヘラ	1	R-002	6	—	2.4+	9.5	○	—

S-5d

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	皿b	1	R-001	7	15.5	3.0+	—		

S-5f

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	蓋3	1	R-001	4	—	1.1+	—		

S-8

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	皿a ヘラ	1	R-001	2	18.0	2.2	15.6	○	—

S-15

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	蓋c3 ヘラ	1	R-001	4	15.0	1.7	—	○	
	蓋3	1	R-002	5	17.0	2.5+	—	○	
	皿a ヘラ	1	R-003	9	15.4	1.9	12.4	○	
	ヘラ	2	R-004	10	16.0	2.1	13.1	○	
		3	R-009	11	18.1	1.9+	—		
	坏a ヘラ	1	R-005	6	13.0	3.7	7.9	○	
	坏c	1	R-006	7	14.2	6.2	9.8	○	
		2	R-007	8	—	1.9+	10.0	○	
	坏	1	R-011	13	13.4	4.6+	—		

S-16

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	坏	1	R-001	2	15.0	1.9+	—		

S-19

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	坏c	1	R-001	13	—	1.1+	—		

S-20

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	蓋3 —	1	R-008	21	14.5	1.8+	—	—	—
	—	2	R-007	22	16.2	1.4+	—	○	—
	ヘラ	3	R-006	23	16.7	1.0+	—	○	—
	—	4	R-005	24	19.8	1.6+	—	○	—
	皿a ヘラ	1	R-010	25	18.6	1.7	13.9	○	—
	ヘラ	2	R-009	26	18.6	2.1	14.6	○	—
	坏 —	1	R-015	27	12.0	3.6+	—		
	坏c —	1	R-013	28	13.0	3.8	9.0	○	—
	—	2	R-012	29	15.6	4.3	8.5	—	—
	大坏c ヘラ	1	R-014	30	—	3.5+	12.2	○	—
土	皿a —	1	R-016	33	17.0	1.8	14.2	—	—
土	皿a ヘラ	2	R-003	34	17.2	1.2	14.2		
	ヘラ	3	R-004	35	17.6	1.7	14.4		
	椀c2 —	1	R-017	36	—	2.6+	8.3	○	
	坏c —	1	R-002	37	18.0	4.7	9.8	○	

S-24

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	坏d —	1	R-001	40	—	2.3+	7.2	—	

S-25

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	蓋L	1	R-005	1	11.0	1.3+	—		
		2	R-006	2	17.3	1.5+	—		
	蓋3	1	R-007	3	14.2	1.5+	—	○	—
	坏	1	R-012	4	12.4	2.8+	—	—	—
	坏a ヘラ	1	R-015	5	12.6	3.7	8.8		
	坏c —	1	R-013	6	—	1.4+	8.0	○	—
	—	2	R-008	7	14.5	3.7	8.2	○	—
	—	3	R-009	8	16.6	5.9	11.0	—	—
	皿a ヘラ	1	R-011	9	15.0	1.9	11.8	—	—
	ヘラ	2	R-010	10	19.4	2.3	16.4	○	—
土	坏d	1	R-001	12	16.0	3.6	8.6	○	—

S-25 灰黒色粘土

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	蓋c3 ヘラ	1	R-004	1	12.8	2.3+	9.65	—	—
	坏a ヘラ	1	R-001	2	12.9	3.6+	8.9	○	—
	ヘラ	2	R-003	3	12.6	3.6+	7.6	○	—
	ヘラ	3	R-006	4	13.2	3.3	8.8	○	×
	坏c ヘラ	1	R-002	5	15.0	5.45+	9.4	○	—
土	坏d —	1	R-005	6	13.2	3.4	5.95	○	×
	皿a —	1	R-007	7	18.8	2.3	15.3	—	—
	—	2	R-009	8	19.4	2.5	15.7	—	—

S-25 青灰色粘土

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	大皿c —	1	R-001	10	23.4	4.2	17.8	—	—

S-26

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	蓋3 —	1	R-001	3	—	1.0+	—		
土	坏 —	1	R-002	4	—	2.4+	—		

S-27

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	坏c —	1	R-001	5	14.0	3.7	10.6	○	
土	皿a —	1	R-002	6	16.4	1.7	13.6	—	

S-28

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	蓋3	1	R-003	60	14.3	1.7+	—	○	

S-29

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	坏 —	1	R-001	8	15.4	3.5+	—	—	—
土	蓋3 —	1	R-003	7	—	1.6+	—	—	—
	皿a×蓋	1	R-002	9	14.6	1.7	—	—	—

S-30

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	蓋c3 ヘラ	1	R-001	10	11.6	2.1+	—	○	
	蓋3 ヘラ	1	R-002	11	14.7	1.6+	—	○	
	坏 —	1	R-007	12	13.4	3.9+	—	—	
	坏a ヘラ	1	R-003	13	—	2.0+	5.7	×	○?
	皿a ヘラ	1	R-005	14	14.2	1.8	11.4	○	

表57.条154次　遺物計測表（2）

須	皿a	ヘラ	2	R-006	15	15.3	2.1	12.0	○	—
		ヘラ	3	R-004	16	14.6	1.7	12.3	○	
土	坏c	—	1	R-015	18	—	2.9+	6.2	—	○
	蓋3		1	R-011	21	17.2	1.5+	—		

S-31

種別	器種		番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	坏a	—	1	R-001	26	9.8	3.6	6.1	—	

S-34

種別	器種		番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	蓋3		1	R-002	27	14.4	1.45+	—	—	—
	坏		1	R-004	29	14.6	4.1+	—	—	—
	坏c×皿c		1	R-005	30	—	1.1+	11.4	○	—
土	坏		1	R-003	28	12.6	2.6+	—	—	—

S-35

種別	器種		番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	蓋c3	—	1	R-003	1	14.3	1.8+	—	○	
	蓋3	ヘラ	1	R-001	2	14.7	1.2+	—	○	
		ヘラ	2	R-002	3	20.5	1.2+	—	○	
	坏a	ヘラ	1	R-008	4	14.4	3.4	9.6	○	
	坏d×皿a	ヘラ?	1	R-009	5	18.0	3.0	14.4		
	坏c	—	1	R-011	6	15.2	5.8	8.4	○	
	皿a	ヘラ	1	R-007	7	15.1	1.6	13.2	—	
		ヘラ	2	R-006	8	17.6	2.3	14.8	○	
		ヘラ	3	R-005	9	18.6	1.7	14.6	○	
		ヘラ	4	R-004	10	19.0	2.2	16.5	○	○
土	小坏d	—	1	R-014	14	11.6	3.0+	—		
		—	2	R-028	15	11.6	2.7	5.8		
	坏c	—	1	R-027	16	—	4.1	9.4		

S-35 灰茶色土

種別	器種		番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	坏a	ヘラ	1	R-001	1	12.2	3.2	9.6	○	—
	皿a	ヘラ	1	R-002	2	13.6	1.7	11.2	○	—
土	坏c	—	1	R-004	3	13.0	4.3	7.3	—	—
	坏d	—	1	R-003	4	11.6	2.9	6.0	—	—
		—	2	R-005	5	13.4	2.8	7.0	—	—
		—	3	R-006	6	14.4	3.0	8.4	—	—
		—	4	R-007	7	17.5	4.4	8.5	—	—

S-38

種別	器種		番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	蓋3	ヘラ	1	R-003	32	19.2	1.7+	—	—	
	坏c	—	1	R-002	33	—	1.1+	10.0	—	
	皿a	ヘラ	1	R-001	34	13.4	1.9+	9.6	—	

S-40a

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	蓋3	1	R-001	8	—	1.2+	—		

S-40c

種別	器種		番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	蓋3		1	R-001	9	—	1.1+	—		
	坏c	ヘラ	1	R-003	15	—	1.5+	8.8	○	
	坏		1	R-002	16	13.6	2.1+	—		
土	蓋c		1	R-004	21	—	2.1+	—		

S-40d

種別	器種		番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	蓋3		1	R-001	10	—	1.1+	—		
	坏c	ヘラ	1	R-002	14	—	1.5+	7.2	○	○?

S-40e

種別	器種		番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	皿a	—	1	R-001	18	—	2.4+	—	—	

S-40h

種別	器種		番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	蓋c3	ヘラ	1	R-001	11	10.6	2.8	—	○	
	坏a	ヘラ	1	R-002	17	13.6	3.9	9.0	?	
土	皿a	—	1	R-003	20	21.4	1.9	17.2	—	

S-40i

種別	器種		番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	坏c	—	1	R-001	12	—	2.9+	—		
土	皿a	ヘラ	1	R-002	19	17.6	2.1	14.2	—	

S-45c

種別	器種		番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	蓋3	—	1	R-003	1	15.0	1.7+	—	○	
		ヘラ	2	R-001	2	15.1	2.0+	—	○	
	坏a	ヘラ	1	R-002	5	13.3	3.2	9.0	○	

S-47

種別	器種		番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	坏c	ヘラ	1	R-001	38	14.0	4.3	9.4	○	

S-48

種別	器種		番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	蓋3		1	R-001	42	14.9	1.6+	—		
			2	R-002	44	16.2	1.9+	—		
			3	R-003	45	22.6	1.8+	—		
	坏c	ヘラ	1	R-004	47	11.2	3.6	7.0	○	
	皿a	ヘラ	1	R-005	48	18.0	2.5	15.4	○	
		ヘラ	2	R-006	49	20.2	1.8	16.2	○	
		—	3	R-008	50	19.0	2.1+	16.0	—	
		ヘラ	4	R-007	51	18.0	2.6	14.0	—	

S-49

種別	器種		番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	蓋3	—	1	R-001	43	14.6	2.0	—		
	坏	—	1	R-002	46	12.6	3.2+	—		

S-50

種別	器種		番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	蓋3	ヘラ	1	R-007	74	14.2	1.5+	10.9	○	
	皿a	ヘラ	1	R-002	75	13.6	2.0+	11.5	○	×
		ヘラ	2	R-001	76	20.2	2.2+	18.0	○	×
土	蓋3	—	1	R-010	78	16.8	1.7+	—	○	—
	坏d	—	1	R-011	79	14.4	3.2	7.2	—	—
	皿a	ヘラ	1	R-004	80	17.1	1.7+	12.6	—	—
		—	2	R-006	81	18.6	2.25+	16.2	○	—

S-50 黒褐色土

種別	器種		番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	蓋c	ヘラ	1	R-035	88	—	1.6+	—	○	—
	蓋3	—	1	R-085	89	19.3	1.8+	—	—	—
		ヘラ	2	R-006	91	11.6	1.8+	9.5	○	—
		ヘラ	3	R-083	94	13.4	1.2+	9.75	○	—
		—	4	R-027	95	13.3	1.3	10.6	○	—
		ヘラ	5	R-026	96	12.95	1.2	9.0	○	—
		ヘラ	6	R-044	97	13.8	2.55+	11.2	○	—
		ヘラ	7	R-016	98	14.6	2.2+	11.7	○	—
		—	8	R-045	99	15.2	1.3+	10.2	○	—
		—	9	R-017	100	16.1	1.8+	11.2	○	—
		ヘラ	10	R-025	103	17.7	1.1	12.2	○	—
		—	11	R-004	104	18.3	2.2+	15.2	○	—

表58.条154次　遺物計測表（3）

須	蓋3	—	12	R-047	105	18.5	1.65+	12.55	○	—
		ヘラ?	13	R-086	106	18.15	1.9+	12.8	—	—
	蓋c3	ヘラ	1	R-084	90	13.25	1.3+	9.05	○	—
		ヘラ	2	R-002	92	12.7	2.2+	8.2	○	×
		ヘラ	3	R-019	93	13.0	1.7	8.2	○	—
		ヘラ	4	R-036	101	16.25	2.05	12.35	○	—
		ヘラ	5	R-015	102	17.5	2.1	11.8	○	—
	蓋4×皿a	ヘラ	1	R-046	107	19.5	1.55+	—	○	—
	坏		1	R-009	108	12.6	3.0+	—	—	—
		—	2	R-091	120	17.0	5.5+	—	—	
			3	R-008	121	18.4	5.2+	—	—	
	坏a	ヘラ	1	R-042	109	13.8	3.2	9.3	○	○
		ヘラ	2	R-080	110	12.6	3.5	7.8	○	
		ヘラ	3	R-079	111	12.5	3.9	8.4	○	—
		ヘラ	4	R-081	112	13.6	3.2	9.1	○	
	坏c	—	1	R-028	113	12.0	3.7	7.0	—	—
		ヘラ	2	R-082		12.0	3.9	6.1	○	
		ヘラ	3	R-021	114	12.5	4.6	6.5	○	—
		ヘラ	4	R-003	115	12.9	3.7+	8.0	○	—
		ヘラ	5	R-038		13.5	4.1	8.7	○	○
			6	R-039		13.2	3.6	8.9		
		ヘラ	7	R-041		—	1.4+	9.7	○	—
		ヘラ	8	R-040		—	1.9+	13.8	○	—
			9	R-005	116	13.8	3.9	9.3	○	—
		—	10	R-029	117	13.7	4.9	9.7	—	—
		ヘラ	11	R-030	118	—	3.0+	8.8	○	—
		ヘラ	12	R-001	119	16.6	5.35	10.35	○	×
	大坏		1	R-090	156	21.6	3.9+	—	—	—
			2	R-089	157	23.0	6.4+	—	—	—
	小皿a	ヘラ	1	R-056	122	9.8	1.9	8.2	—	—
	皿a	—	1	R-057	123	—	2.2+	—		
		ヘラ	2	R-054	124	17.2	1.6	14.5	—	—
		ヘラ	3	R-055	125	16.2	1.9	13.0	—	—
		ヘラ	4	R-049	126	11.8	1.6	9.65	—	—
		ヘラ	5	R-018	127	14.0	2.15	11.1	○	○
		ヘラ	6	R-087	128	16.5	2.2	11.9	○	
		ヘラ	7	R-024	129	18.6	2.4	15.1	○	—
		—	8	R-088	130	20.2	2.1+	16.6	—	
黒A	蓋3		1	R-061	142	20.6	2.2+	—		
	坏d		1	R-063	143	—	2.5+	7.8		
	坏a×皿a		1	R-062	144	—	0.9+	8.2		
土	蓋3		1	R-010	145	26.2	1.7+	—		
	坏d		1	R-066		—	1.2+	7.4		
			2	R-023		—	2.5+	10.4	—	
			3	R-067	146	13.0	2.7+	—		
		—	4	R-095	147	14.2	3.2	7.8	—	
		—	5	R-065	148	—	2.2+	7.1		
		—	6	R-032	149	15.2	3.0+	—	—	
	坏		1	R-069	150	—	2.5+	—		
			2	R-068	151	—	2.0+	—		
	皿a	—	1	R-094	152	18.0	1.8	15.0	—	
		—	2	R-093	153	17.6	2.1	15.0	—	
		—	3	R-092	154	19.0	2.0	15.9	—	
	皿	ヘラ	1	R-033	155	—	0.9+	—	○	—
	大坏c		1	R-064	158	21.0	7.1	10.1		

S-50 茶色土

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	坏c	1	R-001	180	12.6	4.55	8.0	○	—

S-50 黒色粘土

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	坏c	1	R-002	184	—	3.6+	—	—	—

S-52

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	皿a ヘラ	1	R-001	39	18.8	2.0	15.4	○	—

S-53

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	蓋3 ヘラ	1	R-001	40	14.2	1.5+	8.8	○	—
	坏c	1	R-002	41	12.6	3.5	7.8	—	—

S-55b

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	蓋3 ヘラ	1	R-001	25	14.0	1.15+	9.6	○	—

S-55c

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	蓋3	1	R-003	26	—	1.3+	—		
		2	R-002	27	—	0.9+	—		
	坏c ヘラ	1	R-001	28	—	2.5+	9.8	○	

S-55d

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	皿	1	R-002	30	—	2.7	—	—	

S-55e

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	坏c	1	R-001		—	1.6+	7.4		

S-56

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	蓋3 ヘラ	1	R-012	43	17.4	2.0	—		
	ヘラ	2	R-017	45	13.2	1.5+	—	○	
	ヘラ	3	R-018	48	17.2	1.3+	—	○	
	ヘラ	4	R-019	49	16.6	1.7+	—	○	
	小蓋3 ヘラ	1	R-024	44	11.7	1.2	—	○	
	蓋c3 ヘラ	1	R-015	46	13.5	1.5+	—	○	
	ヘラ	2	R-016	47	14.8	1.5+	—	○	
	皿a —	1	R-013	53	14.0	2.1	11.6	—	—
	ヘラ	2	R-014	54	20.8	2.0	18.0	○	—
	坏	1	R-023	50	—	3.6+	—		
	坏c	1	R-020	52	—	3.2+	8.8	○	
土	坏	1	R-004	55	16.3	3.6+	—		
	坏d —	1	R-021	56	—	2.2+	9.5	—	—
黒A	坏c	1	R-005	65	—	1.6+	12.0	—	—

S-60a

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	坏c	1	R-001	34	—	1.5+	9.5	○	

S-60b

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	蓋3	1	R-003	32	—	1.5+	—		
	坏	1	R-002	33	—	3.3+	—		
	坏c ヘラ	1	R-001	36	15.9	3.3	10.0	○	

S-60d

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	大坏c —	1	R-001	35	—	1.4+	11.8	○	

S-63

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	蓋3	1	R-003	67	—	1.2+	—		
土	椀c1 —	1	R-002	68	—	3.2+	9.6	—	
	坏d —	1	R-001	69	14.1	3.8	6.5	—	

表59.条154次　遺物計測表（4）

S-65 黒色粘土

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	蓋3 ヘラ	1	R-008	1	13.0	1.7+	—	○	○
	—	2	R-016	2	14.6	1.7+	—	○	
	坏c ヘラ	1	R-017	3	—	1.4+	6.5	—	—
	ヘラ	2	R-001	4	15.0	5.0	8.8	○	
土	蓋3	1	R-019	5	—	1.5+	—	—	
	坏d	1	R-002	6	11.6	3.2	5.4	—	
		2	R-003	7	13.0	3.0	7.8	○	
		3	R-009	8	12.5	2.75	6.2	○	
		4	R-004	9	13.6	3.1	8.0		
		5	R-007	10	14.8	3.0	9.0	—	
		6	R-010	11	14.6	3.1	8.8		
		7	R-006	12	14.7	3.4	8.0	○	
		8	R-005	13	17.0	3.1	9.6	○	
	坏 —	1	R-020	14	8.0	1.9+	—	—	
黒A	坏d —	1	R-018	17	—	1.5+	7.4	—	

S-65 黒褐色土

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	蓋c3 ヘラ	1	R-006	1	14.2	1.7+	—	○	
	蓋3 —	1	R-032	2	16.8	1.4+	—	—	
	小蓋c3 ヘラ	1	R-002	3	12.0	2.6+	—	○	—
	坏 —	1	R-005	4	12.4	2.5+	—	—	
		2	R-031	5	13	3.2+	—	—	
	—	3	R-003	6	12.4	3.4+	—	—	—
	坏c ヘラ	1	R-001	7	14.0	5.3+	8.4	○	—
	—	2	R-030	8	17.1	5.6+	10.0	—	—
土	蓋3	1	R-029	11	16.7	2.0+	13.1	—	—
	坏	1	R-020	12	—	3.6+	—		
	—	2	R-034	24	17.0	4.15+	—	—	—
	坏a ヘラ	1	R-007	15	13.0	2.8	7.7	○	—
		2	R-010	20	14.4	4.0	10.5	—	—
	坏c	1	R-025	25	—	2.6+	10.0		
	坏d	1	R-021	13	—	2.6+	—		
	—	2	R-019	14	—	3.1+	—		
	—	3	R-016	16	11.4	2.6+	—		
	—	4	R-008	18	14.2	2.8	8.1	—	—
	—	5	R-015	19	15.0	2.8+	—	—	—
	—	6	R-008	22	15.6	3.9	8.1	—	—
	—	7	R-017	23	17.0	3.4+	—		
	Ⅲa ヘラ	1	R-027	26	12.3	1.9	9.8	—	—
	—	2	R-018	27	14.8	1.4	12.0		
	—	3	R-012	29	16.4	1.3	12.0		
	—	4	R-011	31	20.0	2.2	16.7	—	—
黒A	坏d —	1	R-033	40	—	2.2+	11.4	—	—

S-65 黒褐色土(下半)

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	坏d —	1	R-002	17	13.0	2.8	6.6	—	—
	坏a ヘラ	1	R-001	21	14.0	3.4	8.2	—	—
	Ⅲa ヘラ	1	R-004	28	14.5	1.7	11.0	○	○
	ヘラ	2	R-003	30	16.4	1.8	13.0	○	○

S-65 灰茶色粘土

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	坏	1	R-002	1	14.0	3.4+	—	—	—
		2	R-006	2	13.6	3.8+	—	—	—
	坏c ヘラ	1	R-008	3	—	2.0+	10.0	○	—
	ヘラ	2	R-001	4	14.0	4.5	7.2	○	—
	ヘラ	3	R-007	5	16.5	5.9+	8.95	○	—
	坏a×椀a ヘラ	1	R-004	6	—	1.7+	10.6	○	—
	Ⅲa —	1	R-003	7	17.5	1.8	14.4	—	—
土	蓋3	1	R-010	10	14.6	2.2+	11.0		
	坏d —	1	R-011	11	—	1.8+	8.6	—	—

S-66

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	坏 —	1	R-001	70	12.4	4.3+	—	—	

S-69

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	坏	1	R-004	71	—	4.5+	—		
		2	R-001	73	16.8	3.4+	—		

S-70

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	Ⅲa ヘラ	1	R-001	75	17.4	2.1	14.7	○	

S-71

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	蓋3	1	R-001	76	15.2	1.7+	—		

S-72

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	蓋3 —	1	R-002	78	14.0	0.9+	—	—	
	Ⅲa —	1	R-001	79	17.4	2.1+	14.2	—	

S-73

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	Ⅲa —	1	R-002	80	16.6	2.3+	12.8	—	—
	椀 —	1	R-001	81	16.3	5.0+	—		

S-74

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	小蓋3 ヘラ	1	R-001	82	11.5	1.6+	—	○	
	Ⅲa —	1	R-002	83	21.0	1.8+	18.3	—	

S-75

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	坏 ヘラ	1	R-003	66	13.1	3.7+	9.9		
	坏c ヘラ	1	R-002	67	13.3	3.8	9.3		
	ヘラ	2	R-001	68	14.6	5.3	10.2	○	
土	Ⅲa ヘラ	1	R-004	69	19.8	3.3	15.2	○	

S-76

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	坏c ヘラ	1	R-001	84	13.3	3.5	8.8	○	

S-80

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	蓋3	1	R-001	39	—	1.0+	—		

S-87

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	蓋3 ヘラ	1	R-001	85	14.0	2.1	—	○	
	Ⅲa ヘラ	1	R-002	86	17.2	1.9	14.2		
土	Ⅲb	1	R-003	88	14.2	2.9+	—		

S-90

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	蓋3 —	1	R-001	89	16.2	2.0+	—	○	
	坏	1	R-003	90	14.0	3.5+	—		
土	Ⅲa —	1	R-002	91	19.4	2.4	16.0	○	

S-95

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	坏	1	R-001	1	14.4	3.3+	—		
	坏c ヘラ	1	R-010	2	—	3.0+	8.2	○	
土	Ⅲa ヘラ	1	R-006	4	15.0	1.3	11.7		
	椀c	1	R-009	5	—	4.1+	8.9	○	

表60.条154次　遺物計測表（5）

S-95 灰黒色粘土

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	蓋3	1	R-002	1	13.4	0.6+	—		
	坏a ヘラ	1	R-001	2	12.4	3.8	7.6	○	
	皿a —	1	R-003	3	17.0	1.9+	14.2	—	
土	大椀	1	R-004	4	17.6	5.4+	—		

S-95 黄灰色砂

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	坏c ヘラ	1	R-009	1	—	1.8+	6.5		
	ヘラ	2	R-008	2	12.0	4.8	7.4		
土	坏d —	1	R-001	4	—	2.1+	8.2		
	坏 —	1	R-003	5	13.0	2.3+	—		
	坏a ヘラ	1	R-002	6	—	2.3+	7.5	—	—

S-96

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	蓋3	1	R-002	93	14.6	2.1+	—		
	坏c ヘラ	1	R-001	94	16.8	5.2	10.3		

S-97

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	蓋3 —	1	R-001	2	15.9	2.0+	—	○	
	—	2	R-002	3	18.5	1.0+	—	○	
	小坏c	1	R-003	11	—	2.0+	—	○	

S-100

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	大蓋c	1	R-013	1	—	2.9+	—	—	—
	蓋3 —	1	R-015	2	12.8	1.5+	—	○	—
	ヘラ?	2	R-017	3	14.9	1.5+	—	○	—
	ヘラ	3	R-016	4	16.8	2.0+	—	○	—
	蓋c3 ヘラ	1	R-019	5	16.8	2.3+	—	○	—
	ヘラ	2	R-020	6	14.2	2.0+	—	○	—
	蓋×高坏 —	1	R-018	7	13.3	1.2+	—	○	—
	坏a ヘラ	1	R-048		12.8	3.8	8.5	—	—
	ヘラ	2	R-001	8	12.9	4.1	7.55	○	×
	ヘラ	3	R-002	10	13.0	4.1	9.0	○	×
	ヘラ	4	R-049		14.0	3.8	10.2	—	—
	ヘラ	5	R-004	12	14.9	3.2	10.4	—	—
	?	6	R-006	16	14.1	4.1	8.7	—	—
	坏 —	1	R-010	9	12.7	3.7	8.4	—	—
	—	2	R-012	11	14.7	4.1+	—	—	—
	—	3	R-025	13	—	2.2+	—	—	
	—	4	R-023	14	—	3.3+	—	—	
	—	5	R-024	15	—	3.3+	—	—	
	—	6	R-009	17	13.7	3.1	—	—	—
	—	7	R-011	18	15.0	3.8+	—	—	—
	坏c ヘラ	1	R-003	19	11.8	4.1	8.8	○	—
	ヘラ	2	R-008	20	—	2.0+	9.6	○	—
	ヘラ	3	R-005	21	—	3.8+	9.3	○	—
	大坏c —	1	R-046	30	19.8	7.9	10.0	○	—
	皿a ヘラ	1	R-014	22	14.2	1.5	11.4	○	—
	ヘラ	2	R-007	23	18.3	2.4	15.4	—	—
	ヘラ	3	R-053	24	17.6	2.3	15.7	—	—
	大皿c×大椀c	1	R-050	29	—	1.7+	14.2		
土	坏d ヘラ	1	R-028	31	14.1	3.6	7.1	—	—
	—	2	R-030	32	14.0	3.2	7.3	—	
	—	3	R-052	33	14.35	3.7	6.6	—	—
	—	4	R-029	34	16.0	4.1	8.4	—	
		5	R-035	35	23.0	2.9+	13.4		
	坏c —	1	R-032	38	—	2.6+	10.2	—	—
	皿a —	1	R-031	36	18.0	1.7+	14.8	—	—
	大皿 —	1	R-045	39	28.2	3.05	11.8	—	
	大椀 —	1	R-038	37	24.0	7.1+	—	—	

S-100 灰色粘土

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	蓋3 ヘラ	1	R-006	1	14.0	1.6	—	○	—
	蓋c3 ヘラ	1	R-007	2	14.4	1.5	—	○	—
	坏c —	1	R-003	3	—	1.35	7.0	○	—
	坏	1	R-012	4	—	3.9+	—		
	坏a ヘラ	1	R-009	5	13.6	4.0	10.0	—	—
	ヘラ	2	R-010	6	—	1.35+	—	○	
	皿a ヘラ	1	R-005	7	19.2	1.2	15.6	○	—
	大皿a×大坏a	1	R-013	8	—	1.9+	15.0	○	
土	椀c1 —	1	R-002	10	—	3.5+	12.0	—	—
	坏d —	1	R-011	11	17.4	4.2	9.4		

S-103

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	蓋3 ヘラ	1	R-001	97	13.8	1.9+	—	○	
土	大椀	1	R-002	98	18.6	4.9+	—		

S-104

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	蓋c3 —	1	R-001	1	14.0	1.0+	—	○	
	坏×皿	1	R-002	7	—	2.4+	—		
		2	R-003	8	—	2.0+	—		

S-107

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	蓋3 —	1	R-001	100	12.7	1.0+	—	○	
	坏	1	R-003	101	12.6	3.1+	—		
		2	R-002	102	14.1	3.4+	—		
	皿a	1	R-004	103	19.8	2.5	16.8	—	—

S-109

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	皿a ヘラ	1	R-002	104	19.2	1.85	15.4	○	○
土	坏a —	1	R-001	105	14.6	3.90	7.4	○	—

S-111

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	蓋3	1	R-004	4	—	1.3+	—		
		2	R-003	5	—	1.75+	—		
	皿a ヘラ	1	R-002	6	16.0	2.3	13.1	○	—
	坏×皿	1	R-005	9	—	2.35+	—		
	坏c —	1	R-001	10	11.8	3.6	7.4	○	—

S-114

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	蓋3 —	1	R-002	106	17.0	2.2+	—	○	—
	皿a —	1	R-001	107	19.8	2.2	16.4	○	—

S-117

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	坏a ヘラ	1	R-001	109	—	1.6+	9.0	○	○
	坏c ヘラ	1	R-002	110	—	3.6+	7.2	○	—
	坏d ヘラ	1	R-003	111	—	1.9+	—	○	

S-121

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	蓋3 ヘラ	1	R-002	1	—	1.6+	—		
	皿 —	1	R-003	21	—	2.15+	—		
土	蓋3 ヘラ	1	R-001	6	16.4	1.9+	—	—	—

表61.条154次　遺物計測表（6）

S-122

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	坏c ヘラ	1	R-006	13	—	2.0+	—		
		2	R-005	14	—	2.65+	—	○	
	ヘラ	3	R-004	15	—	2.2+	—	○	
	坏	1	R-001	20	—	4.2+	—		

S-127

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	蓋3 —	1	R-002	28	—	1.2+	—	—	
	坏c ヘラ	1	R-001	32	—	1.25+	—	—	

S-131

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	蓋c3 ヘラ	1	R-001	185	14.6	2.15	—		

S-136

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	蓋3 ヘラ	1	R-008	117	—	2.0+	—	○	
	ヘラ	2	R-007	118	—	1.55+	—	○	—
	ヘラ	3	R-006	119	—	1.6+	—	○	—
	蓋c3 ヘラ	1	R-001	120	11.8	2.0	—	○	
須	皿a ヘラ	1	R-004	121	—	2.4	—		○?
	坏c ヘラ	1	R-002	123	11.0	4.2	7.2	○	
土	皿 —	1	R-005	122	—	2.0	—		

S-137

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	蓋3 ヘラ	1	R-005	25	—	1.1+	—		
	ヘラ	2	R-003	29	18.0	0.7+	—	○	
	小蓋3 —	1	R-002	27	—	0.8+	—		
	坏	1	R-004	31	—	4.2+	—		
	坏c —	1	R-001	33	—	1.9+	10.6	○	

S-138

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	蓋3 ヘラ	1	R-001	126	12.8	2.3+	—	○	—
	蓋c3 ヘラ	1	R-002	125	13.6	2.15	—	○	

S-141

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	坏d —	1	R-001	128	—	2.7+	—	—	—

S-144

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	蓋3 —	1	R-001	130	13.6	0.8+	—	—	—
	—	2	R-003	131	—	1.8+	—	—	—
	皿a ヘラ	1	R-002	132	—	1.9+	—	○	—
	坏c3 —	1	R-004	133	—	2.5+	7.6	—	—

S-147

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	蓋3 —	1	R-020	135	16.2	1.6+	—	—	—
	—	2	R-021	136	15.2	1.2+	—	—	—
	坏c —	1	R-022	138	8.8	1.4+	—	—	—
	—	2	R-002	141	—	3.7+	—	—	—
	—	3	R-003	143	16.3	5.5	10.0	—	—
	小坏c —	1	R-001	142	—	2.6+	6.6	—	—
	坏c3 —	1	R-019	140	13.4	3.4	9.0	—	—
	坏a ヘラ	1	R-004	146	—	1.7+	—	—	—
	皿a ヘラ?	1	R-013	144	18.5	2.0	15.3	○	—
	—	2	R-012	145	—	1.9+	—	○?	—
	—	3	R-006	147	18.3	2.4	15.0	○	—
土	椀c —	1	R-023	149	17.9	6.0	10.6	—	—

S-151

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	蓋3 —	1	R-004	2	—	1.6+	—	—	—
	—	2	R-003	4	—	2.0+	—	—	—
	大蓋3 —	1	R-001	5	16.5	0.8	—	—	—
	坏 —	1	R-005	11	—	2.0+	—	—	—
	坏c3 —	1	R-002	19	14.6	4.2	9.6	—	—

S-154

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	蓋3 —	1	R-001	159	—	1.1+	—	—	—
	皿a —	1	R-002	160	—	1.2+	—	○	—
	—	2	R-003	161	17.6	1.7	14.3	○	—
黒A	皿c —	1	R-004	162	14.6	4.0	8.1	—	—

S-156

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	皿a —	1	R-002	163	—	1.8+	—	—	—
	—	2	R-001	164	—	1.7+	—	—	—
	—	3	R-003	165	18.6	1.8	14.5	—	—

S-159

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	蓋3 ヘラ	1	R-007	168	12.8	1.8+	—	—	—
	ヘラ	2	R-004	169	12.7	1.9	—	—	—
	—	3	R-005	170	16.9	2.5+	—	—	—
	ヘラ	4	R-006	171	—	2.1+	—	—	—
	皿a ヘラ	1	R-003	172	14.5	1.9	11.7	○	—
土	坏d —	1	R-002	173	13.6	2.9	7.9	—	—
	皿a —	1	R-001	174	17.6	1.2	13.5	—	—

S-161

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	蓋3 ヘラ	1	R-006	26	—	1.4+	—	—	
	坏	1	R-003	30	—	4.2+	—	—	
		2	R-002	34	—	3.65+	—	—	
	坏c	1	R-004	35	—	3.75+	—	—	
		2	R-001	37	—	3.05+	9.0	○	
	坏a ヘラ	1	R-005	36	—	1.8+	—	○	

S-162

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	皿a ヘラ	1	R-001	178	17.8	2.05	14.8		

S-163

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	蓋3 ヘラ	1	R-001	180	14.0	1.9+	—	○	

S-164

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	坏	1	R-001	38	—	3.1+	—		

S-167

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	蓋3	1	R-003	182	—	1.65+	—		

S-168

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	坏	1	R-003	8	—	5.2+	—		
	坏c	1	R-002	17	—	2.7+	8.8	○	
	ヘラ	2	R-001	18	—	1.2+	9.1	○	

表62.条154次　遺物計測表（7）

S-171

種別	器種		番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	蓋3	ヘラ	1	R-001	185	16.8	2.3+	—	○	
		—	2	R-002	186	—	1.9+	—	○	
	坏×皿		1	R-003	187	—	3.3+	—		
	坏c	ヘラ	1	R-004	188	—	2.4+	9.05	○	

S-172

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	坏×皿	1	R-001	12	—	2.5+	—		
		2	R-002	16	—	2.0+	—		

S-173

種別	器種		番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	蓋3	ヘラ	1	R-004	3	—	1.5+	—	○	
	坏		1	R-001	7	—	4.5+	—		
			2	R-003	10	—	3.5+	—		
	坏×皿		1	R-002	9	—	2.8+	—		

S-176

種別	器種		番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	皿	ヘラ	1	R-001	189	—	2.05+	—	—	—

S-178

種別	器種		番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	蓋3		1	R-003	38	—	1.05+	—		
	坏c	ヘラ	1	R-001	40	—	1.95+	9.2	○	—
黒A	坏		1	R-004	41	—	1.35+	—		

S-179

種別	器種		番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	坏a	ヘラ	1	R-001	190	12.0	2.95	7.4		

S-181

種別	器種		番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	坏c	ヘラ	1	R-005	192	—	2.15+	—	○	
土	坏		1	R-001	193	—	5.2+	—		
	坏d		1	R-002	194	—	3.2+	—		

S-182

種別	器種		番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	蓋3	ヘラ	1	R-002	197	18.0	1.6+	—	○	

S-183

種別	器種		番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	皿	ヘラ	1	R-001	199	14.4	1.95	—	○	

S-186

種別	器種		番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	小坏c	—	1	R-001	204	—	3.0+	7.2	—	—
		—	2	R-012	205	12.4	3.5	9.0	○	—
	坏a	ヘラ	1	R-002	207	14.1	3.2	9.3	○	○
	皿a	ヘラ	1	R-003	208	17.2	2.0	14.2	○	○
		—	2	R-009	209	18.8	1.8	16.0	○	—
	坏×皿	ヘラ	1	R-015	210	6.55	4.4	0.5		
土	小坏c	—	1	R-014	206	—	1.2+	6.2	—	—
	大蓋3	—	1	R-011	212	27.7	2.7+	—	—	—

S-187

種別	器種		番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	蓋3	—	1	R-003	219	13.0	1.5	8.4	○	
		—	2	R-002	220	16.0	1.4+	10.0	○	
	皿a	ヘラ	1	R-001	221	19.6	2.1	15.6	○	
	坏×皿		1	R-004	222	—	3.2+	—		
土	蓋3		1	R-007	223	20.0	2.2+	—		

S-193

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	蓋3	1	R-001	3	—	2.2+	—		
	蓋c	1	R-002	4	—	1.0+	—		

茶黒色土

種別	器種		番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	蓋3	—	1	R-014	1	—	1.0+	—	○	—
		—	2	R-013	2	—	1.5+	—	—	—
		—	3	R-012	3	—	1.5+	—	○	—
		—	4	R-004	4	—	1.5+	—	○	—
		—	5	R-033	6	13.5	1.7	—	○	—
	蓋a3	—	1	R-003	5	11.5	1.1	—	○	—
	大蓋3	—	1	R-007	7	19.7	1.5+	—	○	—
	坏c	—	1	R-032	8	11.7	3.9	7.4	○	—
		—	2	R-031	9	12.2	3.6	8.3	○	—
		ヘラ	3	R-002	10	—	2.5+	9.0	○	—
		ヘラ?	4	R-035	12	16.2	5.6	9.1	○	—
	坏a	—	1	R-022	11	13.2	3.7	8.9	○	—
	小皿a	ヘラ	1	R-001	13	10.4	2.0	8.5	—	—
	皿a	—	1	R-028	14	14.7	2.2	11.7	○	—
		—	2	R-010	15	15.4	2.4	12.6	○	○
		—	3	R-021	16	15.2	2.0	12.1	○	—
		—	4	R-018	17	—	1.9+	—	○	—
		—	5	R-017	18	—	2.0+	—	○	—
		ヘラ	6	R-016	19	—	1.0	—	○	—
	高坏×皿	—	1	R-009	27	21.0	2.1+	—	—	—
土	皿a	—	1	R-011	29	—	1.6+	—	—	—
	小皿a	—	2	R-027	30	—	1.2+	—	—	—
	坏d	—	1	R-036	31	14.0	3.0	—	—	—

記号凡例

1）焼き物・器種別記号

	供膳具	調理具	貯蔵具	煮沸具
須恵器	●	◆	■	
土師器	○	◇	□	△
黒色土器	♠	♣		

国内産土器	♡
国外産食器	♥
石製品	※
土製品（鞴羽口・坩堝）	☆
土製品（カマド）	★
製塩土器	▽
瓦	◎

2）漆付着の場合、記号の後ろに【漆】と記載する。器種記載がなく、【漆】のみの記載の場合は、漆付着品が出土していることを表す。

3）器種不明の場合、割愛した。出土の有無については、遺物一覧を参照。

4）量の概念は、含めていない。存否の記載による。

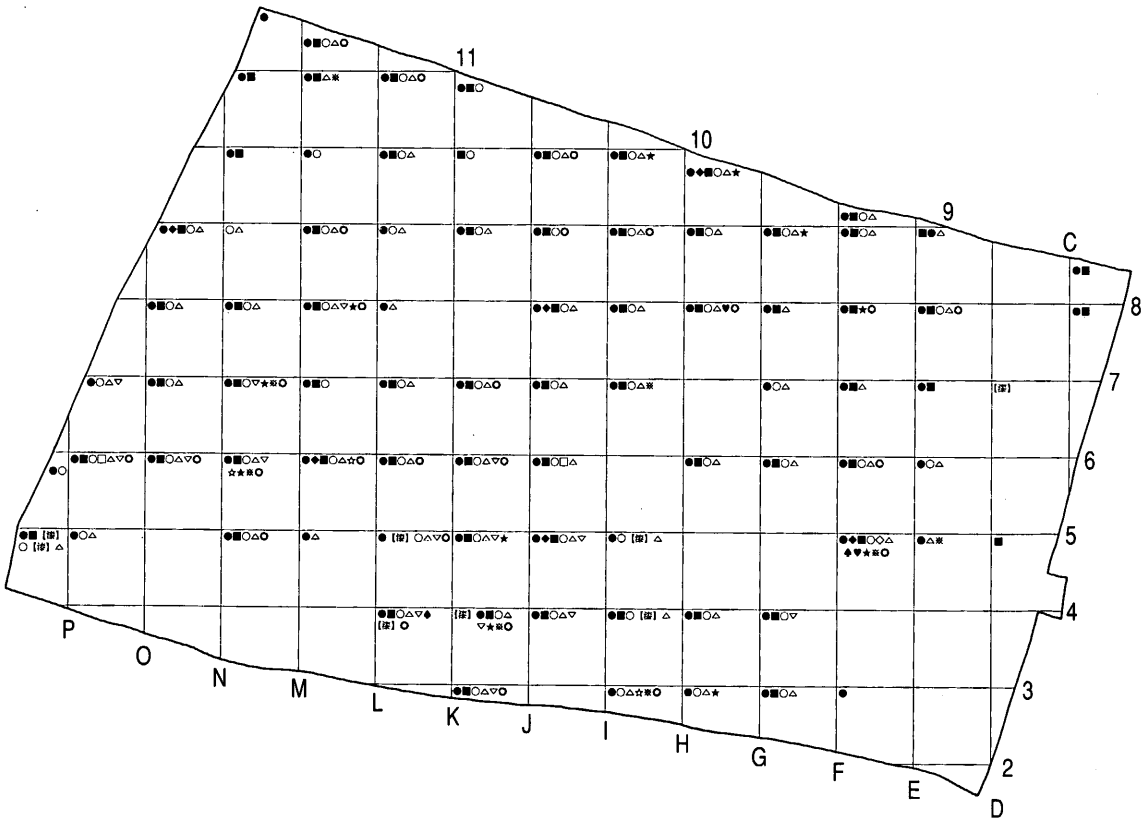


図166.条154次遺物出土傾向

表63.大宰府条坊跡　177次調査　遺構一覧

S-番号	遺構番号	種別		地区
1		ピット群		A3
2		ピット	暗茶褐土	A2
3		ピット	暗茶褐土（やや明るい）	A2
4		ピット	暗茶褐土（やや暗い）	A2
5	SX005	土壙	暗灰茶色土	A1
6		ピット	灰色砂土	B2
7		ピット	暗黒褐土	B2
8		ピット	暗黒褐土	B3
9		ピット	暗黒褐土	B2～3
10		ピット	暗茶褐土	B2～3
11		ピット	暗茶褐土	B1
12	SB020a	ピット	暗茶褐土	C1
13		ピット	暗茶褐土	B2
14	SX014	ピット	灰色土＋黄色土、下に石あり	B2

S-番号	遺構番号	種別		地区
15	SB020b	ピット	暗茶褐土	B2
16	SX016	ピット	暗茶褐土	B2
17		ピット群		B2
18		ピット	暗灰茶土	A3
19		ピット群	暗灰色砂質土	C2
20	SB020c	ピット		C3
21		ピット群	下に石あり	C2
22		ピット	橙色まだら土	C2
23		ピット群	暗灰色砂質土	D2～3
24		ピット	暗茶褐土	D3
茶灰色土		遺構検出時の土		
撹乱		北側の新しい砂層		
表土		耕作土・床土		

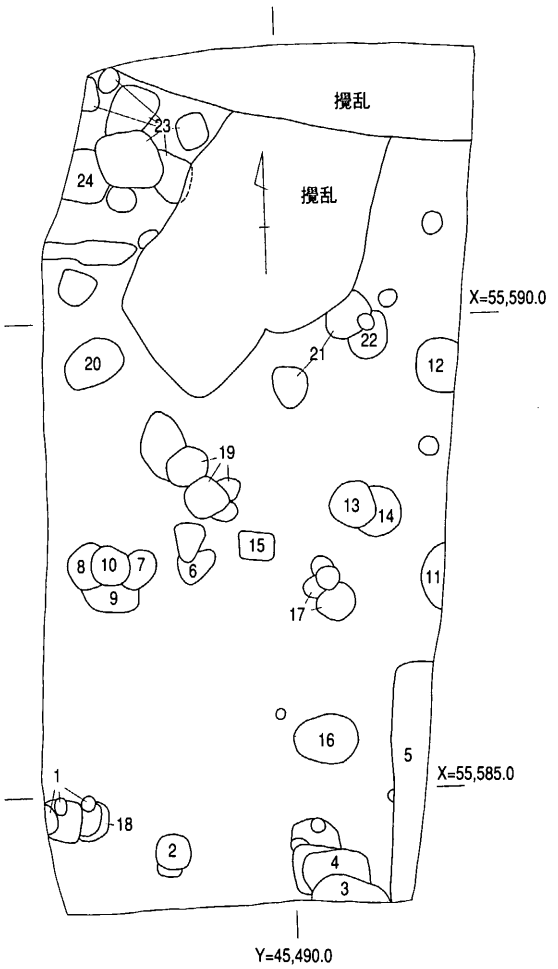


図167.条177次遺構略測図

表64.177次　遺物一覧表

S-1

須恵器	蓋3
土師器	坏d
黒色土器A	破片
製塩土器	焼塩壺

S-2

土師器	破片

S-3

須恵器	蓋3、壺×甕
土師器	甕
越州窯系青磁	破片（I類）

S-4

須恵器	蓋
土師器	高坏

S-5

須恵器	蓋c3、坏c、甕
土師器	甕

S-7

須恵器	蓋c、坏
土師器	甕
黒色土器A	破片
製塩土器	焼塩壺

S-8

須恵器	坏c、蓋3
土師器	甕、坏c、蓋3

S-9

土師器	大坏c
製塩土器	焼塩壺

S-10

須恵器	蓋3
土師器	坏c×椀c、甕

S-11

須恵器	高坏、蓋3、壺、坏
土師器	甕
製塩土器	焼塩壺

S-13

須恵器	甕、坏c、皿×坏
土師器	坏d、甕
石製品	平玉石

S-14

須恵器	壺、坏c、蓋3
土師器	甕、椀c×坏c

S-15柱痕

須恵器	小坏a
土師器	破片
土製品	不明品
製塩土器	焼塩壺

S-15堀方

須恵器	坏c
土師器	甕

S-16

須恵器	坏、蓋、甕×壺、壺
土師器	破片

S-17

須恵器	蓋3
土師器	破片

S-18

須恵器	甕×壺
土師器	破片
黒色土器B	坏d

S-19

須恵器	坏a×皿a
土師器	小皿a（糸切り）
陶器	破片

S-20柱痕

須恵器	蓋3
土師器	破片

S-20堀方

須恵器	破片
土師器	壺

S-21

須恵器	蓋c、高坏、坏c、甕
土師器	蓋3、甕
製塩土器	焼塩壺

S-22

須恵器	破片
土師器	破片

S-23

須恵器	甕、壺、坏c、蓋3、高坏
土師器	甕

S-24

須恵器	甕

表土

須恵器	坏c、甕、蓋3、蓋4、蓋c
土師器	甕
白磁	椀IV
国産陶器	すり鉢
瓦	破片
石製品	チャート片

撹乱

須恵器	甕、坏c、坏c×椀c、蓋c、鉢、蓋3
土師器	甕
瓦	破片
陶器	破片
肥前系磁器	皿

茶灰色土

須恵器	甕、坏c、蓋3、鉢、皿a、棒状、壺、蓋c
土師器	甕
瓦質土器	鉢
石製品	砂岩製砥石、平玉石
肥前系磁器	椀

表65.大宰府条坊跡　194次調査　遺構一覧

S-番号	遺構番号	種別			時期	地区
1	194SD001	大溝		条194-1・2次	XII期	
2		土坑	暗灰粘質土	条194-1次	古代	G7
3		ピット群	暗茶粘質土	条194-1次	奈良	I8
4	194SX004	溝	灰砂	条194-1・2次	奈良	K・Jライン
5	194SE005	井戸	黒灰粘質土	条194-1次	8世紀初	K12
6		ピット	黒灰粘質土	条194-1次		K5
10	194SX010			条194-2次	VII～VIII期	
15	194SX015		S-4→S-15	条194-2次	平安中期	

表66.条194次　遺物計測表

S-1灰色砂

種別	器種		遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	坏a　ヘラ	1	R-001	1	(11.1)	1.9	(7.3)	−	−
	〃	2	R-002	2	−	−	(6.8)	−	−
	椀c1	3	R-003	4	−	−	(8.0)	−	−

S-1暗灰色砂

種別	器種		遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	皿？　ヘラ？	1	R-009	2	−	−	(8.0)		
土	椀a	2	R-001	5	12.6	4.2	5.6	○	×
	椀c　ヘラ	3	R-004	7	(13.0)	4.8	7.6	○	×
	〃	4	R-020	8	−	−	(8.5)	○	−
	〃	5	R-021	9	−	−	(8.4)	○	−
	椀c1	6	R-005	6	−	−	7.8	−	−
	椀	7	R-019	10	(12.0)	−	−	○	−
	坏c	8	R-012	1	−	−	(8.0)	−	×
黒A	椀c	9	R-007	12	13.6	−	−	×	×
	椀	10	R-014	16	(14.4)	−	−	−	−
	〃	11	R-015	17	(14.0)	−	−	−	
	〃	12	R-017	13	(14.8)	−	−	−	−
	〃	13	R-018	18	(13.4)	−	−	−	−

S-1灰色粘質土

種別	器種		遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	坏a　ヘラ	1	R-006	4	11.0	2.1	7.8	○	○
	皿	2	R-009	8	(14.2)	−	−	−	−
	椀a　ヘラ	3	R-003	6	(12.2)	−	−	−	○
	椀	4	R-004	7	(11.7)	−	−	−	−

S-1暗灰色粘質土

種別	器種		遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	坏	1	R-002	3	(11.8)	−	−	−	−
黒A	椀c1	2	R-001	8	−	−	(7.8)	−	−

S-1黒灰色粘質土

種別	器種		遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	坏a	1	R-011	1	−	(8.8)	−	−	−
土	小皿a　ヘラ	2	R-001	3	(10.2)	1.25	(7.8)	○	○
	坏a	3	R-013	4	−	−	(7.7)	−	○
	椀	4	R-002	7	(15.2)	−	−	−	−
	椀c	5	R-004	6	−	−	8.3	−	−
	〃	6	R-005	13	−	−	8.6	−	−
	〃	7	R-014	5	−	−	(7.4)	−	−
	丸底坏a	8	R-012	9	(13.4)	(3.15)		○	○
黒A	椀c	9	R-018	14	−	−	(7.3)	−	−
	〃	10	R-019	15	−	−	(9.1)	−	−
黒B	椀	11	R-020	17	(15.2)	−	−	−	−
	〃	12	R-021	16	(16.6)	−	−	−	−

S-1上面

種別	器種		遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	小皿a	1	R-001	11	(8.8)	(1.2)	(7.0)	−	−
	〃　イト	2	R-002	10	(8.6)	(0.9)	(6.8)	○	−

S-4

種別	器種		遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
須	坏c	1	R-002	3	−	−	(6.8)	−	−
	壺3	2	R-004	1	(13.1)	1.8			

S-10

種別	器種		遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	坏a　ヘラ	1	R-001	1	−	−	(7.6)	−	−
	〃	2	R-002	2	−	−	(8.8)	○	○
	椀c	3	R-003	3	−	−	(7.4)	−	−

S-15

種別	器種		遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	椀c2	1	001	1	14.8	−	−	−	−

表67.194次　遺物一覧表（1）

S-1暗灰粘

須恵器	坏c、坏a、蓋c、蓋4、皿a、蓋3、皿×坏c、壺a×c、
	壺b、壺、甕a、甕b、甕、鉢a、高坏
土師器	坏a、坏a（うるし付）、坏c、坏d、蓋3、小皿a(イト)
	坏×皿（うるし付）、丸底坏a、皿c、都城系破片、
	甕、甕（角閃石）、甕a、
製塩土器	破片
黒色土器A	坏c、椀c1、椀c2、甕
黒色土器B	椀
越州窯系青磁	椀I
石製品	滑石
弥生土器	甕（須玖式）
瓦類	丸、平瓦（縄）、平瓦（格子）、軒丸

S-1灰色粘

須恵器	坏a、坏c、坏a（うるし付）皿a、蓋c、蓋3、高坏、坏
	甕a、甕、壺b、壺、壺a×c、鉢b（把手付）
土師器	坏a、坏c、坏d、椀a、椀c2、皿、高坏、甕a
製塩土器	破片
土製品	棒状土製品
石製品	砥石
瓦類	丸瓦（格子）、平瓦（縄）

S-1暗灰砂

須恵器	坏c、蓋c、蓋3、蓋4、甕、高坏、皿a、把手、壺b、
	皿a（うるし付）、坏a、鉢、壺d×f（うるし付）
土師器	坏a、坏c、甕、把手、坏d、椀a、椀c2、蓋c、
	高坏、甕a、甕a（角閃石）、カマド、器台？
製塩土器	破片
越州窯系青磁	椀I-2-a
黒色土器A	椀c1、椀c2、椀
黒色土器B	椀c
緑釉陶器	破片（京都）
灰釉陶器	甕
土製品	棒状土製品
石製品	砥石
瓦類	平瓦（縄）
金属製品	鉄片

S-1灰色砂

須恵器	坏c、坏a、蓋3、小蓋3、蓋c、大蓋c、甕、壺a×c、
	甕b、壺、蓋×高坏、小壺、高坏、
土師器	坏c、高坏、甕、把手
製塩土器	破片
黒色土器A	椀
越州窯系青磁	椀；I、I-1
瓦類	丸瓦（格子）、平瓦（縄）、平瓦（格子、文字）
	平瓦（格子）

S-1上面（南拡）

須恵器	小皿a、坏c、蓋c、壺
土師器	坏d、小皿a(イト)、坏a(イト)
イスラム陶器	破片

S-1上面（北拡）

須恵器	坏a、坏c、蓋a、蓋3
土師器	坏c、甕a、把手、カマド
瓦類	平瓦（縄）

S-1灰粘

須恵器	蓋3、壺、高坏、甕、
土師器	坏、煮炊き具
黒色土器A	椀c

S-1灰茶粘

須恵器	坏c、蓋3、壺
土師器	坏c、甕a
肥前系陶磁器	そばちょこ
瓦類	破片（縄）

S-1黒色粘

須恵器	坏c、蓋3、甕、長頸壺
土師器	坏c、坏d、破片（うるし付）、甕、
製塩土器	破片
黒色土器A	椀c
瓦類	平瓦（縄）、丸瓦（無地）

S-1黒灰粘

須恵器	坏a、坏c、蓋c、蓋3、小蓋a3、皿a、壺b、壺c、壺、
	壺a、高坏、甕（赤塗）、甕、鉢b、鉢a、把手
土師器	小皿a(ヘラ)、皿a、坏d、丸椀c2、椀、椀c2、蓋c、
	丸底坏、把手、カマド、甕、甕a、精製甕、
	甕（角閃石）、鍋、供膳具、煮炊き具
製塩土器	破片
黒色土器A	椀c
黒色土器B	椀c
越州窯系青磁	坏I-1×2
緑釉陶器	破片（京都）
白磁	椀I-1
石製品	剥片（黒曜石）、碁石、焼け石、チャート片、砥石
瓦類	平瓦（縄）、軒先、破片、丸瓦、瓦加工品
金属製品	銅製絞金具

S-2

須恵器	坏
土師器	甕

S-3

須恵器	坏、坏×皿、壺、甕

S-4

須恵器	坏、坏c、壺、蓋c3、甕
土師器	破片、甕、供膳具片

S-5暗灰粘

須恵器	平瓶

S-5黒灰粘

土師器	甕

表68.194次　遺物一覧表（2）

S-5黒色粘

須恵器	坏
土師器	甕（把手）
その他	桃種片

S-6

須恵器	坏c、皿、壷a×c、短頸壷

S-10

須恵器	坏a、坏c、蓋4、壷、甕
土師器	甕a、坏a、坏c
黒色土器A	坏c
瓦類	平瓦（縄）、丸瓦（縄）

S-10中央

須恵器	坏a、甕a、甕
土師器	鍋、甕a

S-15

須恵器	坏c、高坏×蓋2、壷、甕、
土師器	椀c2、丸椀a、甕a
黒色土器A	椀c

灰褐土

須恵器	甕、坏c、高坏、蓋3
土師器	甕

表土

須恵器	坏a、皿a、壷、壷b、甕、鉢b、高坏
土師器	坏c、甕、坏a(イト)
瓦質土器	鍋
龍泉窯系青磁	破片
国産陶器	破片（近世～）
国産磁器	染付（近世～）
白磁	皿VIII-2-b、破片
石製品	石炭
瓦類	破片、丸瓦（格子）

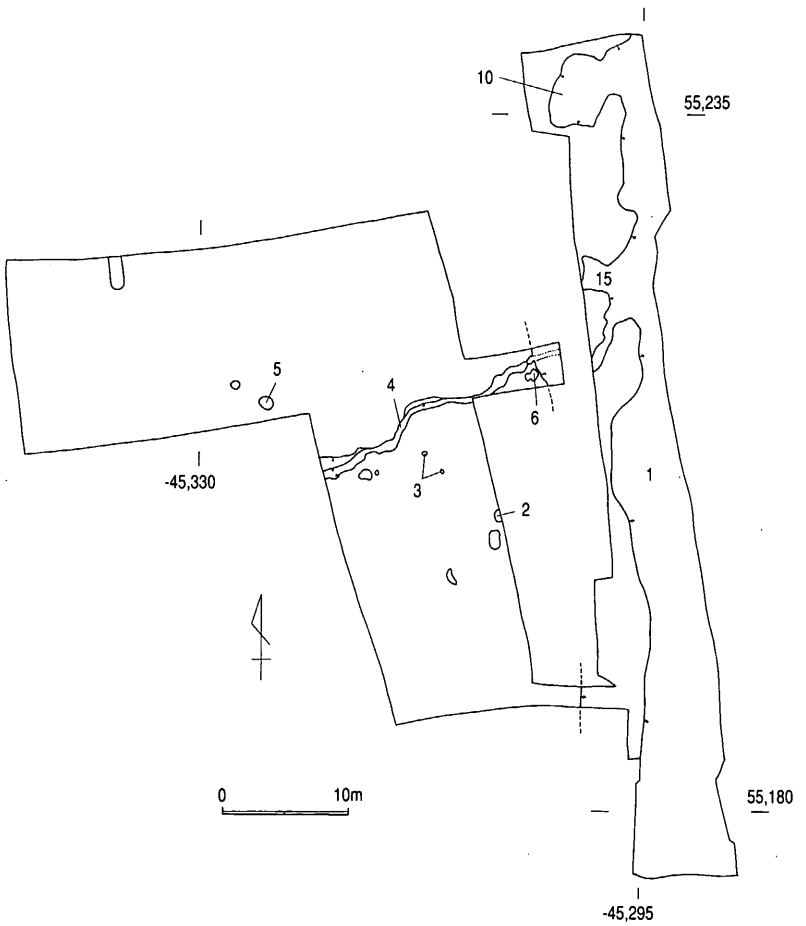


図168.条194次遺構略測図（1/600）

表69.条194次　SX010部材計測表

番号	残存状況	タテ	ヨコ	厚さ	遺物番号	挿図番号
1	ホゾ一部欠損	87.9	5.9	2.5	R-011	7
2	完形	78.3	5.5	2.3	R-010	5
3	上・下端・両側辺欠損。側辺はほぼ残る	55	9.3	0.3		
4	全辺欠損	52.3	6.4	0.4		
5	全辺欠損	40	6	0.4		
6	完形	90.6	6	3	R-013	8
7	一側辺残存？	33	7	0.75		
8	全辺欠損	52	5.3	0.9		
9	破片（3片）	26	4.5	0.7		
9下	破片	25.7	1.5	0.5		
10	上部のみ欠損	47.8	8	0.9		
11	上部のみ欠損。その他は残存か？	36	5.5	0.5		
12	両側辺ほぼ残存	36.5	9.5	0.4		
13	上部のみ欠損	36.1	12.4	0.5	R-004	12
14	上部のみ欠損	34.1	14.4	0.8	R-009	11
15	自然木に近い	77.4	6	3.4	R-015	10
16	完形	77.6	5.3	3.3	R-014	4
17	ほぼ完形	68.5	5.5	2.5	R-012	6
18	上部のみ欠損	54	12.9	1.3	R-006	13
19	一側辺残存（3片）	33.7	4.3	0.6		
19下	破片（2片）	17.3	2.3	0.7		
20	両側辺残存	29.5	5	0.4		
21	破片	20.8	5.5	1.3		
22	下部残存。両側辺も残存？	33.8	5.8	1.4		
23	破片（3片）	35.5	7	0.5		
24	両側辺残存（3片）	54.5	13.5	0.9		
25	上部のみ欠損	55.1	12	0.9	R-007	17
26	一側辺残存	51.8	4.3	0.8		
27	破片	25.5	3.8	0.5		
28	破片多数					
29	破片（5片）	18.3	4.5	0.4		
30	上部のみ欠損。下部はやや斜めに切断	30	9.5	0.9		
31	破片（4片）	15	6	0.5		
32	破片多数	11	5.5	0.7		
33	一側辺残存？下部はやや斜めに切断	30	4.1	0.6		
34	上部のみ欠損。ホゾあり	82.3	13.4	1.8	R-017	19
35	上部欠損。孔2つあり	80	13	1	R-016	18
36	一側辺残存	65	12	1.5		

番号	残存状況	タテ	ヨコ	厚さ	遺物番号	挿図番号
37	全辺欠損	48.2	5.6	0.9		
38	破片	22	4	0.9		
39	破片	18.8	4	0.5		
40	上部のみ欠損	26.5	9.5	1.1	R-005	14
41	両側辺残存	36.2	5.5	0.7		
42		33.5	2.8	0.9		
43		18	4.5	0.4		
44	破片多数					
45		13	4.2	0.4		
46	両側辺残存？	23	7	0.4		
47	下部はやや斜めに切断	21.8	4.2	0.8		
48	下部のみ残存	33	6.6	1		
49	破片多数					
50	両側辺ほぼ残存。底部付近	32	11	1.5		
51	両側辺残存？	16	8.8	1.1		
52	上部のみ欠損	66.2	15.3	1.2	R-018	16
52	上部のみ欠損	69.5	12.7	1.2	R-019	15
53	両側辺残存	26.6	4	0.9		
54	上部のみ欠損	32.1	13.1	1.2		
55	上部のみ欠損。片面炭化	17	12.5	1.4		
56	全辺欠損	38.4	7.3	0.9		
57	一側辺残存	36	5.5	0.8		
58	全辺欠損。底部付近	37.4	4.9	0.4		
59	下部残存	48.7	9.1	0.4		
60	上部のみ欠損	51.9	8.5	0.7		
61	破片	15	5	0.7		
62	破片	22.2	2.4	0.7		
63	破片	21	3.5	0.4		
64	破片	24	2.7	0.7		
65	破片	11.5	6	0.4		
66		20.4	4.5	0.3		
67	破片	17	4.5	1.2		
68	破片	13	4.5	1		
69	両側辺ほぼ残存	29.7	10	0.9		
全体	片側欠損	64.7	6.5	1.6	R-008	9
全体	上部欠損	31.5	7.5	0.5		

単位（cm）

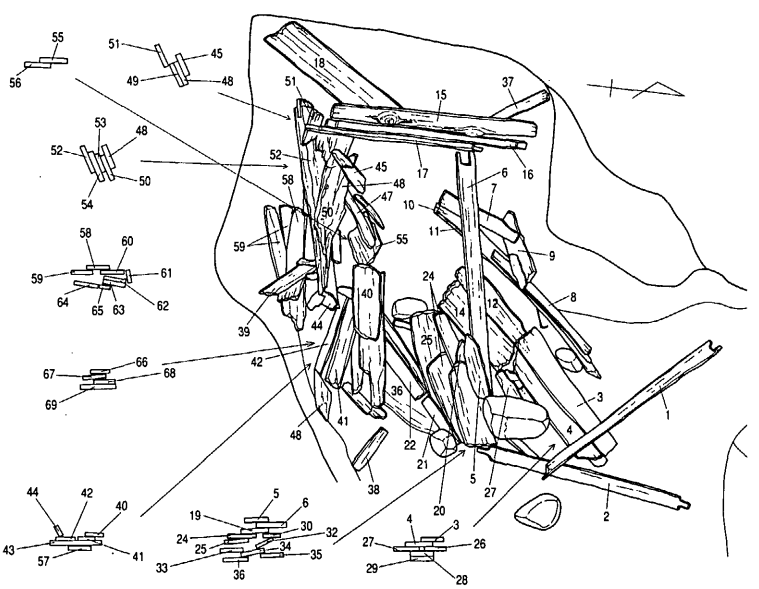


図169.194SX010部材取り上げ番号

表70.大宰府条坊跡　206次調査 遺構一覧

S-番号	遺構番号	種　別		地区
1	SK001	土壙	平安～	F6
2	SK002	土壙	平安～	F6
3	SK003	土壙	平安～	E6
4		墳墓か	近世～	G6
5	SK005	土壙	平安～	G6
6	SX006	土壙	近世～近代	G4
7		土壙	近世～近代	F5
8		カクラン	近世～近代	F5
9		カクラン	近世～近代	F5
10				
11		墳墓か	近世～近代	F4
12		墳墓か	近世～近代	F4
13		墳墓か	近世～近代	E4
14		墳墓か	近世～近代	E3
15		墳墓か	近世～近代	D3
16		墳墓か	近世～近代	D3
17		墳墓か	近世～近代	C3
18		墳墓か	近世～近代	C3
19		ピット群	平安～	E5
20				

S-番号	遺構番号	種　別		地区
21		墳墓か	近世末～近代	G4
22		墳墓か	近世末～近代	H4
23		墳墓か	近世末～近代	G5
24		墳墓か	近世末～近代	G5
25				
26		墳墓か	近世末～近代	G5
27		墳墓か	近世末～近代	G5
28		墳墓か	近世末～近代	F5
29		墳墓か	近世末～近代	F5
30				
31		墳墓か	近世末～近代	G5
32		墳墓か	近世末～近代	G6
33		墳墓か	近世末～近代	F6
34		墳墓か	近世末～近代	F6
35				
36		墳墓か	近世末～近代	H4
37		試掘トレンチ（墳墓か）	近世末～近代	G4
38		コンクリートためマス		E3

表71.206次　遺物一覧表（1）

S-1

須恵器	皿×、甕、壷
土師器	甕
黒色土器A	椀(2)

S-2

須恵器	坏a、蓋3、蓋4、甕
黒色土器A	椀(1)
緑釉陶器	破片(1)

S-2黒灰土

須恵器	蓋c、甕、甕×
土師器	坏a、椀c
黒色土器A	坏a(1)
緑釉陶器	破片(1)
白磁	破片(2)
土製品	鞴羽口×

S-2暗灰土

須恵器	坏×
黒色土器A	椀×

S-3

須恵器	坏×、甕×
土師器	破片

S-4

須恵器	坏×、甕×
土師器	甕
肥前系陶磁器	染付椀(1)
国産陶器	近世；半胴甕(1)

S-5

須恵器	坏a、甕
黒色土器A	椀c片
瓦類	平瓦格子叩、平瓦縄目叩
土製品	鋳型片、焼土塊

S-6

須恵器	坏a、甕
土師器	破片
瓦質土器	鉢(1)
瓦類	平瓦

S-7

須恵器	甕
土師器	坏、甕

S-8

須恵器	坏a×、坏c3
土師器	破片
肥前系陶磁器	白磁片(1)

S-9

須恵器	坏a、甕
土師器	破片
石製品	砥石

S-11

須恵器	甕
土師器	坏a、甕
国産陶器	近世；擂り鉢(1)
瓦類	平瓦無文

S-12

須恵器	坏c3、坏×、甕
土師器	破片
白磁	破片

S-13

須恵器	破片
土師器	小皿a(イト)

S-14

須恵器	壷×
土師器	坏×

S-15

須恵器	坏a、蓋3、甕
土師器	破片

S-16

土師器	破片
黒色土器B	破片

S-17

須恵器	坏×
土師器	破片

S-18

須恵器	破片
土師器	破片
瓦類	平瓦格子叩

S-19

須恵器	壷
土師器	坏×
灰釉陶器	壷×

S-21

須恵器	鉢×
土師器	破片

S-22

須恵器	坏×、甕
肥前系陶磁器	染付椀×(1)

S-23

須恵器	坏c3、甕
黒色土器A	椀c×

S-24

須恵器	坏×
土師器	椀c×、甕

表72.206次　遺物一覧表（2）

S-25

須恵器	坏×
土師器	破片
瓦類	平瓦格子叩

S-26

須恵器	坏c3、蓋3
土師器	椀c
緑釉陶器	椀；京都系 (1)

S-27

須恵器	坏c3
土師器	坏c3
瓦類	平瓦格子叩、丸瓦無文
石製品	ob-F

S-28

須恵器	坏×
土師器	坏×
石製品	and-RF

S-29

須恵器	坏×、甕
土師器	破片

S-31

須恵器	甕
土師器	破片
白磁	破片 (1)
石製品	スレート片

S-32

土師器	破片

S-33

須恵器	甕
中国陶器	壷；褐釉 (1)
瓦類	近世～　平瓦

S-36

須恵器	壷×
土師器	坏a

暗灰土

須恵器	坏a、坏c、甕
土師器	破片
瓦類	丸瓦
石製品	砥石、滑石片

表土

須恵器	蓋3、甕、壷、鉢
土師器	竈
黒色土器A	椀
越州窯系青磁	椀；I (1)
国産陶器	刷毛手；大皿 (1)
中国陶器	褐釉；壷 (1)
瓦類	平瓦縄目叩（二次利用）
石製品	碁石×（緑）

表73.条206次遺物観察表

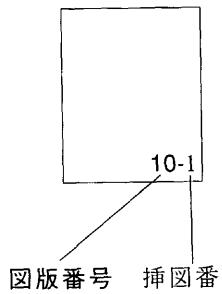
遺構		No,	器種	図版番号	R番号	口径 cm	高さ cm	底径 cm	備考
206SK001	(S-1)	1	黒A　椀	162	002	-	4.7+	-	
〃	(S-1)	2	黒A　椀	162	003	-	1.5+	-	
〃	(S-1)	3	須恵器 壷d×	162	001	-	4.7+	-	
206SK002	(S-2)	1	黒A　椀	162	001	15.4*	4.3+	-	
206SK002黒灰土	(S-2黒灰土)	1	土師器 坏a	162	001	-	1.8+	7.4*	
206SK005	(S-5)	1	須恵器 坏a	162	001	-	0.8+	-	
〃	(S-5)	2	黒A　椀	162	002	-	1.7+	-	
〃	(S-5)	3	土製品 焼土塊	162	003	2.30	2.50	1.50	縦×横×厚さ
〃	(S-5)	4	土製品 鋳型	162	004	5.50	3.20	2.25	縦×横×厚さ
〃	(S-5)	5	瓦類　平瓦	162	005	10.50	9.70	2.00	縦×横×厚さ　格子叩
206SX006	(S-6)	1	土師器 鉢	162	001	-	18.6+	23.0*	
表土	表土	1	青磁　椀I	162	001	-	2.1+	-	越州窯系青磁
〃	表土	2	瓦類　平瓦	162	003	8.10	9.30	2.20	縦×横×厚さ　縄目叩
〃	表土	3	石製品 碁石	162	002	1.40	1.50	0.40	縦×横×高さ
〃	(S-28)	4	石製品 RF	162	001	6.80	4.70	2.00	縦×横×厚さ　安山岩

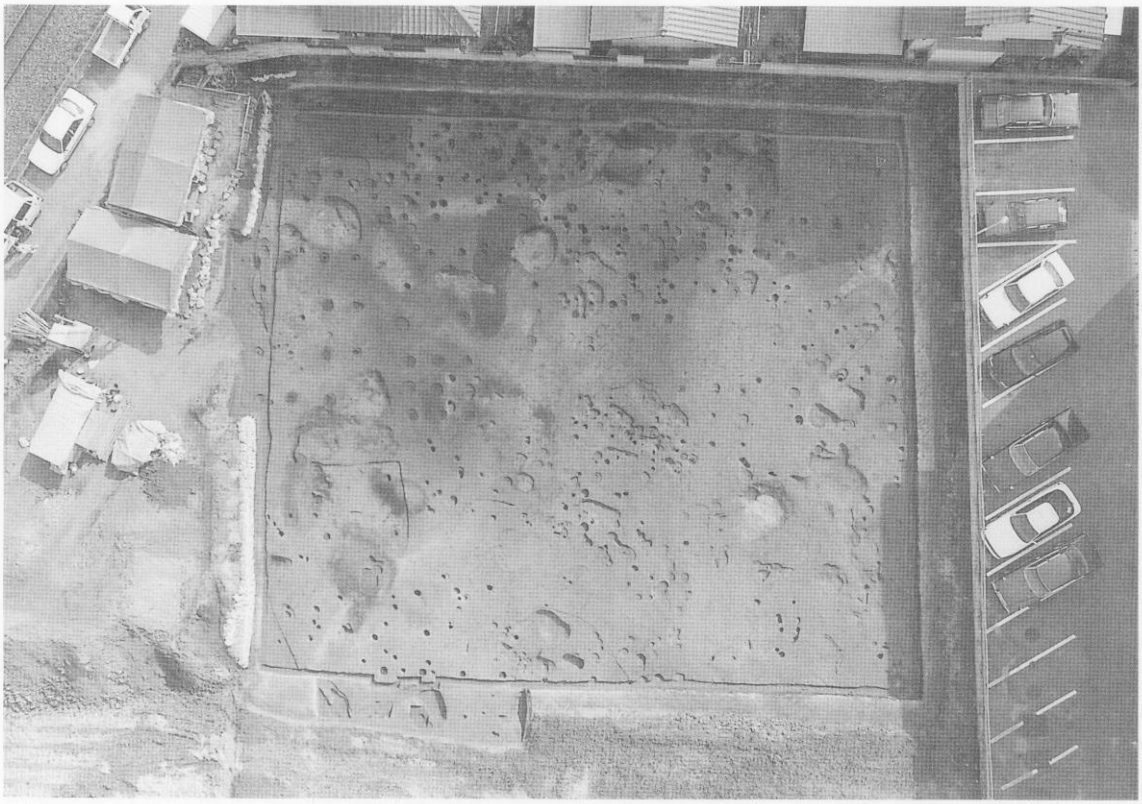
数値後の+は欠損状況での数値、*は復元状況での数値で表記している。

写 真 図 版

凡 例

写真図版右下の番号は、
以下の要領で理解できる





条77次調査区全景（空中写真、上が北）



条77次調査区全景（南から）



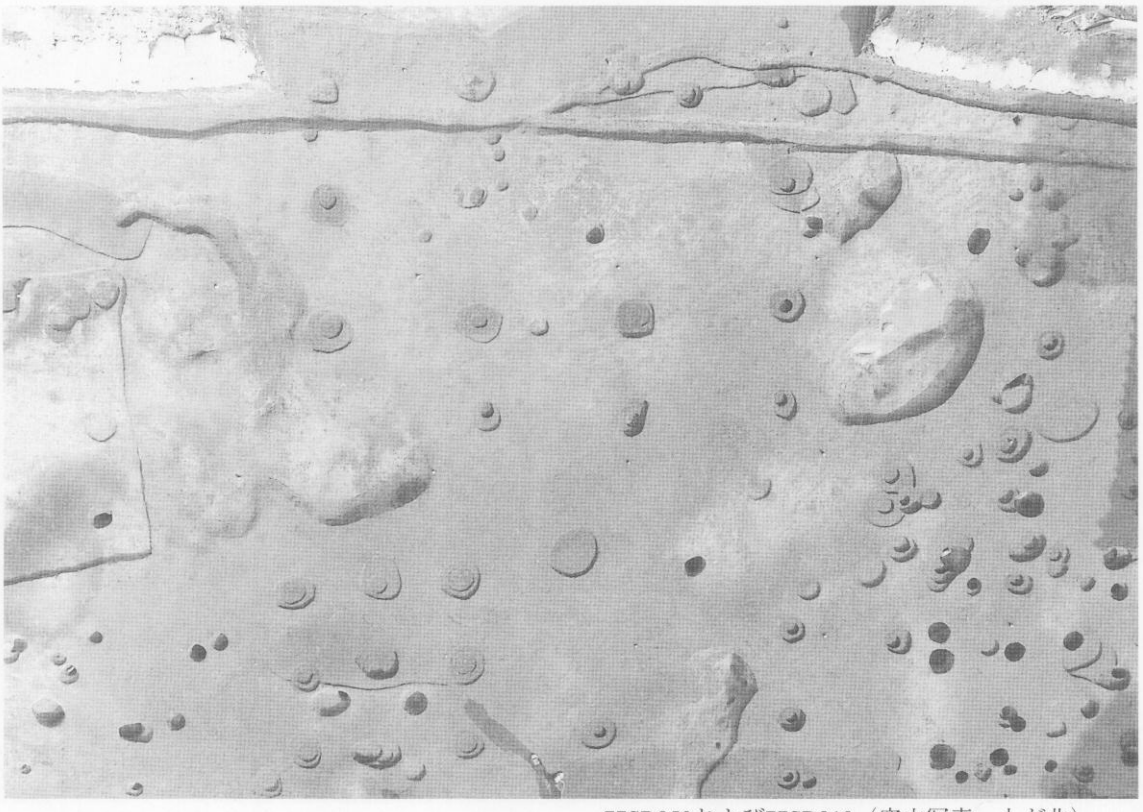
77SB100周辺（空中写真、左が北）



77SB010および77SI005（東から）



77SB010（南から）



77SB050および77SB010（空中写真、上が北）



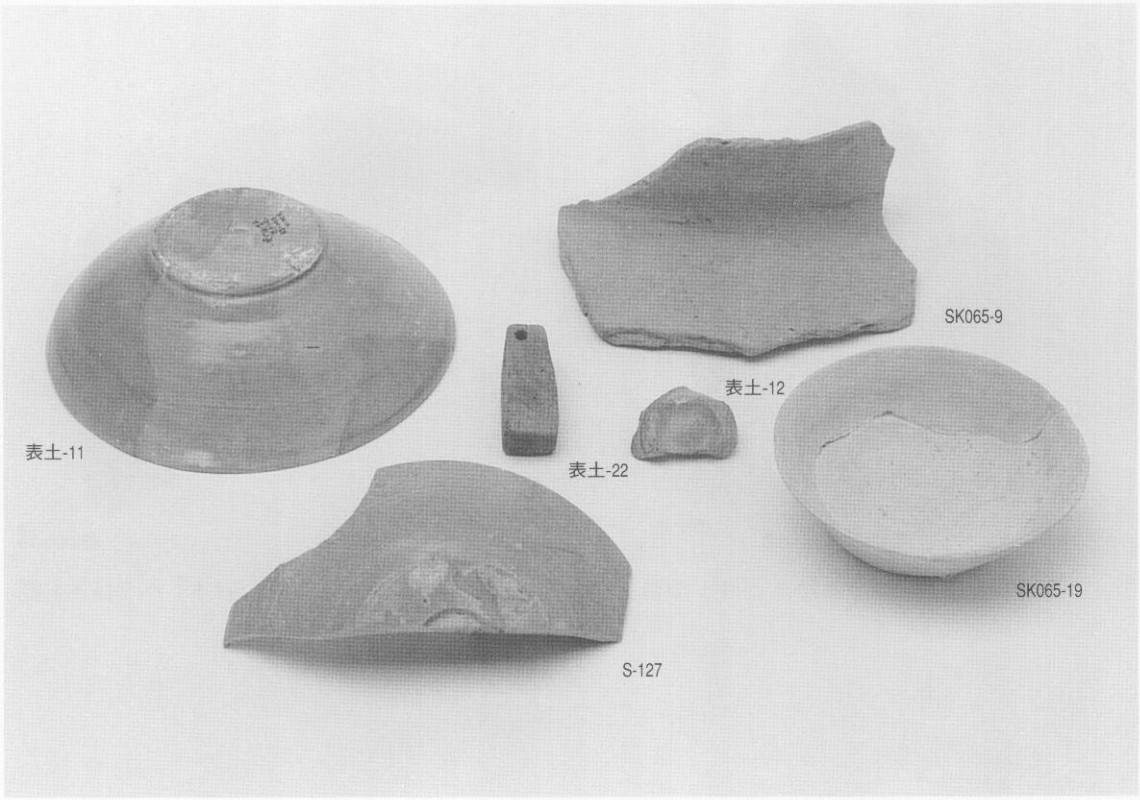
77SI005（南から）



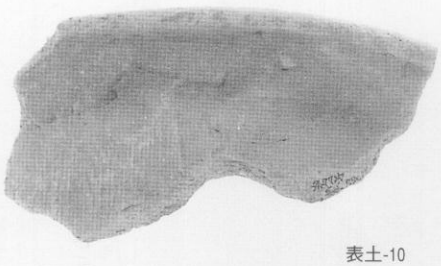
77SI005カマド粘土（南から）



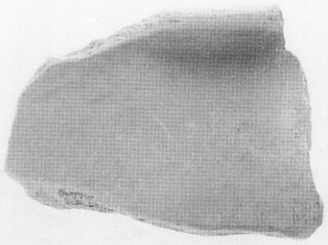
条77次出土遺物１（奈良時代）



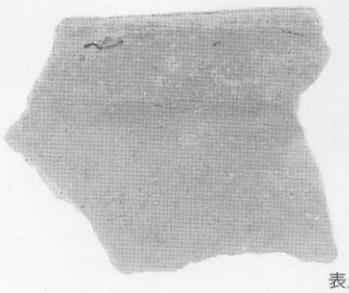
条77次出土遺物２（平安時代他）



表土-10



表土-8

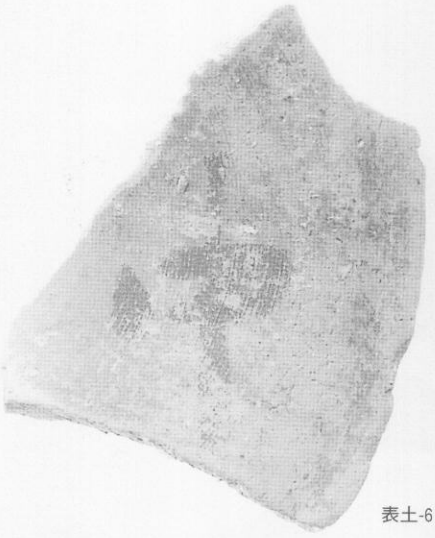


表土-9



茶褐土-4

条77次出土遺物３（甕形土器）



表土-6

条77次出土遺物４（「中」墨書土器）



SK065-15

条77次出土遺物５（「本」ヘラ描き土器）



条120次調査区全景（合成写真、上が南）



条120次西調査区（北西から）



条120次西調査区全景（空中写真、上が南）



条120次西調査区掘立柱建物全景（空中写真、上が北）



条120次東調査区全景（西から）



条120次東調査区全景（空中写真、上が南）



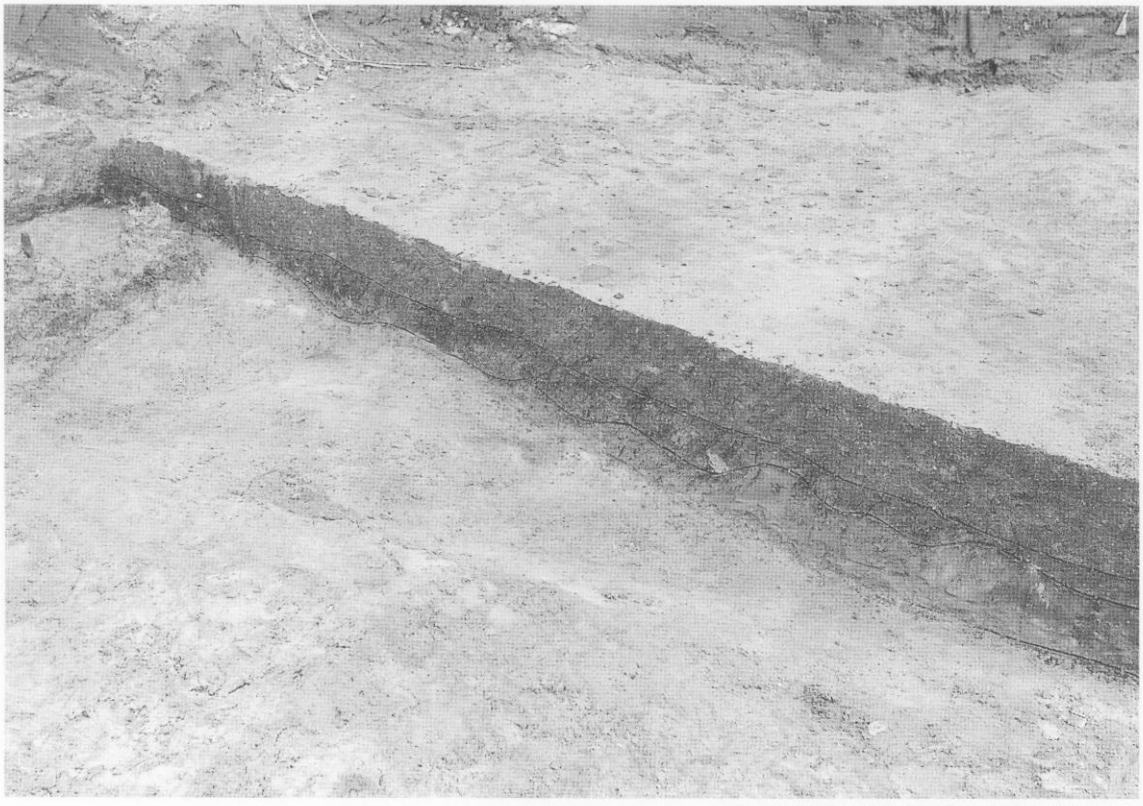
条路側溝完掘状況（東から）



120SD020土層（北から）



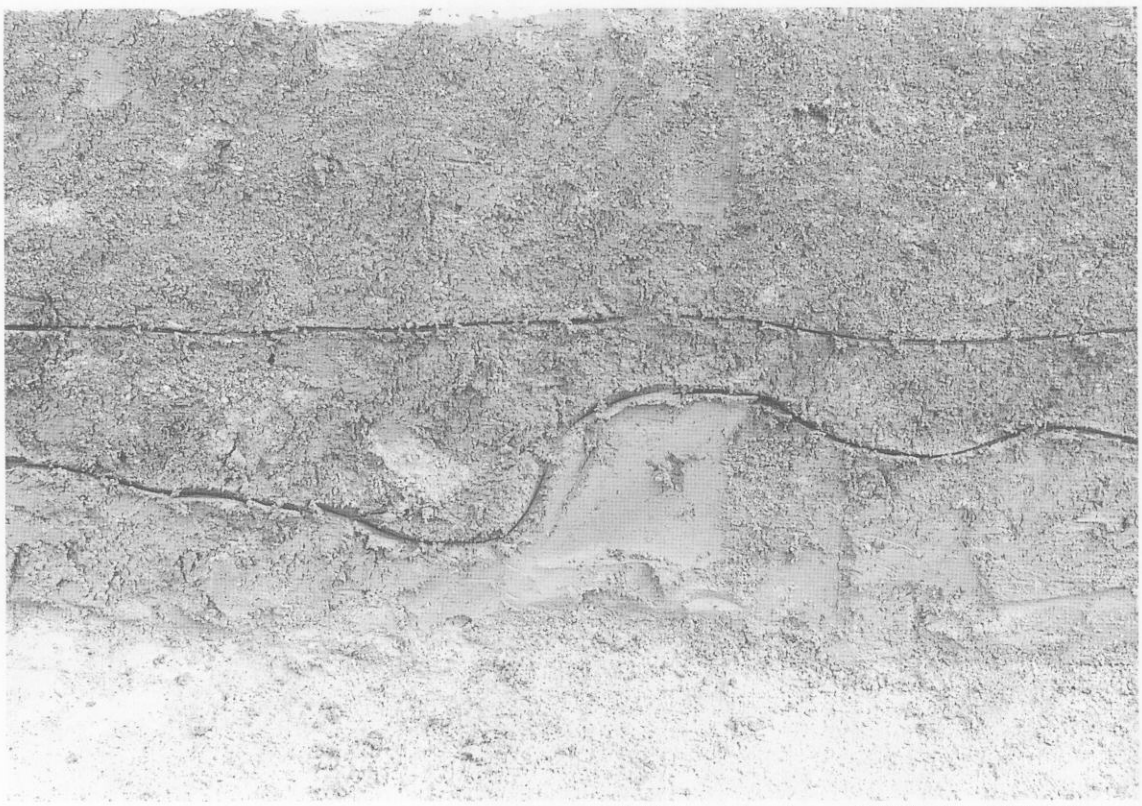
120SD020杭列（南から）



120SD020長軸土層（西から）



120SD020長軸土層・杭部分詳細（西から）



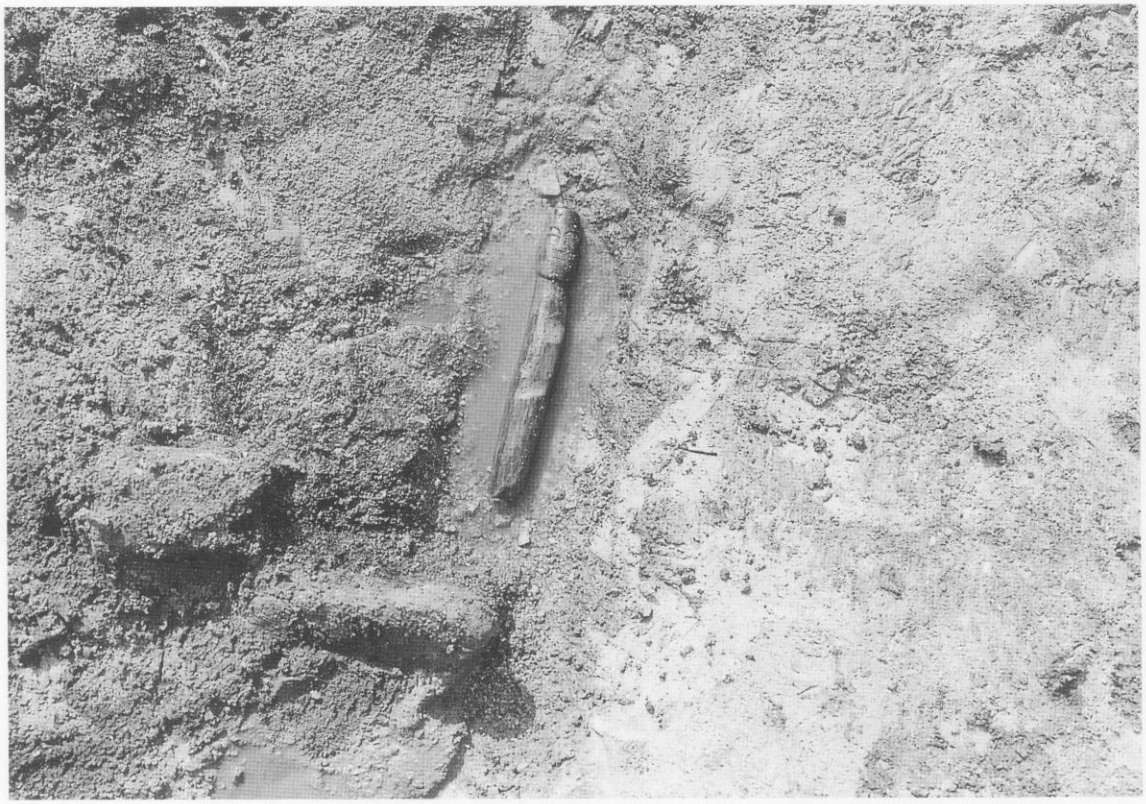
120SD020長軸土層・フルートマーク部分詳細（西から）



120SD020・025・030土層（南から）



120SD020・025・030土層詳細（南から）



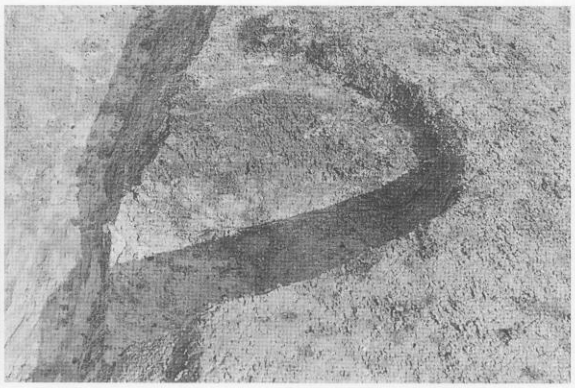
120SD030木製人形出土状況（東から）



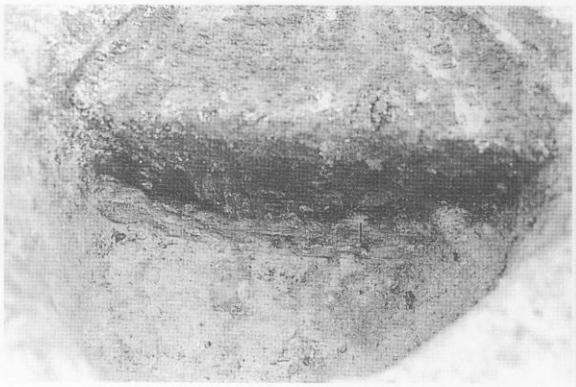
120SD091土層（東から）



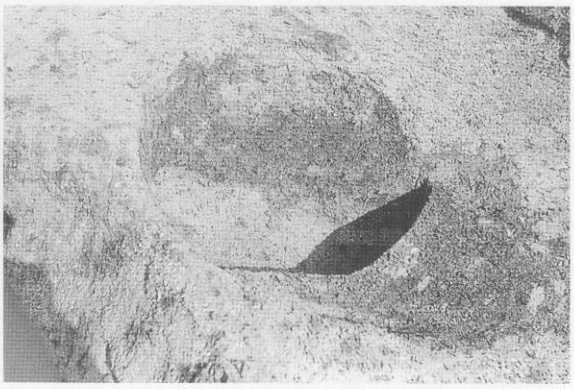
120SB010a土層（南から）



120SB010c土層（南から）



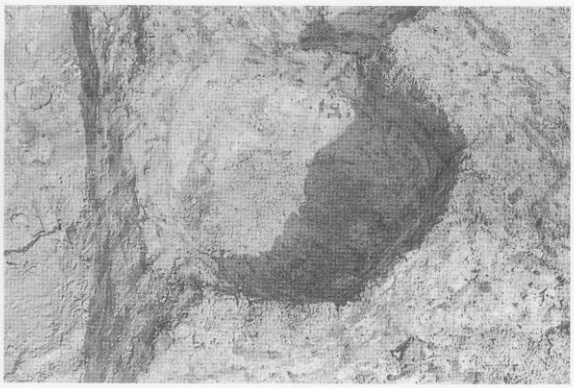
120SB010d土層（南から）



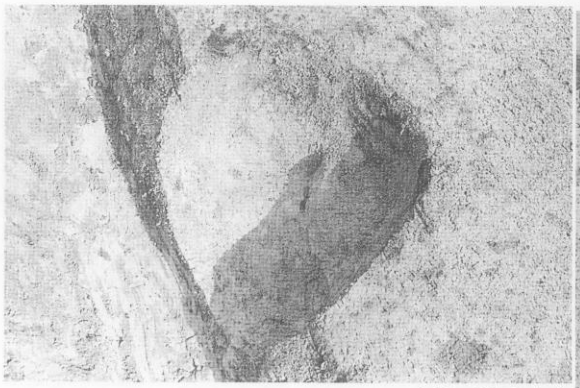
120SB010j土層（南から）



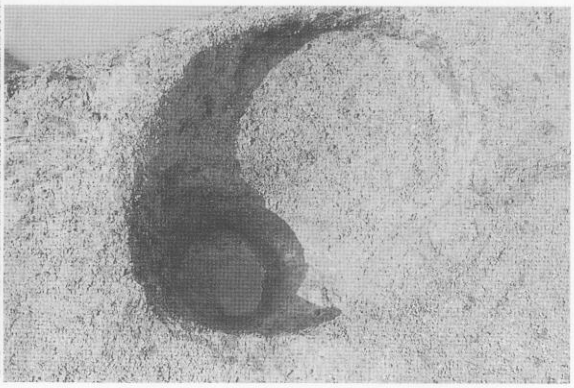
120SB010l土層（南から）



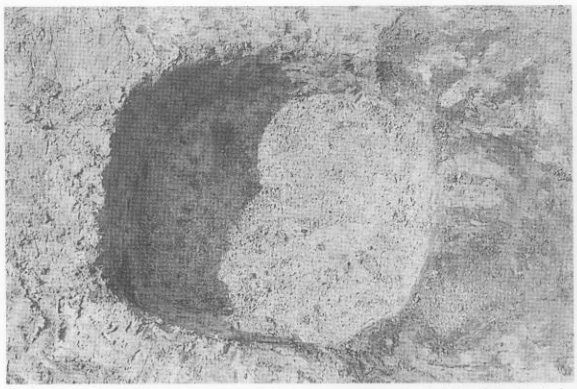
120SB010a完掘（南から）



120SB010c完掘（南から）



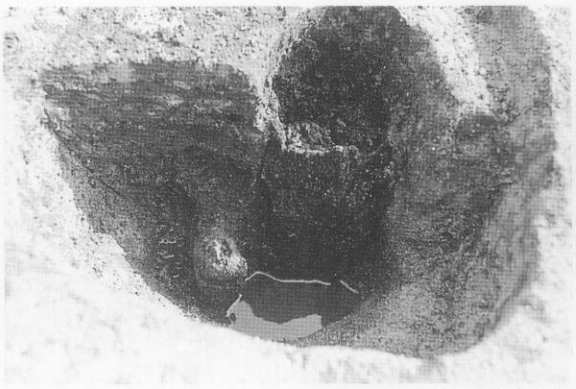
120SB010j完掘（南から）



120SB010l完掘（南から）



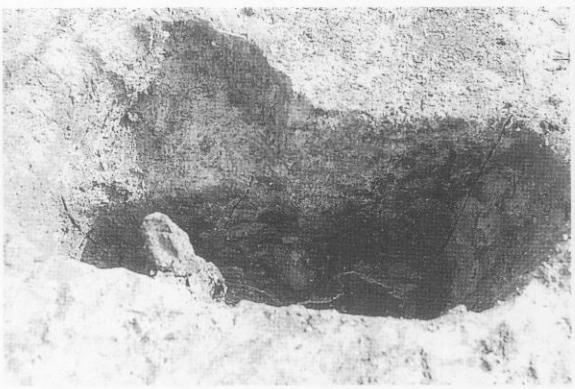
120SB015a土層（西から）



120SB015b土層（西から）



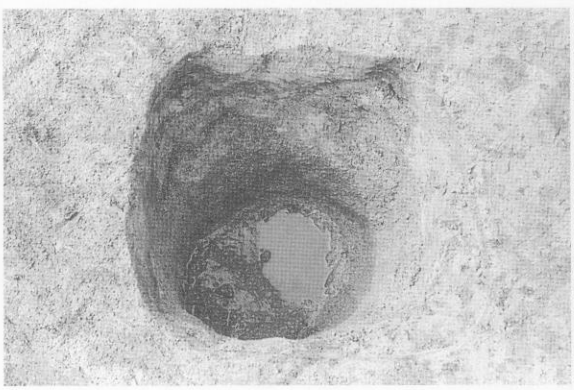
120SB015d土層（南から）



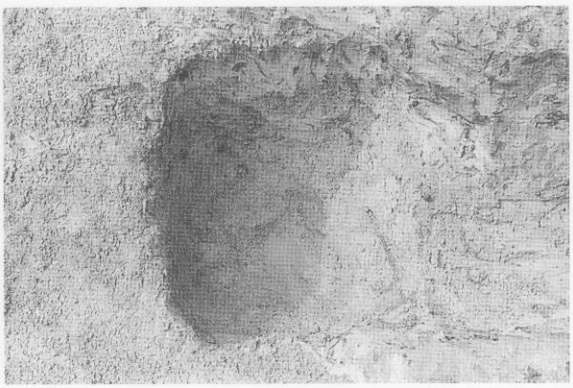
120SB015e土層（西から）



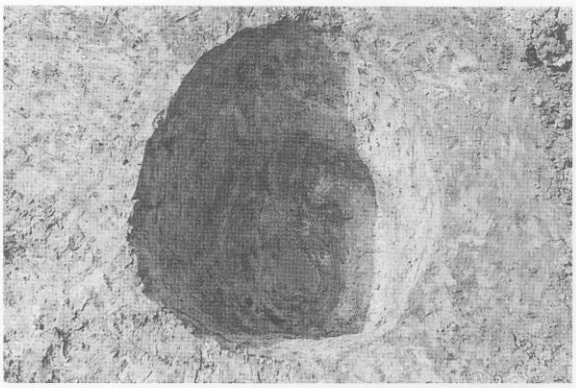
120SB015a完掘（西から）



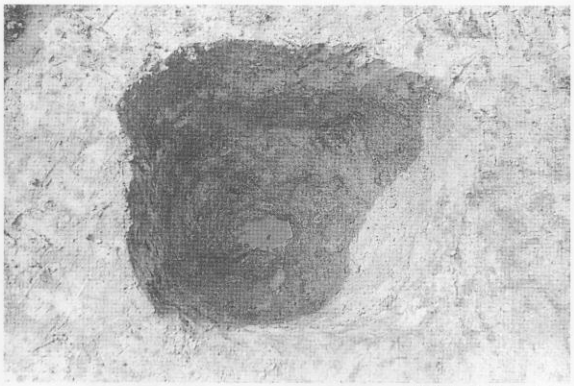
120SB015b完掘（東から）



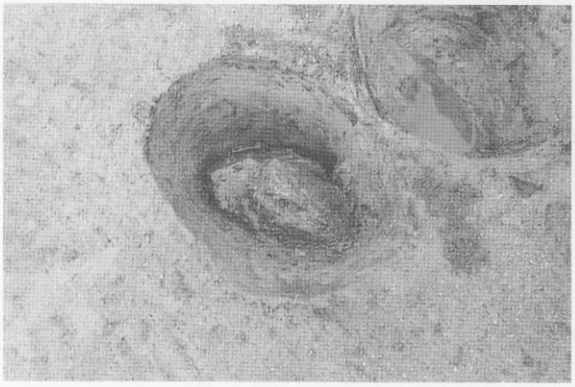
120SB015c完掘（東から）



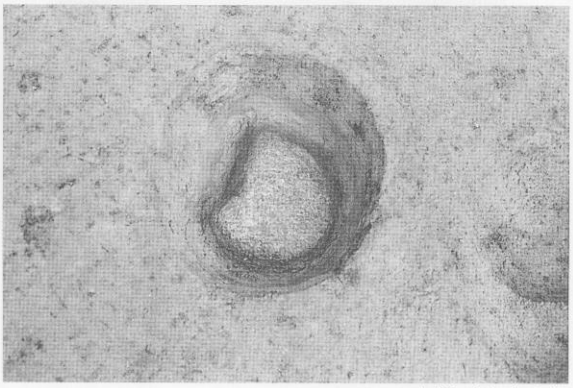
120SB015d完掘（東から）



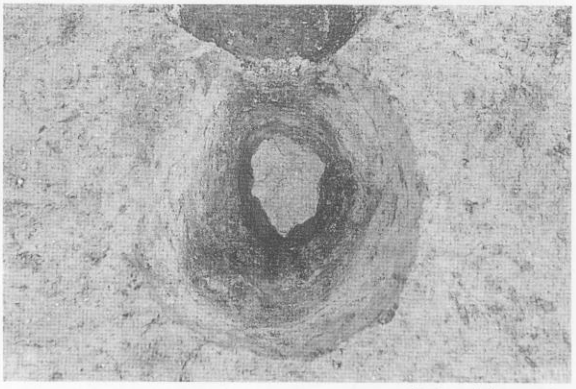
120SB015e完掘（東から）



120SB035a完掘（南から）

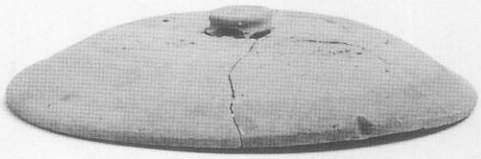


120SB035b完掘（南から）



120SB035c完掘（南から）

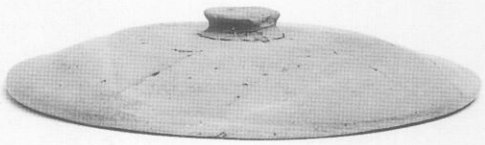
120SK005黒色土



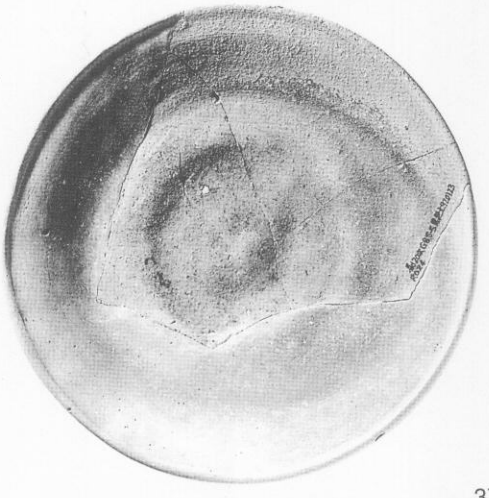
37-2



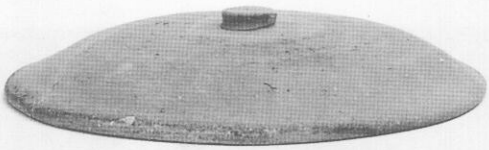
37-2



37-7



37-7



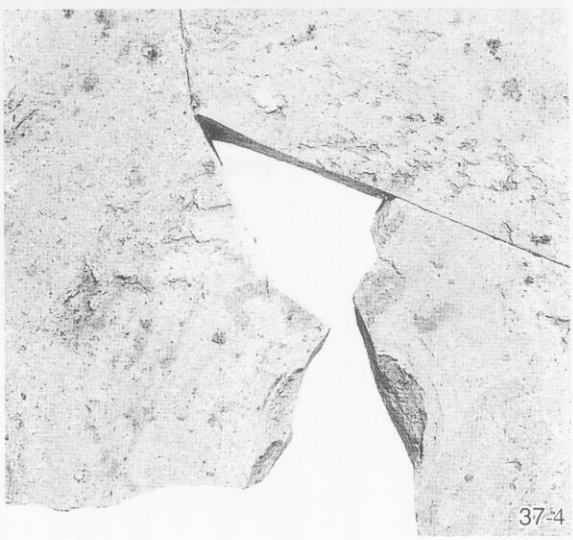
37-3



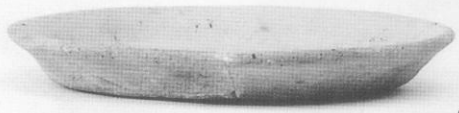
37-3



37-1



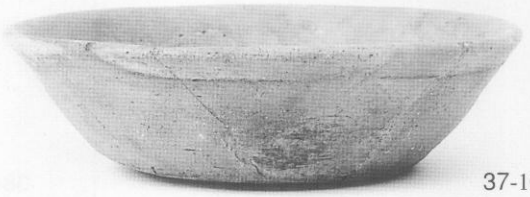
37-4



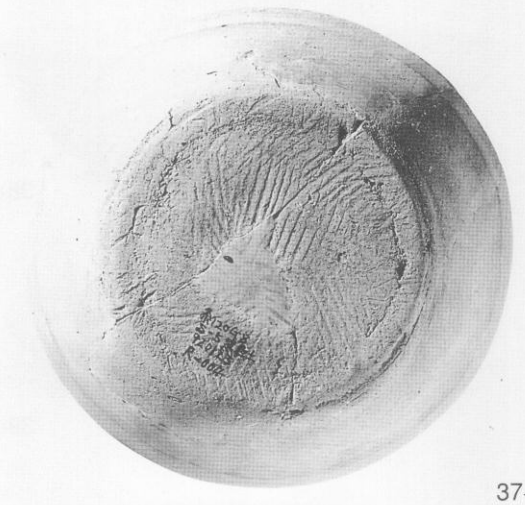
37-20



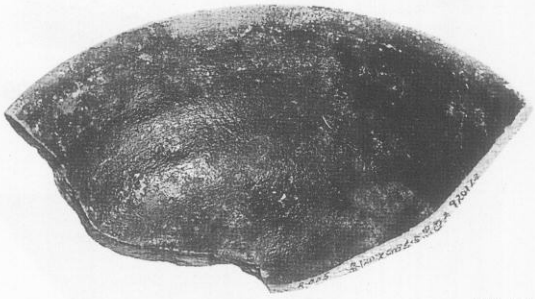
37-9



37-10



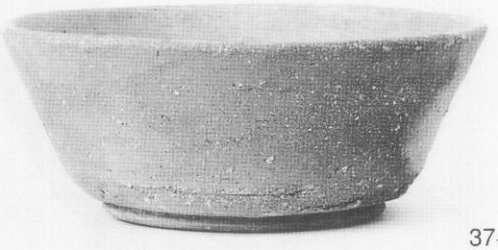
37-7



37-11



37-12



37-13



37-13



37-14



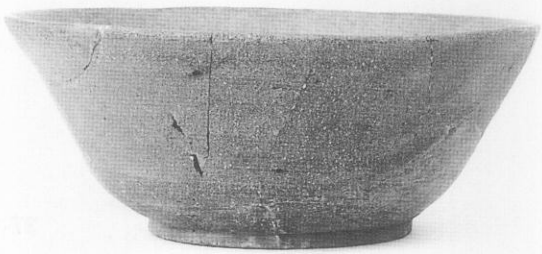
38-23



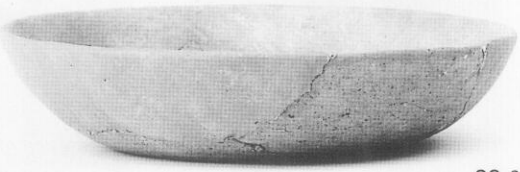
38-22



38-28



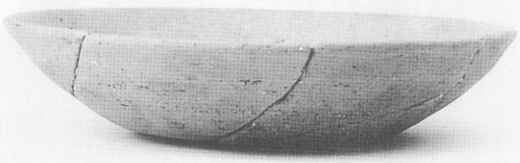
37-16



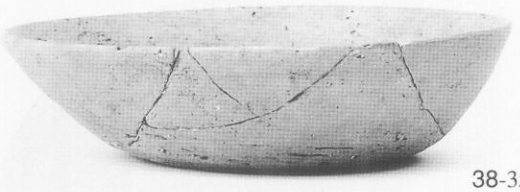
38-31



38-33



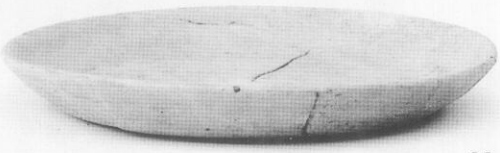
38-24



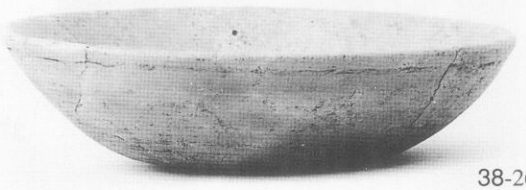
38-35



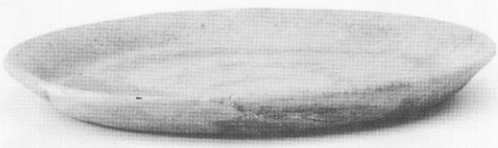
38-25



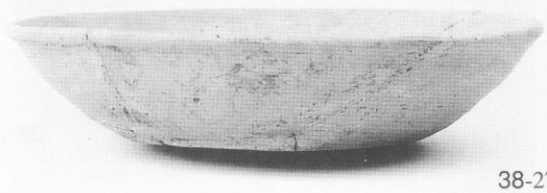
39-42



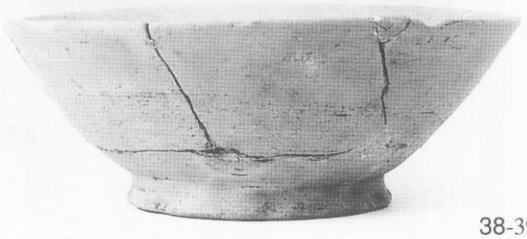
38-26



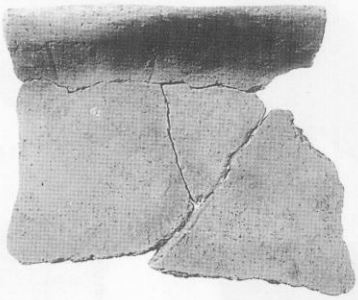
39-43



38-27



38-39



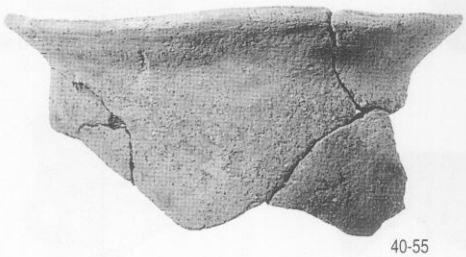
40-58



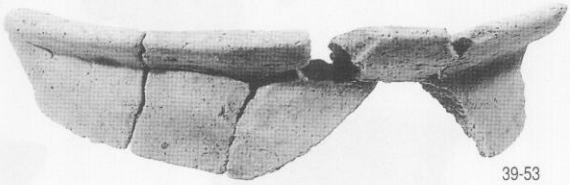
40-57



39-51

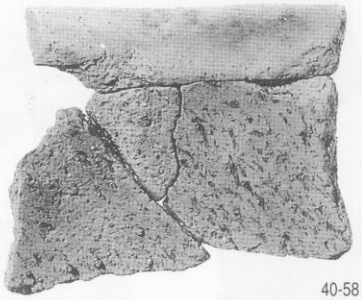


40-55

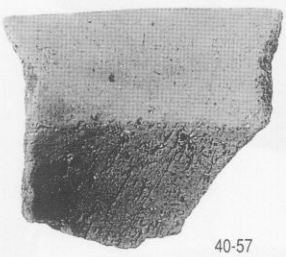


39-53

（外面１）



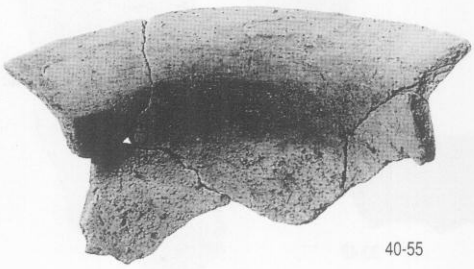
40-58



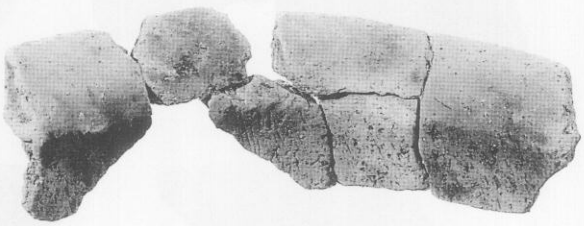
40-57



39-51

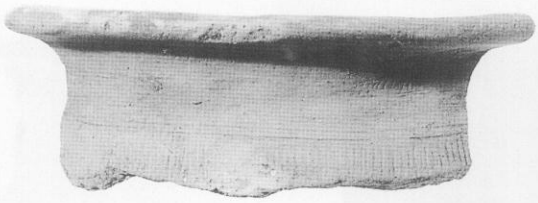


40-55

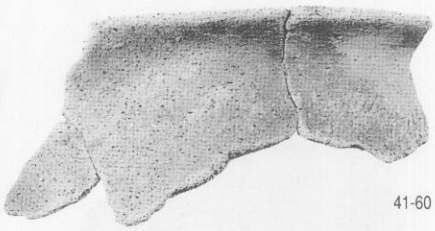


39-53

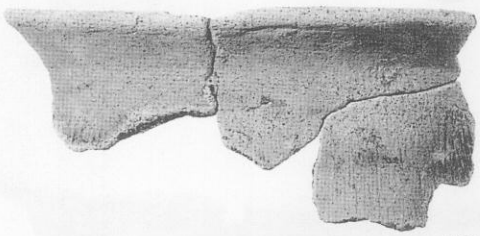
（内面１）



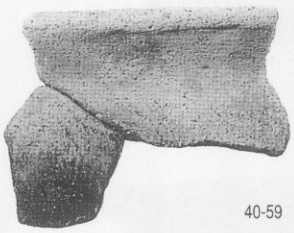
40-56



41-60



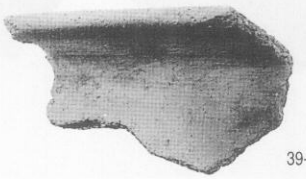
41-61



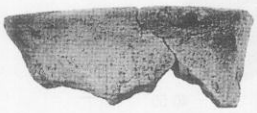
40-59



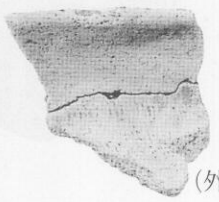
41-62



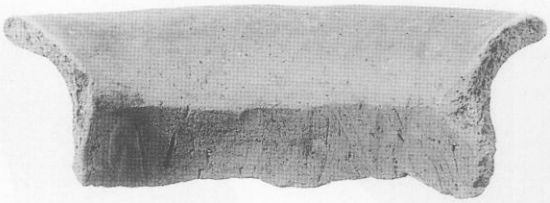
39-54



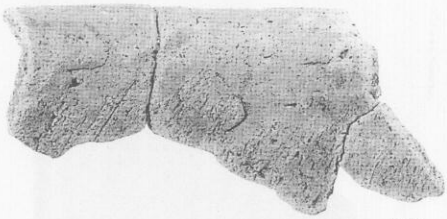
39-48



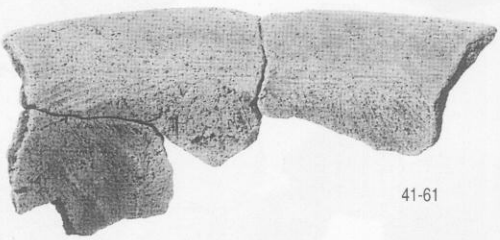
（外面２）



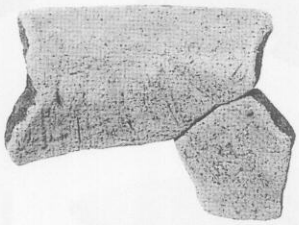
40-56



41-60



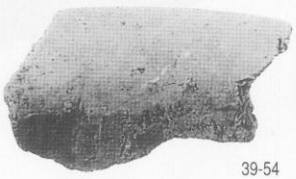
41-61



40-59



41-62



39-54



39-48

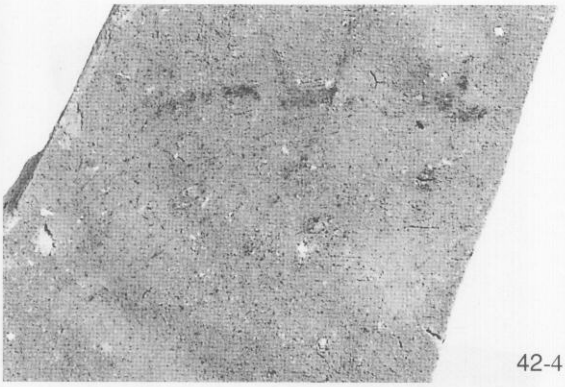


（内面２）



38-39

120SK016黒色土

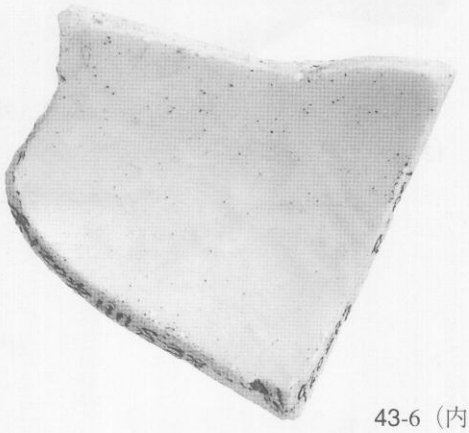


42-4

120SK038



38-37

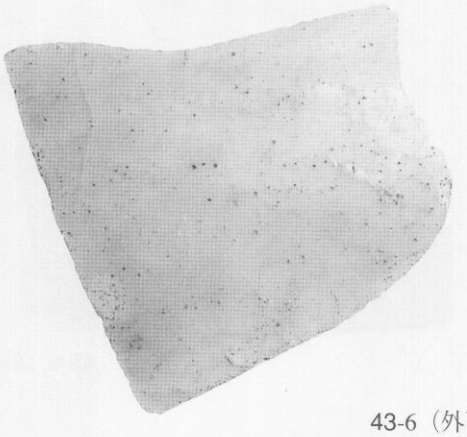


43-6（内面）

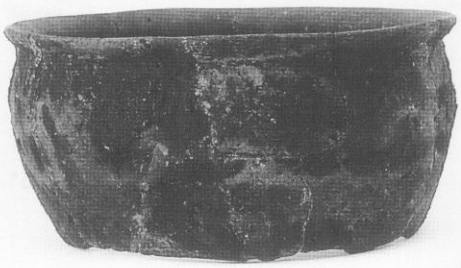


39-50

120SK052

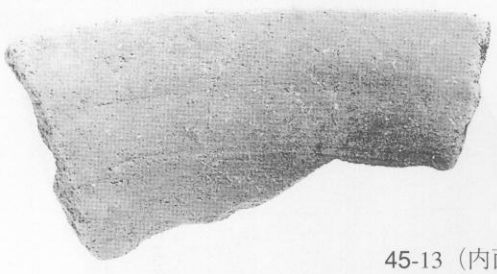


43-6（外面）

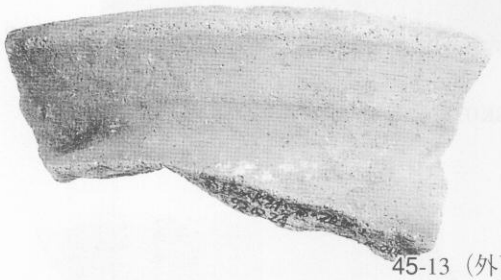


43-21

120SD020黒色土



45-13（内面）

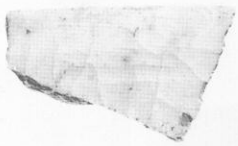


45-13（外面）

120SD020青灰色砂



（内面）



（外面）



46-6（外面1）

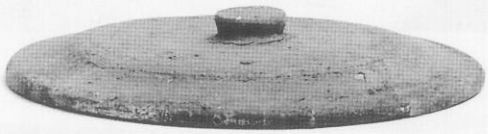


46-6（外面2）

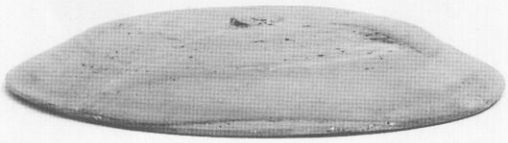


46-6（内面）

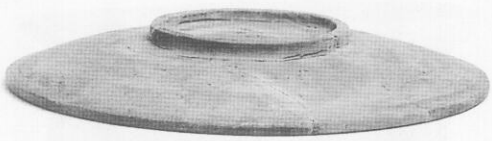
120SK061



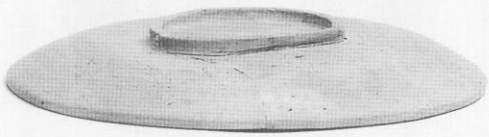
51-1



51-3



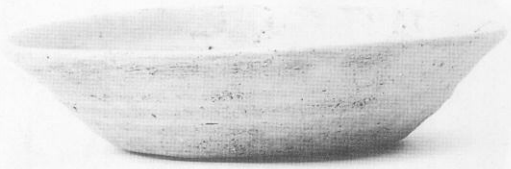
51-4



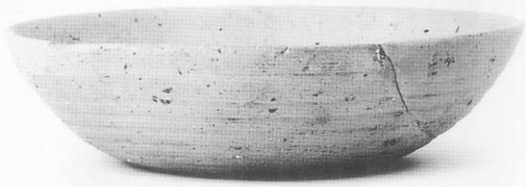
51-5



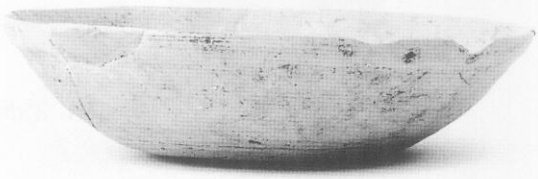
51-22



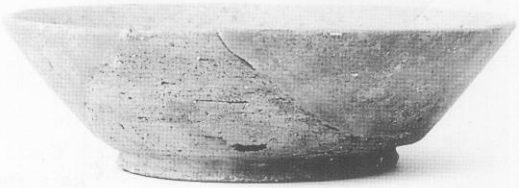
51-21



51-23



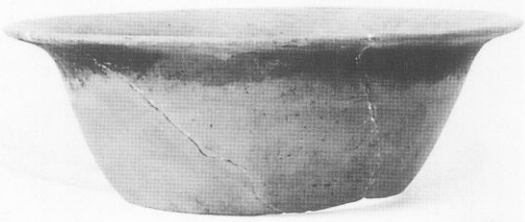
51-25



52-30



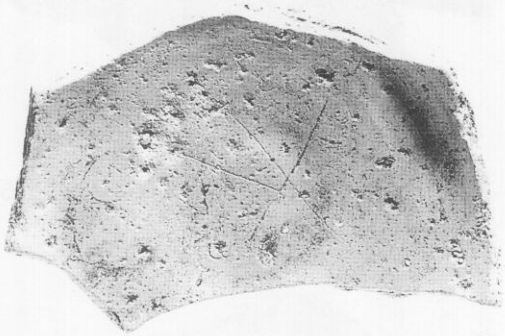
52-35



53-46



52-34



52-31

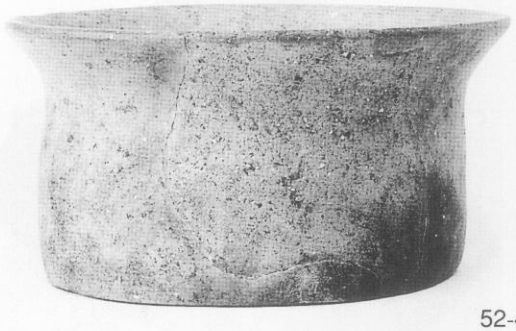


51-11

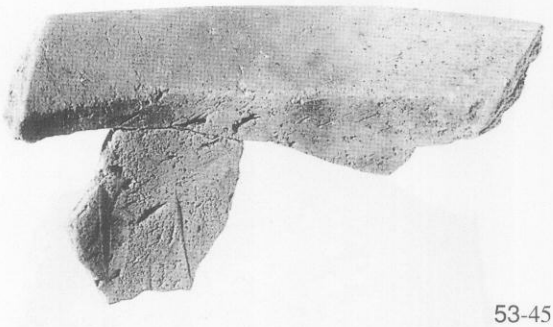
120SD091



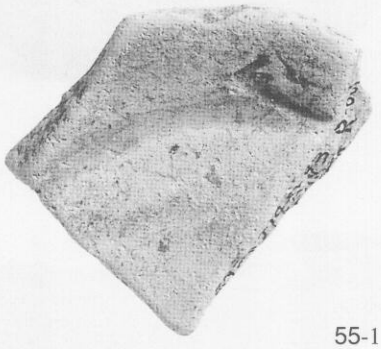
58-60



52-44 120SD093

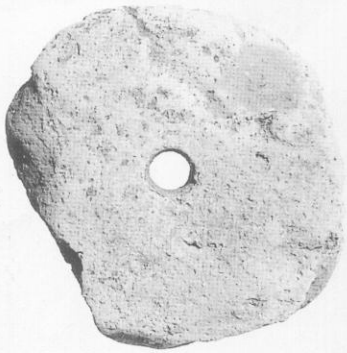


53-45

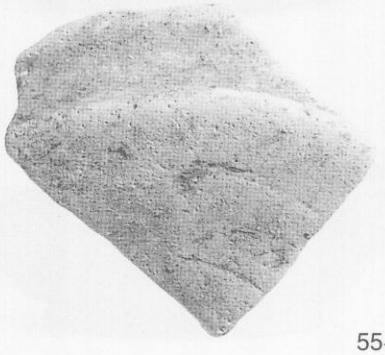


55-1（内面）

120SD088

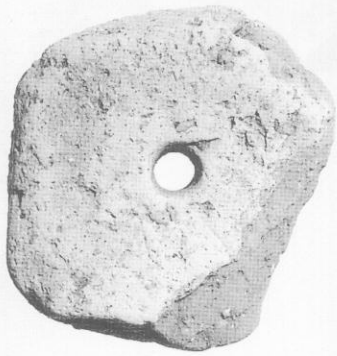


58-56（凸）

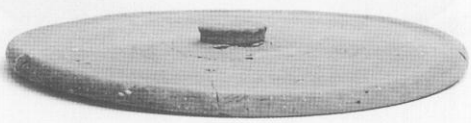


55-1（外面）

120SX001



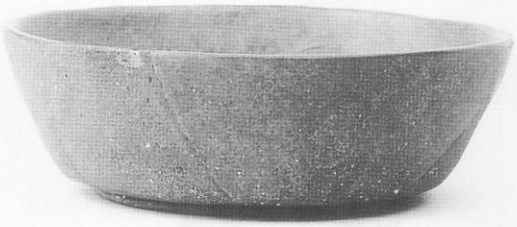
58-56（凹）



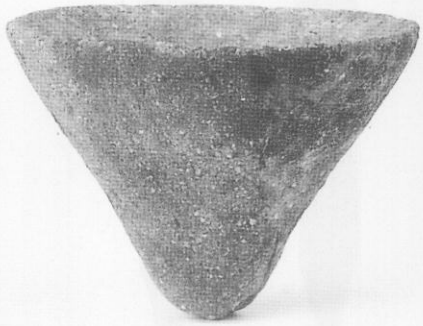
56-1



56-2



56-3



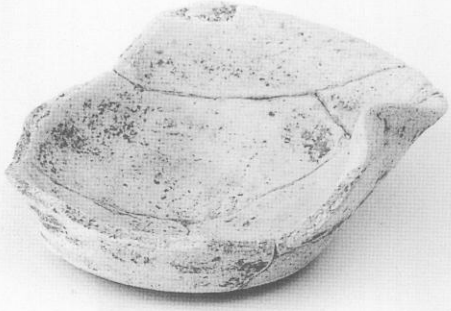
56-12

灰色砂



60-12

120SD020黒色土出土木製品



60-11



60-11



61-3



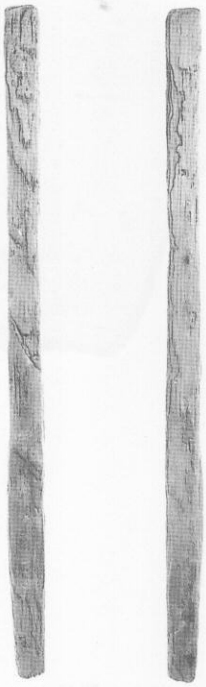
61-2



61-1

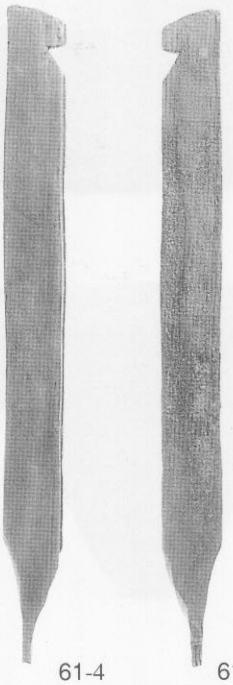
写真図版 28

120SD020灰色砂出土木製品



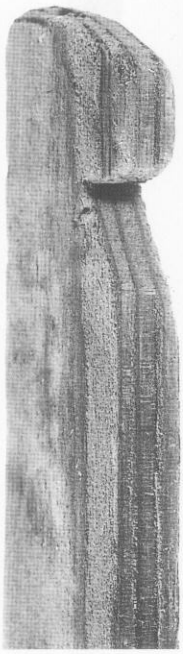
61-5

61-5



61-4

61-4



61-4



61-4



61-4



62（右）



62（左）



62（右）



62（正面）



62（左）



62（背面）



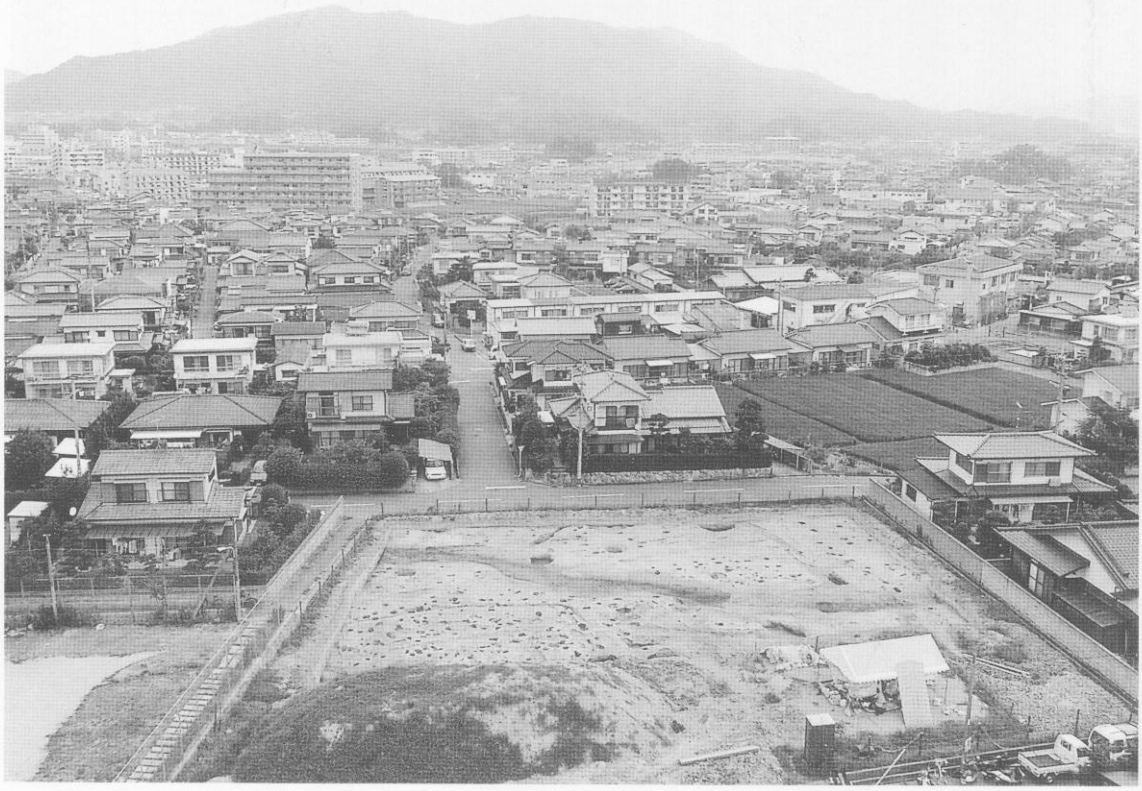
条154次調査区全景（空中写真）



条154次調査区全景（東から）



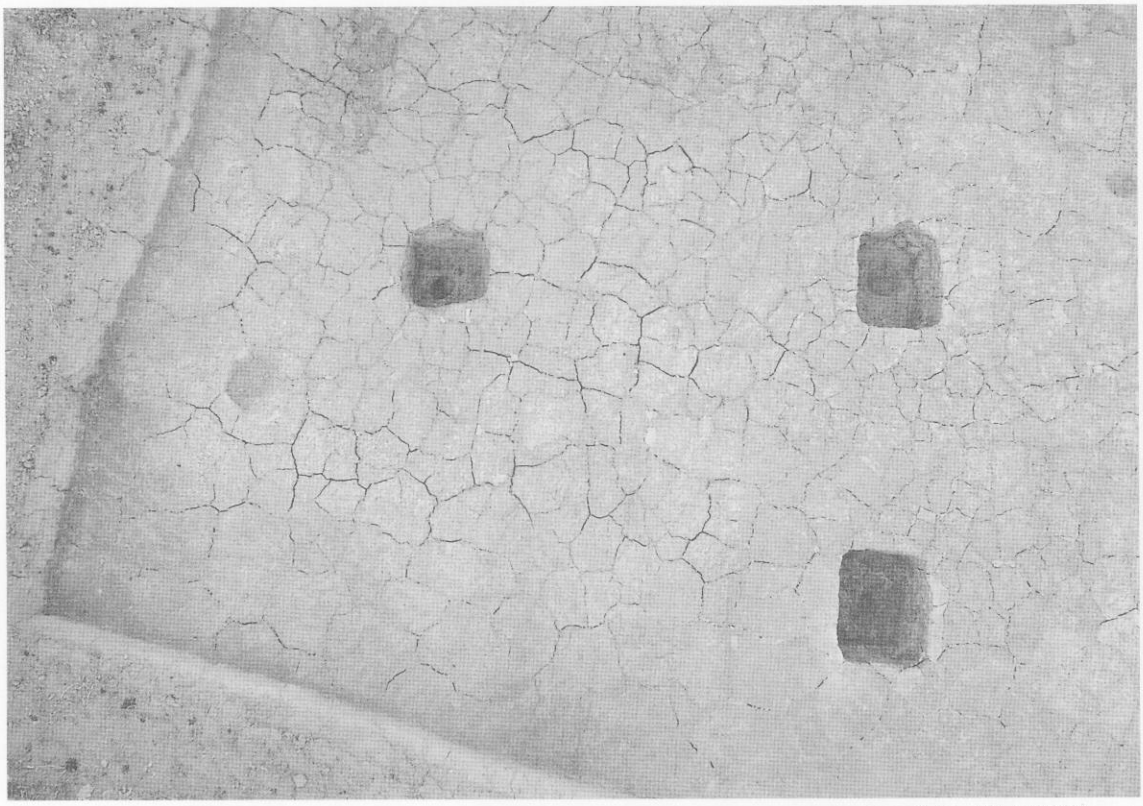
条154次調査区全景（西から）



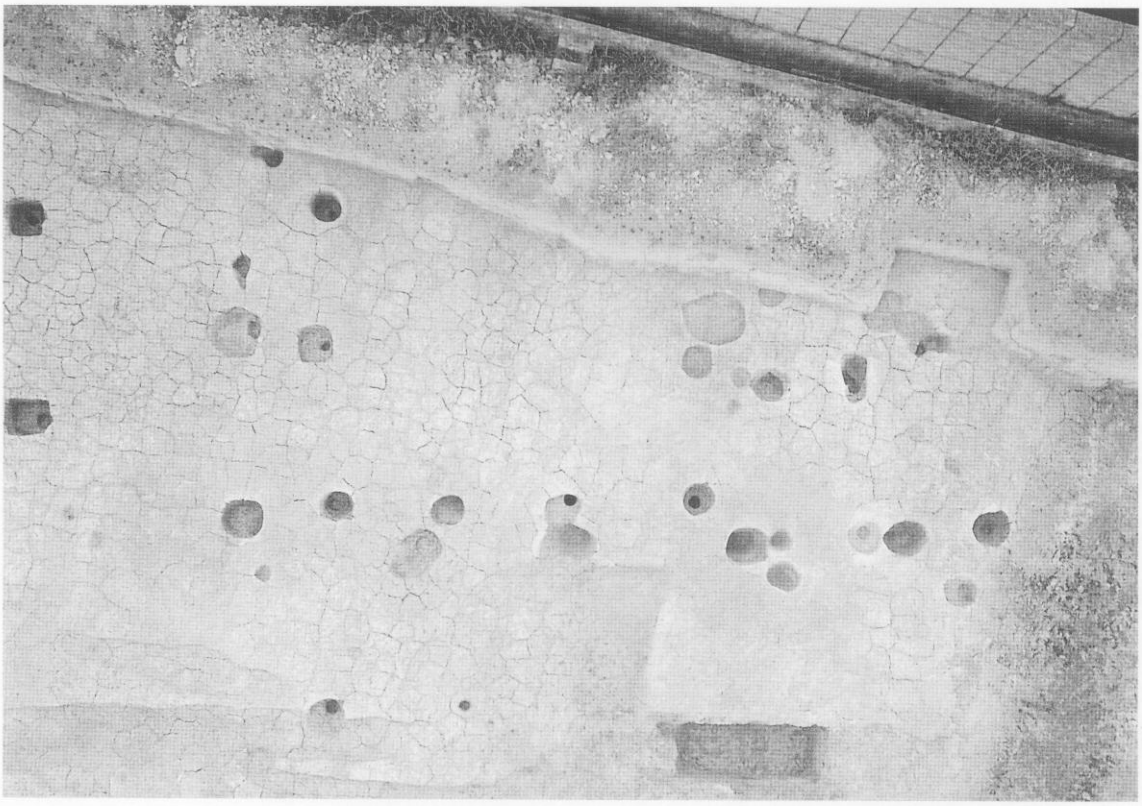
条154次調査区全景（南から）



条154次西調査区（空中写真）



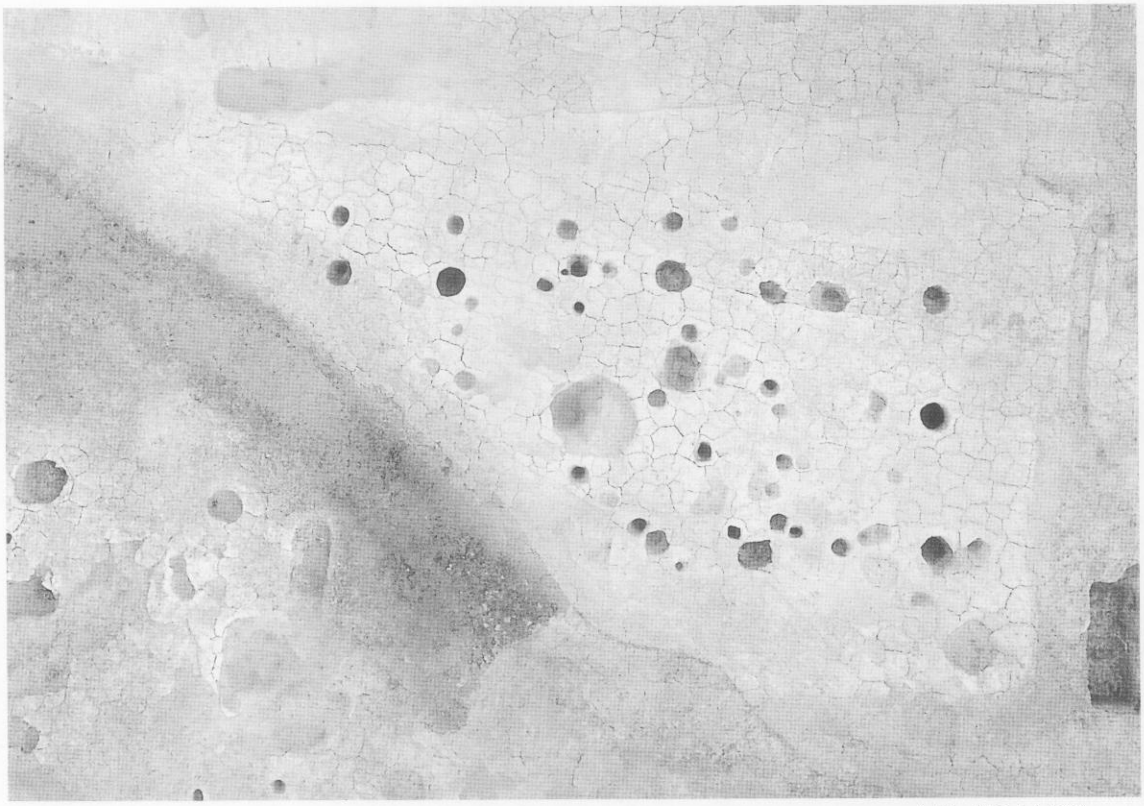
154SB001全景（空中写真）



154SB005・010全景（空中写真）



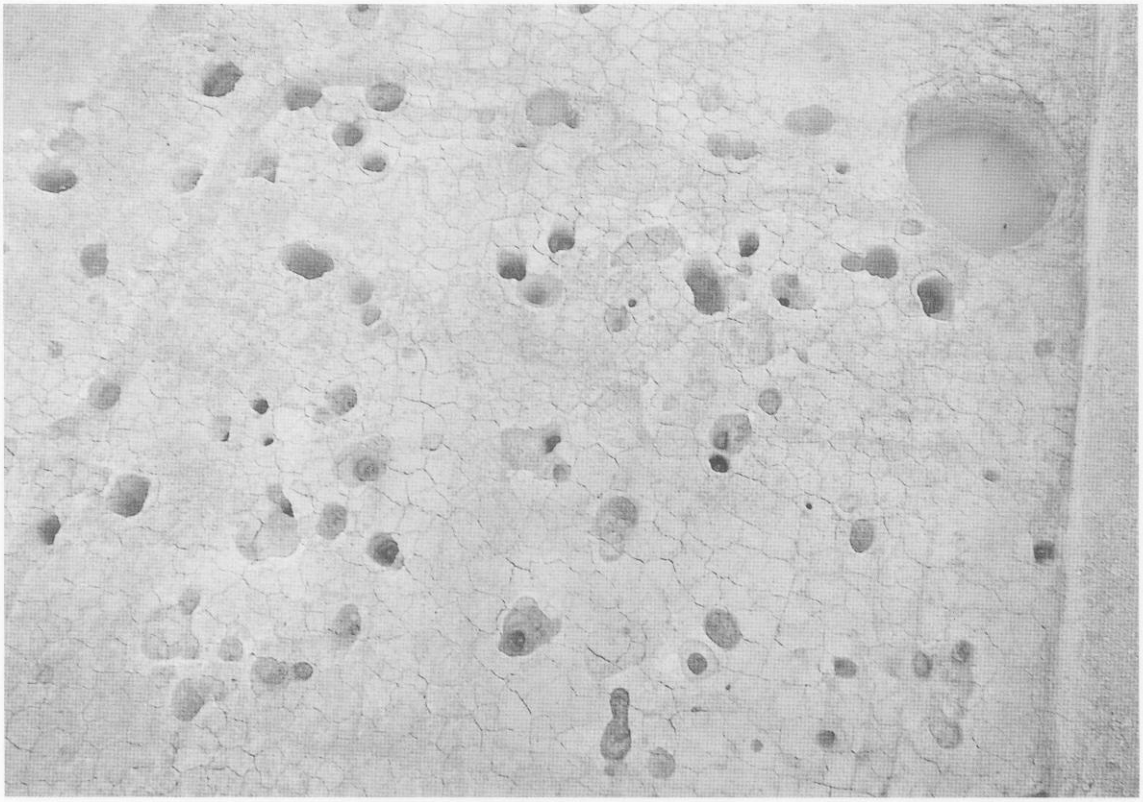
154SB040全景（空中写真）



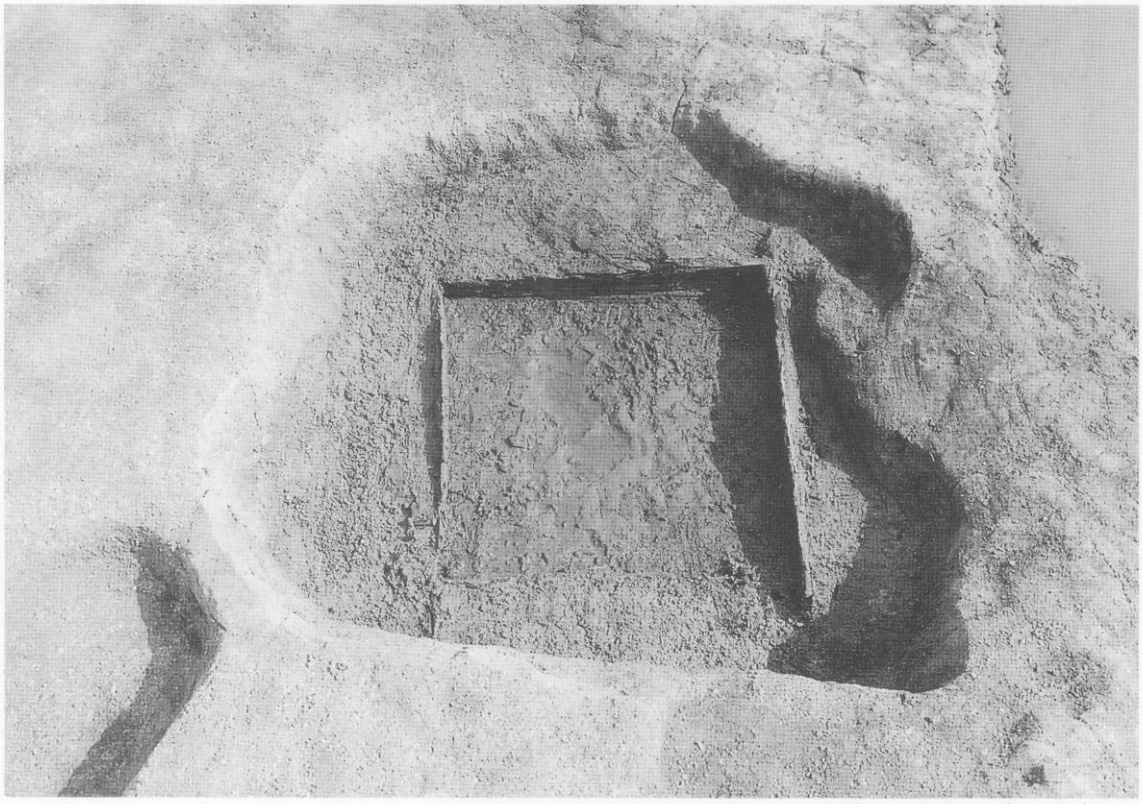
154SB045・120全景（空中写真）



154SB105全景（空中写真）



154SB110全景（空中写真）



154SE065枠検出状況全景（北から）



154SE065枠内完掘状況（北から）



154SE065完掘状況（南から）



154SE065枠詳細（北から）



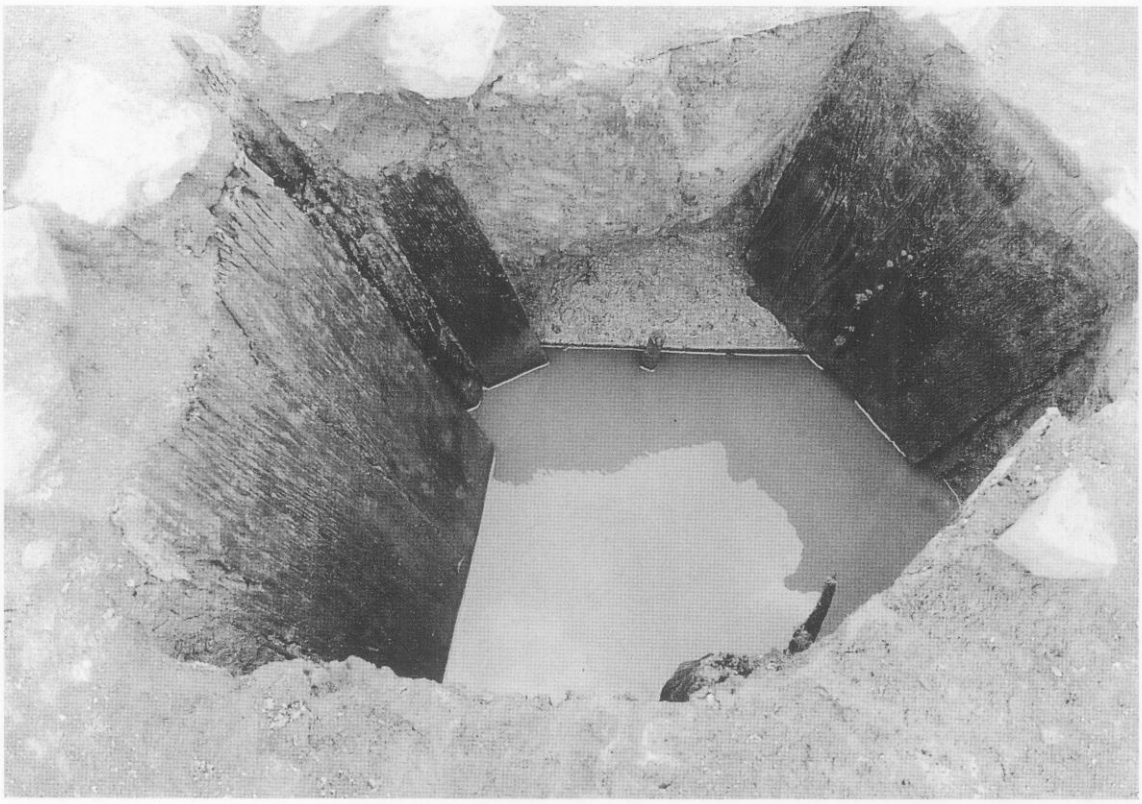
154SE065枠詳細（東から）



154SE095枠検出状況（北から）



154SE095枠内完掘状況（北から）



154SE095枠内詳細（北東から）



154SE095枠内詳細（南西から）



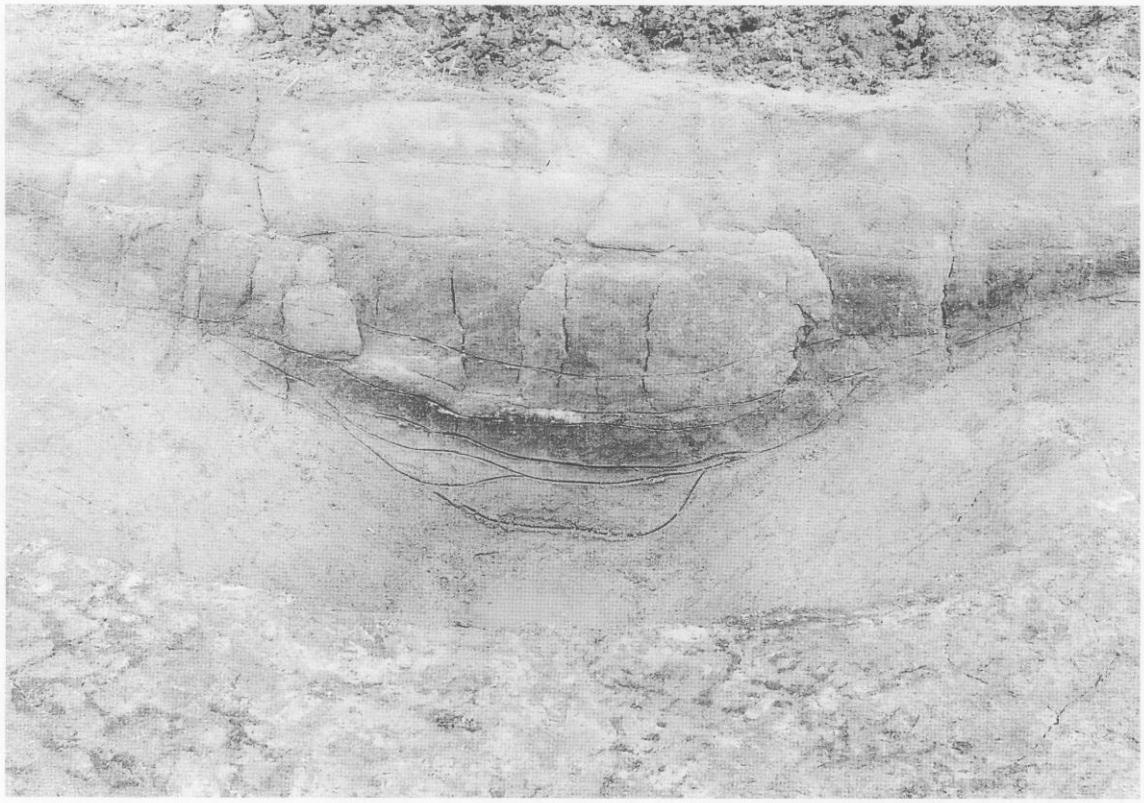
154SE100枠検出状況（北から）



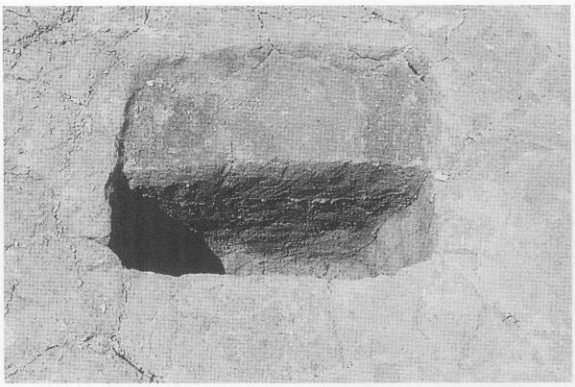
154SX184板材出土状況（東から）



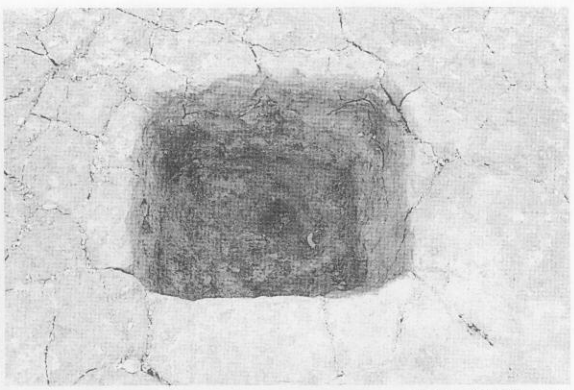
154SD050土層観察（西から）



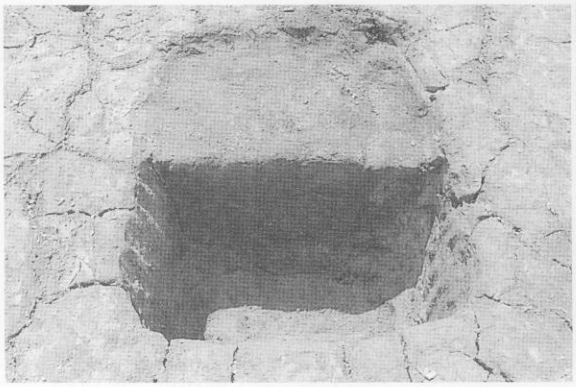
154SD050土層詳細観察（西から）



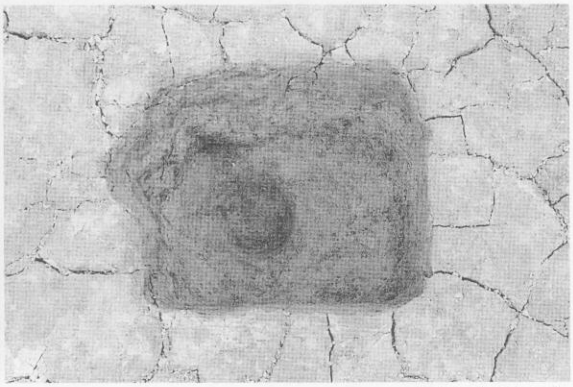
154SB001a土層（東から）



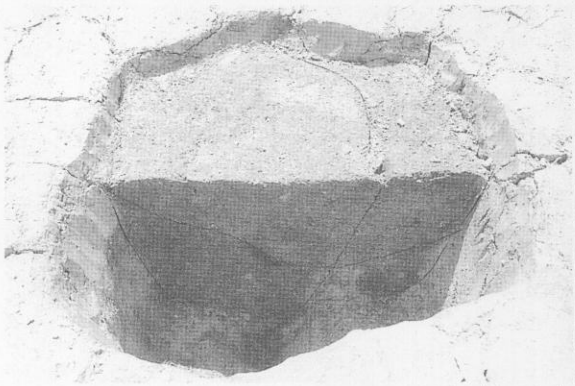
154SB001a完掘（南から）



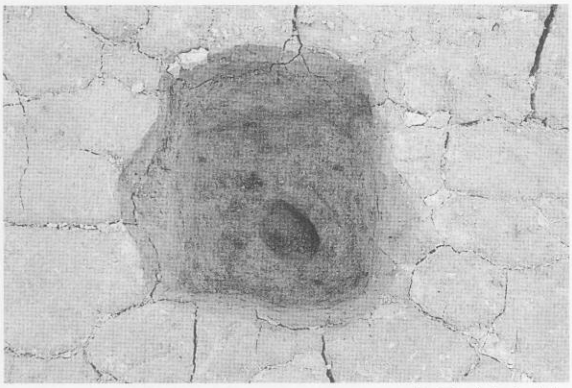
154SB001b土層（東から）



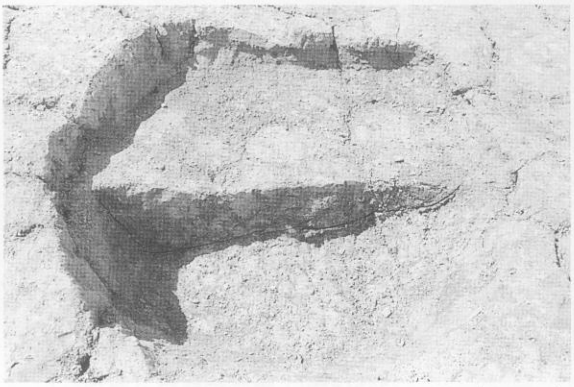
154SB001b完掘（南から）



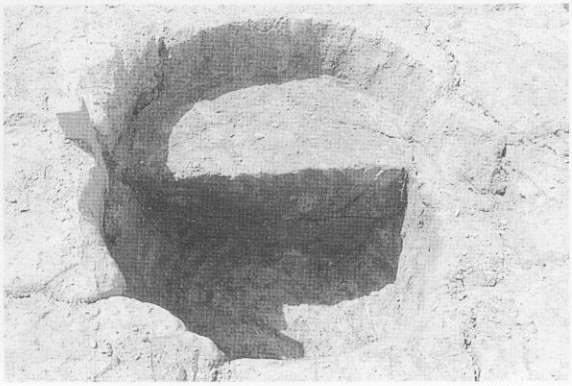
154SB001c土層（北から）



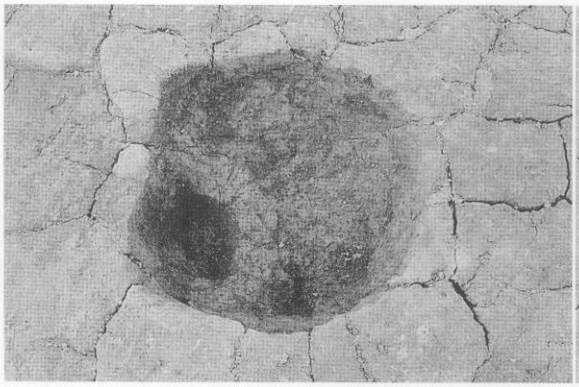
154SB001c完掘（南から）



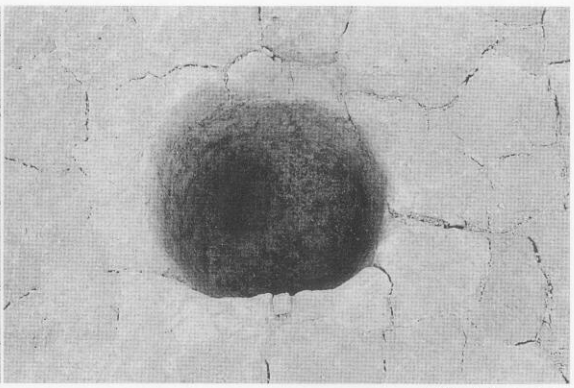
154SB005a土層（北から）



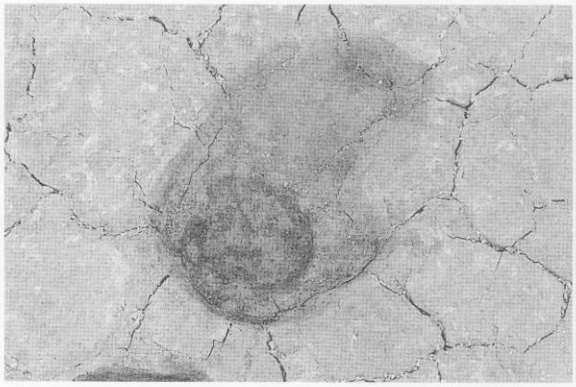
154SB005b土層（北から）



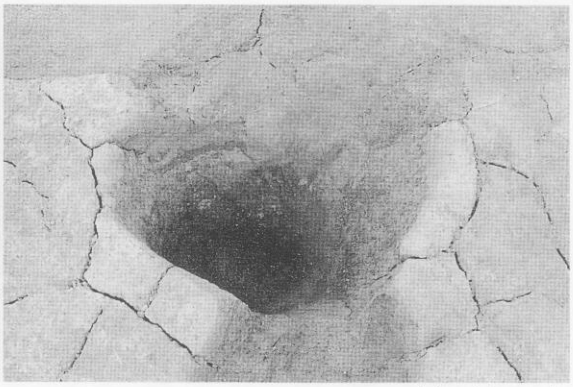
154SB005a完掘（南から）



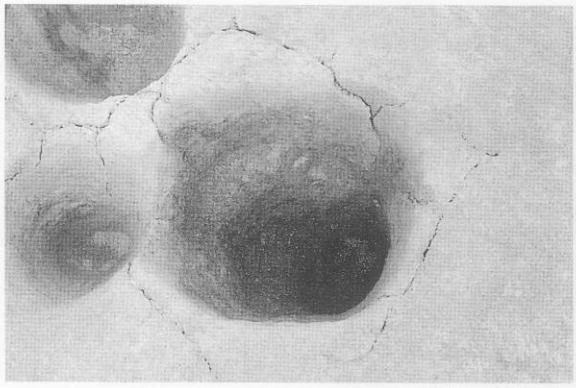
154SB005b完掘（南から）



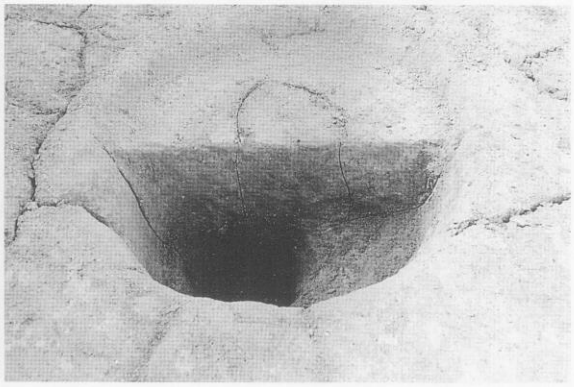
154SB005c完掘（東から）



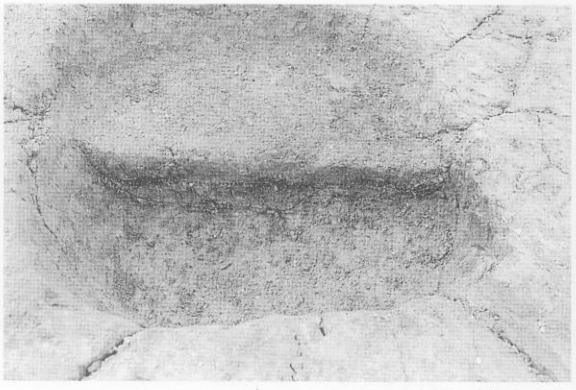
154SB005d完掘（東から）



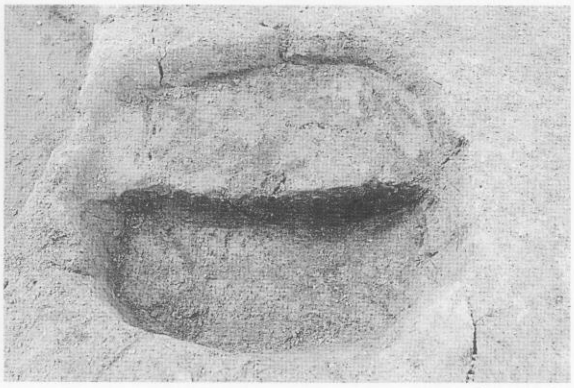
154SB005e完掘（東から）



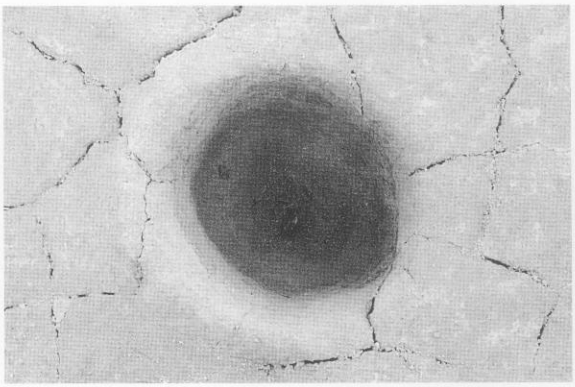
154SB010a土層（北から）



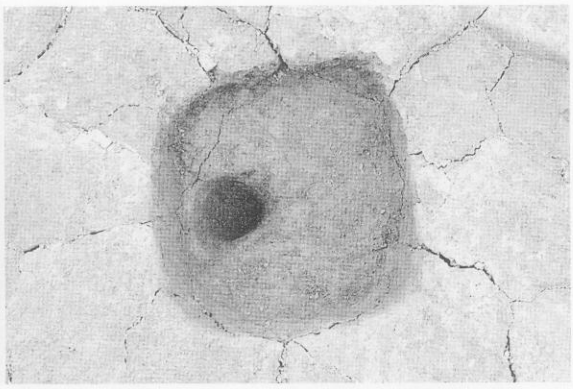
154SB010b土層（北から）



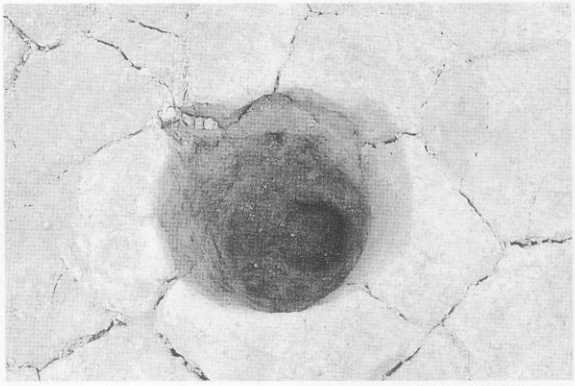
154SB010g土層（北から）



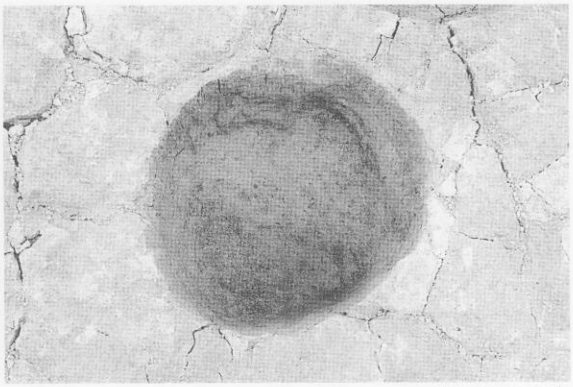
154SB010a完掘（東から）



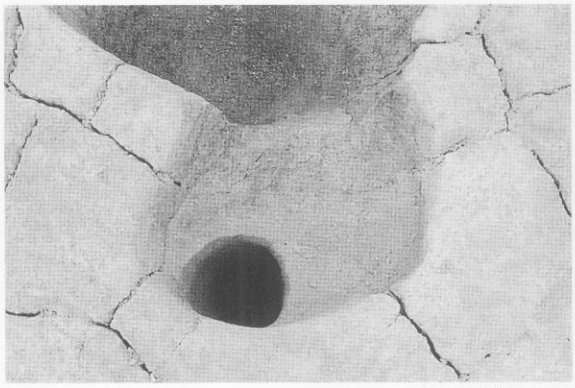
154SB010b完掘（東から）



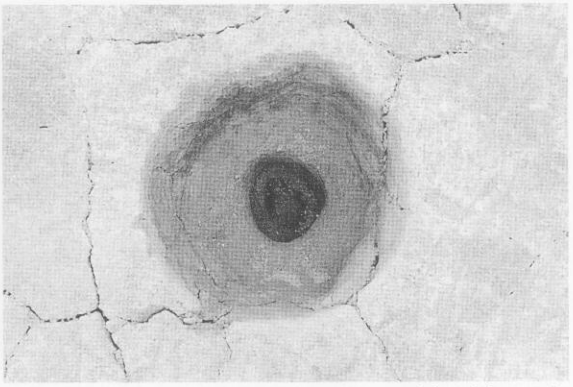
154SB010c完掘（東から）



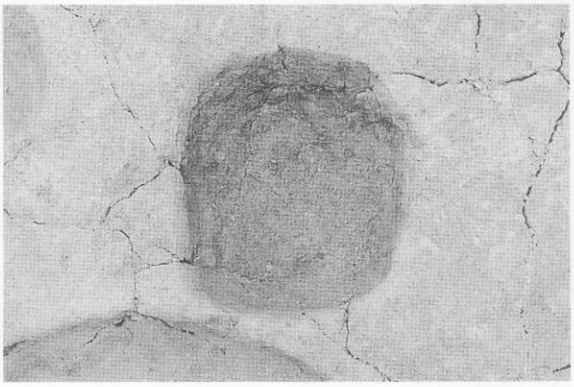
154SB010d完掘（東から）



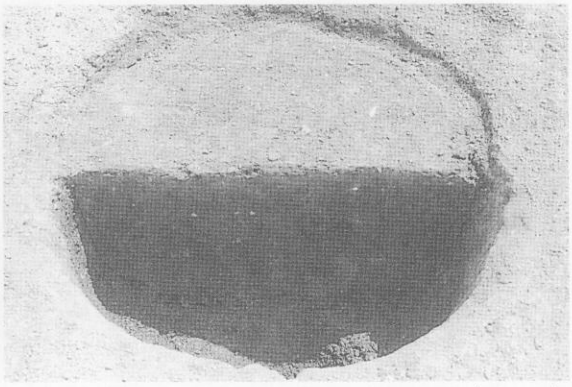
154SB010e完掘（東から）



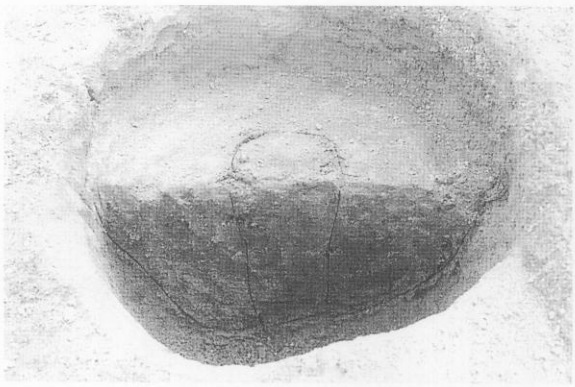
154SB010f完掘（東から）



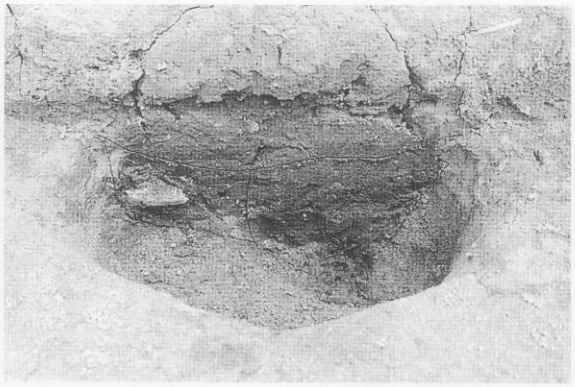
154SB010g完掘（東から）



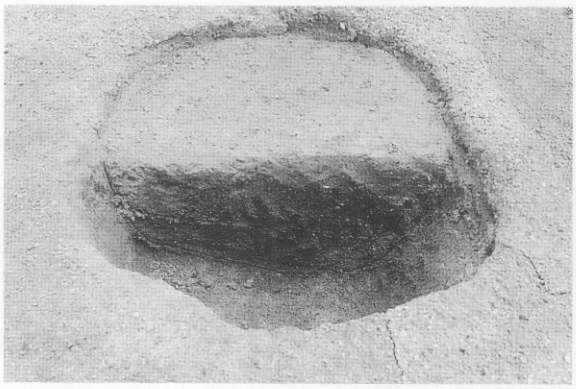
154SB040b土層（西から）



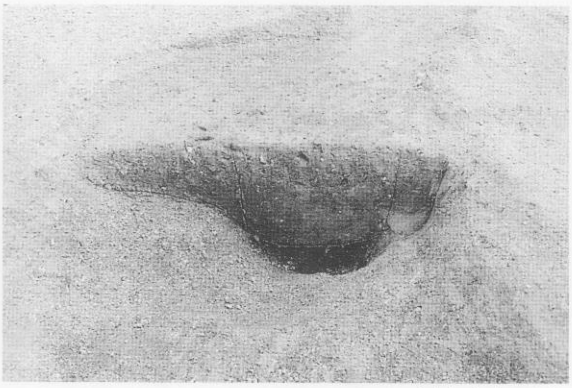
154SB040c土層（西から）



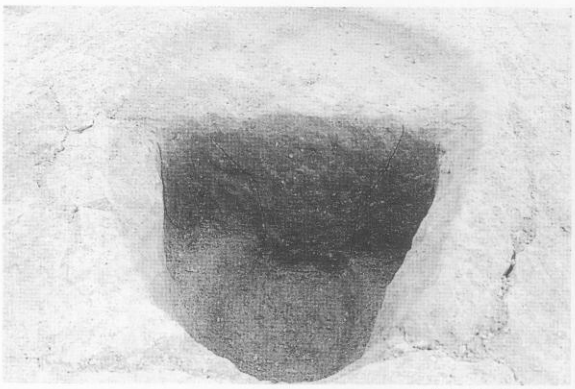
154SB040d土層（南から）



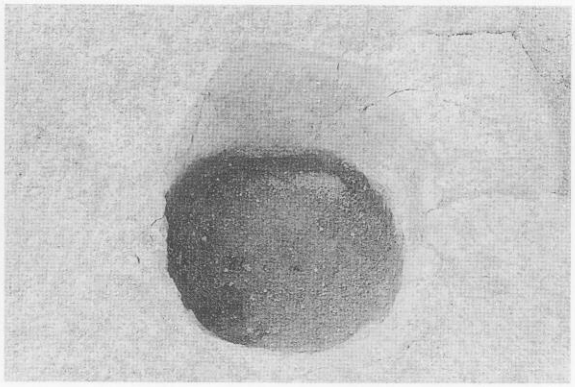
154SB040g土層（西から）



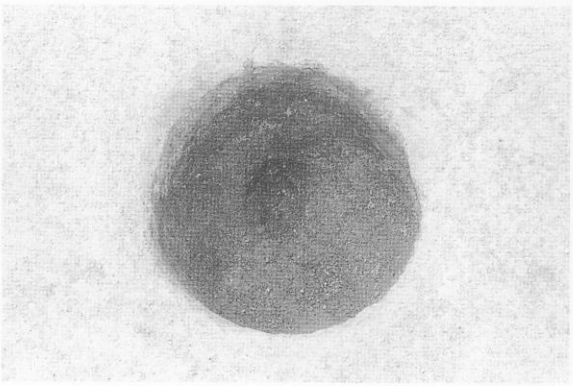
154SB040h土層（西から）



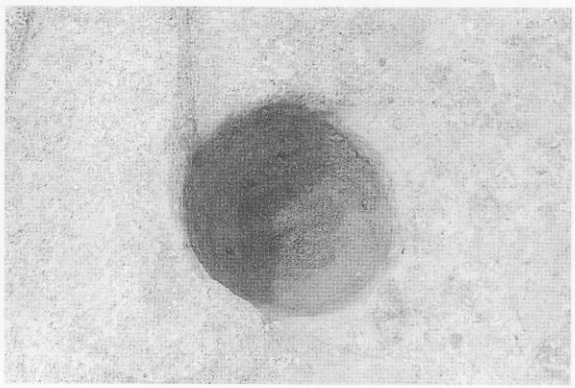
154SB040i土層（西から）



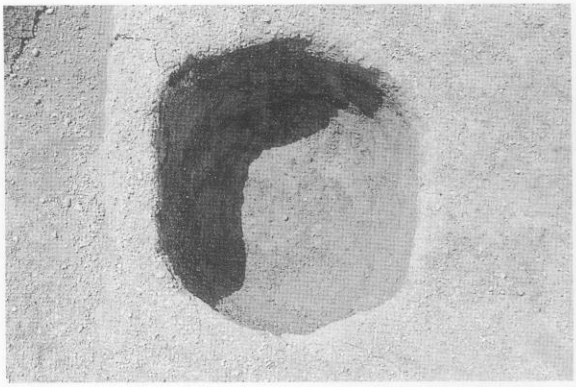
154SB040a完掘（東から）



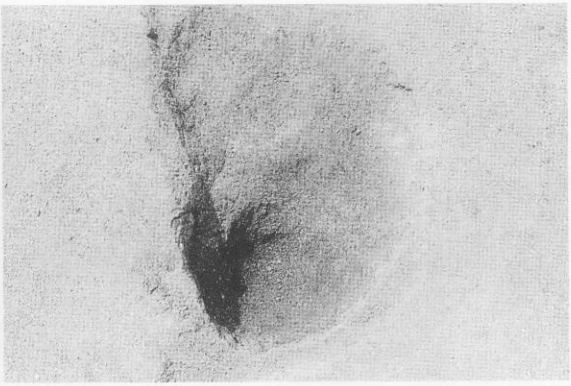
154SB040b完掘（東から）



154SB040c完掘（東から）



154SB040g完掘（東から）



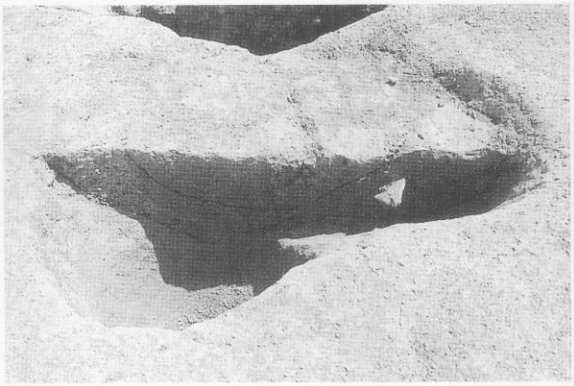
154SB040h完掘（東から）



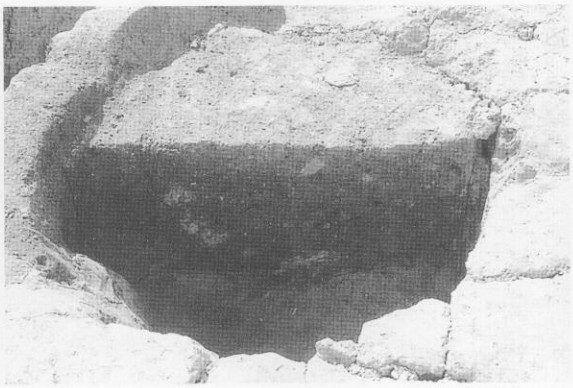
154SB040i完掘（東から）



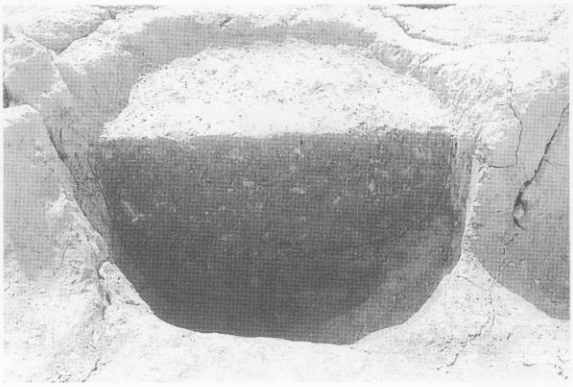
154SB055a土層（北から）



154SB055l土層（北から）



154SB105e土層（北から）



154SB105f土層（東から）

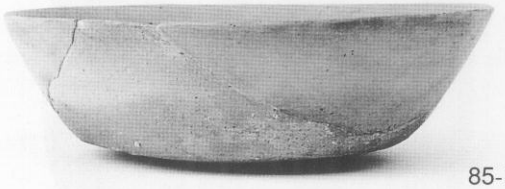
154SB040h



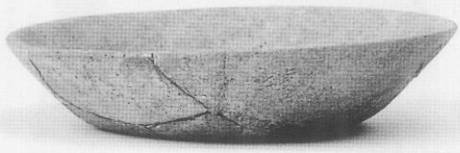
85-11



91-7



85-17

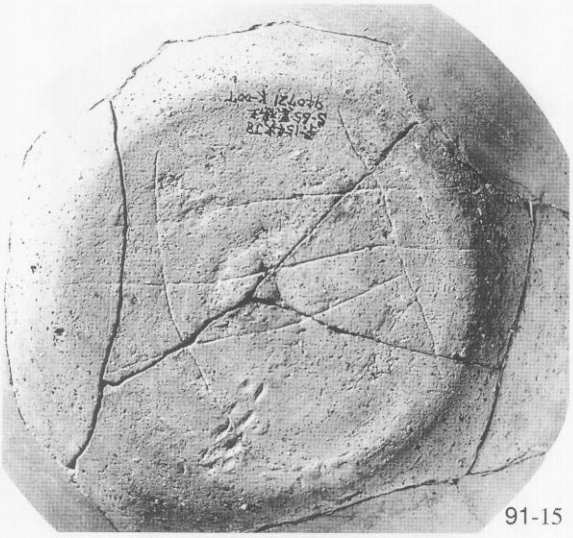


91-15

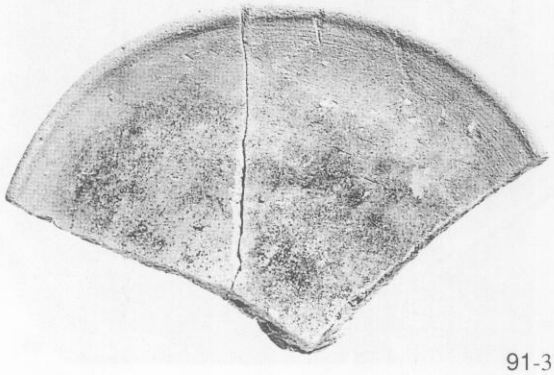


85-20

154SE065黒褐色土



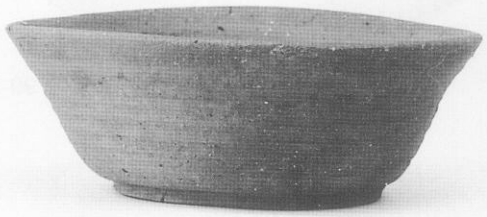
91-15



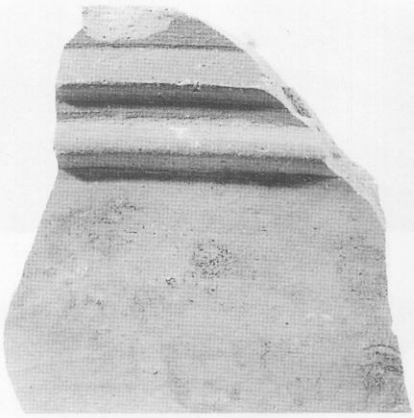
91-3



92-32

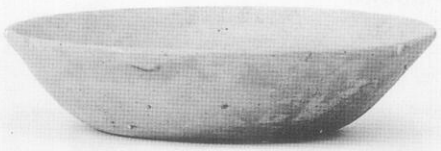


91-7



91-9

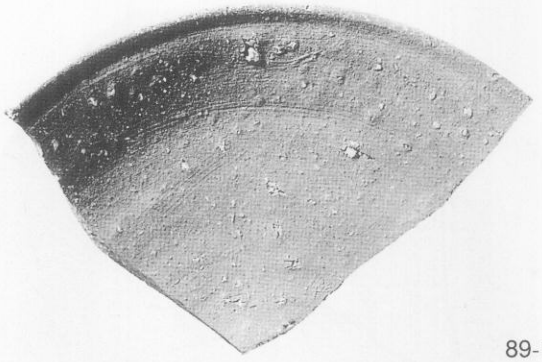
154SE065黒色粘土



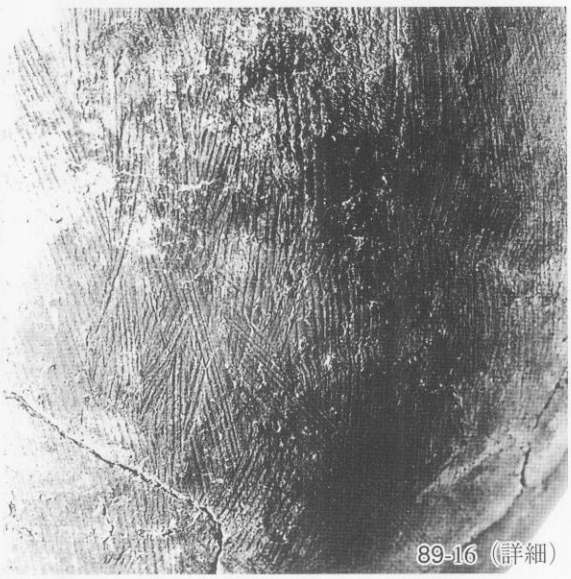
89-7



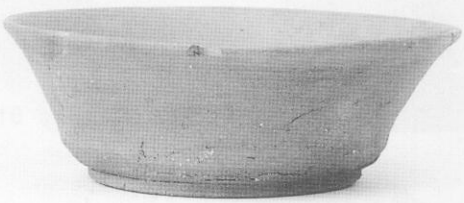
89-16



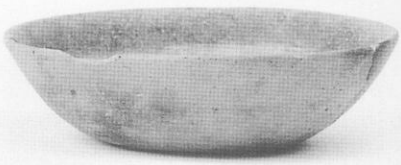
89-1



89-16（詳細）



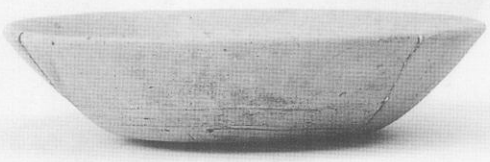
89-4



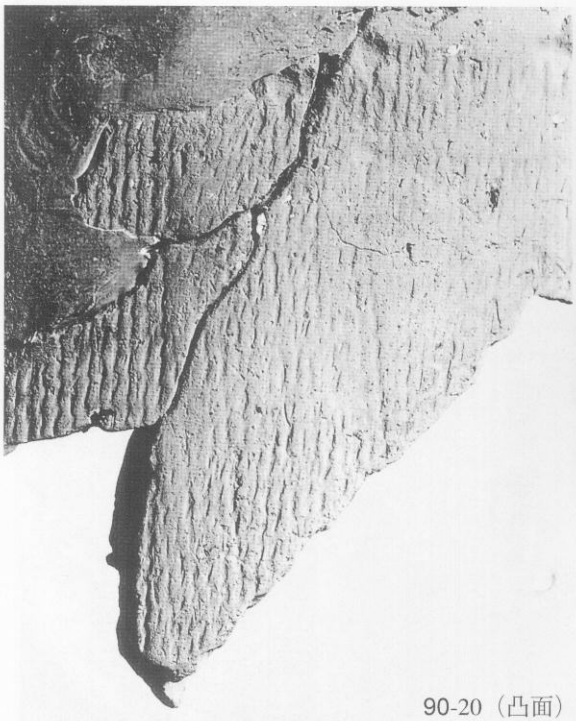
89-6



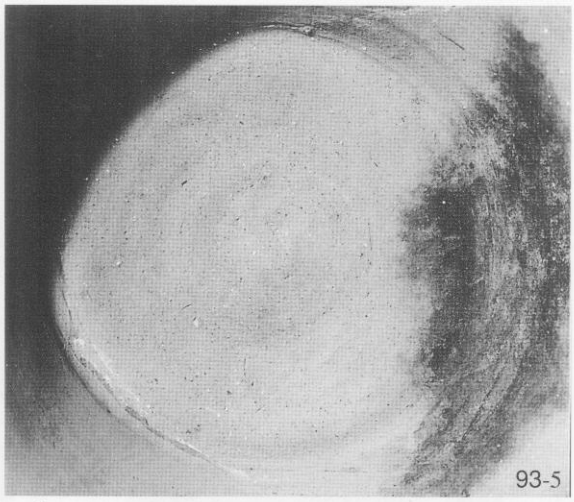
90-20



89-9



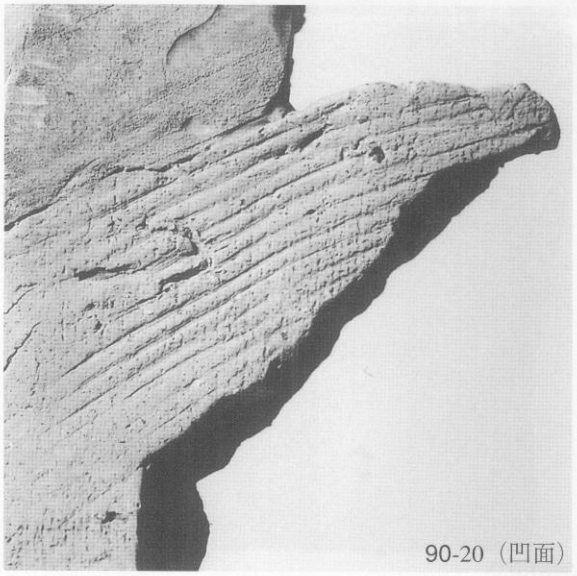
90-20（凸面）



93-5

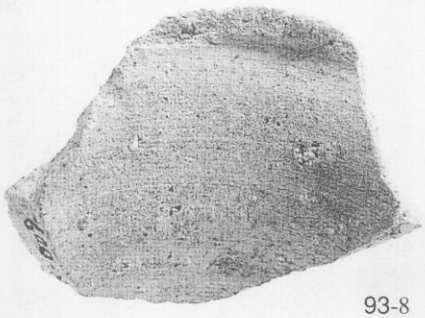


93-11

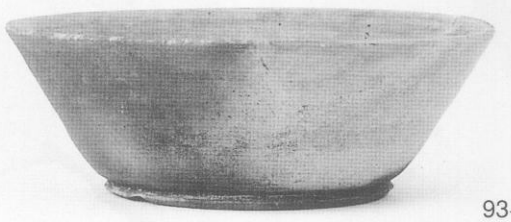


90-20（凹面）

154SE065灰茶砂



93-8（内面）



93-5



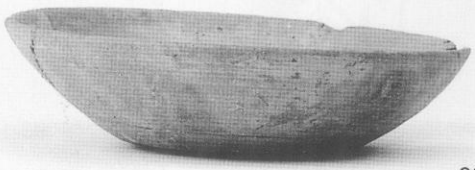
93-8（外面）

154SE095灰黒色粘土



95-7

154SE100

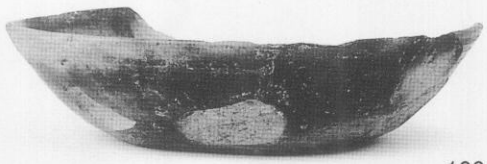


98-31



98-29

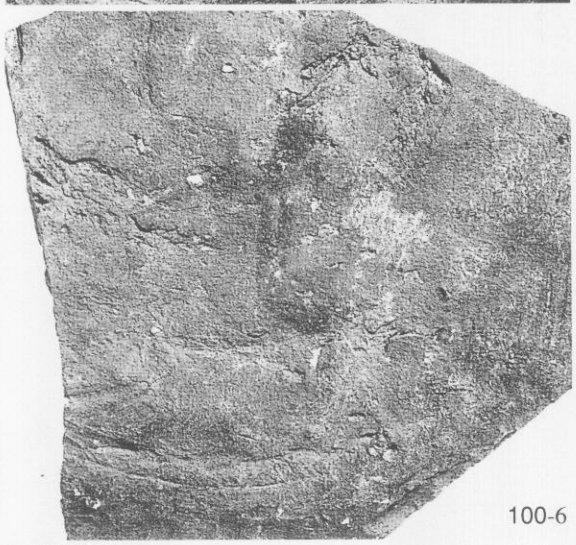
154SE100灰色粘土



100-11



100-11



100-6

154SK035



103-6

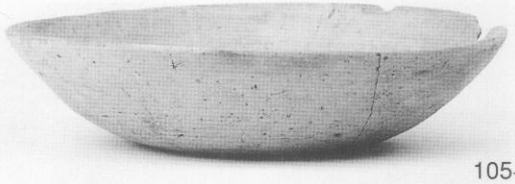


104-21



104-22

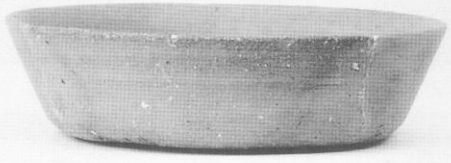
154SK035灰茶色土



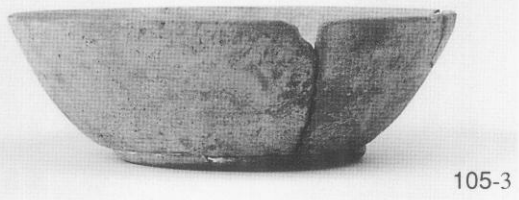
105-7



105-7



105-1

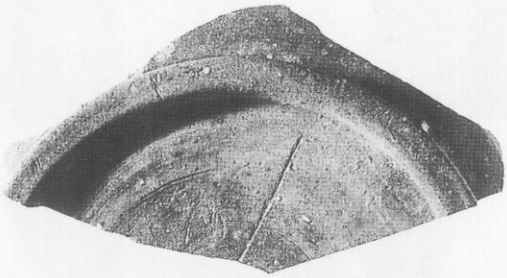


105-3

154SD015

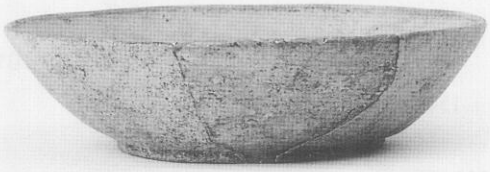


106-4



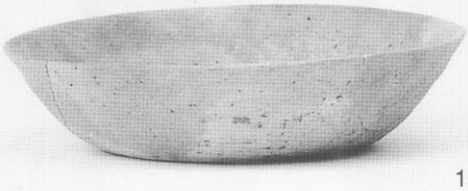
106-8

154SD020

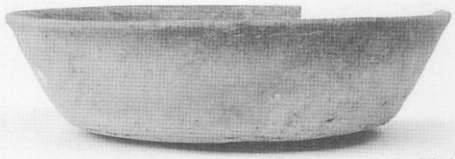


108-37

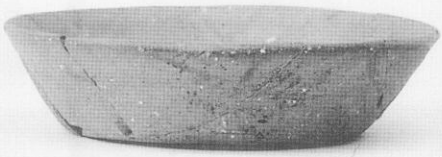
154SD025



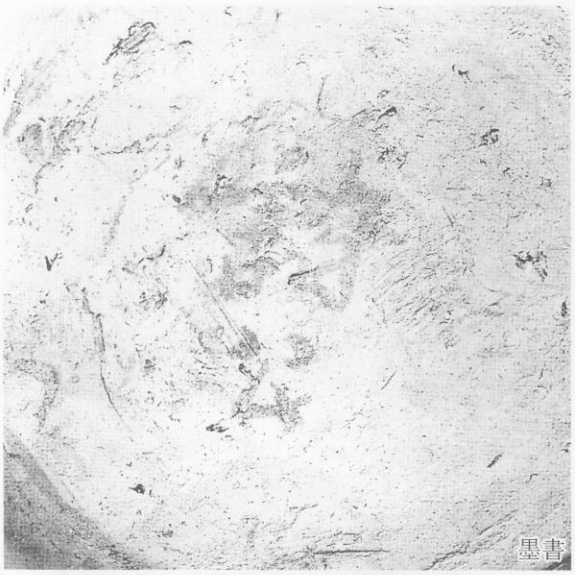
102-2



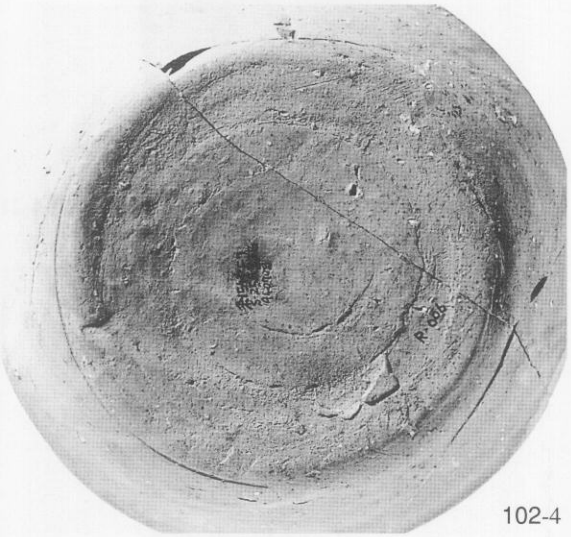
墨書土器



102-4



墨書

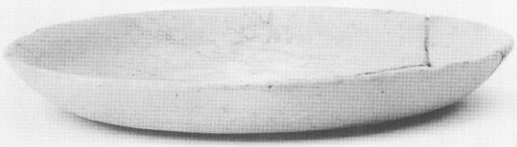


102-4



101-11

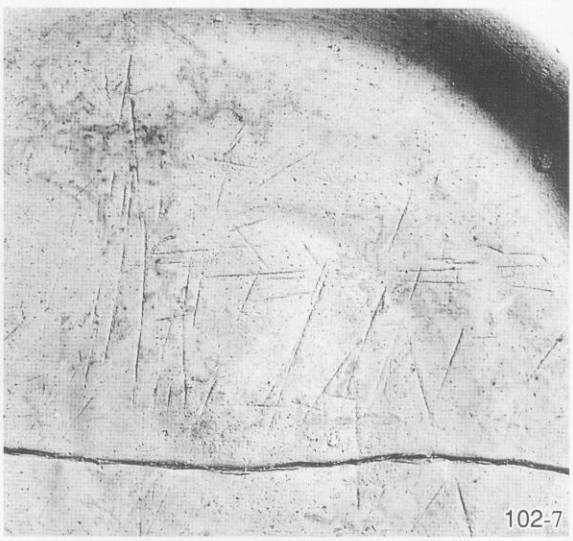
154SD025灰黒色粘土



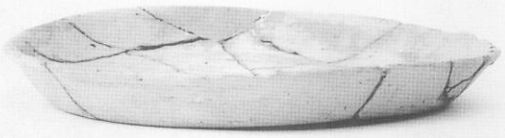
102-7



102-9

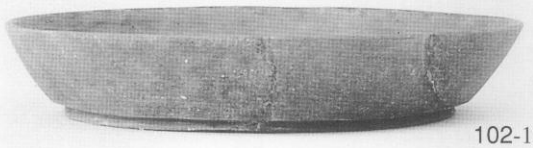


102-7



102-8

154SD025青灰色粘土



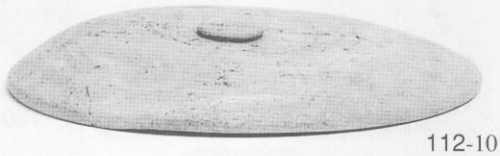
102-10

154SD050



111-77

154SD050黒褐色土



112-101



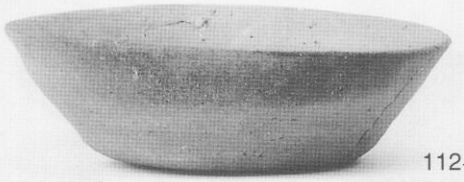
112-88



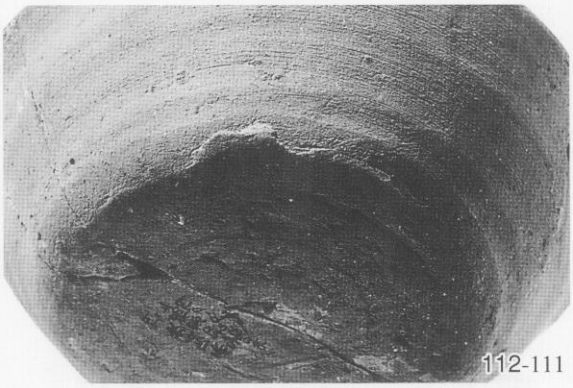
114-155



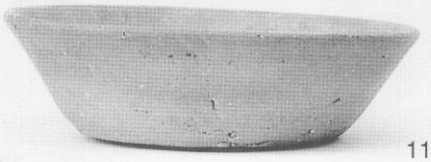
112-109



112-111



112-111



112-110



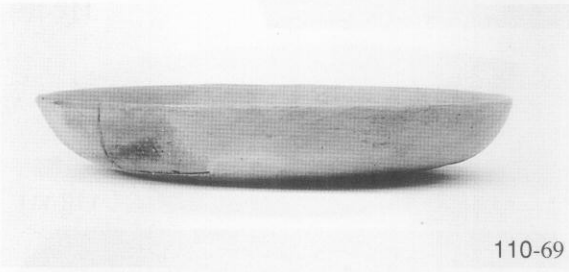
113-127

154SD050茶色土

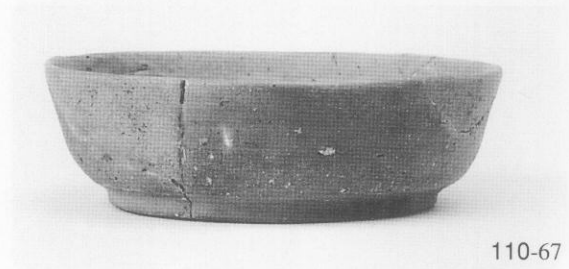


123-181

154SD075



110-69

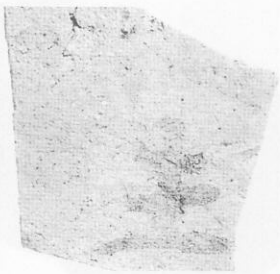


110-67



110-68

154SX030



墨書

154SX052



120-39

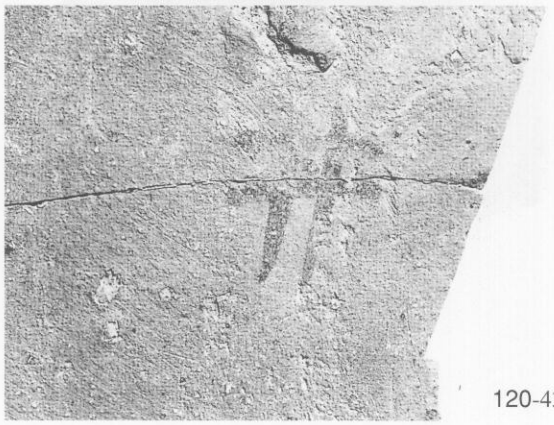
154SX056



120-56



120-51



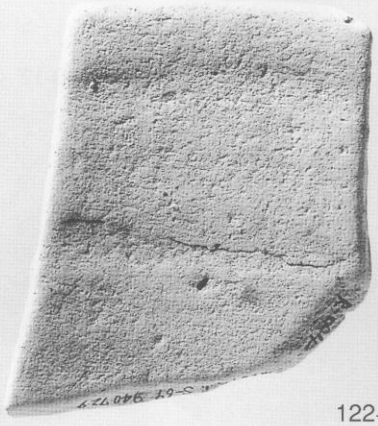
120-43

154SX058

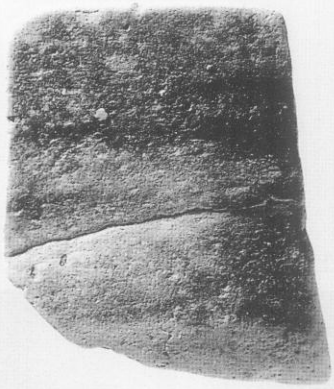


120-42

154SX069

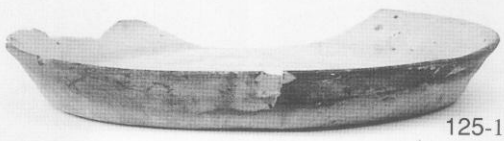


122-71（内面）



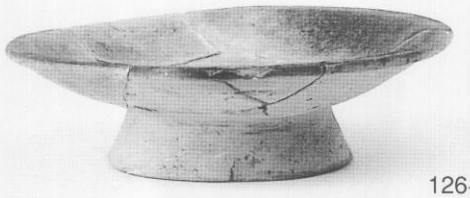
122-71（外面）

154SX147



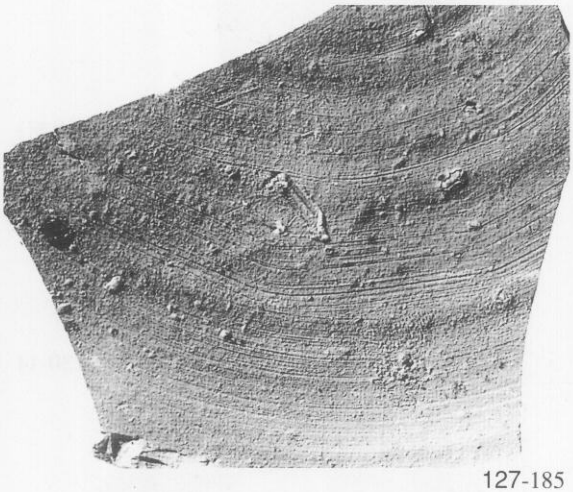
125-147

154SX154



126-162

154SX171



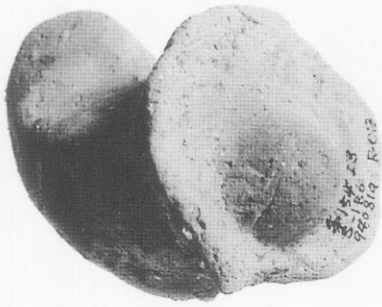
127-185

154SX179



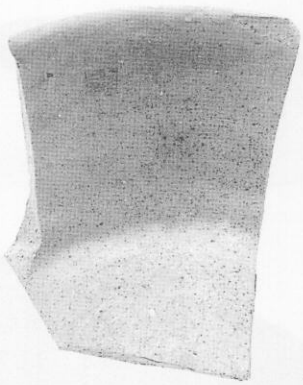
127-191

154SX186

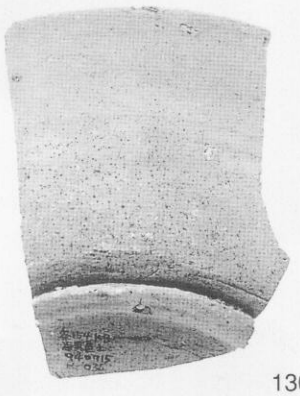


129-218

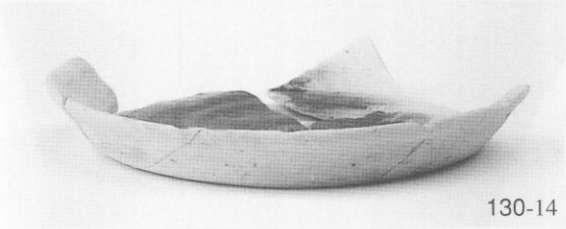
茶黒色土



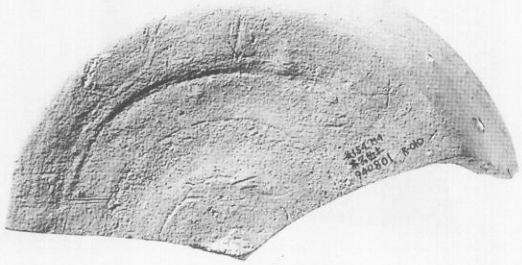
130-12（内面）



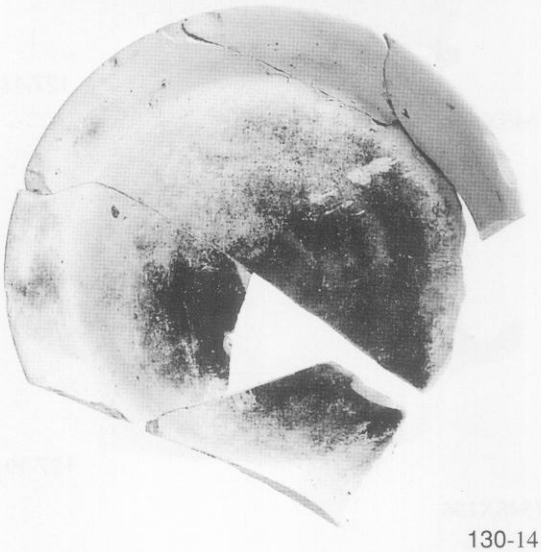
130-12（外面）



130-14

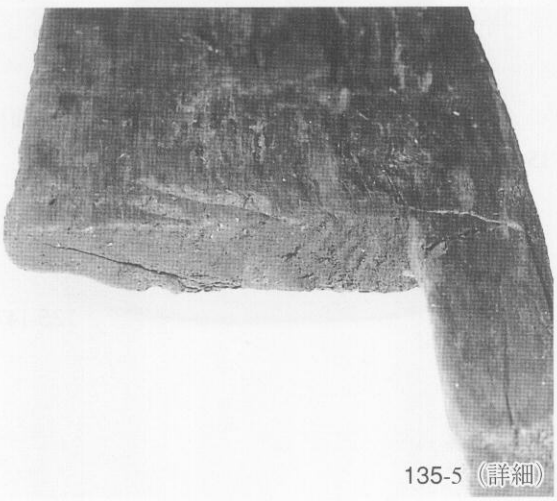


130-15



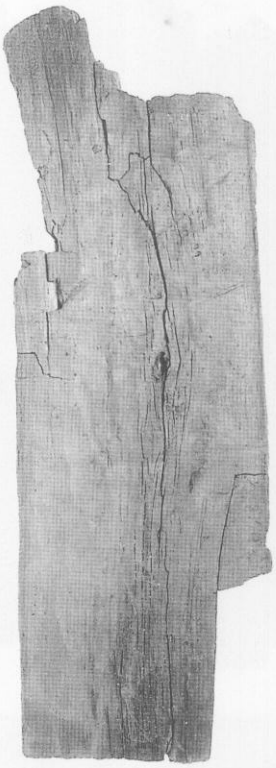
130-14

154SE065出土木製品



135-5（詳細）

154SE065出土木製品



132-2



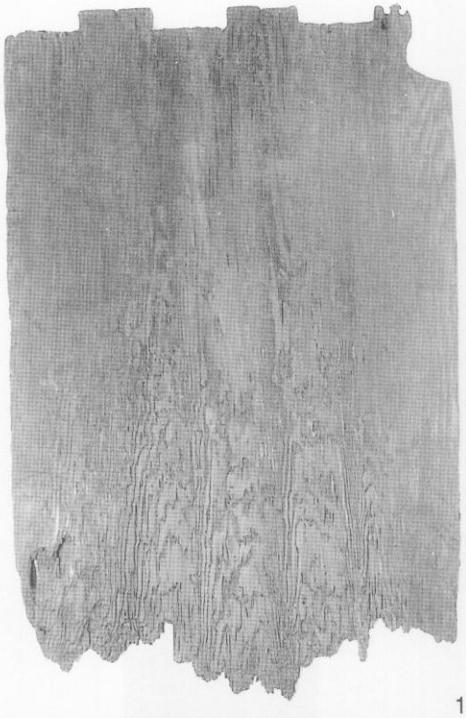
132-2



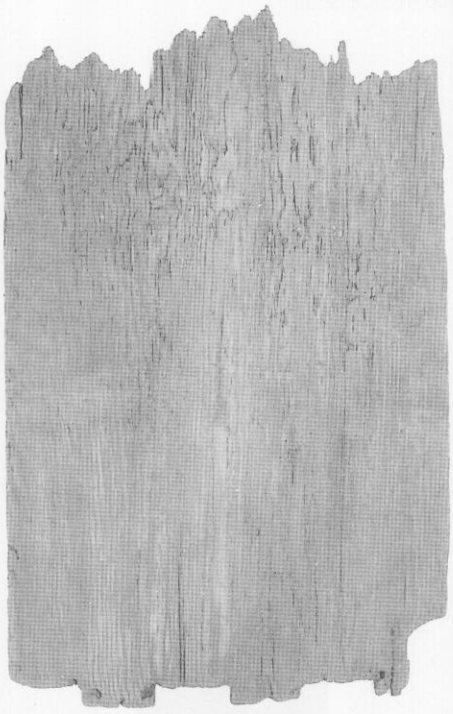
135-5



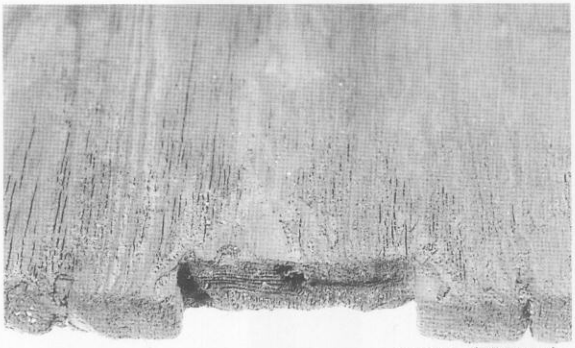
135-5



132-3



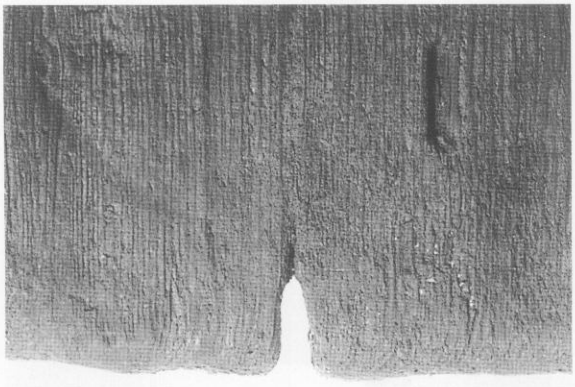
132-3



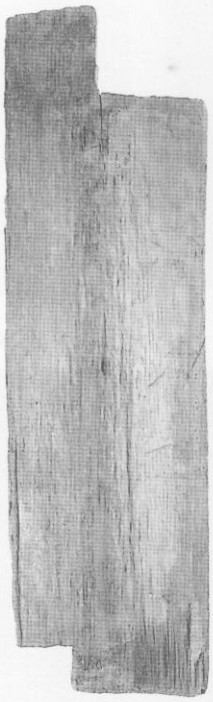
132-3（詳細１）



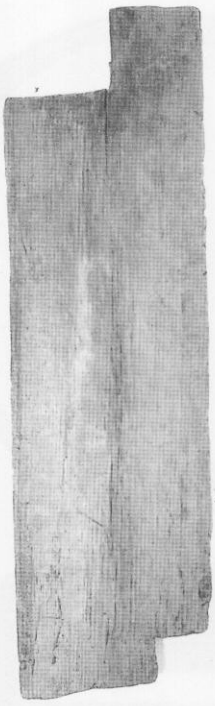
132-3（詳細２）



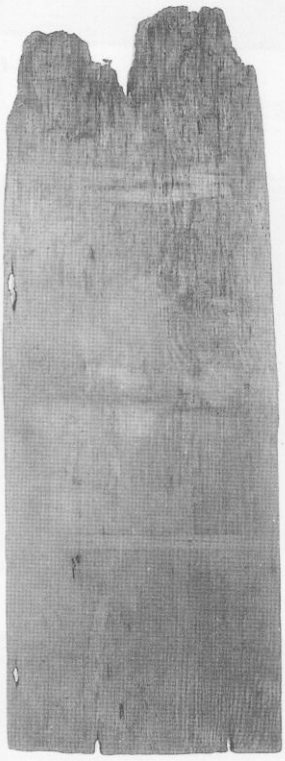
133-4（詳細）



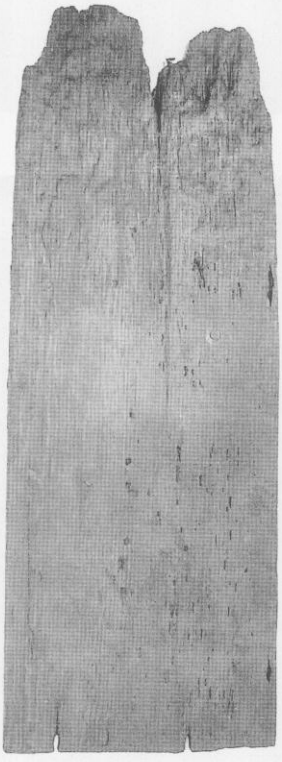
132-1



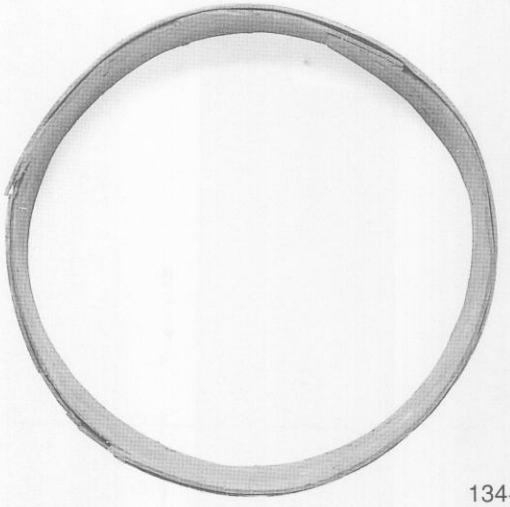
132-1



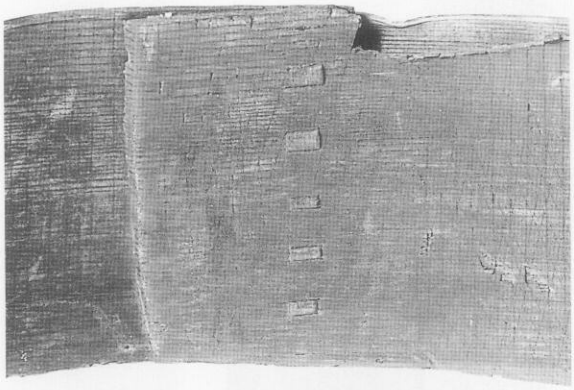
133-4



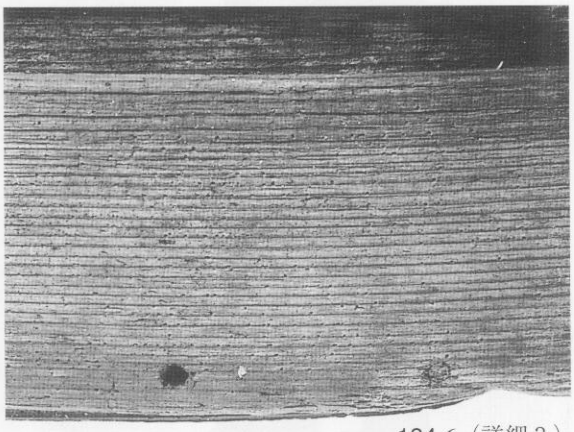
133-4



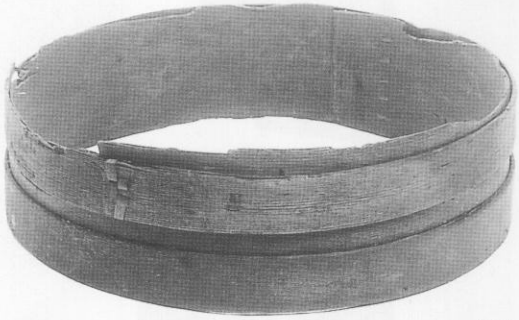
134-6



134-6（詳細２）

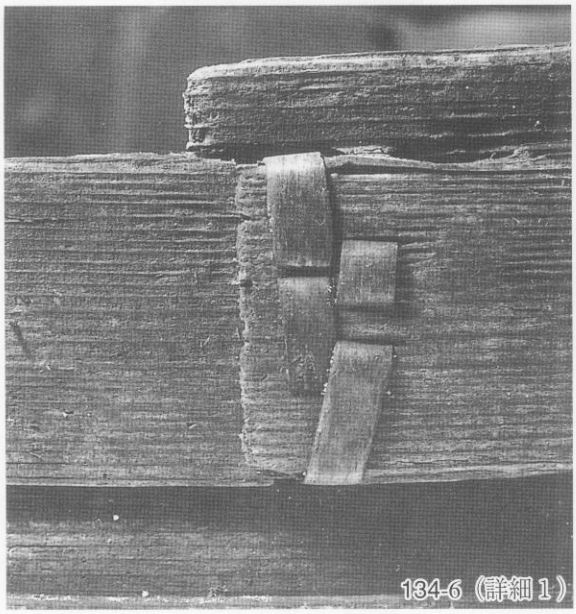


134-6（詳細３）

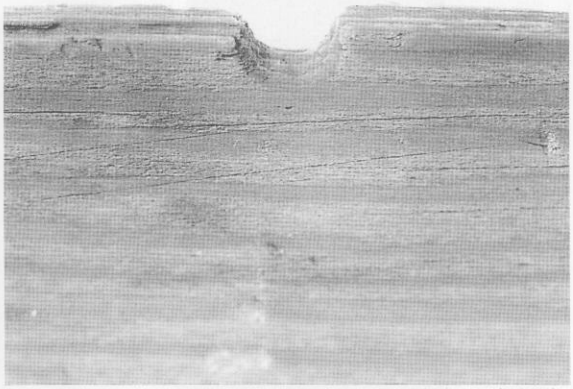


154SE065黒色粘土

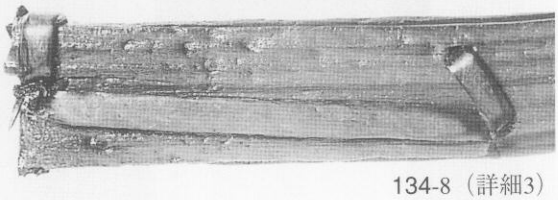
134-6



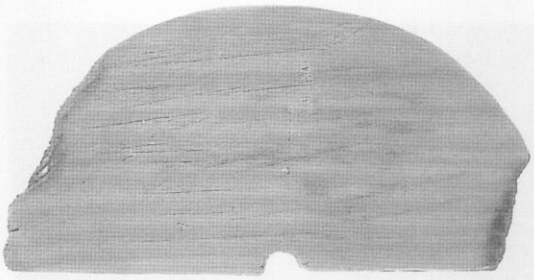
134-6（詳細１）



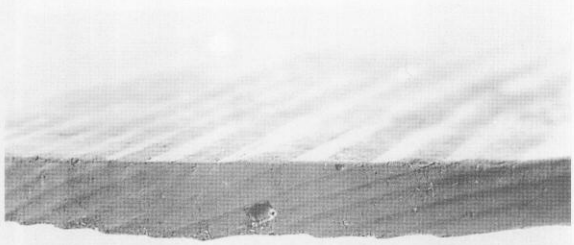
134-7（詳細）



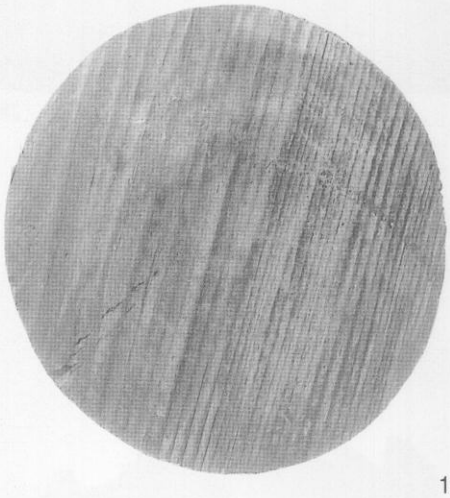
134-8（詳細3）



134-7

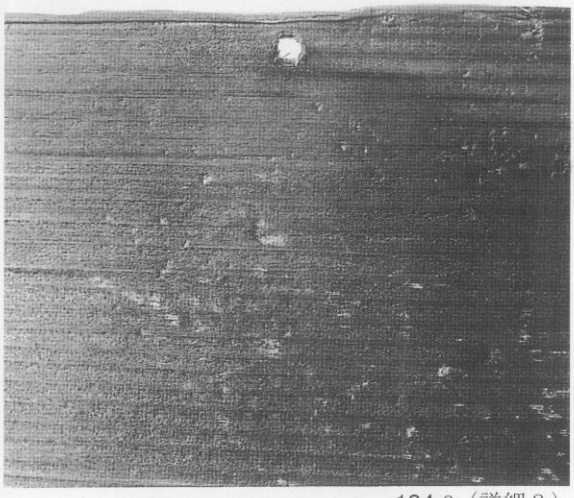


134-8（詳細１）



134-8

154SE095



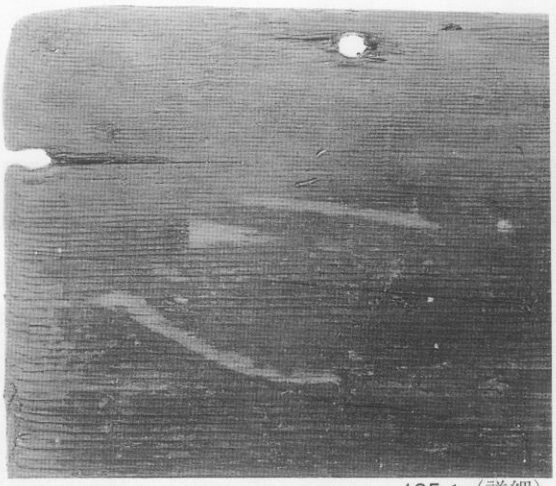
134-8（詳細２）



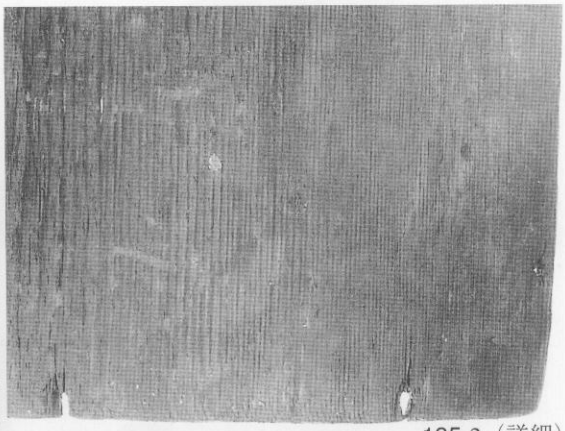
135-1



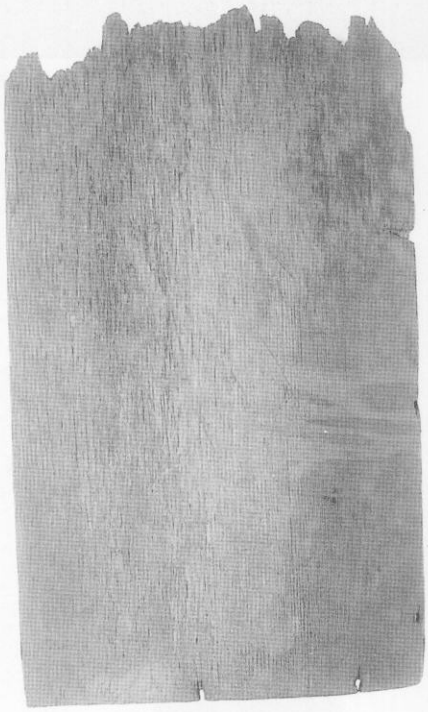
135-1



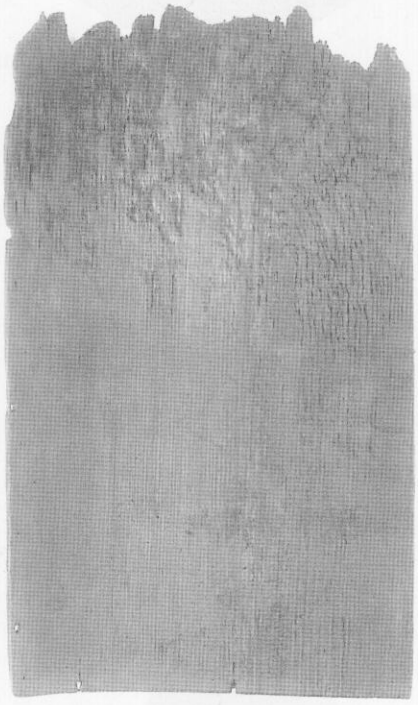
135-1（詳細）



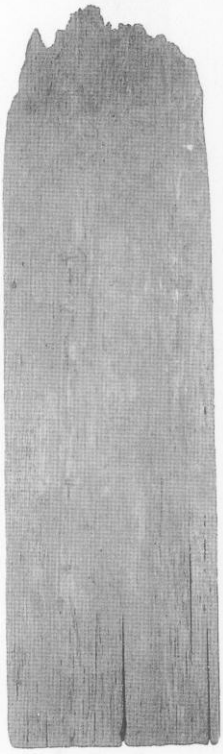
135-2（詳細）



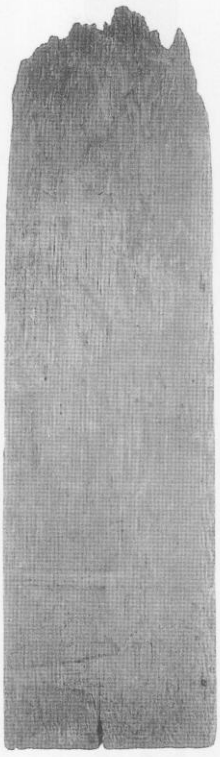
135-2



135-2



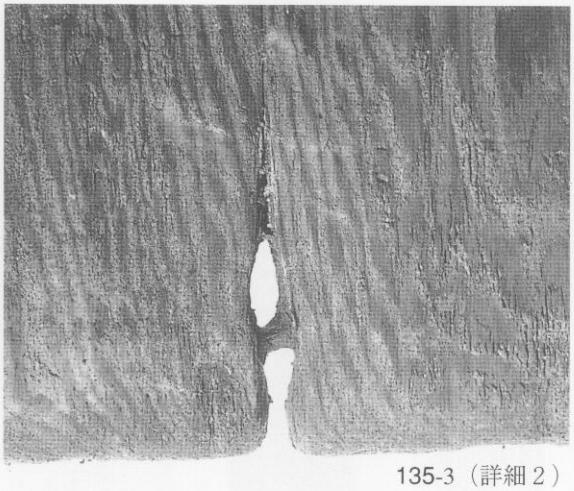
135-3



135-3



135-3（詳細１）



135-3（詳細２）



135-4



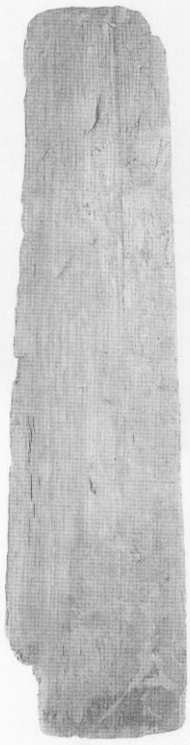
135-4



135-5



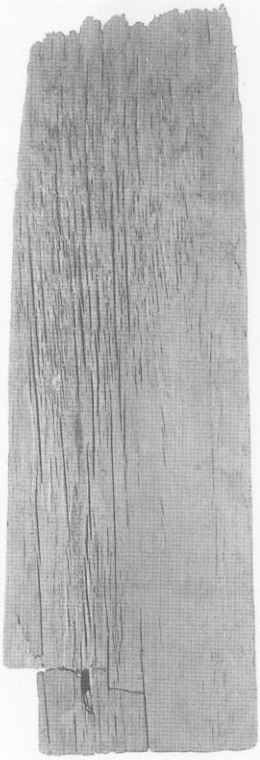
135-5



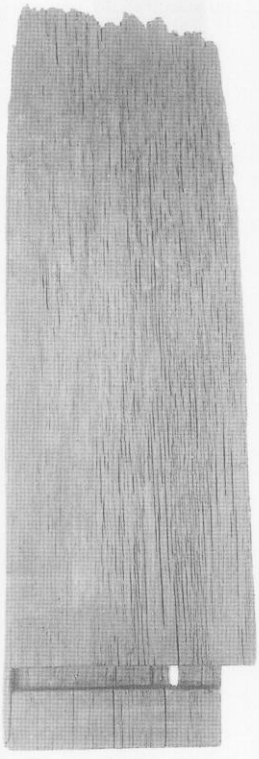
136-6



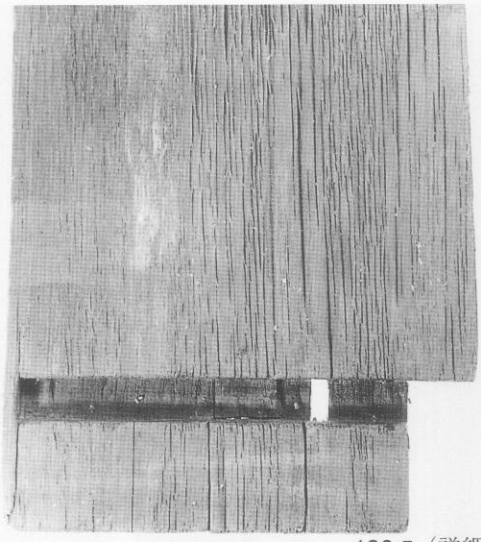
136-6



136-7



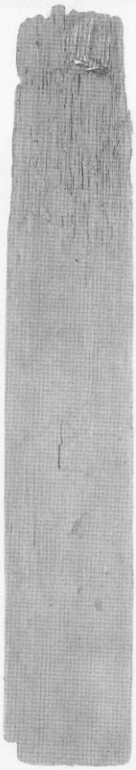
136-7



136-7（詳細１）



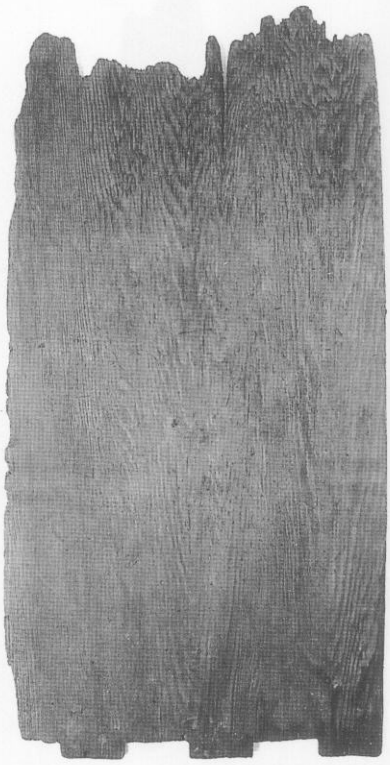
136-7（詳細２）



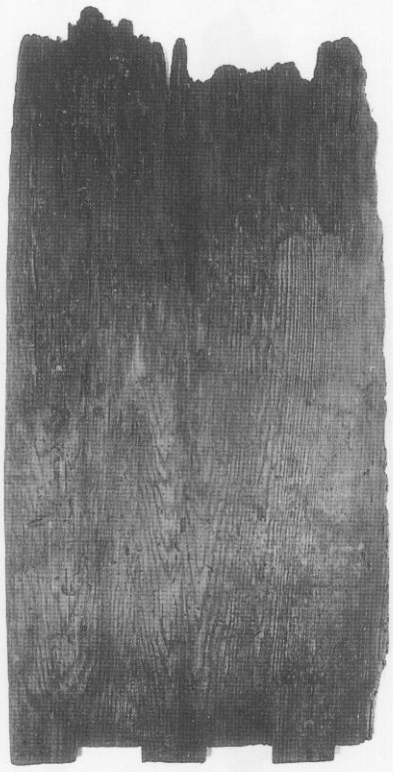
136-8



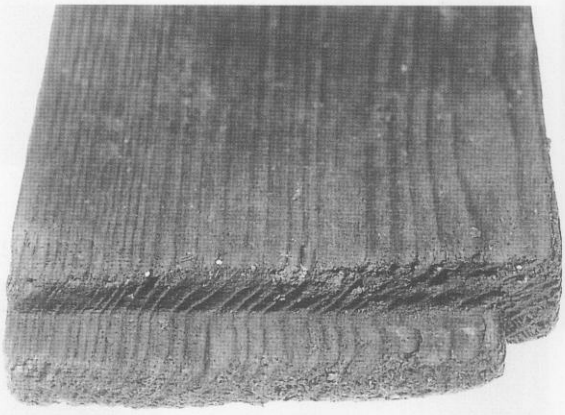
136-8



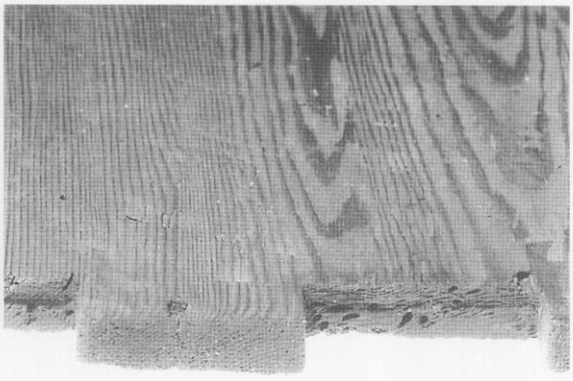
136-9



136-9



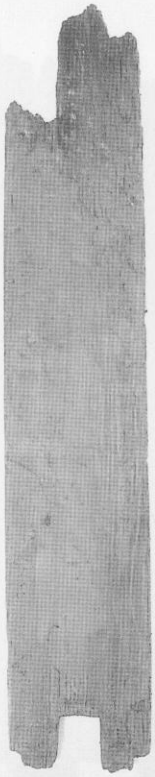
136-8（詳細）



136-9（詳細）



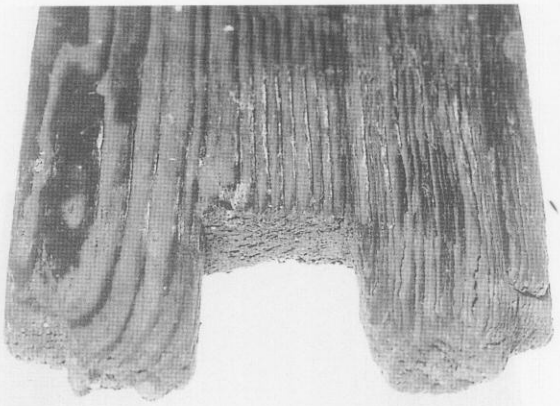
136-10



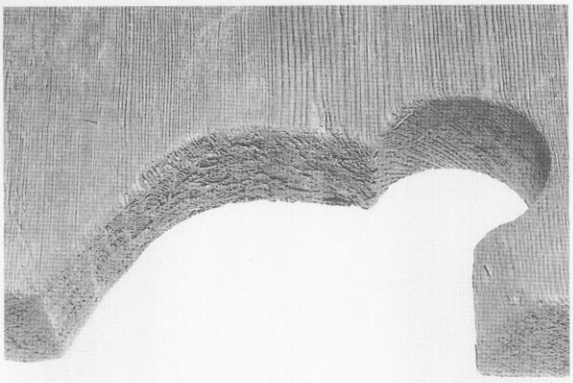
136-10



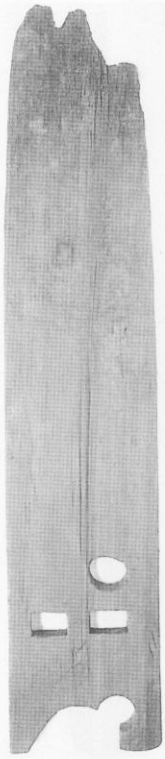
136-10（詳細１）



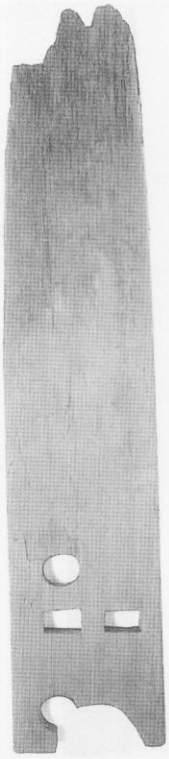
136-10（詳細２）



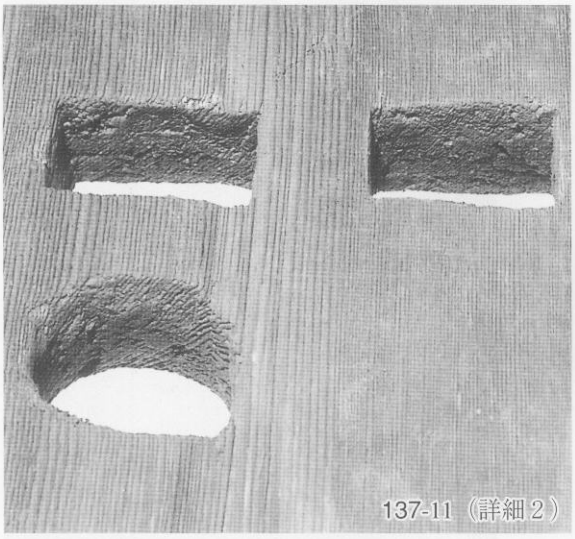
137-11（詳細１）



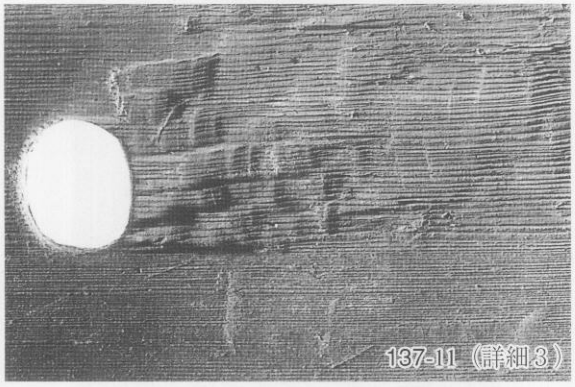
137-11



137-11



137-11（詳細2）



137-11（詳細3）



137-12



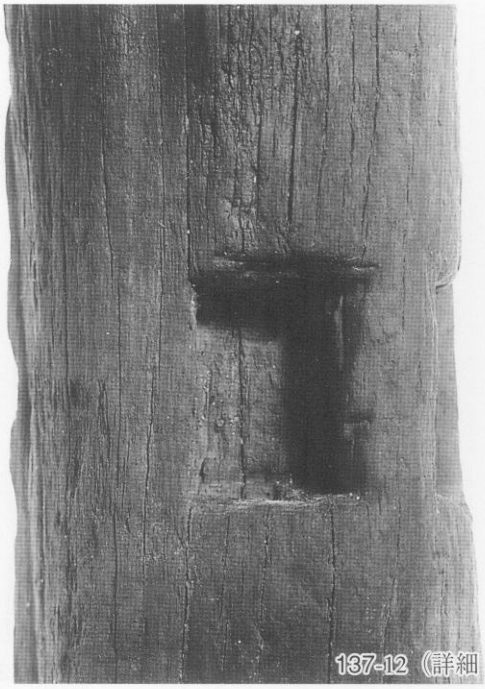
137-12



137-12（詳細１）



137-12（詳細２）



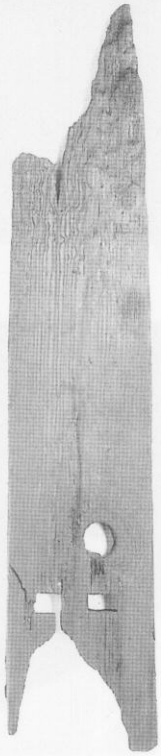
137-12（詳細３）



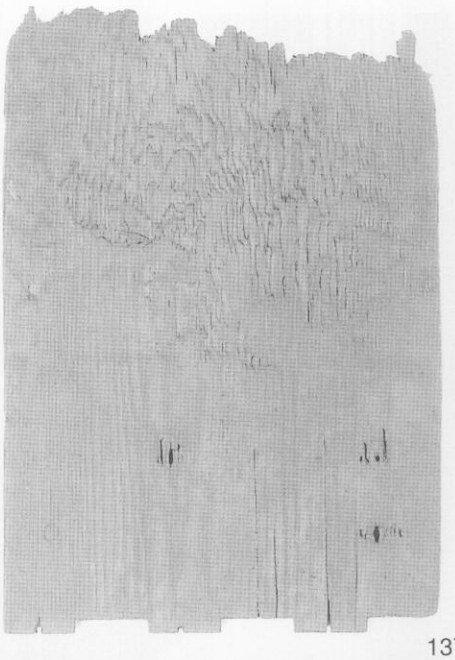
137-13（詳細）



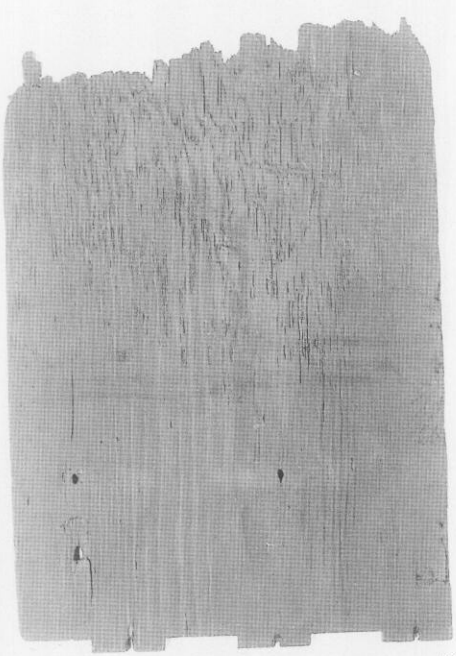
137-13



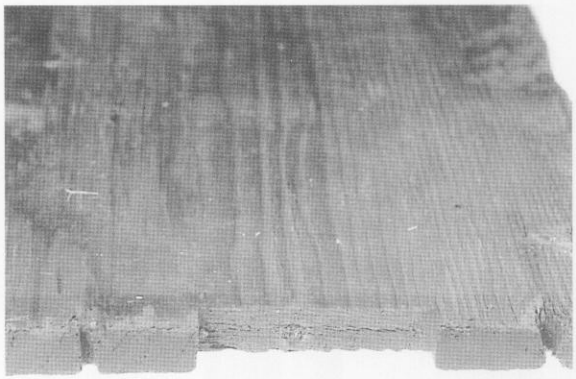
137-13



137-14



137-14



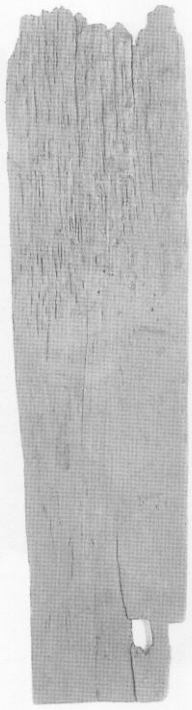
137-14（詳細）



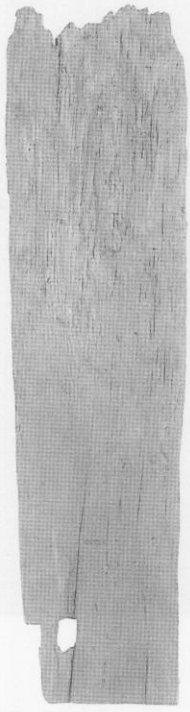
137-15（詳細）



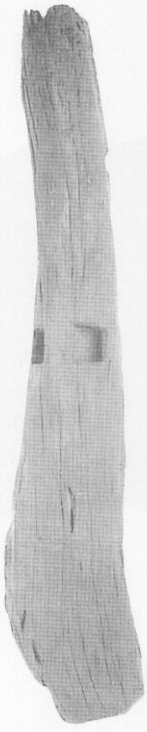
138-16（詳細１）



137-15



137-15



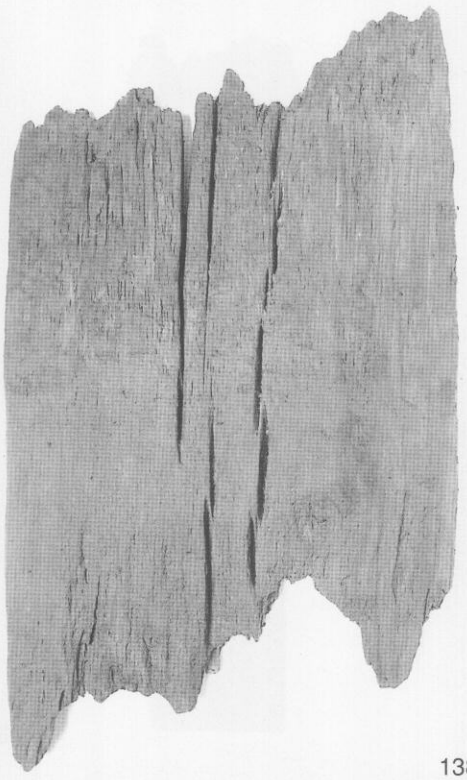
138-16



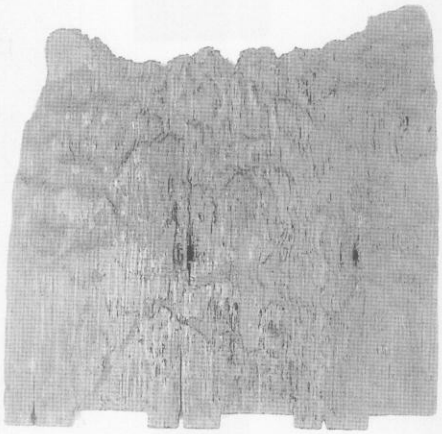
138-16



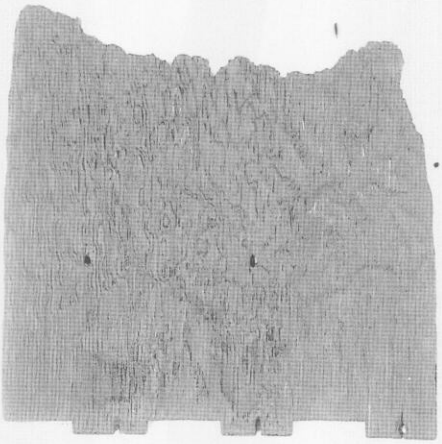
138-16（詳細２）



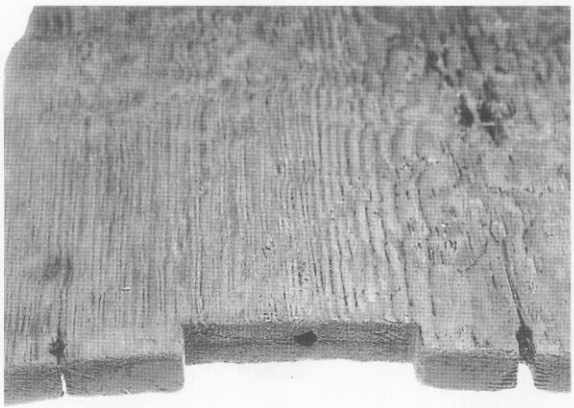
138-17



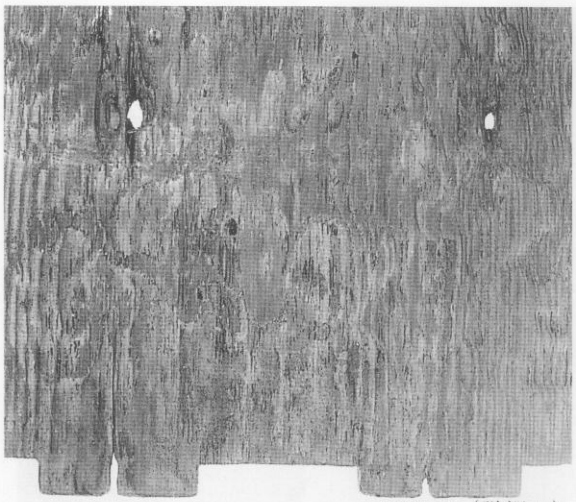
138-18



138-18



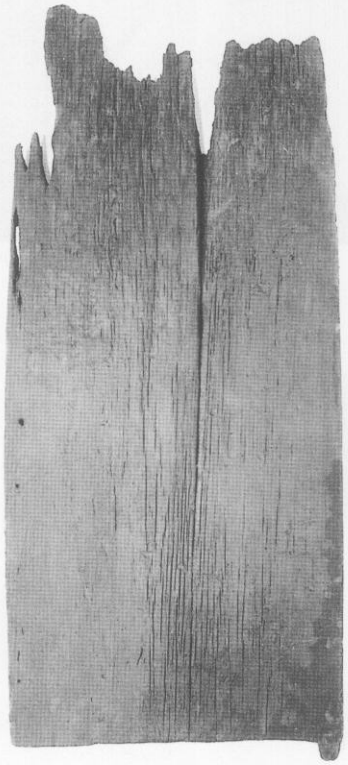
138-18（詳細２）



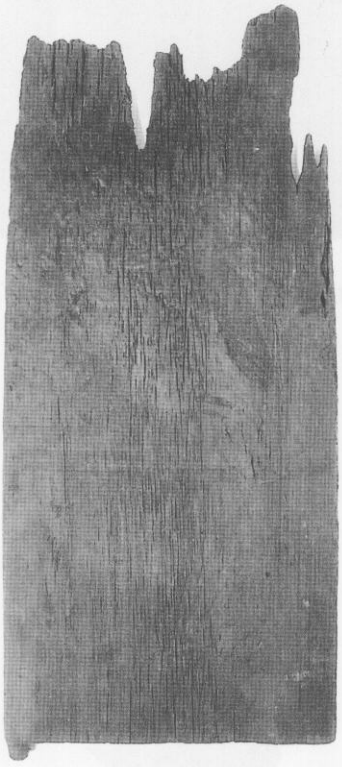
138-18（詳細１）



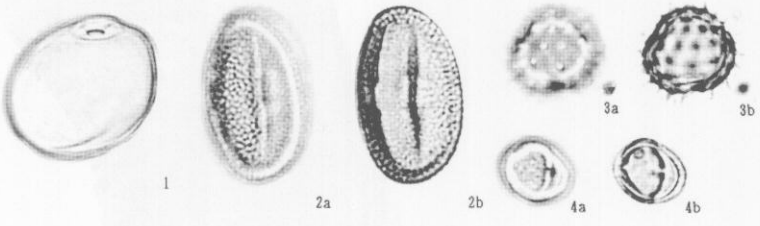
139-21（詳細）



139-21



139-21

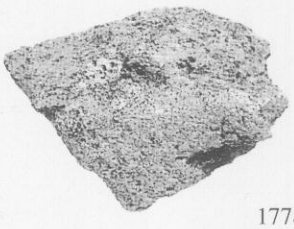


【条120次　花粉分析】
花粉抽出写真

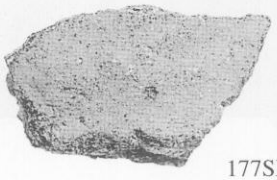


条177次調査区全景（南から）

177SB020a

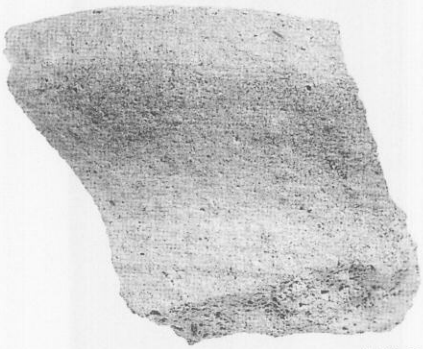


177SB020a（外面）

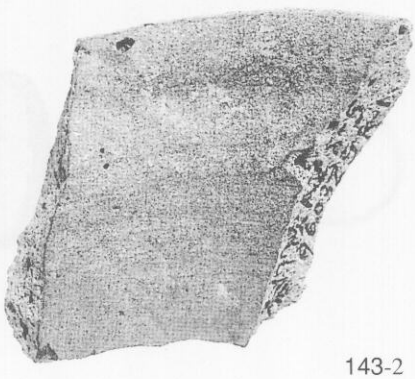


177SB020a（内面）

177SX005



143-2（外面）



143-2（内面）



177SX019-1（内面）

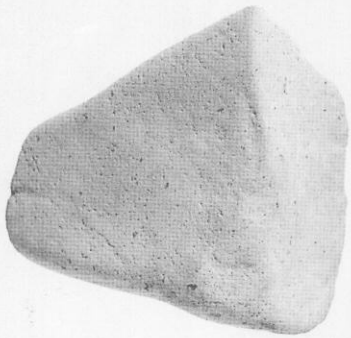


177SX019-1（外面）

茶灰色土

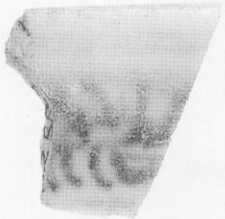


茶灰色土-1



茶灰色土-2

表土

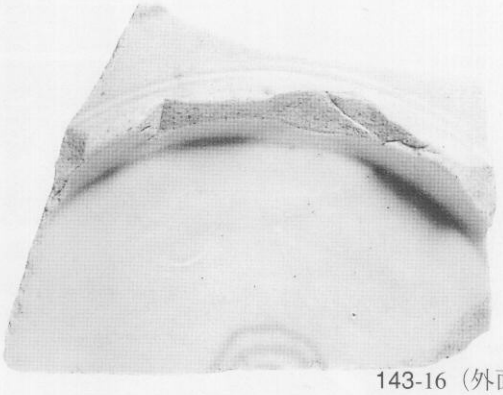


143-15（外面）

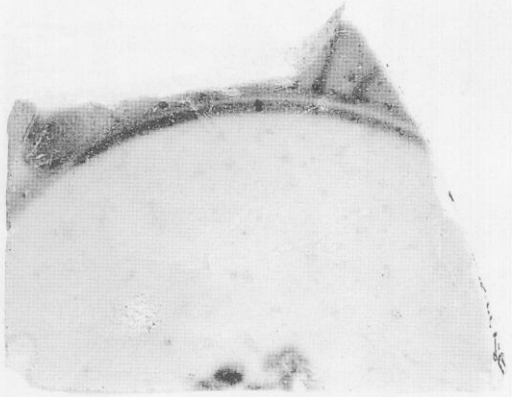


143-15（内面）

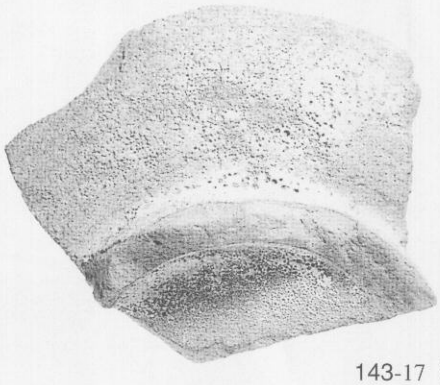
撹乱



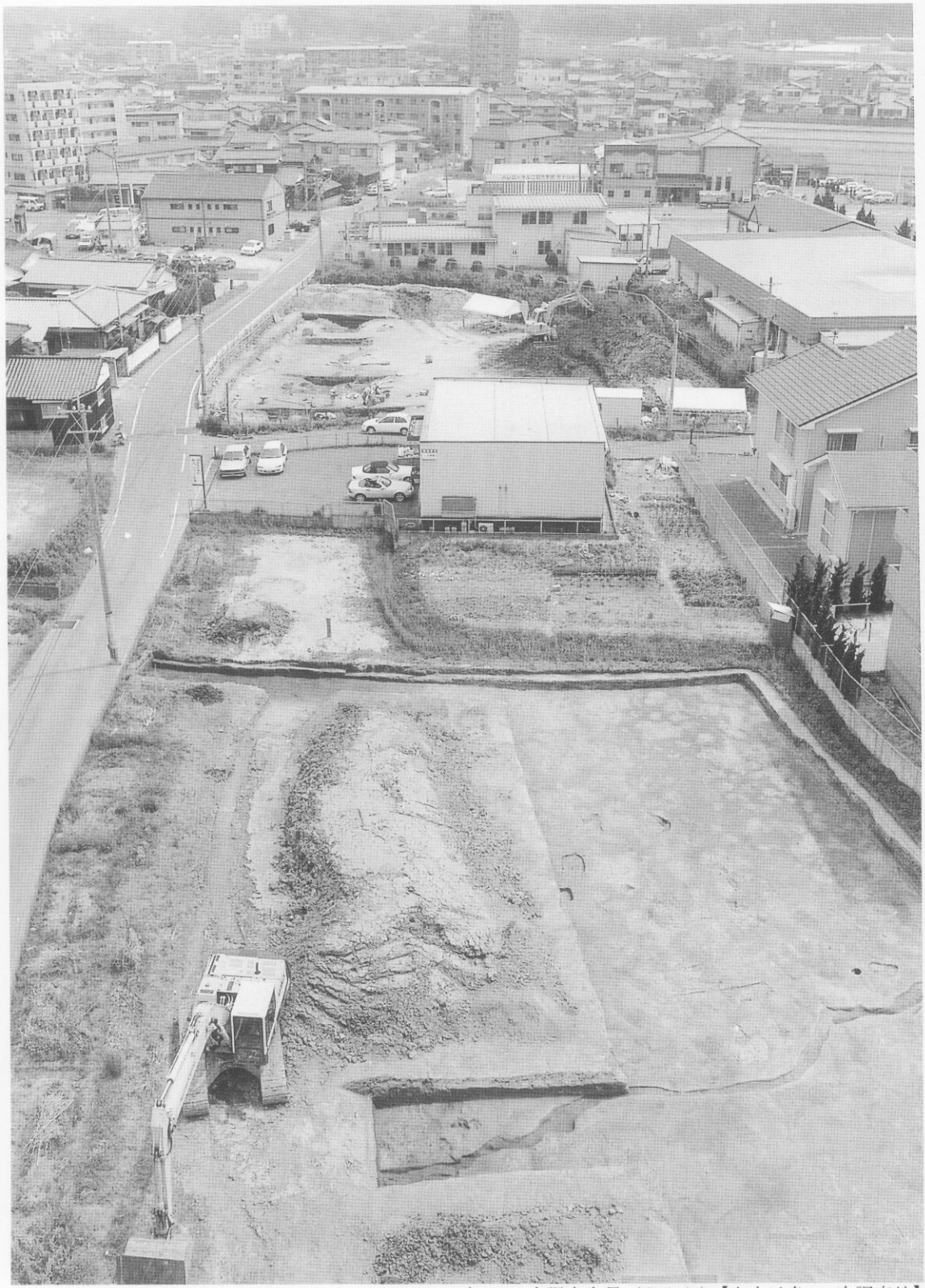
143-16（外面）



143-16（内面）



143-17（外面）



条194-1次調査全景（北から）【上方は条192次調査地】



条194-1次調査東側（西から）



条194-2次調査完掘状況（南半部、南から）



条194-2次調査完掘状況（北半部、南から）



194SD001完掘状況（南半部、北から）



194SD001・SX010検出状況（北から）



194SD001南半部溝底状況（北から）



194SD001南半部溝底状況（南から）



194SD001土層観察（北から）



194SD001・SX015土層観察（北から）



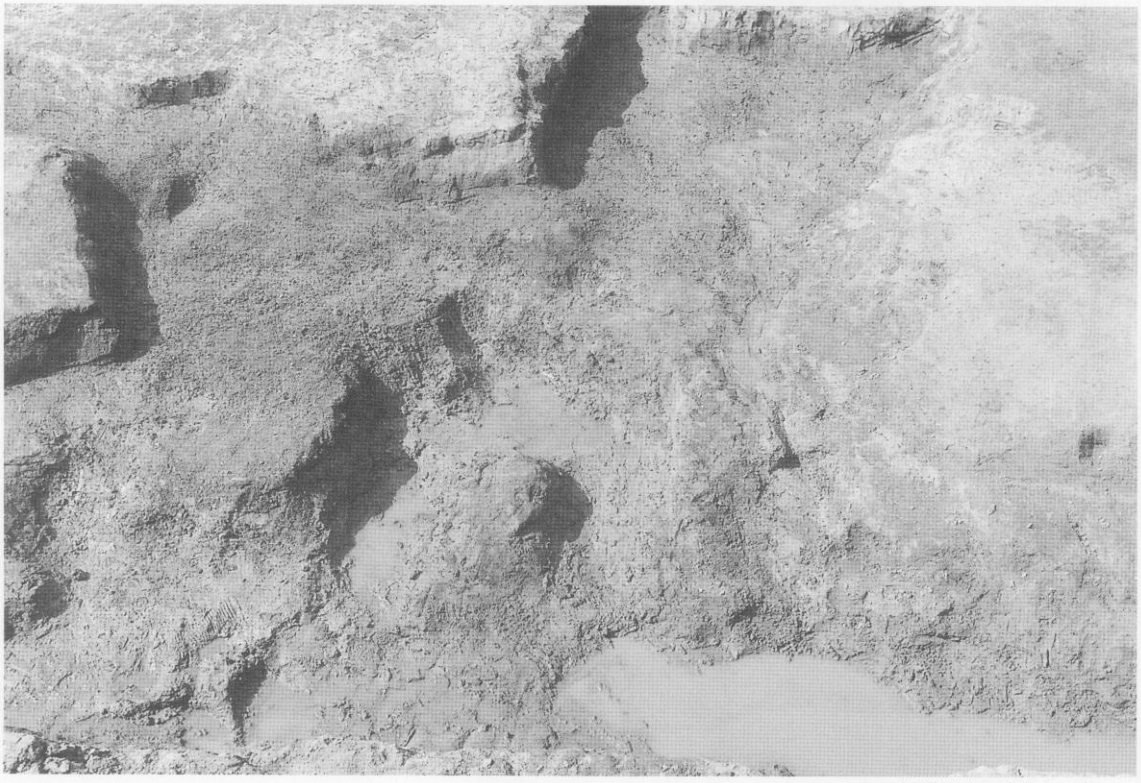
194SDSX010木材検出状況（東から）



194SDSX010検出状況（東から）

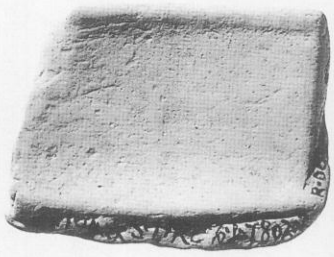


194SDSX010完掘状況（東から）



194SDSX010完掘状況（東から）

194SD001灰色砂



148-3

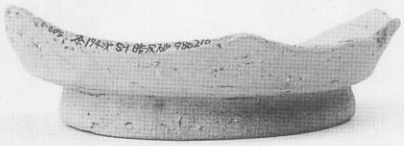


148-4

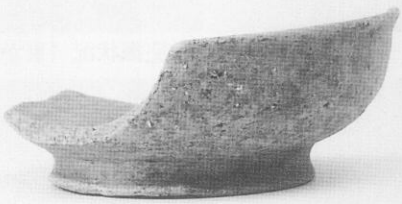
194SD001暗灰色砂



149-5

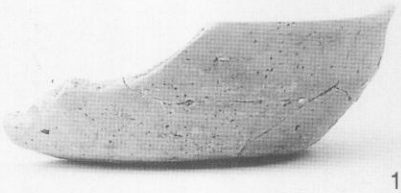


149-6

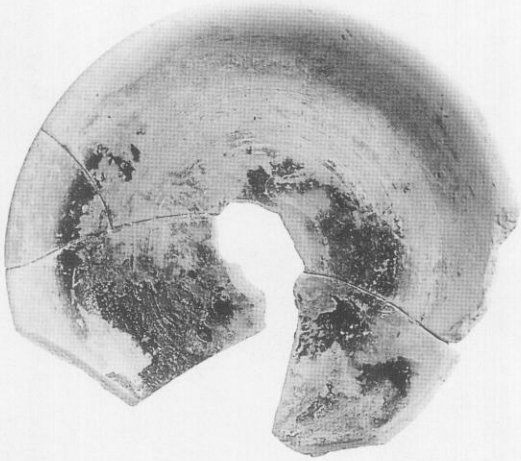


149-7

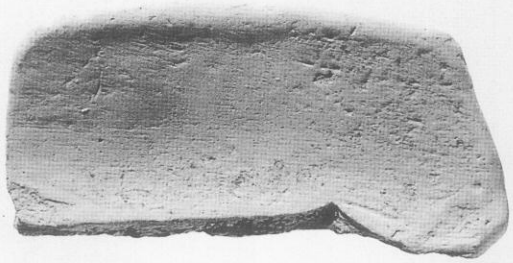
194SD001灰色粘質土



150-6



150-4



150-8



150-4

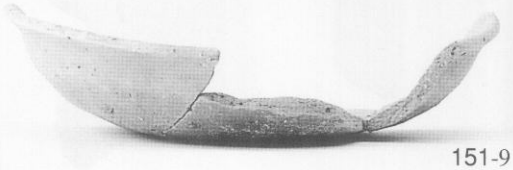
194SD001黒灰色粘質土



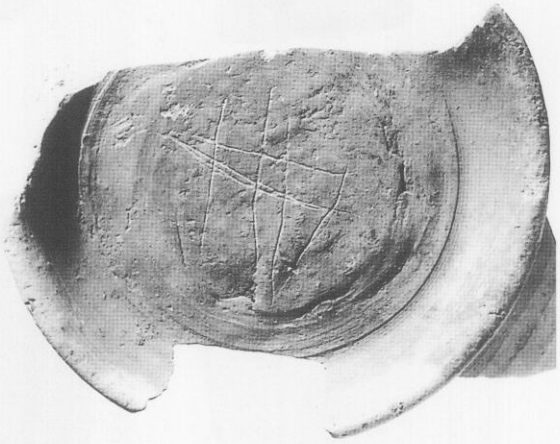
151-1



151-6

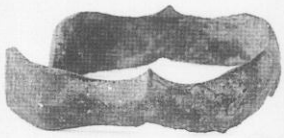


151-9

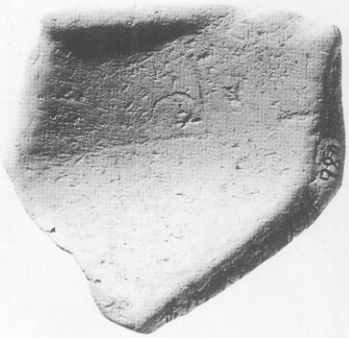


151-13

194SD001暗灰色粘質土

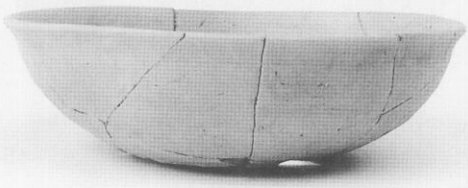


153-1



152-3

194SX015



158-1

194SD001出土石器・瓦



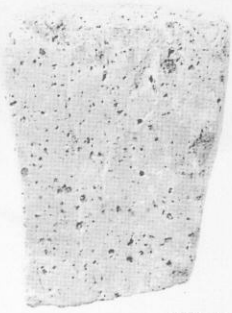
153-2



153-3



153-4



153-5



153-6

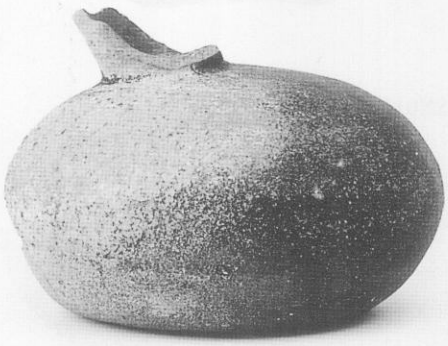


153-7



153-8

194SE005



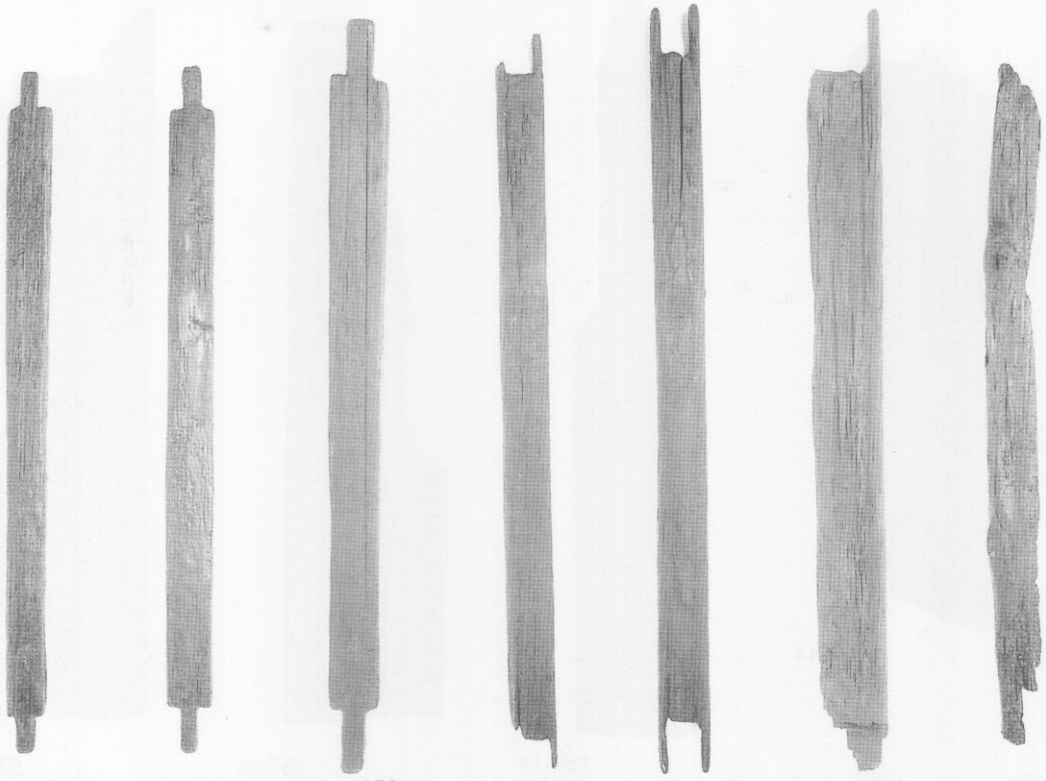
154-5

表土



158-2

194SX010出土木製品

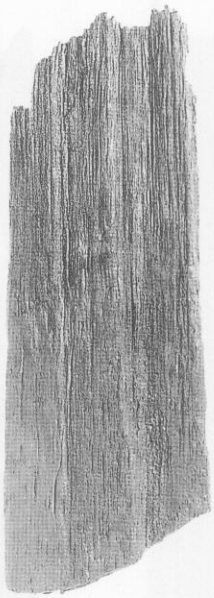


156-4　156-5　156-6　156-7　156-8　156-9　156-10



157-11　157-12　157-13

194SX010出土木製品



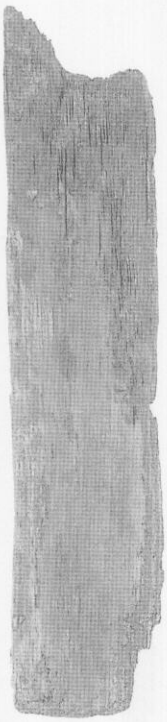
157-14



157-15



157-16



157-17



157-18



157-19



条206次調査区全景（北から）



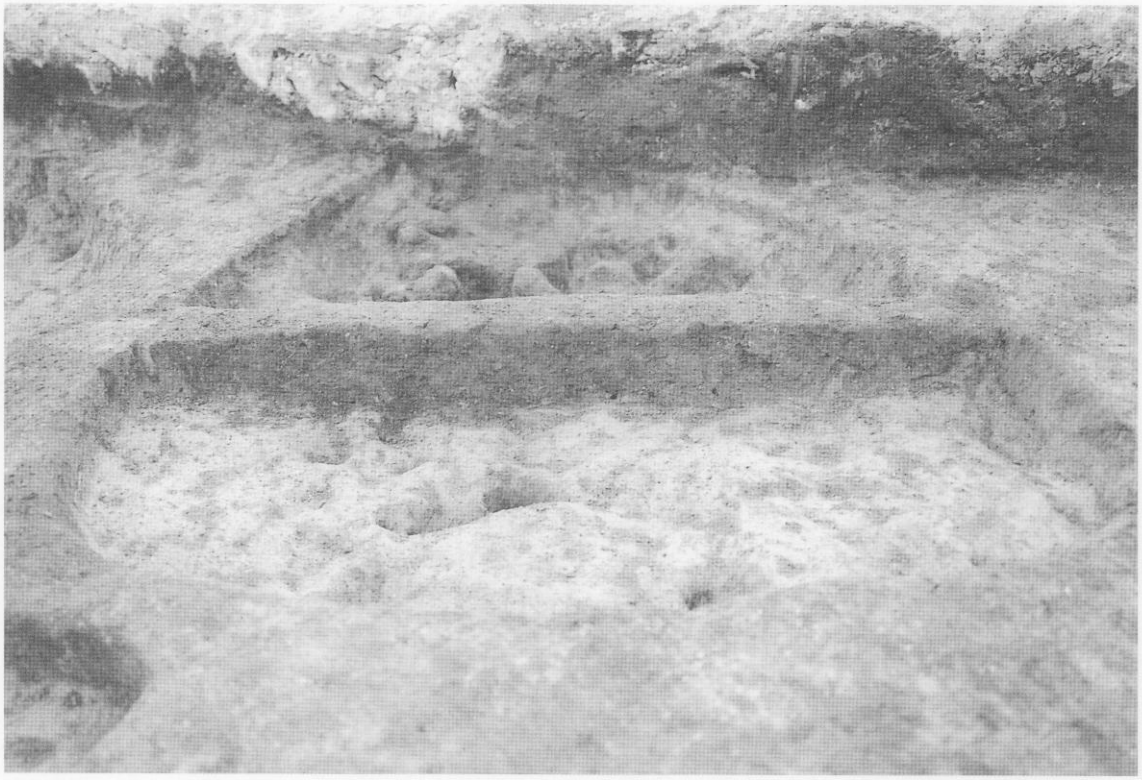
条206次調査区北半部（北から）



条206次調査区南壁西半部（北から）



条206次調査区南壁東半部（北から）



206SK001（東から）



206SK002（南から）



206SK003（東から）



206SK005（東から）



206SX006（西から）



条206次出土遺物



報告地域の環境【条坊跡154次・177次】



報告地域の環境【条坊跡194次】

大宰府条坊跡　XIV

-「市ノ上」周辺の調査-

太宰府市の文化財　第48集

平成12（2000）年３月

編集　太宰府市教育委員会

発行　教育部　文化財課

〒818-0198

福岡県太宰府市観世音寺１丁目１番１号

印刷　福岡印刷

〒810-0001 福岡市中央区天神３丁目４番３号

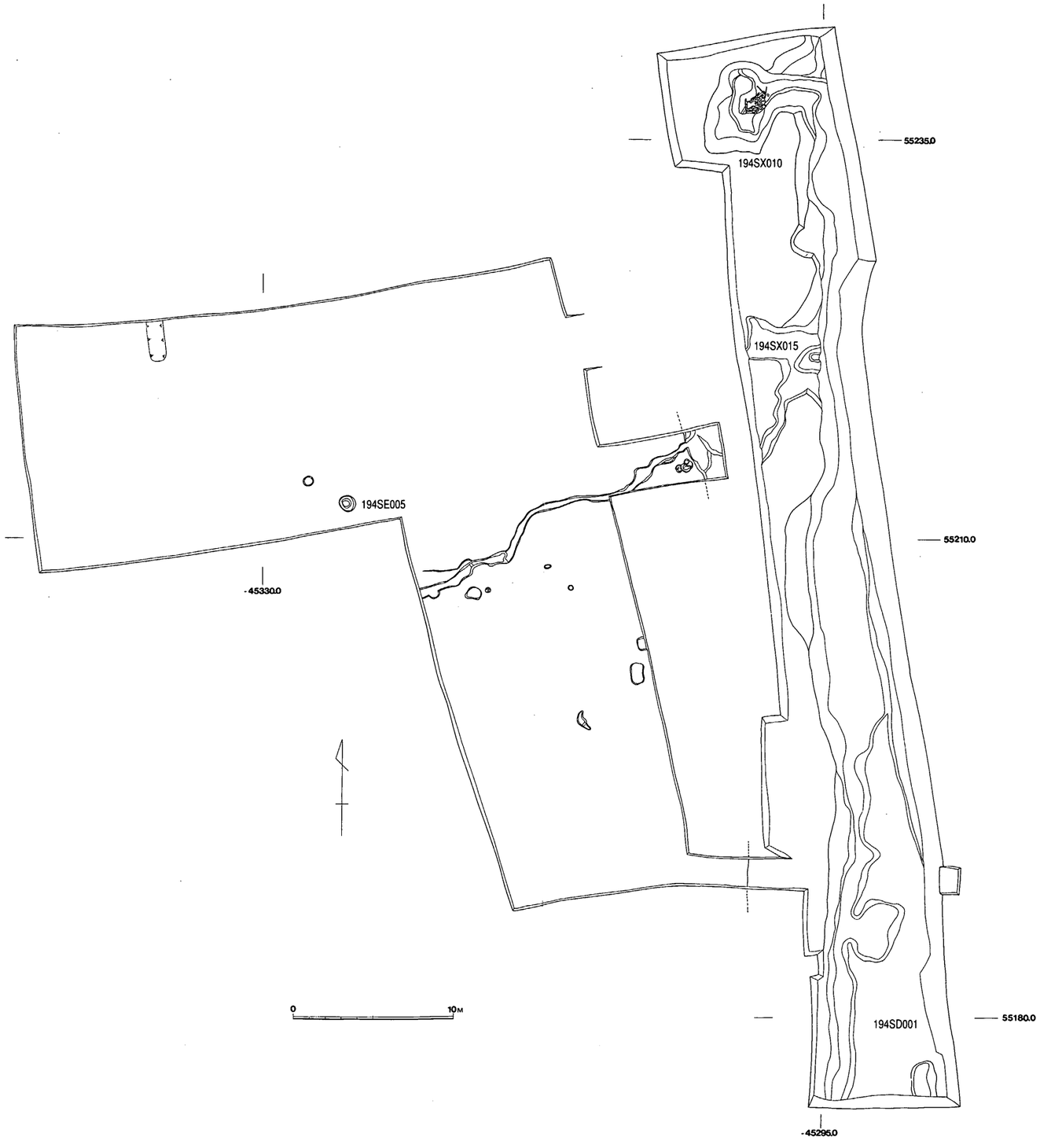


図170.条坊跡194次遺構配置図（S=1/300）